



# 黒死館殺人事件

小栗虫太郎



青空文庫



青空  
文庫

序篇 降矢木一族積義



セント

聖アレキセイ寺院の殺人事件に法水のりみずが解決を公表

しなかつたので、そろそろ迷宮入りの噂うわさが立ちはじめ

た十日目のこと、その日から捜査関係の主脳部は、ラ

ザレフ殺害者の追求を放棄しなければならなくなつた。

と云うのは、四百年の昔から纏綿てんめんとしていて、

白杵うすき耶蘇イエス会スイ神学林ツトセミナリオ以来の神聖家族と云われる降矢木ふりやぎの

館に、突如真黒い風みたいほうこうな毒殺者の彷徨ほうこうが始まつた

からであつた。その、通称黒死館と呼ばれる降矢木の

館には、いつか必ずこういう不思議な恐怖が起らずに

はいまいと噂されていた。勿論そういう臆測を生むに  
ついては、ボスフォラス以東にただ一つしかないと言  
われる降矢木家の建物が、明らかに重大な理由の一つ  
となつているのだつた。その豪壯を極めたケルト・ル  
ネサンス式の城館シヤトウを見慣れた今日でさえも、尖塔や櫓  
楼の量線からくる奇異ふしぎな感覚——まるでマツケイの古  
めかしい地理本の挿画でも見るような感じは、いつに  
なつても変らないのである。けれども、明治十八年建  
設当初に、河鍋暁斎かわなべぎようさいや落合芳幾おちあいよしいくをしてこの館の点睛てんせいに  
竜宮の乙姫を描かせたほどの綺きらびやかな眩惑は、その

後星の移るとともに薄らいでしまった。今日では、建物も人も、そういう幼稚な空想の断片ではなくなっているのだ。ちようど天然の変色が、荒れ寂びれた斑まだらを作りながら石面を蝕むしばんでゆくように、いつとはなく、この館を包みはじめた狭霧さぎりのようなものがあつた。そうして、やがては館全体を朧気おほろげな秘密の塊としか見せなくなつたのであるが、その妖気のようなものと云うのは、実を云うと、館の内部に積り重なつていつた謎の数々にあつたので、勿論あのプロヴァンス城壁を模したと云われる、周囲の壁廓ではなかつたのだ。事実、

建設以来三度にわたって、怪奇な死の連鎖を思わせる  
動機不明の変死事件があり、それに加えて、当主  
はたたらう旗太郎以外の家族の中に、門外不出の弦楽四重奏団を  
ストリングス・カルテット形成している四人の異国人がいて、その人達が、揺籃  
の頃から四十年もの永い間、館から外へは一步も出ず  
にいと云つたら……、そういう伝え聞きの尾に鱭ひれが  
附いて、それが黒死館の本体の前で、鉛色をした蒸気  
の壁のように立ちはだかつてしまふのだつた。まつた  
く、人も建物も腐朽しきつていて、それが大きな癌がんの  
ような形で覗かれたのかもしれない。それであるから



して、そういつた史学上珍重すべき家系を、遺伝学の見地から見たとすれば、あるいは奇妙な形をした輩きょうこのように見えもするだろうし、また、故人降矢木算哲さんてつ博士の神秘的な性格から推して、現在の異様な家族関係を考えると、今度は不気味な廃寺のようにも思われてくるのだった。勿論それ等のどの一つも、臆測が生んだ幻視にすぎないのであるが、その中にただ一つだけ、今にも秘密の調和を破るものがありそうな、妙に不安定な空気のあることだけは確かだった。その悪疫のような空気は、明治三十五年に第二の変死事件が

起つた折から萌きざしはじめたもので、それが、十月ほど前に算哲博士が奇怪な自殺を遂げてからというものは——後継者旗太郎が十七の年少なのと、また一つには支柱を失つたという観念も手伝つたのであろう——いつそう大きな亀裂になつたかのように思われてきた。そして、もし人間の心の中に悪魔が住んでいるものだとしたら、その亀裂の中から、残つた人達を犯罪の底に引き摺り込んででもゆきそうな——思いもつかぬ自壊作用が起りそうな怖れを、世の人達はしだいに濃く感じはじめてきた。けれども、予測に反して、降矢木

一族の表面には沼気ほどの泡一つ立たなかつたのだが、恐らくそれと云うのも、その瘴気しやうきのような空気が、未だ飽和点に達しなかつたからであらうか。否、その時すでに水底では、静穏な水面とは反対に、暗黒の地下流に注ぐ大きな瀑布が始まっていたのだ。そして、その間に鬱積していったものが、突如凄じく吹きしく嵐と化して、聖家族の一人一人に血行を停めてゆこうとした。しかも、その事件には驚くべき深さと神秘とがあつて、のりみずりんたろう法水麟太郎はそれがために、狡智きわまる犯人以外にも、すでに生存の世界から去っている人々と

も闘わねばならなかつたのである。ところで、事件の開幕に当つて、筆者は法水の手許に集められている、黒死館についての驚くべき調査資料のことを記さねばならない。それは、中世楽器や福音書写本、それに古代時計に関する彼の偏奇な趣味が端緒となつたものであるが、その——恐らく外部からは手を尽し得る限りと思われる集成には、検事が思わず嘆声を発し、啞然となつたのも無理ではなかつた。しかも、その瘦身的な努力をみても、すでに法水自身が、水底の轟とどろきに耳を傾けていた一人だつたことは、明らかであると思う。

その日——一月二十八日の朝。生来あまり健康でない法水は、あの霽みぞれの払曉に起つた事件の疲労から、全然恢復かいふくするまでになつていなかつた。それなので、訪れた支倉ほぜくら検事から殺人という話を聴くと、ああまたか——という風な厭いやな顔をしたが、

「ところが法水君、それが降矢木家なんだよ。しかも、

ヴァイオリン

第一提琴奏者のグレーテ・ダンネベルグ夫人が毒殺されたのだ」と云つた後の、検事の瞳に映つた法水の顔には、にわかにもまんざらでもなさそうな輝きが現われていた。しかし、法水はそう聴くと不意に立って書

齋に入ったが、間もなく一抱えの書物を運んで来て、どかつと尻を据えた。

「ゆっくりしようよ支倉君、あの日本で一番不思議な一族に殺人事件が起つたのだとしたら、どうせ一、二時間は、予備智識に費<sup>かか</sup>るものと思わなけりやならんよ。だいたい、いつぞやのケネル殺人事件——あれでは、支那古代陶器が単なる装飾物にすぎなかつた。ところが今度は、算哲博士が死蔵している、カロリング朝以来の工芸品だ。その中に、あるいはボルジアの壺がなるとは云われまい。しかし、福音書の写本などは一見

して判るものじゃないから……」と云つて、「一四一四年聖サンガル寺発掘記」の他二冊を脇に取り除け、綸りんず子しと尚武しょうぶ革を斜めに貼り混ぜた美々しい装幀の一冊を突き出すと、

「紋章学!?」と検事は呆れたように叫んだ。

「ウン、寺門てらかどよしみち義道の『紋章学秘録』さ。もう稀きこうぼん観本になつて

いるんだがね。ところで君は、こういう奇妙な

紋章を今まで見たことがあるだろうか」と法水が指先

で突いたのは、FRCOの四字を、二十八葉橄欖かんらん冠で

包んである不思議な図案だった。

「これが、天正遣欧使の一人——千々石清左衛門直員ちぢわ なおかず

から始まっている、降矢木家の紋章なんだよ。何故、

豊後王普蘭師司怙・休庵ぶんご フランシスコ シヴァン（大友宗麟）の花押かおうを中にして、

それを、フィレンツェ大公国の市表章旗の一部が包んでいるのだらう。とにかく下の註釈を読んで見給え」

——「クラウディオ・アクワヴィバジエスイット（耶蘇会会長）

回想録」中の、ドン・ミカエル（千々石のこと）よ

りジェンナロ・コルバルタ（ヴェニスガラスの玻璃工）に

送れる文。（前略）その日バタリア僧院の神父ヴェ

レリオは余をエウカリスチャ聖餐式に招きたれど、姿を現わさざれ



ば不審に思いいたる折柄、扉を排して丈高き騎士現  
われたり、見るに、バロツサ寺領騎士の印章を佩け、  
雷の如き眼を睜りて云う。フランチェスコ大公妃  
ピアンカ・カペル口殿は、ピサ・メデイチ家におい  
て貴下の胤を秘かに生めり。その女兒に黒奴の乳  
母をつけ、刈込垣の外に待たせ置きたれば受け取ら  
れよ——と。余は、駭けるも心中覚えある事なれば、  
その旨を承じて騎士を去らしむ。それより悔改を  
なし、贖罪符をうけて僧院を去れるも、帰途船中  
黒奴はゴアにて死し、嬰兒はすぐせと名付けて降矢

木の家を創おこしぬ。されど帰国後吾が心には妄想散もうぞう乱し、天主デウス、吾れを責むる誘惑テンタサンの障礙しょうげを滅し給えりとも覚えぬ。(以下略)

「つまり、降矢木の血系が、カテリナ・デイ・メデイチの隠し子と云われるビアンカ・カペルロから始まつていると云うことなんだが、その母子おやこがそろつて、怖ろしい惨虐性犯罪者ときている。カテリナは有名な近親殺害者で、おまけに聖セントバルテルミー齋日の虐殺を指導した発頭人なんだし、また娘の方は、毒のルクレチア・ボルジアから百年後に出現し、これは長剣の暗殺者と

謳うたわれたものだ。ところが、その十三世目になると、算哲という異様な人物が現われたのだよ」と法水は、さらにその本の末尾に挟んである、一葉の写真と外紙の切抜を取り出したが、検事は何度も時計を出し入れしながら、

「おかげで、天正遣欧使の事は大分明るくなったがね。しかし、四百年後に起った殺人事件と祖先の血との間に、いったいどういう関係があるのだね。なるほど不道德という点では、史学も、法医学や遺伝学と共通してはいるが……」

「なるほど、とかく法律家は、詩に箇条を附けたがるからね」と法水は検事の皮肉に苦笑したが、「だが、例証がないこともないさ。シャルコーの随想の中には、ケルンで、兄が弟に祖先は悪竜を退治した聖ゲオルクだと戯談を云ったばかりに、尼僧の蔭口をきいた下女をその弟が殺してしまった——という記録が載っている。また、フィリップ三世が巴里中の癩患者を焚殺したという事蹟を聞いて、六代後の落魄したベルトランが、今度は花柳病者に同じ事をやろうとしたそうだ。それを、血系意識から起る帝王性妄想と、シャルコーが定

義をつけているんだよ」と云つて、眼で眼前のものを  
見よとばかりに、検事を促した。

写真は、自殺記事に挿入されたものらしい算哲博士  
で、チヨツキ胸衣の一番下の釦をぼたん隠すほどに長い白髯を垂れ、  
魂の苦患が心の底で燃え燻くすぶっているかのような、憂鬱  
そうな顔付の老人であるが、検事の視線は、最初から  
もう一枚の外紙の方に奪われていた。それは、一八七  
二年六月四日発行の「マンチエスタークウリア郵報」紙で、日本  
医学生セントリ्यूク療養所より追放さる——という標  
題の下に、ヨーク駐在員発の小記事にすぎなかつた。

が、内容には、思わず眼を瞠みはらしむるものがあつた。

——ブラウンシュワイク普通医学校より受託の日  
本医学生降矢木鯉吉（算哲の前名）は、予かねてよりリ  
チャード・バートン輩と交わりて注目を惹ひける折柄、  
エクセター教区監督を誹謗し、目下狂否の論争中な  
る、法術士ロナルド・クインシイと懇ねんごろにせしたため、  
本日原籍校に差し戻されたり。然しかるに、クインシイ  
は不審にも巨額の金貨を所持し、それを追及された  
る結果、彼の秘蔵に係わる、ブルーレ手写のウイチグ  
ス呪法典、ブルデマール一世触療呪文集、希ヘブライ伯来語

手写本猶太秘積義法ユダヤカバラ（神秘数理術ゲマトリアとしてノタリク、テムラの諸法を含む）、ヘンリー・クラムメルのニューマトグラフィニューマトグラフィ、神靈手書法、編者不明の拉典語手写本加勒底亞五芒星招妖術、並びに栄光ハンド・オブ・グローリーの手（絞首人の掌てのひらを酢漬けにして乾燥したもの）を、降矢木に譲り渡したる旨を告白せり。

読み終った検事に、法水は亢奮こうふんした口調を投げた。

「すると、僕だけということになるね。これを手に入れたばかりに、算哲博士と古代呪法との因縁を知っているのは。いや、真実怖ろしい事なんだよ。もし、ウ

イチグス呪法書が黒死館のどこかに残されているとしたら、犯人の外に、もう一人僕等の敵がふえてしまうのだからね」

「そりやまた何故だい。魔法本と降矢木にいったい何が？」

「ウイチグス呪法典はいわゆる技巧アート・マジック呪術で、今日の正

確科学を、呪詛じゆそと邪悪の衣で包んだものと云われているからだよ。元来ウイチグスという人は、

亜刺比亞アラビア・

希臘ヘレニックの科学を呼称したシルヴェスター二世十三使徒の

一人なんだ。ところが、無謀にもその一派は羅馬ローマ教会



に大啓蒙運動を起した。で、結局十二人は異端焚殺に逢ってしまったのだが、ウイチグスのみは秘かに遁れ、この大技巧呪術書を完成したと伝えられている。それが後年になって、ボツカネグロの築城術やヴォーバンの攻城法、また、デイやクロウサアの魔鏡術やカリオストロの錬金術、それに、ボツチゲルの磁器製造法からホーヘンハイムやグラハムの治療医学にまで素因をなしていると云われるのだから、驚くべきじゃないか。また、猶太秘釈義法ユダヤカバラからは、四百二十の暗号がつくれると云うけれども、それ以外のものはいわゆる純正呪

術であつて、荒唐無稽もきわまつた代物ばかりなんだ。だから支倉君、僕等が真実怖れていいのは、ウイチグス呪法典一つのみと云つていいのさ」

はたして、この予測は後段に事実となつて現われたけれども、その時はまだ、検事の神経に深く触れたものではなく、法水が着換えに隣室へ立つたあいだ次の一冊を取り上げ、折つた個所のある頁を開いた。それは、明治十九年二月九日発行の東京新誌第四一三号で、「当世ちよぼくれはかせ保久礼博士」と題した田島象二（醉多道士——「花柳事情」などの著者）の戯文だつた。

——さて扱もこの度かんぽのかえり転沛逆手行、聞いてもくんねえ

きまりく（と定句十数列の後に、次の漢文が挿入されている）

近来大山街道に見物客を引くは、神奈川県高座郡

よしがり

葭苨の在に、竜宮の如き西洋城廓出現せるがためな

り。そは長崎の大分ぶげん限降矢木鯉吉の建造に係るも

のにして、いざその由来を説かん。先に鯉吉は、小

島郷療養所において和蘭軍医オランダメールデルホールト

の指導をうけ、明治三年一家東京に移るや、渡独し

て、まずブラウンシュワイク普通医学校に学べり、

その後ベルリン伯林大学に転じて、研鑽八ヶ年の後二つの学

位をうけ、本年初頭帰朝の予定となりしも、それに  
 先きだち、二年前英人技師クロード・デイグスビイ  
 を派遣して、既記の地に本邦未曾有<sup>みぞう</sup>とも云う大西洋  
 建築を起工せり。と云うは一つに、彼地にて娶<sup>めと</sup>りし  
 仏蘭西<sup>フランス</sup>ブザンソンの人、テレーズ・シニヨレに餞<sup>はなむ</sup>け  
 る引手箱なりと云う。すなわち、地域はサヴルーズ  
 谷を模し、本館はテレーズの生家トレヴィーユ荘の  
 城館を写し、もつて懐郷の念を絶たんがためなりと  
 ぞ。さるにしても、このほど帰国の船中蘭貢<sup>ラングーン</sup>にお  
 いて、テレーズが再帰熱にて死去したるは哀れとも

云うべく、また、皮肉家大鳥文学博士がこの館を指し、中世堡楼の屋根までも剥いで黒死病死者を詰め込みしと伝えらるる、プロヴィンシア繞壁模倣を種に、黒死館と嘲りしこそ可笑しと云うべし——。

検事が読み終った時、法水は外出着に着換えて再び現われた。が、またも椅子深く腰を埋めて、折から執拗に鳴り続ける、電話の鈴に眉を顰めた。

「あれはたぶん熊城の督促だろうがね。死体は逃げつこないのだから、まずゆつくりするとしてだ。そこで、その後に入った二つの変死事件と、いまだに解し難い

謎とされている算哲博士の行状を、君に話すでしょう。帰国後の算哲博士は、日本の大学からも神経病学と薬理学とで二つの学位をうけたのだが、教授生活には入らず、黙々として隠遁的な独身生活を始めたものだ。ここで、僕等が何より注目しなければならないのは、博士がただの一日も黒死館に住まなかつたと云うばかりか、明治二十三年には、わずか五年しか経たない館の内部に大改修を施したと云う事で、つまり、デザイン、スビイの設計を根本から修正してしまつたのだ。そうして、自分は寛永寺裏に邸宅を構えて、黒死館には弟

の伝次郎夫妻を住わせたのだが、その後の博士は、自殺するまでの四十余年をほとんど無風のうちに過したと云つてよかつた。著述ですら「テュードル家ぼいどく毒並びに犯罪に関する考察」一篇のみで、学界における存在と云つたら、まずその全部が、あの有名な八木沢医学博士との論争に尽きると云つても過言ではないだろう。それはこうなのだ。明治二十一年に頭蓋鱗様部及び顛せつじゆか窩畸形者の犯罪素質遺伝説を八木沢博士が唱えると、それに算哲博士が駁説を挙げて、その後一年にわたる大論争を惹ひき起したのだが、結局人間を栽培

する実験遺伝学という極端な結論に行きついてしまつて、その成行に片唾かたずを嚙のませた矢先だった。不思議なことには、二人の間にまるで默契でも成り立ったかのように、その対立が突如不自然きわまる消失を遂げてしまつたのだよ。ところが、この論争とは聯関のないことだが、算哲博士のいない黒死館には、相次いで奇怪な変死事件が起つたのだ。最初は明治二十九年のことで、正妻の入院中愛妾の神鳥かんどりみさほを引き入れた最初の夜に、伝次郎はみさほのために紙切刀かみきりがたなで頸動脈を切断され、みさほもその現場で自殺を遂げてしまつた



のだ。それから、次は六年後の明治三十五年で、未亡人になった博士とは従妹いとこに当る筆子夫人が、寵愛ちようあいの嵐鯛十郎という上方役者のためにやはり絞殺されて、鯛十郎もその場去らずに縊死いしを遂げてしまった。そして、この二つの他殺事件にはいっこうに動機と目されるものがなく、いやかえって反対の見解のみが集まるという始末なので、やむなく、衝動性の犯罪として有耶無耶うやむやのうちに葬られてしまったのだよ。ところで、主人を失った黒死館では、一時算哲とは異母姪いぼてつに当る津多子——君も知つてのとおり、現在では東京神恵病

院長押鐘博士の夫人になつてはいるが、かつては大正

おしがね

末期の新劇大女優さ——当時三歳にすぎなかつたその

あるじ

人を主として<sup>あるじ</sup>いるうちに、大正四年になると、思いが

けなかつた男の子が、算哲の愛妾岩間富枝に胎みごもつたの

だ。それがすなわち、現在の当主旗太郎なんだよ。そ

うして、無風のうちに三十何年か過ぎた去年の三月に、

三度動機不明の変死事件が起つた。今度は算哲博士が

自殺を遂げてしまったのだ」と云つて、かたわら ファイルブック側の書類綴り

を手繰り寄せ、著名な事件ごとに当局から送つてくる、

検屍調書類の中から、博士の自殺に関する記録を探し

出した。

「いいかね——」

——創きずは左第五第六肋骨間を貫き左心室に突入せる、正規の創形を有する短剣刺傷にして、算哲は室の中央にてその束つかを固く握り締め、扉を足に頭を奥の帷幕たれまくに向けて、仰臥の姿勢にて横たわれり。相貌には、やや悲痛味を帯ぶと思われる痴呆状の弛緩を呈し、現場は鎧扉を閉ざせる薄明の室にして、家人は物音を聴かずと云い、事物にも取り乱されたる形跡なし、尚なお、上述のもの以外には外傷はなく、しか

も、同人が西洋婦人人形を抱きてその室に入りてよ  
り、僅々十分足らずのうち起れる事実なりと云う。  
その人形と云うは、路易朝末期の格襦トレリ襦ルイ服をつけた  
る等身人形にして、帷幕の蔭にある寝台上にあり、  
用いたる自殺用短剣は、その護符刀ならんと推定さ  
る。のみならず、算哲の身边事情中には、全然動機  
の所在不明にして、天寿の終りに近き篤とく学者がくしゃが、い  
かにしてかかる愚拳を演じたるものや、その点すこ  
ぶる判断に苦しむところと云うべし——。

「どうだね支倉君、第二回の変死事件から三十余年を

隔てていても、死因の推定が明瞭であつても動因がな  
い——という点は、明白に共通しているのだ。だから、  
そこに潜んでいる眼に見えないものが、今度ダンネベ  
ルグ夫人に現われたとは思えないかね」

「それは、ちと空論だろう」と検事はやり込めるような  
語気で、「二回目の事件で、前後の聯関が完全に中断さ  
れている。何とかいう上方役者は、降矢木以外の人間  
じゃないか」

「そうなるかね。どこまで君には手数が掛るんだろう」  
と法水は眼でおおげさ大袈裟な表情をしたが、「ところで支倉君、

最近現われた探偵小説家に、小城魚太郎こしろうおたろうという変り種が  
いるのだが、その人の近著に『近世迷宮事件考察』と云うのがあつて、  
その中で有名なキューダビイ壊崩録を論じている。ヴィクトリア朝末期に栄えたキューダ  
ビイの家も、ちようど降矢木の三事件と同じ形で絶滅されてしまつたのだ。  
その最初のもものは、宮廷詩文正朗読師の主キューダビイが、  
出仕しようとした朝だつた。当時不貞の噂うわさが高かつた妻のアンが、  
送り出しの接吻をしようとして腕を相手の肩に繞めぐらすと、やにわ  
に主は短剣を引き抜いて、背後の帷幕とぼりに突き立てたの

だ。ところが、紅あけに染んで斃たおれたのは、長子のウォルターだったので、驚駭きょうがいした主は、返す一撃で自分の心臓を貫いてしまった。次はそれから七年後で、次男ケントの自殺だった。友人から右頬グラスに盃を投げられて決闘を挑まれたにもかかわらず、不関気しらぬげな顔をしたと云うので、それが嘲笑の的となり、世評を恥じた結果だと云われている。しかし、同じ運命はその二年後にも、一人取り残された娘のジョージアにも廻めぐってきた。許娘いいなずけ者との初夜にどうしたことか、相手を罵ののしったので、逆上されて新床の上で絞殺されてしまったのだ。それ

が、キューダビイの最期だったのだよ。ところが小城魚太郎は、とうてい運命説しか通用されまいと思われ、その三事件に、科学的な系統を発見した。そして、こういう断定を下している。結論は、閃光的に顔面右半側に起る、グプラー麻痺(ママ)の遺伝にすぎないという。

すなわち主の長子刺殺は、妻の手が右頬(とぼり)に触れても感覚がないので、その手が背後の帷幕(とぼり)の蔭にいる密夫に伸べられたのでないかと誤信した結果であつて、そうになると、次男の自殺は論ずるまでもなく、娘もやはりグプラー麻痺(ママ)のために、愛撫の不满を訴えたためでは



ないかと推断しているのだ。勿論探偵作家にありがちな、得手勝手きわまる空想には違いない。けれども降矢木の三事件には、少なくとも連鎖を暗示している。それに、小さな窓を切り拓いてくれたことだけは確かなんだよ。しかし遺伝学ほうはくというのみの狭い領域だけじゃない。あの磅礴ほうはくとしたものの中には、必ず想像もつかぬ怖ろしいものがあるに違いないのだ」

「フム、相続者が殺されたというのなら、話になるがね。しかし、ダンネベルグじゃ……」といったん検事は小首を傾かしげたけれども、「ところで、今の調書にある人形

と云うのは」と問い返した。

「それが、テレーズ夫人の記憶像メモリーさ。博士がコペツキ

イ一家（ボヘミアの名操人形工マリオネット）に作らせたとかいう

等身の自働人形だそうだ。しかし、何より不可解なの

は、四重奏団カルテットの四人なんだよ。算哲博士が乳呑児ちのみごのう

ちに海外から連れて来て、四十余年の間館から外の空

気を、一度も吸わせたことがないと云うのだからね」

「ウン、少数の批評家だけが、年一回の演奏会で顔を見

ると云うじゃないか」

「そうなんだ。きつと薄気味悪い蠟色の皮膚をしてい

るだろう」と法水も眼を据えて、「しかし、何故に博士が、あの四人に奇怪な生活を送らせたのだろうか、また、四人がどうしてそれに黙従していたのだろうか。ところがね、日本の内地ではただそれを不思議がるのみのことで、いつこう突込んだ調査をした者がなかったのだが、偶然四人の出生地から身分まで調べ上げた好事家こうずかを、僕は合衆国で発見したのだ。恐らくこれがあの四人に関する唯一の資料と云つてもいいだろうと思うよ」そして取り上げたのは、一九〇一年二月号の「ハートフォード福音伝道者エヴァンジェリスト」誌で、それが卓上に残つ

た最後だった。「読んでみよう。著者はフアロウという人で、教会音楽の部にある記述なんだが」

——所もあろうに日本において、純中世風の神秘楽人が現存しつつあるということは、恐らく稀中の奇とも云うべきであろう。音楽史を辿つてさえも、その昔シュヴェツインゲンの城苑において、マンハイム選挙侯カアル・テオドルが、仮面をつけた六人の楽師を養成したという一事に尽きている。ここにおいて予は、その興味ある風説に心惹かれ、種々

策を廻らして調査を試みた結果、ようやく四人の身分のみを知ることが出来た。すなわち、第一提琴ヴァイオリン奏者のグレーテ・ダンネベルグは、オーストリー奥太利チロル県マリエンベルグ村狩猟区監督ウルリッヒの三女。第二提琴奏者ガリバルダ・セレナはイタリー伊太利ブリンデッシ市鑄金家ガリカリニの六女。ヴィオラ奏者オリガ・クリヴオフはロシア露西亜コウカサス州タガンツシースク村地主ムルゴチの四女。チェロ奏者オットカール・レヴェズはハンガリー洪牙利コンタルツァ町医師ハドナツクの二男。いずれも各地名門の出である。

しかし、その楽団の所有者降矢木算哲博士が、はたしてカアル・テオドルの、豪華なロココ趣味を学んだものであるかどうか、その点は全然不明であると云わねばならない。

法水の降矢木家に関する資料は、これで尽きているのだが、その複雑きわまる内容は、かえって検事の頭脳を混乱せしむるのみの事であった。しかし、彼が恐怖の色を泛<sup>うか</sup>べ口誦<sup>くちずさ</sup>んだところの、ウイチグス呪法典という一語のみは、さながら夢の中で見る白い花のよう

に、いつまでもジインと網膜の上にとどまっていた。  
また一方法水にも、彼の行手に当って、殺人史上空前  
ともいう異様な死体が横たわっていていようとは、その時  
どうして予知することが出来たであろうか。





第一篇 死体と二つの扉を繞つて



## 一、栄光の奇蹟

私鉄T線も終点になると、そこはもう神奈川県になつている。そして、黒死館を展望する丘陵までの間は、櫛かしの防風林や竹林が続いていて、とにかくそこまでは、他奇さがみのない北相模さがみの風物であるけれども、いつたん丘の上に来てしまうと、俯瞰ふかんした風景が全然風趣を異にしてしまうのだ。ちようどそれは、マクベスの所領クォーダーのあつた——北部蘇古蘭スコットランドそつくりだ

と云えよう。そこには木も草もなく、そこまで来るうちには、海の潮風にも水分が尽きてしまつて、湿り気のない土の表面が灰色に風化していて、それが岩塩のように見え、凸凹した緩斜の底に真黒な湖水みずうみがあるうと云う——それにさも似た荒涼たる風物が、播鉢の底にある墻壁しょうへきまで続いている。その赭土しやどかつき褐砂の因をなしたというのは、建設当時移植したと云われる高緯度の植物が、またたく間に死滅してしまつたからであつた。けれども、正門までは手入れの行届いた自動車路が作られていて、破墻はしょうていくず挺崩しと云われる切り取り壁が出

張つた主楼の下には、薊あざみと葡萄の葉文が鉄扉を作つていた。その日は前夜の凍雨の後をうけて、厚い層をなした雲が低く垂れ下り、それに、気圧の変調からでもあろうか、妙に人肌めいた生暖かさで、時折微かすかに電光が瞬いなずまき、口小言くちこごとのような雷鳴が鈍く懶ものうげ気とどろに轟いてくる。そういう暗澹たる空模様の中で、黒死館の巨大な二層楼は——わけても中央にある礼拝堂の尖塔や左右の塔櫓が、一刷毛はけ刷いた薄墨色の中に塗抹とまつされていて、全体が樹脂やにっぽい単色画モノクロームを作つていた。

法水のりみずは正門際で車を停めて、そこから前庭の中を歩

きはじめた。壁廊の背後には、薔薇ばらを絡ませた低い赤格子の塀があつて、その後が幾何学的な構図で配置された、ル・ノートル式の花苑かえんになつていた。花苑を縦横に貫いている散歩路の所々には、列柱式の小亭や水神やサイキあるいは滑稽な動物の像が置かれてあつて、赤煉瓦を斜はすかいに並べた中央の大路を、碧色みどりの釉瓦くすりがわらで縁取りしている所は、いわゆる矢筈敷ヘリング・ポーンと云うのである。そして、本館は水松いちいの刈込垣で繞めぐらされ、壁廊のまわり四周には、様々の動物の形や頭文字を籬状まがきがたに刈り込んだ、榎つげや糸杉トヒアリーの象徴樹が並んでいた。なお、刈込垣の

前方には、パルナス群像の噴泉があつて、法水が近づくと、突如奇妙な音響を発して水煙すいえんを上げはじめた。

はげくら「支倉君、これは驚駭噴泉ウオーター・サーブライズと云うのだよ。あの音も、

また弾丸たまのように水を浴びせるのも、みんな水圧を利用しているのだ」と法水は飛沫しぶきを避けながら、何気なしに云つたけれども、検事はこのバロック風の弄技物から、なんとなく薄気味悪い予感を覚えずにはいられなかつた。

それから法水は、刈込垣の前に立つて本館を眺めはじめた。長い矩形に作られている本館の中央は、半円

形に突出して、左右に二条の張出間アプスがあり、その部分の外壁だけは、薔薇色の小さな切石を膠泥モルタルで固め、九世紀風の粗朴な前羅馬様式プレ・ロマネスク・スタイルをなしていた。勿論その部分には礼拝堂に違いなかつた。けれども、張出間アプスの窓には、薔薇形窓がアーチ形の格子の中に嵌はまっているのだし、中央の壁画にも、十二宮を描いた彩色硝子の円華窓えんげのあるところを見ると、これ等様式の矛盾が、恐らく法水の興味を惹ひいたことと思われた。しかし、それ以外の部分は、玄武岩の切石積で、窓は高さ十尺もあるという二段鎧扉よろいどになっていた。玄関は礼拝堂



の左手にあつて、もしその打戸環のついた大扉おおとの際そばに私服さえ見なかつたならば、恐らく法水の夢のような考証癖は、いつまでも醒めなかつたに違いない。けれども、その間あいだでも、検事が絶えず法水の神経をピリピリ感じていたと云うのは、鐘楼らしい中央の高塔から始めて、奇妙な形の屋窓や煙突が林立している辺りから、左右の塔櫓にかけて、急峻な屋根をひとわたり観察した後、その視線を下げて、今度は壁面に向けた顔を何度となく顎あごを上下させ、そういう態度を数回にわたって繰り返したからであつて、その様子がなんと

なく、算数的に比較検討しているもののように思われたからだ。はたせるかな、この予測は的中した。最初から死体を見ぬにもかかわらず、はや法水は、この館の雰囲気まぎぐを摸索つてその中から結晶のようなものを摘出していったのであった。

玄関の突当りが広間になっていて、そこに控えていた老人の召使バトラーが先に立ち、右手の大階段室に導いた。その床には、リラと暗紅色の七宝模様しっぽうが切嵌モザイクを作つていて、それと、天井に近い円廊を廻めぐっている壁画との対照が、中間に無装飾の壁があるだけいつそう引き

立って、まさに形容を絶した色彩を作っていた。馬蹄形に両肢を張った階段を上りきると、そこはいわゆる階段廊になっていて、そこから今来た上空に、もう一つ短い階段が伸び、階上に達している。階段廊の三方の壁には、壁面の遙か上方に、中央のガブリエル・マックス作「腑分図」ふわけずを挟んで、左手の壁にジェラルド・ダビッドの「シサムネス皮剥死刑の図」、右手の壁面には、ド・トリリーの「二七二〇年マルセイユの黒死病」ペストが、掲げられてあった。いずれも、縦七尺幅十尺以上に拡大摸写した複製画であって、何故かかる陰惨なもののみ

を選んだのか、その意図がすこぶる疑問に思われるのだった。しかし、そこで法水の眼が素早く飛びついたというのは「腑分図」の前方に正面を張って並んでい

る、二基の中世甲冑武者だった。いずれも手にせいぎ旌旗の

旒はたぼう棒を握っていて、尖頭から垂れている二様のツルネー綴織が、

画面の上方で密着していた。その右手のものは、

クエーカー宗徒の服装をした英蘭土地主がイングランド所領地図を

拡げ、手に凶面用の英町尺エーカーざしを持っている構図であつて、

左手のものには、羅馬教会の弥撒ローマが描かれてあつた。

その二つとも、上流家庭にはありきたりな、富貴と信

仰シムボルの表徴にすぎないのであるから、恐らく法水は看過

すると思いのほか、かえつて召使バトラーを招き寄せて訊ねた。

「この甲冑武者は、いつもここにあるのかね」

「どういたしましたして、昨夜からでございます。七時前には階段の両裾に置いてありましたものが、八時過ぎにはここまで飛び上っております。いつたい、誰がいたしましたものか？」

「そうだろう。モンテスパン侯爵夫人のクラニー荘を見れば判る。階段の両裾うなずに置くのが定法だからね」と法水はアツサリ頷いて、それから検事に、「支倉君、

試しに持ち上げて見給え。どうだね、割合軽いだろう。勿論実用になるものじゃないさ。甲冑も、十六世紀以来のものは全然裝飾物なんだよ。それも、路易<sup>ルイ</sup>朝に入ると肉彫の技巧が繊細になつて、厚みが要求され、終いには、着ては歩けないほどの重さになつてしまったものだ。だから、重量から考えると、無論ドナテルロ以前、さあ、マツサグリアかサンソヴィノ辺りの作品かな」

「オヤオヤ、君はいつファイロ・ヴァンスになつたのだね。一口で云えるだろう——抱えて上れぬほどの重量

ではないって」と検事は痛烈な皮肉を浴びせてから、「しかし、この甲冑武者が、階下にあつてはならなかつたのか。それとも、階上に必要だつたのだろうか？」  
「無論、ここに必要だつたのさ。とにかく、三つの画を見給え。疫病・刑罰・解剖だろう。それに、犯人がもう一つ加えたものがある——それが、殺人なんだよ」  
「冗談じゃない」検事が思わず眼を<sup>みは</sup>瞪ると、法水もやや亢奮を交えた声でこう云つた。

「とりもなおさず、これが今度の降矢木事件の象徴<sup>シムボル</sup>という訳さ。犯人はこの大旆<sup>たいはい</sup>を掲げて、陰微のうちに

殺戮さつりくを宣言している。あるいは、僕等に対する、挑戦

の意志かもしれないよ。だいたい支倉君、二つの甲冑武者が、右のは右手に、左のは左手に旗旗の柄を握っているだろう。しかし、階段の裾にある時を考えると、右の方は左手に、左の方は右手に持つて、構図から均斉を失わないのが定法じゃないか。そうすると、現在の形は、左右を入れ違えて置いたことになるだろう。

つまり、左の方から云つて、富貴の英町旗エーカーぼた——信仰の弥撒旗ミサぼたとなつていたのが、逆になつたのだから……そこに怖ろしい犯人の意志が現われてくるんだ」



「何が？」

「Mass (弥撒<sup>ミサ</sup>) と acre (英町<sup>エーカー</sup>) だよ。続けて読んで見給え。信仰と富貴が、Massacre<sup>マッサカー</sup>——虐殺に化けてしまうぜ」と法水は検事が唾然としたのを見て、「だが、恐らくそれだけの意味じゃあるまい。いずれこの甲冑武者の位置から、僕はもつと形に現われたものを発見<sup>みつ</sup>け出すつもりだよ」と云つてから、今度は召使<sup>パトラー</sup>に、「ところで、昨夜七時から八時までの間に、この甲冑武者について目撃したものはなかったかね」

「いけません。生憎<sup>あいにく</sup>とその一時間が、私どもの食事

に当っておりますので」

それから法水は、甲冑武者を一基一基解体して、その周囲は、画図と画図との間にある龕形がんけいの壁灯から、旌旗の蔭になつてゐる、「腑分図」の上方までも調べたけれど、いつこうに得るところはなかつた。画面のその部分も背景のはずれ近くで、様々の色の縞が雑然と配列しているにすぎなかつた。それから、階段廊を離れて、上層の階段を上つて行つたが、その時何を思いついたのか、法水は突然奇異ふしぎな動作を始めた。彼は中途まで来たのを再び引き返して、もと来た大階段の

頂辺てつぺんに立った。そして、衣囊かくしから格子紙セクシヨンの手帳を取り出して、階段の階数をかぞえ、それに何やら電光形ジグザグめいた線を書き入れたらしい。さすがこれには、検事も引き返さずにはいられなかった。

「なあに、ちよつとした心理考察をやつたまでの話さ」と階上の召使バトラーを憚はばかりながら、法水は小声で検事の問いに答えた。「いずれ、僕に確信がついたら話すことにするが、とにかく現在いまのところでは、それで解釈する材料が何一つないのだからね。単にこれだけのことしか云えないと思うよ。先刻さつき階段を上つて来る時に、警察

自動車らしいエンジンの爆音が玄関の方でしたじやないか。するとその時、あの召使パトライは、そのけたたましい音響に当然消されねばならない、ある微かな音を聴くことが出来たのだ。いいかね、支倉君、普通の状態ではとうてい聴くことの出来ない音をだよ」

そういうのはなはだしく矛盾した現象を、法水はいかにして知ることが出来たのだろうか？　しかし、彼はそれに付け加えて、そうは云うものの、あの召使パトライには毫末ごうまつの嫌疑もない——と行って、その姓名さえも聞こうとはしないのだから、当然結論の見当が茫漠となつ

てしまつて、この一事は、彼が提出した謎となつて残されてしまつた。

階段を上りきつた正面には、廊下を置いて、岩乗な防塞を施した一つの室へやがあつた。鉄柵扉の後方に数層の石段があつて、その奥には、金庫扉きんこどらしい黒漆こくしつがキラキラ光っている。しかし、その室が古代時計室だということを知ると、収蔵品の驚くべき価値を知る法水には、一見莫迦ぼか気かて見える蒐集家の神経を頷うなずくことが出来た。廊下はそこを基点に左右へ伸びていた。一劃ごとに扉が附いているので、その間は隧道トンネルのような暗

さで、昼間でも龕がんの電燈が点ともっている。左右の壁面には、テルラコッタ泥焼の朱線が彩いろっているのみで、それが唯一の装飾だった。やがて、右手にとつた突当りを左折し、それから、今来た廊下の向う側に出ると、法水の横手には短い拱廊そでろうかが現われ、その列柱の蔭に並んでいるのが、和式の具足類だった。拱廊の入口は、大階段室の円天まる井の下にある円廊に開かれていて、その突当りには、新しい廊下が見えた。入口の左右にある六弁形の壁燈を見やりながら、法水が拱廊の中に入ろうとした時、何を見たのか愕然ぎよつとしたように立ち止った。

「（こ）にもある」と云つて、左側の据具足すえぐそく（鎧櫃よろいびつ）の上に据えたもの）の一列のうちで、一番手前つのだちにあるものを指差した。その黒毛三枚鹿角立かぶとの兜ひおどしを頂いた緋緘しころ鍛かじの鎧よろいに、何の奇異ふしぎがあるのであろうか。検事はなかば呆れ顔あはれに反問した。

「兜かぶとが取り換えられているんだ」と法水は事務的な口調で、「向う側にあるのは全部吊具足つりぐそく（宙吊りにしたもの）だが、二番目の鞞革なめしがわ胴たねの安鎧やすよろいに載っているのは、鍛かじを見れば判るだろう。あれは、位置の高い若武者ししがみが冠かぶる獅子ししがみ嚙かみ台だい星前立ししがみ脇細わきほそく鍛かじという兜かぶとなんだ。また、

こつちの方は、黒毛の鹿角立という猛悪なものが、優雅な緋緘ひおどしの上に載っている。ねえ支倉君、すべて不調和なものには、邪よこしまな意志が潜ひそんでいるとか云うぜ」と云つてから召使パトラーにこの事を確かめると、さすがに驚嘆の色を泛うかべて、

「ハイ、さようでございます。昨夕までは仰言おつしやつたとおりでございましたが」と躊躇ちゆうちゆうせずよに答えた。

それから、左右に幾つとなく並んでいる具足の間を通り抜けて、向うの廊下に出ると、そこは袋廊下の行き詰りになつていて、左は、本館の横手にある旋廻階



段のテラスに出る扉。右へ数えて五つ目が現場の室へやだった。部厚な扉の両面には、古拙な野生的な構図で、イエス耶蘇がせむし佝僂を癒やしている聖画が浮彫うでぼりになっていた。その一重の奥に、グレーテ・ダンネベルグが死体となつて横たわっているのだった。

扉が開くと、後向きになつた二十三、四がらみの婦人くましろを前に、捜査局長の熊城くましろが苦りきつて鉛筆ゴムの護謨ゴムを噛かんでいた。二人の顔を見ると、遅着とがを咎とがめるように、まじり眦まじりを尖とがらせたが、

「法水君、仏様ならあの帷幕とぼりの蔭かげだよ」といかに無愛

想に云い放つて、その婦人に対する訊問も止めてしまつた。しかし、法水の到着と同時に、早くも熊城が、自分の仕事を放棄してしまつたのと云い、時折彼の表情の中に往来する、放心とでも云うような鈍い弛緩の影があるのを見ても、帷幕の蔭にある死体が、彼にどれほどの衝撃を与えたものか——さして想像に困難ではなかつたのである。

法水は、まずそこにいる婦人に注目を向けた。愛くるしい二重顎あごのついた丸顔で、たいして美人と云うほどではないが、円つぶらな瞳と青磁に透いて見える眼隈と、

それから張ち切れそうな小麦色の地肌とが、素晴らしく魅力的だった。葡萄酒色のアフタヌーンを着て、自分の方から故算哲博士の秘書紙谷伸子かみたにのぶこと名乗って挨拶したが、その美しい声音こわねに引きかえ、顔は恐怖に充ち土器色に変わっていた。彼女が出て行ってしまうと、法水は黙々と室内を歩きはじめた。その室はへや広々とした割合に薄暗く、おまけに調度が少ないので、ガラんとして淋しかった。床の中央には、大魚の腹中にある約拿ヨナを凶案化したコプト織の敷物が敷かれ、その部分の床は、色大理石とはぜ櫛の木片を交互に組んだ車輪模様の

切嵌<sup>モザイク</sup>。

そこを挟んで、両辺の床から壁にかけ胡桃<sup>くるみ</sup>と櫛<sup>かじ</sup>

の切組みになつていて、その所々に象眼を鏤<sup>ちりば</sup>められ、

渋い中世風の色沢が放たれていた。そして、高い天井

からは、木質も判らぬほどに時代の汚斑が黒く滲み出

ていて、その辺から鬼気とでも云いたい陰惨な空気が、

静かに澱<sup>よど</sup>み下つてくるのだつた。扉口<sup>とぐち</sup>は今入つたのが

一つしかなく、左手には、横庭に開いた二段鎧窓が二

つ、右手の壁には、降矢木家の紋章を中央に刻み込ん

である大きな壁炉<sup>かべろ</sup>が、数十個の石材で畳み上げられて

あつた。正面には、黒い天鵞絨<sup>びろうど</sup>の帷幕<sup>とぼり</sup>が鉛のように重

く垂れ、なお扉から暖炉に寄つた方の壁側には、三尺ほどの台上に、裸体の<sup>せむし</sup>僂人と有名な立法者（<sup>エジプト</sup>埃及彫像）の<sup>かぞう</sup>跏像とが背中合せをしていて、窓際寄りの一劃は高い<sup>ついたて</sup>衝立で仕切られ、その内側に、長椅子と二、三脚の椅子<sup>テーブル</sup>卓子が置かれてあつた。隅の方へ行つて人群から遠ざかると、古くさい<sup>かび</sup>黴の匂いがプーンと鼻孔を<sup>つ</sup>衝いてくる。<sup>マントルピース</sup>暖炉棚の上には埃が五分<sup>ぶ</sup>ほども積つていて、帷幕に触れると、<sup>むせ</sup>咽つぽい微粉が天鵞絨の織目から飛び出してきて、それが銀色に輝き、<sup>しぶき</sup>飛沫のように降り下ってくるのだつた。一見して、この室<sup>へや</sup>が永年の間使

われていないことが判った。やがて、法水は帷幕を掻き分けて内部を覗き込んだが、その瞬間あらゆる表情が静止してしまつて、これも背後から、反射的に彼の肩を掴んだ検事の手があつたのも知らず、またそれから波打つような顫動せんどうが伝わってくるのも感ぜずに、ひたすら耳が鳴り顔が火のように熾ほてつて、彼の眼前にある驚くべきもの以外の世界が、すうつとどこかへ飛び去つて行くかのように思われた。

見よ！　そこに横たわっているダンネベルグ夫人の死体からは、聖きよらかな栄光さんぜんが燦然と放たれているのだ。

ちようど光の霧に包まれたように、表面から一寸すんばかりの空間に、澄んだ青白い光が流れ、それが全身をしつくりと包んで、陰闇の中から朦朧もうろうと浮き出させている。その光には、冷たい清冽な敬虔な気品があつて、また、それに暈ぼつとした乳白色ミルクの濁りがあるところは、奥底知れない神性の啓示でもあろうか。醜い死面の陰影は、それがために端正な相に軟げられ、実に何とも云えない静穏なムードが、全身を覆うているのだ。その夢幻的な、荘嚴なものの中からは、天使の吹く喇叭らっぱの音が聴えてくるかもしれない。今にも、聖鐘の殷々いんいん

たる響が轟きはじめ、その神々しい光が、今度は金線と化して放射されるのではないかと思われてくると、——ああ、ダンネベルグ夫人はその童貞を讃えられ、最後の恍惚境こうこつにおいて、聖女として迎えられたのであろうか——と、知らず知らず洩れ出てくる嘆声を、果てはどうすることも出来なくなってしまうのだった。

しかし、同時にその光は、そこに立ち列ならんでいる、阿呆のような三つの顔も照していた。法水もようやく吾われにかえつて調査を始めたが、鎧窓を開くと、その光は薄らいでほとんど見えなかった。死体の全身はコチコ



ちに硬直して、すでに死後十時間は十分経過しているものと思われたが、さすが法水は動ぜずに、あくまで科学的批判を忘れなかった。彼は口腔内にも光があるのを確かめてから、死体を俯向けうつむけて、背に現われている鮮紅色の屍斑を目がけ、グサリと小刀ナイフの刃を入れた。そして、死体をやや斜めにする、ドロリと重たげに流れ出した血液で、たちまち屍光に暈ぼつと赤らんだ壁が作られ、それがまるで、割れた霧のように二つに隔てられてゆき、その隙間に、ノタリノタリと血がのた蜿くつてゆく影が印しるされていった。検事も熊城も、と

うていこの凄惨な光景を直視することは出来なかつた。「血液には光はない」と法水は死体から手を離すと、  
無然<sup>ぶぜん</sup>として眩<sup>つぶや</sup>いた。「今のところでは、なんと云つても  
奇蹟と云うよりほかにないだろうね。外部から放たれ  
ているものでないことは、とうに明らかなんだし、燐  
の臭気はないし、ラジウム化合物なら皮膚に壞疽<sup>えそ</sup>が出  
来るし、着衣にもそんな跡はない。まさしく皮膚から  
放たれているんだ。そして、この光には熱も匂いもな  
い。いわゆる冷光なんだよ」

「すると、これでも毒殺と云えるのか？」と検事が法水

に云うのを、熊城が受けて、

「ウン、血の色や屍斑を見れば判るぜ。明白な青酸中毒なんだ。だが法水君、この奇妙な文身いれずみのような創紋はどうして作られたのだろうか？ これこそ、奇を嗜たしなみ変異に耽溺たんできする、君の領域じゃないか」と剛愎ごうふくな彼に似げない自嘲めいた笑えみを洩らすのだった。

実に、怪奇な栄光に続いて、法水を瞠目どうもくせしめた死体现象がもう一つあったのだ。ダンネベルグ夫人が横たわっている寝台は、帷幕とぼりのすぐ内側にあつて、それは、松毬形まつかさかたの頂花たてぼなを頭飾にし、その柱の上に、レース

の天蓋をつけた路易朝風の桃花木作りだった。死体は、そのほとんど右はずれに俯臥うつむけの姿勢で横たわり、右手は、背の方へ捻ねじ曲げたように甲を臀しりの上に置き、左手は寝台から垂れ下っていた。銀色の髪毛を無雑作に束ねて、黒い綾織の一重服を纏まとい、鼻先が上唇まで垂れ下って猶太式ユダヤの人相をしているこの婦人は、顔をSの字なりに引ん歪め、実に滑稽な顔をして死んでいた。しかし不思議と云うのは、両側の顛顛こめかみに現われている、紋様状の切り創きずだった。それがちょうど文身いれずみの型取りみたい、細かい尖鋭な針先でスウツと引いたような

——表皮だけを巧妙にそいだ擦切創さつせつそうとでもいう浅い傷であつて、両側ともほぼ直径一寸ほどの円形を作つていて、その円の周囲には、短い線条が百足むかでの足のような形で群生している。創口には、黄ばんだ血清が滲み出ているのみであるが、そういう更年期婦人の荒れ果てた皮膚に這いずつてゐるものは、凄美などという感じよりも、むしろ、乾燥ひからびた蟻ぎようちゆうの死体のようでもあり、また、不気味な鞭毛蟲が排泄する、長い糞便のようにも思われるのだった。そして、その生因が、はたして内部にあるのか外部にあるのか——その推定す

ら困難なほどに、難解をきわめたものだつた。しかし、その凄惨な顕微鏡ミクロ模様から離れた法水の眼は、期せずして検事の視線と合した。そして、暗黙のうち、あるりつぜん慄然としたものを語り合わねばならなかつた。なんとすれば、その創の形が、まさしく降矢木家の紋章の一部をつくつている、ファイレンツェ市章の二十八葉橄欖冠にほかならないからであつた。



## 二、テレーズ吾を殺せり

「どう見ても、僕にはそうとしか思えない」と検事は何度も吃りながら、熊城くましろに降矢木家の紋章を説明した後で、「何故犯人は、息の根を止めただけでは足らなかつたのだらうね。どうしてこんな、得体の判らぬ所作しぐさまでもしななければならなかつたのだらう？」

「ところがねえ支倉君はせくら」と法水のりみずは始めて莨たばこを口に銜くわえた。「それよりも僕は、いま自分の発見に愕然がくつとしてし



まったところさ。この死体は、彫り上げた数秒後に絶命しているのだよ。つまり、死後でもなく、また、服毒以前でもないのだがね」

「冗談じゃないぜ」と熊城は思わず呆れ顔になつて、「これが即死でないのなら、一つ君の説明を承うけたまわろうじゃないか」といきり立つのを、法水は駄々児を論すような調子で、

「ウン、この事件の犯人たるや、いかにも神速陰険で、兇悪きわまりない。しかし、僕の云う理由はすこぶる簡単なんだ。だいたい君が、強度の青酸シヤン中毒というも

のをあまり誇張して考えているからだよ。呼吸筋は恐らく瞬間に痲痺(ママ)してしまうだろうが、心臓が全く停止してしまふまでには、少なくとも、それから二分足らずの時間はあると見て差支えない。ところが、皮膚の表面に現われる死体现象と云うのは、心臓の機能が衰えると同時に現われるものなんだがね」そこでちよつと言葉を切つて、まじまじと相手を瞞みっめていたが、「それが判れば、僕の説に恐らく異議はないと思うね。ところで、この創きずは巧妙に表皮のみを切り割っている。それは、血清だけが滲み出ているのを見ても、明白な

事実なんだが、通例生体にされた場合だと、皮下に溢血いっけつが起つて創の両側が腫起してこなければならぬ——いかに、この創口にはその歴然としたものがあるのだ。ところが、剥そがれた割れ口を見ると、それに痂皮かひが出来ていない。まるで透明な雁皮がんびとしか思われないだろう。が、この方は明らかかな死体現象なんだよ。しかしそうなる、その二つの現象が大変な矛盾をひき起してしまつて、創がつけられた時の生理状態に、てんで説明がつかなくなつてしまふだろう。だから、その結論の持つて行き場は、爪や表皮がどういう時期

に死んでしまふものか、考えればいい訳じゃないか」

法水の精密な観察が、かえって創紋の謎を深めた感があつたので、その新しい戦慄せんりつのために、検事の声は全く均衡を失つていた。

「万事剖見を待つとしてだ。それにしても、屍光のよ  
うな超自然現象を起しただけで飽き足らずに、その上  
降矢木の烙印やきいんを押すなんて……。僕には、この清浄な  
光がひどく淫虐ザデイスティツシュ的に思えてきたよ」

「いや、犯人はけつして、見物人を慾ほしがつちやいない  
さ。君がいま感じたような、心理的な障害を要求して

いるんだ。どうして彼奴が、そんな病理的な個性なものか。それに、まったくもって創造的だよ。だがそれをハイルブロンネルに云わせると、一番淫虐的で独創的なものを、小児だと云うがね」と法水は暗く微笑んだが、「ところで熊城君、死体の発光は何時頃からだね」と事務的な質問を發した。

「最初は、卓子灯が点いていたので判らなくなつたのだ。ところが、十時頃だったが、ひととおりに死体の検案からこの一劃の調査が終つたので、スタンド 鎧扉を閉じて卓子灯を消すと……」と熊城はグビツと唾を嚙み込んで

で、「だから、家人は勿論のことだが、係官の中にも知らないものがあるという始末だよ。ところで、今まで聴取しておいた事実を、君の耳に入れておこう」と概略の顛末を語りはじめた。

「昨夜家内中である集会を催して、その席上でダンネベルグ夫人が卒倒した——それがちょうど九時だったのだ。それからこの室へやで介抱することになって、図書の掛りの久我鎮子くがしずこと給仕長の川那部易介かわなべえきすけが徹宵附添かっていたのだが、十二時頃被害者が食べた洋橙オレンジの中に、青酸加里が仕込まれてあったのだよ。現に、口腔くちの中に

残っている果肉の嚙滓かみかすからも、多量の物が発見されているし、何より不思議な事には、それが、最初口に入れた一房にあつたのだ。だから、犯人は偶然最初の一発で、的の黒星を射当てたと見るよりほかになかろうと思うね。他の果房ぶさはこのとおり残っていても、それには、薬物の痕跡がないのだよ」

「そうか、洋橙オレンジに!？」と法水は、天蓋の柱をかすかに揺ぶつて呟つぶやいた。「そうすると、もう一つ謎がふえた訳だよ。犯人には、毒物の知識が皆無だという事になるぜ」

「ところが、使用人のうちには、これという不審な者はいない。久我鎮子も易介も、ダンネベルグ夫人が自分で果物皿の中から撰んだと云っている。それに、この室は十一時半頃に鍵を下してしまつたのだし、硝子窓も鎧扉も菌のようきのこに錆がこびり付いていて、外部から侵入した形跡は勿論ないのだよ。しかし妙な事には、同じ皿の上にあつた梨の方が、夫人にとると、はるかより以上の嗜好物だそうなんだ」

「なに、鍵が？」と検事は、それと創紋との間に起つた矛盾に、愕然がくぜんとした様子だつたけれども、法水は依然



熊城から眼を離さず、突慳貪つっけんどんに云い放った。

「僕はけっして、そんな意味で云つていやしない。青酸オレンジに洋橙どうけめんという痴面どうけめんを被せているだけに、それだけ、犯人の素晴らしい素質が怖ろしくなつてくるのだ。考えても見給え。あれほど際立つた異臭や特異な苦味のある毒物を、驚くじやないか、致死量の十何倍も用いている。しかも、その仮装迷彩カムフラージュに使っているのが、そういう性能のきわめて乏しい洋橙オレンジときているんだ。ねえ、熊城君、それほど稚拙もはなはだしい手段が、どうしてこんな魔法のような効果を収めたのだろうか。

何故なぜダンネベルグ夫人は、その洋橙オレンジのみに手を伸ばし

たのだろうか。つまり、その驚くべき撞着たるやが、

毒殺者の誇りなんだ。まさに彼等にとれば、ロムバル

ストリゲス

ジア巫女の出現以来、永生不滅トータムの崇拜物トータムなんだよ」

熊城は呆気にとられたが、法水は思い返したように  
訊ねた。

「それから、絶命時刻は？」

「今朝八時の検屍で死後八時間と云うのだから、絶命時刻も、洋橙オレンジを食べた刻限じこくとピッタリ符合している。

発見は暁方の五時半で、それまで附添は二人ともに、

変事を知らなかつたのだし、また、十一時以後は誰もこの室へやに入った者がなかつたと云うのだし、家族の動静もいつさい不明だ。で、その洋橙オレンジが載っていた、果物皿と云うのがこれなんだがね」

そう云つて熊城は、寝台の下から銀製の皿を取り出した。直径が二尺近いさかずきがた盞形をしたもので、外側には露西亞ルツソビザンチン特有の生硬な線で、アイヴソウフスキーの匈奴族フン馴鹿狩トナカイの浮彫が施されていた。皿の底には、空想化された一匹の爬虫類さかだちが逆立さかだちして、頭部まえあしと前肢まえあしが台になり、刺の生えた胴体がく、の字なりに彎

曲して、後肢あとあしと尾とで皿を支えている。そして、その

くの字の反対側には、半円形の把手にぎりが附いていた。そ

の上にある梨と洋橙オレンジは全部二つに截ち割られていて、

鑑識検査の跡が残されているが、無論毒物は、それ等

の中にはなかつたものらしい。しかし、ダンネベルグ

夫人を斃たおした一つには、際立つた特徴が現われていた。

それが、他にある洋橙オレンジとは異なり、いわゆる橙だいたい色では

なくて、むしろ熔岩色ラザアとでもいいたいほどに赤味の強

い、大粒のブラッド・オレンジだった。しかも、その赭あか

黒く熟れ過ぎているところを見ると、まるでそれが、

凝固しかかった血糊のように薄気味悪く思われるのであるが、その色は妙に神経を唆るそそのみのことで、勿論推定の端緒を引き出すものではなかつた。そして、蒂へたのないところから推して、そこから泥状の青酸加里が注入されたものと推断された。

法水は果物皿から眼を離して、室内を歩きはじめた。帷幕とぼりで区劃くぎられているその一劃は、前方の室といちじモルタルるしく趣を異にしている、壁は一带に灰色の膠泥で塗られ、床には同じ色で、無地の絨毯じゆうたんが敷かれてあつて、窓は前室のよりもやや小さく、幾分上方に切られてあ

るので、内部ははるかに薄暗かった。灰色の壁と床、それに黒い帷幕とぼり——と云えば、その昔ゴードウン・クレイグ時代の舞台装置を想い出すけれども、そういう外見生動に乏しい基調色が、なおいつそうこの室を沈鬱なものにしていた。ここもやはり、前室と同様荒れるに任せていたらしく、歩くにつれて、壁の上方から層をなした埃が摺ずり落ちてくる。室内の調度は、寝台の側に大酒甕形さけがめの立卓筒キャビネットがあるのみで、その上には、芯の折れた鉛筆をつけたメモと、被害者が臥ねる時に取り外したらしい近視二十四度の鼈甲眼鏡べっこう、それに、描

き絵の絹シエード覆スタンドをつけた卓子灯とが載っていた。近視鏡もその程度では、ただ輪廓がぼつとするのみのことで、事物の識別はほとんど明瞭につくはずであるから、それには一顧する価値もなかった。法水は、画廊の両壁を觀賞してゆくような足取りで、ゆつたり歩を運んでいたが、その背後から検事が声をかけた。

「やはり法水君、奇蹟は自然のあらゆる理法の彼方にあり——かね」

「ウン、判ったのはこれだけだよ」と法水は味のない声を出した。「まるで犯人はテルみたいに、たった一矢で、

露<sup>む</sup>き出しよりも酷い青酸を、相手の腹の中へ打<sup>ぶ</sup>ち込んで  
いるだろう。つまり、その最終の結論に達するまで  
に、光と創紋を現わすものが必要だったという事だ。  
云わばあの二つと云うのは、犯行を完成させるための  
補強作用であつて、その道程に欠いてはならぬ、深遠  
な学理だとみて差支えない」

「冗談じゃない。あまり空論も度が過ぎるぜ」と熊城  
は呆れ返つて横槍を入れたが、法水は平然と奇説を続  
けた。

「だって、鍵を下した室内に侵入して来て、一、二分の



うちに彫らねばならない。そうになると、クライルじゃないがね。無理でも不思議な生理を指すより仕方があるまい。それに、疑問はまだ、後へ捻ねじれたような右手の形にも、それから、右肩にある小さな鉤裂きにもあるのだ」

「いや、そんなことはどうでもいいんだ」熊城は吐きだすように、「腹ん這いで洋橙オレンジを嘔のみ込んで、瞬間無抵抗になる——たった、それだけの話なんだよ」

「ところがねえ熊城君、アドルフ・ヘンケの古い法医学書を見ると、一人の淫売婦が、腕を身体の下にかつて

横向きになった姿勢のまま毒を仰いだのだが、瞬間の衝撃を喰うと、かえって痺れた方の腕が動いて、瓶を窓から河の中へ投げ捨てたと云う面白い例が載っている。だから一応は、最初の姿体を再現してみる必要があると思うね。それから死体の光は、アヴリノの『聖僧奇蹟集』などに……」

「なるほど、坊主なら、人殺しに関係あるだろう」と熊城は露骨に無関心を装ったが、急に神経的な手附になって、衣囊から何やら取り出そうとした。法水は振り向きもせず、背後に声を投げて、

「ところで熊城君、指紋は？」

「説明のつくものなら無数にある。それに、昨夜この空室あきしつに被害者を入れた時だが、その時寝台の掃除と、床だけに真空掃除器を使ったというからね。生憎あいにく足跡とっては何もない始末だ」

「フム、そうか」そういって法水が立ち止つたのは、突当りの壁前へきぜんだった。そこには、さしずめ常人ならば、顔あたりに相当する高さで、最近何か、額がく様のものを取り外したらしい跡が残つてい、それがきわめて生々しく印しるされてあつた。ところがそこから折り返して旧もと

の位置に戻ると、法水は卓子灯スタンドの中に何を認めたものか、不意いきなり検事を振り向いて、

「支倉君、窓を閉めてくれ給え」と云った。

検事はキョトンとしたが、それでも、彼のいうとおりにすると、法水は再び死体の妖光を浴びながら、卓子灯スタンドに点火した。そうなつて初めて検事に判つたのは、その電球が、昨今はほとんど見られない炭素球カーボンだと云う事で、恐らく急場に間に合わせた調度類が、永らく蔵しまわれていたものであろうと想像された。法水の眼はその赭あかつ茶けた光の中で、覆シールドの描く半円をしばら

く追うていたが、いま額の跡を見付けたばかりの壁から一尺ほど手前の床に、何やら印しるしをつけると、室へやは再び旧もとに戻つて、窓から乳色の外光が入つて来た。検事は窓の方へ溜めていた息をフウツと吐き出して、「いったい、何を思いついたんだ？」

「なにね、僕の説だつてその実グラグラなんだから、試しに、眼で見えなかつた人間を作り上げようとしたところさ」と法水は気きまぐ紛れめいた調子で云つたが、その語尾を掬すくい上げるような語気とともに、熊城は一枚の紙片を突き出した。

「これで、君の謬説びゆうせつが粉碎されてしまふんだ。なにも苦しんでまで、そんな架空なものを作り上げる必要はないさ。見給え。昨夜ゆうべこの室へやには、事実想像もつかない人物が忍んでいたのだ。それを洋橙オレンジを口に含んだ瞬間に知って、ダンネベルグ夫人が僕等に知らそうとしたのだよ」

その紙片の上に書かれてある文字を見て、法水はギユツと心臓を掴つかまれたような気がした。検事は、むしろ呆れたように叫んだ。

「テレーズ！　これは自働人形じゃないか」

「そうなんだよ。これにあの創紋を結びつけたなら、よもや幻覚とは云われんだろう」と熊城も低く声を慄ふるわせた。「実は、寝台の下に落ちていたんだが、それをこのメモと引合わせてみて、僕は全身が慄毛そうげ立った気がした。犯人はまさしく人形を使ったに違いないのだ」

法水は相変らず衝動的な冷笑主義シニシズムを發揮して、

「なるほど、土偶人形デモノロジイに悪魔学か——犯人は、人類の潜在批判を狙ねらっているんだ。だが、珍しく古風な書体だな。まるで、半大字形アイリツシユか波斯文字ネスキみたいだ。でも君は、

これが被害者の自署だという証明を得ているのか  
い？」

「無論だとも」熊城は肩を揺ぶって、「実は、君達が来た  
時にいたあの紙谷伸子かみたにという婦人が、僕にとると最後の  
鑑定者だったのだ。で、ダンネベルグ夫人の癖と云  
うのはこうなんだ。鉛筆の中ほどを、小指と薬指との  
間に挟んで、それを斜めにしたのを、おやゆび拇指と人差指と  
ではさ摘んで書くそうだがね。そういつた訳で、夫人の筆  
蹟はちよつと真似られんそうだよ。それに、この擦れかす  
具合が、鉛筆の折れた尖とピッタリ符合している」



検事はブルツと胴慄いして、

「怖ろしい死者の曝露ぼくろじゃないか。それでも法水君、君は？」

「ウム、どうしても人形と創紋を不可分に考えなけりゃならんのかな」と法水も浮かぬ顔で呟つぶやいた。

「この室へやがどうやら密室くさいので、出来ることなら幻覚と云いたいところさ。けれども、現実の前には、段々とその方へ引かれて行ってしまうよ。いやかえつて人形を調べてみたら、創紋の謎を解くものが、その機械装置からでも掴めるかもしれない。何にしても、

こう立て続けに、真暗な中で異妖な鬼火ばかり見せられていたのだからね。光なら、どんな微かなものでも欲しい矢先じゃないか。とにかく、家族の訊問は後にして、とりあえず人形を調べることにしよう」

それから人形のある室へやへ行くことになって、私服に鍵を取りにやると、間もなくその刑事は昂奮して戻つて来た。

「鍵が紛失しているそうです、それに薬物室のもの」

「やむを得なけりや叩き破るまでのことだ」と法水は決心の色をうか泛べて、「だが、そうなると、調べる室が二

つ出来てしまったことになる」

「薬物室もか」今度は検事が驚いたように云った。「だいたいい青酸加里なんて、小学生の昆虫採集箱の中にもあるものだけ」

法水は関かまわず立ち上つて扉ドアの方へ歩みながら、

「それがね、犯人の智能検査なんだよ。つまり、その計画の深さを計るものが、鍵の紛失した薬物室に残されているように思われるんだ」

テレーズ人形のある室へやは、大階段の後方に当る位置で、間に廊下を一つ置き、ちょうど「腑分図」の真後に

あたる、袋廊下の突当りだった。扉の前に来ると、法水は不審な顔をして、眼前の浮彫を躓めだした。

「この扉のは、ヘロデ王ベテレヘム嬰兒虐殺之図と云うのだがね。これと、死体のある室の、偃偻治療之図の二枚は、有名なオットー三世福音書の中にある挿画なんだよ。そうになると、そこに何か脈絡でもあるのかな」と小首を傾げながら、試みに扉を押ししたが、それは微動さえもしなかった。

「尻込みすることはない。こうなれば、叩き破るまでのことさ」熊城が野生的な声を出すと、法水は急に遮

り止めて、

「浮彫を見たので、急に勿体なくなつたよ。それに、響で跡を消すといかんから、下の方の板をそつと切り破ろうじゃないか」

やがて、扉の下方に空けられた四角の穴から潜り込もぐむと、法水は懐中電燈を点じた。円い光に映るものは壁面と床だけで何一つ家具らしいものさえ、なかなかに現われ出ではこない。が、そのうち右辺みぎばたからかけて室を一周し終ろうとする際に、思いがけなくも、法水のすぐ横手——扉ドアから右寄りの壁に闇が破れた。そし

て、そこからフウツと吹き出した鬼気とともに、テレーズ・シニヨレの横顔が現われたのであった。面の恐怖と云えば誰しも経験することだが、たとえば、白昼でも古い社の額堂を訪れて、破風はふの格子扉に掲げている能面を眺めていると、まるで、全身を逆さに撫で上げられるような不気味な感覚に襲われるものだ。まして、この事件に妖異な雰囲かも気を醸し出した当のテレーズが、荒れ煤すすけた室の暗闇の中から、暈ぼうつと浮き出たのであるから、その瞬間、三人がハツとして息を窒つめたのも無理ではなかった。窓に微かな閃光きらが燦め

いて、よろいど鎧扉の輪廓が明瞭に浮び上ると、遠く地動のよ  
うな雷鳴が、おどろと這い寄つて来る。そうした凄愴せいそう  
な空気の中で、法水は凝然と眼を見据え、眼前の妖し  
い人型をひとがた瞷めはじめた——ああ、この死物しぶつの人形が森  
閑とした夜半の廊下を。

スイッチ開閉器の所在が判つて、室内が明るくなつた。テ  
レーズの人形は身長五尺五、六寸ばかりの蠟着せ人形  
で、トレリス格襜型の層襷そうへきを附けた青藍色のスカートに、これ  
も同じ色の上衣フロックを付けていた。像面からうける感じは、  
愛くるしいと云うよりも、むしろ異端的な美しさだつ

た。半月形をしたルーベンス眉や、唇の両端が釣り上つたいいわゆる覆舟口ふくしゅうこうなどと云うのは、元来淫らな形とされている。けれども、妙にこの像面では鼻の円みと調和していて、それが、蕩け去るとろような処女の憧憬しょうけいを現わしていた。そして、精緻な輪廓に包まれ、捲毛の金髪を垂れているのが、トレヴィーユ荘の佳人テレーズ・シニヨレの精確な複製だったのである。光をうけた方の面は、今にも血管が透き通つてでも見えそうな、いかにも生々しい輝きであつたが、巨人のような体たい軀との不調和はどうであらうか。安定を保つため



に、肩から下が恐ろしく大きく作られていて、足蹠あしひらのごときは、普通人の約三倍もあるうと思われる広さだった。法水は考証気味な視線を休めずに、

「まるで騎士ゴ埴輪レームか鉄の処女くろがねとしか思われんね、これがコペツキーの作品だと云うそうだが、さあプラグと云うよりも、体軀の線は、バーデンバーデンのハンズヴルスト（独逸の操人形）に近いね。この簡素な線には、他の人形には求められない無量の神秘がある。算哲博士が本格的な人形師に頼まないで、これを大きなマリオネット操人形に作ったのは、いかにもあの人らしい趣味だと

「人形の観賞は、いずれゆつくりやつてもらふことにしてだ」と熊城は苦々しげに顔を顰めたが、「それより法水君、鍵が内側から掛っているんだぜ」

「ウン驚くべきじゃないか。しかし、まさかに犯人の意志で、この人形が遠感的テレパシツクに動いたという訳じゃある

まい」鍵穴に突き込まれている飾付の鍵を見て、検事は慄然りっぜんとしたらしかったが、足許から始めて、床の足型を追いはじめた。跡方もなく入り乱れている、扉口から正面の窓際にかけての床には、大きな扁平な足型

で、二回往復した四条よすじの跡が印されていて、それ以外には、扉口とぐちから現在人形のいる場所に続いてひとすじいる一条のみだった。しかし、何より驚かされたのは、肝腎の人間のものがないということだった。検事が頓狂な声をあげると、それを、法水は皮肉に嗤わらい返して、「どうも頼りないね。最初犯人が人形の歩幅どおりに歩いて、その上を後で人形に踏ませる。そうしたら、自分の足跡を消してしまうことが出来るじゃないか。そして、それから以後の出入は、その足型の上を踏んで歩くのだ。しかし、昨夜ゆうべこの人形のいた最初の位置

が、もし扉口でなかったとしたら、昨夜はこの室へやから、  
一歩も外へ出なかつたと云うことが出来るのだよ」

「そんな莫迦ぼか気かた証跡げが」熊城は癩癩かんしやくを抑えるような  
声を出して、「いつたいてどこで足跡の前後が証明される  
ね？」

「それが、洪積期の減算ひきざんなんだよ」と法水もやり返して、

「と云うのは、最初の位置が扉口でないとすると、四条  
の足跡に、一貫した説明がつかなくなってしまうから  
だ。つまり、扉口から窓際に向っている二条にじょうのうちの  
一つが、一番最後に剩あまつてしまうのだよ。で仮りに、

最初、人形が窓際にあつたとして、まず犯人の足跡を踏みながら室を出て行き、そして再び、旧もとの位置まで戻つたと仮定しよう。そうすると、続いてもう一度、今度は扉ドアに、鍵を下すために歩かなければならない。ところが見たとおりに、それが扉ドアの前で、現在ある位置の方へ曲つているのだから、残つた一条が全然余計なものになつてしまう。だから、往復の一回を、犯人の足跡を消すためだとすると、そこからどうして、窓の方へもう一度戻さなければならなかつたのだろうか。窓際に置かなければ、何故人形に鍵を下させることが

出来なかつたのだらう」

「人形が鍵をかける!?」 検事は呆れて叫んだ。

「それ以外に誰がするもんか」と知らぬ間に、法水は熱を帯びた口調になつていて、「しかし、その方法となると、相変らず新しい趣向アイデアではない。十年一日のごとくに、犯人は糸を使つてゐるんだよ。ところで、僕の考へてゐることを実験してみるかな」

そして、鍵がまず扉ドアの内側に突つ込まれた。けれども、彼が一句日ほど以前、聖セントアレキセイ寺院のジナイーダの室において贏かち得たところの成功が、はたし

て今回も、繰り返されるであろうかどうか——それがすこぶる危ぶまれた。と云うのは、その古風な柄の長い鍵は、把手ノツブから遙かに突出して、前回の技巧を再現することがほとんど望まれないからであつた。二人がみまも見成つているうちに、法水は長い糸を用意させて、それを外側から鍵孔かぎあなを潜くぐらせ、最初鍵の輪形の左側を巻いてから、続いて下から掬すくつて右側を絡め、今度は上の方から輪形の左の根元に引つ掛けて、余りを検事の胴めぐに繞らし、その先を再び鍵穴を通して廊下側に垂らした。そうしてから、

「まず支倉君を人形に仮定して、それが窓際から歩いて来たものとしてしよう。しかし、それ以前に犯人は、最初人形を置く位置について、正確な測定を遂げねばならなかった。何にしても、扉の闕しきいの際きわで、左足が停まるように定める必要があつたのだ。何故なら、左足がその位置で停まると、続いて右足が動き出しても、それが途中で闕つかに逼つえてしまうだろう。だから、後半分の余力が、その足を軸に廻転を起して、人形の左足がしだいに後退あとすざりして行く。そして、完全に横向きになると、今度は扉と平行に進んで行くからだよ」



それから、熊城には扉の外で二本の糸を引かせ、検事を壁の人形に向けて歩かせた。そうしているうちに、扉ドアの前を過ぎて鍵が後方になると、法水はその方の糸をグイと熊城に引かせた。すると、検事の身体が張りきった糸を押して行くので、輪形の右側が引かれて、みるみる鍵が廻転してゆく。そして、掛金が下りてしまふと同時に、糸は鍵かたわらの側でプツリと切れてしまったのだ。やがて、熊城は二本の糸を手にして現われたが、彼はせつなそうな溜息を吐いて、

「法水君、君はなんとという不思議な男だろう」

「けれども、はたして人形がこの室から出たかどうか、それを明白に証明するものはない。あの一回余計の足跡だつても、まだまだ僕の考察だけでは足りないと思うよ」と法水は、最後の駄目を押して、それから、衣裳の背後にあるホックを外して観音開きを開き、体内の機械装置を覗き込んだ。それは、数十個の時計を集めたほどに精巧をきわめたものだった。幾つとなく大小様々な歯車が並び重なっている間に、数段にも自動的に作用する複雑な方舵機があり、色々な関節を動かす細い真鍮棒が後光のような放射線を作っていて、その

間に、弾条ぜんまいを巻く突起と制動機とが見えた。続いて熊城は、人形の全身を嗅かぎ廻かったり、拡大鏡で指紋や指型を探しはじめたが、何一つ彼の神経に触れたものはなかつたらしい。法水はそれが済むのを待って、「とにかく、人形の性能は多寡たかの知れたものだよ。歩き、停まり、手を振り、物を握って離す——それだけの事だ。仮令たとえこの室から出たにしても、あの創紋を彫るなどとはとんでもない妄想さ。そろそろダンネベルグ夫人の筆跡も幻覚に近くなつたかな」と思う壺らしい結論を云つたけれども、しかし彼の心中には、薄れ

行つた人形の影に代つて、とうてい拭い去ることの出来ない疑問が残されてしまった。法水は続いて、

「だが熊城君、犯人は何故、人形が鍵を下したように見せなければならなかつたのだらうね。もつとも、事件にグイグイ神秘を重ねてゆこうとしたのか、それとも、自分の優越を誇りたいためでもあつたかもしれぬ。

しかし、人形の神秘を強調するのだとしたら、かえつてそんな小細工をやるよりも、いつそ扉ドアを開け放しにして、人形の指に洋橙オレンジの汁でも付けておいた方が効果的じゃないか。ああ、犯人はどうして僕に、糸と人形

の技巧トリックを土産トリツクに置いて行つたのだらう？」としばらく懷疑もたに悶えるような表情をしていたが、「とにかく、人形を動かして見ることにしよう」と云つて眼の光を消した。

やがて、人形は非常に緩慢な速度で、特有の機械的な無器用な恰好で歩き出した。ところが、そのコトリと踏む一歩ごとに、リリリーン、リリリーンと、囁ささやくような美しい顫音せんおんが響いてきたのである。それはまさしく金属線の震動音で、人形のどこかにそういう装置があつて、それが体腔の空洞で共鳴されたものに違い

なかつた。こうして、法水の推理によつて、人形を裁断する機微が紙一枚の際きわの間に残されたけれども、今聴いた音響こそは、まさしくそれを左右する鍵のように思われた。この重大な発見を最後に、三人は人形の室へやを出て行つたのであつた。

最初は、続いて階下の薬物室を調べるような法水の口吻くちぶりだったが、彼はにわかにより予定を変えて、古式具足の列ならんでいる拱廊そでろうかの中に入つて行つた。そして、円廊とぎわに開かれています扉際とぎわに立ち、じつと前方に瞳を凝らしはじめた。円廊の対岸には、二つの驚くほど澆神とくしん的な

石灰面が壁面を占めていた。右側のは処女受胎の図で、  
いかにも貧血的な相をした聖母が左端に立ち、右方に  
は旧約聖書の聖人達が集つていて、それがみな掌で両  
眼を覆い、その間に立つたエホバが、性慾的な眼でじ  
いつと聖母を瞷<sup>マリヤ</sup>めて<sup>みつ</sup>いる。左側の「カルバリ山の翌朝」  
とでも云いたい画因のものには、右端に死後強直を克  
明な線で現わした十字架の耶蘇<sup>ヤソ</sup>があり、それに向つて、  
怯懦<sup>きょうだ</sup>な卑屈な恰好をした使徒達が、怖る怖る近寄つて  
行く光景が描かれていた。法水は取り出した蓑<sup>たばし</sup>を、思  
い直したように函<sup>ケース</sup>の中に戻して、途方もない質問を発

した。

「支倉君、君はボーデの法則を知っているかい——海王星以外の惑星の距離を、簡単な倍数公式で現わしてゆくのを。もし知っているのなら、それを、この拱廊そでろうかでどういう具合に使うね」

「ボーデの法則!？」 検事は奇問に驚いて問い返したが、重なる法水の不可解な言動に、熊城と苦々しい視線を合わせて、「それでは、あの二つの画に君の空論を批判してもらうんだね。どうだい、あの辛辣しんらつな聖書観は。たぶん、あんな絵が好きらしいフオイエルバッツハとい



う男は、君みたいな飾弁家じゃなからうと思うんだ」

しかし、法水はかえって検事の言にほほえみ微笑を洩らして、

それから拱廊を出て死体のある室へやに戻ると、そこには驚くべき報告が待ち構えていた。給仕長川那部易介がいつの間にか姿を消しているという事だった。昨夜凶書掛りの久我鎮子とともにダンネベルグ夫人に附添つていて、熊城の疑惑が一番深かったのであるが、それだけに、易介の失踪を知ると、彼はさも満足気に両手を揉みながら、

「すると、十時半に僕の訊問が終つたのだから、それか

ら鑑識課員が掌紋を採りに行ったと云う——現在一時までの間だな、そうそう法水君、これが易介を模本モデルにしたというそうだが」と、扉の脇にある二人像を指差して、「この事は、僕には既とうから判つていたのだよ。あの侏儒こびとの傴僂せむしが、この事件でどういいう役を勤めていたか——だ。だが、なんとという莫迦ぼかな奴やつだろう。彼奴あいつは、自分の見世物的な特徴に気がつかないのだ」

法水はその間、軽蔑したように相手を見ていたが、「そうなるかねえ」と一言反対の見解を仄ほのめかしたただけで、像の方に歩いて行つた。そして、立法者スクライブの跣像

と背中を合わせている。僂僂の前に立つと、

「オヤオヤ、この僂僂は療なおつているんだぜ。不思議な暗合じゃないか。扉の浮彫では耶蘇に治療をうけているのが、内部なかに入ると、すっかり全快している。そしてあの男は、もうたぶん唾おしにちがいないのだ」と最後の一言をきわめて強い語気で云ったが、にわかには悪寒を覚えたような顔付になって、物腰に神経的なものが現われてきた。

しかし、その像には依然として変りはなく、扁平な大きな頭を持った僂せむしが、細く下った眼尻まぶさに狡ずるそうな

笑を湛えているにすぎなかつた。その間、何やら認めしたたてていた検事は、法水を指招さしいて、卓上の紙片を示した。それには次のような箇条書で、検事の質問が記されてあつた。

一、法水は大階段の上で、常態ではとうてい聞えぬ音響を召使が聴いたのを知つたと云う——その

結論は？

二、法水は拱廊そでろうかで何を見たのであるか？

三、法水が卓子灯スタンドを点けて、床を計つたのは？

四、法水はテレーズ人形の室の鍵に、何故逆説的な

解釈をしようとして、苦しんでいるのであるか？

五、法水は何故に家族の訊問を急がないのか？

読み終ると、法水は莞爾にこりとして、一・二・五の下に  
ダッシュ

——を引いて解答と書き、もし方に一つの幸い吾にあ  
らば、犯人を指摘する人物を発見するやも知れず（第

二あるいは第三の事件）——と続いて認めしたためた。検事が

吃驚びっくりして顔を上げると、法水はさらに第六の質問と標

題を打って、次の一行を書き加えた。——甲冑武者は

いかなる目的の下に、階段の裾を離れねばならなかつ

たのだろうか？

「それは、君がもう」と検事は眼を瞠みはつて反問したが、その時扉ドアが静かに開いて、最初呼ばれた図書掛りの久我鎮子が入つて来た。

## 三、屍光故なくしては

久我鎮子の年齢は、五十を過ぎて二つ三つと思われ  
たが、かつて見たことのない典雅な風貌を具えた婦人  
だった。まるで鑿のみでも仕上げたように、繊細をきわ  
めた顔面の諸線は、容易に求められない儀容と云うの  
ほかはなかった。それが時折引き締ると、そこから、  
この老婦人の、動じない鉄のような意志が現われて、  
隠遁いんとん的な静かな影の中から、焰ほのおのようなものがメラメ

ラと立ち上るような思いがするのだった。法水は何より先に、この婦人の精神的な深さと、総身から滲み出てくる、物々しいまでの圧力に打たれざるを得なかつた。

「あなた貴方は、この室へやにどうして調度が少ないのか、お訊きになりたいのでしよう」鎮子が最初発した言葉が、こうであつた。

「今まで、あきしつ空室あきしつだつたのでは」と検事が口を挟むと、「そう申すよりも、開けずの間と呼びました方が」と鎮子は無遠慮な訂正をして、帯の間から取り出した細巻



に火を点じた。「実は、お聴き及びでもございましょうが、あの変死事件——それが三度とも続けてこの室に起つたからでございませう。ですから、算哲様の自殺を最後として、この室を永久に閉じてしまうことになりました。この彫像と寝台だけは、それ以前からある調度だと申されておりますが」

「開けずの間に」法水は複雑な表情を泛<sup>うか</sup>べて、「その開けずの間が、昨夜は、どうして開かれたのです？」

「ダンネベルグ夫人のお命令<sup>いいつけ</sup>でした。あの方の怯<sup>おび</sup>えきつたお心は、昨夜最後の避難所をここへ求めずには

いられなかつたのです」と凄気の罩もつた言葉を冒頭に  
にして、鎮子はまず、館の中へ磅礴と漲つてきた異様  
な雰囲気を語りはじめた。

「算哲様がお歿なくなりになつてから、御家族の誰もか  
もが、落着きを失つてまいりました。それまでは口争  
い一つしたことのない四人の外人の方も、しだいに言  
葉数が少なくなつて、お互いに警戒するような素振そぶり  
が日増しに募つてゆきました。そして、今月に入ると、  
誰方どなたも滅多にお室へやから出ないようになり、ことにダン  
ネベルグ様の御様子は、ほとんど狂的としか思われま

せん。御信頼なきつてゐる私か易介のほかには、誰にも食事さえ運ばせなくなりました」

「その恐怖の原因に、貴女は何か解釈がおつきですか。個人的な暗闘ならばともかく、あの四人の方々に、遺産という問題はないはずですよ」

「原因は判らなくても、あの方々が、御自身の生命に危険を感じておられたことだけは確かでございますよ  
う」

「その空気が、今月に入って酷ひどくなつたと云うのは」

「マア、私がスウェーデンボルグかジョン・ウエスレイ

(メソジスト教会の創立者)でもあるのですしたら」と鎮子は皮肉に云つて、

「ダンネベルグ様は、そういう悪気あつきのようなものから、なんとかかして遁のがれたいと、どれほど心をお砕きになつたか判りません。そして、その結果があの方の御指導で、昨夜の神意審問の会となつて現われたのでございます」

「神意審問とは？」 検事には鎮子の黒ずくめの和装が、ぐいと迫つたように感ぜられた。

「算哲様は、異様なものを残して置きました。マツク

レンブルグ魔法の一つとかで、絞死体の手首を酢漬けにしたものを乾燥した——ハンド・オブ・グロリー栄光の手の一本一本の指の上に、これも絞死罪人の脂肪から作った、死体蠟燭を立てるのです。そして、それに火を点じますと、邪心のある者は身体が竦すくんで心気を失ってしまふとか申すそうでございます。で、その会が始まったのは、昨夜の正九時。列席者は当主旗太郎様のほかに四人の方々と、それに、私と紙谷伸子さんとでございます。もつとも、押鐘おしがねの奥様おし（津多子つたこ）がしばらく御逗留でしたけれども、昨日は早朝お帰りになりましたので」

「そして、その光は誰を射抜きましたか」

「それが、当の御自身ダンネベルグ様でございました」と鎮子は、低く声を落してふる慄わせた。「あのまたとない光は、昼の光でもなければ夜の光でもございません。ジイジイッと喘鳴ぜいめいのようなかすれた音を立てて燃えはじめると、拡がってゆく焰の中で、薄気味悪い蒼鉛色をしたものがメラメラと蠢うごめきはじめるのです。それが、一つ二つと点ともされてゆくうちに、私達はまったく周囲の識別を失ってしまい、スウツと宙へ浮き上って行くような気持になりました。ところが、全部を点し終つ

た時に——あの窒息せんばかりの息苦しい瞬間でした。その時ダンネベルグ様は物凄い形相で前方を睨にらんで、なんとという怖ろしい言葉を叫んだことでしょう。あの方の眼に疑いもなく映つたものがございました」

「何がですか？」

「ああ算哲——と叫んだのです。と思うと、バタリとその場へ」

「なに、算哲ですって!?!」と法水は、一度は蒼あおくなつたけれども、「だが、その諷刺ザチーレはあまりに劇的ドラマチックですね。他ほかの六人の中から邪悪の存在を発見しようとして、か

ハンド・オブ・グローリー

えつて自分自身が倒されるなんて。とにかく栄光の手を、私の手でもう一度点ともしてみましよう。

そうしたら、何が算哲博士を……」と彼の本領に返つて冷たく云い放つた。

「そうすれば、その六人の者が、犬のごとく己れの吐きたるものに帰り来る——とでもお考えなのですか」と鎮子はペテロの言ことばを藉かりて、痛烈に酬い返した。そして、

「でも、私が徒いたずらな神靈陶醉者でないということは、今に段々とお判りになりました。ところで、あの方は



ほどなく意識を回復なさいましたけれども、血の気の失せた顔に滝のような汗を流して——とうとうやつて来た。ああ、今夜こそは——と絶望的に身悶えしながら、声を慄ふるわせて申されるのです。そして、私と易介を附添いにしてこの室に運んでくれと仰おっしゃ言いました。誰も勝手を知らない室でなければ——という、目前に迫った怖ろしいものを何とかして避けたい御心持が、私にはよく読み取ることが出来たのです。それが、かれこれ十時近くでしたろうが、はたしてその夜のうちに、あの方の恐怖が実現されたのでございます」

「しかし、何が算哲と叫ばせたものでしょうな」と法水は再び疑念を繰り返してから、「実は、夫人が断末魔にテレーズと書いたメモが、寝台の下に落ちていたのですよ。ですから、幻覚を起すような生理か、何か精神に異常らしいところでも……。時に、貴女はヴルフエンをお読みになったことがありますか」

その時、鎮子の眼に不思議な輝きが現われて、

「さよう、五十歳変質説もこの際確かに一説でしよう。

それに、外見では判らない癩癩てんかん発作がありますからね。けれども、あの時は冴え切ったほどに正確でございま

した」とキツパリ云い切つてから、「それから、あの方は十一時頃までお寝みになりましたが、お目醒めになると咽喉のどが乾くと仰言おっしゃつたので、そのときあの果物皿を、易介が広間サロンから持つてまいつたのです」と云つて熊城の眼が急性せわしく動いたのを悟ると、

「ああ、貴方は相変らずの煩瑣派スゴラなんですね。その時あの洋橙オレンジがあつたかどうか、お訊ねになりたいのでしよう。けれども、人間の記憶なんて、そうそう貴方がたに便利なものではございませんわ。第一、昨夜は眠らなかつたとは思つていますけれども、その側から、

仮睡うたたねぐらいはしたぞと囁ささやいているものがあるのです」

「なるほど、これも同じことですよ。館中の人達がそろいもそろって、昨夜は珍しく熟睡したと云っているそうですからね」とさすがに法水も苦笑して、「ところで十一時というと、その時誰か来たそうですが」

「ハア、旗太郎様と伸子さんが、御様子を見にお出でになりました。ところが、ダンネベルグ様は、果物は後にして何か飲物が欲しいと仰おっしゃ言るので、易介がレモナーデを持ってまいりました。すると、あの方は御要心深くも、それに毒味をお命じになったのです」

「ハハア、恐ろしい神経ですね。では、誰が？」

「伸子さんでした。ダンネベルグ様もそれを見て御安心になったらしく、三度もグラス盃をお換えになったほどでございます。それから、御寝おやすみになったらしいので、旗太郎様が寢室の壁にあるテレーズの額をはずして、伸子さんと二人でお持ち帰りになりました。いいえ、テレーズはこの館では不吉な悪霊のように思われていて、ことにダンネベルグ様が大のお嫌いなのでございますから、旗太郎様がそれに気付かれたというのは、非常に賢い思い遣りやと申してよろしいのです」

「だが、寢室にはどこぞと云つて隠れ場所はないので  
すから、その額に人形との関係はないでしょう」と検  
事が横合から口を挟んで「それよりも、その飲み残り  
は？」

「既に洗つてしまつたでしょう。ですが、そういう御  
質問をなさると、ヘルマン（十九世紀の毒物学者）が嗤わらいます  
わ」鎮子は露骨に嘲弄ちやうろうろの色を泛うかべた。

「もし、それでいけなければ、青酸を零ゼロにしてしまつ中  
和剤の名を伺いませうか。砂糖や漆喰しっくいでは、単寧タンニンで  
沈降する塩基物アルカロイドを、茶といつしよに飲むような訳には

まいりませんわ。それから十二時になると、ダンネベ  
ルグ様は、扉ドアに鍵をかけさせて、その鍵を枕の下に入  
れてから、果物をお命じになり、あの洋橙オレンジをお取りに  
なりました。洋橙オレンジを取る時も何とも仰言おっしゃいませず、そ  
の後は音も聞えず御熟睡のようなので、私達は衝立ついたての  
蔭に長椅子を置いて、その上で横になつておりまし  
た」

「では、その前後に微かな鈴のような音が」と訊ねて、  
鎮子の否定に遇うと、検事は莩たばこを抛り出して呟つぶやいた。  
「すると、額はないのだし、やはり夫人はテレーズの幻

覚を見たのかな。そうして完全な密室になつてしまふと、創紋との間に大変な矛盾が起つてしまふぜ」

「そうだ、支倉君」と法水は静かに云つた。「僕はより以上微妙な矛盾を発見しているよ。先刻さつき人形の室で組み立てたものが、この室に戻つて来ると、突然いきなり逆転してしまつたのだ。この室は開けずの間だつたと云うけれども、その実、永い間絶えず出入りしていたものがあつたのだよ。その歴然とした形跡が残つているのだ」

「冗談じゃない」熊城は吃驚びっくりして叫んだ。「鍵穴には永



年の錆がこびり付いていて、最初開く時に、鍵の孔が刺さらなかつたとか云うぜ。それに、人形の室と違つて、岩乗な弾条ぜんまいで作用する落し金なんだから、どう考えても、糸で操れそうもないし、無論床口ゆかぐちにも陰扉かくしどのないという事は、既に反響測定器とうで確かめているんだ」

「それだから君は、僕が先刻さつき僣せむしが療なおつていると云つたら、嗤わらつたのだよ。自然がどうして、人間の眼に止まる所になんぞ、跡を残して置くもんか」と一同を像の前に連れて行き、「だいたい幼年期からの僣せむしには、

上部の肋骨が凸凹になつていて数珠玉じゆずだまの形をしているものだが、それがこの像のどこに見られるだろう。だが、試しに、この厚い埃を払つて見給え」

そして、埃の層が雪崩なだれのように摺ずり落ちた時だった。噎むつとなつて鼻口を覆いながらも瞠みひらいた一同の眼が、明らかにそれを、像の第一肋骨の上で認めたのであつた。

「そうすると数珠玉の上の出張つた埃を、平ならに均ならしたものがなければならぬ。けれども、どんなに精巧な器械を使ったところで、人間の手ではどうして出来る

ものじゃない。自然の細刻だよ。風や水が何万年か経つて岩石に巨人像を刻み込むように、この像にも鎖されていた三年のうちに、せむし 偻を療してしまつたものがあつたのだ。この室にへや 絶えず忍び入っていた人物は、いつもこの前の台の上に手燭を置いていたのだよ。しかし、その跡なんぞは、どうにかごま 誤魔かしてしまふにしても、その時から、一つの物テルテールシムボル云う象徴が作られていった。焰の揺ぎから起る微妙な気動が、一番不安定な位置にある数珠玉の埃を、ほんの微かずつ落していったのだよ。ねえ支倉君、じいっと耳を澄ましてい

ると、なんだか茶立蟲のような、美しい鑿たがねの音が聞えてくるようじゃないか。ときに、こういうヴェルレーヌの詩が……」

「なるほど」と検事は慌あわてて遮つて、「けれども、その二年の歳月が、昨夜一夜を証明するものとは云われまい」

ときつそくに法水は、熊城を振り向いて、「たぶん君は、コプト織の下を調べなかつたろう」

「だいたい、何がそんな下に？」熊城は眼を丸まるくして叫んだ。

「ところが、デッドポイント死点と云えるものは、けっして網膜の上や、音響学ばかりにじやないからね。フリーマンは織目の隙から、特殊な貝殻粉を潜り込ませている」と法水が静かに敷物を巻いてゆくと、その床には垂直からは見えないけれども、モザイク切嵌の車輪模様の数がふえるにつれて、微かに異様な跡が現われてきた。その色大理石とはぜのき櫛木の縞目の上に残されているものは、まさしく水で印した跡だった。全体が長さ二尺ばかりの小判形で、ぼうつとした塊状であるが、仔細に見ると、周囲は無数の点で囲まれていて、その中に、様々な形を

した線や点が群集していた。そして、それが、足跡の  
ような形で、交互に帷幕とぼりの方へ向い、先になるに従い  
薄らいでゆく。

「どうも原型を回復することは困難らしいね。テレー  
ズの足だってこんなに大きなものじゃない」と熊城は  
すっかり眩惑されてしまったが、

「要するに、陰画を見ればいいのさ」と法水はアツサリ  
云い切った。「コプト織は床に密着しているものでは  
ないし、それに櫛木はぜのきには、パルミチン酸を多量に含ん  
でいるので、弾水性があるからだよ。表面から裏側に

滲み込んだ水が、繊毛から滴り落ちて、その下が櫛木はぜのきだと、水が水滴になって跳ね飛んでしまう。そして、その反動で、繊毛が順次に位置を変えてゆくのだから、何度か滴り落ちるうちには、終いに櫛木はぜのきから大理石の方へ移ってしまふだろう。だから、大理石の上にある中心から一番遠い線を、逆に辿って行って、それが櫛木にかかった点を連ねたものが、ほぼ原型の線に等しいと云う訳さ。つまり、水滴を洋琴ピアノの鍵キーにして、毛が輪旋曲ロンドを踊ったのだよ」

「なるほど」と検事は頷うなずいたが、「だが、この水はいった

「い何だろうか？」

「それが、昨夜は一滴も」と鎮子が云うと、それを、法水は面白そうに笑つて、

「いや、それが紀長谷雄卿きのほせおの故事なのさ。鬼の娘が水になつて消えてしまつたつて」

ところが、法水の諧謔は、けつしてその場限りの戯言ぎげんではなかつた。そうして作られた原型を、熊城がテレーズ人形の足型と、歩幅とに对照してみると、そこに驚くべき一致が現われていたのである。幾度か推定の中で、奇体な明滅を繰り返しながらも、得態の知



れない水を踏んで現われた人形の存在は、こうなると  
厳然たる事実と云うのほかにない。そして、鉄壁のよ  
うな扉ドアとあの美しい顫動音せんどうおんとの間に、より大きな矛盾  
が横たえられてしまったのであつた。こうして、濛々もうもう  
たる苒たぼこの煙と謎の続出とで、それでなくても、この緊  
迫しきつた空氣に検事はいい加減上気してしまつたら  
しく、窓を明け放つて戻つて来ると、法水は流れ出る  
白い煙を眺めながら、再び座についた。

「ところで久我さん、過去の三事件にはこの際論及し  
ないにしてもです。いつたいどうしてこの室へやが、かよ

うな寓意的なもので充ちているのでしよう。あの  
スクライプ立法者の像なども、明白に迷宮の暗示ではありません  
 か。あれは、たしかマリエツトが、ネクロポリス埋葬地にある迷宮  
ラピリンスの入口で発見したのですからね」

「その迷宮は、たぶんこれから起る事件の暗示ですわ」と鎮子は静かに云った。「恐らく最後の一人までも殺されてしまおうでしょう」

法水は驚いて、しばらく相手の顔を瞞みっめていたが、「いや、少なくとも三つの事件までは……」と鎮子の言ことばを譫妄うわごとのような調子で云い直してから、「そうすると久

我さん、貴女あなたはまだ、昨夜の神意審問の記憶に酔つて

いるのですね」

「あれは一つの証詞あかしにすぎません。私には既とうから、この事件の起ることが予知されていたのです。云い当ててみましょうか。死体はたぶん浄らかな栄光に包まれているはずですよ」

二人の奇問奇答に茫然ぼうぜんとしていた矢先だったので、検事と熊城にとると、それがまさに青天の霹靂へきれきだった。誰一人知るはずのないあの奇蹟を、この老婦人のみはどうして知っているのであろう。鎮子は続いて云った。

が、それは、法水に対する剣つるぎのような試問だった。

「ところで、死体から栄光を放った例を御存じでしょうか」「僧正ウォーターとアレツオ、弁証派アポロジストのマキシムス、アラゴニアの聖セントラケル……もう四人ほどあつたと思います。しかし、それ等は要するに、奇蹟売買人の悪業にすぎないことでしょう」と法水も冷たく云い返した。

「それでは、せんめい闡明なさるほどの御解釈はないのですね。

それから、一八七二年十二月蘇古蘭スコットランドインヴァネスの牧師屍光事件は？」

(註)(西区アシリアム医事新誌)。ウォルカツト牧師は妻アビゲイルと友人ステイヴンを伴い、ステイヴン所有煉瓦工場の附近なる氷蝕湖カトリンに遊ぶ。しかるに、ステイヴンはその三日目に姿を消し、翌年一月十一日夜月明に乗じて湖上に赴きし牧師夫妻は、ついにその夜は帰らず、夜半四、五名の村民が、雨中月没後の湖上遙か栄光に輝ける牧師の死体を発見せるも、畏怖して薄明を待てり。牧師

は他殺にて、致命傷は左側より頭蓋腔中に入る銃創なるも、銃器は発見されず、死体は水面の窪みの中にありて、その後は栄光の事なかりしも、妻はその夜限り失踪して、ついにステイヴンとともに踪跡を失いたり。

法水は鎮子の嘲侮ちちようぶに、やや語気を荒らげて答えた。

「あれはことう解釈しております——牧師は自殺で他の二人は牧師に殺されたのだと。で、それを順序どおり述べますと、最初牧師はステイヴンを殺して、その屍

骸を温度の高い休業中の煉瓦炉の中に入れて腐敗を促進させたのです。そして、その間に細孔を無数に穿つた軽量の船形棺を作つて、その中に十分腐敗を見定めてから死体を収め、それに長い紐で錘おもりを付けて湖底に沈めました。無論数日ならずして腹中に腐敗瓦斯ガスが膨満するとともに、その船形棺は浮き上るものとみなければなりません。そこで牧師は、あの夜、錘の位置から場所を計つて氷を砕き、水面に浮んでいる棺の細孔から死体の腹部を刺して瓦斯ガスを発散させ、それに火を点じました。御承知のとおり、腐敗瓦斯には沼気メタンのよ

うな熱の稀薄な可燃性のものが多量にあるのですから、その燐光が、月光で穴の縁に作られている陰影を消し、滑走中の妻を墜し込んだのです。恐らく水中では、頭上の船形棺をとり退けようと躓もがき苦しんだでしょうが、ついに力尽きて妻は湖底深く沈んで行きました。そうして牧師は、自分の顛顛こめかみを射った拳銃を棺の上に落して、その上に自分も倒れたのですから、その燐光に包まれた死体を、村民達が栄光と誤信したのも無理ではありません。そのうち、瓦斯の減量につれて浮揚性を失った船形棺は、拳銃を載せたまま湖底に横たわって



いる妻アビゲイルの死体の上に沈んでいったのですが、一方牧師の身体は、四肢が氷壁に支えられてそのまま氷上に残ってしまい、やがて雨中の水面には氷が張り詰められてゆきました。恐らく動機は妻とステイヴンとの密通でしようが、愛人の死体で穴に蓋をしてしまふなんて、なんとという悪魔的な復讐でしよう。しかしダンネベルグ夫人のは、そういった蕪雑な目撃現象ではありません」

聴き終ると、鎮子は微かな驚異の色を泛べたが、別に顔色も変えず、懷中から二枚に折った巻紙形の上質

紙を取り出した。

「御覧下さいまし。算哲博士のお描きになったこれが、黒死館の邪霊なのでございます。栄光は故なくして放たれたものではございません」

それには、折った右側の方に、一艘の埃エジプト及船が描かれ、左側には、六つの劃のどのなかにも、四角の光背をつけた博士自身が立っていて、側かたわらにある異様な死体を眺めている。そして、その下にグレーテ・ダンネベルグ夫人から易介までの六人の名が記されていて、裏面には、怖ろしい殺人方法を予言した次の章句が書か

れてあつた。(図表参照)



グレーテは栄光に輝きて殺さるべし。

オットカールは吊されて殺さるべし。

ガリバルダは逆さになりて殺さるべし。

オリガは眼を覆われて殺さるべし。

旗太郎は宙に浮びて殺さるべし。

易介は挟まれて殺さるべし。

「まったく怖ろしい黙示です」とさすがの法水も声を  
慄ふるわせて、「四角の光背は、確か生存者の象徴シムボルでしたね。

そして、その船形エジプトのものは、古代埃及人が死後生活の

中で夢想している、不思議な死者の船だと思えます

が」と云うと、鎮子は沈痛な顔をして頷いた。

「さようでございます。一人の水夫かこもなく蓮湖れんこの中に浮んでいて、死者がそれに乗ると、その命ずる意志のままに、種々いろいろな舟の機具が独りでに動いて行くというのです。そうして、四角の光背と目前の死者との関係を、どういう意味でお考えになりますか？　つまり、博士は永遠にこの館の中で生きています。そして、その意志によって独りでに動いて行く死者の船というのが、あのテレーズの人形なのでございます」



## 第二篇

### ファウストの呪文





一、Undinus sich winden (ウンディヌス ジツヒ ヴァインデン ウンディヌス 水精よ蜿くれ)

久<sup>く</sup>我<sup>が</sup>鎮<sup>しず</sup>子<sup>こ</sup>が提示した六<sup>こま</sup>齣<sup>ま</sup>の黙示図は、凄惨冷酷な内容<sup>ユーマラス</sup>を蔵しながらも、外観はきわめて古拙な線で、しごく飄逸<sup>ユーマラス</sup>な形に描<sup>か</sup>かれていた。が、確かにこの事件において、それがあらゆる要素の根柢をなすものに相違なかつた。おそらくこの時機に剔抉<sup>てきけつ</sup>を誤つたなら、この厚い壁は、数千度の訊問検討の後にも現われるであろう。そして、その場で進行を阻<sup>はば</sup>んでしまうことは明らか

かだった。それなので、鎮子が驚くべき解釈をくわえて  
いるうちにも、法水のりみずは顎あごを胸につけ、眠ったような  
形で黙考を凝らしていたが、おそらく内心の苦吟は、  
彼の経験を超絶したものだだろうとおもわれた。事  
実まったく犯人のいない殺人事件——埃及船エジプトぶねと屍様しやうざ凶  
を相関させたところの凶読法は、とうてい否定し得べ  
くもなかったのである。ところが意外なことに、やが  
て正視に復した彼の顔には、みるみる生氣みなぎが漲りゆき  
酷烈な表情が泛うかび上った。

「判りましたが……しかし久我さん、この凶の原理に

は、けっしてそんなスウエーデンボルグ神学（黙示録解釈）  
および「アルカナ・コイレステシア」において、スウエーデンボルグは出埃及記およびヨ  
ハネ黙示録の字義解釈に、牽強附会もはなはだしい数読法を用いて、その二つの經典  
が、後世における歴史的大事變の数々を預言せるものとなせり。）はないので  
すよ。狂ったようなところが、むしろ整然たる論理形  
式なんです。また、あらゆる現象に通ずるといふ空間  
構造の幾何学理論が、やはりこの中でも、絶対不変の  
単位となっているのです。ですから、この図を宇宙自  
然界の法則と対称することが出来るとすれば、当然、  
そこに抽象されるものがなけりやならん訳でしょう」

と法水が、突如前人未踏とでも云いたいところの、超  
経験的な推理領域に踏み込んでしまったのには、さす  
がの検事も啞然あぜんとなつてしまった。数学的論理はあら  
ゆる法則の指導原理であると云うけれども、かの  
「僧正殺人事件」ビシヨップ・マーダーケースにおいてさえ、リーマン・クリスト  
フェルのテンソルは、単なる犯罪概念を表わすものに  
すぎなかつたではないか。それなのに法水は、それを  
犯罪分析の実際に応用して、空漠たる思惟抽象の世界  
に踏み入つて行こうとする……。

「ああ私は……」と鎮子は露むき出して嘲わらつた。「それで、

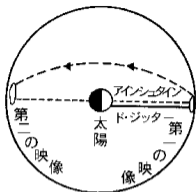
ロレンツ収縮の講義を聴いて直線を歪めて書いたと云う、莫迦ぼかな理学生の話をお憶い出しましたわ。それでは、ミンコフスキーの四次元世界に第四容積フォーステイメンション（立体積の中で、霊質のみが滲透的に存在し得るといふ空隙。）を加えたものを、一つ解析的に表わして頂きましょうか」

その啜わらいを法水は眦めじりで弾き、まず鎮子を嗜たしなめてから、

「ところで、宇宙構造推論史の中で一番華やかな頁ページと云えば、さしずめあの仮説決闘セオリー・デュエル——空間曲率に関して、

アインシュタインとド・ジッターとの間に交された論争でしようかな。その時ジッターは、空間固有の幾何

学的性質によると主張したのでしたが、同時に、アイ  
ンシュタインの反太陽説も反駁はんぱくしているのです。とこ  
ろが久我さん、その二つを対比してみると、そこへ、  
黙示図の本流が現われてくるのですよ」とさながら  
狂ったのではないかと思われるような言葉を吐きなが  
ら、次図を描いて説明を始めた。



した時、そこで第一の像を作り、それから、数百万年の旅を続けて球の外圏を廻ってから、今度は背後に当る対向点まで来ると、そこで第二の像を作ると云うのです。しかしその時には、すでに太陽は死滅して

「では、最初反太陽説の方から云うと、アインシュタインは、太陽から出た光線が球形宇宙の縁へりを廻って、再び旧もとの点に帰って来ると云うのです。そして、そのために、最初宇宙の極限に達

一個の暗黒星にすぎないでしょう。つまり、その映像と対称する実体が、天体としての生存の世界にはないのです。どうでしょう久我さん、実体は死滅しているにもかかわらず過去の映像が現われる——その因果関係が、ちようどこの場合算哲博士と六人の死者との関係に相似してやしませんか。なるほど、一方は  $A$  (二 オンゲストローム トリリオン・マイル 耗の一千万分の一) であり、片方は百万兆哩でしょうが、しかしその対照も、世界空間においては、たかが一微小線分の問題にすぎないのです。それからジッターは、その説をこう訂正しているのですよ。遠くなるほど、



螺旋状星雲のスペクトル線が赤の方へ移動して行くの  
で、それにつれて、光線の振動週期が遅くなると推断  
しています。それがために、宇宙の極限に達する頃に  
は光速が零ゼロとなり、そこで進行がピタリと止つてしま  
うというのですよ。ですから、宇宙の縁へりに映る像はた  
だ一つで、恐らく実体とは異ならないはずです。そこ  
で僕等は、その二つの理論の中から、黙示図の原理を  
扱ばなければならなくなりました」

「ああ、まるで狂人きちがいになるような話じゃないか」熊城くましろは  
ボリボリふけを落しながら呟いた。「サア、そろそろ、

天国の蓮台から降りてもらおうか」

法水は熊城の好諠にたまらなく苦笑したが、続いて結論を云った。

「勿論太陽の心霊学から離れて、ジッターの説を人体生理の上に移してみるのです。すると、宇宙の半径を横切つて長年月を経過していても、実体と映像が異ならない——その理法が、人間生理のうちで何事を意味しているでしょうか。たとえば、ここに病理的な潜在物があつて、それが、発生から生命の終焉しゅうえんに至るまで、生育もしなければ減衰もせず、常に不変な形を保つて

いるものと云えば……」

「と云うと」

「それが特異体質なんです」と法水は昂然と云い放つた。「恐らくその中には、心筋質肥大のようなものや、あるいは、硬脳膜矢状縫合癒合がないとも限りません。けれども、それが対称的に抽象出来るといふのは、つまり人体生理の中にも、自然界の法則が循環しているからなんです。現に体質ハーネマン液学派は、生理現象を熱力学の範囲に導入しようとしています。ですから、無機物にすぎない算哲博士に不思議な力を与えたり、人形に

遠感的な性能を想像させるようなものは、つまるところ、犯人の狡猾な擾乱策こうかつ じょうらんさくにすぎんのですよ。たぶんこの凶の死者の船などにも、時間の進行という以外の意味はないでしょう」

特異体質——。論争の綺きらびやかな火華にばかり魅せられていて、その蔭に、こうした陰惨な色の燧石ひうちいしがあるろうなどとは、事実夢にも思い及ばぬことだった熊城は神経的に掌てのひらの汗を拭きながら、「なるほど、それなればこそだ——。家族以外にも易介を加えているのは」

「そうなんだ熊城君」と法水は満足気に頷うなずいて、「だから、謎は凶形の本質にはなくて、むしろ、作画者の意志の方にある。しかし、どう見てもこの医学の幻想フアンタジイは、片々たる良心的な警告文じゃあるまい」

「だが、すこぶる飄逸ユーモラスな形じゃないか」と検事は異議を唱えて、「それで露骨な暗示もすつかりおどけてしまつてゐるぜ。犯罪を醸成するような空気は、微塵みじんもないと思うよ」と抗弁したが、法水は几帳面きちようめんに自分の説を述べた。

「なるほど、飄逸ユーモアや戯ジョーク喩は、一種の生理的洗滌せんできには違

ないがね。しかし、感情の捌け口のない人間にとると、それがまたとない危険なものになってしまふんだ。だいたい、一つの世界一つの観念——しかない人間というものは、興味を与えられると、それに向つて偏執的に傾倒してしまつて、ひたすら逆の形で感応を求めようとする。その倒錯心理だが——それにもしこの凶の本質が映つたとしたら、それが最後となつて、観察はたちどころに捻<sup>ねじ</sup>れてしまふ。そして、様式から個人の経験の方に移つてしまふんだ。つまり、喜劇から悲劇へなんだよ。で、それから、気違ひみたいに自然淘

汰の跡を追いはじめて、冷血的な怖ろしい狩猟の心理  
 しかなくなつてしまふのだ。だから支倉君はせくら、僕はソー  
 ンダイクじゃないがね、マラリヤや黄熱病よりも、雷  
 鳴や闇夜の方が怖ろしいと思うよ」

「マア、犯罪徴候学……」鎮子は相変らずの冷笑主義シニシズムを  
 發揮して、

「だいたいそんなものは、ただ瞬間の直感にだけ必要  
 なものとはばかり思っていましたわ。ところで易介とい  
 う話ですが、あれはほとんど家族の一員に等しいので  
 すよ。まだ七年にしかならない私などとは違って、

傭人とは云い条、幼い頃から四十四の今日まで、こんにちず

うつと算哲様の手許で育てられてまいったのですから。それに、この図は勿論索引には載っております、絶対に人目に触れなかつたことは断言いたします。算哲様の歿後誰一人触れたことのない、埃だらけな未整理図書の底に埋もれていて、この私でさえも、昨年うすの暮まではいっこうに知らなかつたほどでございますものね。そうして、貴方の御説どおりに、犯人の計画がこの黙示図から出発しているものとなりましたなら、犯人の算出は——いいえこの減算は、ひきざん大変簡単ではござい



ませんこと」

この不思議な老婦人は、突然解し難い露出的態度に出た。法水もちよつと面喰めんくらつたらしかつたが、すぐに洒脱しゃだつな調子に戻つて、

「すると、その計算には、幾つ無限記号を附けたらよいのでしようかな」と云つた後で、驚くべき言葉を吐いた。「しかし、恐らく犯人でさえ、この図のみを必要とはしなかつたらうと思うのです。貴女あなたは、もう半分の方は御存じないのですか」

「もう半分とは……誰がそんな妄想を信ずるもんです

か!!」と鎮子が思わずヒステリックな声で叫ぶと、始めて法水は彼の過敏な神経を明らかにした。法水の直観的な思惟の皺しわから放出されてゆくものは、黙示図の図読といいこれといい、すでに人間の感覺的限界を越えていた。

「では、御存じなければ申し上げましょう。たぶん、奇抜な想像としかお考えにならないでしょうが、実はこの図と云うのが、二つに割った半葉にすぎないんですよ。六つの図形の表現を超絶したところに、それは深遠な内意があるのです」

熊城は驚いてしまつて、種々いろいろと図しえんの四縁しえんを折り曲げて合わせていたが、「法水君、洒落しやれはよしにし給え。幅やいばがた広い刃形やいばがたはしているが、非常に正確な線だよ。いったいどこに、後から截きつた跡があるのだ？」

「いや、そんなものはないさ」法水は無雑作に云い放つて、全体が日の形をしている黙示図を指し示した。

「この形が、一種の記号語パジグラフィなんだよ。元来死者の秘蹟なんて陰険きわまるものなんだから、方法までも実に捻ねじれきつている。で、この図も見たとおりで、全体が刀子とうし（石器時代の滑石武器）の刃形みたいな形をしているだ

ろう。ところが、その右肩を斜めに截った所が、実に深遠な意味を含んでいるんだよ。無論算哲博士に、考古学の造詣ぞうけいがなけりや問題にはしないけれども、この形と符合するものが、ナルマー・メネス王朝あたりの金字塔前象形文字の中にある。第一、こんな窮屈な不自然きわまる形の中に、博士がなぜ描かかねばならなかったものか、考えてみ給え」

そうして、黙示図の余白に、鉛筆で∩の形を書いてから、

「熊城君、これが $\frac{1}{2}$ を表わす上古埃及コブチツクの分数数字だと

したら、僕の想像もまんざら妄覚ばかりじゃあるまいね」と簡勁かんけいに結んで、それから鎮子に云った。「勿論、死語に現われた寓意的な形などというものは、いつか訂正される機会がないとも限りません。けれども、ともかくそれまでは、この図から犯人を算出することだけには、避けたいと思うのです」

その間、鎮子は懶氣ものうげに宙を瞞みつめていたが、彼女の眼には、真理を追求しようという激しい熱情が燃えさかっていた。そして、法水の澄みきった美しい思惟の世界とは異なつて、物々しい陰影に富んだ質量的なも

のをぐいぐい積み重ねてゆき、実証的な深奥のものを  
せんめい 闡明しようとした。

「なるほど独創は平凡じゃございませんわね」と独言ひとりごと  
 のように呟つぶやいてから、再び旧もとどおり冷酷な表情に返つ  
 て、法水を見た。「ですから、実体が仮象よりも華やか  
 でないのは道理ですわ。しかし、そんなハム族の葬儀  
 用記念物よりかも、もしその四角の光背と死者の船を、  
 事実目撃した者があつたとしたらどうなさいます？」  
 「それが貴女あなたなら、僕は支倉はせくらに云つて、起訴させましょ  
 う」と法水は動じなかつた。

「いいえ、易介なんです」 鎮子は静かに云い返した。「ダンネベルグ様が洋橙オレンジを召し上る十五分ほど前でしたが、易介はその前後に十分ばかり室へやを空けました。それが、後で訊くとこうなんです。ちようど神意審問の会が始まっている最中さなかだったのですが、その時易介が裏玄関の石畳の上に立っていると、ふと二階の中央で彼の眼に映ったものがありました。それが、会が行われている室の右隣りの張出窓で、そこに誰やら居るらしい様子で、真黒な人影が薄気味悪く動いていたと云うのです。そして、その時地上に何やら落したら

しい微かな音がしたそうですが、それが気になつてた  
まらず、どうしても見に行かずにはいられなかつたと  
申すのでした。ところが、易介が発見したものは、辺  
り一面に散在している硝子の破片にすぎなかつたので  
す」

「では、易介がその場所へ達するまでの経路をお訊き  
でしたか」

「いいえ」と鎮子は頸くびを振つて、「それに伸子さんは、ダ  
ンネベルグ様が卒倒なさるとすぐ、隣室から水を持つ  
てまいつたというほどですし、ほかにも誰一人として、



座を動いた方はごさいませんでした。これだけ申せば、私がこの黙示図に莫迦らしい執着を持っている理由がお判りでございましょう。勿論その人影というのは、吾々六人のうちにはないのです。と云つて、傭人は犯人の圈内にはごさいません。ですから、この事件に何一つ残されていないと云うのも、しごく道理なんでございますわ」

鎮子の陳述は再び凄風を招き寄せた。法水はしばらくたばこの赤い尖端をみつ瞋めていたが、やがて意地悪げな微笑をうか泛べて、

「なるほど、しかし、ニコル教授のような間違いだらけな先生でも、これだけは巧いことを云いましたな。結核患者の血液の中には、脳に譫妄せんもうを起すものを含めり——つて」

「ああ、いつまでも貴方は……」といったん鎮子は呆れあきて叫んだが、すぐに毅然きぜんとなつて、「それでは、これを

……。この紙片が硝子の上に落ちていたとしましたなら、易介の言いひばには形がございましょう」と云つて、

懐中ふところから取り出したものがあつた。それは、雨水あまみずと泥ぬで汚れた用箋きれはしの切端きりばしだったが、それには黒インクで、

次のような独逸文ドイツが認めしたたられてあつた。

ウンディヌス ジツヒ ヴァインデン  
Undinus sich winden

「これじゃとうてい筆蹟を窺うかがえようもない。まるで蟹かにみたいなゴソニック文字だ」といったん法水は失望したように呟つぶやいたが、その口の下から、両眼を輝かせて、「オヤ妙な転換があるぞ。元来この一句は、水精ウンディネよ蜿うねくれ——なんです。これには、女性の Undine に us をつけて、男性に変えてあるのです。しかし、これが何から引いたものであるか、御存じですか。それから、この館やかたの蔵書の中に、グリムの『古代独逸詩歌傑作に

就<sup>つ</sup>いて』かフアイストの『独逸語史料集』でも」

「遺憾<sup>いかん</sup>ながら、それは存じませぬ。言語学の方は、のちほどお報せすることにいたします」と鎮子は案外率直に答えて、その章句の解釈が法水の口から出るのを待った。しかし、彼は紙片に眼を伏せたままで、容易に口を開こうとはしなかつた。その沈黙の間を狙つて熊城が云つた。

「とにかく、易介がその場所へ行つたについては、もつと重大な意味がありますよ。サア何もかも包まずに話して下さい。あの男はすでに馬脚を露わしているんで

すから」

「サア、それ以外の事実と云えば、たぶんこれでしょう」と鎮子は相変らず皮肉な調子で、「その間私が、この室に一人ぼっちだったというだけの事ですわ。しかし、どうせ疑われるのなら、最初にされた方が……いえ、たいていの場合が、後で何でもないことになりますからね。それに伸子さんとダンネベルグ様が、神意審問会の始まる二時間ほど前に争論をなさいましたけれども、それやこれやの事柄は、事件の本質とは何の関係もないのです。第一、易介が姿を消したこと

だって、先刻さつきのロレンツ収縮の話と同じことですわ。

その理学生に似た倒錯心理を、貴方の恫愕どうかつ訊問が作り出したのです」

「そうなりますかね」と懶氣ものうげに呟いて、法水は顔を上げたが、どこか、ある出来事の可能性を暗受しているような、陰鬱な影を漂わせていた。が、鎮子には、慇懃いんきんな口調で云った。

「とにかく、種々いろいろと材料をそろえて頂いたことは感謝しますが、しかし結論となると、はなはだ遺憾千万です。貴女の見事な類推論法でも、結局私には、いわゆ

る、如き観を呈するものとしか見られんのですからね。ですからたとい人形が眼前に現われて来たにしたところで、私は、それを幻覚としか見ないでしょう。第一そういう、非生物学的な、力の所在というのが判らないのです」

「それは段々とお判りになりますわ」と鎮子は最後の駄目を押すような語気で云った。「実は、算哲様の日課書の中に——それが自殺なされた前月昨年の三月十日の欄でしたが——そこにこういう記述があるのです。吾われ、隠されねばならぬ隠密の力を求めてそれを得たれ

ば、この日魔法書を焚<sup>た</sup>けり——と。と申して、すでに無機物と化したあの方の遺骸には、一顧の価値<sup>あた</sup>いもございませぬけれど、なんとなく私には、無機物を有機的に動かす、不思議な生体組織とでも云えるものが、この建物の中に隠されているような気がしてならないのです」

「それが、魔法書を焚いた理由ですよ」と法水は何事かを仄<sup>ほ</sup>めかしたが、「しかし、失われたものは再現するのみのことです。そうしてから改めて、貴女の数理哲学を伺うことにしましょう。それから、現在の財産関係を



と算哲博士が自殺した当時の状況ですが」とようやく黙示図の問題から離れて、次の質問に移ったが、その時鎮子は、法水をみつ噴めたまま、腰を上げた。

「いいえ、それは執事の田郷さんの方が適任でございましょう。あの方はその際の発見者ですし、何より、この館ではリシュリュウ（ルイ十三世朝の僧正宰相）と申してよろしいのですから」そうして、扉の方へ二、三步歩んだ所で立ち止り、屹然きつと法水を振り向いて云った。「法水さん、与えられたものをとることに、高尚な精神が必要ですよ。ですから、それを忘れた者には、後

日必ず悔ゆる時機がまいりましたよ」

鎮子の姿が扉の向うに消えてしまうと、論争一過後の室は、ちようど放電後の、真空といった空虚な感じ  
で、再び黴臭い沈黙が漂いはじめ、樹林で啼く鴉の  
声や、氷柱が落ちる微かな音までも、聴き取れるほどの  
静けさだった。やがて、検事は頸の根を叩きながら、  
「久我鎮子は実象のみを追い、君は抽象の世界に溺れ  
ている。だがしかしだ。前者は自然の理法を否定せん  
とし、後者はそれを法則的に、経験科学の範疇で律し  
ようとしている——。法水君、この結論には、いった

いどういう論法が必要なんだね。僕は鬼神学デモノロジイだろうと  
思うんだが……」

「ところが支倉君、それが僕の夢想の華はなさ——あの黙  
示図に続いていて、未だ誰一人として見たことのない  
半葉がある——それなんだよ」と夢見るような言葉を、  
法水はほとんど無感動のうちに云った。「その内容が  
恐らく算哲の焚書を始めとして、この事件のあらゆる  
疑問に通じているだろうと思うのだ」

「なに、易介が見たという人影にもか」検事は驚いて叫  
んだ。

と熊城も真剣に頷うなずいて、「ウン、あの女はけっして、嘘は吐かんよ。ただし問題は、その真相をどの程度の真実で、易介が伝えたかにあるんだ。だが、なんという不思議な女だろう」と露あらわに驚嘆の色を泛うかべて、「自分から好んで犯人の領域に近づきたがっているんだ」「いや、被マゾヒイスト作虐者かもしれんよ」と法水は半はんみ身になつて、暢のんき気そうに廻転椅子をギシギシ鳴らせていたが、「だいたい、呵かしやく責と云うものには、得も云われぬ魅力があるそうじゃないか。その証拠にはセヴィゴラのナツケという尼僧だが、その女は宗教裁判の苛酷な審問の後で、

「転宗よりも、還俗げんぞくを望んだというのだからね」と云つてクルリと向きを変え、再び正視の姿勢に戻つて云つた。

「勿論久我鎮子は博識無比さ。しかし、あれは索引インデックスみたいな女なんだ。記憶の凝りかたまが将棋盤の格みたいに、正確な配列をしているにすぎない。そうだ、まさに正確無類だよ。だから、独創も発展性も糞もない。第一、ああいう文学に感覚を持ってない女に、どうして、非凡な犯罪を計画するような空想力が生れよう」

「いったい、文学がこの殺人事件とどんな関係がある

かね？」と検事が聴き咎めた。とが

「それが、あの水精よウンディヌス・ジツヒ蜿ヴァインデンくれ——さ」と法水は、初め

て問題の一句をせんめい闡明する態度に出た。「あの一句は、

ゲーテの『ファウスト』の中で、むくいぬ彪犬に化けたメフィス

トの魔力を破ろうと、あの全能博士が唱える呪文の中

にある、勿論その時代をふうび風靡した加勒底カルデア亜五芒星術の

一文で、ザラマンター火精・ウンディネ水精・ジルフェ風精・コポルト地精の四妖に呼び掛けて

いるんだ。ところで、それを鎮子が分らないのを不審

に思わないかい。だいたいこういつた古風な家で、書

架に必ず姿を現わすものと云えば、まず思弁学でヴォ

ルテール、文学ではゲーテだ。ところが、そういった古典文学が、あの女には些細な感興も起さないんだ。それからもう一つ、あの一句には薄気味悪い意思表示が含まれているのだよ」

「それは……」

「第一に、連続殺人の暗示なんだ。犯人は、すでに甲冑武者の位置を変えて、それで殺人を宣言しているが、この方はもつと具体的だ。殺される人間の数とその方法が明らかに語られている。ところで、ファウストの呪文に現われる妖精の数が判ると、それがグイと胸を

衝き上げてくるだろう。何故なら、旗太郎をはじめ四人の外人の中で、その一人が犯人だとしたら、殺す数の最大限は、当然四人でなければなるまい。それから、これが殺人方法と関聯していると云うのは、最初にウンディネ水精を提示しているからだよ。よもや君は、人形の足型を作つて敷物の下から現われた、あの異様な水の跡を忘れやしまいね」

「だが、犯人が独逸語ドイツを知っている圈内にあるのは、確かだろう。それにこの一句はたいして文献学的なものフィロロジックじゃない」と検事が云うのを、



「冗談じゃない。音楽は独逸の美術なり——と云うぜ。この館では、あの伸子という女さえ、ハープ 豎琴を弾くそうなんだ」と法水は、さも驚いたような表情をして、「それに、不可解きわまる性別の転換もあるのだから、結局言語学の蔵書以外には、あの呪文を裁断するものはないと思うのだよ」

熊城は組んだ腕をダラリと解いて、彼に似げない嘆声を発した。

「ああ、何かから何まで嘲笑的じゃないか」

「そうだ、いかにも犯人は僕等の想像を超絶している。」

まさにツアラツストラ的な超人なんだ。この不思議な事件を、これまで従来のようなヒルベルト以前の論理学で説けるものじゃない。その一例があの水の跡なんだが、それを陳腐な残余法で解釈すると、水が人形の体内にある発音装置を無効にした——という結論になる。けれども、事実はけつしてそうじゃないんだ。まして、全体がすこぶる多元的に構成されている——。何も手掛りはない。曖昧朦朧とした中に薄気味悪い謎がウジャウジャと充満している。それに、死人が埋うずもれている地底の世界からも、絶えず紙礫かみつぶてのようなものが、

ヒューヒューと打衝ぶつかつて来るんだ。しかし、その中に、四つの要素が含まれていることだけは判るんだ。一つは、黙示図に現われている自然界の薄気味悪い姿で、その次は、未だに知られていない半葉を中心とする、死者の世界なんだ。それから三つ目が、既往の三度にわたる変死事件。そして最後が、ファウストの呪文を軸に発展しようとする、犯人の現実行動なんだよ」と、そこでしばらく言を切ことばつていたが、やがて法水の暗い調子に明るい色が差して、「そうだ支倉君、君にこの事件の覚書を作ってもらいたいのだが。だいたいグリー

ン殺人事件がそうじゃないか。終り頃になつてヴァン  
スが覚書を作ると、さしもの難事件が、それと同時に  
奇蹟的な解決を遂げてしまつている。しかし、あれは  
けつして、作者の窮策じゃない。ヴァン・ダインは、い  
かに<sup>ファクター</sup>因数を決定することが、切実な問題であるかを教  
えているんだ。だからさ。何より差し当つての急務と  
いうのが、それだ。<sup>ファクター</sup>因数だ——さしずめその幾つかを、  
このモヤモヤした疑問の中から摘出するにあるんだ  
よ」

それから検事が覚書を作っている間に、法水は十五

分ばかり室へやを出ていたが、間もなく、一人の私服と前後して戻つて来た。その刑事は、館内の隅々までも捜索したにかかわらず、易介の発見がついに徒労に帰したという旨を報告した。法水は眉のあたりをビリビリ動かしながら、

「では、古代時計室と拱廊そでろうかを調べたかね」

「ところが、彼あすこ処は」と私服は頸くびを振つて、「昨夜の八時に、執事が鍵を下したままなんですから。しかし、その鍵は紛失しておりません。それから拱廊そでろうかでは、円廊の方の扉が、左側一枚開いているだけのことでした」

「フムそうか」といったん法水は頷いたが、「ではもう打ち切つてもらおう。けつしてこの建物から外へは出てやしないのだから」と異様に矛盾した、二様の観察をしているかのような、口吻こうふんを洩らすと、熊城は驚いて、

「冗談じゃない。君はこの事件にければいけない装幀をしたいんだろうが、なんといつても、易介の口以外に解答があるもんか」と今にも館外からもたらせられるらしい、侏儒こびとの僂偻せむしの発見を期待するのだった。こうして、ついに易介の失踪は、熊城の思う壺どおりに確

定されてしまったが、続いて法水は、問題の硝子の破片があるという附近あたりの調査と、さらに次の喚問者として、執事の田郷真齋たごうしんさいを呼ぶように命じた。

「法水君、君はまた拱廊そでろうかへ行ったのかね」私服が去ると、熊城はなかば揶揄やゆ気味に訊ねた。

「いや、この事件の幾何学量を確認したんだよ。算哲博士が黙示図を描いたり、その知られてない半葉を暗示したについては、そこに何か、方向がなけりやならん訳だろう」と法水はムスツとして答えたが、続いて驚くべき事実が彼の口を突いて出た。「それで、ダンネ

ベルグ夫人を狂人きちがいみたいにした、怖ろしい暗流が判つたのだ。実は、電話でこの村の役場を調べたんだが、驚くじゃないか、あの四人の外人は去年の三月四日に帰化して、降矢木ふりやぎの籍に、算哲の養子養女となつて入籍しているんだ。それにまだ遺産相続の手続がされていない。つまり、この館は未だもつて、正統の継承者旗太郎の手中には落ちていないのだよ」

「こりや驚いた」検事はペンを抛り出して啞然となつてしまつたが、すぐに指を繰つてみて、「たぶん手続が遅れているのは、算哲の遺言書でもあるからだろうが、



剩す<sup>あま</sup>ところもう、法定期限は二ヶ月しかない。それが切れると、遺産は国庫の中に落ちてしまふんだ」

「そうなんだ。だから、そこにもし殺人動機があるものとするれば、ファウスト博士の隠れ蓑<sup>みの</sup>——あの五芒星<sup>ペンタグラムマ</sup>の円が判るよ。しかし、どのみち一つの角度<sup>アングル</sup>には相違ないけれども、なにしろ四人の帰化入籍というようない思ひもつかぬものがあるほどだからね。その深さは並大抵のものじゃあるまい。いや、かえって僕は、それを迂闊<sup>うかつ</sup>に首肯してはならないものを握っているんだ」

「いったい何を？」

「先刻君が質問した中の、(一)・(二)・(五)の箇条なん

だよ。かつちゆう 甲冑武者が階段廊の上へ飛び上っていて――、

召使は聞えない音を聴いているし――、それからそでろうか拱廊

では、ボードの法則が相変らず、海王星のみを証明出来ないのでがね」

そういう驚くべき独断を吐き捨てて、法水は検事が書き終った覚書を取り上げた。それには、私見を交えない事象の配列のみが、正確に記述されてあつた。

## 一、死体现象に関する疑問（略）

二、テレーズ人形が現場に残せる証跡について（略）  
三、当日事件発生前の動静

一、早朝押鐘津多子の離館。

二、午後七時より八時——。甲冑武者の位置が階段廊上に変り、和式具足の二つの兜が取り替えられている。

三、午後七時頃、故算哲の秘書紙谷伸子が、ダンネベルグ夫人と争論せしと云う。

四、午後九時——。神意審問会中にダンネベルグ

は卒倒し、その時刻と符合せし頃、易介はその隣室の張出縁に異様な人影を目撃せりと云う。

五、午後十一時——。伸子と旗太郎がダンネベルグを見舞う。その折、旗太郎は壁のテレーズの額を取り去り、伸子はレモナーデを毒味せり。なお、青酸を注入せる洋橙オレンジを載せたものと推察さるる果物皿を、易介が持参せるはその時なれども、肝腎の洋橙については、ついに証明されるものなし。

六、午後十一時四十五分頃。易介は最前の人影が落せしものを見て、裏庭の窓際に行き、硝子の破片並びにファウスト中の一章を記せる紙片を拾う。その間室内には被害者と鎮子のみなり。

七、同零時頃。被害者洋橙を喰す。

なお、鎮子、易介、伸子以外の四人の家族には、記述すべき動静なし。

四、黒死館既往変死事件について（略）

## 五、既往一年以来の動向

一、昨年三月四日 四人の異国人の帰化入籍。

一、同 三月十日 算哲は日課書に不可解なる記述を残し、その日魔法書を焚くと云う。

一、同 四月二十六日 算哲の自殺。

以来館内の家族は不安に怯え、おびついに被害者は神意審問法により、その根元をなす者を究めんとす。

## 六、黙示図の考察（略）

## 七、動機の所在（略）

読み終ると法水は云った。

「この箇条書のうちで、第一の死体现象に関する疑問は、第三条の中に尽されていると思う。外見は、いつでも何でもなさそうな時刻の羅列にすぎないよ。しかし、<sup>オレンジ</sup>洋橙が被害者の口の中に飛び込んだ経路だけにも、きつとフィンスレル幾何の公式ほどのものが、ギユウギユウと詰っているに違いないんだ。それから、算哲の自殺が、四人の帰化入籍と焚書の直後に起つて

いるのにも、注目する価値があると思う」

「いや、君の深奥な解析などはどうでもいいんだ」と熊城は吐き出すような語気で、「そんな事より、動機と人物の行動との間に、大変な矛盾があるぜ。伸子はダンネベルグ夫人と争論をしているし、易介は知つてのとおりで。それにまた鎮子だつても、易介が室へやを出ていた間に、何をしたか判つたものじゃない。ところが、君の云うファウスト博士の円は、まさに残つた四人を指摘しているんだ」

「すると、儂わしだけは安全圏内ですかな」



その時背後で、異様な唳れ声しやがが起つた。三人が吃驚びっくりして後を振り向くと、そこには、執事の田郷真齋がいつの間にか入り込はいんでいて、大風な微笑をたたえて見下みおろしている。しかし、真齋があたかも風のごとくに、音もなく三人の背後に現われ得たのも、道理であろう。下半身不随のこの老史学者は、ちようど傷病兵でも使うような、護謨輪ゴムで滑かに走る手働四輪車の上に載っているからだつた。真齋は相当著名な中世史家で、この館の執事を勤める傍かたわらに、数種の著述を發表しているので知られているが、もはや七十に垂なんなんとする老人

だつた。無髻むぜんで赭丹色しゃたんしきをした顔には、顴骨突起かんこつと下顎

骨が異常に発達している代りに、鼻翼の周囲が陥ち窪

み、その相はいかにも醜怪で——と云うよりもむしろ

脱俗的な、いわゆる胡面梵相こめんぼんそうとでも云いたい、まるで

道釈画か十二神将の中にでもあるような、実に異風な

顔貌だつた。そして、頭に印度帽テュルバンを載せたところとい

い——そのすべてが、一語で魁異グロテスケリと云えよう。しかし、

どこか妥協を許さない頑迷固陋がんめいころうと云つた感じで、全体

の印象からは、甲羅のような外観みかけがするけれども、そ

こには、鎮子のような深い思索や、複雑な性格の匂い

は見出されなかった。なお、その手働四輪車は、前部の車輪は小さく、後部のものは自転車の原始時代に見るような素晴らしく大きなもので、それを、起動機と制動機とで操作するようになっていた。

「ところで、遺産の配分ですが」と熊城が、真斎の挨拶にも会釈を返さず、性急に口切り出すと、真斎は不遜な態度で嘯うそいふいた。

「ホウ、四人の入籍を御存じですか。いかにも事実じゃが、それは個人個人にお訊ねした方がよろしかろう。儂わしには、とんとそういう点は……」

「しかし、既にとつに開封されているじゃありませんか。遺言書の内容だけは、話してしまった方がいいでしょう」熊城はさすがに老練な口弁かまを掛けたけれども、真斎はいつこうに動ずる気色けしきもなく、

「なに、遺言状……ホホウ、これは初耳じゃ」と軽く受け流して、早くも冒頭から、熊城との間に殺気立った黙闘が開始された。法水は最初真斎を一瞥いちべつすると同時に、何やら黙想に耽ふけるかの様子だったが、やがて収斂しゅうれん味のかつた瞳を投げて、

「ハハア、貴方は下半身不随パラブレジアですね。なるほど、黒死館

のすべてが内科的じゃない。ところで、貴方が算哲博士の死を発見されたそうですが、たぶんその下手人が、誰であるかも御存じのはずですがね」

これには、真斎のみならず、検事も熊城もいつせいに啞然となつてしまった。真斎は墓がまみたいひじに両脇ひじを立てて半身を乗り出し、哮たけるような声を出した。

「莫ぼ迦かな、自殺と決定されたものを……。貴方あんたは検屍調書を御覧になられたかな」

「だからこそです」と法水は追求した。「貴方は、その殺害方法までもたぶん御承知のはずだ。だいたい、太

陽系の内惑星軌道半径が、どうしてあの老医学者を殺したのでしょうか？」

二、鐘鳴器カリリヨンの讃詠歌アンセムで……

「内惑星軌道半径!？」このあまりに突飛とっぴな一言に眩惑されて、真斎は咄嗟とっさに答える術すべを失ってしまった。法水は厳粛な調子で続けた。

「そうです。無論史家である貴方は、中世ウエールを風靡ふうびしたバルダス信経を御存じでしょう。あのドルイデイデ（九世紀レゲンスブルグの僧正魔法師）の流れを汲くんだ、呪法経典の信条は何でしたらうか（宇宙にはあらゆる象徴瀰漫す。しかして、

その神秘的な法則と配列の妙義は、隠れたる事象を人に告げ、あるいは予め告げ知ら

しむ。）」

「しかし、それが」

「つまり、その分析綜合の理を云うのです。私はある

憎むべき人物が、博士を殺した微妙な方法を知ると同

時に、初めて、アストロロジイ占星術やアルケミイ錬金術の妙味を知ることが出

来しました。確か博士は、へや室の中央で足を扉の方に向け、

心臓に突き立てた短剣の束をつか固く握り締めて倒れてい

たのでしたね。しかし、入口の扉を中心にして、水星

と金星の軌道半径を描くと、その中では、他殺のあら





ゆる証跡が消えてしまうのです」と法水は室の見取図に、別図のような二重の半円を描いてから、

「ところで、その前にぜひ知っておかねばならないのは、惑星の記号が或る化学記号に相当するということなんです。Venus ヴェイナス が金星であることは御承知でしょうが、その傍ら銅を表わしています。また、Mercury マーキュリー は、水星であると同時に、水銀の名にもなっている

のです。しかし、古代の鏡は、青銅の薄膜の裏に水銀マーキュリーを塗って作られていたのですよ。そうすると、その鏡面に——つまり、この図では金星の後方に当るのですが、それには当然、帷幕とぼりの後方から進んで来る犯人の顔が映ることになりました。何故なら、金星の半径を水星の位置にまで縮めるといふことは、素晴らしい殺人技巧であつたと同時に、犯行が行われてゆく方向も、また博士と犯人の動きさえも同時に表わしているからなんです。そして、しだいに犯人は、それを中央の太陽の位置にまで縮めてゆきました。太陽は、当時

算哲博士が終焉しゆうえんを遂げた位置だったのです。しかし、背面の水銀マーキユリーが太陽と交わった際にいったい何が起ったと思いますか？」

ああ、内惑星軌道半径縮小を比喩にして、法水は何を語ろうとするのであろうか。検事も熊城も、近代科学の精を尽した法水の推理の中へ、まさかに錬金道士の蒼暗たる世界が、前期化学スバルジリー特有の類似律の原理とともに、現われ出ようとは思わなかった。

「ところで田郷さん、S一字でどういものが表わされていくでしょうか」と法水は、調子を弛ゆるめずに続け

た。「第一に太陽、それから硫黄いおうですよ。ところが、水銀と硫黄との化合物は、朱ではありませんか。朱は太陽であり、また血の色です。つまり、扉の際きわで算哲の心臓が綻ほころびたのです」

「なに、扉の際で……。これは滑稽な放言じゃ」と真斎は狂ったように、肱掛を叩き立てて、「貴方あんたは夢を見ておる。まさに実状を顛倒した話じゃ。あの時血は、博士が倒れている周囲にしか流れておらなかつたのです」

「それは、いったん縮めた半径を、犯人がすぐ旧もとどおり

の位置に戻したからですよ。それから、もう一度Sの字を見るのです。まだあるでしょう。悪魔会議日、サブスデー、スクライフ立法者……。そうですね、まさしく立法者なんです。犯人はあの像のように……。と法水は、そこでいったん唇を閉じ、じいっと真斎を瞷みつめながら、次に吐く言葉との間の時間を、胸の中で秘かに計測しているかの様子だった。ところが、突然いきなり頃合を計って、「あののように、立って歩くことの出来ない人間——それが犯人なんです」と鋭い声で云うと、不思議な事には、それとともに——げ解し難い異状が、真斎に起った。

それが、始め上体に衝動が起つたと見る間に、両眼を睜みひらき口を喇ラッパ叭形に開いて、ちようどもンクの老婆に見るような無残な形となつた。そして、絶えず唾を嚙のみ下そうとするもののような苦悶の状を続けていたが、そのうちちようやく、

「おお、儂わしの身体を見るがいい。こんな不具者がどうして……」と辛からくも噎しゃがれ声を絞り出した。が、真齋には確か咽喉部に何か異常が起つたとみえて、その後も引き続き呼吸の困難に悩み、異様な吃音きつおんとともに激しい苦悶が現われるのだった。その有様を、法水は異常

な冷やかさで見やりながら云い続けたが、その態度には、相変らず計測的なものが現われていて、彼は自分の言の速度に、周到な注意を払っているらしい。

「いや、その不具な部分を俟まってこそ、殺人を犯すことが出来たのですよ。僕は貴方の肉体でなく、その手働四輪車と敷物カーペットだけを見ているのです。たぶんヴェンヴェヌート・チエリニ（文芸復興期の大金工で驚くべき殺人者）が、カルドナツオ家のパルミエリ（ロムバルジャ第一の大剣客）を斃たおしたという事蹟を御存じでしょうが、腕で劣ったチエリニは、最初敷物カーペットを弛ませて置いて、途中でそれをピ

インと張らせ、パルミエリが足許を奪われて蹠踉よろめくところを刺殺したのでした。しかし、算哲を斃すためには、その敷物を応用した文芸復興期の剣技が、けつして一場の伝奇ロマーンではなかつたのです。つまり、内惑星軌道半径の縮伸というのは、要するに貴方が行おこなつた、敷物カーペットのそれにすぎなかつたのですよ。さて、犯行の實際を説明しますかな」と云つてから、法水は検事と熊城に詰責きつせき気味な視線を向けた。「だいたい何故扉の浮彫を見ても、君達は、せむし 傴僂の眼が窪んでいるのに気がつかなかつたのだね」



「なるほど、楕円形に凹んでいる」熊城はすぐ立って行つて扉を調べたが、はたして法水の云うとおりだった。法水はそれを聴くと、会心の笑を真齋えみに向けて、「ねえ田郷さん、その窪んでいる位置が、ちようど博士の心臓の辺に当りはしませんか。それが、楕円形をしているのですから、護符刀の束頭つかがしらであることは一目瞭然たるものです。そうになると、当然天寿を楽しむよりほかに自殺の動機など何一つなく、おまけにその日は、愛人の人形を抱いて若かつた日の憶い出に耽ふけろうとしたほどの博士が、何故扉際とぎわに押し付けられて、心臓を

真斎は声を発することはおろか、依然たる症状を続けて、気力がまさに尽きなんとしていた。蠟白色に変った顔面からは膏あぶらのような汗が滴り落ち、とうてい正視に耐えぬ惨めさだった。ところが、それにもかかわらず法水は、この残忍な追求をいつかな止めようとはしなかった。

「ところで、ここに奇妙な逆説パラドックスがあるので。その殺人が、かえって五体の完全な人間には不可能なんですよ。何故なら、ほとんど音の立たない、手働四輪車の

機械力が必要だったからで、それがまず、敷物カーペットに波を作つて縮め重ねてゆき、終いには、博士を扉に激突させたからでした。何分にも、当時室へやは闇に近い薄明りで、右側の帷幕とぼりの蔭に貴方が隠れていたのも知らずに、博士は帷幕の左側を排して、召使が運び入れて置いた人形を寝台の上で見、それから、鍵を下しに扉の方へ向つたのでしよう。ところが、それを追うて、貴方の犯行が始まつたのでしたね。まずそれ以前に、敷物の向う端を鋏びょうで止め、人形の着衣タリズマンから護符刀を抜いておく——そしていよいよ博士が背後を見せると、敷物カーペットの

端をもたげて、縦にした部分を足台で押して速力を加えたので、敷物には皺カカーベットが作られ、勿論その波はしだいに高さを加えたのです。そして、背後から足台を、博士の膝ひかがみ窩に衝突させる。と、波が横から潰されて、ほとんど腋下に及ぶほどの高さになってしまふ。と同時に、いわゆるイエンドラシック反射が起つて、その部分に加えられた衝撃が、上膊筋に伝導して反射運動を起すのですから、当然博士は、無意識裡に両腕を水平に上げる。その両脇から博士を後様うしろさまに抱えて、右手に持った護符刀タリズマンを心臓の上に軽く突き立て、すぐにそ

の手を離してしまふ。と、博士は思わず反射的に短剣を握ろうとするので、間髪あいだの間に二つの手が入れ代つて、今度は博士が束つかを握つてしまふ。そして、その瞬後扉に衝突して、自分が束を握つた刃が心臓を貫く。つまり、高齢で歩行の遅いのろ博士に、敷物カーペットに波を作りながら音響を立てずして追い付ける速力と、その機械的な圧進力——。それから、束を握らせるために、両腕を自由にしておかねばならないので、何よりまず膝ひかがみ窩を刺戟して、イエンドラシック反射を起さねばならない——。そういうすべての要素を具備している

のが、この手働四輪車でして、その犯行は寸秒の間に、声を立てる間まがなかつたほど恐ろしい速度で行われたのでした。ですから、貴方の不具な部分をもつてせずには、誰一人博士に、自殺の証跡を残して、息の根を止めることは不可能だったのですよ」

「すると、敷物カーペットの波は何のためだい」熊城が横合から訊ねた。

「それが、内惑星軌道半径の縮伸じゃないか。いったん点ピリオドにまで縮んだものを、今度は波の頂点に博士の頸くびを合わせて、敷物カーペットを旧もとどおりに伸ばしていったのだ。

だから、束つかを握り締めたままで、博士の死体は室へやの中  
 央に来てしまったのだよ。勿論、空室あきべやでも、鎖されて  
 いたのではないから、ほとんど跡は残らぬし、死後は  
 けっして固く握れるものじゃない。けれども、だいた  
 い検屍官なんてものが、秘密の不思議な魅力に、感受  
 性を欠いているからなんだよ」

その時、この殺気に充ちた陰気な室の空気を揺ゆすぶつ  
 て、古風な経文モチット歌を奏でる、侘わびしい鐘鳴器カリリヨンの音が響い  
 てきた。法水は先刻さつき尖塔の中に鍾舌鐘ピール（鍾舌のある振り鐘）  
 は見たけれども、鐘鳴器カリリヨン（鍵盤を押して音調の異なる鐘を叩きピアノ様

の作用をするもの)の所在には気がつかなかつた。しかし、その異様な対照に気を奪われている矢先だつた。それまで肱掛うつぶに俯伏していた真斎が必死の努力で、ほとんど杜絶とぎれがちなながらも、微かな声を絞り出した。

「嘘だ……算哲様はやはり室へやの中央で死んでいたのだ……。しかし、この光栄ある一族のために……儂わしは世間の耳目を怖れて、その現場から取り除いたものがあつた……」

「何をです？」

「それが黒死館の悪霊、テレーズの人形でした……背



後から負おぶさったような形で死体の下になり、短剣を握った算哲様の右手の上に両掌を重ねていたので……それで、衣服を通した出血が少なかつたことから……儂わしは易介に命じて」

検事も熊城も、もう竦すくみ上るような驚愕の色は現わさなかつたけれども、すでに生存の世界にはないはずの不思議な力の所在が、一事象ごとに濃くなつてゆくのを覚えた。しかし、法水は冷然と云い放つた。

「これ以上はやむを得ません。僕もこの上進むことは不可能なんですから。博士の死体は既とうに泥のような無

機物ですし、もう起訴を決定する理由と云えば、貴方の自白以外にないのですからね」

そう法水が云い終った時だった。その時経文歌モテットの音が止んだかと思うと、突然思いもよらぬ美しい絃いとの音が耳膜を揺りはじめた。遠く幾つかの壁を隔てた彼方で、四つの絃楽器は、あるいは荘嚴な全絃合奏コーンダとなり、時としては囁く小川whisperのように、第一提琴ファースト・ヴァイオリンがサマリアの平和を唱ってゆくのだった。それを聴くと、熊城は腹立たしそうに云い放った。

「何だあれば、家族の一人が殺されたと云うのに」

「今日は、この館の設計者クロード・デイグスビイの忌斎日きさいびでして……」と真斎は苦し気な呼吸の下に答えた。

「館の暦表の中に、帰国の船中ラングーン蘭貢で身を投げた、デイグスビイの追憶が含まれているのです」

「なるほど、声のない鎮魂樂レキエムですね」と法水は恍惚こうこつと なつて云つた。「なんだかジョン・ステナーの作風に似ているような気がする。支倉君、僕はこの事件であるの四重奏団クワルテットの演奏が聴けようとは思わなかつたよ。サア、礼拝堂へ行ってみよう」

そうして、私服に真斎の手当を命じて、この室へやを去

らしめると、

「君は何故、<sup>なぜ</sup>最後の一步というところで追求を弛めたのだ？」と熊城はさつそくに詰り掛つたが、意外にも、法水は爆笑を上げて、

「すると、あれを本気にしているのかい」

検事も熊城も、途端に嘲笑されたことは覺つたけれども、あれほど整然たる条理に、とうていそのままを信ずることは出来なかつた。法水は可笑しさを耐えるような顔で、続いて云つた。

「実をいうと、あれは僕の一番厭な<sup>どうかつ</sup>恫喝訊問なんだよ。

真斎を見た瞬間に直感したものがあつたので、応急に組み上げたのだつたけれど、真実の目的と云えば、実はほかにあつたのだ。ただ真斎よりも、精神的に優越な地位を占めたい——というそれだけの事なんだよ。この事件を解決するためには、まずあの頑迷な甲羅を砕く必要があるのだ」

「すると、扉の窪みは」

「二二が五さ。あれは、この扉の陰険な性質を剔抉てっけつしている。また、それと同時に水の跡も証明しているんだ」まさしく仰天に価する逆転だった。グワンと脳天

をドヤされたかのように茫然となつた二人に、法水はさつそく説明を始めた。「水で扉を開く。つまり、この扉を鍵なくして開くためには、水が欠くべからざるものだったのだ。ところで、最初それと類推させたものを話すことにしよう。マームズベリー卿が著わした『ジョン・デイ博士鬼説』という古書がある。それには、あの魔法博士デイの奇法の数々が記されているのだが、その中で、マームズベリー卿を驚嘆させた隠顕扉の記録が載っていて、それが僕に、水で扉を開け——と教ひらえてくれたのだ。勿論一種の信仰療法なんだが、ま

クリスチャンサイエンス

ずデイは、瘡患者を附添いおこりといっしよに一室へ入れ、

鍵を附添いに与えて扉を鎖さしめる。そして、約一時

間後に扉を開くと、鍵が下りているにもかかわらず、

扉は化性のものでもあるかのように、スウツと開かれ

てしまう。そこでデイは結論する——憑神つきがみの半山羊人フオーン

は遁のがれたり——と。ところが、まさしく扉の附近には

山羊の臭気がするので、それで患者は精神的に治癒さ

れてしまうのだ。ねえ熊城君、その山羊の臭気という

ものの中に、デイの詐術が含まれているのだよ。とこ

ろで、君はたぶん、ランプレヒト湿度計ハイグロメーターにもあると

おりで、毛髪が湿度によつて伸縮するばかりでなく、その度が長さに比例する事実も知つてゐるだろう。そこで、試みに、その伸縮の理論を、落し金の微妙な動きに應用して見給え。知つてのとおり、弾条ぜんまいで使用する落し金というのは、元來、打附木材住宅ハーフ・チムバア（漆喰壁の上に規則的な木配りで荒削りの木材を打ち附ける英国十八世紀初頭の建築様式）特有のものかんと云われているのだが、大体が平たい真鍮桿の端に遊離してゐるもので、その桿の上下によつて、支点到に近い角体の二辺に沿い起倒する仕掛になつてゐる。そして、支点到に近づくほど起倒の内角が小さくなると



いうことは、たぶん簡単な理法だから判っているだろう。そこで、落し金の支点に近い一点を結んで、その紐を、倒れた場合水平となるように張っておき、その線の中心とすれすれに、頭髮の束で結んだ重錘おもりを置いたと仮定しよう。そして、鍵穴から湯を注ぎ込む。すると、当然湿度が高くなるから、毛髪が伸長して、重錘おもりが紐の上に加わってゆき、勿論紐が弓状ゆみなりになつてしまふ。したがって、その力が落し金の最小内角に作用して、倒れたものが起きてしまふのだ。だから、デイの場合は、それが羊の尿いぼりだつたらうと思うのだがね。

またこの扉では、せむし 僂の眼の裏面が、たぶんその装置に必要な剝穴こけつだったので、その薄い部分が、ひんぼん 頻繁に繰り返される乾湿のために、凹陷を起したに違いないのだよ。つまり、その仕掛を作ったのが算哲で、それを利用して永い間出入りしていた人物と云うのが、犯人に想像されるんだ。どうだね支倉君、これで先刻さつき人形の室で、犯人が何故糸と人形の技巧トリツクを遺して置いたのか判るだろう。外側からの技巧トリツクばかりを詮索していた日には、この事件は永遠に、扉一つが鎖してしまふのだ。それに、そろそろこの辺から、ウイチグス呪法の

霧囲気が濃くなつてゆくような気がするじゃないか」

「すると、人形はその時の溢こぼれた水を踏んだという事になるね」と検事は、引きつれたような声を出した。

「もう後は、あの鈴のような音おとだけなんだ。これで犯人を伴つた人形の存在は、いよいよ確定されたとみて差支えない。しかし、君の神経が閃ひらめくたびごとに、その結果が、君の意向とは反対の形で現われてしまう。それは、いったいどうしたつてことなんだい」

「ウム、僕にもどうも解げせないんだ。まるで、奔わなの中を歩いているような気がするよ」と法水にも錯乱した様

子が見えると、

「僕はその点が両方に通じてやしないかと思うよ。いまの真斎の混乱はどうだ。あれはけっして看過しちやならん」とこれぞとばかりに、熊城が云った。

「ところがねえ」と法水は苦笑して、「実は、僕の恫愕どうかつ問には、妙な言ことばだが、一種の生理拷問せいりこうもんとでも云うもの

が伴っている。それがあつたので、初めてあんな素晴らしい効果が生れたのだよ。ところで、二世紀アリウス神学派の豪僧ニユーマファイリレイウスは、こういう談法論を述べている。靈氣ニユーマ（呼吸の義）は呼気とともに体外に脱出

するものなれば、その空虚を打て——と。また、比喩には隔絶したるものを択べ——と。まさに至言だよ。

だから、僕が内惑星軌道半径をミリミクロンの殺人事件に結び付けたというのも、究極のところは、共通

した<sup>ファクター</sup>因数を容易に気づかれたくないからなんだ。そう

じゃないか、エディントンの『<sup>スペース・タイム・エンド・グレイティション</sup>空間・時・及び引力』

でも読んだ日には、その中の数字に、てんで対称的な観念がなくなつてしまう。それから、ビネーのような中期の生理的心理学者でさえも、肺臓が満ちた際の均衡と、その質量的な豊かさを述べている。無論あの場

合僕は、まさに吸いき気を引こうとする際にのみ、激情的な言葉を符合させていったのだが、またそれと同時に、もしやと思つた生理的な衝撃シヨツクも狙つていたのだ。それは、喉頭後筋搐搦ミユールマンちくできという持続的な呼吸障害なんだよ。ミユールマンはそれを『老年の原因』の中で、筋質骨化に伴う衝動心理現象と説いている。勿論間歇性かんけつのものには違いないけれども、老齡者が息を吸い込む中途で調節を失うと、現に真齋で見るとおりの、無残な症状を発する場合があるのだ。だから、心理的にも器質的にも、僕は滅多に当らない、その二つの目を振り出し

たという訳なんだよ。とにかく、あんな間違いだらけの説なので、いつさい相手の思考を妨害しようとしたのと、もう一つは去勢術なんだ。あの蠟かきの殻を開いて、僕はぜひにも聴かねばならないものがあるからだよ。つまり、僕の権謀術策たるや、ある一つの行為の前提にすぎないのだがね」

「驚いたマキアベリーだ。しかし、そう云うのは？」と検事が勢い込んで訊ねると、法水は微かに笑った。

「冗談じゃないよ、君の方でしたくせに。先刻さっき僕に訊ねた（一）・（二）・（五）の質問を忘れたのかい。それに、

あのリシユリユウみたいな実権者は、不浄役人どもに黒死館の心臓を窺わせまいとしている。だからさ、あの男が鎮静注射から醒めた時が、事によるとこの事件の解決かもしれないのだよ」

法水は相変らず茫漠たるものを仄めかしただけで、それから鍵孔に湯を注ぎ込み、実験の準備をしてから、演奏台のある階下の礼拝堂に赴いた。広間を横切ると、楽の音は十字架と楯形の浮彫のついた大扉の彼方に迫っていた。扉の前には一人の召使が立っていて、法水がその扉を細目に開くと、冷やりとした、だが広い



空間を佗わびしげに揺れている、寛闊な空気に触れた。それは、重量的な荘嚴なもののみが持つ、不思議な魅力だった。礼拝堂の中には、褐あかい蒸気の微粒がいつぱいに立ち罩こめていて、その靄もやのような暗さの中で、弱い平穏な光線が、どこか鈍い夢のような形で漂うている。その光は聖壇の蠟燭ろうそくから来ているのであつて、三稜形をした大燭台の前には乳香が燠たかれ、その烟けむりと光とは、火かせん箭せんのように林立している小円柱を沿上へのぼつて行つて、頭上はるか扇形おうぎがたに集束されている穹窿きゆうりゆうの辺にまで達していた。楽の音は柱から柱へと反射していつて、異様

な和声を湧き起し、今にも、列拱からアルカード金色燦然たる聖服をつけた、司教助祭の一群が現われ出るような気がするのであった。が、法水にとつてはこの空気が、問罪的な不気味なものとししか考えられなかつた。

聖壇の前には半円形の演奏台がしつら設えてあつて、そこに、ドミニク僧団の黒と白の服装をした、四人の楽人が無我恍惚の境に入っていた。右端の、うたん不細工な巨石としか見えないチェリスト、オットカール・レヴェズは、そこに半月形の髻ひげでも欲しそうなフックラ膨んだ頬たいくをしていて、ひょうたん小さな瓢箪形の頭が

載っていた。彼はいかにも楽天家らしく、おまけに、チェロがギターほどにしか見えない。その次席が、ヴィオラ奏者のオリガ・クリヴォフ夫人であつて、眉弓が高くまなじり眦が鋭く切れ、細い鉤形の鼻をしているところろは、いかにも峻厳な相貌であつた。聞くところによれば、彼女の技量はかの大独奏者、クルチスをも凌駕りようがすると云われているが、それもあるうか演奏中の態度にも、傲岸ごうがんな気魄と妙に気障きざな、誇張したところが窺うかがわれた。ところが、次のガリバルダ・セレナ夫人は、すべてが前者と対蹠的な観をなしていた。皮膚が蠟色に

透き通つて見えて、それでなくても、顔の輪廓が小さく、柔和な緩い円ばかりで、小じんまりと作られている。そして、黒味がちのパツチリした眼にも、凝視するような鋭さが無い。総じてこの婦人には、憂鬱など

ここに、謙讓な性格が隠されているように思われた。

以上の三人は、年齢としじろ四十四、五と推察された。そして、

最後に第一 ヴァイオリン 提琴を弾いているのが、やつと十七に

なつたばかりの降矢木旗太郎だった。法水は、日本中で一番美しい青年を見たような気がした。が、その美しさもいわゆる俳優的な遊惰な媚色びしまくであつて、どの線

どの陰影の中にも、思索的な深みや数学的な正確なものが現われ出てはいない。と云うのも、そういうった叡知えいちの表徴をなすものが欠けているからであつて、博士の写真において見るとおりの、あの端正な額の威厳がないからであつた。

法水は、とうてい聴くことは出来ぬと思われた、この神秘楽団の演奏に接することは出来たけれども、彼は徒らいたずらに陶醉のみはしていなかった。と云うのは、楽曲の最後の部分になると、二つの提琴が弱音器を附けたのに気がついたことであつて、それがために、低音

の絃げんのみが高く圧したように響き、その感じが、天国の栄光に終る莊嚴な終曲フィナーレと云うよりも、むしろ地獄から響いてくる、恐怖と嘆きの呻うめきとでも云いたいような、実に異様な感を与えたことである。終止符に達する前に、法水は扉を閉じて側の召使バトラーに訊ねた。

「君は、いつもこうして立番しているのかね」

「いいえ、今日が初めてでございます」と召使バトラー自身も解せぬらしい面持だったが、その原因は何となく判つたような気がした。それから、三人がゆつたりと歩んで行くうち、法水が口をきって、

「まさにあの扉が、地獄の門なんだよ」と呟いた。

「すると、その地獄は、扉の内か外かね」と検事が問い返すと、彼は大きく呼吸をしてから、すこぶる芝居がかった身振で云った。

「それが外なのさ。あの四人は、確かに怯えきつてい  
るんだ。もしあれが芝居でさえなければ、僕の想像と  
符合するところがある」

鎮魂楽レキエムの演奏は、階段を上りきった時に終った。そして、しばらくの間は何も聞えなかつたけれども、それから三人が区劃扉を開いて、現場の室へやの前を通る、

廊下の中に出た時だった。再び鐘鳴器カリリヨンが鳴りはじめて、今度はラツサスの讚詠アンセムを奏ではじめたのであった（ダビデの詩篇第九十一篇）。

夜はおどろくべきことあり

昼はとびきたる矢あり

幽暗くらきにはあゆむ疫癘えやみあり

日午ひるにはそこなう激しき疾やまいあり

されどなんじ畏おそることあらじ



法水はそれを小声で口誦くちずさみながら、讚詠アンセンムと同じ葬列

のような速度で歩んでいたが、しかし、その音色は繰り返す一節ごとに衰えてゆき、それとともに、法水の顔にも憂色うれしが加わっていった。そして、三回目の繰り返しの時、幽暗くらきには——の一節はほとんど聞えなかつたが、次の、日午ひるには——の一節に來ると、不思議な事には、同じ音色ながらも倍音が発せられた。そうして、最後の節はついに聴かれなかつたのであつた。

「なるほど、君の実験が成功したぜ」と検事は眼を円くしながら、鍵の下りた扉を開いたが、法水のみは正面

の壁に背を凭もたせたまま、暗然と宙を躓みつめている。が、  
やがて呖つぶやくような微かな声で云った。

「支倉君、拱廊そでろうかへ行かなけりやならんよ。彼処あそこの吊具  
足の中で、たしか易介が殺されているんだ」

二人は、それを聴いて思わず飛び上ってしまった。

ああ、法水はいかにして、鐘鳴器カリリヨンの音から死体の所在  
を知ったのであろうか!?

三、易介は挟まれて殺さるべし

ところが、のりみず法水はすぐ鼻先のそでろうか拱廊へは行かずに、円廊を迂回して、礼拝堂の円蓋ドームに接している鐘楼階段の下に立った。そして、課員全部をその場所に召集して、まずそこを始めに、屋上から壁廊上の堡楼ほろうにまで見張りを立て、尖塔下の鐘楼を注視させた。こうしてちようど二時三十分、鐘鳴器カリリヨンが鳴り終つてからわずかに五分の後には、蟻も洩らさぬ緊密な包囲形が作られたの

であつた。そのすべてが神速で集中的であり、もう事件がこれで終りを告げるのではないかと思われたほどに、結論めいた緊張の下に運ばれていったのだつた。けれども、勿論法水の脳髓を、截ち割つて見ないまでは、はたして彼が何事を企図しているのか——予測を許さぬことは云うまでもないのである。

ところで読者諸君は、法水の言動が意表を超絶している点に気づかれたであろう。それがはたして的中しているや否やは別としても、まさに人間の限界を越さんばかりの飛躍だつた。鐘鳴器カリリヨンの音を聴いて、易介の

死体を拱廊そでろうかの中に想像したかと思うと、続いて行動に現われたものは、鐘楼を目している。しかし、その晦迷錯綜としたものを、過去の言動に照し合わせてみると、そこに一縷いちる脈絡するものが発見されるのである。と云うのは、最初検事の箇条質問書に答えた内容であつて、その後執事の田郷真斎に残酷な生理拷問を課してまでも、なおかつ後刻に至つて彼の口から吐かしためんとした、あの大きな逆説パラドックスの事であつた。勿論その共変法じみた因果関係は、他の二人にも即座に響いていた。そして、その驚くべき内容が、たぶん真斎の陳

述を俟たずとも、この機会に闡明せんめいされるのではないか  
と思われるのだった。が、指令を終った後の法水の態  
度は、また意外だった。再び旧もとの暗い顔色がんしよくに帰って、  
懐疑的な錯乱したような影が往来を始めた。それから  
拱廊そでろうかの方へ歩んで行くうちに、思いがけない彼の嘆声  
が、二人を驚かせてしまった。

「ああ、すっかり判らなくなってしまったよ。易介が  
殺されて犯人が鐘楼にいるのだとすると、あれほどの  
確な証明が全然意味をなさなくなる。実を云うと、僕  
は現在判っている人物以外の一人を想像していたんだ

が、それがとんだ場所へ出現してしまった。まさかに別個の殺人ではないだろうがね」

「それじゃ、何のために僕等は引つ張り廻されたんだ？」検事は憤激の色を作なして叫んだ。「だいたい最初に君は、易介が拱廊の中で殺されていると云った。ところが、それにもかかわらず、その口の下で見当違いの鐘楼を見張らせる。軌道がない。全然無意味な転換じゃないか」

「さして、驚くには当たらないさ」と法水は歪んだ笑を作つて云い返した。「それと云うのが、鐘鳴器カリリヨンの讚詠アンセムな

んだよ。演奏者は誰だか知らないが、しだいに音が衰えてきて、最終の一節はついに演奏されなかつたのだ。それに最後に聞えた、日午ひるは——のところが、不思議にも倍音(ド・レミレミ・ファと最終のドを基音にした、一オクターヴ上の音階)を発している。ねえ、支倉君、これは、けだし一般的な法則じゃあるまいと思うよ」

「では、とりあえず君の評価を承うけたまわろうかね」と熊城が割って入ると、法水の眼に異常な光輝が現われた。

「それが、まさに悪夢なんだ。怖ろしい神秘じゃないか。どうして、散文的に解る問題なものか」と一旦は



狂熱的な口調だったのが、しだいに落着いてきて、「と  
ころで、最初易介が、すでにこの世の人でないとして  
だ——勿論何秒か後には、その嚴然たる事実が判るだ  
ろうと思うが、さてそうになると、家族全部の数に一つ  
の負数が剩あまつてしまふのだ。で、最初は四人の家族だ  
が、演奏を終つてすぐ礼拝堂を出たにしても、それか  
ら鐘楼へ来るまでの時間に余裕がない。また、真齋は  
あらゆる点で除外されていい。すると、残つたのは伸  
子と久我鎮子になるけれども、一方、鐘鳴器カリリヨンの音がパ  
タリと止んだのではなく、しだいに弱くなつていった

点を考えると、あの二人がともに鐘楼にいたという想像は、全然当らないと思う、勿論その演奏者に、何か異常な出来事が起つたには違いないけれども、その矢先、讚詠アンセムの最後に聞えた一節が、微かながら倍音を発したのだ。云うまでもなく、鐘鳴器カリリヨンの理論上倍音は絶対に不可能なんだよ。すると熊城君、この場合鐘楼には、一人の人間の演奏者以外に、もう一人、奇蹟的な演奏を行える化性のものがいなければならぬ。ああ、あいつはどうして鐘楼へ現われたのだらうか？」

「それなら、何故先に鐘楼を調べないのだね？」と熊城

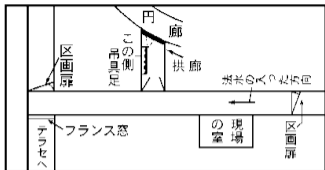
が詰り掛ると、法水は、幽に声を慄ふるわせて、

「実は、あの倍音に陥かんせい穽があるような気がしたからなんだ。なんだか微妙な自己曝露のような気がしたので、あれを僕の神経だけに伝えたのにも、なんとなく奸計たくらみがありそうに思われたからなんだよ。第一犯人が、それほど、犯行を急がねばならぬ理由が判らんじやないか。それに熊城君、僕等が鐘楼でまごまごしている間、階下の四人はほとんど無防禦なんだぜ。だいたいこんなダダっ広い邸の中なんてものは、どこもかしこも隙だらけなんだ。どうにも防ぎようがない。だから、既

往のものは致し方ないにしても、新しい犠牲者だけは何とかして防ぎ止めたいと思つたからなんだ。つまり、僕を苦しめている二つの観念に、各々対策を講じておいたという訳さ」

「フム、またお化けか」と検事は下唇を噛みしめて呟いた。「すべてが度外れて気違いじみている。まるで犯人は風みたいに、僕等の前を通り過ぎては鼻を明かしているんだ。ねえ法水君、この超自然はいつたいどうなるんだい。ああ徐々だんだんに、鎮子の説の方へまとまつてゆくようじゃないか」

未だ<sup>いま</sup>現実<sup>いま</sup>に接していないにもかかわらず、すべての事態が、明白に集束して行く方向を指し示している。やがて、開け放たれた<sup>そでろうか</sup>拱廊の入口が眼前に現われたが、突当りの円廊に開いている片方の扉が、いつの間にか鎖じられたとみえて、内部<sup>なか</sup>は暗黒に近かった。その冷やりと触れてくる空気の中で、微かに血の臭気が匂つてきた。それが、捜査開始後、未だ<sup>ま</sup>四時間にすぎないのである。それにもかかわらず、法水等が暗中摸索を続けているうちに、その間犯人は隠密な<sup>ちようりよう</sup>跳梁<sup>ちようりよう</sup>を行い、すでに第二の事件を敢行しているのだ。



法水は、すぐ円廊の扉を開いて  
 光線を入れてから、左側に立ち並  
 んでいる吊具足の列を見渡しは  
 じめた。が、すぐに「これだ」と  
 云って、中央の一つを指差した。  
 その一つは、萌黄匂もえぎにおいの鎧よろいで、それ  
 に鍬形くわがた五枚立の兜かぶとを載せたほか、  
 びしやもんしのこて毘沙門篠の両籠罩こぼかま、  
 小袴すねあて、脛当すねあて、  
 鞠沓まりぐつまでもつけた本格の武者装  
 束。面部から咽喉にかけての所

は、咽輪のどわと黒漆くろぬりの猛悪な相をした面当めんぼうで隠かくされてあつた。そして、背には、軍配じゅっげつ日月じつげつの中央ちゅうおうに南無日輪摩利支天なむにちりんまりしてんと認しためた母衣ほろを負おい、その脇わきに竜虎りゅうこの旗差物はたさしものが挟くわんであつた。しかし、その一列いっけつのうちに注目ちゅうもくすべき現象げんしょうが現あらわれていたと云うのは、その萌黄もへい匂におを中心ちゅうしんにして、左右さゆうの全部ぜんぶが等おなしく斜かために向むかいていいるばかりでなく、その横よこ向きむきになつた方向かほうが、交互かわるがわる一つ置きひとつおきに一致いちじしていて、つまり、右みぎ、左ひだり、右みぎという風ふうに、異様いさむな符合ごうごが現あらわれている事ことだつた。法水ほふすいがその面当めんぼうを外はずすと、そこに易介えいけいの凄惨せつさんな死相しさうが現あらわれた。

はたせるかな、法水の非凡な透視は適中していたのだ。のみならず、ダンネベルグ夫人の屍光と代り合つて、この侏儒こびとの傴僂せむしは奇怪千万にも、甲冑を着し宙吊りになつて殺されている。ああ、ここにもまた、犯人の絢爛けんらんたる裝飾癖が現われているのだつた。

最初眼についたのは、咽喉につけられている二条の切創きりきずだつた。それを詳しく云うと、合わせた形がちようど二の字形をしていて、その位置は、甲状軟骨から胸骨にかけての、いわゆる前頸部であつたが、創形が楔形くさびがたをしているので、鎧通し様のものと推断された。



また、深さを連ねた形状が、U形をしているのも奇様である。上のものは、最初気管の左を、六センチほどの深さに刺してから刀を浮かし、今度は横に浅い切創せつそうを入れて迂廻してゆき、右側にくると、再びそこへグイと刺し込んで刀を引き抜いている。下の一つもだいたい同じ形だが、その方向だけは斜め下になつていて、創底は胸腔内に入つていた。しかし、いずれも大血管や臓器には触れていず、しかも、巧みに気道を避けているので、勿論即死を起す程度のものではないことは明らかだった。

それから、天井と鎧の綿貫わたぬきとを結んである二条の麻紐を切り、死体を鎧から取り外しに掛ると、続いて異様なものが現われた。それまでは、不自然な部分が咽輪のどわの垂たれで隠されていたので判らなかつたのだが、不思議な事に、易介は鎧を横に着ているのだつた。すなわち、身体を入れる左脇の引合口の方を背後にして、そこからはみ出した背中の瘤起りゅうきを、幌骨ほろぼねの刳形くりがたの中に入れてある。そして、傷口から流れ出たドス黒い血は、小袴まりぐつから鞆沓たもとの中にまで滴り落ちていて、すでに体温は去り、硬直は下顎骨に始まっていて、優に死後二時

間は経過しているものと思われた。が、死体を引き出してみると、愕然がくぜんとさせたものがあつた。と云うのは、全身にわたり著明な窒息徴候が現われている事で、無残な痙攣けいれんの跡が到る処にゆきわたつているばかりではなく、両眼にも、排泄物にも、流血の色にも、まざまざと一目で領うなずけるものが残されていた。のみならず、その相貌は実に無残をきわめ、死闘時の激しい苦痛と懊惱おうのうとが窺うかがわれるのだった。が、しかし、気管中にも栓塞せんそくしたらしい物質は発見されず、口腔を閉息した形跡もないばかりか、索痕さつこんや扼殺やくさつした痕跡は勿論見出さ

れなかつた。

「まさにならざレフ（聖アレキセイ寺院の死者）の再現じゃないか」と、法水は呻く<sup>うめ</sup>ような声を出した。「この傷は死後に付けられているんだよ。それが、刀を<sup>とう</sup>引き抜いた断面を見ても判るんだ。通例では、刺し込んだ途端に引き抜くと、血管の断面が収縮してしまふもんだが、これはダラリと<sup>しかい</sup>咨開している。それに、これほど顕著な特徴をもつた、窒息死体を見たことはないよ。残忍冷酷もきわまつている。——恐らく、想像を絶した怖ろしい方法に違いない。そして、窒息の原因をなしたも

のが、易介には徐々<sup>だんだん</sup>と迫つていったのだ」

「それが、どうして判るんだ？」と熊城が不審な顔をすると、法水はその陰惨きわまる内容を明らかにした。「つまり、死闘の時間が徴候の度に比例するからなんだが、まさにこの死体は、法医学に新しい例題を作ると思うね。だって、その点を考えたらどうしたって、易介がしだいに息苦しくなつていったと想像するよりほかにないじゃないか。たぶん、その間易介は凄惨な努力をして、なんとかして死の鎖を断とうとしたに違いないのだ。しかし、身体は鎧の重量のために活力を

失っている。もはやどうすることも出来ない。そうして、空しく最後の瞬間が来るのを待つうちに、たぶん幼少期から現在までの記憶が、電光のように閃いて、それが、次から次へと移り変っていったに違いないのだよ。ねえ熊城君、人生のうちでこれほど悲惨な時間があるだろうか。また、これほど深刻な苦痛を含んだ、残忍な殺人方法がまたと他にあるだろうか」

さすがの熊城も、その思わず眼を覆いたいような光景を想起して、ブルツと身慄みぶるいしたが、「しかし、易介は自分からこの中に入ったのだろうか。それとも犯人

が……」

「いや、それが判れば殺害方法の解決もつくよ。第一、悲鳴をあげなかつたことが疑問じゃないか」と法水がアツサリ云い退けると、検事は兜の重量でペシヤンコになつてゐる死体の頭顱あたまを指差して、彼の説を持ち出した。

「僕はなんだか、兜の重量に何か関係があるような気がするんだ。無論、創きずと窒息の順序が顛倒してりや、問題はないがね……」

「そうなんだ」と法水は相手の説に頷うなずいたが、「一説に

は、頭蓋のサントリニ静脈は、外力をうけてからしばらく後に、血管が破裂すると云うからね。その時は、脳質が圧迫されるので、窒息に類した徴候が表われるそうだよ。しかし、これほど顕著なものじゃない。だいたいこの死体のは、そういった頓死的なものではないのだよ。じわじわと迫っていったのだ。だから、むしろ直接死因には、咽輪のどわの方に意味がありそうじゃないか。無論気管を潰すというほどじゃないが、相当頸部の大血管は圧迫されている。すると、易介がなぜ悲鳴を上げなかったか——判るような気がするじゃない



か」

「フム、と云うと」

「いや、結果は充血でなくて、反対に脳貧血を起すのだよ。おまけに、グリーンジングルという人は、それに癲癇てんかん様の痙攣けいれんを伴うとも云っているんだ」と法水はなにげなさそうに答えたけれども、なにやら逆説パラドックスに悩んでいるらしく、苦渋な暗い影が現われていた。熊城は結論を云った。

「とにかく、切創せつそうが死因に関係ないとする、この犯行は、恐らく異常心理の産物だろう」

「いやどうして」と法水は強く頸くびを振って、「この事件の犯人ほど冷血な人間が、どうして打算以外に、自分の興味だけで動くもんか」

それから、指紋や血滴の調査を始めたが、それには、いっこう収穫はなかった。わけでも甲冑の内部以外には、一滴のものすら発見されなかったのである。調査が終ると、検事は、法水が透視的な想像をした理由を訊ねた。

「君はどうして、易介がここで殺されているのが判つたのだね」

「無論鐘鳴器カリリヨンの音でだよ」と法水は無雑作に答えた。

「つまり、ミルの云う剰余推理さ。アダムスが海王星を発見したというのも、剰余の現象は或る未知物の前件である——という、この原理以外にはないことなんだ。だって、易介みたいな化物が姿を消しても、発見されない。そこへ持つてきて、倍音以外にもう一つ、鐘鳴器カリリヨンの音に異常なものがあつたからだよ。扉で遮断された現場の室へやとは異なつて、廊下では、空間が建物の中に通じているのだからね」

「と云うのは……」

「その時残響が少なかつたからだよ。だいたい鐘には、  
洋琴ピアノみたい振動を止める装置がないので、これほど  
残響のいちじるしいものはない。それに、鐘鳴器は一  
つ一つに音色ねいろも音階も違うのだから、距離の近い点や  
同じ建物の中で聴いていると、後から後からと引き続  
いて起る音に干渉し合つて、終いには、不愉快な噪音そうおん  
としか感ぜられなくなつてしまふのだ。それを、  
シャルシユタインは色彩円の廻転に喩たとえて、初め赤  
と緑を同時にうけて、その中央に黄を感じたような感  
覚が起るが、終いには、一面に灰色のものしか見えな

くなつてしまふ——と。まさに至言なんだよ。まして、この館には、所々円天井や曲面の壁や、また気柱を作っているような部分もあるので、僕は混沌としたものを想像していた。ところが、先刻さつきはあんな澄んだ音ねが聞えたのだ。外気の中へ散開すれば、当然残響が稀薄になるのだから、その音は明らかに、テラスと続いている仏蘭西窓フランスから入つて来る。それを知つて、僕は思わず愕然がくつとしたのだ。では何故なぜかと云うと、どこかに、建物の中から広がってくる、噪音を遮断したものがなけりやならない。区劃扉は前後とも閉じられてい

るのだから、残っているのは、そでろうか 拱廊の円廊側に開いて  
いる扉一つじゃないか。しかし、先刻さつき二度目に行つた  
時は、確か左手の吊具足側の一枚を、僕は開け放しに  
しておいたような記憶がする。それに、あそこは他の  
意味で僕の心臓に等しいのだから、絶対に手をつけぬ  
ように云いつけてあるんだ。無論それが閉じられてし  
まえば、この一劃には、吸音装置が完成して、まず残  
響に対しては無響室デット・ルームに近くなつてしまふからだ。だか  
ら、僕等に聞えてくるのは、テラスから入る、強い一  
つの基音よりほかになくなつてしまふのだよ」

「すると、その扉は何が閉じたのだ？」

「易介の死体さ。生から死へ移って行く凄惨な時間のうちに、易介自身ではどうにもならない、この重い鎧よろいを動かしたものがあつたのだ。見るとおりに、左右が全部斜めになつていて、その向きが、一つ置きに左、右、左となつていているだろう。つまり、中央の萌黄匂もえぎにおいが廻転したので、その肩罩板そでいたが隣りの肩罩を横から押し、その具足も廻転させ、順次にその波動が最終のものにまで伝わっていったのだ。そして、最終の肩罩板そでが把手ノックを叩いて、扉を閉めてしまったのだよ」

「すると、この鎧を廻転させたものは？」

「それが、兜かぶとと幌骨ほろぼねなんだ」と云つて、法水は母衣ほろを取

り除のけ、太い鯨筋げいきんで作つた幌骨を指し示した。「だつて、

易介がこれを通常の形に着ようとしたら、第一、背中の瘤起つかが支つかえてしまふぜ。だから、最初に僕は、易介

が具足の中で、自分の背の瘤起をどう処置するか考へてみた。すると思ひ当つたのは、鎧の横にある引合口ひきあひぐちを背にして、幌骨の中へ背瘤を入れさえすれば、――

という事だったのだ。つまり、この形を思ひ浮べたという訳だが、しかし病弱非力の易介には、とうていこ



れだけの重量を動かす力はないのだ」

「幌骨と兜？」と熊城は怪訝いぶかしそうに何度となく繰り返すのだったが、法水は無雑作に結論を云った。

「ところで、僕が兜と幌骨と云った理由を云おう。つまり、易介の体が宙に浮ぶと、具足全体の重心が、その上方へ移ってしまう。のみならず、それが一方に偏在してしまうのだ。だいたい、静止している物体が自動的に運動を起す場合というのは、質量の変化か、重点の移動以外にはない。ところが、その原因と云うのが、事実兜と幌骨にあったのだよ。それを詳しく云う

と、易介の姿勢はこうなるだろう。脳天には兜の重圧が加わっていて、背の瘤起は、幌骨の半円の中にスツポリと嵌り込み、足は宙に浮いている、云うまでもなく、これは非常に苦痛な姿勢に違いないのだ。だから、意識のあるうちは、当然手足をどこかで支えて凌いでいたろうから、その間は重心が下腹部辺りにあるとみて差支えない。ところが、意識を喪失してしまふと、支える力がなくなるので、手足が宙に浮いてしまい、今度は重点が幌骨の部分に移ってしまうのだ。つまり、易介自身の力ではなくて、固有の重量と自然の法則が

決定した問題なんだよ」

法水の超人的な解析力は、今に始まったことではないけれども、瞬間それだけのものを組み上げたかと思うと、馴れきった検事や熊城でさえも、脳天がジインと麻痺れゆくような感じがするのだった。法水は続いて云った。

「ところで、絶命時刻の前後に、誰がどこで何をしていたか判ればいいのだがね。しかし、これは鐘楼の調査を終ってからでもいいが……、とりあえず熊城君、やといにん傭人の中で、最後に易介を見た者を捜してもらいたい

のだ」

熊城は間もなく、易介と同年輩ぐらいの召使バトラーを伴つて戻つてきた。その男の名は、古賀庄十郎と云うのだった。

「君が最後に易介を見たのは、何時頃だったね」とさつそくに法水が切り出すと、

「それどころか、私は、易介さんがこの具足の中にいたのも存じておりますので。それから、死んでいるという事も……」と気味悪そうに死体から顔を外そむけながらも、庄十郎は意外な言ことばを吐いた。

検事と熊城は衝動的に眼を睜みはつたが、法水は和やかな声で、

「では、最初からの事を云い給え」

「初めは、確か十一時半頃だったろうと思いますが」と庄十郎は、割合悪怯わるびれのしない態度で答弁を始めた。

「礼拝堂と換衣室との間の廊下で、死人色しびといろをしたあの男に出会いました。その時易介さんは、とんだ悪運に魅入られて真先に嫌疑者にされてしまった——と、爪の色までも変ってしまったような声で、愚痴たらたらに並べはじめましたが、私は、ひよいと見るとあまり

充血している眼をしておりますので、熱があるのかと訊ねましたら、熱だつて出ずにはいないだろうと云つて、私の手を持つて自分の額に当てがうのです。まず八度くらいはあつたらうと思われました。それから、とぼとぼ<sup>サロン</sup>広間の方へ歩いて行つたのを覚えております。とにかく、あの男の顔を見たのは、それが最後でございました」

「すると、それから君は、易介が具足の中に入るのを見たのかね」

「いいえ、ここにある全部の吊具足が、グラグラ動いて

おりましたので……たぶんそれが、一時を少し廻った頃だったと思いますが、御覧のとおり円廊の方の扉が閉っていて、内部は真暗でございました。ところが金具の動く微かな光が、眼に入りましたのです。それで、一つ一つ具足を調べておりますうちに、偶然この萌黄匂いごての射籠罩とっさの蔭で、あの男の掌てのひらを掴んでしまったのです。咄嗟とっさに私は、ハハアこれは易介だたと悟りました。だいたいあんな小男でなければ、誰が具足の中へ身体からだを隠せるものですか。ですからその時、オイ易介さんと声を掛けましたが、返事もいたしませんでした。し

かし、その手は非常に熱ばんでおりまして、四十度は確かにあつたらうと思われました」

「ああ、一時過ぎてもまだ生きていたのだらうか」と検事が思わず嘆声をあげると、

「さようでございます。ところが、また妙なんでございます」と庄十郎は何事かを仄めかしつつ続けた。「その次はちようど二時のことで、最初の鐘鳴器カリルロンが鳴つていた時でございましたが、田郷さんを寝台に臥ねかしてから、医者に電話を掛けに行く途中でございました。もう一度この具足の側に来てみますと、その時は易介



さんの妙な呼吸使いが聞えたのです。私はなんだか薄気味悪くなってきたので、すぐに拱廊そでろうかを出て、刑事さんに電話の返事を伝えてから、戻りがけにまた、今度は思いきつて掌てのひらに触れてみました。すると、わずか十分ほどの間になんとしたことでしよう。その手はまるで氷のようになっていて、呼吸いきもすっかり絶えておりました。私は仰天して逃げ出したのでございます」

検事も熊城も、もはや言葉を発する気力は失せたらしい。こうして庄十郎の陳述によつて、さしも法医学の高塔が、無残な崩壊を演じてしまったばかりでない。

円廊に開いている扉の閉鎖が、一時少し過ぎだとする  
と、法水の窒息説も根柢から覆くつがえされねばならなかつ  
た。易介の高熱を知った時刻一つでさえ、推定時間に  
疑惑を生むにもかかわらず、一時間という開きはとう  
てい致命的だった。のみならず、庄十郎の挙げた実証  
によつて解釈すると、易介はわずか十分ばかりの間に、  
ある不可解な方法によつて窒息させられ、なおその後  
に咽喉のどを切られたと見なければならぬ。その名状し  
難い混乱の中で、法水のみは鉄のような落着きを見せ  
ていた。

「二時と云えば、その時鐘鳴器で経文歌カリリヨンが奏でられていた……。すると、それから讚詠アンセムが鳴るまでに三十分ばかりの間があるのだから、前後の聯関には配列的に隙がない。事によると鐘楼へ行ったら、たぶん易介の死因について、何か判つてくるかもしれないよ」と独白じみた調子で呟つぶやいてから、「ところで、易介には甲冑の知識があるだろうか」

「ハイ、手入れは全部この男がやっております、時折具足の知識を自慢げに振り廻すことがございますので」

庄十郎を去らせると、検事はそれを待つていたように云った。

「ちと奇抜な想像かもしれないがね。易介は自殺で、この創きずは犯人が後で附けたのではないだろうか」

「そうなるかねえ」と法水は呆れ顔で、「すると、事によつたら吊具足は、一人で着られるかもしれないが、だいたい兜しのびおの忍緒しのびおを締めたのは誰だね。その証拠しんこには、他のものと比較して見給え。全部正式な結法で、三乳みつちから五乳いっちまでの表裏二様——つまり六とおりの古式によつている。ところが、この鍬形五枚立の兜のみは、

甲冑に通曉している易介とは思われぬほど作法はずれなんだ。僕がいま、この事を庄十郎に訊ねたと云うのも、理由はやはり君と同じところにあつたのだよ」

「だが男結びじゃないか」と熊城が氣負つた声を出すと、

「なんだ、セキストン・ブレイクみたいなことを云うじゃないか」と法水は軽蔑的な視線を向けて、「たとえば男結びだろうと、男が履<sup>は</sup>いた女の靴跡があるだろうとどうだろうと……、そんなものが、この底知れない事件で何の役に立つもんか。これはみな、犯人の道程標<sup>みちしるべ</sup>にす

「ぎないんだよ」と云つてからものうげ懶気な声で、

「易介は挟まれて殺さるべし——」と呟いた。

黙示図において、易介の屍様を預言しているその一句は、誰の脳裡にもあることだったけれども、妙に口にするのを阻はばむような力を持っていた。続いて、引き摺られたように検事も復誦したのだったが、その声がまた、この沼水のような空気を、いやが上にも陰気なものにしてしまった。

「ああ、そうなんだ支倉君、それが兜と幌骨——なんだよ」と法水は冷静そのもののように、「だから、一見し

たところでは、法医学の化物みたいでも、この死体に焦点が二つあるうとは思われんじゃないか。むしろ、本質的な謎というのは、易介がこの中へ、自分の意志で入ったものかどうかということと、どうして甲冑を着たか……つまり、この具足の中に入る前後の事情と、それから、犯人が殺害を必要としたところの動機なんだ。無論僕等に対する挑戦の意味もあるだろうが」

「ぼか莫迦な」熊城は憤懣ふんまんの気を罩こめて叫んだ。「口を塞ふさぐよりも針を立てよ——じゃないか。見え透いた犯人の自衛策なんだ。易介が共犯者であるということは、も

うすでに決定的だよ。これがダンネベルグ事件の結論なんだ」

「どうして、ハプスブルグ家の宮廷陰謀じゃあるまいし」と法水は再び、直観的な捜査局長を嘲った。

「共犯者を使つて毒殺を企てるような犯人なら、既に今頃、君は調書の口述をしていられるぜ」

それから廊下の方へ歩み出しながら、

「さて、これから鐘楼で、僕の紛当りまぐれあたを見ることにしよう」

そこへ、硝子の破片がある附近の調査を終つて、私



服の一人が見取図を持つて来たが、法水は、その図で何やら包んであるらしい硬い手触りに触れたのみで、すぐ衣囊ポケットに収め鐘楼おもむに赴いた。二段に屈折した階段を上りきると、そこはほぼ半円になつた鍵形の廊下になつていて、中央と左右に三つの扉があつた。熊城も検事も悲壮に緊張して、罨わなの奥にうずくまつているかもしれない、異形いぎような超人の姿を想像しては息を窒つめた。ところが、やがて右端の扉が開かれると、熊城は何を見たのか、ドドドツと右手に走り寄つた。壁際にある鐘鳴器カリリヨンの鐘盤の前では、はたせるかな紙谷伸子

が倒れていたのだ。それが、演奏椅子に腰から下だけを残して、そのままの姿で仰向けとなり、右手にしつかりとよろいどお鎧通しを握っているのだった。

「ああ、こいつが」と熊城は何もかも夢中になって、伸子の肩口を踏み躪にじつたが、その時法水が中央の扉を、ほとんど放心の態で眺めているのに気がついた。卵色の塗料の中から、ポツカリ四角な白いものが浮き出ていた。近寄ってみると、検事も熊城も思わず身体が竦すくんでしまった。その紙片には……

ジルフス フェルシュヴァインデン ジルフス  
 Sylphus Verschwinden (風精よ消え失せよ)





## 第三篇

### 黒死館精神病理学



一、風精……異名は？

ジルフス フェルシュヴァインデン (風精よ。消え失せよ)  
 Sylphus Verschwinden (風精よ。消え失せよ)

鐘鳴器室カリリヨンに三つあるうちの、中央の扉高くに、彼等の凝視を嘲り返すかのごとく白々しい色で、再びファウストの五芒星呪文の一句が貼り付けられてあつた。のみならず、Sylpheジルフエの女性をそれにもまた男性化しているばかりでなく、再び古愛蘭アイリッシュのような角張つたゴソニック文字で、それには筆者の性別は愚かなこと

毛のような鬚線ぜんせん一筋にさえ、筆蹟の特徴を窺うことは許されなかつたのである。あの緊密な包囲形をどう潜り抜けたものか、また伸子が犯人で、法水の機智のりみずから発した包囲を悟り、絶体絶命の措置そちに出たものであるうか……。いずれにしろここで、皮肉な倍音演奏をした悪魔を決定しなければならなかつた。

「これは意外だ。失神じゃないか」伸子の全身をスラスラ事務的に調べ終ると、法水は熊城くましろの靴をジロリと見て、「微かだが心動が聞えるし、呼吸も浅いながら続けています。それに、このとおり瞳孔反応もしつかりし



てるぜ」

そう法水に宣告されてしまうと、つい今しがた此奴こやつとばかりに肩口を踏み躪にじった熊城でさえ、そろそろ自分の軽拳が悔まれてきた。と云うのは、勿論鎧通よろいとおしを握つて、此エツケの人を見よ——とばかりにのけ反りかえつている、紙谷伸子かみたにのぶこの姿体だったのである。それまでは、幽鬼の不敵な暗躍につれて、おどろと跳ね狂う、無数の波頭を見るのみであつて、事件の表面には人影一つ差してこなかつた。そこへ、一条の泡がスウツと立ち上つていったのだが、それが水面で砕けたと思えば、

突忽とつこつとして現われたのは何あろう、現在眼まのあたり見る鬼蓮おにばす

なのである。それであるからして、熊城でさえ

も一時の亢奮こうふんが冷めるさ

につれて、いろいろと疑心暗鬼

的な警戒を始めたのも無理ではなかつた。まつたく、

意表を絶したこの体態ていたらくを見ては、

かえつて反対の見解

が有力になつてゆくではないか。易介の咽喉えぐを抉つた

と目されている短剣を握り締めて、伸子はこれをとば

かりに示しているけれども、一方それ以上厳密に、失

神するまでの経路が吟味されねばならない。結論はそ

の一つだった。王妃ブズールが唱えば、雨となつて降

り下つて来る——黒人ニグロの penis に、とうとうこの事件の倒錯性が狂い着いてしまったのである。

さてここで、鐘鳴器室カリリヨンの概景を説明しておく必要があると思う。前篇にも述べたとおり、その室は礼拝堂の円蓋ドームに接していて、振鐘ベールのある尖塔の最下部に当たっていた。そして、階段を上りあがきつた所は、ほぼ半円をなした鍵形の廊下になっていて、中央——すなわち半円の頂天とその左右に三つの扉があり、なお、室内に入ってから気づいたことであつたが、当時左端の一つのみが開かれていた。そこ一帯の壁面を室内から見る

と、それが、音響学的に設計されているのが判る。一口に云えば巨きな帆立貝おほであつて、凹状の楕円と云つたら当るかもしれない。たぶんここに鐘鳴器カリリヨンを具えるまでは、四重奏団クワルテットの演奏室に当てられていたのであるうが、したがつて中央の扉にも、外観上位置的に不自然であるばかりでなく、後から壁を切つて作られたらしい形跡が残つていた。またその一つのみが素晴らしく大きなもので、ほとんど三メートルを越すかと思われるほどの高さだつた。そこから、向う側の壁までの間は、空がらんとした側柏てがしわの板張りだつた。そして、

鐘鳴器の鍵盤は、壁を刳形くりがたに切り抜いて、その中に収められてある。三十三個の鐘群はそれぞれの音階に調律されていて、すぐ直前の天井に吊されているが、それが鍵盤キイと踏板ペダルとによつて……その昔カルヴィンが好んで耳を傾け、またネーデルランドの運河の水に乗ると、風車が独りでに動くとか伝えられる、あの物寂びた僧院的な音を発する仕掛になつていた。しかし、音響学的な構造は天井にも及んでいて、楕円形の壁面から鍵盤キイにかけて緩斜をなしている。しかもそれがちようど響板のように、中央に丸孔が空き、その上が長い

角柱形の空間になっていた。そして、その両端が、  
さつきぜんてい先刻前庭から見た、十二宮の円えんげまど華窓だった。おまけに、  
 黄道上の星宿が描かれている、えごま絵齣の一つ一つが、本  
 板から巧妙な構造で遊離しているので、その周囲には、  
 一辺を除いて細い空隙が作られ、しかも、空気の波動  
 につれて微かに振動する。それがなんとなくグラス・ハーモニカ樂玻璃  
 のようでもあるが、とにかく、その狭間はざまを通過する音  
 は、恐らく弱音器でもかけられたように柔げられるで  
 あろうから、カリリオン鐘鳴器特有の残響や、また、協和絃をな  
 している音ならば、どんなに早い速度で奏したにして

も、ある程度までは混乱を防ぎ得るのである。この装置は三十三個の鐘群も同様で、ベルリンのパロヒアル寺院を模本としたものであるが、パロヒアル寺院では、反対にそれが、礼拝堂の内部に向けて作られてある。こうして、法水の調査は円華窓附近にも及んだけれども、わずかに知ったのは、その外側を、尖塔に上る鉄梯子が過よぎっているという一事のみであつた。

やがて、法水は私服に命じて戸外に立たしめ、自分は種々と工夫を凝らして鍵盤キイを押し、何より根本の疑義であるところの倍音を証明しようとしたが、その実

験はついに空しく終つてしまった。結局、鐘鳴器カリリヨンで奏

し得る音階が、二オクターヴにすぎないということと、それに、先刻聴きいた倍音というのが、その上の音階であるという——二つが明らかにされたのみであつた。かつて聖アレキセイ寺院の鐘声にも、これとよく似た妖怪的な現象が現われたことがあつた。けれども、それは単なる機械学的な問題で、つまり振り鐘の順序にすぎなかつたのである。ところが、今度はそれと異なつて、第一に三十あまりの音階を決定している——換言すれば、物質構成の大法則であるところの鐘の質



量に、そもそも根本の疑惑がこもっているのだ。それゆえ、詮じ詰めてゆくと、結局鐘の鑄造成分を否定するか、それとも、楽音を虚空から掴み上げた、精霊的な存在があつたのではないか——と云うような、極端な結論に行き着いてしまふのも、やむを得ないのであつた。こうして、倍音の神秘がいよいよ確定されてしまふと、法水には痛々しい疲労の色が現われ、もはや口を聴く気力さえ尽き果てたように思われた。しかし、考えようによつては、より以上の怪態けたいと思われる伸子の失神に、もう一度神経を酷使せねばならぬ義務

が残っていた。その頃はもう日没が迫っていて、壮大な結構は幽暗うすやみの中に没し去り、わずかに円華窓から入って来る微かな光のみが、冷たい空気の中で陰々と揺めゆらいていた。その中で、時折翼のような影が過よぎつて行くけれども、たぶん大鴉おおがらすの群が、円華窓の外を掠かすめて、尖塔の振鐘ピールの上に戻って行くからであろう。

ところで伸子の状態についても、細叙の必要があると思う。伸子は丸形の廻転椅子に腰だけを残して、そこから下はやや左向きになり、上半身はそれと反対に、幾分右方みぎかたに傾かたむいていて、ガクリと背後にのけ反かえつてい

る。その倒辺三角形に似た形を見ても、彼女は演奏中に、その姿のまま後方へ倒れたものであることは明らかだつた。しかし、不思議な事には、全身にわたつて鵜うの毛ほどの傷もなく、ただ床へ打ち当てた際に、出来たらしい皮下出血の跡が、わずか後頭部に残されているのみだつた。また中毒と思しおぼい徴候も現われていない。両眼も睜ひらいているが、活気なく懶ものうそうに濁つていて、表情にも緊張がなく、それに、下顎あごだけが開いているところと云い、どことなく悪心おしんとでも云つたら当るかもしれない、不気な表情が残っているよう

に思われた。全身にも、単純失神特有の徴候が現われていて、けいれん痙攣の跡もなく、綿のように弛緩しているけれども、不審な事には、ほん仄のりあぶら脂が浮いている鎧通しだけは、かなり固く握り締めていて、腕を上げて振つてみても、いっこうに掌から外れようとはしない。総体として失神の原因は、伸子の体内に伏在しているものと、思うよりほかにないのであつた。法水は心中決するところがあつたとみえて、伸子を抱き上げた私服に云つた。

「本庁の鑑識医にそう云つてくれ給え。——第一、胃

洗滌せんできをやるように。それから胃中の残留物と尿の検査する事と、婦人科的な観察だ。またもう一つは、全身の圧痛部と筋反射を調べる事なんだ」

そうして、伸子が階下に運ばれてしまうと、法水は一息たばこ菫けむりの烟をグイと喫すい込んでから、

「ああ、この局シチュエーション面は、僕にとうてい集束出来そうもないよ」と弱々しい声で呟つぶやくのだった。

「だが、伸子の身体に現われているものだけは簡単じゃないか。なあに、正氣に戻れば何もかも判るよ」  
 検事は無雑作に云ったが、法水は満面に懷疑みなぎを漲らせ

てなおも嘆息を続けた。

「いやどうして、錯雑顛倒しているところは相変らずのものさ。かえってダンネベルグ夫人や、易介よりも難解かもしれない。それが、意地悪く徴候的なものじゃないからだよ。いつこう何もないようできて、そのくせ矛盾だらけなんだ。とにかく、専門家の鑑識を求めることにしたよ。僕のような浅い知識だけで、どうしてこんな化物みたいな小脳の判断が出来るもんか。なにしろ、筋覚伝導の法則が滅茶滅茶に狂っているんだから」

「しかし、こんな単純なものを……」と熊城が、異議を述べ立てようとする、法水はいきなり遮って、

「だって内臓にも原因がなく、中毒するような薬物も見つからないとなつた日には、それこそ風精天蝸宮（運動神経を管掌す）へ消え失せたり——になつてしまふぜ」

「冗談じゃない、どこに外力的な原因があるもんか。それに痙攣（けいれん）はないし、明白な失神じゃないか」今度は検事がいがみ掛つた。「どうも君は、単純なものにも（うよ）紆余曲折的な観察をするので困るよ」

「勿論明白なものさ。しかし、失神（トランス）——だからこそな

んだ。それが精神病理学の領域にあるものなら、古いペツパーの『類症鑑別』一冊だけで、ゆうに片づいてしまうぜ。無論癲癇てんかんでもヒステリー発作でもないよ。また、心神顛倒エクスタシーは表情で見当がつくし、類死カタレプシーや病的半睡モーピッドや電気睡眠ソムノレンスでもけっしてないのだ」  
と云つて、法水はしばらく天井を仰向いていたが、やがて変化のない裏声で云つた。

「ところが支倉君はせくら、失神が下等神経に伝わつても、そういう連中が各々勝手気儘めいめい きままな方向に動いている——それはいつたい、どうしたつてことなんだい。だから、僕



はこういう信念も持たされてしまったのだ。例えば、鎧通しを握っていたことに、有利な説明が付いたとしてもだよ。そうなつても倍音の神秘が露あばかれない限りは、当然失神の原因に、自企的な疑いを挟まねばならない——とね。どうだい？」

「そりや神話だ。マアしばらく休んだ方がいいよ。君は大変疲れているんだ」と熊城はてんで受けようとはしなかったが、法水はなおも夢見るような調子で続けた。

「そうだ熊城君、事実それは伝説に違いないのだ。ネ

ゲラインの『北欧伝説学』の中に、その昔漂浪楽人スカルドが唱  
 い歩いたとか云う、ゼツキンゲン侯リュデスハイムの  
 話が載っているんだ。時代はフレデリック（第五）十字  
 軍の後だがマア聴いてくれ給え。——歌唱詩人バルドオスワ  
 ルドは、ヴェントシン（ヒヨスの毛茸ならんと云わる）を入れた  
 る酒を飲むと見る間に、抱琴クロツチを抱ける身体波のごとく  
 に揺ぎはじめ、やがて、妃ゲルトルーデの膝に倒る。  
 リユデスハイムは、かねてカルパトス島（クリート島の北方）  
 の妖術師レベドスよりして、ヴェニトシン（向気）の事を  
 聴きいたれば、ただちに頭こうべを打ち落し、骸かばねとともに焚

き捨てたり——と。これは漂浪楽人<sup>スカルド</sup>中の詩王イウフエシススの作と云われているが、これを史家ベルフオーレは、十字軍によつて北欧に移入された純<sup>ア</sup>亞刺比亞<sup>アラブ</sup>・加勒泥亞<sup>カルデア</sup>呪術の最初の文献だと云い、それが培<sup>つちか</sup>つて華<sup>はな</sup>と結んだのがファウスト博士であつて、彼こそは中世魔法精神の権化であると結論しているのだ」

「なるほど」と検事は皮肉に笑つて、「五月になれば、林檎<sup>りんご</sup>の花が咲き、城内の牛酪<sup>ぎゆうらく</sup>小屋からは性慾的な臭いが訪れて来る。そうなれば、なにしろ亭主が十字軍に行っているのだからね。その留守中に、貞操帯の合鍵

を作こしらえて、奥方が抒情詩人と春戯いちやつくのもやむを得んだろうよ。だがただだ。その方向を殺人事件の方に転換してもらおう」

法水は半ば微笑みながら、沈痛な調子で云い返した。「ずさんだよ支倉君、君は検事のくせに、病理的心理の研鑽おろそを疎かにしている。もしそうでなければ、

『古代丁抹伝説集』パムベピサウなどの史詩に現われている妖術精神や、その中に、黴ばいどく毒性癩癩てんかん性の人物などがさかんに例証として引かれている——そのくらいの事は、当然憶えてなければならぬはずだよ。ところでこのリュ

デスハイム ものがたり 譚は、別に引証されてはいないけれども、  
 メールヒエンの『デームメル・シュテンデ朦朧状態』を読むと、詩で唱われ  
 たオスワルドの喪神状態が、それには科学的に説明さ  
 れている。その中の単純失神の章に、こうあるのだよ。  
 失神が起ると、大脳作用が一方的に凝集するために、  
 執意はたちまち消え失せてしまつて、全身に浮揚感が  
 起つてくる。しかし、一方小脳的作用が停止するのは、  
 やや後であるために、その二つが力学的に作用し合つ  
 て、無論わずかな間だけでも、全身に横波をうけた  
 ような動揺を起す——と云うのだ。ところが、伸子の

身体は、その際に自然の法則を無視してしまつて、かえつて反対の方向に動いているのだよ」と伸子が腰を下していた廻転椅子を、クルツと仰向けにして、その廻転心棒を指差した。「ところで支倉君、僕はいま自然の法則なぞと大袈裟おおげさに云つたけれども、たかがこの椅子の廻転にすぎないのだよ。螺旋らせんの方向は、これで見るとおりに、右捻みぎねじだ。そして、心棒が全く螺旋孔ねじあなの中に没し去つていて、右へ低くなつてゆく廻転は、すでに極限まで詰つている。しかし、一方伸子の肢態したたいを考えると、腰を座深めに引いて、そこから下の下肢の部

分はやや左向きとなり、上半身はそれとは反対に、幾分右へ傾いているのだ。まさにその形は、わずかほど左の方へ廻転しながら倒れたものに違いない。これは、明らかに反則的だ。何故なら、左の方へ廻転すれば、当然椅子が浮いてこなければならぬからだ」

「曖昧な反語はいかん」熊城が難色を現わすと、法水はあらゆる観察点を示して、矛盾を明らかにした。

「勿論現在のこの形を、最初からのものとは思っちゃいないさ。しかし、例えば螺旋に余裕があつたにしてよこがれもだ。失神時の横揺ばかりを考えて、それ以外に重量

という、垂直に働く力があるのを忘れちゃならん。それがあるので、動揺しながらも、しだいにその方向が決定されてゆく。つまりその振幅が、低下してゆく右の方向へ大きくなるのが当然じゃないか。さらにまた、もう一案引き出して、今度は右へ大きく一廻転してから、現在の位置で螺旋が詰ったものと仮定しよう。けれども、その廻転の間に、当然遠心力が働くだろうからね。したがって、ああいう正座に等しい形が、とうてい停止した際に求められよう道理はないと思うよ。だから熊城君、椅子の螺旋と伸子の肢態かたちを対照してみ



ると、そこに驚くべき矛盾が現われてくるのだ」

「あ、意志の伴った失神……」と検事は惑乱気味に嘆息した。

「それがもし真実ならば、グリーン家のアダさ。だから……」と法水は両手を後に組んで、こつこつ歩き廻りながら、「僕だって故なしに、胃洗滌いせんできや尿の検査なんぞやらせやしないぜ。勿論問題と云うのは、そういう自企的な材料が、発見されなかつた場合にあるのだよ」と鍵盤キイの前で立ち止って、それを掌てのひらでグイと押し下げて云った。その行為は、異説の所在を暗示してい

るのであった。

「このとおりだよ。鐘鳴器カリルロンの演奏には、女性以上の体

力が必要なんだ。簡単な讃詠アンセムでも三度も繰り返したら、

たいていへトへトになるにきまつてるよ。だから、あ

の当時音色がしだいに衰えて行つたけれども、たぶん

その原因が、この辺にありやしないかと思うのだ」

「すると、その疲労に失神の原因が？」と熊城は喘あえぎ気

味に訊ねた。

「ウン疲労時の証言を信ずるな——とシユテルンが云

うほどだからね。そこへ何か、予想外の力が働いたと

したら、まさしく絶好な状態には違いないのだ。ただし何もかも、倍音発生の原因が証明された上でだ。あれは確かに、不在証明中の不在証明じゃないか」

「では、伸子の弾奏術としてでかい」と検事は驚いて問い返した。「僕はとうてい、あの倍音が鐘だけで証明出来ようとは思わんがね。それより手近な問題は、鎧通しを伸子が握らされたか否か——にあると思うのだ」「いや、失神してからは、けっして固く握れるものじゃない」と法水は再び歩きはじめたが、すこぶる気のない声を出した。「勿論それには異説もあるので、僕は専

門家の鑑定を求めたのだよ。それに、易介の死とも時間的に包括されている。召使の庄十郎は、バトライ当然絶命後一時間と思われる二時に、易介の呼吸を明らかに聴いた——と陳述しているんだが、その時刻には、伸子がモテット经文歌を奏でていた。そうすると、最後の讚詠を弾くアンセムまでの二十分あまりの間に、易介の咽喉を切り、そうして失神の原因を作ったと見なけりやならない。僕は、そこへ反証があが挙りやしないかと、そればかりおそ懼れているところなんだよ。だいたい、包囲形を作って絞り出した結果というのが、にひくいちはい2—1—1—1の解答じゃないか。

しかし、倍音が……倍音が？」

無論それ以上は混沌の彼方にあつた。法水は必死の精気を凝こらしてすべてを伸子に集注しようとした。かつての「コンスタンス・ケント事件」や「グリーン殺人事件」等の教訓が、この場合、反覆的な観察を使し嗽そうしてくるからである。けれども、百花千弁の形に分裂している撞着の数々は、法水の分析的な個々の説にも、確固たる信念を築かせない。いかにも、外面は逆説反語を巧みに弄もてんでいて、壮大な修辭で覆うている。けれども、説き去るかたわら新しい懷疑が起つて、彼は

呪われた和蘭人オランダのように、困憊彷徨こんぱいほうこうを続けているのだ。

そして、ついに問題が倍音に衝つき当つてしまうと、法水は再び異説のために引き戻されねばならなかつた。

突然彼は、天来の靈感でも受けたかのように、異常な光輝を双眼うかに泛うかべて立ち止つた。

「支倉君、君の一言が大変いい暗示を与えてくれたぜ。

君が、倍音はこの鐘のみでは証明出来まい——と云つたことは、とどの詰りが、演奏の精霊主義オクルチスムスに代る何物

かを捜せ——という事だ。つまり、どこか他の場所に、響石か木片楽器めいたものでもあれば、それを音響学

的に証明しろ——という意味にもなる。それに気が附いたので、僕は往昔マグデブルグ僧正館の不思議と唱われた、『ゲルベルトの月琴<sup>タムブル</sup>』——の故事を憶い出したよ」

「ゲルベルトの月琴<sup>タムブル</sup>!?」 検事は法水の唐突な変説に狼狽<sup>ろうばい</sup>してしまった。「いったい月琴<sup>タムブル</sup>なんてものが、鐘の化物<sup>ばけもの</sup>にどんな関係があるね」

「そのゲルベルトと云うのが、シルヴェスター二世だからさ。あの呪法典を作ったウイチグスの師父に当るんだ」と法水は気魄の罩<sup>こ</sup>もった声で叫んだ。そして、

床に映つた朧おぼろな影法師を瞶みつめながら、夢幻的な韻を作つて続ける。

「ところでペンクライク（十四世紀英蘭の言語学者）が編纂した『ツルヴェール史詩集成』の中に、ゲルベルトに関する妖異譚が載っている。勿論当時のサラセン嫌悪の風潮で、ゲルベルトをまるで妖術師扱いにしているのだが、とにかくその一節を抜萃ぬきだしてみよう。一種の錬金抒情詩なんだよ。

ゲルベルトアルデパラン畢宿七星を仰ぎ眺めて



ダルシメル  
平琴を弾ず

はじめ低絃を弾きてのち黙す

しかるにその寸後

側の月琴は人なきに鳴り

ものの怪けの声の如く、高き絃音にて応こたう

されば

傍人、耳を覆いて遁のがれ去りしとぞ

ところが、キイゼヴェツテルの「古代楽器史」を見る

と、月琴は腸線楽器だが、平琴ダルシメルの十世紀時代のものに

なると、腸線の代りに金属線が張られていて、その音がちようど、現在のグロックンシュピールの鉄琴に近いと云うのだがね。


そこで、僕はその妖異譚の解剖を試みたことがあつた。ねえ熊城君、中世非文献的史詩と殺人事件とのつながり関係を、ここで充分咀嚼そしやくしてもらいたいと思うのだよ」


「フン、まだあるのか」と熊城は、唾つばきで濡れた蓑たぼことともに、吐き出すように云つた。「もう角笛や鎖帷子かたびらは、先刻さつきのザエンヴェヌート・チエリニの鍛冶屋で終りかと思つたがね」

「あるともさ。それが、史家ジャンヌ・ダルクヴィラーレの綴つた、『ニコラ・エ・ジャンヌ』なんだ。奇蹟ジャンヌ・ダルク処女を前にすると、


顧問判官どもがブルブル慄えだして、実に奇怪きわまる異常神経を描き出したのだ。その心理を、後世裁判精神病理学の錚々たる連中が何故引用しないのだろうか。と、僕はすこぶる不審に思っているくらいなんだよ。


ところで、この場合は、すこぶる妖術的な共鳴現象を思いついたのだ。つまり、それを洋琴ピアノで喩えて云うと、最初最初の鍵キイを音の出ないように軽く押さえて、それから


 の鍵を強く打ち、その音が止んだ頃に

 の鍵キイ

を押さえた指を離すと、それからは妙に声音的な音色

で、の音が明らかに発せられる。無論共鳴現象だ。

つまり、の音の中には、その倍音すなわち二倍の振

動数を持つの音が含まれているからなんだが、し

かしそういう共鳴現象を鐘に求めるということは、理論上全然不可能であるかもしれない。けれども、それからまた要素的な暗示が引き出せる。と云うのが、擬音なんだよ。熊城君、君は木琴シロフォンを知っているだろう。つまり、乾燥した木片なり、ある種類の石を打つと、

それが金属性の音響を発するということなんだ。古代支那には、ピエンチン編磬のような響石楽器や、フアンシアン方響のような扁板打楽器があり、古代インカのテポナツトリ乾木鼓やアマゾンインディアン印度人の刃形響石も知られている。しかし、僕が目指しているのは、そういう単音的なものや音源を露出した形のものじゃないのだ。ところで君達は、こういう驚くべき事実を聴いたらどう思うね——。孔子はこうし舜のしゅん韻学の中に、七種の音を発する木柱のあるのを知って茫然となったと云う。また、ペルー秘露トルクシロの遺跡にも、トロヤ第一層都市遺跡（紀元前一五〇〇年時代すなわち落城当時）

の中にも、同様の記録が残されている……」と該博な引証を挙げた後に、法水はこれら古史文の科学的解釈を、一々殺人事件の現実的な視覚に符合させようと試みた。

「とにかく、魔法博士デイの隠顕扉ドアがあるほどだからね。この館にそれ以上、技巧アート・マジック呪術の習作が残されていないとは云えまい。きつと、最初の英人建築技師デイ

グスビイの設計を改修した所に、算哲のウイチグス呪法精神が罩こもっているに違いないのだ。つまり、一本の柱、貫木たるきにもだよ。それから蛇腹じゃぼら、また廊下の壁面

を貫いている素焼テラコッタの朱線にも、注意を払っていいと思う」

「すると、君は、この館の設計図が必要なのかね」と熊城が呆れ返つて叫ぶと、

「ウン、全館のを要求する。そうすればたぶん、犯人の飛躍的な不在証明アリバイを打破出来やしないかと思うよ」と法水は押し返すように云つたが、続いて二つの軌道を明示した。「とにかく涯はてしない旅のようだけでも、風精シルフェを捜す道はこの二つ以外にはない。つまり、結果において、ゲルベルト風の共鳴弹奏術が再現されるとなれ

ば、無論問題なしに、伸子が自企的な失神を計つたと云つて差支えあるまい。また、何か擬音的な方法が証明されるようなら、犯人は伸子に、失神を起させるような原因を与えて、しかる後に鐘楼から去つた——と云うことが出来るのだ。いずれにしろ、倍音が発せられた当時、ここには伸子のほか誰もいなかったのだ。それだけは明らかなんだよ」

「いや、倍音は附随的なものさ」と熊城は反対の見解を述べた。「要するに、君の難解嗜好癖なんだ。たかが、論理形式の問題にすぎんじゃないか。伸子が失神した



原因さえ解れば、なにも君みたいに、最初から石の壁の中に頭を突っ込む必要はないと思うよ」

「ところが熊城君」と法水は皮肉にやり返して、「たぶん伸子の答弁だけを当あてにしたら、まずこんな程度にすぎまいと思うがね。気分が悪くなつて、その後の事はいつさい判りません——て。いや、そればかりじゃない。あの倍音の中には、失神の原因をはじめとして、鎧通しを握っていた事から、先刻さっき僕が指摘した廻転椅子の矛盾に至るまでの、ありとあらゆる疑問が伏さつているに違いないのだ。事によると、易介事件の一部

「まで、関係してやしないかと思われくらいだよ」

「ウン、たしかにスピリチュアリズム心霊主義だ」と検事が暗然と呟くと、

法水はあくまで自説を強調した。

「いやそれ以上さ。だいたい、楽器の心霊演奏は必ず

しも例に乏しい事じゃない。シュレーダーの

『レーベンス・マグネチスムス生体磁気説』一冊にすら、二十に近い引例が挙げ

られている。しかし、問題は音の変化なのだ。ところ

がさしもの聖オリゲネスさえ嘆称を惜しまなかつたと

云う、千古の大魔術師——アレキサンドリア亞歴山府のアンテイオクス

でさえも、ヒドラリウム水風琴の遠隔演奏はしたと云うけれど、そ

の音調についてはいつこうに記されていない。また、例のアルベルツス・マグヌス（十三世紀の末、エールブルグのドミニク僧団にいた高僧。錬金魔法師の声名高しといえども、通性論哲学者であり、かつまた中世著名の物理学者ことに心靈術士としては古今無双ならんと云わる。）が携帯用風琴で行った時もおこなも同じ事なんだ。それから近世になつて、伊太利の大靈媒ユーザピア・パラルディノが、金網の中に入れた手風琴を動かしたけれども、肝腎の音色については、狂学者フラマリオンすら語るところがないのだ。つまり、心靈現象でさえ、時間空間には君臨することが出来ても、物質構造だけにはな

んらの力も及ばないことが判るだろう。ところが熊城君、その物質構成の大法則が、小気味よく顛覆てんぷくを遂げているんだ。ああ、なんとという恐ろしい奴やつだろう。風精ジュルフェ——空気と音の妖精——やつは鐘を叩いて逃げてしまったのだ」

結局倍音についての法水の推断は、明確はっきりと人間思惟創造の限界を劃したに止まっていた。しかし、犯人は、それすらあつけなく踏み越えて、誰しも夢にも信じられなかつたところの、超心霊的な奇蹟をなし遂げているのだ。それであるからして、紛乱した網を辛やつと跳

ね退けたかと思うと、眼前の壁はすでに雲を貫いている。そうになると、伸子の陳述にも、さした期待が持てなくなつたことは云うまでもないが、別して法水が顕示した、不思議な倍音に達する二つの道にも、万が一の僥倖ぎょうこうを思わせるのみのことで、早くも忘れ去られようとするほどの心細さだつた。やがて、鐘鳴器室カレルロンを出てダンネベルグ夫人の室へやに戻ると、夫人の死体は、既に解剖のため運び去られていて、その陰気な室の中には、先刻さつき家族の動静調査を命じておいた、一人の私服が、ポツネンと待っていた。傭人やといにんの口から吐かせた調

388  
査の結果は、次のとおりだった。

降矢木旗太郎。正午昼食後、他の家族三人と広間<sup>サロン</sup>にて会談し、一時五十分<sup>モテット</sup>経文歌の合図とともに打ちそろって礼拝堂に赴き、鎮魂樂<sup>レキエム</sup>の演奏をなし、二時三十五分、礼拝堂を他の三人とともに出て自室に入る。

オリガ・クリヴオフ（同前）

ガリバルダ・セレナ（同前）

オットカール・レヴェズ（同前）

田郷真齋。一時三十分までは、召使二人とともに過去の葬儀記録中より摘録をなしていたるも、訊問後は自室にて臥床す。

久我鎮子。訊問後は図書室より出でず、その事實は、図書運びの少女によつて証明さる。

紙谷伸子。正午に昼食を自室に運ばせた時以外は、廊下にて見掛けたる者もなく、自室に引き籠れるものと推察さる。一時半頃鐘楼階段を上り行く姿を目撃したる者あり。

以上の事実の外いつさい異状なし。

「法水君、ダマスクスへの道は、たったこの一つだよ」と検事は熊城と視線を合わせて、さも悦に入ったように揉手もみてをしながら「見給え。すべてが伸子に集注されてゆくじゃないか」

法水はその調査書を衣袋ポケットに突き込んだ手で、先刻そでろうか拱廊で受け取った、硝子の破片とその附近の見取図を取り出した。が、開いてみると、実にこの事件で何度目かの驚愕きょうがくが、彼等の眼を射つた。二条の足跡にじようが印されている、見取図に包まれているのが何であつたらう



か、意外にもそれが、写真乾板の破片だったのである。

## 二、死靈集會の所在

沃化銀板ようか——すでに感光している乾板を前にして、法水もさすが二の句が継げなかつた。事実この事件とは、異常に隔絶した対照をなしているからであつた。それなので、紆余曲折うよきよくせつをたどたどしく辿たどつて行つて、最初からの経過を吟味してみても、だいたい乾板などという感光物質によつて、標章形象化される個所ところは勿論のことだが、それに投射し暗喩するような、連字符

一つさえ見出されないのである。それがもし、実際に  
 犯罪行動と関係あるものなら、恐らく神業であるかも  
 しれない。こうして、しばらく死んだような沈黙が続  
 いた。その間召使が炉に松薪をまつまき投げ入れ、室内が仄ぼつか  
 り暖まってくると、法水は焰の舌を見やりながら、微  
 かに嘆息した。

「ああ、まるで恐竜ドラゴンの卵じゃないか」

「だが、いったい何に必要なだったのだろうか？」と検事は  
 法水の強喩法カタクレーズを平易に述べた。そして、開閉器スイッチを捻ひねる  
 と、

「まさか撮影用じゃあるまいが」と熊城は、不意の明るさに眼を瞬きながら、「いや、死霊は事実かもしれん。おぼけ」

第一、易介が目撃したそうだが、昨夜神意審問会の最中に、隣室の張出縁で何者かが動いていて、その人影が地上に何か落したと云うそうじゃないか。しかも、その時七人のうちで室を出たものはなかつたのだ。だいたい階下の窓から落されたものなら、こんなに細かく割れる気遣いはないよ」

「うん、その死霊は恐らく事実だろうよ」と法水はプウと煙の輪を吐いて、「しかし、彼奴がその後あいつに死んでい

るといふ事も、また事実だろう」と意外な奇説を吐いた。「だって、ダンネベルグ事件とそれ以後のものを、二つに区分して見給え。僕の持っているあの逆説が、パレードックス綺麗さつぱりと消えてしまふじやないか。つまり、きれい風精は水神のいたのを知つて、それを殺したのだ。シルフェ ウンディネ

けつして、あの二つの呪文が連続しているのに、眩くらまされちやならん。ただし、犯人は一人だよ」

「では、易介以外にも」熊城は吃驚びっくりして眼を円くしたが、それを検事が抑えて、

「なあに、捨てておき給え。自分の空想に引つ張り廻

「さされているんだから」と法水を嗜めるたしなように見た。「ど

うも、君の説は世紀児アンファン・デュ・シエクル的だ。自然と平凡を嫌って

いる。粹人的な技巧には、けっして真性も良識もない

のだ。現に、先刻さっきも君は夢のような擬音でもって、あ

の倍音に空想を描いていた。しかし、同じような微か

な音でも、伸子の弾奏がそれに重なったとしたらどう

するね？」

「これは驚いた！ 君はもうそんな年齢としごろになったのか

ね」と道化おどけした顔をしたが、法水は皮肉に微笑み返し

て、「だいたいヘンゼンでもエーワルトでもそうだが、

お互いに聴覚生理の論争はしていても、これだけは、はつきりと認めている。つまり、君の云う場合に当る事だが……たとえば同じような音色で微かな音が二つ重なったにしても、その音階の低い方は、内耳の基礎膜に振動を起さないと云うのだ。ところが、老年変化が来ると、それが反対になってしまふのだよ」と検事をきめつけてから、再び視線を乾板の上に落すと、彼の表情の中に複雑な変化が起つていった。

「だが、この矛盾的産物はどうだ。僕にもさっぱり、この取り合わせの意味が呑み込めんよ。しかし、ピイン

と響いてくるものがある。それが妙な声で、ツアラツストラはかく語りき——と云うのだ」

「いつたいニイチエがどうしたんだ？」今度は検事が驚いてしまった。

「いや、シュトラウスのシムフォニック・ポエムの交響楽詩でもないのさ。それが、ゾロアスター陰陽教（ツアラツストラが創始せる波斯（ペルシヤ）の苦行宗教）の呪

法綱領なんだよ。神格よりうけたる光は、その源の神をも斃たおす事あらん——と云ってね。勿論その呪文の目的は、接神の法悦を狙ねらっている。つまり、飢餓入神を行ふ際に、その論法を続けると、苦行僧に幻覚の統一



が起つてくると云うのだ」と法水は彼に似げない神秘説を吐いたが、云うまでもなく、奥底知れない理性の蔭に潜んでいるものを、その場去らずに秤量しやうりやうすること  
は不可能だった。しかし、法水の言を、ことば神意審問会の  
異変と対照してみると、あるいは、死体蠟燭ろうそくの燭火しょくかを  
うけた乾板が、ダンネベルグ夫人に算哲の幻像を見せ  
て、意識を奪ったのではないか。——と云うような幽  
玄きわまる暗示が、しだいに濃厚となつてくるけれど  
も、その矢先思いがけなく、それをやや具体的にほの仄め  
かして、法水は立ち上った。

「しかし、これでいよいよ、神意審問会の再現が切実な問題になってきたよ。さて、裏庭へ行つて、この見取図に書いてある二条の足跡を調べることにするかな」

ところが、その途中通りすがりに、階下の図書室の前まで来ると、法水は釘付けされたように立ち止つてしまった。熊城は時計を眺めて、

「四時二十分——もうそろそろ、足許が分らなくなつてくるぜ。言語学の蔵書なら後でもいいだろう」

「いや、鎮魂楽レキエムの原譜を見るのさ」と法水はキツパリ云い切つて、他の二人を面喰めんくらわせてしまった。しかしそ

れで、先刻さつきの演奏中終止符近くになつて、二つの提琴ヴァイオリンが弱音器をつけた——そのいかにも楽想を無視している不可解な点に、法水が強い執着を持つていているのが判つた。彼は背後で、把手とってを廻しながら、続いて云つた。

「熊城君、算哲という人物は、実に偉大な象徴派詩人サムボリストじゃないか。この彪大ぼうだいな館やかたもあの男にとると、たかが『影と記号で出来た倉』にすぎないのだ。まるで天体みたいな、多くの標章を打ち撒まけておいて、その類推と総合とで、ある一つの恐ろしいものを暗示しようとする

している。だから、そういう霧の中に置いて事件を眺めたところで、どうして何が判ってくるもんか。あの得体の知れない性格は、あくまでも究明せんけりやならんよ」

その最終の到達点というのが、黙示図の知られてない半葉を意味していると云うことも……また、その一点に集注されてゆく網流の一つでもと、いかに彼が心中喘ぎ苛立あえいらだつて捜し求めているか、十分想像に難くないのであった。しかし、扉ドアを開くと、そこには人影はなかつたけれど、法水は眼の眩くらむような感覚に打たれ

た。四方の壁面は、ゴンドルド風の羽目パネルで区切られていて、壁面の上層にはいによろ囀繞式クリアストリーの採光層が作られ、そこに並んでいる、イオニア式の女像柱が、天井の迫持せりもちを頭上で支えている。そして、クリアストリー採光層から入る光線は、「ダナエの金雨受胎」を黙示録の二十四人長老で囲んでいる天井画に、なんとも云えぬ神々しい生動を与えているのだった。なお床に、チュイルレー式の組字をつけた書室家具が置かれてあるところと云い、また全体の基調色として、乳白大理石と焦褐色ヴァンダイクブラウンの対比を拵んだところと云い、そのすべてが、とうてい日本にお

いては片影すら望むことの出来ない、クムメルスブリュケル十八世紀維納風の書室造りだったのである。その空がらんとした図書室を横切つて、突当りの明りが差している扉を開くと、そこは、好事家こうずかに垂涎すいぜんの思いをさせている、降矢木の書庫になつていた。二十層あまりに区切られている、書架の奥に事務机があつて、そこには、久我鎮子の皮肉な舌が待ち構えていた。

「オヤ、この室にお出でになるようじゃ、たいした事もなかつたと見えますね」

「事実そのとおりなんです。あれ以後人形が出ない代

りに、死霊おぼけは連続的に出没していますよ」と法水は先  
を打たれて、苦笑した。

「そうでしょう。先刻さっきはまた妙な倍音が聴えましたわ。  
でも、まさか伸子さんを犯人になさりやしないでしょ  
うね」

「ああ、あの倍音を御存じでしたか」と法水は臉を微か  
に戦おのかせたが、かえって探るような眼差で相手を見て、  
「しかし、この事件全体の構成だけは判りましたよ。

それが、貴女あなたの云われたミンコフスキーの四次元世界  
なんです」といつこう動じた色も見せず、続いて本題

「ところで、その過去圏を調べにまいったのですが、たしか、鎮魂楽レキエムの原譜はあるでしような」

「鎮魂楽レキエム!?」と鎮子は怪訝けげんな顔をして、「だが、あれを見て、いったいどうなさるのです?」

「それでは、まだ御存じないのですか」法水はちよつと驚いた素振を見せたが、厳肅な調子で云つた。

「実は、終曲ファイナーレ近くで、二つの提琴ヴァイオリンが弱音器を付けたのですよ。ですから、かえって私は、ベルリオーズのシンフォニカ・ファンタジア幻想交響楽でも聴く心持がしました。たしかあれに



は、絞首台に上った罪人が地獄に墮ちる——その時の雷鳴を聴かせるというところに、雹ひょうのような腕太鼓ティムパニーの独奏ソロがありましたたつけね。そこに私は、算哲博士の声を聴いたような気がしたのです」

「マア、とんでもない誤算ですわ」と鎮子びんしょうは憫笑を湛えて、

「あれは、算哲様の御作ではございません。威人ウエルシユの建築技師クロード・デイグスビー自作ものなのです。とにかく、あんなものをお気になさるようじゃ、もう一人死霊おぼけがふえた訳ですわね。ですが、貴方の対位法的

推理にぜひ必要なものなら、なんとか捜し出してまいりましょう」

法水がしばらく自己を失っていたのも、けっして無理ではなかった。彼がジョン・ステナー（今世紀の当初病歿した牛津（オックスフォード）の音楽科教授）の作と推測し、それに

算哲が、何かの意志で筆を加えたものと信じていた鎮魂曲レキエムが、人もあろうに、この館ラングレンの設計者デイグスビ

イの作だったのだ。帰国の船中ウエルシユ蘭貢で投身したと云

われる威人の建築技師が、この不思議な事件にも何かかかわり関係を持っているのではないのだろうか。しかし法水

が、最初から死者の世界にも、詮索を怠らなかつたことは、さすがに炯眼けいがんであると云えよう。

鎮子が原譜を探している間、法水は書架に眼を馳はせて、降矢木の驚嘆すべき収蔵書を一々記憶に止めることが出来た。それが、黒死館において精神生活の全部を占めるものであることは云うまでもないが、あるいはこの書庫のどこかに、底知れない神秘的な事件の、根源をなすものが潜んでいないとも限らないのである。法水は背文字を敏速すばやく追うていつて、しばらくの間、紙と革のいきれるような匂いの中で陶醉していた。

一六七六年（ストラスブルグ）版のプリニウス

「万有史」ナトウラリス・ヒストリアの三十冊と、古代百科辞典の対として

「ライデン古文書」パピルスが、まず法水に嘆声を発せしめた。

続いてソラヌスの「使者神指杖」カデュセウスをはじめ、ウルブリッ

ジ、ロスリン、ロンドレイ等の中世医書から、バー

コー、アルノウ、アグリツパ等の記号語使用の錬金薬

学書、本邦では、永田知足齋ちそくさい、杉田玄伯みなみょうげん、南陽原等の

蘭書釈刻をはじめ、古代支那では、隋の「経籍志」、「玉

房指要」、「蝦蟇図経」かばくずきよう、「仙経」等の房術書医方。その他、

スシユルタチャラカ・サンヒター婆らもん等の婆羅門医書、アウフレ  
Susrta, Charaka Samhita 等の

ヒトの「カーマ・ストラ愛経」梵語原本。それから、今世紀二十年

代の限定出版として有名な「ヴァイヴァイセクシオン生体解剖要綱」、ハルトマ

ンの「デイ・ジンプトマトロギイ・デル・クラインヒルン・エルクランクンゲン小脳疾患者の徴候学」等の部類

に至るまで、まさに千五百冊になんなん垂々とする医学史的な

整列だった。次に、神秘宗教に関する集積もかなりな

数に上っている。ロンドンアジア倫敦亜細亞協会の「くじやくおうじゆきよう孔雀王呪経」初

版、シヤム暹羅皇帝勅刊の「アタナテイ阿陀曩胝経」、ブルームフィールド

ドの「クリシユナ・ヤジュル・ヴェータ黑夜珠吠陀」をはじめ、シユラギントヴァ

イト、チルダース等の梵字密教經典の類。それに、

ユダヤ猶太教の非経聖書、アポクリファ黙示録、アポカリプス伝道書類の中で、特に法

水の眼を引いたのは、猶太教会音楽の珍籍としてフロ  
 ウベルガーの「フェルディナンド四世の死に対する悲  
 嘆」の原譜と、聖ブラジロ修道院から逸出を伝えられ  
 ている手写本中の稀書、ヴェザリオの「ベネエ・エロセイム神人混婚」が、  
 秘かに海を渡って降矢木の書庫に収まっていること  
 だった。それから、ライツェンシュタインの  
 「ミステリエン・レリギオネン密儀宗教」の大著から「リチュエル・フユネレイルデ・ルウジエの  
リチュエル・フユネレイル葬祭儀式」。また、ほうぼくし抱朴子の「からん遐覧篇」費長房の  
けこきよう「歴代三三記」「老子化胡経」等の仙術神書に関するも  
 のも見受けられた。しかし、魔法本では、キイゼル

ヴェターの「スフィンクス」、ウエルナー大僧正の「イ

ングルハイム呪術」<sup>マジツク</sup>など七十余りに及ぶけれども、大

部分はヒルドの「悪魔の研究」<sup>エチユード・スル・レ・デモン</sup>のような研究書で、

本質的なものは算哲の焚書<sup>ふんしよ</sup>に遇つたものと思われた。

さらに、心理学に属する部類では、犯罪学、病的心理

学心霊学に関する著述が多く、コルツチの

「擬<sup>レ</sup>・グラファイケ・デラ・シムラツオネ伴<sup>レ</sup>の記録」<sup>レ</sup>リーブマンの

「精神病者の言語」、パティニの「蠟質撓拗性」<sup>フレンヒリタ・チエレア</sup>

等病的心理学の外に、フランシスの

「死<sup>エンサイクロペジア・オヴ・デツス</sup>の百科辞典」、シュレンク・ノツチングの

クリミナルサイコロジイ・アンド・サイコパソロジック・スタディ

「犯罪心理及精神病学的研究」、グアリノの

フアキス・ナポレオニカ

コントリビュション・アレチユード・デ・ゾフセフシヨシ・エ・デ

「ナポレオンの面相」、カリエの「憑着及殺人自殺の衝

・ザムブルシヨシ・ア・ロミシイド・エ・オー・スイシイド

動の研究」、クラフト・エーヴィングの

レールブツフ・デル・ユリスティツシエン・プシヒヨパトロギイ

「裁判精神病学教科書」、ボーデンの

デイ・プシヒヨロギイ・デル・モラリツシエ・イデイオチイ

「道德的癡患の心理」等の犯罪学書。なお、

心霊学でも、マイアーズの 大著

ヒューマン・パーソナリチー・エンド・サーヴァイヴァル・オヴ・ポデイリー・デツス

「人格及びその後の存在」サヴェ

キヤン・テレパシイ・エキスプレイン

ジの「遠感術は可能なりや」ゲルリングの

ハンドブツフ・デル・ヒプノチツシエン・ズゲスチヨシ

「催眠的暗示」シュタルケの奇書

トラデュチアニスムス

ぼうだい

「靈魂生殖説」までも含む彪大な集成だった。そして、



医学、神秘宗教、心理学の部門を過ぎて、古代文献学の書架の前に立ち、フィンランド古詩「カンテレタル」の原本、婆羅門音理字書「サンギータ・ラトナーカラ」、

「グートルーン詩篇」サクソ・グラムマチクスの

ヒストリア・ダニカ

「丁抹史」等に眼を移した時だった。鎮子がようやく、

レキエム

鎮魂楽の原譜を携えて現われた。その譜本は、焦茶色に変色していて、かえって女王クイーンアンの透し刷が浮いて見え、歌詞はほとんど判らなかつた。法水は手に取ると、さつそく最終の頁に眼を落したが、

「ハハア、古式の声音符記号で書いてあるな」と呟つぶやいた

だけで、無雑作に卓子テーブルの上に投げ出した。そして、鎮子に云った。「ところで久我さん、貴女は、この部分に何故弱音器符号を付けたものか、御承知ですか？」

「存じませんとも」鎮子は皮肉に笑った。「**CON**ソルディノ**sordino**には、弱音器を付けよ——以外の意味があるのでしうか。それとも、**Horn Fuge**ホモフゲ（人の子よ逃れ去れ）とでも」

法水は、鎮子の辛辣しんらつな嘲侮ちやうぶにもたじろがず、かえつて声を励ませて云った。

「いや、かえつて此エツケの人を見よホモ——の方でしうよ。

これは、ワグネルの『パルシファル』を見よ——と云っているのですからね」

「パルシファル!？」鎮子は法水の奇言に面喰めんくらったが、彼は再びその問題には触れず、別の問いを發した。

「それから、もう一つ御無心があるのですが、レッサーの

『ユーベル・デイ・フオルゲ・デル・ポストモルタラー・メカニシエル・ゲヴァルトアインヰイルクンゲンの死ユーベル・デイ・フオルゲ・デル・ポストモルタラー・メカニシエル・ゲヴァルトアインヰイルクンゲンの後機械的暴力の結果に就いて』がありましたら……」

「たぶんあったと思います」と鎮子はしばらく考えた後に云った。「もしお急ぎでしたら、彼方あちらの製本に出

す雑書の中を探して頂きましょう」

鎮子に示された右手の潜り戸くぐを上げると、その内部の書架には、再装を必要とするものが無雑作に突き込まれていて、ただABC順アルファベットに列んでいるのみだった。

法水は、Uの部類を最初から丹念に眼を通していったが、やがて、彼の顔に爽さわやかな色が泛うかんだと思うと、「こ

れだ」と云って、簡素な黒布装幀クロースの一冊を抜き出した。

見よ、法水の双眼には、異常な光輝みなぎが漲もたっているでは

ないか。この片々たる一冊が、はたして何ものを齎もたらそうとするのだろうか!? ところが、表紙を開くと、意

外な事に、彼の顔をサツと驚愕きょうがくの色が掠かすめた。そして、

思わずその一冊を床上に取り落してしまつたのだつた。

「どうしたのだ？」 検事は吃驚びつくりして、詰め寄つた。

「いかにも、表紙だけはレッサーの名著さ」と法水は下唇をギユツと噛み締めたが、声の慄ふるえは治まつていなかつた。

「ところが、内容なかみはモリエルの『タルチュフ』なんだよ。見給え、ドーミエの口絵で、あの悪党坊主ブラツク・モンクが嗤わらつているじゃないか」

「あッ、鍵がある！」 その時熊城が頓狂な声で叫んだ。

彼が床からその一冊を取り上げた時に、ちようど内容の中央辺と覚しいあたりから、はたおの 旆斧のような形をした、金属が覗いているのに気が付いたからだつた。取り出してみると、輪形に小札がぶら下つていて、それには薬物室と書かれてあつた。

「タルチュフと紛失した薬物室の鍵か……」法水はうつろ 空洞な声でつふや 呟いたが、熊城をかえり 顧みて、「このさら 曝しふだ 札の意味はどうでも、だいたい犯人の芝居気たつぷりなところはどうだ？」

熊城は憤懣の遣やり場を法水に向けて、毒づいた。

「ところが、役者はこつちの方だと云いたいくらいさ、最初から、給金しんしんしょうも出ないくせに啗わらわれどおしじやないか」

「どうして、あんな淫魔インキブス僧止どころの話じやない」と  
検事は熊城を嗜たしなめるような軽い警句を吐いたが、かえって、それが慄然ぞつとするような結論を引き出してしまった。「事実まったく、クオーダー侯のマクベス様（四人の妖婆の科白）——とでも云いたいところなんだよ。どうして彼奴あいつが死霊でもなければ、法水君が見当をつけたものを、それ以前に隠すことなんて出来るもの

じゃない」

「うん、まさに小気味よい敗北さ。実は、僕も忸怩じくじとなつて、神経的な云い方をした。先刻さつき僕は、鍵の紛失した薬物室に犯人を秤はかるものがあると云つた。また、易介の死因に現われた疑問を解こうとして、レッサーの著書に気がついたのだ。ところが、その結果、理智の秤量しやうりようが反対になつてしまつて、かえつてこっちの方が、犯人の設しつちえた秤皿ささらの上に載せられてしまつたのだよ。しかし、こつやつて嗤わらいの面を伏せておくところを見



ると、案外あの著述にも、僕が考えたような本質的な記述はないのかもしれない。とにかく、易介の殺害も、最初から計画表スケジュールの中に組まれてあつたのだよ。どうして、あの死因に現われた矛盾が、偶然なもんか」

法水は、彼がレッサーの著述を目した理由を明らかにしなかつたけれども、ともかくそこに至るまでの彼等の進路が、腑ふ甲が斐いないことに、犯人の神経繊維の上を歩いていたものであることは確かだつた。のみならず、ここで明らかに、犯人が手袋を投げたということも、また、想像を絶しているその超人性も、この一つ

で十分裏書されたと云えよう。やがて、旧もとの書庫に戻ると、法水は未整理庫の出来事をあからさまには云わず、鎮子に訊ねた。

「遂々とうとう、事件の波動がこの図書室にも及んできましたよ。最近この潜り戸を通った人物を御記憶でしようか」

「マア、そんな事ですか。では、この一週間ほどのあいだダンネベルグ様ばかりと申し上げたら」と鎮子しずこの答弁は、この場合詐弁さべんとしか思われなかつたほどに意外なものだった。「あの方は何かお知りになりたいもの

があつたと見えて、この未整理庫の中を頻りしきと捜してお出でのようでもございましたが」

「昨夜はどうなんですか？」と熊城は、たまりかねたような声で云つた。

「それが、生憎あいにくとダンネベルグ様のお附添で、図書室に鍵を下すのを迂闊うっかりしてしまいました」と無雑作に答えて、それから鎮子は、法水に皮肉な微笑を送つた。「つきましては貴方に、賢者シユタイン・デル・ヴァイゼンの石をお贈りしたいと思つたのですが、クニツパーの『生理的筆蹟学』フィジカル・グラフィオロジイではいか

「いや、かえって欲しいのはマーローの  
トラジカル・ヒストリー・オヴ・ドクター・フォースタス

『ファウスト博士の悲史』なんですよ」と法水が

挙げたその一冊の名は、呪文の本質を知らない相手の

冷笑を弾き返すに十分だったが、なおそれ以外に、口

スコフの「デイ・シュトゥデイエ・フォン・フォルクスブッフ  
 Volksbuchの研究」(ファウスト伝説の原

本と称されていゝる)、バルトの

「ユーベルヒステリックス・エ・シユラフツステンデ  
 「ヒステリー性睡眠状態に就いて」、ウツズの

メンタル・エンド・モラル・ヒステリテイ・イン・ロヤリテイ  
 「王家の遺伝」をも借用したい旨を

述べて、図書室を出た。そして、鍵が手に入ったのを

機しおに、続いて薬物室を調べることになった。

次の薬物室は階上の裏庭側にあつて、かつては算哲の実験室に当てられるはずだった、空室くうしつを間に挟み、右手に、神意審問会が行われた室へやと続いていった。しかし、そこには薬室特有の浸透的な異臭が漂っているのみで、その床には、証明しようのないスリッパの跡が縦横に印され、それ以外には、袖摺れ一つ残されていなかった。したがつて、彼等に残された仕事ぼとというのは、十にあまる薬品棚の列と薬筐くすりびんとを調べて、薬瓶の動かされた跡と、内部の減量を見究めるにすぎなかつた。けれども、一方五分あまりも積み重なつてい

る埃の層が、かえつて、その調査を容易に進行させてくれた。最初眼に止ったのは、びんせん壇栓の外れた青酸加里シヤンニツク・ポツタシウムであつた。

「うんよし、では、その次……」と法水は一々書き止めていったが、続けて挙げられた三つの薬名を聴くと、彼は異様に眼をまたた瞬き、懐疑的な色をうか泛べた。何故なら、硫酸マグネシウムにヨード沃度フォルムと抱水クロラールは、それぞれに、きわめてありふれた普通薬ではないか。検事も怪訝けげんそうに首をかし傾げて、つぶや呟いた。

「下剤（瀉痢塩が精製硫酸マグネシウムなればなり）、殺菌剤、睡

眠薬だ。犯人は、この三つで何をしようとするんだろ  
う？」

「いや、すぐに捨ててしまつたはずだよ。ところが、嘔<sup>の</sup>

まさされたのは吾々<sup>われわれ</sup>なんだ」と法水はここでもまた、彼

が好んで悲劇的準備と呼ぶ奇言<sup>もてあそ</sup>を弄ぼうとする。

「なに僕等<sup>たまげ</sup>が」と、熊城は魂消て叫んだ。

「そうさ、匿名批評<sup>とくめい</sup>には、毒殺的效果があると云うじや

ないか」法水はグイと下唇を噛み締めたが、実に意表

外な観察を述べた。「で、最初に硫酸マグネシウムだが、

勿論内服すれば、下剤に違いない。しかし、それをモ

ルヒネに混ぜて直腸注射をすると、爽快な朦朧睡眠もうろうを起すのだ。また、次の沃度ヨードフォルムには、嗜眠性の中毒を起す場合がある。それから、抱水クロラールになると、他の薬物ではとうてい睡れないような異常亢進の場合でも、またたく間に昏睡させることが出来るのだよ。だから、新しい犠牲者に必要どころの話じゃない。全然、犯人の嘲笑癖が生んだ産物にすぎないのだ。つまり、この三つのものには、僕等の困憊こんばい状態が諷刺されているのだよ」

眼に見えない幽鬼は、この室へやにも這い込んでいて、



例により黄色い舌を出し横手を指して、嗤わらっているのだった。しかし、調査はそのまま続けられたが、結局収穫は次の二つにすぎなかつた。その一つは、密陀僧みつだそう（即ち酸化鉛）の大塚に開栓した形跡があるのと、もう一つは、再度死者の秘密が現われた事だつた。と云うのは、危く看過みすごそうとするところだつたが、奥まつた空瓶の横腹に、算哲博士の筆蹟で次の一文が認めしたたられていた事だつた。

デイグスビー所在を仄めかすも、遂に指示する事な

## くこの世を去れり――

要するに、算哲が求めていたものと云うのは、何かの薬物であろう。しかし、それが何であるかということよりも、法水の興味は、むしろこの際、なんらの意義もないと思われる空瓶の方に惹かれていつて、それに限りない神秘感を覚えるのだった。それは、荒涼たる時間の詩であろう。この内容のなかみない硝子器が、絶えず何ものかを期待しながらも、空しく数十年を過してしまつて、しかも未だもつて充されようとはしない

のだ。つまり、算哲とデイグスビイとの間に、なんとなく相闘うようなものがあるかに感ぜられるのだった。また、酸化鉛のような製膏剤に働いていった犯人の意志も、この場合謎とするよりほかにないのだった。いずれにしても以上の二つからは、事件の隠顕両面に触れる重大な暗示をうけたのであつたが、法水等三人は、それを将来に残して、薬物室を去らねばならなかつた。続いて、昨夜神意審問会が行われた室へやを調べることになつたが、そこは、この館には稀めずらしい無裝飾の室しつで、確かに最初は、算哲の実験室として設計されたも

のに相違なかつた。広さの割合に窓が少なく、室の周囲は鉛の壁になつていて、床の混泥土たたきの上には、昨夜の集会だけに使つたものと見え、安手の絨毯じゅうたんが敷かれてあつた。なお、庭に面した側には窓が一つしかなく、それ以外には、左隅の壁上に、換気筒の丸い孔が、ポツリと一つ空いているにすぎなかつた。そして、周壁を一面に黒幕で張り繞めぐらしてあるので、たださえ陰気な室がいつそう薄暗くなつてしまつて、そこには、とうてい動かし難い沈鬱な空気が漂つているのだつた。涸れ菱かびた栄光しなの手の一本一本の指の上に、死体

蠟燭ろうそくを差して、それが、懶氣ものうげな音を立てて点ともりはじめた時の——あの物凄い幻像が、未だに弱い微かな光線となつて、この室のどこかに残っているかのように思われた。その室を一巡してから、法水は左隣りの空室くうしつに行つた。そこは、昨夜易介が神意審問会の最中に人影を見たと言ふ、張出縁のある室だつた。その室は、広さも構造もほとんど前室と同じであつたが、ただ窓が四つもあるのです、室の中は比較的明るかつた。床には粗目あらめのズックあらいのようなものが敷いてあつて、その上に不用な調度類が、白い埃を冠うすつて堆高うすく積まれてあつ

た。法水は扉の横手にある水道栓に眼を止めたが、それからは、昨夜のうちに誰か水を出したと見えて、蛇口から蚯蚓みみずのような氷柱つららが三、四本垂れ下っている。云うまでもなく、それは昨夜ダンネベルグ夫人が失神すると、すぐに水を運んで来たとか云う——紙谷伸子の行動を裏書するものにすぎなかつた。

「とにかく、問題はこの張出縁だ」と熊城は、右外れの窓際に立って憮然ぶぜんと呟いた。その窓の外側には、アカンサスの拳葉けんようで亞刺比亞アラベス模様が作られている、古風な鉄柵縁が張り出されてあつた。そこからは、裏庭の

花卉園かきや野菜園を隔てて、遠く表徴樹トビアリーの優雅な刈り籬まがきが見渡される。暗く濁って、塔櫓に押し冠さるほど低く垂れ下った空は、その裾に、わずか蠟色の残光を漂わせるのみで、籬の上方にはすでに闇が迫っていた。そして、時々合間を隔てて、ヒユウと風の軋きしる音が虚空ですると、鎧扉わびが佗しげに揺れて、雪片が一つ二つ棧ひしの上で潰ひしげて行く。

「ところが、死霊おぼけは算哲ばかりじゃないさ」と検事が応じた。「もう一人ふえたはずだよ。だがデイグスビイという男はたいしたものじゃない。たぶん彼奴あいつは

魑魅魍魎だらうぜ」

デモーン・ガイスト

「どうして、やつは大魔霊さ」と法水は意外な言を吐

ことば

いた。「あの弱音器記号には、中世迷信の形相凄じい

すさま

力が籠こもっているのだよ」

楽譜の知識のない二人には、法水が闡明せんめいするのを待

つよりほかになかった。法水は一息深く煙を吸い込ん

で云った。

「勿論、Con Sordinoコンソルディノでは意味をなさないのだが、そ

れには、一つだけ例外があるのだ。と云うのは、僕が

先刻さつき鎮子を面喰めんくらわせた、『パルシファル』なんだよ。ワ



グネルはあの楽劇の中で、フレンチ・ホルンの弱音器  
 記号に よこじゆうじ「+」という符号を使っている。ところが、それ  
 は傍ら棺龕 カタファアルコ 十字架の表象 シムボルでもあり、また数論占星学  
 では、三惑星の星座連結を表わしているのだ」と法水  
 は、指で掌 てのひらに描いたその記号の三隅に、ちようど十と  
 なるような位置で、点を三つ打った。

「そうすると、いったいその棺龕 カタファアルコと云うのは、どこにあ  
 るのだね？」検事が問い返すと、法水はちよつと凄惨  
 な形相をして、耳を窓外へ傾 かしげるような所作 しぐさをした。  
 「聞えないかい、あれが。風の絶え間になると、錘舌 クラツパーが

鐘に触れる音が、僕には聞えるのだがね」

「ああなるほど」そうは云ったものの、熊城は背筋に冷たいものを感じて、自分の理性の力を疑わざるを得なかった。葉摺れのざわめきの噪音に入り交って、微かに、軽く触れた三角錘トライアングルのような澄んだ音が聞えるのだけれども、その音はまさしく、七葉樹とちのきで囲まれていて、そこには何もものもないと思われていた、裏庭の遙か右端の方から響いて来るのだった。しかし、それは神経の病的作用でもなく、勿論妖しい瘴気しょうきの所業しわざであり得よう道理はない。すでに法水は、墓容ぼこうの所在を知っていたので

ある。

「先刻窓越しさつきしに、太い櫛ぶなの柱を二本見たので、それが棺  
駐門であるのを知ったのだよ。いずれ、ダンネベルグ  
夫人の柩ひつががその下で停るとき、頭上の鐘が鳴らされる  
だろう。けれども、それ以前に僕は、他の意味であの  
墓窖ぼこうを訪れねばならないのだ。何故なら、あの十よこじゆうじの  
記号——デイグスビイが楽想を無視してまで、暗示し  
なければならなかつたものが何であるか。それを知る  
には、あの墓窖と鐘楼の十二宮以外にはないように思  
われるからなんだよ」

それから裏庭へ出るまでに、雪はやや繁くなつてきたので、急いで足跡の調査を終らねばならなかつた。まず法水は、左右から歩み寄つて来た二条の足跡が合致している点に立つて、そこから、左方にかけての一本を追いはじめた。そこはちようど、死霊が動いていたらと云われる張出縁の真下に当つているのだが、なおその附近に、もう一つ顕著な状況が残っていた。と云うのは、ごく最近に、その辺一帯の枯芝を焼いたらしい形跡が残っている事だつた。その真黒な焦土こげつちが、昨夜来の降雨のために、じとじと泥ぬかるんでいたので、そ

の上には銀色をした鞍くらのような形で、中央の張出間アブスが倒影していた。のみならず、焼け残りの部分が様々な恰好で、焦土の所々に黄色く残つているところは、ちようど焼死体の腐爛ふらんした皮膚を見るようで、薄気味悪く思われるのだった。

ところで、その二条すじの足跡を詳細に云うと、法水が最初たど辿りはじめた左手のものは、全長が二十センチほどの男の靴跡で、はなはだしくたいく体軀わいしやうの矮小な人物らしく思われるが、全体が平滑で、いぼも連円形もない印像の模様を見ると、それが特種の使途に当てられる、

護謨<sup>ゴム</sup>製の長靴らしく推定された。それを順々に追うて

行くと、本館の左端と密着して建てられていて、造園倉庫という掛札のしてある、シャレイ式（瑞西（スイス）山岳地方、即ちアルペン風の様式）の洒落<sup>しゃれ</sup>た積木小屋から始まっている。また、もう一つの方は全長二十六、七センチほどで、この方はまさに常人型と思われる、男用の套靴<sup>オヴァ・シューズ</sup>の跡だった。本館の右端に近い出入扉から始まっている、張出間<sup>アブス</sup>の外側を弓形に沿い、現場に達しているが、その二つはいずれも、乾板の破片が落ちて

いる場所との間を往復していた。

法水は衣袋から巻尺を取り出して、一々印像に当て

靴跡の計測を始めた。オヴァ・シューズ套靴の方は、歩幅にはやや小

刻みというのみの事で、これぞと云う特徴はなく、き

わめて整然としている。が、印像には不審なものが現

われていた。すなわち、爪先と踵と、かかと両端だけがグツ

と窪んでいて、しかも内側へ偏曲した内翻の形を示し

ているが、さらに異様な事には、その両端のものが、

中央へ行くに従い浅くなっているのだった。また、

護謨製の長靴らしく思われる方は、形状の大きさに比

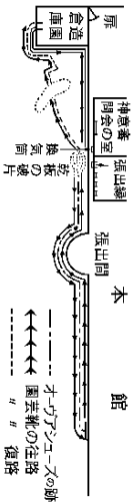
例すると歩幅が狭く、さらにいちじるしく不揃いであ

るばかりでなく、後踵部には重心があつたと見え、特に力の加わつた跡が残つていた。のみならず、印象全体の横幅も、わずかながら一つ一つ異なつていたのである。その上、爪先の部分を中央部に比較すると、均衡上幾分小さいように思われて、それがやや不自然な観を与える。また、その部分の印象が特に不鮮明で、形状の差異も、その辺が最もはなはだしかった。そして、往路の歩線は建物に沿うているが、復路には造園倉庫まで直線に行こうとしたものらしく、七、八歩進んで焼け残りの枯芝の手前まで来ると、幅三尺ほどに



すぎない带状のそれを、また跨ぎ越えた形跡を残している。ところが、それから二歩目になると、まるで建物が大きな磁石でもあるかのように、突然歩行が電光形に屈折していて、そこから、横飛びに建物と擦すれすれ々になり、今度は、往路に印された線の上を辿たどつて、出発点の造園倉庫に戻っていた。なお、復路に掛ろうとする最初の一步は、右足で身体を廻転させ左足から踏み出しており、枯芝を越えた靴跡は、左足で踏み切つて、右足で跨またいでいる。のみならず、二様の靴跡のいずれにも、建物に足を掛けたらしい形跡は残されていない。なかつた。

(以上四四九頁の図参照)



以上述べたところの、総体で五十に近い靴跡には、周囲の細隙から滲み込んだ泥水が、底ひたひたによどにぬれているだけで、印像の角度は依然鮮明に保たれていた。すなわち、雨に叩かれた形跡は、些ささい細なものも現われていないのである。してみると、靴跡が印されたのは、昨夜雨が降り止んだ十一時半以後に相違ない。しかも、その二様の靴跡について、前後を証明するものがあつた。と云うのは、乾板の破片を中心に、二つの靴跡が合流している附近に、一ヶ所オヴァ・シューズ套靴の方が、片方の上を踏んでいる跡が残っていた。したがって、オヴァ・シューズ套靴

を付けた人物の来た時刻が、護謨製の長靴と思われる方と同時に、あるいはそれより以後である事は明らかなのである。続いて、法水の調査が造園倉庫にも及んだのは当然であるが、そのシャレイ風の小屋は床のない積木造りで、内部から扉一つで本館に通じていた。そして、各種の園芸用具や害虫駆除の噴霧器などが、雑然と置かれてあった。法水は、本館に出入りする扉の側で、一足の長靴を見付けだした。それは先が喇叭形ラッパに開いていて、腿ももの半分ぐらいまでも埋まってしまピュアー・ラバーう、純護謨製の園芸靴だった。しかも、底に附着して

いる泥の中で、砂金のように輝いているのが、乾板の微粒だったのである。のみならず、後刻になって、その園芸用の長靴は、川那部易介の所有品である事が判明した。

そうなってみると読者諸君は、この二様の靴跡に様々な疑問を覚えられるであろうが、ことに、ある一つの驚くべき矛盾に気づかれたことと思う。また、靴跡相互の時間的關係から推しても、夜半陰々たる刻限に、二人の人物によつて何事が行われたのか——恐らくその片影すら、うかが窺うことは不可能であるに相違ない。

云うまでもなく法水でさえも、原型を回復することは勿論のこと、この紛乱錯綜した謎の華には、疑義を挟む一言半句さえ述べる余地はなかつたのである。しかし法水は、心中何事か閃ひらめいたものがあつたとみえて、鑑識課員に靴跡の造型を命じた後に、次項どおりの調査を私服に依頼した。

- 一、附近の枯芝は何時頃焼いたか？
- 一、裏庭側全部の鎧扉に附着している氷柱つららの調査。
- 一、夜番について、裏庭における昨夜十一時半以後の状況聴取。

それからほどなく、闇の中を点のような赭あかい灯が動いていったと云うのは、法水等が網龕灯あみがんどうを借りて、野菜園の後方にある墓地に赴おもむいたからだった。その頃は雪が本降りになつていて、烈風は櫓楼しやうろうを簫うなのように唸うならせ、それが旋風つむじと巻いて吹き下してくると、いったん地面に叩き付けられた雪片が再び舞い上つてきて、たださえ仄ほの暗い灯の行手を遮るのだつた。やがて、凄愴せいそうな自然力に戦おのっている橡とちの樹林が現われ、その間に、二本の棺駐門の柱が見えた。そこまで来ると、頭上の格の中から、齒ぎしりのような鐘を吊した環かんの軋き



りが聞え、振動のない鐘を叩くクラッパ錘舌の音が、狂った鳥のような陰惨な叫声を発している。墓地はそこから始まっまつていて、小砂利道の突当りが、デイグスビイの設計した墓窖ぼこうだっつた。

墓窖の周囲は、約翰ヨハネと鷲ルカ、路加と有翼犢こうしと云うような、十二師徒の鳥獸を冠彫かしらぼりにした鉄柵にカ囲まれ、その中央には、巨大な石棺としか思われない葬龕カタファアルコが横たわっつていた。さて、ここで墓柵の内部を詳述しなければならない。だいたいにおいて、聖サンガール寺院(瑞西(スイス)コンスタンス湖畔に六世紀頃愛蘭土(アイルランド)僧の建設した

る寺院)や、南ウエイルズのペンブローク寺アベイなどにも現

に残存している、露地式葬龕カタファアルコを模したものであつた

が、それには、いちじるしい異色が現われていた。と

云うのは、墓地樹として、典型的な、ななかまど、や

枇杷びわの類たぐいがなく、無花果いちじく・糸杉いとすぎ・胡桃くるみ・合歡樹ねむのき・

桃葉珊瑚あおおき・巴旦杏はたんきよう・水蠟木犀いぼたのきの七本が、別図のような位

置で配置されていた。またそれ等の樹木に取り囲まれ

た中央の葬龕カタファアルコは、ウムブリヤの泣儒なきおとしを浮彫うきぼりにした

薬研石やげんいしの台座まではともかくとして、その上に載せら

れた白大理石の棺蓋かんおおいになると、はじめて異様な構想が

現われてくるのだった。伝統的な儀習としては、その上が、紋章あるいは人像か単純な十字架が通例だが、それには、音楽を伝統とする降矢木の標章としてのプサルテリウムすじほり、三角琴が筋彫はりつけにされ、その上に、鍛鉄製の希臘十字架ギリシヤと磔刑耶蘇いぎようが載せられてあつた。しかも、その耶蘇もまた異形なもので、首をやや左に傾けて、両手の指を逆に反そらせて上向きに捻ねじり上げ、そろえた足尖つまさきを、さも苦痛を耐こらえているかのよう、内輪へ極度に反らせているところは……さらに、肋骨あばらが透いて見えて、いかにも貧血的な非化体相ひかたいそうと云い……そのすべてが、窄祭カタコムテ

時代のものに酷似してはいる、がかえってそれよりも、ヒステリー患者の弓状硬直でも見るようで——いかにもそう云った、精神病理的な感じに圧倒されるのだつた。ひととおりの観察を終えると、法水は熱病患者のような眼をして検事を顧みた。



「ねえ支倉君、キヤムベルに云わせると、重症の失語症患者でも、人を呪う言葉は最後まで残っていると云うじゃないか。また、すべて人間が力尽きて、反噬する気力を失ってしまった時には、その激情を緩解するものは、精霊主義オクルチスムス以外にはないと云うがね。明らかに、これは呪詛じゆそだよ。なにより、デイグスビイは威人ウエルシュなんだぜ。未だに、悪魔教バルダスの遺風が残っていて、ミュイヤダツハ十字架風クロッスの異教趣味に陶醉する者があると云われる——あのウエイルズ生れなんだ」

「いったい君は、何を云いたいんだ」と検事は、薄気味

悪くなつたように叫んだ。

カタファルコ

「実は支倉君、この葬龕は並大抵のものではないのだ。

ボズラ（死海の南方）の荒野にあつて、昼は鬣狗ハイエナが守護し、

夜になると、魔神降下を喚き出すと伝えられる――

死霊集會シエオールの標しるしなんだよ」と法水は横なぐりに睫毛まつげの雪

を払つて、云つた。「だが僕は猶太教徒ヤイウエでも利未族リビ（猶

太教で祭司となる一族）でもないのだからね。眼前に

死霊集會シエオールの標を眺めていても、それをモーゼみたい

に、壊さねばならぬ義務はないと思うよ」

「そうすると」熊城は衝つくように云つた。「先刻さつきの弱音

462 器記号の解釈は、どうしたんだ？」

「それなんだ熊城君、やはり、僕の推定が正しかったのだよ」と法水は、よこじゆうじ十の記号がもたらした解説を始め

た。「僕が予想した三惑星の連結は、まさしく暗示されているのだ。最初に、墓地樹の配置を見給え。アルボナウト以後の占星学では、アストロロジイ一番手前の糸杉と無花果と

が、土星と木星の所管とされているし、向う側の中央にある合ねむのき歡樹は、火星の表シムボル徴になっているのだ。またそれを、マンドラゴーラ曼陀羅華・オーレゴニア矢車草・アブサント苦艾と、草木類でも表わす

ことが出来るけれども………いつたいその三外惑星の集



合に、どういう意味があるかと云うと、モールレン  
 ヴアイデなどのブラックマジカル・アストロロジイ黒呪術的占星学では、それが変死の  
シムボル表徴ドイッになっドイッているのだ。ところで君達は、十一世紀  
 独逸のニックス教（ムンメル湖の水精でニクジーと云う、基督教  
 徒を非常に忌み嫌う妖精を礼拝する悪魔教）を知っているかね。

あの悪魔教団に属していた毒薬業者の一団は、その三  
 惑星の集合を、かのごそう纈草・ヘムロック毒人蔘・ズルカマラ蜀羊泉の三草で現わして  
 いて、その三つを軒辺のきべに吊し、秘かに毒薬の所在を暗  
 示していたと伝えられている。それが、後世になつて  
 三樹の葉に代えられたと云うのだが、さてそこで、そ

の三本の樹を連ねた、三角形と交わるものが何だろうか？」

(註)

(一) 纈草。敗醬〔オミナエシ〕科の薬用植物で、癩癩てんかん、ヒステリーけいれん等に特効あるため、学者の星と云われる木星の表徴とす。

(二) 毒人蔘。繖形科の毒草にして、コニインを多量に含み、最初運動神経が痲痺(ママ)するため、妖術師の星と称される土星の表徴

とす。



(三) 蜀羊泉。茄科の同名毒草にして、その葉には特にソラニン、デユルカマリンを含むものなれば、灼熱感を覚えると同時に中枢神経がたちどころに麻痺(ママ)するため、火星の表徴とす。

網あみがんどう龕灯の赭あか黒い灯が、薄く雪の積つた聖像の陰影を横に縦に揺り動かして、なんとも云えぬ不気味な生動を与える。また、その光は、法水の鼻孔や口腔を異様

に拡大して見せて、いかにも、中世異教精神を語るに  
 適ふきわしい顔貌を作るのだった。しかし、熊城は不審を  
 唱えた。

「だが、胡桃・巴旦杏・桃あ葉お珊瑚き・水蠟い木犀ぼの四本では、  
 結局正方形になつてしまふぜ」

「いや、それが魚なんだよ」と法水は突飛げんな言を吐いた。

「エジプト埃及の大占星家ネクタネブスは、毎年ニイルの氾濫  
 を告げる双魚座ピスケスを、でなしにという記号で現わし

ている。と云うのは、いま君の云つた正方形が、いわ

ゆる天馬星ペガサスの大正方形であつて、天馬座ペガサスの鞍星マルカフの外二

星にアンドロメダ座のアルフェラツツ星を結び付け、  
そうして出来る正四角形を指しているからなんだ。そ  
して、この三角琴フサルテリウムの筋彫すじぼりが三角座とすれば、その中央  
に挟まれた聖像は、天馬座ペガサスと三角座トリアングルムの間にある、  
双魚座ピスケスではないだろうか。ところで、一五二四年にも  
それがあつて、当時有名な占星数学者ストツフレルが  
再洪水説を称えたと云うほどで、とにかく三つの外惑  
星が双魚座ピスケスと連結するという天体现象は、大凶災の兆ちよう  
とされているのだ。しかし、凶災を人為的に作ろうと  
するのが、呪詛じゃないか。ともあれ、これを見給え。

実は、先刻さつき図書室で見たマクドウネルの梵英辞典に、見なれない蔵書印が捺おしてあつた。しかし、いま考えると、それがデイグスビイの印らしいので、それから推すとたぶんこの葬龕カタファルコも、あの男の奇異ふしぎな趣味と、病的な性格を語るものに相違ないのだよ」

と法水が、聖像の周囲ぐるりにある雪を払い退のけると、鍛鉄の十字架から浮び上つた痛ましい全身には、みるみる不思議な変化が現われていった。それは、あるいは彼が魔法を使ったのではないかと疑われたほどに、よもや人間の世界にあらうとは思われぬ奇怪な符号だつ

た。磔たくしん身の頭から爪つまさき尖までが、白くランも形で残されてしまつたからだ。しかし、法水は静かに、聖像から變化した不可解な記号の事を説きはじめた。

「ねえ支倉君、ブラックマジック黒呪術は異教と基督教キリストを繋ぐ連字符である——とボードレールが云うじやないか。まさしく

これは、調伏ちようふく呪語に使う梵語ランのもランの字なんだよ。また、プサルテリウム三角琴の又マに似た形は、呪詛アピチャーラカ調伏の黒色三角炉に、

欠いてはならぬ積柴せきさい法形ほうがたなのだ。チルダースの

『呪法僧』アンギラスの中に、不空ふくう絹索けんじやく神変じんべん真言しんごん経ぎょうの解釈が載つて

いるが、それによると、もランは、火壇かだんに火天を招く金剛

火だ。その字片を**又**の形に積んだ柴しばの下に置いて、それに火を点じ、シユクラ・ヤジュル・ヴェーダ白夜珠吠陀の呪文**了又ハハマ**を

唱えると、千古の大史詩『マハーバーラタ摩訶婆羅多』の中に現われる

ヴァイシユラヴァナ

毘沙門天の四大鬼将——げんだつばだいきぐんしよう乾闥婆大刀軍将・たつちむーか大竜衆・

くぼんだだいじんたいしよう

鳩槃荼大臣大将・北方薬叉鬼将の四鬼神が、秘かに

ヴァイシユラヴァナ

毘沙門天の統率を脱し来り、また、史詩『ラーマーヤナ羅摩衍那』の

らせつラーヴァナ

中に現われる羅刹羅縛拏も、十の頭かしらを振り立て、悪逆

火天となつて招かれると云うのだ。だから、僕がもし

たんでき

仏教秘密文学の耽溺者だとしたら、毎夜この墓窖では、

眼に見えない符号呪術の火が焚たかれていて、黒死館の



櫓楼の上を彷徨ほうこうする、黒い陰風がある——と結論しなければならぬだろう。しかし、とうてい僕には、それを一片の心霊分析としか解釈できない。そして、デイグスビイという神秘的な性格を持つ男が、生前抱いていた意志である——という推断だけに止めておきたいのだ。何故なら熊城君、すでに僕は危険を悟って、心理学の著述などは、ロツジの『レイモンド』ボルマンデル・スコツテの『蘇格蘭人ホーム』の改訂版以後は読まないのだし、また、『妖異評論』オカルト・レヴューの全冊を焼き捨ててしまったほどだからね」

最後に至って、法水は鉄のような唯物主義者の本領を發揮した。けれども、彼の張りきつた絃線のような神経に触れるものは、たちどころに、その場去らず類推の花弁となつて開いてしまふのだ。わずか一つの弱音器記号からでも、当の館の人々にさえ顔相かおかたちすら知られていない、故人クロード・デイグスビイの驚くべき心理を曝さらけ出したのであつた。それから、法水等は墓地を出て、風雪の中を本館の方に歩んで行つたが、こうして、捜査は夜になるも続行されて、いよいよ、黒死館における神秘の核心をなすと云われる、三人の異

国楽人と対決することになった。

三、莫迦ぼか、ミユンスターベルヒ！

一同が再び旧もとの室へやに戻ると、法水はさつそく真齋を呼ぶように命じた。間もなく、足菱あしなえの老人は四輪車を駆つてやつて来たが、以前の生氣はどこへやらで、先刻うけた呵責かしやくのため顔は泥色に浮腫むくんでいて、まるで別人としか思われぬような憔悴やつれ方だった。この老史学家は指を神経的に慄ふるわせ、どことなく憂色を湛えていて、明らかに再度の喚問を忌怖きふするの情を示してい

た。法水は自分から残酷な生理拷問を課したにかかわらず、空々しく容体を見舞った後で、きりだした。

「実は田郷さん、僕には、この事件が起らない以前から知りたい事があつたのですよ。と云うのは、殺されたダンネベルグ夫人をはじめ四人の異国人に関する事なんです。が、いったいどうして算哲博士は、あの人達を幼少の頃から養わねばならなかつたのでしようか？」

「それが判れば」と真斎はホツと安堵あんどの色を泛うかべたが、先刻とは異なり率直な陳述を始めた。「この館が、世間から化物屋敷のようには云われませんかじやろう。御承

知かもしれませんが、あの四人の方々は、まだ乳離れもせぬ揺籃の頃、それぞれ本国にいる算哲様の友人の方々から送られてまいったそうです。しかし、日本に着いてからの四十年余りの間と云うものは、確かに美衣美食と高い教程でもって育はぐくまれていったのですから、外見だけでは、十分宮廷生活と申せましょう。ですが、儂わじにはそう申すよりも、むしろそういう高貴な壁で繞めぐらされた、牢獄と云った方が適ふさわしいような感じがしますのじゃ。ちようどそれが、「ハイムスクリングラ（オーデイン神より創まっている古代諾威王歴代記）」にある、僧正

テオリディアルの執事そつくりじや。あの当時の日払租税のために、一生金勘定をし続けたと云うザエクスおやし爺と同様、あの四人の方々も、この構内から一步の外出すら許されていなかつたのです。それでも、永年の慣習しきたりというものは恐ろしいもので、かえつて御当人達には、人に接するのを嫌う——いわば厭人えんじんとでも云うような傾向が強くなつてまいりました。年に一度の演奏会でさえも、招かれた批評家達には、演奏台の上から目礼するのみのことで、演奏が終れば、サツサと自室に引つ込んでしまふといつた風なのでした。ですか

ら、あの方々が、何故揺籃のうちはこの館に連れて来られ、そうして鉄の籠の中で、老いの始まるまで過ぎねばならなかつたかということとは、もう今日では、過ぎ去った古話ザガにすぎません。ただそういつた記録だけを残したまままで、算哲様は、そっくりの秘密を墓場の中へ運ばれてしまふのです」

「ああ、ロエブみたいなことを……」と法水は、道化おどけたような嘆息をしたが、「いま貴方は、あの人達の厭人癖を植物向転性トロビズムみたいにお考えでしたね。しかし、たぶんそれは、単位の悲劇なんでしょう」



「単位？」

無論四重奏団

クワルテット

としては、一団をなしておら

れたでしようが」と真齋は単位と云った法水の言葉に、深遠な意義が潜んでいるのを知らなかつた。「ところで、あの方々とお会いになられましたかな。どなたも冷厳なストイシヤンです。よしんば傲慢ごうまんや冷酷はあつても、あれほど整美された人格が、真性の孤独以外に求められようとは思われませんな。ですから、日常生活では、たいしてお互いが親密だと云うほどでもなく、若い頃にも密接した生活にかかわらず、いつこう恋愛沙汰など起らなかつたのでしたよ。もつとも、お互い

に接近しようとする意識のないせいもあるでしょうが、感情の衝突などということとは、あの一団にも、また異人種の吾々われわれに対しても、かつて見たことがないというほどですのじゃ。とにかく、やはり算哲様でしょうかな——あの四人の方々が、一番親愛の情を感じていた人物と云えば」

「そうですか、博士に……」といったん法水は意外らしい面持をしたが、烟けむりをリボンのように吐いて、ボードレールを引用した。

「では、さしずめその関係と云うのが、

オー●モン●シエル●ベルゼビユット  
 吾が懐かしき魔王よなんでしょうか」

「そうです。まさに吾<sup>ジュ</sup>なんじを称えん——じゃ」真斎  
 は微かに動揺したが、劣らず対句で相槌<sup>あいづち</sup>を打った。

「しかし、ある場合は」と法水はちよつと思案気な顔に  
 なり、「洒落者<sup>ゼ●ポー●エンド●ウイットリング●ペリシュト●イン●ゼ●スロング</sup>や阿諛者はひしめき合つて——」と云

いかけたが、急にポープの『髪<sup>レープ●オヴ●ゼ●ロック</sup>盗<sup>セリ</sup>み』を止めて  
 『ゴンザーゴ殺し』（ハムレット中の劇中劇）の独白<sup>せりふ</sup>を引き出  
 した。

「どのみち、汝<sup>ザウ●ミクスチユア●ランク●オヴ●ミッドナイト●ウイーズ●コレクテッド</sup>真夜中の暗きに摘みし草の臭き液よ  
 ——でしょうからね」

「いや、どうして」と真齋は頸くびを振って、

ウイズ●ヘキツツ●パン●スライズ●プラスチック●スライズ●インフェクテッド  
 「三たび魔神の呪詛に萎れ、毒気に染みぬる——とは、

けっして」と次句で答えたが、異様な抑揚で、ほとんど韻律を失っていた。のみならず、何故か周章あわてふためいて復誦したが、かえってそれが、真齋を蒼白なものにしてしまった。法水は続けて、

「ところで田郷さん、事によると、僕は幻覚を見ているのかもしれませんが、この事件に——  
 バット●ジ●イシリアル●ゲート●クローズド  
 しかるに上天の門は閉され——と思われる節があるのですが」と法水は、門ゲートという一字をミルトンの『失楽

園』の中で、ルシファの追放を描いている一句に挟んだ。

「ところが、このとおりに」真斎は平然としながらも、妙かたくるに硬苦しい態度で答えた。「隠扉かくしどもなければ、揚蓋あげぶたも秘

密階段もありません。ですから、確実に、

ナット・ロンク・デイヴィジブル再び開く事なし——なのです」

「ワツハハハハハ、いやかえって、  
メン・ブルーヴ・ウイズ・チャイルド・アズ・パワーフル・ファンシイ・ウオークス  
 異常に空想が働き、男自ら妊れるものと信ずるならん  
 ——かもしれませんよ」と法水が爆笑を揚げたので、

それまで、陰性のものがあるように思われて、妙に緊

迫っていた空気が、偶然そこで解ほぐれてしまった。真齋もホツとした顔になって、

「それより法水さん、この方を儂わしは、  
エンド・メイド・ターン・ポットル・コール・アラウド・フオア・コークス・スライス  
 処女は壺になったと思ひ三たび声を上げて栓を探す  
 ——だと思ふのですが」

この奇様な詩文の応答に、側の二人は唾然あぜんとなつていたが、熊城は苦々しく法水に流眊ながしめをくれて、事務的な質問を挟んだ。

「ところで、お訊ねしたいのは、遺産相続の実状なんです」

「それが、不幸にして明らかではないのですよ」真斎は沈鬱な顔になつて答えた。「勿論その点が、この館に暗影を投じていると云えましょう。算哲様はお歿なくなりになる二週間ほど前に、遺言状を作成して、それを館の大金庫の中に保管させました。そして、鍵も文字合わせの符表もともに、津多子様の御夫君押鐘童吉博士にお預けになつたのですが、何か条件があるとみえて、未だもつて開封されてはおりません。儂わしは相続管理人に指定されているとは云い条、本質的には全然無力な人間にすぎんのですよ」

「では、遺産の配分に預かる人達は？」

「それが奇怪な事には、旗太郎様以外に、四人の帰化入籍をされた方々が加わっております。しかし、人員はその五人だけですが、その内容となると、知ってか知らずか、誰しも一言半句さえ洩らそうとはせんのです」

「まったく驚いた」と検事は、要点を書き留めていた鉛筆を抛り出して、

「旗太郎以外にたった一人の血縁を除外しているなんて。だが、そこには何か不和とでも云うような原因が



……」

「それが無いのですから。算哲様は津多子様を一番愛しておられました。また、その意外な権利が、四人の方々には恐らく寝耳に水だったでしょう。ことにレヴェズ様のごときは、夢ではないかと申されたほどでした」

「それでは田郷さん、さつそく押鐘博士に御足労願うことにしましょう」と法水は静かに云った。「そうしたら、幾分算哲博士の精神鑑定が出来るでしょうからな。では、どうぞこれでお引き取り下さい。それから、今

度は旗太郎さんに来て頂きますかな」

真齋が去ると、法水は検事の方へ向き直つて、

「これで、一つ君の仕事が出来た訳だよ。押鐘博士に召喚状を出す事と、もう一つは、予審判事に家宅捜査令状を発行してもらふ事なんだ。だって、僕等の偏見を溶かしてしまうものは、この場合、遺言状の開封以外にはないじゃないか。どのみち、押鐘博士もおいそれとは承諾しまいかからね」

「時に、君と真齋がやった、いまの詩文の問答だが」と  
熊城は率直に突つ込んだ。「あれは、何か物奇主義デイレツタンテイズムの産

物かね」

「いやどうして、そんな循環論的なしろものなもんか。僕がとんだ思い違いをしているか、それとも、ユングやミュンスターベルヒが大莫<sup>ぼ</sup>迦<sup>か</sup>野郎になつてしまふかなんだ」

法水は曖昧な言葉で濁してしまつたが、その時、廊下の方から口笛の音が聞えてきた。それが止むと、扉が開いて旗太郎が現われた。彼はまだ十七にすぎないのだが、態度がひどく大人びていて、誰しも成年期を前に幾分残っていないければならぬ、童心などは微塵も

見られない。ことに、媚麗うつくしい容色の階調を破壊して  
いるのが、落着きのない眼と狭い額だった。法水は丁  
寧に椅子を薦めて、

「僕はその『ペトルーシユカ』が、ストラヴィンスキー  
の作品の中では、一番好ましいと思つて居るのです。  
恐ろしい原罪哲学じゃありませんか。人形にさえ、口  
を空はかいている墳墓あなが待つて居るのですからね」

冒頭に旗太郎は、全然予期してもいなかつた言葉を  
聴いたので、その蒼白くすんなり伸びた身体が、急に  
硬ばつたように思われ、神経的に唾つばを嚙のみはじめた。

法水は続けて、

「と云つて、貴方が口笛で『乳母の踊り』の個所ところを吹くと、それにつれて、テレーズの自動弾条人形ペトルーシユカが動き出すというのではないのです。それに、また昨夜ゆうべ十一時頃に、貴方が紙谷伸子と二人でダンネベルグ夫人を訪れ、それからすぐ寢室に入られたという事も判つているのですからね」

「それでは、何をお訊ねになりたいのです？」と旗太郎は十分声音変化のきている声で、反抗気味に問い返した。

「つまり、貴方がたに課せられている、算哲博士の意志をですがね」

「ああ、それでしたら」と旗太郎は、微かに自嘲めいた亢奮こうふんを泛うかべて、「確かに、音楽教育をしてくれた事だけは、感謝してますがね。でなかった日には、既にとう気狂いになつていますよ。そうでしょう。倦怠けんたい、不安、懷疑、廢頹はいたい——と明け暮れそればかりです。誰だつて、こんな押し殺つぶされそうな憂鬱の中で、古びた能衣裳みたいな人達といつしよに暮してゆけるもんですか。実際父は、僕に人間惨苦の記録を残させる——それだけ

のために、細々と生を保つてゆく術を教えてくれたのです」

「そうすると、それ以外のすべてを、四人の帰化入籍が奪ってしまったという訳ですか？」

「たぶんそうともなりましようね」と旗太郎は妙に臆したような云い方をして、「いや、事実未だに、その理由が判然はっきりとしておりません。なにしろ、グレーテさんはじめ四人の人達の意志が、それには少しも加わっていないのですからね。ところで、こういう女王アンクイーン時代の警句を御存じですか。陪審人が僧正ビシヨツブの夕餐あずかに与る

ためには、罪人が一人絞くびり殺される——つて。だいた  
い、父という人物が、そういつた僧ビシヨツブ正みたいな男なん  
です。魂の底までも、秘密と画策に包まれているん  
すから、たまりませんよ」

「ところが旗太郎さん、そこに、この館の病弊があるの  
ですよ。いずれ除かれることでしょうが、だが貴方に  
したところで、なにも博士の精神解剖図を、持つてい  
るといふ訳じゃありませんまい」と相手の妄信たしなを窘める  
ように云つてから、法水は再び事務的な質問を放つた。  
「ところで、入籍の事を、博士から聴かれたのは何日頃



です？」

「それが、自殺する二週間ほど前でした。その時遺言状が作成されて、僕は、自分自身に関する部分だけを父から読み聴かされたのです」と云いかけたが、旗太郎は急に落着かない態度になつて、「ですけれど法水さん、僕には、その部分をお聴かせする自由がないのですよ。口に出したら最後、それは持分の喪失を意味するのですからね。それに、他の四人も同様で、やはり自分自身に関する事実よりほかに知らないのです」「いやけつして」と法水は、諭すような和やかな声音こわねで、

「だいたい日本の民法では、そういう点がすこぶる寛大なんですから」

「ところが駄目です」と旗太郎は蒼ざめた顔で、キツパリ云い切った。「何より、僕は父の眼が怖ろしくてならないのです。あのメフィストのような人物が、どうしても後々にも、何かの形で陰険な制裁方法を残しとかずにはおくものですか。きつとグレーテさんが殺されたのだから、そういう点で、何か誤ちを冒したからに違いありません」

「では、酬いだと云われるのですか」と熊城は鋭く切り

込んだ。

「そうです。ですから、僕が云えないという理由は、十分お解りになったでしょう。そればかりでなく、第一、財産がなければ、僕には生活というものが無いのですからね」と平然と云い放つて、旗太郎は立ち上つた。そして、ヴァイオリニスト提琴奏者特有の細く光つた指を、テーブル十本卓子の端に並べて、最後に彼はひどく激越な調子で云つた。

「もうこれで、お訊ねになる事はないと思いますが、僕の方でも、これ以上お答えすることは不可能なのです。しかし、この事だけは、はつきり御記憶になって下さ

い。よく館の者は、テレーズ人形のことを悪霊だと申すようですが、僕には、父がそうではないかと思われ  
るのです。いいえ、確かに父は、この館の中にまだ生  
きているはずです」

旗太郎は、遺言書の内容にはきわめて浅く触れたの  
みで、再度鎮子に続いて、黒死館人特有の病的心理を  
強調するのだった。そうして陳述を終ると、淋しそう  
に会釈してから、戸口の方へ歩んで行った。ところが、  
彼の行手に当って、異様なものが待ち構えていたので  
ある。と云うのは、扉の際まで来ると、何故かその場

で釘付けされたように立ち竦すくんでしまい、そこから先へは一步も進めなくなつてしまつた。それは、単純な恐怖とも異なつて、ひどく複雑な感情が動作の上に現われていた。左手を把手ノツブにかけてままで、片腕をダラリと垂らし、両眼を不気味に据えて前方を凝視しているのだつた。明らかに彼は、何事か扉の彼方に、忌怖きふすべきことを意識しているらしい。がやがて、旗太郎は、顔面をビリリと怒張させて、醜い憎悪の相を現わした。そして、瘳ひっつれたような声を前方に投げた。

「ク、クリヴオフ夫人……貴女は」

そう云つた途端に、扉が外側から引かれた。そして、

二人の召使が闕の両側に立つと見る間に、その間から、

オリガ・クリヴオフ夫人の半身が、傲岸な威厳に充ち

た態度で現われた。彼女は、貂てんで高い襟のついた

フエンシング・ケミセツト

剣術着ジャケツトのような黄色い短衣の上に、天鷲絨びろうどの

袖無外套クロークを羽織っていて、右手に盲目のオリオンとオ

リヴァレス伯（一五八七—一六四五。西班牙（スペイン）フィリッ

プ四世朝の宰相）の定紋が冠彫かしらぼりにされている、豪華な

キヤノニスチック・ケーン

講典杖キョウテンをついていた。その黒と黄との対照が、彼

女の赤毛に強烈な色感を与えて、全身が、焰ほのおのような

激情的なものに包まれているかの感じがするのだった。頭髪を無雑作に掻き上げて、みみたぶ耳朶が頭部と四十五度以上も離れていて、その上端が、まるで峻烈な性格そのもののように尖っている。やや生え際の抜け上った額は眉弓が高く、灰色の眼が異様な底光りを湛えていて、眼底の神経が露出したかと思われけるような鋭い凝視だった。そして、かんこつ顴骨から下が断崖状をなしている所を見ると、その部分の表出が険しい圭角的なもののように思われ、また真直に垂下した鼻梁にも、それが鼻翼よりも長く垂れている所に、なんとなく画策的な秘

密つぽい感じがするのだった。旗太郎は摺れ違いざまに、肩口から見返して、

「オリガさん、御安心下さい。何もかも、お聴きのとおりですから」

「ようく判りました」とクリヴオフ夫人は鷹揚おうように半眼で頷うなずき、気取った身振をして答えた。「ですけど旗太郎さん、仮りにもし私の方が先に呼ばれたのでしたら、その場合の事もお考え遊ばせな。きつと貴方だって、私どもと同様な行動に出られるにきまっていますわ」

クリヴオフ夫人が私どもと複数を使ったのに、



ちよつと異様な感じがしたけれども、その理由は瞬後に判明するに至つた。扉際に立っていたのは彼女一人だけではなく、続いてガリバルダ・セレナ夫人、オットカール・レヴェズ氏が現われたからだつた。セレナ夫人は、毛並の優れた聖セントバーナードドック犬の鎖を握つて、すべてが身長と云い容貌と云い、クリヴオフ夫人とは全く対蹠的たいせきな観をなしていた。暗緑色のスカートに縁紐バンドで縁取りされた胸衣ボデイスをつけ、それに肱ひじまで拡がつている白いリンネルの襟布カラー、頭にアウグスチン尼僧が被るような純白の頭布カーチーフを頂いている。誰しもその

優雅な姿を見たら、この婦人が、ロムブローゾに激情イタリー性犯罪の市と指摘まちされたところの、南伊太利ブリンデツシ市の生れとは気づかぬであろう。レヴェズ氏はフロツクに灰色のトラウザー、それに翼形ウイングカラーをつけ、一番最後に巨体を揺って現われたが、先刻さつき礼拝堂で遠望した時とは異なり、こう近接して眺めたところの感じは、むしろ懊惱的で、一見心のどこかに抑止されているものでもあるかのような、ひどく陰鬱気な相貌をした中老紳士だった。そして、この三人は、まるで聖餐祭の行列みたいに、ノタリノタリと歩み入って

来るのだった。恐らくこの光景は、もしこの時、綴織ツルネーの下つた長管喇叭トロムパの音が起つて筒長太鼓ライディング・ティンパニイが打ち鳴らされ、静蹕せいひつを報ずる儀仗官ぎじょうの声が聴かれたなら、ちようどそれが、十八世紀ヴユルツテムベルクかケルンテン辺りの、小ぢんまりした宮廷生活を髣髴ほうふつたらしめるものであるうし、また反面には、従えた召使パトラーの数に、彼等の病的な恐怖が窺えるのだった。さらに、いま旗太郎との間に交された醜悪な黙闘を考えると、そこに何やら、犯罪動機でも思わせるような、黝くろずんだ水が揺ぎ流れるといった気がしないでもなかつた。けれ

ども、なによりこの三人には、最初から採証的にも疑義を差し挟む余地はなかったのである。やがて、クリヴオフ夫人は法水の前に立つと、杖の先で卓子テーブルを叩き、命ずるような強いきつ声音で云った。

「私どもは、して頂きたい事があつてまいつたのです  
が」

「と云うと何ででしょうか。とにかくお掛け下さい」法水がちよつと躊躇たじろぎを見せたのは、彼女の命令的な語調ではなかつた。遠見でホルバインの、「マーガレット・ワイヤット（ヘンリー八世の伝記者、タマス・ワイヤット卿の

「妹」の像」に似ていると思われたクリヴオフ夫人の顔が、近づいてみると、まるで種痘痕ほうそうあとのような醜い雀斑そばかすだったからである。

「実は、テレーズの人形を焚き捨てて頂きたいのです」とクリヴオフ夫人がキツパリ云い切ると、熊城は吃驚びっくりして叫んだ。

「なんですと。たかが人形一つを。それは、また何故にですか？」

「そりゃ、人形だけなら死物でしょうがね。とにかく、私どもは防衛手段を講ぜねばなりません。つまり、犯

人の偶像を破棄して欲しいのです。時に貴方は、レ

ヴ エ ン ス チ イ ム の

アーベルグラウベ・ウント・フェルブレヒエリツシュ・ローデル(註)

『迷信と刑事法典』——をお読みに

なつたことがございましたか?」

「では、ジユゼツペ・アルツオのことを仰おっしや言るのです

ね」それまで法水は、しきりになにやら沈思げな表情をしていたが、はじめて言葉を挟んだ。

(註) キプロスの王ピグマリオンに始めて偶像信仰を記したる犯罪に関する中にあり。

羅馬人マクネージオと並称さるるジュゼツ  
ペ・アルツオは、史上著名なる半陰陽にして、  
男女二基の彫像を有し、男となる時には女の  
像を、女としての際には男の像に礼拝するを  
常とせり。而して詐偽、窃盜、争鬪等を事と  
せしも、一度男の像を破棄さるるに及び、そ  
の不思議な二重人格は身体的にも消失せりと  
伝えらる。

「まさにそうなのです」とクリヴオフ夫人は得たり顔

に頷うなずいて、他の二人に椅子を薦すすめてから、「私はなんとかして、心理的にだけでも犯人の執行力を鈍鈍らしたいと思うのですわ。次々と起る惨劇を防ぐには、もう貴方がたの力を待つてはおられません」

それに次いでセレナ夫人が口を開いたけれども、彼女は両手を怯々おそおそと胸に組み、むしろ哀願的な態度で云った。

「いいえ、心理的に崇拜物トリーテムどころの話ですか。あの人形は犯人にとると、それこそグンテル王の英雄（ニーベルンゲン譚中、グンテル王の代りに、ブルンヒルト女王と闘ったジーク



フリートの事) なんでごさいますからね。今後も重要な犯罪が行われる場合には、きつと犯人は陰険な策謀の中に隠れていて、あのプロヴィンシア人だけが姿を現わすにきまっていますわ。だって、易介や伸子さんとは違つて、私達は無防禦ではごさいませんものね。ですから、たとえば遣<sup>や</sup>り損じたにしても、捕えられるのが人形でしたら、また次の機会がないとも限りませんわ」

「さよう、どのみち三人の血を見ないまでは、この惨劇は終らんでしようからな」レヴェズ氏は脹れぼつたい

顔を戦か<sup>おの</sup>せて、悲しげに云つた。「ところが、儂<sup>わし</sup>どもに

は課せられている律法<sup>おきて</sup>がありますのでな。それで、こ

の館から災を避けることは不可能なのです」

「その戒律ですが、たぶんお聴かせ願えるでしょう  
 な？」と検事はここぞと突つ込んだが、それをクリ  
 ヴォフ夫人はやにわに遮つて、

「いいえ、私達には、それをお話しする自由はございま  
 せん。いつそ、そんな無意味な詮索をなさるよりも

……」とにわか<sup>ふる</sup>に激越な調子になり声を慄<sup>ふる</sup>わせて、「あ

あ、こうして私達は暗澹<sup>ブランキング・イン・ジス・ダーク・アビス</sup>たる奈落の中で、

サファリング・イン・ザ・シー・オブ・ファイア  
 火焰の海中にあるのです。

好奇心の眼を睜みはつて、新しい悲劇を待つておられるので

しよう？」と悲痛な声でヤングの詩句を叫ぶのだった。

法水は三人を交互かわるがわるに眺めていたが、やがて乗り出す

ように足を組換え、薄気味悪い微笑が浮び上ると、

「さよう、まさに、永続エヴァラスチング・エンド・エヴァ、無終なんです」と突然、

狂ったのではないかと思われるような、言葉を吐いた。

「そういう残酷な永遠刑罰を課したというのも、みんな

故人の算哲博士なんですよ。たぶん旗太郎さんが云

われたことをお聴きでしたでしょうが、博士こそ、

爾ヒイ・イイズ・ルツキンを父と呼びつつあるのを得たり気なグ・ダウン歡喜をもつて

瞰視パーフェクト・プリス・コーリング・ジイ・ファザーしているのです」

「マア、お父様が」セレナ夫人はかたち姿勢を改めて、法水を

見直した。

「そうですね。罪スルー・オール・デプス・オヴ・シン・アンド・ロツスと災罪の深さを貫貫き、

ドロッパス・ゼ・プラメツト・オヴ・マイ・クロツス

吾が十字架の測鉛は垂る——ですからな」と法水が自讃めいた調子でホイツチアを引用すると、クリヴオフ

夫人は冷笑を湛えて、

「いいえ、イエット・フュチャア・アピス・ウオズ・ファウンド・デイパー・ザン・クロツスされど未来の深淵は、その十字架の測り得クッド・サウンドざるほどに深し——ですわ」と云い返したが、その冷酷

な表情が発作的に痙攣けいれんを始めて、「ですが、ああきつと、ほどなくしてその男死にたり——でしようよ。貴方がたは、易介と伸子さんの二つの事件で、既に無力を曝露ばくろしているのですからね」

「なるほど」と簡単に頷うなずいたが、法水はいよいよ挑戦的にそして辛辣しんらつになつた。「しかし、誰にしる、最後の時間いくばくがもう幾許か測ることは不可能でしょうからね。いや、かえつて昨夜などは、かしこ涼シヤイント・ドルト・イン・キューレンし気なる隠れ家に、不思議なるもの覗シヤウエルン・アイン・ゼルトザメス・ツ・ラウエルンけるがごとくに見ゆ——と思うのですが」

「では、その人物は何を見たのでしような。儂はとんとその詩句を知らんのですよ」レヴェズ氏が暗い怯々おどおどとした調子で問い掛けると、法水は狡ずるそうに微笑ほほえんで、「ところがレヴェズさん、心も黒く夜も黒し、薬も利きて手も冴えたり——なんです。そして、その場所が、折もよし人も無ければ——でした」

と云い出したのは、一見見え透いた鬼面いばらのようでもあり、また、故意に裏面に潜ひそんでいる棘いばらのような計謀を、露さらわに曝さらけ出したような気がしたけれども、しかし彼の巧妙エロキユーションな朗誦法は、妙に筋肉が硬ばり、血が凍り

つくような不気味な空気を作ってしまった。クリヴオ  
 フ夫人は、それまで胸飾りのテュードル薔薇ローズ（六弁の薔  
 薇）を弄いじつていた手を卓上に合わせて、法水に挑み掛  
 るような凝視を送りはじめた。が、その間のなんとな  
 く一抹いつまつの危機を孕ほらんでいるような沈黙は、戸外で荒れ  
 狂ふぶきう吹雪の唸うなりを明瞭ほつきりと聴かせて、いつそう凄愴なも  
 のにしてしまった。法水はようやく口を開いた。

「しかし、原文には、また真昼を野の火花が散らされる  
ウント・ミタハス・ウエン・デイ・ゾンネ・グリユート・ダス・  
ファスト・デイ・ハイデ・フンケン・スプリユート  
 ばかりに、日の燃ゆるとき——とあるのですが、そこ

は不思議なことに、真昼や明りの中では見えず、夜も、

闇でなくては見ることの出来ぬ世界なのです」

「闇に見える!？」レヴェズ氏は警戒を忘れたように反問した。

法水はそれには答えず、クリヴオフ夫人の方を向いて、

「時に、その詩文が誰の作品だか御存じですか？」

「いいえ存じません」クリヴオフ夫人はやや生硬な態度で答えたが、セレナ夫人は、法水の不気味な暗示に無関心のような静けさで、

「たしか、グスタフ・ファルケの『ダス・ビルケンヴェルデヘン樺の森』では」



法水は満足そうに頷き、うなずやたらに煙の輪を吐いていたが、そのうち、妙に意地悪げな片笑がうか泛び上がった。  
きた。

「そうです。まさに『樺ダス・ビルケンザエルドヘンの森』です。昨夜この室へや

の前の廊下で、確かに犯人は、その樺の森を見たはずです。しかし、イーム・トラウムテ・エル・コンテス・ニヒト・ザーかれ夢みぬ、されど、それを云う能わざりゲき——なんですよ」

「では、その男は死人の室を、親しきものが行き通うがごとくに、戻っていったと仰おっしゃ言るのですね」とクリヴオフ夫人は、急にはしや燥ぎ出したような陽気な調子に

なつて、レナウの「秋ヘルプストゲフユールの心」を口にした。

「いえ、滑り行く——なんてどうして、彼奴は蹠躑カゲリき、行つたのですよ。ハハハハハ」と法水は爆笑を上げながら、レヴェズ氏を顧みて、

「ところでレヴェズさん、勿論それまでには、アイン・トリユベル・ワンドラー・フィンデット・ヒエル・ゲノツセンその悲しめる旅人は伴侶を見出せり——なんでしたか  
らな」

「そ、それを御承知のくせに」とクリヴオフ夫人はたまケインらなくなつたように立ち上り、杖を荒々しく振つて叫んだ。「だからこそ私達は、その伴侶を焼き捨てて欲し

いと御願ひするのです」

ところが、法水はさも不同意を仄めかすように、葛の紅い尖端を瞞めていて答えなかつた。が、側にいる検事と熊城には、いつ上昇がやむか涯しのない法水の思念が、ここでようやく頂点に達したかの感を与えた。けれども、法水の努力は、いつかな止もうとはせず、この精神劇ゼーレン・ドラマにおいて、あくまでも悲劇的開展を求めようとした。彼は沈黙を破つて、挑むような鋭い語気で云つた。

「ですがクリヴオフ夫人、僕はこの気狂い芝居が、とう

てい人形の焼却だけで終ろうとは思えんのですよ。実を云うと、もつと陰険朦朧とした手段で、別に踊らされていている人形があるのです。だいたいプラグの

インターナショナル・リーダー・オヴ・マリオネット

万国操人形聯盟にだって、最近『ファウスト』が演ぜられたという記録はないでしょうからな」

「ファウスト!? ああ、あのグレーテさんが断末魔に書かれたと云う紙片の文字のことですか」レヴェズ氏は力を籠めて、乗り出した。

「そうです。最初の幕に水精、二幕目が風精でした。

いまもあの可憐な空気の精が、驚くべき奇蹟を演じて

遁れ去つてしまつたところなんですよ。それにレヴェズさん、犯人は Syllpus と男性に変えているのですが、貴方は、その風精シルプスが誰であるか御存じありませんか」

「なに、儂わしが知らんかつて!? いや、お互いに洒落しやれは止めにしてしましよう」レヴェズ氏は反撃を喰つたように狼狽うろたえたが、その時、不遜をきわめていたクリヴオフ夫人の態度に、突如いきなりすく竦んだような影が差した。そして、たぶん衝動的に起つたらしい、どこか彼女のものではないような声が発せられた。

「法水さん、私は見ました。その男というのを確かに

見ましたわ。昨夜私の室に入つて来たのが、たぶんその風精シルフスではないかと思うんです」

「なに、風精シルフスを」熊城の仏頂面が不意に硬くなつた。

「しかし、その時扉ドアには、鍵が下りていたのでしような」

「勿論そうでした。それが不思議にも開かれたのですわ。そして、背の高い痩せぎすな男が、薄暗い扉ドアの前に立っているのを見たのです」クリヴオフ夫人は異様に舌のもつれたような声だったが語り続けた。「私は十一時頃でしたが、寢室へ入る際に確かに鍵を下しま

した。それから、しばらく仮まどろ睡んでから眼が覚めて、さて枕元の時計を見ようとすると、どうした事か、胸の所が寝衣ねまきの両端をとめられているようで、また、頭髪かみのけが引つ痊つれたような感じがして、どうしても頭が動かないのです。平生髪を解いて寝る習慣がございませので、これは縛りつけられたのではないかと思うと、背筋から頭の芯までズウンと痺しびれてしまつて、声も出ず身動みじろぎさえ出来なくなりました。すると、背後うしろにそよそよ冷たい風が起つて、滑るような微かな躑あしおと音が裾の方へ遠ざかつて行きます。そして、その躑音の主は、

扉の前で私の視野の中に入つてまいりました。その男は振り返つたのです」

「それは誰でしたか？」そう云つて、検事は思わず息を窒めたが、

「いいえ、判りませんでした」とクリヴオフ夫人は切な  
そんな溜息を吐いて、「卓上灯スタンドの光が、あの辺までは届

かないのですから。でも、輪廓だけは判りましたわ。

身長が五呎フィート四、五吋インチぐらいで、スナリした、痩せ

ぎすのように思われました。そして、眼だけが……」

と述べられる肢体は、様子こそ異にすれ、何とはなし



に旗太郎を髣髴ほうふつとさせるのだった。

「眼に!」熊城はほとんど慣性で一言挟んだ。すると、クリヴオフ夫人は俄然傲岸ごうがんな態度に返って、

「たしかバセドロー氏病患者の眼を暗がりで見、小さな眼鏡に間違えたとか云う話がございましたわね」と皮肉に打ち返したが、しばらく記憶を摸索するような態度を続けてから云った。

「とにかく、そういう言葉は、感覚外の神経で聴いて頂きたいのです。強しいて申せば、その眼が真珠のような光だったと云うほかにございません。それから、その

姿が扉ドアの向うに消えると、把手ノックがスウツと動いて、  
登音あしおとが微かに左手の方へ遠ざかって行きました。それ  
で、ようやく人心地がつかまりましたけども、いつの間に  
か髪が解かれたと見えて、私は始めて首を自由にすること  
が出来たのです。時刻はちょうど十二時半でござ  
いしましたが、それからもう一度鍵を掛け直して、把手ノック  
を衣裳戸棚に結び付けました。けれども、そうになると、  
もう一睡どころではございませんでした。ところが、  
朝になつて調べても、室内にはこれぞという異状らし  
い所がないのです。して見ると、てつきりあの人形使

いに違いございませんわ。あの狡猾な臆病者は、眼を醒ました私には、指一本さえ触れることが出来なかつたのです」

結論として大きな疑問を一つ残したけれども、クリヴオフ夫人の口誦くちずさむような静かな声は、側の二人かたわらに悪夢のようなものを掴ませてしまった。セレナ夫人もレヴェズ氏も両手を神経的に絡ませて、言葉を発する気力さえ失せたらしい。法水は眠りから醒めたような形で、慌あわてて葺たぼこの灰を落したが、その顔はセレナ夫人の方へ向けられていた。

「とここでセレナ夫人、その風来坊はいずれ詮議するとして、時にこういうゴットフリートを御存じですか。ヴァス・ヒエルテ・ミツヒ・ダス・イヒス・ニヒト・ホイテ・トイフェル吾れ直ちに悪魔と一つになるを誰が妨ぎ得べきや

——

「ですけど、その短剣……」と次句を云いかけると、セ

レナ夫人はたちまち混乱したようになってしまった、

冒頭の音節から詩特有の旋律を失ってしまった、「その短剣ゼツヒの刻印シユテムベル・シユレツケン・ゲエト・ドウルヒ・マイン・ゲバインに吾が身は慄え戦きぬ——が、どうし

て。ああ、また何故に、貴方はそんなことをお訊きになるのです？」としだいに亢奮こうふんしていつて、ワナワナ

身を慄ふるわせながら叫ぶのだった。「ねえ、貴方がたは捜していらつしやるのでしよう。ですけど、あの男がどうして判るもんですか。いいえ、けつしてけつして、判りつこございませんわ」

法水は紙巻を口の中で弄もてあそびながら、むしろ残忍に見える微笑を湛えて相手を眺めていたが、

「なにも僕は、貴女の潜在批判を求めていやしませんよ。あんな風精ジルフェの黙劇ダム・シヨウなんざあ、どうでもいいのです。それよりこれを、いずこに住めりや、なんじ暗ひびきき音響ヒビキ——なんですがね」とデーターメールの「沼ユーベル・デン・ジユムフエンの上」

を引き出したが、相変らずセレナ夫人から視線を放そうとはしなかつた。

「ああ、それではあの」とクリヴオフ夫人は、妙に臆したような云い方をして、「でも、よくマア、伸子さんが間違えて、朝の讚詠を二度繰り返したのを御存じですわね。実は、今朝あの方は一度、ダビデの詩篇九十一番のあの讚詠を弾いたのですが、昼の鎮魂樂の後には、火よ霰あられよ雪よ霧よ——を弾くはずだったのです」

「いや、僕は礼拝堂の内部の事を云っているのですよ」と法水は冷酷に突き放した。「実は、この事を知りたい

のです。あの時、ドツホ・ローゼン・ジンデス・ウオバイ、確かにそこにあるは薔薇なり、その附近には鳥の声は絶えて響かず——でしたからね」

「それでは、ローゼン・ヴァイラウフ薔薇乳香を焚いた事ですか」レヴェズ氏も妙にギコちない調子で、探るように相手を見やりながら、

「あれはオリガさんが、後半よほど過ぎてから一時演奏を中止して焚いたのですが、しかし、これでもう、滑稽な腹芸はやめて頂きましょう。儂どもは貴方から、人形の処置について伺えばよいのですから」

「とにかく明日まで考えさせて下さい」法水はキツパ

リ云い切った。「しかし、つまるところ僕等は、人身擁護の機械なんですからね。護衛という点では、あの魔法博士に指一本差させやしませんよ」

法水がそう云い終ると同時に、クリヴオフ夫人は憤懣の遣り場を露骨に動作に現わして、性急せわしく二人を促し立ち上った。そして、法水を憎々しげに見下して悲痛な語気を吐き捨てるのだった。

「やむを得ません。どうせ貴方がたは、この虐殺史を統計的な数字としかお考えにならないのですからね。いいえ、結局私達の運命は、アルビ教徒(註二)か、ウエ



トリヤンカ郡民<sup>(註二)</sup>のそれに異ならないかもしれませ  
 ん。ですけど、もし対策が出来るものなら……ああ、  
 それが出来るのでしたら、今後は、私達だけでするこ  
 とにいたしますわ」

(註)(一) アルビ教徒——南フランス、アルビに起り  
 し新宗教、摩尼教<sup>マニ</sup>の影響をうけて、新約聖  
 書のすべてを否定したるによつて、法王イ  
 ンノセント三世の主唱による新十字軍の  
 ために、一二〇九年より一二二九年まで約

四十七万人の死者を生ずるにいたれり。

(二) ウェトリヤンカ郡民——一八七八年露領アストラカンの黒死病猖獗期しょうけつにおいて、ウェトリヤンカ郡を砲兵を有する包圍線にて封鎖し、空砲発射並びに銃殺にて威嚇いかくせしめ、郡民は逃れ得ず、ほとんど黒死病のために斃たおれたり。

「いやどうして」と法水はすかさず皮肉に応酬した。「ですがクリヴオフ夫人、たしか聖セントアムブロジオだつ

たでしようか、死は悪人にもまた有利なり——と云いましたからな」

鎖を忘れられた聖セントバーナードドック犬が、物悲しげに啼なきながら、セレナ夫人の跡を追うて行つたのが最後で、三人が去つてしまふと、入れ違いに一人の私服が先刻命じておいた裏庭の調査を完了して来た。そして、調査書を法水に渡してから、

「よろいどお鎧通しは、やはりあの一本だけでした。それから、

本庁の乙骨おとぼね医師には、御申し付けどおりに渡しておきました。と復命すると、それに法水は、尖塔にある

十二宮の円華窓を撮影するよう命じてから、その私服を去らしめた。熊城は当惑げな顔で、微かに嘆息した。

「ああまた扉ドアと鍵か、犯人は呪まじない屋か錠前屋か、いったいどつちなんだい。まさかにジョン・デイ博士の隠蹟扉が、そうザラにあるという訳じゃあるまい」

「驚いたね」法水は皮肉な微笑を投げた。「あんなものどここに、創作的な技巧があつてたまるもんか。そりゃ、この館から一步でも外へ出れば、無論驚くべき疑問に違いないさ。けれども、先刻君は書庫さつきの中で、

犯罪現象学の素晴らしい書 ヒプリオグラフィ 目を見たはずだっけね。つまり、その扉を鎖させなかつた技巧というのが、この館の精神生活の一部をなすものなんだ。庁へ帰ってからグロース(註)でも見れば、それで何もかも判つてしまふのだよ」

(註) 法水がグロースと云つたのは、「予審判事要覧」中の犯人職業的習性の章で、アツペルトの「犯罪の秘密」から引いた一例だと思う。以前召使だつた靴型工の一犯人が、ある

銀行家の一室に忍び入り、その室と寢室との間の扉を鎖さしめないうために、あらかじめかんぬき門穴の中に巧妙に細工した三稜柱形の木片を挿入して置く。それがために銀行家は、就寢前に鍵を下そうとしても門が動かないので、すでに閉じたものと錯覚を起し、犯人の計画はまんまと成功せしと云う。

法水があえて再言しようとはせず、そのまま不可避免的なものとして放棄してしまったことは、平生検討的

な彼を知る二人によると、異常な驚愕きょうわくに違いないの

だった。が畢竟ひつきようするところ、この事件の深さと神秘を、

彼が書庫において測り得た結果であると云えよう。検事は再び法水の粹人的な訊問態度をなじりかかった。

「僕はレヴェズじやないがね。君にやつてもらいたいのは、もう動作劇ハンドリングスドラマだけなんだ。ああいう恋愛詩人ツルヴェール趣

味の唱合戦うたはいい加減にして、そろそろクリヴオフ夫人がそれとなしに仄めほのかした、旗太郎の幽霊を吟味しようじやないか」

「冗談じやない」法水は道化おどけたようななにげない身振

をしたが、その顔にはいつもの幻滅的な憂鬱が一扫されていた。

「どうして、僕の心理表出摸索劇は終わったけれども、あれは歴史的な葛藤さ。ところが、僕が引つ組んだのは、あの三人じゃないのだ。ミュンスターベルヒなんだ。やはり、あいつは大莫迦<sup>ばか</sup>野郎だったよ」

そこへ、警視庁鑑識医師の乙骨耕安<sup>おとぼねこうあん</sup>が入って来た。







第四篇 詩と甲冑と幻影造型



## 一、古代時計室へ

伸子の診察を終つて入つて来た乙骨おとぼね医師は、五十をよほど越えた老人で、ヒヨロリと瘠せこけてかまきり蟪蛄かまきりのよなうな顔はをしているが、ギロギロ光る眼と、一種気骨めいた禿はげ方とが印象的である。が、庁内きつての老練家だったし、ことに毒物鑑識にかけては、その方面の著述を五、六種持つていふといふほどで、無論のりみず法水のりみずとも充分熟知の間柄だった。彼は座につくと無遠慮たぼこに苮

を要求して、一口甘そううまに吸い込むと云った。

「さて法水君、僕の心像鏡的証明法は、遺憾ながら  
知覚喪失だ。オインマハト だいたい廻転椅子がどうだろうがこうだ  
ろうが、結局あの蒼白く透き通った齒齦はぐきを見ただけで、  
僕は辞表を賭かけてもいいと思う。まさしく単純失神トランスと  
断言して差支えないのだ。ところで、ここで特に、熊

城君に一言したいのだが、あの女が兇器の鎧通しを  
握っていたと聴いて、僕は数当て骨牌チツクタツキング・カードの裏を見たよう  
な気がしたのだよ。あの失神は、実に陰険朦朧もうろうたるも  
のなんだ。あまりに揃い過ぎているじゃないか」

「なるほど」法水は失望したように頷いたが、「とにかく細目を承うけたまわろうじやないか。あるいはその中から、君の耄碌もうろくさ加減が飛び出して来んとも限らんからね。ところで、君の検出法は？」

乙骨医師はところどころ術語を交えながら、きわめて事務的に彼の知見を述べた。

「無論吸収の早い毒物はあるにやあるがね。それに、特異性のある人間だと、中毒量はあるか以下のストリキニーネでも、屈筋震顫症アテトリージスや間歇強直症テタニーに類似した症状を起す場合がある。しかし、中毒としては末梢的所見

はないのだし、胃中の内容物はほとんど胃液ばかりなんだ。——これはちよつと不審に思われるだろう。けれども、あの女が消化のよい食物を摂ってから二時間ぐらいで斃たおれたのだとしたら、胃の空虚には毫ごうも怪しむところはない。それから、尿にも反応的变化はないし、定量的に証明するものもない。ただ徒いたずらに、磷酸塩が充ち溢れているばかりなんだ。あの増量を、僕は心身疲労の結果と判断するが、どうだい」

「明察だ。あの猛烈な疲労さえなければ、僕は伸子の観察を放棄してしまつただらう」法水は何事かを仄ほのめ



かして、相手の説を肯定したが、「ところで、君が投じた試薬は、リアクティヴ たったそれだけかね」

「冗談じゃない。結局徒労には帰したけれども、僕は伸子の疲労状態を条件にして、ある婦人科的観察を試みたんだ。法水君、今夜の法医学的意義は、ペニイロイヤル Pennyroyal (毒性を有する薬草) 一つに尽きるんだよ。あの××××ぐらいを健康未妊娠子宮に作用させると、ちよ<sup>(ママ)</sup>うど服用後一時間ほどで、激烈な子宮痙攣(ママ)が起る。そして、ほとんど瞬間的に失神類似の症状が現われるんだ。ところが、その成分である Oleum Hederae

Apiol さえ検出されない。勿論あの女には、既往において婦人科的手術をうけた形跡がないばかりでなく、中毒に対する臓器特異性を思わせる節ふしもないのだ。そこで法水君、僕の毒物類例集は結局これだけなんだけれども、しかし結論として一言云わせてもらえらるなら、あの失神の刑法的意義は、むしろ道徳的感情にあると云うに尽きるだろう。つまり、故意か内発か——なんだ」と乙骨医師は卓子テーブルをゴツンと叩いて、彼の知見を強調するのだった。

「いや、純粹プシヒヨバトロジーの心理学さ」法水は暗い顔をして云い

返した。「ところで、けいつい頸椎は調べたろうね。僕はクインケじゃないが、恐怖と失神は頸椎の痛覚なり——と云うのは至言だと思ふよ」

乙骨医師はたぼし其の端をグイと噛み締めたが、むしろ驚いたような表情をうか泛べて、

「うん 僕だつて、ヤンレッツグの

『ユーベル・克蘭クハフテ・トリープハンドルンゲン病的衝動行為について』や、ジヤネーの

『シヤン・エステジオメトリック験 触 野』ぐらいは読んでいるからね。いかに

も、第四頸椎に圧迫がある場合にインスピラチオン衝動的吸気を喰うと、

横隔膜にけいれん痙攣的な収縮が起る。だがしかしだ。その

かんじん

肝腎な<sup>せむし</sup>僂

というの、あの女じゃない。それ以前に、

一人<sup>ポット</sup>亀背病患者が殺されているという話じゃないか」

「ところがねえ」と法水は<sup>あえ</sup>喘ぎ気味に云った。「無論確

実な結論ではない。恐らく廻転椅子の位置や不思議な倍音演奏を考えたら、一顧する価値もあるまいよ。けれども一説として、僕はヒステリー性反覆睡眠に思い当つたのだ。あれを失神の道程に当ててみたいのだよ」

「もつとも法水君、元来僕は非幻想的な動物なんだがね」と乙骨医師は眩惑を払い退けるような表情をして、

皮肉に云い返した。「だいたいヒステリーの発作中には、モルヒネに対する抗毒性が亢進するものだよ。しかし、どうあつても皮膚の湿潤だけは免れんことなんだがね」

ここで乙骨医師が、モルヒネを例に亢進神経の鎮静云々うんぬんを持ち出したのは、勿論法水に対する諷刺ではあるけれども、それは、折ふし人間の思惟限界を越えようとする、彼の空想に向けられていたのだ。と云うのは、そのヒステリー性反覆睡眠という病的精神現象が、実に稀病中の稀病であつて、日本でも明治二十九年八

月福来博士の発表が最初の文献である。現に、好んで

寺院や病的心理を扱う小城魚太郎（最近出現した探偵小説家）

の短篇中にも——殺人を犯そうとする一人の病監医員が、もともと一労働者にすぎないその患者に、医学的な術語を聴かせ、それを後刻の発作中に喋らせて、自分自身の不在証明に利用する——という作品もあると

おりで、自己催眠的な発作が起ると、自分が行いかつ

聴いたうちの最も新しい部分を、それと寸分違わぬま

でに再演しかつ喋るのであるから、別名としてのヒス

テリー性無暗示後催眠現象と呼ぶ方が、かえって、こ

の現象の実体に相応するように思われるのである。それであるからして乙骨医師が、内心法水の鋭敏な感覚に亢奮こうふんを感じながらも、表面痛烈な皮肉をもつて異議を唱えたのも無理ではなかった。それを聴くと、法水はいったん自嘲めいた嘆息をしたが、続いて、彼には稀めずらしい噪狂的な亢奮こうふんが現われた。

「勿論稀有けうに属する現象さ。しかし、あれを持ち出さなくては、どうして伸子が失神し鎧通しを握っていたか——という点に説明がつくもんか。ねえ乙骨君、アンリ・ピエロンは、疲労にもとづくヒステリー性知覚

脱失の数十例を挙げている。また、あの伸子という女は、今朝弾いてその時弾くはずでなかった讚詠アンセムを、失神直前に再演したのだったよ。だから、その時何かの機はずみで腹を押したとすれば、その操作で無意識状態に陥るといふ、シャルコーの実験を信じたくなるじやないか」

「すると、君が頸椎けいついを気にした理由も、そこにあるのかね」と乙骨医師はいつの間にか引き入れられてしまった。

「そうなんだ。事によると、自分がナポレオンになる



ような幻視アウロラを見ているかもしれないが、先刻さつきから僕は、一つの心像的標本を持つてゐるのだ。君はこの事件に、ジグフリードと頸椎——の関係があるとは思わなにかね」

「ジグフリード!?」これには、さすがの乙骨医師も啞然あぜんとなつてしまった。「もつとも、帰納的に頭の狂つてゐる男は、その標本を一人僕も知つてゐるがね」

「いや、結局は比レイシヨの問題さ。しかし僕は、知性にも魔法的効果があると信じてゐるよ」と法水は充血した眼に、夢想の影を漂わせて云つた。「ところで、強烈な

擦痒かゆみ感覺かみに、電気刺戟と同じ効果があるのを知っているかね。また、麻痺マヒした部分の中央に、知覚のある場所が残ると、そこに劇烈な擦痒かゆみが発生するのも、たぶんアルルツツの著述などで承知のことと思うよ。ところが君は、伸子の頸椎に打撲したような形跡はないと云う。けれども乙骨君、ここに僅たつた一つ、失神した人間に反応運動を起させる手段がある。生理上けつして固く握れる道理のない手指の運動を、不思議な刺戟で喚起する方法があるのだ。そうしてそれが、ジグフリード十木の葉——の公式で表わされるのだがね」

「なるほど」と熊城は皮肉に頷うなずいて、「たぶんその木の葉と云うのが、ドン・キホーテなんだろうよ」

法水はいつたんかすかに嘆息したが、なおも気魄を凝こらして、神業かみわざのような伸子の失神に絶望的な抵抗を試みた。

「マア聴き給え。恐ろしく悪魔的なユーモアなんだから。エーテルを噴霧状にして皮膚に吹きつけると、その部分の感覚が滲透的に脱失してしまう。それを失神した人間の全身にわたって行うのだが、手の運動を司る第七第八頸椎けいついに当る部分だけを、ちょうどジークフ

リードの木の葉のように残しておくのだ。何故なら、失神中は皮膚の触覚を欠いていても、内部の筋覚や関節感覚、それに、かゆみ 擦痒の感覚には一番刺戟されやすいのだからね。すると、当然その場所に、劇烈なかゆみ 擦痒が起る。そうしてそれが電気刺戟のように、頸椎神経の目的とする部分を刺戟して、指に無意識運動を起させるに違いないのだ。つまりこの一つで、伸子がいかにして鎧通しを握ったか——という点に、根本の公式を掴んだような気がしたのだ。乙骨君、君は故意か内発かと云ったけれども、僕は、故意かエーテルに代る何

物かと云いたいんだ。どうして、その本体を突き詰めるまでには、まだまだ繊細微妙な分析的神経が必要なんだよ」と彼の表情に、みるみる惨苦の影が現われてゆき、打って変って沈んだ声音で呟いた。

「ああ、いかにも僕は喋しゃべったよ。しかし、結局廻転椅子の位置は……あの倍音演奏はどうなってしまうんだ？」

そうしてから、しばらく法水は煙の行方を眺めていて、発揚状態を鎮めているかに見えたが、やがて乙骨医師に向って、話題を転じた。

「ところで、君に依頼しておいたはずだが、伸子の自署をとつてくれただろうか」

「だがしかした。これには充分質問例題とする価値があるぜ。何故君は、どうして伸子が覚醒した瞬間に、自分の名前を書かせたのだったね」と云つて、乙骨医師が取り出した紙片に、俄然三人の視聴が集められてしまった。それには、紙谷かみたにではなく、降矢木伸子ふりやぎと書かれてあつたからだ。法水はちよつと瞬またたいたのみで、彼が投じた波紋を解説した。

「いかにも乙骨君、僕は伸子の自署が欲しかったのだ。

と云つて、なにも僕はロムブローゾじやないのだから  
ね。ウンディネ 水精や風精ジルフェを知ろうとして、クレビエの『筆蹟学』グラフィオロジイ  
までも剽竊する必要はないのだよ。実を云うと、往々  
失神によつて、記憶の喪失を来す場合がある。それな  
ので、もし伸子が犯人でない場合に、このまま忘却の  
うちに葬られてしまふものがありやしないかと、実は  
内々でそれを懼おそれていたからなんだよ。ところで、僕  
の試みは、『マリア・ブルネルの記憶』に由来している  
んだ」

## (註)

ハンス・グロスの「予審判事要覧」の中に、潜在意識に関する一例が挙げられている。すなわち一八九三年三月、低バイエルン、デイトキルヘンの教師ブルネルの宅において、二児が殺害され、夫人と下女は重傷を負い、主人ブルネルが嫌疑者として引致されたという事件である。ところが、夫人は覚醒して、訊問調書に署名を求められると、マリア・ブルネルとは記さずに、マリア・



グツテンベルガーと書いたのであつた。しかし、グツテンベルガーと云うのは、夫人の実家の姓でもなく、しかもそれなりで、夫人は記憶の喚起を求められなくても、その名については知るところがなかつた。つまりその時以来、意識の水準下に没し去つたのである。ところが、調査が進むと、下女の情夫にその名が発見されて、ただちに犯人として捕縛さるるに至つた。すなわち、マリア・

グツテンベルガーと書いた時は、兇行  
の際識別した犯人の顔が、頭部の負傷  
と失神によつて喪失されたが、偶然覚  
醒後の朦朧状態において、それが潜在  
意識となつて現われたのである。

「マリア・ブルネル……」だけで喚起したものがあつた  
と見え、三人の表情には一致したものが現われた。法  
水は、新しい苘たばこに口をつけて続けた。

「だから乙骨君、僕が伸子の、開目の際を条件としたの

も、つまるところは、マリア・ブルネル夫人と同じ朦朧もうろう状態を狙いねら、あわよくば、まさに飛び去ろうとする潜在意識を記録させようとしたからなんだよ。ところが、やはりあの女も、法心理学者の類例集カズイステイクから洩れることは出来なかつたのだ。ねえ、伸子の先例は、オフィリアに求められるのだろうね。しかしオフィリアの方は、単に狂人きちがいになつてから、幼い頃乳母から聴いた——（あすはヴァレンタインさまの日）の猥歌ざれうたを憶い出したにすぎない。ところが、伸子の方は、降矢木というすこぶる劇的ドラマチックな姓を冠せて、物凄い皮肉を演じてしまった

のだよ」

その署名には、恐ろしい力で惹ひきつけるようなものがあつた。しばらく釘付けになつていているうちに、まず直情的な熊城くましろが氣勢を上げた。

「つまり、グツテンベルガー＝降矢木旗太郎なんだ。これで、クリヴォフ夫人の陳述が、綺麗きれいさっぱり割り切れてしまふぜ。サア法水君、君は旗太郎の不在アリバイ証明を打ち破るんだ」

「いや、この評価は困難だよ。依然降矢木Xさ」と検事は容易に首肯した色を見せなかつた。そして、暗に算

哲の不思議な役割を仄めかすと、法水もそれに頷いて、劇しい皮肉を酬いられたかのように、錯乱した表情を泛べるのだった。事実、それが幽霊のような潜在意識だとすれば、恐らく法水の勝利であろう。けれども、もし単に、一場の心的錯誤パラムネジイだとしたら、それこそ推理測定を超越した化物に違いないのである。乙骨医師は時計を見て立ち上ったが、この毒舌家は、一言皮肉を吐き捨てるのを忘れるような親爺おやじではなかった。

「さて、今夜はもう仏様も出まいて。しかし法水君、問題は、空想より論理判断力のいかにあるよ。その二

つの歩調が揃うようなら、君もナポレオンになれるだ  
ろうがな」

「いや、トムセン（丁抹（デンマーク）の史学者。バイカル湖畔南オルコン河の上流にある突厥人の古碑文を読破せり）で結構さ」と法水は劣らず云い返したが、その言葉の下から、俄然ただならぬ風雲を捲き起してしまった。「勿論僕に、たいした史学の造詣ぞうけいはないがね。しかし、この事件では、オルコン以上の碑文を読むことが出来たのだ。君はしばらくサロン広間サロンにいて、今世紀最大の発掘を待っていてくれ給え」

「発掘!」熊城は仰天せんばかりに驚いてしまった。

しかし、法水が心中何事を企図しているのか知る由はないといつても、その眉宇びうの間に泛うかんでいる毅然きぜんたる決意を見ただけで、まさに彼が、乾坤けんこん一擲いつてきの大賭博おおぼくちを打たんとしていることは明らかだつた。間もなく、この胸苦しいまでに緊迫した空気の中を、乙骨医師と入れ違いに、喚よばれた田郷真齋が入つて来ると、さつそく法水は短刀直入に切り出した。

「僕は率直にお訊ねしますが、貴方は、昨夜八時から八時二十分までの間に邸内を巡回して、その時古代時計

室に鍵を下したそうでしたね。しかし、その頃から姿を消した一人があつたはずです。いいえ田郷さん、昨夜神意審問会の当時この館にいた家族の数は、たしか五人ではなく、六人でしたね」

途端に、真斎の全身が感電したように戦おののいた。そして、何か縫すがりたいものでも探すような恰好で、きよろきよろ四辺あたりを見廻していたが、いきなり反噬はんぜい的な態度に出で、

「ホホウ、この吹雪の最中に算哲様の遺骸を発掘するとなら、あんた方は令状をお持ちとみえますな」



「いや、必要とあらば、たぶん法律ぐらいは破りかねぬでしょう」と法水は冷然と酬い返した。が、この上真齋との応酬を無用とみて、率直に自説を述べはじめた。「だいたい、貴方がおいそれと最初から口を開こうなどとは、夢にも期待していなかつたのですよ。ですから、まず僕の方で、その消え失せた一人を、外包的に証明してゆきましよう。ところで貴方は、盲人の聴触覚標型という言葉を御存じですか。盲人は視覚以外のあらゆる感覚を駆使して、その個々に伝わってくる分裂したものを総合するのです。そうして、自分に近接

している物体の造型を試みようとするのですよ。ねえ田郷さん、勿論僕の眼に、その人物の姿が映ろう道理はありません。しかも、物音も聴かなければ、その一人に関する些ささい細な寸語さえ耳にしていけないのです。しかし、この事件の開始と同時に、ある一つの遠心力が働いて、そうしてその力が、関係者の圏外はるかへ抛ほうてき擲してしまつた一人があつたのですよ。僕は、最初この館に一步踏み入れたとき、すでにある一つの前兆とでも云いたいものを感じました。それを、召使バトラーの行為から観取することが出来たのでしたよ」

「すると、僕が訊ねた……」検事は異様に亢奮こうふんして叫んだ。そして、自分の疑念が氷解してゆく機に、達したのを悟ったのであつた。法水は、検事に微笑で答えてから続けた。

「つまり、この神経黙劇にとると、最初召使バトラーに導かれて大階段を上つて行つた時が、そもそもアインライツングの開緒エンジンなのでした。その折、喧けたたましい警察自動車の機関エンジンの響がしていたのですが、その召使バトラーは、僕の靴が偶然きし軋きしつて微かな音を立てると、何故か先に歩んでいるにもかかわらず、竦すくんだような形で、身体を横に避けるのです。僕

はそれを悟ると、思わず、神経に衝き上げてくるものがありました。ですから、階段を上り切るまでの間、試みに再三同じ動作を演じてみたのですが、そのつど、パトラ召使も同様のものを繰り返してゆくのです。明らかに、この無言の現実は、何事かを語ろうとしています。そこで、僕は推断を下しました。機関エンジンの騒音があるにもかかわらず、当然圧せられて消されねばならない、いや、通常の状態では絶対に聴くことの出来ぬ音を聴いたからだ——と。しかし、それは当然奇蹟でもなければ、勿論僕の肝臓に変調を来した結果でもありません。

医学上の術語でウイリス徴候と云つて、劇甚な響と同時にくる微細な音も、聴き取ることが出来るという——聴覚の病的過敏現象にすぎんのですよ」

法水は徐ろに苘おもむに火を点けて、一息吸うと続けた。

「云うまでもなくその徴候は、ある種の精神障礙しょうがいには前駆となつて来るものです。けれども、チーヘンの『忌怖きふの心理』などを見ると、極度の忌怖感に駆られた際の生理現象として、それに関する数多あまたの実験的研究が挙げられています。ことに、最も興味を惹ひかれるのは、ドルムドルフの

『トット●シャイントット●ウント●フリューへ●ベエールデイグング  
死仮死及び早期の埋葬』中の一例でしよ

うかな。確か一八二六年に、ボルドーの監督僧正ド  
ネが急死して、医師が彼の死を証明したので、棺に蔵  
め埋葬式を行うことになりました。ところが、その最  
中ドンネは棺中で蘇生したのです。しかし、声音の自  
由を失っているので救いを求めることも出来ず、渾身  
の力を揮<sup>ふる</sup>つて棺の蓋をわずかに隙<sup>すか</sup>しまでしたのでした  
が、そのまま彼は力尽きて、再び棺中で動けなくなつ  
てしまいました。ところが、その生きながら葬られよ  
うとする言語に絶した恐怖の中で、折から荘嚴な経文

歌の合唱が轟とどろいているにもかかわらず、彼の友人二人が、秘かに私語する声を聴いたと云うのですよ」それから法水は、その現象をこの事件の実体の中に移した。「そうになると、勿論この場合、一つの疑題クエスチヨネアです。だいたい召使パトラーなどというものは、傍観的な亢奮こうふんこそあれ、また現場に達しませぬ捜査官が、何か訊ねようとして近接する気配を現わしたにしても、それになんらの畏怖いふを覚えるべき道理はありません。ですから、その時僕は、ある出来事の前提とでも云うような、薄気味悪い予感に打たれました。云わば、過敏神経ドラマチックの劇的な

遊戯なんでしょうが、ちよつと口には云えない、一種異様に触れてくる空気を感じたのです。それが明瞭はつきりとしたものでないだけに、なおさら腕もがいてでも近づかねばならぬような力に唆そそられました。そうして間もなく、貴方の嵌かんこうれい口令が生んだ、産物であるのを知ると同時に、強しいて覆い隠そうとした運命的な一人を、その身長ままで測ることが出来たのです」

「身長を？」真斎はさすがに驚いて眼まなこを睜みはつたが、ここで三人は、かつて覚えたことのない亢奮にせり上げられてしまった。



「そうです。あの兜かぶとの前立星まえたてぼしが、此エツケの人を見よホモ——と

云っているのです」と法水は椅子を深く引いて、静か

に云った。「たぶん貴方もお聴きになったでしょうが、  
そでろうか

拱廊の古式具足のうちで、円廊側の扉際ひおどしにある緋緘鋏

の上に、猛悪な黒毛三枚鹿角立しかつのだての兜が載っていました。

また、その前列で吊具足あらいかわどうになつてゐる洗革胴の一つが、

これは美々しい獅子嚙座のついた、星前立細鋏形の兜  
 を頂いていて、その二つの取り合わせから判断すると、

歴然たる置き換えの跡が残つてゐるのです。そればかりでなく、その置き換えの行われたのが、昨夜の七時

以後であることも、召使の証言によつて確かめることが出来ました。しかし、その置き換えには、すこぶる繊細な心像が映っているのですよ。そして、それが円廊の対岸にある二つの壁画と俟まつて、始めてこの本体を明らかにするのでした。御承知のとおり、右手のもの、『処女受胎の図』で、聖母マリアが左端に立ち、左手の『カルバリ山の朝』は、右端に耶蘇イエスを釘付けにした十字架が立っているのです。つまりその二つの兜を置き換ええないでは、聖母マリアが十字架に釘付けされるといふ、世にも不可思議な現象が現われるからでした。しかし、

その原因は容易く突き究めることが出来たのです。ねえ田郷さん、円廊の扉際には、外面艶消しの硝子で平面の弁と凸面の弁を交互にして作った、六弁形の壁灯がありましたつけね。実は、緋緘鍛ひおとししころの方に向いている平面の弁に、一つの気泡があるのを発見したのです。ところで、眼科に使うコクチウス検眼鏡の装置を御存じでしょうか。平面反射鏡の中央に微孔を穿うがって、その反対の軸に凹面鏡を置き、そこに集った光線を、平面鏡の細孔から眼底に送ろうとするのですが、この場合、天井のシャンデリアの光が凹面の弁に集って、

それが前方の平面弁にある気泡を通つてから、向う側にある前立星に照射されたからでした。つまりそれが判ると、前立星の激しい反射光をうけねばならない位置を基礎にして、眼の高さが測定されるのでしよう」

「しかし、その反射光が何を？」

「ほかでもない、複視が起されるのですよ。催眠中でさえも眼球を横から押すと、視軸が混乱して複視を生ずるのですが、横から来る強烈な光線でも、同様の効果を生みます。つまりその結果、前方にある聖母が十字架と重なるので、ちようど聖母が磔刑はりつけになったよう

な仮像が起る訳でしょう。云うまでもなく、その置き換えた人物と云うのは、婦人なのです。何故なら、そうして幻のように現われる聖母マリア磔刑の仮像は、第一、女性として最も悲惨な帰結を意味しています。また一面には、天来の瞰視かんしをうけているような意識に駆られて、審判とか刑罰とか云うような、妙に原人ぽい恐怖がもたらされてくるのですよ。だいたいそう云った宗教的感情などというしろものは、一種の本能的潜在物なんですからね。どんな偉大な知力をもつてしても、容易に克服できるものではありません。直観的ではあ

るが、けっして思弁的ではないのです。もともと  
ヤーヴェイズム 刑罰神一神説は……カトリシズム 公教精神は、セント 聖アウグスチヌスが  
えいごう 永劫刑罰説を唱えたとき、すでに超個人的な、抜くべ  
 からざる力に達していたのですからね。ですから、不  
 慮であると否とにかかわらず、その大魔力はたちまち  
 に精神の平衡を粉碎してしまいます。ことに、脆い、もろ  
 変化をうけ易い、何か異常な企図を決行しようとする  
 際のような心理状態では、その衝撃には恐らくひとた  
 まりもないことでしょう。……つまり田郷さん、そう  
 いった動揺を防ぐために、その婦人は二つの兜を置き  
かぶと

換えたのですよ。しかし、前立の星と並行する位置で、おおよその身長が測定されるのですが、五フィート四インチ——その高さを有する婦人は、いつたい誰でしようか。云うまでもなく、傭人どもなら大切な装飾品の形を変えるようなことはしないでしょうし、四人の外人は論なしとしても、伸子も久我鎮子も、それぞれに一、二インチほど低いのです。ところが田郷さん、その婦人は、まだこの館の中に潜んでいるのですよ。ああいつたい、それは誰なんでしょうかね」と再三真齋の自供を促しても、相手は依然として無言である。

法水の声に挑むいどような熱情がこもってきた。

「それから僕の脳裡で、その一つの心像が、しだいに大きな逆説パラドックスとなつて育つていったのですが、しかし、先刻さつき貴方の口から、ようやくその真相が吐かれました。そして、僕の算定が終つたのです」

「何と云われる。儂わしの口からとは？」真斎は驚き呆れるよりも、瞬間変転した相手の口吻こうふんに、嘲弄されたよ  
うな憤りを現わした。「それが、貴方にあるたった一つの障害なのじゃ。歪んだ空想のために、常軌を逸して  
るのです。儂わしは虚妄うその烽火のろしには驚かんで」



「ハハハハ、虚妄うその烽火のろしですか」法水はとたんに爆笑を

上げたが、静かな洗煉された調子で云った。

「いや、打ホワイたれし牝鹿レットは泣ゼきて行け、

無情ゼの牡鹿ハートは戯アンギヤラントるる——の方プレイでしようよ。しかし、

先刻さつき貴方は、僕が『ゴンザーゴ殺し』の中の

汝真夜中の暗ザウきに摘ミツクみし草スチユアの息液ランクよ——と云うと、

その次句ウイズの三ヘキツツたび魔女パンの呪詛スライスに萎プラスれ毒気テツドに染スライスみぬる

——で答スライスえましたつけね。その時スライスどうして、三スライスたび以

後の韻律スライスを失スライスつてしまったのでしよう。また、どうし

た理由ウイズかそれを云ヘキツツい直ヘキツツした時に With Hecates を一節

にして、Ban と thrice とを合わせ、しかもまた訝しい

パンスライス

ことには、その Banthrice を口にした時に、貴方はい

きなり顔色を失ってしまったのです。勿論僕の目的は、

文献学上の高等批判をしようとしたものではありません。

この事件の発端とそっくりで、実に物々しく白痴嚇し

こけおど

的な、三たび魔女の……以下を貴方の口から吐かせよ

ウイズ・ヘキッツ・パン

うとしたからです。つまり、詩語には、特に強烈な聯

合作用が現われる——という、ブルードンの仮説を

セオリイ

ひょうせつ

剽竊して、それを、殺人事件の心理試験に異なつた

かたち

形態で応用しようとしたのです。云わば、武装を隠し

た詩の形式でしようかな。それで、貴方の神経運動を吟味しようとして試みたのですが、とうとうその中から、一つの幽霊的な強音を摘み出しましたよ。ところでは、アクセントバーベージ（エドマンド・キーン以前の沙翁劇名優）は、シエークスピア沙翁の作中に律語的な部分、すなわち希臘式量的韻律法が多いのを指摘していますね。つまり、一つの長い音節が、シラブル量において二つの短い音節に等しいというのが原則で、それに、アリテレーシオン頭韻・尾韻・強音などを按配した抑揚格をアイアムバス作って、詩形に音楽的旋律を生んでいくのです。ですから、一語でもその朗誦法を誤ると、韻律が全部の節

にわたつて混乱してしまいます。しかし貴方が三たびスライイスで逼つかえて、それ以後の韻律を失つてしまつたのは、けつして偶然の事故ではないのですよ。その一語には、少なくともあいくちヒ首あくらしいの心理的効果があるからなんです。ですから貴方は、それが僕を刺戟するのに気がついたので、すぐに周章あわてふためいて云い直したのでしよう。けれども、その復誦には、今も云つた韻律法を無視しなければなりません。それが僕の思う壺うだったので、かえつて收拾しゆじのつかない混乱を招いてしまつたのです。と云うのは、スライイスThriceを避けて、前節

の Ban と続けた Banthrice が、 Banshee (ケルト伝説にあ

る告死婆) が変死の門辺に立つとき化けると云う老人

——すなわち Banshrice のように響くからなんです

よ。ねえ田郷さん、僕が持ち出した汝真夜中の……

の一句には、こういう具合に、二重にも三重にも

陥穽かんせいが設けられてあつたのです。勿論僕は、貴方がこ

の事件で、告死老人パンシユライスの役割をつとめていたとは思いま

せんが、しかしその、魔女ヘカテが呪い毒に染んだという

三たびは、いったい何事を意味しているでしょうか。

ダンネベルグ夫人……易介……そうして三度目は？」

そう云つて法水は、しばらく相手を正視していたが、真斎の顔は、しだいに朦朧もうろうとした絶望の色に包まれていった。法水は続けて、

「それから僕は、その『ゴンザーゴ殺し』の三たびを再びそじょう俎上に載せて、今度は反対に、下降して行く曲線として観察したのです。そして、いよいよその一語に、

供述の心理を徹頭徹尾支配している、恐ろしい力があるのを確かめることが出来ました。そのために、ポー

プの『レーブ・オヴ・ゼ・ロツク髪盗み』の中で一番道化ている、

メン・ブル・ヴ・ウイズ・チャイルド・アズ・パワーフル・ファン・シイ・ウオークス  
異常に空想が働き、男自ら妊れるものと信ずるならん

——を引き出して、毫も心中策謀のないのを、貴方に

灰<sup>ほ</sup>めかしたのです。ところが、その次句の、

処女<sup>エンド・メイド</sup>は壺<sup>タート</sup>になったと思ひ、三たび声<sup>コール</sup>を上げて栓<sup>アラウド</sup>を探す

——で答えた貴方は、その中に *Thrice* <sup>スライス</sup> という字がある

のをほとんど意識しないかのように、平然としかも、

きわめて本格的な朗誦法で口<sup>スライス</sup>にしているではありません

んか。勿論それは、弛緩した心理状態にありがちな盲

点現象です。さらに、前後の二つを対比してみると、

同じ *Thrice* <sup>スライス</sup> 一字でも、『ゴンザーゴ殺し』に現われてい

るのと『<sup>レープ・オヴ・ゼ・ロック</sup>髪盗み』のそれとでは、心理的影響にお

いて、いちじるしい差異があるのを測ることが出来たのでした。そこで僕は、結論をよりいつそう確実にするのために、今度はセレナ夫人から、昨夜この館にいた家族の数を引き出そうと試みました。ところが、僕の

云つたゴツトフリートの――

ウアス・ヒエルテ・ミツヒ・ダス・イヒス・ニヒト・ホイテ・トイフェル

吾今ただちに悪魔と一つになるを誰か妨げ得べき――

に對して、セレナ夫人は、その次句の――

ゼツヒ・シユテムベル・シユレッケン・ゲエト・ドウルヒ・マイン・ゲバイン

短剣の刻印に吾身は慄え戦きぬ――で答えたの

ろうばい

です。しかし、何故か ゼツヒ sech (短剣) と云うと狼狽の色が

現われて、しかも、ゼツヒ・シユテムベル 短剣の刻印と、アリテレーシオン 頭韻を響かせて



一つの音節シラブルにして云うところを、ゼツヒ sech へ シユテムベル Stempel (刻

印) の間に不必要な休止ポーズを置いたのですから、それ以

下の韻律を混乱おとしいに陥れてしまったことは云うまでもあ

りません、何故セレナ夫人は、そういう莫迦ぼかげた朗誦

法を行ったのでしうか。それはとりもなおさず、

ゼックス テムベル Sechs Tempel (六つの宮) と響くのを懼おそれたからです。

その伝説詩の後半に現われて、『デイフオデユルム 神の砦』(現在のメッツ附

近) の領主の魔法でヴァルプルギス・ナハトの森林中に

出現すると云う——その六つ目の神殿に入ると、入つ

た人間の姿は再び見られないと云うのですからね。で

すから、セレナ夫人が問わず語らずのうちに暗示した、その六番目の人物と云うのは……。いや、昨夜この館から、突然消え去った六人目があつたという事は、僕の神経に映つた貴方がた二人の心像だけででも、もはや否定する余地がなくなりました。こうして、僕の盲人造型は完成されたのです」

真齋は、たまりかねたらしく、ひじかけ 肱掛を握つた両手が怪しくもふる 慄え出した。

「すると、あんたの心中にあるその人物というのは、いったい誰を指して云うことですか？」

「押鐘津多子です」法水はすかさず凜然と云い放った。りんぜん

「かつてあの人は、日本のモード・アダムスと云われた大女優でした。五フィート四インチという数字は、あの人の身長以外にはないのですよ。田郷さん、貴方はダンネベルグ夫人の変死を発見すると同時に、昨夜から姿の見えない津多子夫人に、当然疑惑の眼を向けました。しかし、光栄ある一族の中から犯人を出すまいとすると、そこになんらかの措置そちで、覆わねばならぬ必要に迫られたのです。ですから、全員に嵌口令かんこうれいを敷き、夫人の身廻り品を、どこか眼につかない場所に隠

したのでしよう。無論そういう、支配的な処置に出ることの出来る人物と云えば、まず貴方以外にはありません。この館の実権者をさておいて、他にそれらしい人を求められよう道理がないじゃありませんか」

押鐘津多子——その名は事件の圈内へきれきに全然なかつたおしがねつたこだけに、この場合青天の霹靂へきれきに等しかつたであろう。法水の神経運動ナアヴァシズムが微妙な放出を続けて、上りつめた絶頂がこれだつたのか。しかし、検事も熊城しびも痺れたような顔になつていて、容易に言葉も出なかつた。と云うのは、これがはたして法水の神技であるにしても、

とうていそのままを真実として鵜呑みに出来なかつたほど、むしろ怖れに近い仮説だったからである。真斎は手働四輪車を倒れんばかりに揺つて、激しく哄笑こうしょうを始めた。

「ハハハハハ法水さん、下らん妖言浮説は止めにしてもらいましょう。貴方が云われる津多子夫人は、昨朝早々にこの館を去つたのですじや。だいたい、どこに隠れていると云われるのです。人間業わさで入れる個処ところなら、今までに残らず捜し尽されておりましたよ。もし、どこかに潜んで居るのでしたら、儂わしから進んで犯人と

して引き出して見せますわい」

「どうして、犯人どころか……」法水は冷笑を湛えて云い返した。「その代り鉛筆と解剖刀メスが必要なんですよ。そりや僕も、一度は津多子夫人を、風精ジルフェの自画像として眺めたことはありましたがね。ところが田郷さん、これがまた、悲痛きわまる傍説エピソードなんですよ。あの人は、死体となつてからも、喝采かつさいをうける時機を失つてしまつたのですからね。それが、昨夜の八時以前だつたのです。その頃には既に津多子夫人は、遠く精霊界フェアリー・ランドに連れ去られていたのです。ですから、あの人こそ、

ダンネベルグ夫人以前の……、つまり、この事件では最初の犠牲者だったのですよ」

「なに、殺されて!？」真斎は恐らく電撃に等しい衝撃シヨツクを受けたりらしい。そして、思わず反射的に問い返した。

「す、すると、その死体はどこにあると云うのです？」

「ああ、それを聴いたら、貴方はさぞ殉教的な気持になられるでしょうが」と法水は、いったん芝居がかった嘆息をして、「実を云うと、貴方はその手で、死体が入っている重い鋼鉄扉どを閉めたのでしたからね」とキツパリ云い放った。

とたんに三つの顔から、感覚がことごとく失せ去つたのも無理ではない。法水は、あたかもこの事件が彼自身の幻想的な遊戯でもあるかのようになり、吐き続ける一説ごとに、奇矯な上昇を重ねてゆく。そして、ちようどこの超頂点ウルトラクライマックスが、はつきりと三人の感覺的限界を示していたからであつた。そこで法水は、この北方式悲劇に次幕の緞帳カーテンを上げた。

「ところで田郷さん、昨夜の七時前後と云えば、ちようど傭人達の食事時間に當つていたそうですし、またそでろうか 拱廊で、かぶと 兜が置き換えられた頃合にも符合するので



が、とにかくその前後に、大階段の両裾にあつた二基の中世甲冑武者が、階段を一足跳びに上つてしまい、『腑分図』の前方に立ち塞がっていたのです。しかし、たったその一事だけで、津多子夫人の死体が古代時計室の中に証明されるのですがね。サア論より証拠、今度はあの鋼鉄扉を開いて頂きましようか」

それから、古代時計室に行くまでの暗い廊下が、どんなに長いことだったか。恐らく、窓を激しく揺する風も雪も、彼等の耳には入らなかつたであろう。熱病患者のような充血した眼をしていて、上体のみが徒ら

に前へ出て、たいく 体軀のあらゆる節度を失いきつて、三  
人にとると、沈着をきわめた法水の歩行が、いかにも  
もどかしかつたに違いない。やがて最初の鉄柵扉が左  
右に押し開かれ、うるし 漆で澄みわたった黒鏡のように輝い  
ている鋼鉄扉の前に立つと、真齋は身体をかが 踏めて、取  
り出した鍵で、右扉の把手ハンドルの下にある鉄製の函ほこを明け、  
その中の文字盤を廻しはじめた。右に左に、そうして  
また右にひね捻ると、微かにかんぬきとめ閉止の外れる音がした。法水  
は文字盤の細刻を覗き込んで、  
「なるほど、これはヴィクトリア朝に流行はやった

マリナーズ・コムパス

## 羅針儀式

(文字盤の周囲は英蘭土(イングランド)近衛竜騎兵聯隊の四王標であ

る。ヘンリー五世、ヘンリー六世、ヘンリー八世 女王エリザベスの袖章で細彫りがされ把手には the Right Hon'ble. JOHN Lord CHURCHIL の胸像が彫られてある)

です」<sup>ね</sup>と云つたけれども、それがどことはなしに、失望したような空洞<sup>うつつろ</sup>な響を伝えるのだった。鍵の性能に對してほとんど信憑<sup>しんぴよう</sup>をおいていない法水にとると、恐らくこの二重に鎖された鉄壁が、彼の心中に蟠<sup>わだかま</sup>つている、ある一つの観念を顛覆したに違いないのだった。

「サア、名称は存じませんが、合わせ文字を閉めた方向

と逆に辿たどってゆくと、二三回の操作で扉ドアが開く仕掛になつております。つまり、閉める時の最終の文字が、開く時の最初の文字に当るわけですが、しかし、この文字盤の操作法と鉄函てつぽこの鍵とは、算哲様の歿後、儂わし以外には知る者が無いのです」

次の瞬間、唾つばを嚥のむ隙さえ与えられなかつた一同が、息詰とってるような緊張を覚えたと言ふのは、法水が両側の把手とってを握つて、重い鉄扉を観音開きくわんおんひらきに開きはじめてからだった。内部なかは漆黒しつこくの闇で、穴蔵くわぞうのような湿つた空気が、冷やりと触れてくる。ところが、どうしたこと

か、途中で法水は不意動作を中止して、戦慄を覚えたように硬くなつてしまつた。が、その様子は、どうやら耳を凝らしているように思われた。刻々と刻む物懶げな振子の音とともに、地底から轟いて来るような、異様な音響が流れ来たのであつた。

11' Salamander soll gluhen (ザラマンダー 火精よ燃え猛れ<sup>たけ</sup>)

しかし、法水は、いったん止めた動作を再び開始して、両側の扉を一杯に開ききると、なかには左右の壁際に、奇妙な形をした古代時計がズラリと配列されていた。外光が薄くなつて、奥の闇と交わっている辺りには、幾つか文字面の硝子らしいものが、薄気味悪げな鱗<sup>うろこ</sup>の光のように見え、その仄<sup>ほの</sup>かな光に生動が刻まれていく。と云うのは、所々に動いている長い短冊振子

が、絶えず脈動のような明滅を繰り返しているからであつた。この墓窖はかあなのような陰々たる空気の中で、時代の埃を浴びた物静けさが、そして、様々な秒刻の音が、未だに破られないのは、恐らく誰一人として、つめきつた呼吸いきを吐き出さないからであろう。が、その時、中央の大きな象嵌柱身ぞうがんの上に置かれた人形時計が、突然弾条ぜんまいの弛ゆるむ音を響かせたかと思うと、古風なミニユエットを奏ではじめたのであつた。廻転琴オルゴール（反対の方向に動く二つの円筒を廻転せしめ、その上にある無数の棘をもつて、梯状に並んでいる音鋼を弾く自動楽器）が弾き出した優雅な音色が、この沈鬱な鬼

気を破つたとみえて、再び一同の耳に、あの引き摺る  
ように重たげな音響が入ってきた。

「灯を!!」熊城は吾に返つたかのごとくに呶鳴つた。

真斎の手で壁の開閉器スイッチが捻ひねられると、はたして法水の

神測が適中していた。と云うのは、奥の長櫃キャビネットの上で、

津多子夫人は生死を四人の賽さいの目に賭けて、両手を胸

の上で組み、長々と横たわっているのであつた。その

端正な美しさは、とうてい陶器で作つた、ベアトリ

チェの死像と云うほかにないであろう。しかし、引き

摺るような鈍い音響は、まさに、津多子夫人が横た



わっている附近から発せられてくる。薄気味悪い地動のような鼾声いびき、それも病的な喘鳴ぜいめいでも交っているかのような……。ああ、法水が死体と推測した津多子夫人は、未だに生動を続けているではないか。皮膚はまったく活色を失い、体温は死温に近いほどに低下しているけれども、微かに呼吸を続け、微弱ながらも心音が打っている。そして、顔だけを除いて、全身を木乃伊ミイラのように毛布で巻き付けられているのだった。その時、廻転琴オルゴールのミニユエットが鳴り終ると、二つの童子人形は、かわるがわる右手の槌つちを振り上げて、鐘チャペル

を叩いた。そして、八時を報じたのであった。

「抱水クローラールだ」法水は呼気を嗅いだ顔を離すと、元気な声で云った。「瞳孔も縮小しているし、臭いもそれに違いない。だが、生きていてくれてなによりだったよ。ねえ熊城君、津多子夫人の恢復かいふくで、この事件のどこかに明るみが差すかもしれないぜ」

「なるほど、薬物室の調査は無駄じゃなかったろうがね」と熊城は苦いものに触れたような顔になって、「だが、おかげさまで、とんだ悲報を聴かされてしまったよ。物凄い幻滅だ。あの銅版刷みたいに鮮か

な動機を持った女が、なんとという莫迦ぼかげた大砲を向けてきたんだい。一つ君に、霊媒でも呼んでもらおうかね」

事実熊城が云ったように、遺産配分からただ一人除かれていて、最も濃厚な動機を持つているはずの押鐘津多子夫人には、どこかに脆もろい、破れ目でも出来そうなどころがあるように思われていた。その矢先に、兇悪無惨な夢中の人物となつて現われたばかりでなく、しかも、法水の推測を覆くつがえして、今度は不可解な昏睡状態に、微妙な推断を要求しているのだった。その予想

を許されない逆転紛糾には、ひとり熊城ならずとも、まったくたまらない事件に違いないのである。検事も腹立たしげに吐息して云った。

「ただただ驚くばかりさ。僅々きんきん二十時間あまりの間に、二人の死者と二人の昏倒者が出来てしまったんだ。どのみち、問題になるのは、文字盤が廻される以前さ。それまでに、犯人は昏倒させた津多子を、ここへ運び入れたのだろう」と云って、法水を確認ありげな表情で見て、「しかし法水君、だいたいの薬量が判れば、それを咽喉のどに入れた時刻の見当がつくだろう。そこに

僕は、何かあるのじゃないかと思うよ。この昏睡には、きつと裏のまたその裏があるに違いないのだ」と意気地なくも検事も、やはり津多子夫人に纏まつわる、動機の確固たる重さに引き摺られるのだった。

「たしかに明察だ」法水は満足そうに頷うなずいたが、「だが、薬量などはどうでもいい事なんだよ。何より問題なのは、犯人にこの人を殺す意志がなかつたという事だ」

「なに、殺す意志がない!？」検事は思わず鸚鵡返おうむしに叫んだが、すぐに異議を唱えた。「しかし、薬量の誤測

ということとは、当然ないとは云えまい」

「ところが支倉君、この出来事には、薬量が根本から問題ではないのだ。ただ眠らせてこの室へやに抛り込んでおきさえすれば、それが論なしに致死量になってしまふのだよ。多量の抱水クロラールには、いちじるしく体温を低下させる性能があるのだ。それにこの室は、石と金属とで囲まれていて、非常に温度が低い。だから、窓を開いて外気を入れさえすれば、この室の気温が、ちようど凍死に恰好な条件になってしまうじゃないか。ところが犯人は、そういう最も安全な方

法を扱ばないばかりでなく、現在見るとおり木乃伊ミイラたいに包くるんでいて、不可解な防温手段を施しているんだよ」と相変らず法水は、奇矯をきわめる謎の中から、さらにまた異様な疑問を摘出するのだった。

ところが、はたして彼の言ことばのごとく、窓の掛金には石筍せきじゆんのような錆さびがこびり付いていて、しかも、清掃されていいる室内には、些細の痕跡すら留められていない。法水は、運び出されてゆく津多子夫人を凝然と見送りながら、なにかしら慄然りっぜんとしたような顔になって云つた。

「たぶん明日一日おけば、充分訊問に耐えられるだろうとは思いますが、しかしこの一事だけは、どうあつても記憶しておかなければならん。何故に犯人が、津多子夫人の自由を奪つて拘禁したか——という事なんだ。あるいは僕の思い過しかもしれないがね。そういう手段を採るに至つた陰險な企みと云うのが、もしかしたら、意識が恢復してから吐かれる、言葉の中にあるのではないかと思われるんだよ。どうして、破れ目がありそうだと、そこにはきまつて陥穽わながあるんだから」

真齋は法水の驚くべき曝露に遇つたせいか、この十



分ばかりの間に、見違えるほど憔悴しょうすいしてしまった。力のない手附で、四輪車を操りながら、何か云い出そうとして哀願的な素振をすると、

「判ってますよ田郷さん」と法水は軽く抑えて、「貴方の採った処置については、僕の方から、熊城君によるしく頼んでおきましたよ。ところで、押鐘津多子夫人の姿が見えなくなつたのは、昨夜何時頃でしたか」

「それが、大分遅くなつてからでしてな。なにしろ、神意審問会に欠席されたので、その折初めて気がついたのですよ」と真齋はようやく安堵あんどの色を現わして云つ

た。「ちようど夕刻の六時頃に、御夫君の押鐘博士から電話が掛つてまいりました。そして、昨夜九時の急行で、九大の神経学会に行くとかいう旨を伝えられたそうです。その時召使の一人が、津多子様が電話室からお出になつたのを見たのみで、それなり、吾々の眼には触れなくなつてしまわれたのです。もつともこの電話のことは、御自宅を確かめた時に、先方の口から出た事実でしたが」

「なるほど、六時から八時——。とにかくその間の動静を、各個人それぞれに調べることだ。あるいはそこから、火

繩銃ぐらいは飛び出さんとも限らんからね」と熊城がほとんど直観的に云うと、それを法水は、驚いたように見返して、

「冗談じゃない。なるほど、君は体力的だよ。しかし、あの狂人詩人のすること、アリバイ どうして不在証明なんて、そんな陳腐な軌道があつてたまるもんか」と、てんで頭から相手にしなかつた。それから彼は、片眼鏡モノクルでも欲しそうな鑑賞的な態度になつて、物奇ものめずらしそうな視線を立ち並ぶ古代時計に馳はせはじめた。

それには、カルデアのロツサス日時計やビスマーク

島ダクダク講社の棕櫚しゅろいと時計。水時計の類には、まず、

トレミー朝歴代の埃及王ファラオやオシリス・マアアト等の諸

神、それにセバウ・ナアウの蛇鬼神だきじんまでも両粹に彫り

込んである——クテシビウス型を始めに、五世紀

柔然族アヴァール（西域の民族。六世紀の末突厥人のためにカウカサスに逐い込まれる）の

腕形刻計儀に至るまでの、十数種があつた。それから、

ホーヘンシュタウフェン家の祖フレデリック・フォン・

ビュレンの紋章が刻まれている、稀めずらしいダイヤボロ

形の砂漏さろうなどが注目されたけれども、油時計や火繩時

計のように中世西班牙イスパニアで跡を絶つたものには、ピヤ

ヴァイキング・シップ

リ・パシヤ（一五七一年ヴェネチア共和国とレヴァントで海戦を演じたスルタ

ンの婿）からの戦獲品や、フランス仏蘭西旧教徒の首領ギーズ公

アンリー（聖パーセルミュウ祭の当日新教徒を虐殺した人物）から献上し

たもの等が眼に止つた。なお、重錘初期以来のものは

二十にあまるけれども、特に目立つたのは、巨大な

海賊船の横腹に、時計や七曜円を附けたもので、刻

字文によると、マーチャント・アドヴェンチュアラ

ズ会社からウイリアム・シシル卿（エリザベス朝に入ってから、ハ

ンザ商人に弾圧を加えた政治家）に贈つたものであつた。恐らく

これらは、古代時計の蒐集しゆうしゆうとして、世界に類を求め得

ないほどに冠絶したものに違いなかつた。しかし、その中央で王座のように蟠わだかまつて君臨しているのが、黄銅製の台座の柱身にはオスマン風の檣楼しやうろう、羽目には海人獣ぞうがんが象嵌ぞうがんされていて、その上に、コートレイ式の塔形をなした人形時計が載せられている——一つがそれだった。それには、近世のもののような目盛盤がなく、塔上の円柵の中には鐘チャベルが一つあつて、それを挟んで、和蘭オランダハーレム辺りの風俗をした、男女の童子人形が向き合っている。そして、一刻が来るたびに、それまで自動的に捲かれた弾条ぜんまいが弛ゆるみ、同時に内部の廻転琴オルゴールが

鳴り出して、その奏樂が終ると、今度は二人の童子人形が、交互に撞木しゅもくを振り上げては鐘チャベルを叩き、定められた点鐘を報ずる仕掛になつていた。法水が横腹にある観音開きの扉を開くと、上部には廻転琴装置オルゴールがあつて、その下が時計の機械室だつた。しかし、その時扉の裏側に、はしなくも異様な細字の篆刻てんこくを発見したのである。すなわち、その右側の扉には……

——天正十四年五月十九日（羅馬曆ローマ天主誕生以来一デウス五八六年）西班牙王フェリペ二世より梯状琴クラヴィ・チェムバロともエスパニアにこれをうく。

また、左手の扉にも、次の文字が刻まれているのだつた。

——天正十五年十一月二十七日（羅馬曆天主教誕生以

ジェスイツトセント

来一五八七年）。ゴアの耶蘇会聖パウロ会堂におい

サン

て、聖フランシスコ・シャヴィエル上人の腸丸をう

ちようがん

け、それをこの遺物筐シリケキように収めて、童子の片腕となす。

ジェスイツト

それはまさしく、耶蘇会殉教史したたが滴らせた、鮮血の

詩の一つであつたらう。しかし、後段に至ると、その

シャヴィエル上人の腸丸が、重要な転回を勤めること

になるのであるが、その時はただ、法水が悠久ほうはく磅礴た



るものに打たれたのみで、まるで巨大な掌てのひらにグイと握りすく締められたかのような、一種名状の出来ぬ圧迫感を覚えたのであつた。そして、しばらくその篆刻文てんこくを瞶みつめていたが、やがて、

「ああ、そうでしたね。確か上川島サンシアンとう（広東省珠江の河口附近）で死んだシャヴィエル上人は、美しい屍蠟しろろうになっていたのでした。なるほど、その腸丸シリケキようと遺物筐しりけきようとが、童子人形の右腕になつていのですか」と低く夢見るような声で呟いたが、突然調子を変えて、真齋に訊ねた。「ところで田郷さん、見掛けたところ埃がありません

けど、この時計室はいつ頃掃除したのです？」

「ちようど昨日でした。一週に一回することになって  
おりますので」

そうして、古代時計室を出ると、真斎は何より先に、  
彼を無惨な敗北に突き落したところの疑念を解かねば  
ならなかつた。法水は、真斎の問いに味のない微笑を  
泛<sup>うか</sup>べて、

「そうすると貴方は、ブラック・ミラー・マジックダイやグラハムの黒鏡魔法を  
御存じでしょうか」とひとまず念を押してから、けむり烟を  
吐いて語りはじめた。

「先刻さつきも云つたとおり、その解語キイと云うのが、階段の両裾にあつた二基の中世甲冑武者なんです。勿論裝飾用のもので、たいした重量ではありませんが、あれは、御承知のように、ちようど七時前後——折柄傭人達の食事時間を狙つて、一足飛びに階段廊まで飛び上つてしまつたのです。それに、双方とも長い旌旗せいぎを持つているのですが、僕は最初、それを旌旗の入れ違いから推断して、犯人の殺人宣言と解釈したのです。しかし、ちよつと神経に触れたものがあつたので、ひとまずにりゆう二旒にりゆうの旌旗と、その後方にあるガブリエル・マックス

の『腑分図』とを見比べて見ました。勿論画中の二人の人物には、津多子夫人の在所ありかを指摘するものはなかつたのですが、その時ふと、二旒の旌旗が画面のはるか上方を覆うているのに気がついたのです。そこに、ダマスクスへの道を指し示している、里程標ブラッッシュがあつたのですよ。つまり、その辺一帯の、一見絵刷毛ブラッッシュを叩き付けたような、様々な色があるいは線をなし塊状をなして——色彩の雑群を作っている所が、すなわちそれだつたのです。ところで、点描法ポアンチリズムの理論を御存じでしょうか。色と色を混ぜる代りに、原色の細かい線

や点を交互に列べて、それをある一定の距離を隔てて眺めさせると、始めて観者の視覚の中で、その色彩分解が総合されるのを云うのですよ。勿論、それより些かでも前後すれば、たちまち統一が破れて、画面は名状すべからざる混乱に陥ってしまうのです。つまりそれが、ルーアン本寺の門を描いたモネエの手法なのですが、それをいつそう法式化したばかりでなく、さらに理論的に一段階進めたものと云うのが、あの画中に隠されてあったのです」と法水はそこまで云うと、鋼鉄扉を閉じさせて、「では、一つ実験してみますかな

——あの混乱した雑色の中に何が隠されているのか？  
 最初に熊城君、その壁にある三つの開閉器スイッチを捻ひねって  
 くれ給え」

さつそく熊城が法水の云うとおりにすると、最初に  
 「腑分図」の上方にある灯が消え、続いて、右手のド・  
 トリー作「一七二〇年馬耳塞マルセイユの黒死病ペスト」の上方から、右  
 斜めに落ちていている一つも消えたので、階段廊に残って  
 いる光と云えば、左手のジエラルド・ダヴィッド作「シ  
 サムネス皮剥死刑之図」の横から発して、「腑分図」ふわけのずを  
 水平に撫でている一つのみになってしまった。が、そ

の一燈に当る開閉器スイッチは、階段の下にあるのだった。すると、それまで現われていた渋い定着が失われて、「腑分図」の全面には、眼の眩くらむような激しい眩耀ハレーションが現われた。さらに、最後の一つが捻ひねられて頭上の灯が消えると、法水はポンと手を叩いて、

「これでいいのだ。やはり、僕の推測どおりだったよ」

ところが、それからしばらくの間、前方の画ちまなこ中を血眼ハレーションになつて探し求めていたけれども、三人の眼には、眩耀ハレーション以外の何ものも映らなかつた。

「いったいどこに何があるんだ」と床を蹴つて、熊城は

荒々しく佛然ふっぜんと叫んだ。が、その時なにげなしに、真齋が後方の鋼鉄扉を振り向くと、そこには熊城の肩を、思わずも掴ませたものがあつた。

「アツ、テレーズだ！」

それは、まさしく魔法ではあるまいかと疑われたほど、不可思議奇態をきわめた現象であつた。前方の画面が眩まばゆいばかりの眩耀ハレーションで覆われているにもかかわらず、その上方の部分が映っている後方の鋼鉄扉には、はたしてどこから映つたものか、くつきりと確かな線で、しかも典麗な若い女の顔が現われているのだつた。



さらにいつそう薄気味悪いことには、擬<sup>まが</sup>うかたなくそれが、黒死館で邪霊と云われるテレーズ・シニヨレだったのである。法水は側<sup>はた</sup>の驚駭には関<sup>かま</sup>わず、その妖しい幻の生因<sup>せんめい</sup>を闡明した。

「判ったでしょう田郷さん、混乱した色彩がああの距離まで来ると、始めて統一を現わすのですよ。しかし、その点描法<sup>ポアンチリズム</sup>の理論と云うのは、この場合単に、分裂した色彩を綜合する距離を示したのみのことです。無論その色彩だけでは、朦朧<sup>もうろう</sup>としたものがこの漆扉<sup>うるしど</sup>へ映るにすぎないでしょう。実はその基礎理論の上に、さら

に数層の技巧が必要なのです。と云うのは、ほかでもないのですが、今世紀の初めにスピロヘーターに黴毒菌染色法として、シヤウデインとホフマンが案出した『暗視野照輝法』なのですよ。元来スピロヘーター黴毒菌は無色透明の菌なので、そのまま普通の透視法を用いたのでは、顕微鏡下で実体を見ることは出来ません。それで、一案として顕微鏡の下に黒い背景バックを置き、光源を変えて水平から光線を送るようにしたのですが、その結果始めて、透明の菌だけから反射されてくる光線を見ることが出来たのでした。つまりこの場合は、左横の『シサムネス皮剥死刑

之図』の脇から発して、画面を水平に撫でている光線が、それに当るのですよ。すると勿論、色彩から光度ヘリヒカイトの方に、本質が移ってしまいます。ですから、黄や黄緑のような比較的光度の高い色や、対比現象で固有のもの以上の光度を得ている色彩は、恐らく白光に近い度合で輝くでしょうし、またそれ以下のものは段階をなして、しだいに暗さを増してゆくに違いないのです。その光度の差が、この黒鏡ブラックミラーに映るといつそう決定的になつてしまうのですが、一方実際問題として、膠質こうじつの絵具では全体にわたつて眩耀ハレーションが起らねばなりません。

しかし、色調を奪つて、その眩耀ハレーションを吸収してしまふばかりでなく、それを黒と白の単色画モノクロームに、判然と区分してしまふものが、実にこの漆扉うるしど——すなわち黒鏡ブラックミラーなのでした。ですから、やや近い色でも、最も光度の高いものに対比されると、幾分暗さを増すに違いないのですから、そこにテレーズの顔が、ああいう確かな線で、くつきりと描き出された原因があるのですよ。ねえ田郷さん、貴方は史家ホルクロフトや、古書蒐集家ジョン・ピンカートンなどの著述をお読みになつたでしょうが、かつて魔法博士デイやグラハムが、愚民を

ブラック・ミラー・マジック

惑わした黒鏡魔法も、底を割れば、たつたこれだけの本体にすぎないのです。さて、三つの開閉器スイッチが捻ひねられて、この一帯が暗黒になると、その時、何故に、テレーズの像が現われなければならなかつたのでしよう」

そこで法水はちよつと一息入れてたほこ、莩たほこに火を点けたが、再びこつこつ歩き廻りながら云いはじめた。

「それが、破邪顕正の眼なのです。たぶん、算哲博士は世界的の蒐集品を保護するために、文字盤を鉄函てつぼこの中に入れただけでは不安だったのでしよう。それがため

に、こういうすこぶる芝居げたつぷりな装置を、秘こつそり設けて置いたのですよ。何故なら、考えてみて下さい。いま点滅した三つの灯は、いつも点け放しなんですからね。ですから、仮りにこの室に侵入しようとするものがあれば、自分の姿を認められないために、まず手近にある三つの開閉器スイッチを捻ひねり、この辺り一帯を暗黒にしなければならぬでしょう。その上で鉄柵扉を開いたとすると、それまで頭上の灯で妨げられていたものが、突然漆扉うるしどの上に不気味な姿となつて輝き出すでしょう。しかし、背後の『腑分図』は、その位置から

見ただけだと、徒らいたずらに色彩が分裂しているのみであつて、しかも眩まばゆいばかりの、眩耀ハレーションで覆われているのですから、どこにその像の源があるのか判断がつかなくなつて、結局仰天に価する妖怪現象となつて残つてしまふのです。つまり、小胆で迷信深い犯人は、一度苦い経験を踏んで、たしか脅おびやかされたに違いありません。ですから、昨夜は秘こつそり甲冑武者を担ぎ上げて、二旒りゅうの旌旗せいぎで問題の部分を隠したと云う訳なんですよ。ねえ田郷さん、確かこれだけは、風精シルフェが演じたうちで、一番下手な廷臣喜劇でしたね」

法水が語り終えると、検事は冷たくなつた手の甲を擦りながら、歩み寄つて云つた。

「素敵だ法水君、君はトムセンどころか、アントアンヌ・ロシニョール（史上最大の暗号解読家、ルイ十三十四世に仕え、ことに

僧正リシユリユウに寵愛せらるる）だよ」

「ああ、それは風精シルフェの洒落しやれじやないか」法水は暗澹あんたんとした顔色になつて嘆息した。「あの男は詩人のボア・ロベールから、暗号でもない『ファウスト』の文章で擲揄からかわれたのだからね」

×

×

×



こうして事件の第一日は、矛盾撞着を山のごとくに積んだまままで終ってしまった。が、はたして翌朝になると、あらゆる新聞はこの事件の報道で、でかでか一面を飾り立てて、日本空前の神秘的殺人事件と、すこぶる煽情的な筆法で書き立てるのだった。ことに、事件の開始早々にもかかわらず、もう、愚にもつかない実際の探偵小説家を掴まえてきて、それにくだくだしい推理談的な感想を述べさせているところなどを見ると、降矢木一族の底知れない神秘と関聯させて、

この事件をジャーナリスチックにも、煽り立てる心算あおのように思われた。しかし、法水は終日書齋に閉じ籠こもっていて、その日はとうとう黒死館を訪れなかつたが、恐らくそれは、遺言状を開封させるために、福岡から召還した押鐘博士の帰京が、その翌日の午後になつた事と、また一つには、津多子夫人の予後が未だ訊問に耐えられそうもないという——以上の二つが決定的な理由のように思われた。けれども、それを従来これまでの例に徴してみると、法水が静かな凝想の中で、何か一つの結論に到達しようとして試みているのではないかと、

推測されるのだった。勿論その日の午前中に、法医学教室から剖見の発表があつた。その中から要点を摘出してみると、ダンネベルグ夫人の死因は明白な青酸中毒で、薬量も、驚くべきことには〇・五と計測されたが、かんじん肝腎の屍光と創紋とは、いずれも生因不明であつて、単に蛋白尿が発見されたという一事に尽きていた。それから易介になると、絶命推定時刻は法水の推定どおりだつたけれども、異様な緩性窒息の原因や、絶命時刻と齟齬そごしている脈動や呼吸などについては、まさに甲論乙駁おつぱくの形で、わけても、易介が<sup>ポット</sup>偻病ポット患者である

ところから、その点に關した偏見が多いようだった。なかにも、もはや古典に等しいカスパール・リーマンの自企的絞死法などを持ち出してきて、死後切創きりきずが加えられる以前に、易介は自企的窒息を計つたのではないか——などという、すこぶる市井の臆測に墮したような異説も現われたくらいである。ところが、その翌朝、すなわち一月三十日、法水は突然各新聞通信社に宛てて、支倉検事と熊城捜査局長立会の下に、易介の死因を發表する旨を通告した。

法水の書齋はきわめて簡素なもので、徒らいたずに積み重

ねた書籍の山に囲まれているだけであつたが、それでも、その存在は相当世間に鳴り響いていた。と云うのは、その壁面を飾るものに、現在は稀覯中の稀覯ともいふ銅版画で、一六六八年版の「倫敦大火之図」ロンドンが掲げられてゐるからだつた。いつもならそれを背にして、彼の最も偏奇な趣味である古今東西の大火史を、滔々とうとうと并じ立てるのだが、その日は法水が草稿を手に扉を開くと、内部なかは三十人ほどの記者達で、身動きも出来ぬほどの雑沓ざつとくだつた。法水は騒響ざわめきの鎮まるのを待つて、草稿を読みはじめた。

——最初に降矢木家の給仕長川那部易介の死を発見かわなべえきすけした、その前後の顛末を概述てんまつしておこうと思う。すなわち、午後二時三十分拱廊そでろうかの吊具足の中で、正式に甲冑を着した姿で窒息し、死後咽喉部に、二条の「」形をした切創をうけ、絶命しているのを発見された。明白に死体の諸徴候は、死後二時間以内である事を証明しているが、その窒息方法は緩慢に加わっていったものらしく、経路も全然不明である。しかも同じ傭人の一人は、一時やや過ぎた頃に、被害者が高熱を発してい

るのを知り、同時に脈動のあつた事も確かめたと云うのみならず、さらに、死体発見を去る僅々きんきん三十分以前の正二時には、被害者の呼吸を耳にしたと云う——実に奇怪きわまる事実を陳述したのである。よつて、上述の事実に基づき、ここに私見を明らかにしたいと思う。ところで、最初に原因不明の窒息については、それを器械的胸腺死——と云うよりも、胸腺に或る器械メカニシエル・ティムストット的な圧迫を外部から加えたものだと言張する、すなわち川那部易介は、成年に達しても依然發育した胸腺を有する、一種の特異體質者に相違ないのである。しか

してその方法は、頸輪くびわで頸動脈を強く緊縛したために、脳貧血を起し、そのまま軽度の朦朧状態に陥つたのと、よろい鎧を横向きに着させたために、胸板の才鎚環さいづちかんで強く鎖骨上部が圧迫され、その圧力が、左無名静脈に加わつたのが主因であろう。したがって、それに注入する胸腺静脈に鬱血をきたし、さらに、それが胸腺にも及んで鬱血肥大を起したので、当然気管を狭搾きょうさつし、やや長時間にわたる漸増的な窒息の結果、死に達いたらしめたものであると思う。しかしながら、解剖所見の発表を見るに、それには胸腺についてなんら記されているところ



ろはない。けれども、そうして不問に附せられているとは云い条、それ等の事實は、不可思議なる被害者の呼吸と重大なる因果関係を有するものである。さらに、その要点に言及すれば、何故に鏘々たるそうそう法医学者達が、二つの切創がともに中以上の血管では動脈を避け、静脈のみを胸腔にかけて抉つてえぐいるのに気付かぬのであろうか。そこに、人間生理の大原則を顛覆させた、犯人の詭計が潜んでいるのは勿論のことである。ところで、きけい「形に決らねばならなかつた切創の目的と云うのは、ほかでもない。肥大した胸腺を切断して収縮せし

めたばかりではなくて、死後動脈収縮（死後ただちに静脈を切断しても、出血しはしないが、ややしばらく後には、動脈の収縮によつて、唧筒状に血液を静脈に送り、流血せしむる。）によつて流出した血液を胸腔内に充して、肺臓を圧迫し残気を吐き出さしめたと信ずるのである（死後残気の説については、ワグナー、マクドウガル等の実験で、約二十立方インチと計算されている）。次に、死後脈動及び高熱については、絞首——廻転——墜落と続く日本刑死記録において、相当の文献があるのみならず、ハルトマンの名著「ベリド・アライヴ生体埋葬」一冊だけでも、有名なテラ・ベルゲンの奇蹟（心臓附近のマッサージによつて、心音を起し、高熱を発せりと云

うファレルスレーベンの婦人)や匈牙利<sup>ハンガリー</sup>アスヴァニの絞刑死体(十

五分間廻転するがままに放置したる後引き下してみると、その後二十分も脈動と高熱が続いたと云う一八一五年ビルバウアー教授の発表)が挙げられているように、窒息死後、廻転するかして死体に運動が続けられる場合は、高熱を発し脈動を起す例が必ずしも皆無ではないのである。まさしく易介においても、絶命後、具足の廻転が、死体発見の一因として証明されていゝるではないか。よつて、上述したところを綜合すれば、易介の死は依然午後一時前後であつて、彼がいかにし、て甲冑を着したかという点にも、北条流吊具足早着之

法などの陣心得は、無論この場合問題ではない。とうてい他人の力を藉<sup>か</sup>りなければ、非力病弱の易介にはなし得ないと推断されるのである。しかし、今回の発表が、ただ単に死因の推定にのみ止まっていて、なんら事件の開展に資するところのないのは、捜査関係者として心から遺憾の意を表したいと思う。

法水の朗読が終ると、詰められていた息が一度に吐かれた。そして、昂奮を投げ交すような声でしばらく騒然となっていたが、やがて熊城が、蹴散らすようにして記者達を追い出してしまおうと、再びいつものよう

な三人だけの世界に戻った。法水はしばらく凝然と考  
えていたが、稀めずらしく紅潮を泛うかべた顔を上げて云った。  
「ねえ支倉君、とうとう僕は、ある一つの結論に到達し  
たのだ。勿論外包的だよ。全部の公式はとうてい判つ  
ちやいないがね。しかし、個々の出来事からでも、共  
通した因数ファクターを知ることが出来たとしたら、どうだろ  
う」と二人の顔をサツと掠かすめた、驚愕きょうがくの色に流眊ながしめをく  
れて、「ところで君は、この事件の疑問一覧表を作つて  
くれたはずだったね。では、その一箇条一箇条の上に、  
僕の説を敷衍ふえんさせてゆくことにしようじゃないか」

検事が固唾かたずを嚥のみながら、懐中の覚書を取り出した時だった。扉ドアが開いて、召使が一通の速達を法水に手渡しした。法水は、その角封を開いて内容を一瞥いちべつしたが、格別の表情も泛うかべずに、すぐ無言のまま卓上の前方に投げ出した。ところが、それに眼を触れた検事と熊城はたちまちどうにもならない戦慄せんりつに捉えられてしまった。見よ、ファウスト博士から送られた三回目の矢文ではないか！ それには、いつものゴソニック文字で、次の文章が認めしたためられてあった。

Salamander soll gluhen

(ザラマ  
ンダー火精よ、燃えたけれ)





第五篇 第三の惨劇



一、犯人の名は、リュッツエン役の戦歿者中に

Salamander soll gluhen (火精よ、燃えたけれ)  
ザラマンダー

黒死館を真黒な翼で覆うている眼に見えない悪鬼が、  
 三度<sup>たび</sup>ファウスト博士を気取つて五芒星呪文の一句を  
 送つて来た。それには、なにより熊城<sup>くましろ</sup>が、まず云いよ  
 うのない侮辱を覚えずにはいられなかつた。事実、残  
 された四人の家族は熊城の部下によつて、さながら  
 ゴート式甲冑のように、身動きも出来ぬほど装甲され

ているのである。それにもかかわらず、不敵きわまりない偏執狂的マニアックな実行を宣言して、ダンネベルグ夫人と易介えきすけに続く、三回目の惨劇を予告しているのではないか。そうになると、熊城の作り上げた人間の罍壁とりでが、第一どうなってしまうのである。ほとんど犯罪の続行を不可能に思わせるほどの完璧な砦とりででさえも、犯人にとつては、わずか冷笑の塵にすぎないではないか。のみならず、そういう触れれば破滅を意味している、決定的な危険を冒してまでも敢行しようという、恐らく狂ったのでなければ意志に表わせぬような決慮を示し

ているのであるから、その不敵さに度胆を抜かれた形になつてしまつて、三人がしばらくの間声を奪われていたのも無理ではなかつた。その日は何日目かの快晴だつた。和やかな陽差が、壁面を飾つている「倫敦大火之図」の下方——ちようどブリクストーン附近に落ちていて、それがしだいにテムズを越えて、一面に黒煙の漲る、キングスクロスの方へ這い上つて行こうとしてゐる。しかしそれに引き換え室内の空気は、打てば金属のよう<sup>かね</sup>に響くかと思われるほどに緊張しきつていたが、法水<sup>のりみず</sup>は何か成算のあるらしい面持<sup>おももち</sup>で、ゆつたり

と眼を瞑じ黙想に耽りながらも、絶えず微笑を泛べ独算気な頷きを続けていた。やがて、熊城が無理に力味出したような声を出した。

「僕は真斎じゃないがね。虚妄の烽火には驚かんよ。

あの無分別者の行動も、いよいよこれで終熄さ。だつて考えて見給え。現在僕の部下は、あの四人の周囲を盾のように囲んでいる。けれども、その反面の意味が、同時に犯人の行動記録計の役も勤めていることになるんだぜ。ハハハハ法水君、なんとという皮肉だろう。もしかしたら、犯人にも護衛を付けてないとも限らん。

だからね」

検事は相変らず憂鬱な顔で、熊城の過信に反対の見解を述べた。

「どうして、あの四人をバラバラに離してみたところで、とうていこの惨劇は終りそうもないよ。人間の力では、どうしても止めることが不可能のような気がする。事実僕には、まだ誰か知られてない人物が、黒死館のどこかに潜んでいるような気がしてならないんだ」

「すると君は、デイグスビイがラングレン蘭貢で死んだのではな

いと云うのか」熊城は眼を睜みはつて、身体を乗り出した。

「とにかく、冗談はやめてもらおう。それほど算哲の遺骸が気になるのだったら、その発掘は、この事件のおおづめ大詰おおづめが済んでからのことにしようじゃないか」

「うん、神経かもしれないが。けっして小説的な空想じゃないよ。結局この神秘的な事件が、そこまで辿たどり

着いて行きそうな気がするだけだけでもね」とそれなりに検事は、彼の譫妄うわごとめいたものを口には出さなかつたけれども、それには背後から追い迫つて来る、悪夢のような不思議な力が潜んでいた。割合夢想的な法水



でさえも、その——デイグスビイの生死いかんにかけた疑問と算哲の遺骸発掘——という二つの提題からは、瞬間ではあつたが、疼き<sup>うず</sup>上げてくるようなものを感じたことは事実だつた。検事は椅子をグイと後に倒して、なおも嘆息を続けた。

「ああ、今度は火精<sup>ザラマンダー</sup>か!?　すると、拳銃<sup>ピストル</sup>か石火矢<sup>ボンド</sup>かい。

それとも、古臭いスナイドル銃か四十二磅<sup>ポンド</sup>砲でも向けようという寸法かね」

法水はその時不意に<sup>まふた</sup>瞼を開いて、<sup>そそ</sup>唆られたように半身を卓上<sup>まふた</sup>に乗り出した。

「四十二磅ポンドの加農砲キャノン！　そうだ支倉君はせくら。しかし、君が

それを意識して云ったのなら、たいしたものだよ。今

度ザラマンダーの火精には、けっして今までのような陰険朦朧もうろうたる

ものはないと思うのだ。きつと犯人の古典クラシック好みから、

ロドマンの円弾まるだまが海盤車ひとでのような白煙を上げて炸裂さくれつす

るだろうよ」

「ああ、相変らず豪壯オベレツタな喜歌劇オペレッタかね。それなら、どうで

もいいが」と熊城はいつたん忌々いまいましそうに舌打ちした

が、坐り直した。「しかし、論拠のあるものなら、一応

は聴かせてもらおう」

「勿論あるともさ」法水は無雑作に頷いたが、その顔には制しきれない昂奮の色が現われていた。「と云うのは、今度の火精ザラマンダーだけに、水精・風精ウンディヌス・風精シルフス——と前例のある、性別転換が行われてないという事なんだ。ところで、あの五芒星呪文に現われている四つの精霊だが、それぞれに水精ウンディネ・風精シルフェ・火精ザラマンダー・地精コポルト——と、物質構造の四大要素を代表している。云うまでもなく、中世のパラツエリス錬金道士が仮想していた、エレメンタリー元素精霊には違いない。そして今までは、水精ウンディヌスと扉を開いた水、風神シルフスと倍音演奏——と云っただけの、云わば要素的な符合しか判つ

てはいなかったのだ。けれども、いったんそれに性別  
 転換の解釈を加えると、あのいかにも秘密教めしてい  
 たものが、たちどころに公式化されてしまうのだ。ね  
 え熊城君、ウンデイヌス水精と男性に変えなければ、どうしてあの  
 扉ドアを開くことが出来なかったのだらうか。そこに、犯  
 罪方程式の一部が精密な形で透し見えていたのを、僕  
 等は、今まで何故に看過していたのだらうか」

「なに犯罪方程式!?」法水の意外な言ことばに、熊城は胸を灰  
 だらけにして叫んだ。けれども、だいたいが真理など  
 と云うものは、往々に、牽強附会この上なしの滑稽劇パレースク

にすぎない場合がある。しかも、きまつていつも、それは平凡な形で足下に落ちていているものではないか。続いて、法水が曝露したその一側面と云うのが、いかに二人を唾然たらしめたことか……。

「ところで君は、スピルディング湖の水精を描いた、ベックリンの装飾画を見たことがあるかね。鬱蒼うつそうとした椋林もみの底で、氷蝕湖の水が暗く光っているのだ。それが、群青ぐんじようを生なまの陶土に溶かし込んだような色で、粘稠ねっとりと澱よどんでいる。その水面に、虬みずちの背ではないかと思わせているのが、金色を帯びた美しい頭髪で、それ

が藻草のように靡たなびいているのだよ。けれども熊城君。

僕はなにも職業的な観賞家じゃないのだからね、獵館や瘤々した自然橋などを持ち出してまで、君達に瞑想うながを促そうとする魂胆はない。そういう水精ウンディネを男性に変えてしまう段になると、真先に変化の起らねばならぬものが、そもそも何であるか——それを問いたいのだよ」

と法水の顔に微かな紅潮が泛うかび上つて、五芒星ペンタグラムの不備を指摘する、メフィストの科白せりふ（その円に一個所誤謬があつたためにその間隙を狙い、メフィストがファウストの鎖呪を破って侵入したのである）

を口にした。「——とくと見給え。あの印呪は完全に引いてないよ。外側に向いている角が、見るとおりに少し開いている」

「ああなるほど、毛髪かみのけと鍵の角度に水！　これは、博学なる先生に御挨拶申し上げます。すこぶる汗をかかされたものですわい」

と同じく洒落しやれた口調で、検事もメフィストの科白せりふで相槌あいづちを打ったけれども、それには、犯人と法水と、両様の意味で圧倒されてしまった。……あの夜ダンネベルグ夫人が死体となった室へやの扉ドアには、鍵孔に注ぎ込ん

だ水の湿度によつて毛髪が伸縮し、自動的に開閉されるデイ博士の隠顕扉装置が秘められてあつた。ところが、それに必要な水と毛髪とが、カルデア古呪文の中に隠されていたのは未だしもの事で、より以上の驚きと云うのは、ほかにあつたのだ。それは、その装置を力学的に奏効させるところの落し金の角度が、物もあろうに機械図のような精密さで、五芒星の封鎖を破つたメフィストの科白せりふの中に示されていた事である。そうなると、勿論その方程式は、事件中最大の疑問と云われる次の風精シルフスに向つて追及されねばならなかつた。



が、その解答を求めた検事の顔には、痛々しいまでの失意が現われた。

「すると、カリリヨン鐘鳴器室のシルフス風精が、あの倍音演奏とどんな関

係があるのだね。その入は、ラムダθは？」と検事が喘ぐよあえ

うに訊ねると、法水はにわかにな態度を変えて、悲劇的に首を振った。

「冗談じゃない。どうしてあれが、そんな遊戯的衝動の産物なもんか。あれには、悪魔の一番厳粛な顔が現われているんだよ。ねえ、そうじゃないか支倉君、没頭と酷使とからは、きまつて恐ろしいユーモアが放出

されるんだぜ。だから、あの風精ジルフスのユーモアは、今の  
ような論理追求だけで潰ひしやげてしまおうようなしろもの  
じゃない。きつと水精ウンディヌスなどとは似ても似つかぬほど、  
狂暴的な幻想ファンタスチックなものに違いないのだ。それに、元来  
あの風精ジルフスと云うのが、眼インザイジブルには見えぬ気体の精フェアリーなんだか  
らね。したがって、どこぞという特徴もないのだ」と  
むしろ冷酷に突き放してから、熊城の方を向くと、彼  
は満面に殺氣うかを泛べて云い放った。

「つまり、きつと犯人の冷笑癖シニシズムが、結局自分の墓穴を  
掘ってしまったのだよ。試しに水精ウンディヌスと、性別転換の行

われてない火精ザラマンダーとを比較して見給え。必ずその解答が、前例の二つとはてんで転倒した犯行形式に違いないのだ。犯人は隠微な手段を藉からずに、堂々と姿を現わして、ブラツケンベルグ火術の精華を打ち放すだろう。勿論標尺と引金を糸で結び付けて、反対の方向へ自働発射を試みるようなことはやらんだろうし、汁で縮むレットリンゲル紙を指に巻いて、引金に偽造指紋を残すような陋劣ろうれつな手段にも出まい。云わば、いつさいの陰険策を排除した騎士道精神なんだよ。しかし、僕等にもしこの用意がなかった日には、前例の二つに現わ

れている、複雑微妙な技巧に慣れた眼で、必ずや錯覚を起すに違いないのだ。つまり、そこに犯人が目論もくろんだ、反対暗示があると云う訳だが、……今度こそは嗤わらい返してやるぞ」

勿論その一言は、今後の護衛方法に決定的な指針を与えるものに相違なかつた。けれども、こうして法水の知脳が、次回の犯罪において全く犯人の機先を制したかのように見え、ことに火精ザラマンダーの一句が、結局犯人の破滅を引き出すかの観を呈したのだったけれども、これまで従来彼対犯人の間に繰り返されていった権謀術策の跡

を顧みると、かえり法水の推断を底とするのが、まだまだ早計のようにも思われるではないか。しかし、五芒星呪文に対する彼の追及は、けっしてそれのみには尽きなかったのである。

「しかし、まだまだ僕は、あの五芒星呪文に、もつと深いところに内在している、核心のものがあると思じていたのだ。つまり、この事件の生因と関聯している、サア、犯罪動機と云うよりも、まだもつと深奥のものかもしれない。いや、もう少し広い意味で云うと、黒死館の地底には、一面に拡がっている幾つかの秘密の

根がある。それが盤根錯綜として重なり合っているところ。個所の形状を、何かの動機で知ることが出来はしまいかと考えたのだ。それで、試みに様々の角度を使つて、一々あの呪文を映してみたのだよ」とそこまで云うと、法水はさすがに疲労の色を泛べて、昨日一日を費やした凄愴な努力を語るのだった。

それによると、犯人を一種の展覽狂と信じている法水は、最初伝説学に考察の矢を向けたのだった。アナートル・ル・ブラの「ブリトン伝説学」やガウルドの「オールド・ニック」までも渉獵して、性別転換の深奥しやうりよう

に潜んでいて犯罪動機に符合するものを、中欧死神口アソカウ碑の中に見出そうとした。また、シエラツハウヘンの「シュワルツブルグ城」その他から、妖精の名称に関する語源学的な変転を知ろうとした。つまり、水精ウンデイヌスと水魔ニックスとの間に一致があれば、女神フリーヤーすなわちニケアあるいはニックスと一体で善悪二様の化身のあるヴォーダン神の妻ホワイト・レディの化身と云われる白夫人伝説のなかに、異様な二重人格的意義を発見できはしまいかと考えたからである。さらに、「Volksbuch」やゴットフリートフォルクスブツ（フォン・シュトラスブルグ）の神秘詩や、ハーゲンやハイステルバッツハ、そ

れから、ゲーテの「ウル・ファウストファウスト第一稿」と第二稿、第三

稿との比較も試みたけれども、結局そのウル・ファウスト第一稿には、

第二稿以下には判然としていない地霊エルデガイスト（すなわち、ウンディ

ネ・ジルフエ・サラマンダー・コポルトを眷族とする大自然の精霊）が、壮大な

哲学的な姿を出現させているのみであった。しかし、

この五芒星呪文に関する法水の解説は、むしろ講演にレクチュア

等しかつた。それなので、ジリジリ緊迫の度を高めて

いた空気がしだいに緩んでいって、背中に陽をうけて

いる二人の間には、ぽかぽかした雲のような眠気が流

れはじめた。検事は皮肉な嘆息をして云った。



「とにかく、この一事だけは断っておこうよ——この席上が弾薬塔だブルヴェル・トゥルムということをね。とにかくそういう話は、いずれ薔薇園ローゼン・ガルテンでやってもらうことにしようじゃないか」

ところが、次の瞬間法水の顔にサツと光耀ひらめが閃いて、突如鉄鞭のように、凄じうない唸りが惰氣を一掃したのである。彼は、甘そうたほこに莨を二、三度吸うと云つた。

「冗談じゃないぜ、こんなに素晴らしい魔王エルケーニツヒ・コスチユウムの衣裳が、弾薬塔や砲壁の中にあつてたまるもんか。支倉

君、僕の魔法史的考察はついに徒勞ではなかつたのだ。  
さんざん

散々ぱら悩まされた五芒星呪文の正体が、ものもある

うに、ルイ十三世朝ブラック・キャピネット機密閣史の中から発見され

たのだよ。いや言葉を換えて云おう。当時不即不離の

態度だつたけれども、新教徒の保護者グスタフ・ア

ドルフススウェーデン(瑞典王)と対峙していたのが、有名な僧正

宰相リシュリユウだつたのだ。実にこの事件の本体が、

あの陰険きわまりない暗躍の中に尽されているのだよ。

ところで支倉君、君は、リシュリユウブラック・キャピネット機密閣の内

容を知っているかね。暗号解読家のフランソア・ヴィ

エトやロツシニヨールは？ 鍊金魔法師兼暗殺者の

オツチリーユは？ つまり、問題はこの悪党僧正オツ

ブラツク・モンク

チリーユにあるのだが……ああ、なんとという薄気味悪い一致だろうか。被害者の名も、犯人の名も、あの竜騎兵王を斃したり、ユツツェン役の戦歿者中に現われているのだがね」

(註) 一六三二年瑞典王グスタフス・アドルフ

スは、ドイツ独逸新教徒擁護のために、旧教聯盟と

プロシアにおいて戦い、ライプチツヒ、レッツ

ヒを攻略し、ワルレンシユタイン軍とリュツツエンにて戦う。戦鬪の結果は彼の勝利なりしも、戦後の陣中においてオツチリーユが糸を引いた一軽騎兵のために狙撃せられ、その暗殺者は、ザックス・ローエンベルグ侯のためその場去らずに射殺せらる。時に、一六三二年十一月十六日。

瞬間検事と熊城は、自分ではどうにもならない眩惑の渦中に捲き込まれてしまった。犯人の名——それは

すなわち、この事件の緞帳カーテンが下されるのを意味する。

しかし、古今東西の犯罪捜査史をあまねく渉獵したところ、とうてい史実によつて犯人が指摘され、事件の解決が下されたなどという神話めいた例ためしが、従来これまでにわずかそれらしい一つでもあつたであらうか。それであるからして、二人は駭おどろき呆れ惑い、ことに検事は、猛烈な非難の色を泛うかべて、実行不可能の世界に没頭してゆく法水を、嚴然と極めつけるのだつた。

「ああまた、君の病的精神狂乱かね。とにかく、洒落しやれはやめにしてもらおう。壺兜ハンド・キャノンや手砲で事件の解決がつ

くと云うのだつたら、まず、そういう史上空前の証明法を聴こうじゃないか」

「勿論刑法的価値としては、完全なものじゃないさ」と法水は烟を靡けむりかせて、静かに云つた。「しかし、最も疑われてよい顔が、僕等を惑わしていた多くの疑問の中に散在しているんだ。つまり、その一つ一つから共通した因子ファクターが発見され、しかも、それ等がある一点に帰納し総合し去ることが出来たとしたらどうだろう。またそうなつたら君達は、強あながちそれを、偶然の所産だけとは考えないだろうね」と云つて、卓子テーブルをガンと叩き、

ジユウイツシユ・クラム

強調するものがあつた。「ところで僕は、この事件を猶太的犯罪だと断定するが、どうだ！」

ジユウ

「猶太——ああ君は何を云うんだ？」熊城は眼をシヨボつかせて、からくも嗶れ声しやがを絞り出した。恐らく彼は、雷鳴のような不協和の絃の唸りうなを聴く心持がしたことであろう。

「そうなんだ熊城君、君は猶太人ユダヤが、ヘブライ文字の

アレフ

ヨッド

Nから、までに数を附けて、時計の文字盤にしているのを見たことがあるかね。それが、猶太人の信条なんだよ。儀式的の法典を厳格に実行することと、失わ

れた王国ツイオンの典儀を守ることだ。ああ、僕だつてそうじゃないか。どうして今までに、土俗人種学がこの難解きわまる事件を解決しようなどと考えられたろうか。とにかく、支倉君の書いた疑問一覧表を基礎にして、あの薄気味悪い赤い眼シリウスパララツクスの視差を計算してゆくことにしよう」と法水の眼の光が消えて、卓上のノートを開きそれを読みはじめた。

## 一、四人の異国楽人について

被害者ダンネベルグ夫人以下四人が、いかなる理



由の下に幼少の折渡来したか、また、その不可解きわまる帰化入籍については、いささかの窺視きしも許されない。依然鉄扉のごとくに鎖されている。

## 二、黒死館既往の三事件

同じ室において三度にわたり、いずれも動機不明の自殺事件に対して、法水はまったく観察を放棄しているようである。ことに、昨年どつかつの算哲事件については、真齋を恫愕する具には供しているけれども、はたして彼の見解のごとく、本事件とは全然別個のものであろうか。法水が黒死館の図書

目録の中から、ウッツズの「王家の遺伝」を抽出したものは、その古譚めいた連続を、彼は遺伝学的に考察しようとするのではないか。

### 三、算哲と黒死館の建設技師クロード・デイグスビイの関係

算哲は薬物室の中に、デイグスビイより与えらるべくして果されなかつた、ある薬物らしいものを待ち設けていた。その意志を、一本の小瓶に残している。また法水は、棺龕カタファアルコ十字架の解読よりして、デイグスビイに呪詛の意志を証明している。

以上の二点を総合すると、黒死館の建設前すでに、両者の間には、ある異様な関係が生じていたのではないだろうか。

#### 四、算哲とウイチクス呪法

デイグスビイの設計を、算哲は建設後五年目に改修している。その時、デイ博士の隠顕扉や黒鏡魔法の理論を応用した古代時計室の扉が生れたのではないかと思われる。しかしながら、算哲の異様な性格から推しても、とうていそれ等中世異端的弄技物が、上記の二つに尽きるとは信ぜられぬ。

そして、歿後直前に呪法書を焚いたことが、今日の紛糾混乱に因を及ぼしているのではないかと、推測するがいかが？

## 五、事件発生前の雰囲気

四人の帰化入籍、遺言書の作成と続いて、算哲の自殺に逢着すると、突如なまぐさ 腥さざりい狭霧のような空気が漲りはじめた。そして、年が改まると同時に、その空気にいよいよ険悪の度が加わっていったと云われる。あながちその原因が、遺言書を繞めぐる精神的葛藤のみであるとは思われぬではないか。

## 六、神意審問会の前後

ダンネベルグ夫人は、死体蠟燭が点ぜられると同時に、算哲と叫んで卒倒した。また、その折易介は、隣室の張出縁に異様な人影を目撃したと云う。けれども、列席者中には、誰一人として室を出たものはなかつたのである。そして、その直下に当る地上には、人体形成の理法を無視した二条の靴跡が印され、その合流点に、これもいかなる用途に供されたものか皆目見当のつかない、写真乾板の破片が散在していた。以上四つの謎は時間的

には近接していても、それぞれ隔絶した性質を  
持っていて、とうてい集束し得べくもない。

## 七、ダンネベルグ事件

屍光と降矢木の紋章を刻んだ創紋——。まさに  
超絶的眺望である。しかも法水は、創紋の作られ  
た時間が僅々一、二分にすぎぬと云う。さらに彼  
の説として、その二つの現象を、○・五の青酸加  
里（ほとんど毒殺を不可能に思わせる程度の薬  
量）を含んだ洋橙オレンジが、被害者の口中に入り込むま  
での道程に当てている。すなわち、不可能を可能

とさせる意味の補強作用であり、その結果の発顕にほかならぬと推断している。しかし、彼の観察誤りなしとしても、それを証明し犯人を指摘することは、要するに神業ではないか。しかも、家族の動静には、一見の特記すべきものもなく、洋橙の出現した経路も全然不明である。

テレーズの弾条人形——。断末魔にダンネベルグ夫人は、この邪霊視されている算哲夫人の名を紙片にとどめた。そして、現場の敷物の下には、人形の足型が、扉を開いた水を踏んでまざまざと

印されている。しかし、その人形には特種の鳴音装置があつて、附添いの一人久我鎮子は、その鈴のような音を耳にしなかつたと陳述しているのだ。勿論法水は、人形の置かれてあつた室の状況いちまつに一抹の疑念を残しているけれども、それは彼自身においても確實のものではなく、すなわち、否定と肯定との境は、その美しいせんおん顫音一筋に置かれてあると云つても過言ではない。

## 八、黙示図の考察

法水がそれを特異体質図と推定しているのは、明



察である。何故なら、自体の上下両端を挟まれている易介の図が、彼の死体現象にも現われているではないか。しかし、伸子の卒倒している形が、セレナ夫人のそれを髣髴ほうふつとさせるのは、何故であろうか。また法水が、象形文字から推定して、黙示図に知られない半葉があるとするのは、仮令論たとい理的であるにしても、すこぶる実在性に乏しく、結局彼の狂氣的産物と考えるほかにない。

### 九、ファウストの五芒星呪文（略）

### 十、川那部易介事件

法水の死因闡明は、同時に甲冑を着せしめたところに、犯人の所在を指摘している。それを時間的に追及すると、伸子にのみ不在証明がない。しかも伸子は、その咽喉を抉った鎧通しを握って失神し、なお、奇蹟としか考えられない倍音が、モテット経文歌の最後の一節において発せられている。それ以外に疑問の焦点とでも云いたいののは、はたして犯人が、易介を共犯者として殺害したか否かであつて、勿論容易な推断を許さぬことは云うまでもないのである。結局、その曲折紛糾奇異を超

絶した状況から推しても、しだいに、伸子の失神を犯人の曲芸的演技とする点に綜合されてゆくけれども、しかし、公平な論断を下すなれば、依然として紙谷伸子は、ただ一人の、そして、最も疑われてよい人物であることは勿論である。

十一、押鐘津多子が古代時計室に幽閉されていた事  
これこそ、まさしく驚愕きょうわう中の驚愕である。しかも、法水が死体として推測したものが、解し難い防温を施されて昏睡していた。勿論、彼女が何故に、自宅を離れて実家に起居していたか——とい

う、その点を追及する必要は云うまでもないが、しかし、犯人が津多子を殺害しなかつた点に、法水は危惧きぐの念を抱いて陥穽かんせいを予期している。けれども、易介が神意審問会の最中隣室の張出縁で目撃した人影と云うのは、絶対に津多子ではない。何故なら、当夜八時二十分に、真齋が古代時計室の文字盤を廻して、鉄扉を鎖したからである。

十二、当夜零時半クリヴオフ夫人の室に闖入したと云われる人物は？

ここに易介の目撃談——宵に張出縁へ出現して、

あのいかにも妖怪めいた不可視的人物が、夜半ク  
リヴオフ夫人の室へやにも姿を現わしたのだった。  
夫人の言によれば、それはまさしく男性であつて、  
しかもあらゆる特徴が、身長こそ異にすれ旗太郎  
を指摘している。しかりとすれば、伸子が覚醒の  
瞬間に認めしたたた自署に、降矢木という姓を冠せてい  
る。それを、グツテンベルガー事件に先例のある  
潜在意識と解釈すれば、伸子を倒したとする風精シルフェ  
の正体には、最も旗太郎の姿が濃厚である。そし  
て、その推定が、伸子の露出的な失神姿体と撞着

するところに、この事件最大の難点が潜んでいるのではあるまいか。

### 十三、動機に関する考察

すべてが、遺産を繞る事情に尽きている。第一の要点は、四人の異国人の帰化入籍によつて、旗太郎の白紙的相続が不可能になつた事である。次に、旗太郎以外ただ一人の血縁が、すなわち押鐘津多子を除外している点に注目すべきであろう。したがつて、旗太郎対三人の外人の間には、すでに回復し難い程度の疎隔を生じているけれども、

何よりこの一つの大きな矛盾だけは、どうすることも出来ない。すなわち、動機を持つ者には、現象的に嫌疑とすべきものがなく、伸子のごとき犯人を髣髴とさせる者には、その反対に動機の寸影すら見出されないのである。

読み終ると、法水はそれを卓上に拡げて、まずその第七条（屍光と創紋くだりの件）の上に指頭を落した。その頃には、欄間の小窓から入って来る陽差が、「倫敦ロンドン大火之凶」の——ちようどテムズ河の真上あたり附近にまで上つ

ていて、頭上の黒煙に物々しい生動を起しはじめた。それでなくても検事と熊城は、唇が割れ唾液が涸かわいて、ただひたすらに、法水の持ち出した奇矯転倒の世界が、一つ大きな蜻蛉とんぼがえりを打って、夢想の翼を落してしまふ時機を夢見るのだった。そういう異様に殺気立つた空気の中で、法水は新しい莩たばこに火を点じ、徐ろおもむに口を開いた。

「ところで、最初にあの不思議な屍光と創紋だが、問題は依然として、その循環論的な形式にあるのだ。あの洋橙オレンジがどういう経路を経て、ダンネベルグ夫人の口の



中に飛び込んでいったのか——その道程が判然はつきりしない限りは、依然実証的な説明は不可能だと思うね。けれども、その屍光と創紋の発生に似た犯罪上の迷信が、有名な『猶太人犯罪の解剖的証拠論（ゴルトフェルト著）』の中に記録されているのだ」とその一冊を書架から引き出したが、それには猶太的犯罪風習が、簡略な例註として記されているのみだった。

あつて、ちようどその夜の十一時半に、わずかに隙



一八一九年十月の或る夜、ボヘミア領ケーニヒグレッツ在の富裕な農夫が、寝台の上で心臓を貫かれ、その後に室内から発火して、死体とともに焼き捨てられたという惨事が起つた。そして、それには通行者の証言が

いた窓掛カーテンの間から、被害者が十字を切っているのを目撃したと陳述する者が現われてきた。そうになると、兇行時刻が十一時半以後となつて、最も深い動機を保持していると目されていた、猶太人ユダヤの一製粉業者に、計らずも不在証明アリバイが出来てしまった。したがつて、事件はそれなり迷霧に鎖されてしまったのである。ところがその半年後になつて、ようやくプラーグ市の補助憲兵デーニツケによつて犯人の奸計が曝露され、やはり最初の嫌疑者である、猶太人の製粉業者が捕縛されるに至つた。しかも、発覚の原因をなし

たものは、ハムラビ經典の解釈から発している、猶太固有の犯罪風習にすぎなかつた。すなわち、死体もしくは被害の個所を、周囲に蠟燭ろうそくを立てて照明すると、それで犯罪が、永久発覚しないという迷信が端緒だったのである。勿論その蠟燭が、火災の原因だつたことは云うまでもないであろう。

ああ開幕当初の場面に、法水はなんと生彩に乏しい例証を持ち出したことであろうか。けれども、続いて彼が、それに私見を加えて解答を整えると、偶然その

独創の中から、さしも循環論の一隅に破られんばかりの光が差しはじめた。

「ところで、あの一文だけでは、ゲンダラム憲兵デーニツケの推理経路がいつこうに不明だけれども、僕はそれに解析を試みたのだ。死体を囲んだと云われる蠟燭の数は、その実五本だったのだよ。しかも、死体に十字を切らせるためには、それで死体を囲まずに、削ぎ竹のように片側の蠟を削いだ丈の短い四本を周囲まわりに並べて、その中央に、全長の半ばほどの蠟を取り除いて長い芯だけにした一本を置き、それを囲ませなければならな

かつた。何故なら、風鶏計かざみの四本の手の向きを互い違  
いにした場合に、どういふ現象が起るか。つまりこの  
場合は、斜めに削いだ分の側を、互い違いの向きにし  
て列ならべたので、火が点ぜられると、熱せられた蠟の蒸  
気が傾斜を伝わって斜めに吹き上げる。したがって、  
それぞれに削いだ向きが異なっているので、その上方  
に $\nabla$ 形デアポロの気流を起させるのだ。それが、中央の長い  
芯を廻転させて、その光の描く影で、死体の手に十字  
を切るような錯覚を現わしたのだよ。そうなつて、屍  
光と創紋の生因を追求してゆくと、是が非にも、僕等

は神意審問会まで遡つて行かねばならぬような気がしてくる。ボヘミアのケートニヒグレートで点された蠟燭の中に、あるいは、ダンネベルグ夫人のみに現われた、算哲の幻影が秘められているのじやあるまいかね。ねえ支倉君、偶然の中からは、往々に数学的なものが飛び出してくるものだよ。何故なら、元来コンスタント恒数と云う

ものは、常に最初の出発点形式は仮定であり、しかる後に、常住不変のファクター因数を決定するのだからね」と法水の顔に、いったんは混乱したような暗影が現われたけれども、彼はさらに語を次いで、屍光に関して、地理

的にも奇妙な暗合のあるのを明らかにした。しかし、そういう隔絶した対照は、結果において紛乱を助長するものにすぎなかつたのである。

次に僕は、カトリック聖僧に関する屍光現象に注目したのだ。ところが、アヴリノの『聖僧奇蹟集』を読むと、新旧両教徒の葛藤が最もはなはだしかつた一六二五年から三〇年までの五年ほどの間に、シエーンベルグ（モラヴィア領）のドイヴァテル、ツイタウ（プロシア）のグロゴウ、フライシユタット（高部アウストリア）のアルノルデイン、プラウエン（サクソニー領）のムスコヴィテス――



と都合四人が、死後に肉体から発光したという記録を残している。そこに熊城君、偶然にしてはとうてい解しきれない符合があるのだよ。何故なら、その四つの地点を連ねたものが、ほぼ正確な矩形くけいになって、それがケーニヒグレートツ事件を起した、ボヘミア領を取り囲んでいるからなんだ。ああ、その実数スカラーはなんだろうか。僕は、喋しゃべれば喋るほど判らなくなってくるのだが、しかし、死体を照らすという猶太人ユダヤの風習だけは、それを、犯人の迷信的表象とすることが出来るだろうと思うのだがね」と法水は天井を振り仰いで、いかにも

弱々しい嘆息を發するのだった。しかし、それを聴いて、検事の希望がまったく絶たれてしまった。彼は口元が歪むほどの冷笑を湛えて、背後の書架から、ウォルター・ハート（ウエストミンスター寺院の僧）の「グスタフス・アドルフス」を取り出した。そして、パラパラと頁を繰ペーっているうちに、何やら発見したと見えて、開いた個所ところを法水に向け、その上辺に指頭を落した。実に、法水の狂的散策を諷刺した、検事の痛烈な皮肉だったのである。

（ワイマール侯ウイルヘルムの劣悪な兵質は、アルン

ハイムとの競争に敗れて、王の支援を遅延せり。しかも、ノイエンホーエンの城内にて、その事をいたく非難されしも、ウイルヘルム侯は顔色さえも変えず）  
 しかも、そのみでは飽き足らずに、検事は執拗な態度で毒吐づいた。

「ああ、悲しむべき書ビプリオグラフィー目よ——じゃないか、まさに、

君特有の書齋的錯乱なんだろうがね。無論あの驚嘆すべき現象に対しては、兎戯にすぎんよ。どうして、深奥どころの話か、てんで遊戯的な散策とも云える価値はあるまい。ところで君が、もし鐘鳴器室カリルロンの場面に、

精確なト書がつけられないようだったら、もうこれ以上レクチュア講演はやめにしてもらおう」

「ところがねえ支倉君」と法水は、相手の冷笑を静かに微笑み返して云った。「どうして、犯人が猶太人ユダヤでなければ、あの時伸子にフレキシビリティス・ツエレア蠟質撓拗症を起させることが出来ただろうか。ある瞬間に伸子は、まるで彫像のように、硬直してしまったのだよ。したがって、あの廻転椅子の位置は、そうなれば無論問題ではないのだ」(註)

(註) 一種の硬直症。この発作は、突然意識を

奪い患者の全身を硬直させ、それ自身の意志による随意運動をまったく不可能にする。しかし、他からの運動には全然無抵抗で、まるで、柔軟な蠟か護謨ゴムの人形のように、手足はその動かされた所の位置に、いつまでも停止している。それが、蠟質撓拗テーパーという興味ある病名を附された由縁である。

「フレキシビリティクス・ツェレア  
蠟質撓拗症!」それにはさしもの検事も、激しく  
テーパー  
卓子を揺ゆすつて叫よばざるを得なくなつた。「莫ば迦かな、君の

詭弁も、度外どはずれると滑稽になる。法水君、あれは稀病中の稀病なんだぜ」

「勿論、文献だけの稀病には違くないがね」といったんは肯定したが、法水の声には、嘲弄するような響が罩こもっていて、

「けれども、そういう稀めずらしい神経の排列を、仮りにも

し、人為的に作れるとしたら、どうなんだい。ところ

で君は、筋識喪失というデュシエンヌが創った術語を

知っているだろうか。ヒステリー患者の発作中に瞼を

閉じさせると、ちようと蠟質撓拗性フレキシビリティス・ツエレアそっくりで、全身

に硬直状態が起るんだぜ。つまり、猶太人特有の或る風習を除いたら、その病理的曲芸サーカスを演じさせることが不可能だと云うのだ」と驚くべき断定を下した。

熊城はそれまで黙々と莠たばこを喫くゆらしていたが、不意に顔を上げて、

「ああ、伸子とヒステリーか……。なるほど、君の透視眼も相当なものさ。ただし問題を、癲狂院でなしに他の方へ転じてもらおう」と彼に似げない味のある言葉を吐いた。それに法水は、思いもつかなかった病理解剖を黒死館の建物に試みて、あくまでその可能性を強

調するのだった。

「オヤオヤ熊城君、僕の方こそ、この事件が黒死館で起つた出来事だという事に、注意してもらいたいんだよ。だいたい犯罪と云うものは、動機からのみ発するものではない。ことに、智的殺人犯罪は、歪んだ内観から動かされる場合が多いのだ。無論そうなると、一種淫虐性ザデイスムスの形式だが……往々感情以外にも、何かの感覚的錯覚から解放されず、しかも、絶えず抑圧を続けられる場合に発する例ためしがあるのだ。ちようど黒死館の城砦シヨウホウめいた陰鬱な建物に、僕はそういう、非道德的



な——むしろ悪魔的な性能を、すこぶる豊富に認めることが出来るのだよ。ところで、その厳粛な顔をしたいたずらもの悪戯者が、だいたいどういう具合に人間神経の排列を変形させてゆくものだろうか、ここにちようど恰好な例があるのだがね」と、その奇矯な推論から、独断に見える衣を脱がせようとして、彼はまず例証を挙げた。「これは今世紀の初め、ゲツチンゲンに起つた出来事なんだが、オット・ブレームルという、いかにもウエストファリア人らしいセンシブル鋭感的な少年が、同地にあるドミニク僧団の附属学園に入学したのだ。ところが、その

ボネーベ式の拱貫きょうかんが低く垂れ、暗く押し迫るような建物が、たちまち破瓜期の脆弱ぜいじやくな神経を蝕むしばんでいったのだ。最初は、建物の内外に光度の差がはなはだしいことが、彼に時として、偶然にしてはあまりに不思議な残像を見せる場合があつた。そして、あげくに幻聴を聴くほどの症状になつたと云うのは、彼の室の窓外が鉄道線路であつて、そこを通過する列車の響が、絶えず Resend Blehmel レゼンドブレーメル (気狂いブレーメルの意) と繰り返すように聴かれたからだつたのだ。しかし父親てておやが息子の病状に驚いて自宅へ引き取つたので、そこでブレーメルの

精神状態が、からくも崩壊を免れたのだ。それがまた、奇蹟に等しいのだよ。寄宿舎を出てしまふと同時に、彼には幻視も幻聴も現われなくなり、間もなく健やかすこな青春を取り戻すことが出来たのだからね。ねえ熊城君、君は刑法家じゃないのだから、あるいは知らないかもしれないが、刑務所の建築様式によつては、拘禁性精神病が続出するのも、また、それが皆無なものもあるそうだよ」

法水は、そこで新しいたぼし苮を取り出して一息入れたが、依然知識の高塔を去らずに、続いて、よりも痛烈な引

「時代は十六世紀の中葉フェリペ二世朝だが、この一

つは、淫虐的な嗜血癖の、むしろ異例的標本とでも云

うものなんだ。西班牙スペインセヴィリアの宗教裁判所に、

糺問官補きゆうもんのフォスコロという若い僧キヤノンがいたのだ。と

ころが、彼の糺問法がすこぶる鈍いばかりでなく、

万聖節ばんせいせつに行われる異端焚殺行列アウト・デ・フェにも恐怖を覚えるとい

う始末なので、やむなく宗教裁判副長のエスピノザは、

彼を生地サントニアの荘園に送り還してしまったのだ。

ところが、それから一、二ヶ月後に、エスピノザはこ

ういうフオスコロの書翰しょかんを受取つたのだが、同封の紙片に描かれたマツツオラタ（中世伊太利でカーニバル季における最も獸的な刑罰）の器械化を見て、思わず一驚を喫してしまつた。

——セヴィリアの公刑所には、十字架と拷問ごうもんの刑具と相併立せり。されど、神もし地獄の陰火ともしを点し、永遠限りなくそれを輝かさんと欲せんには、まず公刑所の建物より、回教式サラセンの丈高き拱格アーチを逐おうにあらん。吾われ、サントニアに來りてより、昔ゴータイア人びとの残せし暗き古荘に棲む。実に、その荘は特種の性質を有せり。

すなわちそれ自身がすでに、人間諸種の苦悩を熟慮したる思想を現わすものにして、吾<sup>われ</sup>そこにおいて種々の酷刑を結合しあるいは比較して、終<sup>つい</sup>にその術において完全なる技師となれり——と。

ねえ熊城君、こういう凄惨な独白<sup>せりふ</sup>は、そもそも何が語らせたのだろうか。どうしてフォスコロの嗜血癖が、残忍な拷問刑具の整列裡では起らずに、美しいビスカヨ湾の自然のなかで生れたのだろうか。そのセヴィリア宗教裁判所とサントニア荘との建築様式の差を、この事件でもけっして看過してはならんと、僕は断言し

たいのだよ」とそこで彼は激越な調子を収めた。そして、以上二つの例を黒死館の実際に符合させて、その様式の中に潜んでいる恐ろしい魔力をせんめい闡明しようとした。

「現に僕は、事実一度しか行かない、しかもあの暗澹あんたんたる天候の折でさえも、黒死館の建築様式に、様々常態ではない現象が現われるのに気がついているのだ。勿論、そういう感覚的錯覚には、とうてい捕捉し得ない不思議な力がある。つまり、それから絶えず解放されないことが、結局病理的個性を生むに至るのだよ。だ

から熊城君、いつそ僕は極言しよう。黒死館の人々は、恐らくその程度こそ違うだろうが、厳密な意味で心理的神経病者たらざるはない——と」

誰しも人間精神のどこかの隅々には、必ず軽重こそあれ、神経病的なものが潜んでいるに相違ない。それを剔抉<sup>てっけつ</sup>し犯罪現象の焦点面へ排列するところに、法水の捜査法は無比なものがあつた。けれども、この場合、伸子のヒステリー性発作と猶太型<sup>ユダヤ</sup>の犯罪とは、とうてい一致し得べからざるほどに隔絶したものではないか。



（しかるにワルドシユタインの左翼は、王の右翼よりも遙かに散開しいたれば、王ウイルヘルム侯に命じて戦列を整わしむ。その時、侯は再び過失を演じて、加農砲の使用を遅らしめたり）

検事は、相変らず法水を鈍重ウイルヘルム侯に擬して、黙々たる皮肉を続けていたが、熊城はたまらなくなつたように口を開いた。

「とにかく、ロスチャイルドでもローゼンフェルトでもいいから、その猶太人ユダヤの顔というのを拝ませてもら

おう。それに君は、伸子の発作を偶然の事故に帰してしまふつもりじゃないんだらうね」

「冗談じゃない。それなら伸子は、何故朝の讚詠アンセムをあ  
の時繰り返して弾いたのだらう」と法水は語気を強め  
て反駁はんぱくした。

「いいかね熊城君、あの女は、非常に体力を要する  
鐘鳴器カリリヨンで、モテット経文歌を三回繰り返して弾いたのだ。そう  
なると、モツソウの『デイ・エルミユドウング疲 労』を引き出さなくて

も、神経病発作や催眠誘示には、すこぶるつきの好条  
件になつてしまふ。そこに、あの女を朦朧もうろう状態に誘い

込んだものがあつたのだよ」

ぼけもの

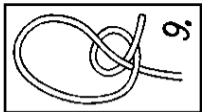
「ではなんとという化物だい。だいたい鐘楼の点鬼簿てんきぼには、人間の亡者の名が、一人も記されていないのだからね」

「化物どころか、勿論人間でもない。それが、鐘鳴器カリリヨンの鍵盤なんだよ」法水はチカツと装飾音を聴かせて、そこで二人の意表外に出た。「ところで、これは一つの錯視現象なんだが、例えば一枚の紙に短冊形の縦孔たてあなを開けて、その背後で円く切った紙を動かして見給え。その円が激しく動くにつれ、しだいと楕円に化してゆ

く、ちようどそれと同じ現象が、上下二段の鍵盤キイに現われたのだ。ところでここに、頻繁ひんぱんに使う下段の鍵盤キイがあつたとしよう。そうすると、その絶えず上下する鍵盤キイを、上段の動かない鍵盤の間から瞶みつめていると、その下段の鍵盤キイの両端が、上段の鍵盤の蔭に没していく方の側に歪んでいって、それが、しだいに細くなつていくように見えるのだ。つまり、そういう遠感的な錯視が起ると、それまで疲労によつてやや朦朧もうろうとしかけていた精神が、一途いちずに溶け込んでゆく。勿論、それによつて固有の発作が起されるのだ。だから熊城君、僕に極言さ

せてもらえるなら、あの時伸子に三回の繰り返しを命じた、その人物が明らかになれば、とりもなおさず犯人に指摘されるのだよ」

「だが、君の理論はけっして深奥じゃない」熊城はここぞと厳しく突っ込んだ。「だいたいその時伸子の臉を下させたのは？ 全身を蠟質フレキシビリタス・ツエレア撓拗性ミタインみたいな、蠟人形のようにしてしまった道程が説明されていない」



法水は大風な微笑を泛べて、相手の独  
 創力の欠乏を憫あわれんでいるかのごとく見え  
 たが、すぐ卓上の紙片に、上図を描いて説  
 明を始めた。

「これが、キャッツ・ポー・ノット猫の前肢と云う、ユダヤ猶太人犯罪者  
 特有の結び方なんだよ。そこで熊城君、

この結び方一つに、廻転椅子に矛盾を現わした筋識喪  
 失——あのフレキシビリティス・ツエレア蠟質撓拗性に似た状態を作り出したもの  
 があつたのだ。見たとおりに下方の紐を引っ張ると、結  
 び目がしだいに下っていく。けれども、結び目に挟

まっつている物体が外れると、紐はピインと解ほどけて一本になつてしまふのだ。だから犯人は、予あらかじめその鍵キイの使用数と最初結び付ける高さを測定しておいてから、その鍵と鐘を打つ打棒とを繋いでいる紐の上方に、鎧通しの束を結び付けておいたのだ。そうすると、演奏が進行するにつれて、鎧通しを廻転させながら、結び目がしだいに下の方へ降つていく。そして、伸子が朦朧状態で演奏している——ちようど讚アンセム詠の二回目あたりで、彼女の眼前を、まるで水芸みずげいの紙撚水こよりみたいに、刃やいばの光ひらめが閃き消えながら、横になり縦になりして、鎧通

しが下降していったのだ。つまり、明滅する光で垂直に瞼を撫で下す。それを眩惑操作モノイデジレーションと云って、催眠中の婦人に閉目させる、リエジョアの手法なんだよ。だから、瞼が閉じられると同時に、フレキシビリティクス・ツエレア蠟質撓拗性そつくり筋識を喪った身体が、たちまち重心を失って、その場去らず塑像そぞうのように背後に倒れたのだ。そして、その機はずみに、鍵キイと紐を裏側から蹴ったので、鎧通しが結び目から飛び出して床の上に落ちたのだよ。勿論伸子は、発作が鎮まると同時に、深い昏睡に落ちていったのだがね」と検事の毒々しい軽蔑を見返したが、法水は



いきなり  
突然悲痛な表情を泛<sup>うか</sup>べて、

「だががしかした。伸子はどうして、あの鎧通しを握つたのだろうか。また、あの奇矯変態の極致ともいう倍音演奏が、何故に起されたものだろうか。ああいう想像の限外には、まだ指一本さえ触れることが出来ないのだ」といったんは弱々しげな嘆息を発したけれども、その困憊<sup>こんばい</sup>げな表情が三たび変つて、終<sup>つい</sup>に彼は颯爽<sup>さつそう</sup>たる凱歌を上げた。「いや、僕は天狼星<sup>シリウス</sup>の視差<sup>パララックス</sup>を計算しているのだっけ。また<sup>デルタ</sup>δもあれば<sup>クシイ</sup>ともある！ それ等を、一点に帰納し総合し去ることが出来ればいいのだ」

そこで、空気が異様に熱してきた。もはや解決に近いことは、永らく法水に接している二人にとると、それが感覚的にも触れてくるものらしい。熊城は不気味に眼を据え、顔を迫るように近づけて訊ねた。

「では、率直に黒死館の化物を指摘してもらおう。君が云う猶太人ジユウというのは、いったい誰なんだね？」

「それが、軽騎兵ニコラス・ブラーエなんだ」と法水はまず意外な名を述べたが、「ところで、その男がグスタフス・アドルフスに近づいた端緒というのは、王がラシニェシュタット市に入城した時で、その際に猶太窟門ジユイツシュゲート

の側かたわらで雷鳴に逢い、乗馬が狂奔したのを取り鎮めたからなんだ。そこで支倉君、何よりブラーエの勇猛果敢な戦績を見てもらいたいんだが」と検事が弄もてあそんでいた。ハートの「グスタフス・アドルフス」を取り上げて、リュッツェン役の終末に近い頁ページを指し示した。と同時に、二人の顔に颯さつと驚愕の色が閃ひらめいた。検事はウーンと呻うめき声を発して、思わず銜くわえていた莩たばこを取り落してしまった。

——戦鬪は九時間に互わたって継続し、瑞典スウェーデン軍の死傷は三千、イムペリアリスツ聯盟軍は七千を残して敗走せしも、夜の闇は

追撃を阻み、その夜、傷兵どもは徹宵地に横たわりて眠る。払曉に降霜ありて、遁れ得ざる者は、ことごとく寒気のために殺されたり。それより先日没後に、ブラーエはオーヘム大佐に従いて、戦鬪最も激烈なりし四風車地点を巡察の途中、彼の慄悍ひようかんなる狙撃の的となりし者を指摘す。曰く、ベルトルト・ヴァルスタイン伯、フルダ公兼大修院長パツヘンハイム……

そこまで来ると、熊城は顔でも殴なぐられたかのようにハッと身を引いた。そして、容易に声が出なかつた。検事はしばらく凝然と動かなかつたが、やがてほとん

ど聴取れないほど低い声で、次句を読みはじめた。

「デイトリヒシュタイン公ダ、ン、ネベルグ、アマルテイ

公領司令官セ、レ、ナ、ああ、フライベルヒの法官チヤンセラレ、

ヴ、エ、ズ……」とグツと唾を嚙み込んで、濁った眼を法

水に向けた。「とにかく法水君、君が持ち出した、この

妖精園の光景を説明してくれ給え。どうも、配役キヤストの意

味がさっぱり嚙み込めんだよ——何故リュツツエン

役を筋書プロットにして、黒死館の虐殺史が起らねばならな

かったのだらうか。それに、あるいは杞憂きゆうにすぎんか

もしれんがね。僕はここに名を載せられていない旗太

郎と、クリヴオフとそのどつちかのうちに、犯人の署名サインがあるのではないかと思うのだよ」

「うん、それがすこぶる悪魔的な冗談なんだ。考えれば考えるほど、慄然ぞっとなってくる。第一、この大芝居を仕組んだ作者というのは、けっして犯人自身ではないのだ。つまりその筋書プロットが、あの五芒星呪文の本体なんだよ。リュッツェンの役では、軽騎兵ブラーエとその母体である暗殺者の魔法錬金士オッチリーユとの関係だったものが、この事件に來ると、犯人+Xの公式に変わってしまうのだ」と法水は、この妖術めいた符合

の解釈を、ぜひなく事件の解決後に移したけれども、  
続いて凄気を双眼に泛<sup>うか</sup>べて、黒死館の悪魔を指摘した。  
「ところで、そのブラーエが、オツチリーユからの刺者  
であることが判ると、そこで、彼の本体を闡明<sup>せんめい</sup>する必  
要があると思う。それが、二重の裏切<sup>ダブル・ダブルクロス</sup>なんだ。旧教徒<sup>カトリック</sup>  
と対抗して比較的猶<sup>ジユウ</sup>太人に穏かだったグスタフス王を  
暗殺したのは、新教徒<sup>プロテスタント</sup>から受けた恩恵と、彼の種族に  
対するとの両様の意味で、二重<sup>ダブル・ダブルクロス</sup>の裏切じやないか。つ  
まり、ハートの史本にはないけれども、プロシア王フ  
レデリック二世の伝記者ダヴァは、軽騎兵ブラーエを、

プロック生れの波蘭猶太人だと曝あばいている。そして、

その本名が、ルリエ・クロフマク・クリヴ、オフなんだ！」

その瞬間、あらゆるものが静止したように思われた。ついに、仮面が剥がれて、この狂気芝居は終わったのだ。常に審美性を忘れない法水の捜査法が、ここにもまた、

火術初期の宗教戦争で飾り立てた、華麗きわまりない

終局キヤタストロフを作り上げたのだった。しかし、検事は未だに

半信半疑の面持で、莩たばこを口から放したまま茫然ほんやりと法水の顔を瞶みつめている。それに法水は、皮肉に微笑みなが



らも、ハートの史本を繰りその頁を検事に突き付けた。

（グスタフス王の歿後、ワイマール侯ウイヘルムの  
フロント・マスケチア


先鋒銃兵、ホイエルスヴェルダに現われるに及び、初  
めて彼が、シレジアに野心ある事明らかとなれり）

「ねえ支倉君、ワイマール侯ウイヘルムは、その実皮  
肉な嘲笑的な怪物だったのだよ。しかし、さしもクリ  
ヴォフが築き上げた墻壁しょうへきすらも、僕の破城槌パツテリングラムにとれ

ば、けつして難攻不落のものではないのだ」と背後に  
ある大火図の黒煙を、赫かつと焰のように染めている、  
陽の反映を頭上に浴びながら、法水は犯人クリヴォフ

を俎上そじょうに上のぼせて、寸断的な解釈を試みた。

「最初に僕は、クリヴオフを土俗人種学的に観察してみたのだ。勿論イスラエル・コーヘンやチェンバレンの著述を持ち出さなくても、あの赤毛や雀斑そばかす、それに鼻梁の形状などが、それぞれアモレアン猶太人ジユウ（最も欧羅巴（ヨーロッパ）人に近い猶太人の標型）の特徴を明白に指摘して

るものだと云える。しかしそれを、より以上確実にしているのが、猶太人特有ともいう猶太王国恢復の信条なんだ。猶太人がよく、その形をカフス釦ボタンや襟布止めネクタイ・ピンに用いているけれども、そのダビデの楯（）の六稜形ひしがた

が、クリヴオフの胸飾では、テュードル薔薇ローズに六弁の形となつて現われているのだ」

「だが、君の論旨はすこぶる曖昧だな」と検事は不承げな顔で異議を唱えた。「なるほど、珍しい昆虫の標本を見ているような気はするが、しかし、クリヴオフ個人の実体的要素には少しも触れていない。僕は君の口から、あの女の心動を聴き呼吸の香りを嗅ぎたいのだよ」

「それが、ダス・ヒルケンヴェルドヘン樺ノ森（グスタフ・ファルケの詩）さ」と法水は

無雑作に云い放つて、いつか三人の異国人の前で吐い

た奇言を、ここでもまた軽業的に弄ぼうとする。「ここ

アクロバテックもてあそ

ろで、最初にあの黙示図を憶い出してもらいたいのだ。知つてのとおりクリヴオフ夫人は、布片きれで両眼を覆われている。そこで、あの図を僕の主張どおりに、特異体質の図解だと解釈すれば、結局あれに描かれている屍様が、クリヴオフ夫人の最も陥りやすいものであるに相違ないのだ。ところが支倉君、眼を覆われて斃たおされる——それが脊髄癆せきずいろうなんだよ。しかも、第一期の比較的目立たない徴候が、十数年にわたって継続する場合がある。けれども、そういう中でも、一番顕著なも

のと云うのは、ほかでもないロムベルグ徴候じゃないか。両眼を覆われるか、不意に四辺あたりが闇になるかすると、全身に重点が失われて、蹠踉そうろうとよろめくのだ。それがあの夜、夜半の廊下につつたのだよ。つまりクリヴォフ夫人は、ダンネベルグ夫人がいる室へやへ赴くために、区劃扉くぎりドアを開いて、あの前の廊下の中に入ったのだ。知つてのとおり両側の壁には、長方形をした龕形がんけいに刳えぐり込まれた壁灯が点されている。そこで、自分の姿を認められないために、まず区劃扉かたわらの側にある開閉器スイツチを捻ひねる。勿論、その闇になつた瞬間に、それまで不慮に

も注意を欠いていた、ロムベルグ徴候が起ることは云うまでもない。ところが、そうして何度か蹠よろめくにつれて、長方形をした壁灯の残像が幾つとなく網膜の上に重なってゆくのだ。ねえ支倉君、ここまで云えば、これ以上を重ねる必要はあるまい。クリヴオフ夫人がようやく身体の位置を立て直したときに、彼女の眼前一帯に拡がっている闇の中で、何が見えたのだろうか。その無数に林立している壁灯の残像と云うのが、ほかでもない、ファルケの歌ったあの薄気味悪い樺の森なんだよ。しかも、クリヴオフ夫人は、それを自ら告白

しているのだ」

「冗談じゃない。あの女の腹話術を、君が観破したとは思わなかったよ」と熊城は力なく苮たほしを捨てて、心中の幻滅を露わに見せた。それに、法水は静かに微笑んで云った。

「ところが熊城君、あるいはあの時、僕には何も聴えなかったかもしれない。ただ一心に、クリヴオフ夫人の両手を瞞みっめていただけだったからね」

「なに、あの女の手を」今度は検事が驚いてしまった。「だが、仏像に関する三十二相や密教の儀軌ぎぎについて

の話なら、いつか寂光庵じやつこうあん（作者の前作、「夢殿殺人事件」）で聴か

せられたと思つたがね」

「いや、同じ彫刻の手でも、僕はロダンの『寺院』カテドラルのこ

とを云つているのだよ」と相変らず法水はさも芝居気

たつぷりな態度で、奇矯に絶した言を曲毬ことば きよくまりのように抛

り上げる。「あの時、僕が樺の森を云いだすと、クリ

ヴオフ夫人は、両手を柔わり合掌やんしたように合せて、

それを卓上に置いたのだ。勿論密教で云う印呪いんじゆの浄三

葉印ほどでなくとも、少なくともロダンの寺院カテドラルには近い

のだ。ことに、右掌みぎての無名指を折り曲げていた、非常



に不安定な形だったので、絶えずクリヴオフ夫人の心理からなんらかの表出を見出そうとしていた僕は、それを見て思わず凱歌を挙げたものだ。何故なら、セレナ夫人が『樺の森』と云つても微動さえしなかつたその手が、続いて僕がその次句で、されど彼夢みぬ——と云つて、その男という意味を洩らすと、不思議な事には、その不安定な無名指に異様な顫動せんどうが起つて、クリヴオフ夫人は俄然はしや燥ぎだしたような態度に変わったからだ。恐らく、そこに現われている幾らかの矛盾撞着は、とうてい法則では律することの出来ぬほど、転

倒したものだつたに相違ない。だいたい、緊張から解放された後でなくては、どうして、当時の昂奮こうふんが心の外へ現われなかつたのだらうか」とそこでちよつと言葉を切つて窓の掛金をはずし、一杯に罩こもつた烟けむりが、揺ぎ流れ出てゆくと後を続けた。「ところが、常人と異常神経の所有者とでは、末梢神経に現われる心理表出が、全然転倒している場合がある。例えば、ヒステリーの発作中そのまま放任しておく場合には、患者の手足は、勝手気儘きままな方向に動いているけれども、いったんそのどこかに注意を向けさせると、その部分の運

動がピタリと停止してしまふのだ。つまり、クリヴオ  
フ夫人に現われたものは、その反対の場合であつて、  
たぶんあの女は、心の戦きおののを挙動に現わすまいと努め  
ていたことだろう。ところが、僕が彼夢みぬ——と  
云つた一言から、偶然その緊張が解けたので、そこで  
抑圧のひらされていたものが一時に放出され、注意を自分の  
掌のひらに向けるだけの余裕が出来たのだ。そうなつて始め  
て、右掌の無名指が不安定を訴えだしたことは云うま  
でもない。そうして、あの解しきれない顫動せんとどうが起され  
たという訳なんだよ。ねえ支倉君、闇でなくては見え

ぬ樺の森を、あの女は指一本で、問わず語らずのうち  
に告白してしまったのだ。その、（樺の森——彼夢み  
ぬ）とかけて下降していく曲線の中に、なんと遺憾な  
く、クリヴオフ夫人の心像が描き尽されていることだ  
ろう。支倉君、いつぞや君は、詩文の問答をツル  
ヴェール趣味の唱合戦うたと云ったことがあつたつけね。  
ところが、どうしてそれどころか、あれは心理学者  
ミユンスターベルヒに、いやハーバードの実験心理学  
教室に対する駁論ぼくろんなんだよ。ああいう大袈裟おおげさな電気計  
器や記録計などを持ち出したところで、恐らく冷血性

の犯罪者には、些細ささいの効果もあるまい。まして、生理学者ウエバーのように自企的に心動を止め、フォンタナのように虹彩を自由自在に収縮できるような人物に打衝ぶつかった日には、あの器械的心理試験が、いつたいどうなつてしまふんだらう。しかし僕は、指一本動かさせただけで、また詩文の字句一つで発掘を行い、それから、詩句で虚妄うそを作らせまでして、犯人の心像を曝あばき出したのだ」

「なに、詩文で虚妄うそを!？」と熊城がグイと唾を嚥のんで聴きき咎とがめると、法水は微かに肩を聳そびやかせて、莩たばこの灰を

落した。彼のせんめい闡明は、もうこの惨劇が終つたのではないかと思われたほどに、十分なものだった。法水はま  
 ずその前提として、猶太人ジュウ特有のものに、自己防衛的  
 な虚言癖のあるのを指摘した。最初に、ミツシネー・  
 トラー経典（十四卷の猶太教基本教典）中にある、イスラエル王  
 サウルの娘ミカル註の故事——から始めて、しだいに  
 現代に下り、猶太人街内ゲットに組織されている長老組織カガール（同  
 種族犯罪者庇護のために、証拠埋滅相互扶助的虚言をもってする長老組織）にま  
 で及んだ。そして、終りに法水は、それを民族的性癖  
 であると断定したのであつた。ところが、続いてその

虚言癖に、<sup>ジルフス</sup>風精との密接な交渉が曝露されたのである。

(註) イスラエル王サウルの娘ミカルは、父が夫ダビデを殺そうとしているのを知り、計を用いて遁<sup>のが</sup>れせしめ、その事露顕するや、ミカルは偽り答えて云う。「ダビデが、もし吾を遁さざれば汝を殺さんと云いしによつて、吾、恐れて彼を遁したるなり」と。サウル娘の罪を許せり。

「そういう訳で、猶太人は、それに一種宗教的な許容を認めている。つまり、自己を防衛するに必要な虚言だけは、許されねばならない——とね。しかし、無論僕は、それだけでクリヴオフを律しようとするのじゃない。僕はあくまで、統計上の数字というものを軽蔑する。だがしかしだ。あの女は、一場の架空談を造り上げて、実際見もしなかつた人物が、寢室に侵入したと云った。いかにも、それだけは事実なんだよ」

「ああ、あれが虚妄だとは」検事は眉を跳ね上げて叫んだ。



「すると君は、その事をどこの宗教会議で知つたのだね」

「どうして、そんな散文的なもんか」と法水は力を罩めて云い返した。「ところで、法心理学者のシュテルンに、フシヒヨロギー・デル・アウスザーゲ『供述の心理学』という著述がある。ところが、

その中であのブレスラウ大学の先生が、予審判事にこういう警語を発しているのだ。——訊問中の用語に注意せよ。何故なら、優秀な智能的犯罪者と云えるほどの者は、即座に相手が述べる言葉のうちの、個々の単語を綜合して、一場の虚妄談を作り上げる術すべに巧みな

ればなり——と。だから、あの時僕は、その分子的な  
聯想と結合力とを、反対に利用しようとしたのだよ。

そして、試みにレヴェズに向つて、風精シルフスに関する問  
を發したのだ。では何故かと云うに、僕がそれ以前に  
図書室を調査した時、ポープ、ファルケ、レナウなど  
の詩集が、最近に繙ひもとかれていたのを知つたからだよ。

つまり、ポープの『レイプ・オヴ・ゼ・ロック髪盗み』の中には、風精シルフスにつ  
いて、いかにも虚妄うそを構成するに適ふさわしい記述がある

からなんだ。勿論、僕が求めているのは、犯人の

ベガリングスレーレ天稟学シルフエだったのさ。あの中にある風精の印象を一つ

に集めて、それに観照の姿を浮ばしめる——その狂言  
 の世界だ。けっして、あの狂<sup>きちがい</sup>詩人が、単に一個の想  
 出の画を描くだけで、満足するものではないと思つた  
 からだ。そこで、僕は固<sup>かたず</sup>唾<sup>の</sup>を嚙んだ。そして、あの陰  
 険酷烈をきわめたクリヴオフの陳述の中から、とうと  
 う犯人の姿を掴まえることが出来たのだよ」と法水の  
 顔には、さも当時の昂奮を回想するような疲労の色が  
 浮んだ。けれども、彼は言<sup>ことば</sup>を次いで、いよいよクリ  
 ヴオフ夫人を犯人に指摘しようとする、  
 「<sup>レイブ・オブ・ゼ・ロツク</sup>髪盗<sup>メス</sup>み」の一文に解析の刀を下した。

「ところろが、その解答はすこぶる簡単なんだよ。

レイブ・オブ・ゼ・ロック

『レイブ・オブ・ゼ・ロック 髪盗み』の第二節には、シルフス風精の部下である四人

フェアリー

の小妖精が現われる。その第一が クリスピッサ Crispissa で、髪を

クリスプス

櫛けずる妖精だ。それが、クリヴオフ夫人の洗髪を怪

あらいがみ

しい男が縛りつけた——という個所ところに当る。その次は、

ゼファイレッタ

Zephyretta、すなわちそよ吹く風で、その男が扉ドアの方

へ遠ざかって行く——ところろの記述の中に出てくる。

モメンティラ

それから三番目は、Momentilla すなわち刻々に動く

もので、眼を覚まして夫人が見ようとしたという枕元

の時計に相当するのだ。そして、最後が、ブリリアンテ Brillante

すなわち輝くものだが、それをクリヴオフ夫人は、怪しい男の形容に用いて、眼が真珠のように輝いていた——と云っている。けれども、それにはもう一側面の見方もあつて、その真珠パールという言葉が、古語で白内障そこひを表わしていることが判ると、右眼の白内障そこひが因で舞台を退いた押鐘津多子が、それに髻ほうふつとなつてくるのだ。しかし、いずれにしても、そういうクリヴオフ夫人の心像を、さらに結論として確実にするものがあつた。つまり、ある一点に向つて、以上四つの既知数が総合されていったのだが……それは、ほかでもない夫

人固有の病理現象——すなわち脊髄癆なんだよ。あの時クリヴオフ夫人は、眼を醒ました時に、胸のあたりで寝衣ねまきの両端が止められていたように感じた——と云った。けれども、あの病特有の輪状感覚（胸部に輪形のものが繞っているように覚えるという一徴候）を考えると、そういう装飾めいた陳述をした原因が、あるいは、日常経験している感覚から発しているのではないかと疑われてくるだろう。それを僕は、あの虚言を築き上げた根本のコンスタント恒数だと信じているのだ」

熊城は凝然じいつと考えに沈みながらしばらくたばこ莨を喫ふかし

ていたが、やがて法水に向けた眼には、濃い非難の色が浮んでいた。しかし、彼は稀めずらしく静かに云った。「なるほど、君の云う理論はよく判った。けれども、なにより僕等が欲しいのは、たった一つでも、完全な刑法的意義なんだよ。つまり、天狼星シリウスの最大視差マキシマム・パララックスよりも、それを構成している物質の内容なんだ。云い換えれば、それぞれの犯罪現象に、君の闡明せんめいを要求したいのだよ」

白線は柔玻璃  
用の致隙

黒線は筆毛  
の意向にて加筆  
した肉視的星形





「それでは」法水は満足そうに頷うなずいて、事務机の抽斗ひきだしから一葉の写真を取り出した。「いよいよ最後の切札を出すことにするかな。ところでこの写真は、鐘鳴器室カシリヨンの頭上に開いている十二宮の円華窓えんげまどなんだが、僕はいちべつ一瞥すると同時に、気がついた。これもまた、棺龕カタファルコ十字架と同様、設計者クロード・デイグスビイが残した秘密クリプトグラフィ記法だ——と。何故なら、通例では、春分点のアリエスある白羊宮が円の中心になっただけれども、これには磨羯宮カプリコルヌスが代っている。また、縦横に馳はせ違っているジグザグの空隙にも、鐘鳴器カシリロンの残響を緩和すると

いう性能以外に、なんらかの意味がなくてはならぬと  
 考えたからだ。ところが熊城君、元来十二宮ゾーディアックなんても  
 のは、古来からありふれている迷信上の産物にすぎな  
 い。第一、文字暗号ではないのだから、肝腎かんじんの  
 秘密キイ・ウワードABCを発見するのに必要な資料が、これにはて  
 んで与えられていないのだ。しかし、僕はランジイ（マ

クベス、ジイヴィルジュ等と並ぶ斯道の大家。一九一八年、“Cryptographie”を発表

す）じゃないがね。仮定す——という慣用語は、まさ  
 に解読家にとって金科玉条に等しいと思うのだよ。何  
 故なら（処女宮ヴァイルゴ）とか（獅子宮レオ）とか云うように、

ゾーディアック

十二宮固有の符号はあるけれども、僕は猶太釈義法を

カバリズム

それに当てて見たのだ。つまり一八八一年の

ポーランド

猶太人虐殺の際に、波蘭グロジスクの町の猶太人が

ゾーディアック

十二宮に光を当てて、隣村に危急を知らせたという史

実があるほどだし……、それに、ブクストルフ（ヨハンマ

たはヨハネス、一五六四—一六二九。瑞西パーゼルの人。その子とともに大ヘブライ

デ・アブレヴィアトゥリス・ヘブライクス

学者)の「希伯来略語考」を見ると、それには、

アトバシユ

アルバム

アトバク

Athbash 法・Albam 法・Atbakh 法 (Athbash 法—ヘブライ A

BCの第一字アレフの代りに、その最後の字タウを当て、また第二位のベートの代り

に、最終から二番目のシンを当て、以下それに準ずる記法。Albam 法—ヘブライ AB

Cを二つに区分し、アレフの代りに後半の第一字ラメドを当てる方法。Alphabetic法—各文字を、その數位の順に従って置き換える方法—をはじめ、天文算数に  
 関する数理義法カバハラが記されている。そして、古代希伯来ヘブライ  
 の天文家が、獅子宮シオンの大鎌形とか処女宮ヴァイルゴのY字形など  
 に、希伯来文字ヘブライの或るものを当てていたという記録が  
 残っているからだ。もちろんその中には、現在のアルファベット  
 ABCに語源をなすものがある。けれども、十二宮全ゾーディアック  
 部となると、そういう形体的な符号の記されてないも  
 のが四つあって、そこで僕は、思いがけない障壁に  
 打衝ぶつかってしまったのだよ。しかし、猶太式秘記法を歴

史的にたどってゆくと、十六世紀になつて、猶太労働<sup>ユダヤ</sup>

組合とフリーメーソン結社（フリーメーソン結社——。衆知の名称な

れども、この結社の本体は秘密会議にあり、それが明白なるが猶太的団体であること

は、メーソン教会の床に「ダビデの楯」の図を塗り潰したものを描き、また、それが定

規とコムパスのメーソン記象にも母体となり、さらに、死亡広告欄を飾る八星形が、猶

太教会の彩色硝子窓に用いられているのを見ても明らかかなり）暗号法の中に、

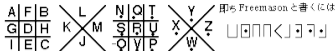
その欠けた部分を補うものが発見されたのだ。ねえ熊

城君、驚くべきことには、この十二宮<sup>ゾーディアック</sup>の中に、猶太秘<sup>ユダヤ</sup>

密記法史の全部が叩き込まれている。そうなると、あ

の不可解な人物クロード・デイグスビイをウエールス

生れの猶太だとするに異議はあるまい。言葉を換えて云うと、この事件には隠顕両様の世界にわたり、二人の猶太人が現われていることになるのだよ」とそれから法水は、一々星座の形に希伯来文字を当てながら、ゾーディアック十二宮の解読を始めた。



すなわち、人馬宮の弓には<sup>ヰ</sup>、天蠍宮には<sup>リ</sup>、  
 処女宮のY字形には<sup>ソ</sup>、獅子宮の大鎌形には<sup>ヨ</sup>、  
 双子宮の双児の肩組みには<sup>ヘ</sup>、勿論  
 金牛宮は、主星アルデバランの希伯来称<sup>ヘブライ</sup>  
 「神の眼」どおりに、第一位の<sup>アレフ</sup>Nとなる。それ  
 から双魚宮は、カルデア象形文字に魚形の語源<sup>ピスケス</sup>  
 があつて<sup>ヌン</sup>。そして、最後の宝瓶宮の水瓶形<sup>アクアリウス</sup>  
 が<sup>タウ</sup>となつて、それで、形体的解読の全部が終  
 るのである。さてそうしてから、その八つの  
 希伯来文字を、それぞれに語源をなしている現

在のABCに変えてゆくと（以下既記の順序どおり）、結局（S. L. Aa. I. H. A. N. T.）となるけれども、まだ、十二宮ゾーディアックには、磨羯宮・天秤宮・巨蟹宮・白羊宮と、以上の四座が残されている。それに法水は、上図どおりのフリーメーソンABCを当てたのだ。エービーシー

それによると、磨羯宮カプリコルヌスのL形がB、天秤宮リブラの□形がD、巨蟹宮カンケルの□形がR、そして、白羊宮アリエスの□がEとなる。それを、さらに法水は、フリーメーソン暗号のもう一つの法である交錯線式ジグザグ（ジグザグ記法）。この方法は、アテネの

戦術家エーネアスが、自著 *Poliorcetes* 中の第三十一章に記載せしに始まる。方眼紙



にABCを任意に排列し、それを先方に通じて置いて、通信は、それを連らねるジグザ

カプリコルヌス

グの線のみを以てす）を用いて、磨羯宮のBから始まっている線状の空隙を辿っていった。そうして、ついに混乱を整理して、秘密ABCの排列を整えることが出来た。そこに、検事と熊城は、不意に迷路の彼方で闇黒界の中に差し込んできた一条の光明を認めたのであった。その神々しい光は、この事件に犯罪現実として現われた、十指にあまる非合理性を、必ずや転覆するものに相違ないのである。法水の驚嘆すべき解析によつて、黒死館殺人事件は、ついに絶望視されていた終幕に

入ったのではあるまいか。何故なら、その解答が

Behind stairs すなわち大階段の裏だったからだ。解

読を終ると法水は静かに云った。

「そこで、大階段の裏——という意味を詮索してみた  
が、それには、ほとんど疑惑を差し挟む余地はない。

あそこには、テレーズ人形を入れてある室と、それに  
隣り合っている小部屋しかないからだ。それに、恐ら  
くその解答も、大時代な秘密築城風景にすぎまいと思

うね——かくしど隠扉、坑道。ハハハハハ、だいたいどうい

意志で、ゾーディアックデイグスビイが十二宮に秘密記法を残したろ

うと、そんなことはこの際問題ではない。サア、さつそくこれから黒死館に行つて、クリヴオフの肉モデリング附けをやろうじゃないか」と法水が喫すいさしを灰皿の上で揉み潰すと、検事は少女おとめのように顔を紅くして、法水に云つた。

「ああ、今日の君はロバチエフスキイ(非ユークリッド幾何の創始者)だよ。いかにも、天狼星シリウスの最大視差マキシマム・パララックスが計算されたのだから！」

「いや、その功労なら、シュニツツラーに帰してもらおう」法水はすこぶる芝居がかった身振をして、

「不在証明、探証、検出——もうそんなものは、維納第ウインナ

四学派以後の捜査法では意味はない。心理分析だ。犯フシヒョアナリゼ

人の神経病的天性を探ることと、その狂言の世界を一

つの心像鏡として観察する——その二点に尽きる。ね

え支倉君、心像ゼーレは広い一つの国じやないか。それは

混沌ダス・カーオスでもあり、またほんの作りものでもあるのだ」と

シュニツラーを即興的に焼直したのを口吟くちずきんでから、

彼は一つ大きな伸びびをして立ち上った。

「サア熊城君、終幕の緞帳カーテンを上げてくれ給え。恐らく

今度の幕が、僕の戴冠式になるだろうからね」

ところがその時、喝采が意外な場所から起った。突然電話の鈴ベルが鳴って、その一瞬を境に、事態が急転してしまった。クリヴオフ夫人に帰納されていった法水の超人的な解析も、この底知れない恐怖悲劇にとつては、たかが一場の間ツヴァイツエンシユピール狂言にすぎなかつたのである。法水は、静かに受話器を置いた。そして、血の気の失せきつた顔を二人に向けて、なんとも云えぬ悲痛な語気を吐いた。

「ああ、僕はシユライエルマツヘルじやないがね。熱を傾けて苦を求めたよ、また、血みどろの身振り狂言

なんだ。それも、人もあろうに、クリヴホフが狙撃さ  
れたんだよ。」と陽差が翳<sup>かげ</sup>つて薄暗くなつた大火之凶の  
上に、法水はいつまでも空洞<sup>うつつろ</sup>な視線を注いでいた。あ  
たかもその様子は、彼が築き上げた壮大な知識の塔が、  
脆くも崩壊しつつある惨状を眺めているかのようであ  
つた。法水の歴史的退軍——これこそ、捜査史上空  
前ともいう大壯観<sup>スベクタクル</sup>ではないか。

二、宙に浮んで……殺さるべし

法水がクリヴォフ夫人に猶<sup>ポ</sup>太人<sup>グ</sup>虐殺<sup>ロム</sup>を試みて、しきり<sup>ゾーディアック</sup>と十二宮秘密記法の解説をしている頃だった。一方私服の楯で囲まれている黒死館では、その隙をどう潜ったものか、世にもまたとない幻術的な惨劇が起つたのである。それが二時四十分の出来事で、当の被害者クリヴォフ夫人は、ちようど前庭に面した本館の中央——すなわち尖塔のまっすぐ下<sup>下</sup>に当る二階の武器室

の中で、折からの午後の陽差を満身に浴びながら、窓際の石卓に倚り読書していた。すると、突然背後から何者かの手で、装飾品の一つであつたフィンランダー式火術弩が発射されたのだが、運よくその箭は、彼女の頭部をわずかに掠めて毛髪を縫つた。そして、その強猛な直進力は、瞬間彼女を宙に吊り、そのまま直前の鎧扉に命中したので、その機みを喰つて、クリヴオフ夫人は鞠のように窓外に投げ出されたのだつた。しかし、その刺叉形をした鬼箭が、確かと棧の間に喰い入っていたので、また後尾の矢筈に絡みついている彼



女の頭髮も、これまた執拗に離れなかつたので、夫人の身体はその一本の矢に釣られて宙吊りとなり、しかも、虚空の中でキリキリ独楽こまのように廻転を始めたのであつた。まさに、ダンネベルグ夫人——易介と続いた、血みどろの童話風景である。あの底知れぬ妖術のような魔力を駆使して、犯人はこの日にもまた、クリヴォフ夫人を操人形マリオネットのように弄もてあそんだ。そして、相変らず五彩絢爛けんらんとした、超理法超官能の神話劇を打つたのであつた。恐らくその光景は、クリヴォフ夫人の赤毛が陽あおに煽あおられて、それがクルクル廻転するところは、

さながら焰ほのおの独楽こまのようにも思えたであらうし、また、

怒いかつたゴルゴン（メドウーサら三姉妹）の頭髪を髣髴ほうふつとさせる

ほどに、凄惨酷烈をきわめたものに違いなかつた。そ

して、その時クリヴオフ夫人が、もし無我夢中の裡に

窓框まどわくに片手を掛けなかつたなら、あるいは、そのうち

に矢筈しなが菱やじりび鍬くわが抜けるかして、結局直下三丈の地上

で粉碎されたかもしれなかつたのである。しかし、悲

鳴を聴きつけられて、クリヴオフ夫人はただちに引き

上げられたけれども、頭髪はほとんど無残にも引き抜

かれていて、おまけに毛根からの出血で、昏倒してい

る彼女の顔は、一面に赭丹しゃたんを流したよう素地を見るこ  
とが出来なかつたそうであつた。

その惨事が発生してから、わずか三十五分の後、  
法水一行は黒死館に到着していた。館に入ると、彼は  
すぐにクリヴオフ夫人の病床を見舞つた。すると、折  
よく医師の手で意識が恢復されていて、上述の事情を、  
杜絶とぎれながらも聴くことが出来た。しかし、それ以上  
の真相は、混沌の彼方で犯人が握つていた。その当時  
彼女は、窓を正面に椅子の背を扉ドアの方へ向けていたの  
で、自然背後にいた人物の姿は見る事が出来なかつ

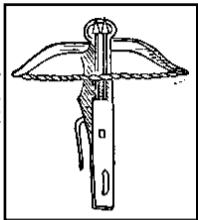
たと云う始末だし、また、その室へやに入る左右の廊下には、それぞれ一人宛ずつの私服が曲り角の所で頑張つていたのだつたけれども、誰しもそこを出入した人物はなかつたと云うのだつた。言葉を換えて云うと、その室はほとんど密閉された函室はこむろに等しく、したがって、私服の眼から外れて、いやしくも形体を具えた生物なら、出入は絶対不可能であるに相違なかつたのである。法水は聴取を終ると、クリヴオフ夫人の病室を出て、さつそく問題の武器室を点検した。

その室は前面から見ると、正確に本館の真中央まんまんなかに当

り、二条の張出間アブスに挟まれていて、二つある硝子窓はそれだけが他とは異なり、十八世紀末期の二段上下式になつている。また、室内も北方ゴート風の玄武岩で畳み上げた積石造つみいしづくりで、周囲は一抱えもある角石で築き上げられ、それが、暗く粗暴な蒙昧もうまいな、いかにも重々しげなテオドリック朝あたりを髣髴とさせるものであつた。そして、室内には陳列品のほかに、巨大な石卓と、天蓋のない背長椅子バルダキンが一つあるのみにすぎなかつた。しかも、その暗澹あんたんとした雰囲気を、さらにいちだん物々しくしているのが、周囲の壁面を飾つてい

る各時代の古代武具だったのである。それには、さして上古のものはなかつたけれども、小型のモルガルテン戦争当時の放射式投石機、屯田兵常備の乗入梯子、支那元代投火機のようなやや型の大きい戦機に類するものから、手砲用鞍形楯ハザイルゼほか十二、三の楯類、テオドシウス鉄鞭、アラゴン時代の戦槌かけや、ゲルマン連枷れんか、ノルマン型大身鎗おおみのやりから十六世紀鎗アガサイにいたる、十数種の長短直叉サイベルを混じた鎗戟類そうげき。また、歩兵用戦斧せんふをはじめに、洋剣の類も各年代にわたっていて、ことに、ブルガンデイ鎌刀やザバーゲン剣が珍奇なものだった。そして、

その所々に、ヌーシャテル甲冑やマキシミリアン型、それにファルネスやバイヤール型などの中世甲冑が陳列されていて、銃器と云えば、わずかに初期のハンドキャノン手砲を二つ三つ見るにすぎなかった。しかし、それ等陳列品を巡視しているうちに、恐らく法水は、彼が珍藏しているグロースの「古代軍器書」を、この際持参しなかったことが悔まれたに違いない。何故なら、彼は時折嘆息し、あるいは細めた眼を、細刻や紋章に近づけたりなどして、たしかにこの戦具変遷の魅力は、彼の職務を忘れさせたほどに、恍惚とさせたに相違なかったの



一張の火術弩かじゆつどを拾い上げた。それは、全長三尺もある  
フィンランダー式（上図参照）のもので、火薬を絡めた

しかし、室内を一巡して、  
ようやく水牛の角と海豹アザラシの附  
いた北方海賊風ヴァイキングの兜の前まで  
来ると、彼は側かたわらの壁面にある、  
不釣合な空間に注いだ眼を返  
して、すぐその前の床から、



鬼箭おにやを発射して、敵塞に射込み、殺傷焼壞を兼ねると  
 いう酷烈な武器だった。ところ、その構造を概述す  
 ると、弓形に付けられた燃紐ひねりひもの弦を中央の把手ハンドルまで引  
 き、発射する時は、その把手を横倒しにするという装  
 置で、火砲初期頃の巻上式に比べると、きわめて幼稚  
 な十三世紀あたりのものに相違なかった。すなわち、  
 この一つの火術弩から発射された鬼箭が、クリヴオフ  
 夫人に生死の大曲芸サーカスを演ぜしめたのであった。が、そ  
 れが掲げられていた壁面の位置は、ちようど法水の乳  
 下辺に当たっていた。またそれと同時に、熊城が石卓の

上にあつた鬼箭を持つて来たけれども、その矢柄は二センチに余り、鏃やじりは青銅製の四叉になつていて、鴻こうのとりの羽毛で作つた矢筈やはすと云い、見るからに強靱兇暴をきわめ、クリヴオフ夫人を懸垂しながら突進するだけの強力は、それに十分窺われるのだった。のみならず、弩どにも箭やにも、指紋はおろか指頭を触れた形跡さえなかつたのであるが、その上、疑問はまず熊城の口から発せられて、自然発射説は最初から片影もなかつたのである。何故なら、事件発生の直前には、その火術弩は箭つがを番えたまま、窓の方へ鏃を向けて掲つていたの

だし、その操作は、女性でも強<sup>あなが</sup>ち出来得ないこともないからであつた。熊城はまず、当時半ば開いていた右側の<sup>よろいど</sup>鎧扉から、その壁面にかけて指で直線を引いた。

「法水君、高さはちようど頃合だがね。しかし、鎧扉までの角度が、てんで二十五度以上も喰い違つている。もし、何かの原因で自然発射がされたとすれば、壁面と平行に、隅の騎馬装甲へ打<sup>ぶつか</sup>衝らなきやならんよ。きっと犯人は、<sup>しゃが</sup>踞んでこの弩を引いたに違いないんだ」

「だが、犯人は標的を射損じたのだ。それが僕には、何

より不思議に思われるんだがね」と、爪を噛みながら法水は浮かぬ顔で呟いた。つぶや「第一、距離が近い。それに、この弩には標尺がある。その時クリヴオフは、背後を向けて椅子から首だけを出していたのだ。その後頭部を狙うのは、恐らくテルが、虫針で林檎を刺すより容易たやすいだろうと思うが」

「では法水君、君はいったい何を考えているんだね」とそれまで何ものか期待していた検事は、周囲の積石を調べ歩いて、漆喰しっくいにそれらしい破れ目でも見出そうとしていた。が、空しく戻って来ると、法水に鋭く訊ね

た。すると、法水は突然窓際へ歩み寄って行き、そこから窓越しに、前方の噴泉を指差して云った。

「ところで、問題と云うのが、あの驚駭噴泉なんだよ。ウオーター・サーブライズ

あれは、バロック時代に盛った悪趣味の産物なんだが、あれには水圧が利用されていて、誰か一定の距離に近づく者があると、その側に当る群像から、不意に水煙が上るといふ装置になっているのだ。ところが、この窓硝子を見ると、まだ生々しげな飛沫の跡が残されている。してみると、きわめて近い時間のうちに、あの噴泉に近づいて、水煙を上げさせたものがなけりやな

らない。勿論それだけなら、さして怪しむべき事でもないだろう。ところが、今日は微風もないのだ。そうになると、飛沫がここまで何故に來たか——という疑問が起つてくる。支倉君、それが、また実に面白い例題なんだよ」と続いて云いかけた法水の顔に、みるみる暗影が差ししてゆき、彼は過敏そうに眼を光らせた。「と

にかく、ライプチツヒ派に云わせたら、今日の

犯罪クリミナル・ジチュアチヨンゼール・シユリヒト

状況はきわめて単純なり——と云うところだろう。何者かが妖怪的な潜入をして、あの赤毛の猶太ユダヤ婆の後頭部を狙った。そして、射損ずると同時に、そ

の姿が掻き消えてしまった——と。勿論、その不可解

きわまる侵入には、あの Behind stairs (大階段の裏) の一

語が、一脈の希望を持たせるだろう。けれども、僕の

予感が狂わない限りは、仮令現象的に解決してもだよ。

今日の出来事を機縁として、この事件の目隠しが実に

厚くなるだろうと思われるのだ。あの水煙——それを

神秘的に云えば、水精ジルフェが火精ザラマンターに代り、しかも射損じた

のだ——と」

「また、妖精山風景かい。だがいったい、そんなことを

本気で云うのかね」検事は其の端をグイと噛んで、非

難の矢を放った。法水は指先を神経的に動かして、

まじがまち

窓框を叩きながら、

「そうだとも。あの愛すべきあまのじやく天邪鬼には、しだいに黙

示図の啓示を無視してゆく傾向がある。つまり、黒死

館殺人事件根元のテキスト教本さえ、玩弄してるんだぜ。ガリ

バルダは逆さになつて殺さるべし——それは伸子の失

神姿体に現われている。それから、眼を覆われて殺さ

るべきはずのクリヴオフが危なく宙に浮んで殺される

ところだつたのだ。その時、宙高くに上つた

ウオーター・サープライズ

驚駭噴泉の水煙が、眼に見えない手で導かれたのだ



よ。そして、この室の窓に、おどろと漂い寄つて来たものがあつたのだ。いいかね支倉君、それがこの事件の悪魔学デモノロジイなんだぜ。病的な、しかもこれほど公式的な符号が、事実偶然にそろふものだらうか」

その一事は、かつて検事が、疑問一覽表の中に加えただほどで、ほうはく磅礴と本体を隔てている捕捉し難い霧のよくなものだった。しかし、こう法水から明らさまに指摘されてしまうと、この事件の犯罪現象しやうきよりも、その中に陰々とした姿で浮動している瘴気しやうきのようなものの方に、より以上慄然ぞっとくるものを覚えるのだった。が、

その時扉が<sup>ドア</sup>開いて、私服に護衛されたセレナ夫人とレヴェズ氏が入つて来た。ところが、入りしなに三人の沈鬱な様子を<sup>いちべつ</sup>一瞥したとみえて、あの見たところ温和そうなセレナ夫人が、碌々<sup>ろくろく</sup>に挨拶も返さず、石卓の上に荒々しい片手突きをして云つた。

「ああ、相も変わらず高雅な<sup>だんらん</sup>団欒でございますことね。法水さん、貴方はあの兇悪な人形使いを——津多子さんをお調べになりました」

「なに、押鐘津多子を!？」それには、法水もさすがに驚かされたらしかった。「すると、貴方がたを殺すとても

云いましたかな。いや、事実あの方には、とうてい打ち壊すことの出来ない障壁があるのです」

それに、レヴェズ氏が割つて入つた。そして、相変らず揉み手をしながら、阿おもねるような鈍い柔らか味のあつる調子で云つた。

「ですが法水さん、その障壁と云うのが、儂わしどもには心理的に築かれておりますのでな。お聴き及びでしょうが、あのかたは、御夫君もあり自邸もあるにかかわらず、約一月ほどまえから、この館に滞在しておるのです。だいたい理由もないのに、御自分の住居すまいを離れて、

何のために……いや、まったく子供っぽい想像です  
が」

それを法水は押冠せるように、「いや、その子供なん  
ですよ。だいたい人生の中で、子供ほど作虐的ザデイスティツシユなもの

はないでしょうからな」と突き刺すような皮肉をレ  
ヴェズ氏に送つてから、「時にレヴェズさん、いつぞや

——ドッホ・ローゼン・ジンテス・ウオバイ・カイン・リード確かそこにあるは薔薇なり、その附近には鳥のド声  
メール・フレテットは絶えて響かず——と、レナウの『ヘルプスト・ゲフユール秋の心』のこ

とを訊ねましたつけね。ハハハハハ、御記憶ですか。

しかし、僕は一言注意しておきますが、この次こそ、

貴方が殺される番になりますよ」となんとなく予言めいた、またそこに、法水独特の反語逆説が潜んでいるようにも思われる、妙に薄気味悪い言葉を吐いた。すると、その瞬間レヴェズ氏に、衝動的な苦悶の色が泛び上ったが、ゴクリと唾を嚙み込むと、顔色を旧どおりに恢復して云い返した。

「まったく、それと同様なんです。得体の判らない接近というものは、明らさまな脅迫よりも、いつそう恐怖的なものですからな、しかし、儂どもに寢室の扉に門を下させたり、またそれを、要塞のように固めさせ

るに至つた原因というのは、けつして昨今の話ではないのですよ。実は、あの晩の神意審問会と同様の出来事が、以前にも一度繰り返されたことがあつたので「とレヴェズ氏は顔を引き緊め、つい寸秒前に行われた、法水との黙劇を忘れたかのように、語りはじめたものがあつた。」

みまか

「それは、先主が歿みまかられてから間もなくのことです、去年の五月の初めてでしたが、その夜は、ハイドンのト短調クワルテツトの四重奏曲の練習を、礼拝堂でやることになりました。

ところが、曲が進行しているうちに、突然グレーテさ

んが、何か小声で叫んだかと思うと、右手の弓が床の上  
上に落ち、左手もしだいにダラリと垂れていって、開  
いてある扉ドアの方を凝然じっと瞶みつめているのでした。勿論、  
儂わしども三人は、それを知って演奏を中止いたしました。  
すると、グレーテさんは、左手に持った提琴ヴァイオリンを逆さに  
扉ドアの方へ突き付けて、津多子さん、そこにいたのは誰  
です？——と叫んだのです。案の定扉ドアの外からは、津  
多子さんの姿が現われましたけども、あの方はいつこ  
う解せぬような面持で、いいえ誰もいない——と云う  
のでした。ところが、それを聴くと、グレーテさんは

何と云つたことでしょうか。声を荒らげて、儂わしどもの血が一時に凍りつくような言葉を叫ばれたのです。確かそこには算哲様が——と」と云つた時に、総身を恐怖のために竦すくめて、セレナ夫人はレヴェズの二の腕をギュツと掴んだ。その肩口を、レヴェズは労いたわるように抱きかかえて、あたかも秘密の深さを知らぬ者を嘲笑するような眼差を、法水に向けた。

「勿論儂わしは、その疑クエスチヨネア題に対する解答が、神意審問会のあの出来事となつて現われたと信じておるのです。いや、元来心靈主義スピリチュアリズムには縁遠い方でした。そう云つた



神秘玄怪な暗合というものにも、必ずや教程公式があるに相違ない——と。いいですか、法水さん、貴方が探し求めておられる薔薇の騎士は、その二回にわたるローゼン・カザアリエル、不思議とも、異様に符合しておるのですぞ。それは云うまでもない、津多子さんにはほかならんです」

その間法水は、黙然と床をみつ瞞めていたが、まるで、ある出来事の可能性を予期してかのような、弱々しい嘆息を洩らした。そして、「とにかく、今後貴方の身辺には、特に嚴重な護衛をおつけしましょう。それから、また貴方に、『ヘルブスト・ゲフニール秋の心』をお訊ねしたことを、改め

てお詫びしておきます」と再び、他ではとうてい解しきれぬような奇言を吐いてから、彼は問題を事務的な方面に転じた。

「ところで、今日の出来事当時は、どこにお出かけになりましたか」

「ハイ、私は自分の室へやで、ジョオコンダ（聖バーナード犬の名）の掃除をいたしておりました」とセレナ夫人は躊躇ひるまずに答えてから、レヴェズの方を向いて「それに、確かオットカールさん（レヴェズの名）は、驚駭ウオーター・サープライズ噴泉の側にい

らつしやいましたわね」

その時レヴェズ氏の顔には、ただならぬ狼狽ろうばいの影が差したけれども、「いやガリバルダさん、鏃やじりと矢筈やはすを反対にしたら、たぶん、弩の絃いとが切れてしまうでしょうからな」といかにも上ずった、不自然な笑声で紛らせてしまったのである。そうして二人は、なおも煩々くどくどしく、津多子の行動について苛酷な批判を述べてから、室を出て行った。二人の姿が扉ドアの向うに消えると、それと入れ違いに、旗太郎以下四人の不在証明アリバイが私服によつてもたらされた。それによると、旗太郎と久我鎮子は図書室に、すでに恢復していた押鐘津多子は、当

時階下の広間サロンにいたことが証明されたけれど、不思議な事には、この時もまた、伸子の動静だけが不明で、誰一人として、彼女の姿を目撃した者がなかった。以上の調査を私服から聴き終ると、法水はひどく複雑な表情を泛うかべ、実にこの日三度目の奇説を吐いた。

「ねえ支倉君、僕にはレヴェエズの壮烈な姿が、絶えず執拗しつぱつつこくつき纏まとっているのだがね。あの男の心理は、実に錯雑をきわめているのだ。あるいは誰かを庇かばおうとしての騎士的精神かもしれないし、またああいう深刻な精神葛藤が、すでにもう、あの男に狂人の境界を

跨またがせているのかも判らない。だが、なにより濃厚なのは、あの男が死体運搬車に乗っている姿なんだよ」となんら変哲もないレヴェズの言動に異様な解釈を述べ、それから噴泉の群像に眼がゆくとき、彼は慌あわてて出しかけた莨たぼこを引つ込めた。「では、これから驚ウオーター・サープライズ駭噴泉を調べることにしよう。恐らく犯人であると云う意味でなしに、今日の事件の主役は、きつとレヴェズに違いないのだ」

その驚ウオーター・サープライズ駭噴泉の頂上は、黄銅製のパルナス群像になつていて、水盤の四方に踏み石があり、それに足を

かけると、像の頭上からそれぞれ側に、四条の水が  
高く放出される仕掛になっていた。そして、その放水  
が、約十秒ほどの間継続することも判明した。ところが、  
その踏み石の上には、霜溶けの泥が明瞭な靴跡と  
なつて残つていて、それによるとレヴェズ氏は、その  
一つ一つを複雑な経路で辿たどつて行つて、しかもそれぞ  
れに、ただの一度しか踏んでいないことが明らかに  
なつた。すなわち、最初は本館の方から歩いて来て、  
一番正面の一つを踏み、それから、次にその向う側を、  
そして三度目には右側のを、最後には、左側の一つを

踏んで終っている。しかし、その複雑きわまる行動の意味が、いったい那邊にあるのか、さすがに法水でさえ、皆目その時は見当がつかかなかつた。

それから、本館に戻ると、一昨日訊問室に当てた例の開けずの間、すなわちダンネベルグ夫人が死体となっていた室で、<sup>へや</sup>まず最初の喚問者として伸子を喚ぶことになった。そして、彼女が来るまでの間に、どこからとなく法水の神経に、後にはそれと<sup>うなず</sup>頷かせた、異様な予感が触れてきたと云うのは、数十年以来<sup>このかた</sup>この室に君臨していて、幾度か鎖され開かれ、また、何度か

流血の惨事を目撃してきた——あの寝台の方に惹かれ  
ていったのだった。彼は帷幕カーテンの外から顔を差し入れた  
だけで、思わずハツとして立ち竦すくんでしまった。前回  
には些ちとかも覚えなかつたところの、不思議な衝動に襲  
われたからだ。死体が一つなくなつただけで、帷幕カーテンで  
区切られた一劃には、異様な生氣が発動している。あ  
るいは、死体がなくなつて構図が變つたので、純粹の  
角と角、線と線との交錯を眺めるために起つた、心理  
上の影響であるかもしれない。

けれども、それとはどこか異なつた感じで、同じ冷



たさにしても、生きた魚の皮膚に触れるといったような、なんとなくこの一劃の空気から、微かな動悸どうきでも聴えてきそうであつて、まあ云わば、生体組織オーガニズムを操縦している、不思議の力があるのを浸々と感ずるのだつた。しかし、検事と熊城に入られてしまうと、法水の幻想は跡方もなく飛び散つてしまった。そして、やはり構図のせいかなと思うのだった。法水はこの時ほど、寝台を仔細に眺めたことはなかつた。

天蓋を支えている四本の柱の上には、松毬形まつかさをした頂花たてばなが冠彫かしらぼりになつていて、その下から全部にかけては、

物凄いほど克明な刀の跡を見せた、十五世紀ヴェネチアの三十櫓楼船フチントーロが浮彫みよしになつていた。そして、その舳みよしの中央には、首のない「ブランデンブルクの荒鷲」が、極風に逆らつて翼を拡げているのだつた。そういう、一見史文模様しぶんめいた奇妙な配合とりあわせが、この桃花木マホガニーの寝台を飾つてる構図だつたのである。そして、ようやく法水が、その断頸鷲の浮彫から顔を離した時だつた。静かに把手ノツブの廻転する音がして、喚よばれた紙谷伸子が入つて来た。





第六篇 算哲埋葬の夜



一、あの渡り鳥……二つに割れた虹

紙谷伸子の登場——それが、この事件の超頂点

だった。と同時に、妖気祲氣の世界と人間の限界とを区切っている、最後の一線でもあつたのだ。何故なら事件中の人物は、クリヴオフ夫人を最終にしてことごとく篩い尽されてしまい、ついに伸子だけが、残された一粒の希望になつてしまつたからだ。しかも、かつて鐘鳴器室で彼女が演じたところのものは、とうてい

曖昧模糊もことした人間の表情ではない。いかなる畸矯変

則をもつてしても律しようのない……換言すれば、殺

人犯人の生具的表現を最も強烈に表象している、一個

の演劇用仮面マクスに相違ないのである。それゆえ、ここで

もし法水のりみずが、伸子の秤量しやうりようを機会に転回を計ることが出

来なかつた暁あかつきには、恐らくあの暗黒凶悪な緞帳カーテンが、事

件の終幕には犯人の手によつて下されるであらう。否

そうなることは、この事件の犯罪現象を一貫している

虬みずちのような怪物、——すなわち事件の推移経過が明白

にそれへ向つて集束されてゆこうとしても、法水でさ



えどうにも防ぎようのない、あの<sup>デモーン・ガイスト</sup>大魔霊の超自然力

を確認するにほかならないのである。それゆえ、伸子の蒼白な顔が扉ドアの蔭から現われると同時に、室内の空気が異常に引き緊つてきた。法水にさえ、抑えようとしても果せない、妙に神経的な衝動が込み上げてくる。そして、全身を冷たい爪で、搔き上げられるような焦慮を、その時はどうすることも出来ないのであつた。

伸子は年齢としのころ二十三、四であろうけれども、どちらかと云えば弾力的な肥り方で、顔と云い体軀たいくの線と云い、その輪廓がフランドル派の女人を髣髴ほうふつとさせる。けれ

ども、その顔は日本人には稀めずらしいくらい細刻的な陰影に富んでいて、それが如実に彼女の内面的な深さを物語るように思われた。のみならず、最も印象的なのは、そのクリクリした葡萄の果みみみたいな双の瞳である。そこからは智的な熱情が、まるで羚羊かもしかのような敏すばしさで迸出はしりだしてくるのだけれども、それにはまた、彼女の精神世界の中にうずくまっているらしい、異様に病的な光もあつた。総体として彼女には、黒死館人特有の、妙に暗い粘液質的なところはなかつたのである。しかし、三日にわたって絶望と闘い凄惨な苦悩を続け

たためか、伸子は見る影もなく憔悴しょうすいしている。すでに歩む気力も尽き果てたように思われ、その喘あえぐような激しい呼吸が——鎖骨や咽喉の軟骨が急せわし気に上下しているのさえ、三人の座所から明瞭はつきりと見える。しかし、フラフラ歩んで来て座に着くと、彼女は昂奮を鎮めるかのように両眼を閉じ、双もろの腕で胸を固く締めつけていて、しばらく凝然じいつと動かなかつた。それに、黒地の対ついへ大きく浮き出している茅萱ちがや模様の尖さきが、まるで礫はりつけやり刑槍みたいな形で彼女の頸くびを取り囲んでいる。それなので、偶然に作られてしまったその異様な構図から

は、妙に中世めいた問罪的な雰囲気がかも醸し出されてくる。そして、かし櫛と角石とで包まれた沈鬱な死の室のぐるり周囲へ、それが渦のように揺ぎ拡がってゆくのだった。やがて、法水の唇が微かに動きかけて沈黙を破ろうとしたとき、あるいは先手を打とうとしたのだらうか、突如伸子の両眼がパチリと見開かれた。そして、彼女の口からいきなり衝いて出たものがあつた。

「私、告白いたしますわ。いかにも鐘鳴器室カリリヨンで気を失いました際には、鎧通しを握っております。また、えきすけ易介さんが殺された前後にも、今日のクリヴオフ様の

出来事当時<sup>アリバイ</sup>にだつて、奇妙なことに、私だけには不在証明と云うものが恵まれておりませんでした。いえ、私は最初から、この事件の終点におかれているんですわ。ですから、ここで幾ら莫迦<sup>ぼか</sup>問答を続けたところで、結局この局<sup>シチュエーション</sup>状には批評の余地はございませんでしよう。」と伸子は何度も逼<sup>つか</sup>えながら、大きく呼吸<sup>いき</sup>を吸い込んでから、「それに、私には固有の精神障礙<sup>しょうがい</sup>があつて、時折ヒステリーの発作が起ります。ねえそうでございますよう。これは久我<sup>くが</sup>鎮子<sup>しずこ</sup>さんから伺つたことですけども、犯罪精神病理学者のクラフトエーヴィ

ングは、ニイチエの言葉を引いて、天才の悖徳掠奪性はいとくを強調しております。中世紀全体を通じて最も高い人間性の特徴とみなされていたのは、幻覚を起す——云い換えれば、深い精神的擾乱じょうらんの能力を持つにあり——ですと。ホホホホ、これでございますものね。すべてがそろいもそろって、それも、明瞭過ぎるくらいに明瞭なんですわ、もう私には、自分が犯人でないと主張するのが厭いやになりました」

それは、どこか彼女のものでないような声音こわねだった。——ほとんど自棄的な態度である。しかし、その中に

は妙に小児こどもつぽい示威があるように思われて、そこに、絶望から腕もがき上ろうとする、凄惨な努力が、透し見えるのだった。云い終ると、伸子の全身を硬張こわばらせていた鞆帯じんたいが急に弛緩しかんしたように見え、その顔にグツタリとした疲労の色が現われた。そこへ、法水は和やかな声で訊ねた。

「いや、そういう喪服なら、きつとすぐに必要でなくなりますよ。もし貴女あなたが鐘鳴器室カリラロンで見た人物の名が云えるのでしたら」

「すると、それは……誰のことなんでしょうか」と伸子

は素知らぬ気な顔で、鸚鵡返しおうむに問い返した。しかし、その後の様子は、不審怪訝ふしんげげんなぞというよりも、何か潜在そそしている——恐怖めいた意識に唆そそられているようだった。けれども、気早な熊城はもはや凝じつとしてはいられなくなつたと見えて、さつそく彼女が朦朧状態したた中に認めしたたた、自署の件くだり（グッテンベルガー事件に先例のある潜在意識的署名）を持ち出した。そして、それを手短に語り終えるとと開き直つて、厳しく伸子の開口を迫るのだった。

「いいですか。僕等が訊きたいのは、僅たつたそれだけです。どんなに貴女を、犯人に決定したくなくも、



つまるところは、結論が逆転しない限りやむを得ません。つまり、要点はその二つだけで、それ以外の多くを訊ねる必要はないのです。これこそ、貴女にとれば一生浮沈の瀬戸際でしょう。重大な警告と云う意味を忘れんように……」と沈痛な顔で、まず熊城が急迫気味に駄目を押すと、その後を引き取って、検事が諭すような声で云った。

「勿論ああいう場合には、どんなに先天的な虚妄者うそつきでも、除外する訳にはゆきません。それでさえ、精神的には完全な健康になつてしまふのが、つまりあの瞬間

にあるのですからね。サア、そのXエツキスの実数を云つて下さい。降矢木旗太郎……たしかに。いや、いったいそれは誰のことなんです？」

「降矢木……サア」と幽かに呟つぶやいただけで、伸子の顔がみるみる蒼白になつていった。それは、魂の底で相打っているものでもあるかのような、見るも無残な苦闘だつた。しかし、五、六度生唾なまつばを嚙のみ下しているうちに、サツと智的なものが閃ひらめいたかと思うと、伸子は高い顫ふるえを帯びた声で云つた。「ああ、あの方に御用が  
おありなのでしょうか。それでしたら、鍵盤キイのある劔く

り込みの天井には、冬眠している蝙蝠こうもりがぶら下つておりました。また、大きな白い蛾が、まだ一、二匹生き残っていたのも知っておりますわ。ですから、冬眠動物の応光性トロピズムさえ御承知でいらつしやいますのなら……。そうして光さえお向けになれば、あの動物どもはその方へ顔を向けて、何もかも喋しゃべつてくれるでしょうからね。それとも、この事件の公式どおりに、それが算哲様だった——とでも申し上げましょうか」

伸子は、毅然きぜんたる決意を明らかにした。彼女は自身の運命を犠牲にしてまでも、或る一事に緘黙かんもくを守ろう

とするらしい。

しかし、云い終ると何故であろうか、まるで恐ろしい言葉でも待ち設けているように、堅くなつてしまつた。恐らく、彼女自身でさえも、嘲侮の限りを尽している自分の言葉には、思わず耳を覆いたいような衝動に駆られたことであろう。熊城は唇をグイと噛み締め、憎々しげに相手を見据えていたが、その時法水の眼に怪しい光が現われて、腕を組んだままズシンと卓上に置いた。そして、いかにも彼らしい奇問を放つた。

「ああ、算哲……。あの凶兆の鋤——すきスペードの王様キング」

をですか」

「いいえ、算哲様なら、ハートの王様キングでございましたわ」と伸子は反射的にそう云った後で、一つ大きな溜息を吐きました。

「なるほど、ハートなら、愛撫と信頼でしょうが」と瞬間法水の眼が過敏そうに瞬またたいたが、「ところで、その告げ口をするという蝙蝠こうもりですが、いつたいそれは、どつちの端にいたのですか」

「それが、鍵盤キイの中央から見ますと、ちようどその真上でございましたわ」と伸子は躊ためらわずに、自制のある

調子で答えた。

かたわら

「しかし、その側には、好物の蛾がいたのです。けれどもその蛾が、あくまで沈黙を守っている限りは、よもや残忍な蝙蝠だつて、むだに傷つけようとはいたすまいと思えますわ。ところが、その寓喩は、アレゴリー実際とは反対なのでございました」

「いや、そういう童話めいた夢ならば、改めてゆつくりと見てもらうことにしよう——今度は監房の中でだ」と熊城が毒々しげに嘯くと、うそいふ法水はそれを窺めるたしなように見てから、伸子に云つた。

「お構いなく続けて下さい。元来僕は、シエレイの妻

君（メリー・ゴドウィン——詩人シエレイの後妻「フランケンシュタイン」の作者）

みたいな作品は大嫌いなのです。ああいう内臓の分泌を促すような感覚には、もう飽き飽きしているのですからね。ところで、その白羽のボアが揺いだのは？

それが鐘鳴器室カリリヨンのどんな場面で、貴女に風を送りましたね」

「實際を申しますと、その蛾は遂々とうとう、蝙蝠の餌食えじきになつてしまったのでございます。何故なら、私にあの難行をお命じになつたのが、クリヴオフ様なんのでございま

すものね。——それも、独りで三十櫓楼船を漕げつて」と瞬間、冷たい憤怒が伸子の面を掠めたけれども、それはすぐに、跡方もなく消え失せてしまった。そして続けた。

「だって、いつもならレヴェズ様がお弾きになるあの重い鐘鳴器カリリヨンを、女の私に、しかも三回ずつ繰り返せよと仰言おっしゃつたのです。ですから、最初弾いた経文歌モテットの中頃になると、もう手も足も萎なえきつてしまつて、視界がしだいに朦朧となつてまいりました。その症状を、久我さんは微弱な狂妄——と仰言います。病理的な情



熱の破船状態だと云います。その時は、必ず極端に倫理的なものが、まるで軍馬のように耳を敲そぼだてながら身を起してくる——と申されます。しかもそれが、最高淨福の瞬間だそうですけども、けっして倫理的ではある代りに道徳的モラリツシユではなく、そこにまた、殺人の衝動をいな否むことは出来ぬ——とあの方は仰言いました。ああ、これでも、貴方がお考えになるような、詩的な告白なのでございましょうか」と熊城に冷たい蔑視を送つてから、当時の記憶を引き出した。

「で多分、こういう現象の一部に当るのでしょうか、自

分では何を弾いているのか無我夢中のくせに、寒風が私の顔を、斑まだらに吹き過ぎて行くことだけは、妙に明瞭はっきりと知ることが出来ましたものね。云わば、冷痛とでもいう感覚でしたでしょう。けれども、絶えずそれが、明滅を繰り返しては刺激を休めなかつたので、ようやく経文歌モテットの三回目を終えることが出来ました。それから、手を休めている間も同じことでございます。階下したの礼拝堂から湧き起ってくる鎮魂楽レキエムの音ねが、セロ・ヴィオラと低い絃げんの方から消えはじめていつて、しだいに耳元から遠ざかって行くのでしたか……、かと思

うと、それがまた引き返して来て、今度は室内一杯に、ほうはく磅礴と押し拡がってしまふのでした。しかし、そのリズムカル律動的な、まるで正確なメトロノームでも聴くような繰り返しが、しだいに疲労の苦痛を薄らげてまいりました。そして、非常に緩慢ではございましたけれども、だんだん徐々と私を、快い睡気の中へ陥し込んでいったのです。ですから、曲が終つて、私の手足が再び動きはじめてからも、私の耳には、チャベル鐘の音は聴えず、絶えずあの音おんを持たない、快い律動リズムだけが響いてくるのでした。ところが、その時でございます。突然私の顔の右側に、

打ち衝ぶつてきたものがありました。すると、その部分あに燦衝きんしょうが起つて、かつと燃え上つたように熱っぽく感じました。けれども、その刹那、身体が右の方へ捻ねじれていって、それなり、何もかも判らなくなつてしまつたのです。その瞬間でございましたわ——私が、刳くり込みの天井に蛾を見たのは。しかし、今朝がた行つて見ますと、その蛾はいつのまにか見えなくなつていて、ちようどその場所には、蝙蝠が素知らぬ気な顔でぶら下つているだけでした」

伸子の陳述が終ると同時に、三人の視線が期せずし

て、打衝ぶつかつた。しかもそれには、名状の出来ぬ困惑の色が現われていた。と云うのは、伸子に発作の原因を作らせたと目される、鐘鳴器カリラロンの演奏を命じた人物と云うのが、誰あろう、つい先頃皮肉な逆転を演じたところの、クリヴオフ夫人だったからだ。のみならず、伸子の云うがごとくに、はたして右の方へ倒れたとすれば、当然廻転椅子に現われた疑問が、さらに深められるものと云わねばならない。熊城は、狡猾ずるそうに眼を細めながら訊ねた。

「そうなつて、貴女の右側から襲つたものがあるとい

うことになる、ちやうどそこには、階段を上つて突き当りの扉ドアがありましたっけね。とにかく、くだらん自己犠牲はやめにした方が……」

「いいえ私こそ、そんな危険な遊戯ゲームに耽ふけることだけはお断りいたしますわ」と伸子は、あくまで意地強い態度で云い切つた。

「真平まっぴらですわ——あんな恐ろしい化竜ドラゴンに近づくなんて。

だつて、お考え遊ばせな。たとえば私が、その人物の名を指摘したといたしまししょう。けれども、そんな浅墓あさはかな前提だけでもつて、どうして、あの神秘的な力

に仮説を組み上げることがお出来になりました。かえって私は、鎧通し——という重大な要点に、貴方がたの法律的審問を要求したいのです。いいえ、私自身でさえ、自身が類似的には犯人だと信じているくらいですわ。それに、今日の事件だってそうですわ。あの赤毛の猿猴公えてこうが射られた狩猟風景にだって、私だけには、不在証明アリバイというものがございませんものね」

「それは、どういう意味なんです？　いま貴女は、赤毛の猿猴公えてこうと云われましたね」と検事は注意深そうな眼をして聴き咎とがめたが、秘かに心中では、案外この娘は

「それが、また厳粛な問題なんですわ」伸子は口辺を歪こうへんめて、妙に思わせぶりな身振をしたが、額には膏汗あぶらあせを浮かせていて、そこから、内心の葛藤が透いて見えるように思われる。いかに、絶望から切り抜けようと腕もがいているか——すでに伸子は、渾身の精力こんしんを使い尽していて、その疲労の色は、重たげな瞼の動きうかがに窺うかがわれるのだった。しかし、彼女はズケズケと云い放った。「だいたいクリヴオフ様が殺されようたつても、悲しむような人間は一人もいないでしょうからね。ほんと



うに、生きていられるよりも殺されてくれた方が……。その方がどんなに増しだと思つてゐる人は、それは沢山あるだろうと思ひますわ」

「では、誰だかその名を云つて下さい」熊城はこの娘の翻弄ほんろうするよゝうな態度に、充分な警戒を感じながらも、思はずこの標題には惹ひきつけられてしまった。「もし特に、クリヴオフ夫人の死を希つてゐるよゝうな人物があるのなら」

「たとえば私がそゝうですわ」伸子が臆する色もなく言下に答えた。「何故なら、私が偶然にその理由を作つて

しまったからでございます。以前内輪にだけでしたけれども、算哲様の御遺稿を、秘書である私の手から発表したことがございました。ところがその中に、クミエルニツキー大迫害に関する詳細な記録があつたのでございます。それが……」と云いかけたままで、伸子は不意に衝動を覚えたような表情になり、キツと口を噤んだ。そしてややしばらく、云うまい云わせようとの苦悶と激しく闘っていたらしかつたが、やがて、「その内容は、どうあつても私の口からは申し上げられません。しかし、その時から、私がどんなに惨めになつ

たことでしょうか。無論その記録は、その場でクリ  
ヴオフ様がお破り棄てになりましたけど、それ以後の  
私は、あの方の自前勝手な敵視をうけるようになった  
のでございます。今日だってそうですわ。たかが、窓  
を開けるだけに呼びつけておいて、あの位置にするま  
でに、それは何度上げ下げしたことだったでしょう」

クメルニツキーの大迫害——。その内容は三人の中  
で、ただ一人法水だけが知っていた。すなわち、十七  
世紀を通じて頻繁ひんぱんに行われたと伝えられる、カウカサ  
ス猶太人迫害中での最たるもので、それを機縁に、コ

ザツクと猶太人の間に雑婚が行われるようになったのである。しかし、クリヴオフ夫人が猶太人であることユダヤは、すでに彼が観破したところであるとは云え、その破られた記録の内容というのに、なんとなく心を惹ひくものがあつたのは、当然であろう。その時一人の私服が入つて来て、津多子の夫——押鐘医学博士が、来邸したという旨を告げた。押鐘博士には、かねて福岡に旅行中のところを、遺言書を開封させるため、唐突な召喚を命じたというほどだったので、ここでひとまず、伸子の訊問を中断しなければならなかった。そこで法

水は、ダンネベルグ事件を後廻しにして、さっそく今日の動静について知ろうとした。

「ところで、既往の問題はのちほど改めて伺うとして……。今日の出来事当時に、貴女あなたは何故自分の不在証明アリバイを立てることが出来なかつたのです」

「何故つて、それが二回続きの不運なんですわ」と伸子はちよつと愚痴を洩らして、悲しそうに云つた。

「だって私は、あの当時ボルケン・ハウス樹皮亭（本館の左端近くにあり）の中にいたんですもの。あそこは美男桂びなんかつらの袖垣に囲まれていてどこからも見えはいたしませんわ。それに、クリ

ヴオフ様が吊された武具室の窓だつても、ちようどあの辺だけが、美男桂の籬いけがきに遮られているのです。ですから、ああいう動物曲芸のあつた事さえ、私はてんで知らなかつたのです」

「でも、夫人の悲鳴だけは、お聴きになつたでしょうな」

「勿論聴きましたとも」それがほとんど反射的だつたらしく、伸子は言下に答えた。けれどもその口の下から、異様な混乱が表情の中に現われてきて、俄然ふる声に慄えを帯びてきた。

「ですけど、どうしても私は、あの樹皮亭ポルケン・ハウスから離れることが出来なかつたのです」

「それは、また何故にです？　だいたいそういう事が、

根もない嫌疑を深めることになるんですぞ」熊城はこ

こぞと厳しく突っ込んだが、伸子は唇を痙攣けいれんさせ、両

手で胸を抱いてからくも激情を圧えていた。しかし、

その口からは、氷のように冷やかな言葉が吐かれた。

「どうしても、申し上げることには出来ません——この

事は何度繰り返しても同じですわ。それより、ちよう

どクリヴォフ様が、悲鳴をおあげになる一瞬ほど前の

ことでしたが、私はあの窓の側かたわらに、実は不思議なものがいるのを見たのですわ。それは、色のない透明すきとおつたものが光っているようでいて、そのくせどうも形体かたちの明瞭はつきりとしていない、まるで気体のようなものでした。ところが、その異様なものは、窓の上方の外気の中から現われて来て、それがふわふわ浮動しながら、斜めにあの窓の中へ入り込んで行くのでした。その一瞬後に、クリヴオフ様が裂くような悲鳴をおあげになりましたうかがと伸子は、まざまざ恐怖の色を泛うかべて、法水の顔を窺うかがうように見入るのだった。「最初私は、レヴェズ



ウオーター・サーブライズ

様があの際にいらつしやつたので、あるいは、  
驚駭噴泉の飛沫かなとも思いました。でも考えてみ  
ますと、だいたい微風さえもないのに、飛沫が流れる  
という気遣いきづかはございませんわね」

「ふん、またお化かばけ」と検事は顔を顰しかめて呟つぶやいたが、同  
時に唇の奥で、それとも伸子の虚言うそか——と付け加え  
たのは当然であろう。しかし、熊城はただならぬ決意  
を泛うかべて立ち上った。そして、厳然と伸子に云い渡し  
たのだった。

「とにかく、この数日間の不眠苦悩はお察ししますが、

しかし今夜からは、充分よく眠られるように計らいましょう。だいたい、これが刑事被告人の天国なんですよ。捕縄で貴女の手頸てくびを強く緊めるんです。そうすると、全身に気持のよい貧血が起つて、しだいにうとうととなつてゆくそうですからな」

その瞬間、伸子の視線がガクンと落ちて、両手で顔を覆い、卓上に俯伏うつぶしてしまった。ところが、続いて警察自動車を呼ぼうとし、熊城が受話器を取り上げた時だった。法水は何と思つたか、その紐線コードに続いている、壁の差込みプラグをポンと引き抜いて、それを伸子の掌

の上に置いた。そうしてから、啞然となつた三人を尻眼にかけ、陶然と彼の着想を述べたのである。ああ、事態は再び逆転してしまつたのだつた。

「実は、その——貴女にとって不運なお化が、僕に詩想を作つてくれました。これがもし春ならば、あの辺は花粉と匂いの海でしょう。しかし、裏枯れた真冬でさえも、あの噴泉と樹皮亭ポルケン・ハウスの自然舞台——それが僕に貴女の不在証明アリバイを認めさせたのです。貴女もクリヴオフ夫人も、あの渡り鳥ワンダー・フォーゲル……虹によつて救われたのですよ」

「ああ、虹とは……。貴方は何を仰おっしや言るのです」伸子は突然弾ね上げたように身体を起して、涙で霑うるんだ美しい眼を法水に向けた。しかし、一方その虹は、検事と熊城を絶望の淵に叩き込んでしまった。恐らく二人にとれば、その刹那せつなが、あらゆる力の無力を直感した瞬間であつたらう。けれども、その法水が持ち出した、華やかに彩色濃く響の高い絵には、どうしても魅了せずにはおかない不思議な感覚があつた。法水は静かに云つた。

「虹……まさにそれは、革鞭かわむちのような虹でした。です

が、犯人を気取つてみたり、久我鎮子の銜学的な仮面ペダンティックを被つけたりしている間は、それに遮られていて、あの虹を見ることが出来なかつたのです。僕は心から苦難をきわめていた貴女の立場に御同情しますよ」

「では、久我さんの言ことばを借りれば——動機モチフ・ワンデル変転。ねえ、

そうでございましょう。でも、そんな限取りは、もう

既とうに洗い落してしまいましたが。偽悪ペダントリー、銜学……そう

いう悪徳は、たしか、私には重過ぎる衣裳でしたわね」と第一日以来鬱積しきつていたものが、彼女の制御を跳ね越えて一時に放出された。伸子の身体がまるで小

鹿のように弾み出して、両腕を水平に上げ、その拳こぶしを  
両耳の根につけて、それを左右に揺ぶりながら、喜悅よろこばしき  
に恍惚うっとりとなつた瞳で、彼女は宙になんという文字を書  
いていたことであらう。意外にも思いもよらなかつた  
歡喜の訪れが、伸子をまつたく狂氣のようにしてし  
まつたのである。

「ああ眩まぶしいこと……。私、この光が、いつかは必ず来  
ずにはいないと……。それだけは固く信じてはいました  
けれど……。でも、あの暗さが」と云いかけて、伸子は  
見まいとするもののように眼を瞑つむり、首を狂暴に振つ

た。「ええ何でもして御覧に入れますとも。踊ろうと逆立ちしよう」と——と立ち上つて、波蘭輪舞マズルカのような $\frac{3}{4}$ 拍子を踏みながら、クルクル独楽こまみたくに旋廻を始めたが、卓子の端にバツタリ両手を突くと、下つたかみのけ髪の毛を蓮葉はすつばに後の方へ跳ね上げて云つた。「でも、カリルロン鐘鳴器室の真相と、ボルケンハウス樹皮亭から出られなかつたことだけ、どうかお訊きにならないで。だって、この館の壁には、不思議な耳があるんですもの。それを破つた日には、いつまで貴方の御同情をうけていられるか、怪しくなつてまいりますわ。サア、次の訊問を始めて

「頂だい」

「いや、もうお引き取りになつても。まだ、ダンネベルグ事件について、参考までにお訊きしたい事はあるのですが」と法水はそう云つて、いつまでも狂喜の昂奮から、去ることの出来ない伸子を引き取らせた。長い沈黙と尖つた黒い影——彼女が去つた後の室内は、ちようど颱風一過後の観であつたがそこにはなんとも云えぬ悲痛な空気が漲みなぎつていた。何故なら、彼等は伸子の解放を転機として、もはや人間の世界には希望を絶たれてしまつたからだ。あの物凄じい黒死館の底流



——些細な犯罪現象の個々一つ一つにさえ、影を絶たないあの大魔力に、事件の動向は遮しやにむに二無二傾注されてゆくのではないか。熊城は顔面を怒張させて、しばらくキリキリ齒齧みをしていたが、突然法水が引き抜いた差込みブラグを床に叩きつけた。そして、立ち上つて荒々しく室内を歩き廻っていたが、それに、法水は平然と声を投げた。

「ねえ熊城君、これでいよいよ、第二幕が終つたのだよ。もちろん、文字どおりの迷宮混乱紛糾しよつばなさ。だがしかしだ、たぶん次の幕の冒頭しよつばなにはレヴェズが登場して、そ

れから、この事件は、急降的に破局へ急ぐことだろう

よ」

「解決——莫迦ぼかを云い給え。僕はもう、辞表を出す気力さえなくなっているんだぜ。たぶん最初から、ト書に指定してあるんだろう。第二幕までは地上の場面で、三幕以後は神筮降霊しんせいこうれいの世界だ——とでも」と熊城は銷沈しょうちんしたように呟くのだった。「とにかく、後の仕事は、君が珍藏する十六世紀前紀本イシキユナプラでも漁あさることだ。そして、僕等の墓碑文を作ることなんだよ」

「うん、その十六世紀前紀本イシキユナプラなんだがねえ。実は、それ

に似た空論が一つあるのだよ」と検事は沈痛な態度を失わず、詰なじるような険けわしさで法水を見て、「ねえ法水君、虹の下を枯草を積んだ馬車が通った。——そして、木靴を履いた娘が踊ったのだ、——すると、この事件には一人の人間もいなくなつてしまつたのだよ。僕にはどうしても、この牧歌的風景の意味が判らないのだ。だいたいその虹——と云うのは、いつたいどういう現象カタクレエスの強喩法なんだね」

「冗談じゃない。けつしてそれは文典でも——詩でもない。勿論、類推でも照応でもないのだよ。実際に真

正の虹が、犯人とクリヴオフ夫人との間に現われたのだがね」と法水が、未だに夢想の去りきららない、熱っぽい瞳を向けたとき、扉が静かに開かれた。そして、突然何の予告もなしに、久我鎮子の瘠せた棘々しい顔とげとげが現われた。その瞬間、グイと息詰るようなものが迫ってきた。恐らくこの学識に富み、中性的な強烈な個性を持った神秘論者は、人間には犯人を求めようものなくなつた異様な事件を、さらにいつそう暗澹あんたんたるものとするに相違ないのである。鎮子は軽く目礼を済ますと、いつものように冷淡な調子で云つた。が、その

内容はすこぶる激越なものだった。

「法水さん、私、まさかとは思いますが、ですけど、貴方はあの渡り鳥のことを、無論そのままお信じになつてゐるのじゃございませうまいね」

ワンダー・フォーゲル

「渡り鳥!?」法水は奇異の眼を睜みはつて、咄嗟とつさに反問

した。つい今し方、自分が虹の表象として吐いた言葉が、偶然かは知らぬが、鎮子によつて繰り返されたからである。

「さよう、生き残つた三人の渡り鳥のことですわ」そう吐き捨てるように云つて、鎮子は凝然じいつと法水の顔を正

視した。「つまり、ああいう連中がどういいう防衛的な策動に出ようと、津多子様は絶対に犯人ではございません——私はそれをあくまで主張したいのです。それに、あの方は、今朝がたから起き上つてはいただけますけど、まだ訊問に耐えるというほどには恢復かいふくしておられないのです。貴方なら、御存じでいらつしやいませしょう

——抱水クロラールの過量がいったいどういう症状を起すものか。とうてい今日一日中では、あの貧血と視神の疲労から恢復することは困難なのでございます。

いいえ私は、あの方にメアリー・スチュアート（十六世紀

スコットランドにおける聖女のような女王。後に女王エリザベスのため断頭に処せら

る——一五八七年二月八日）の運命がありそうに思われて……。

つまり貴方の偏見が危惧あやぶまれてならないのですわ」

「メアリー・スチュアート!?」法水は突然興味に唆そそられ

たらしく、半身を卓上に乗りに出した。「そうすると、あ

の善良過ぎるほどのお人良しを云うのですか、それと

も、女王クイーンエリザベスの権謀奸策を……あの三人に」

「それは、両様の意味でです」鎮子は冷然と答えた。

「御承知とは存じますが、津多子様の御夫君押鐘博士

は、御自身経営になる慈善病院のために、ほとんど私

財を蕩尽とうじんしてしまいました。それなので、今後の維持

のためには、どうあつてもあの隻眼せきがんを押してまで、津

多子様は再び脚光を浴びなければならなくなつたので

す。恐らくあの方のうける喝采が、医薬に希望を持て

ない何万という人達を霑うるおすことでしよう。まったく、

人を見ること柔和なるものは恵まれるでしょうが、そ

うかと云つて、さねど門に立てる者は人を妨ぐ——で

すわ。法水さん、貴方はこのソロモンの意味がお判り

になりました。あの門——つまりこの事件に凄惨な光

を注ぎ入れている、あの鍵孔のある門の事ですわ。そ



ここに、黒死館永生の秘鑰ひやくがあるのです」

「それを、もう少し具体的に仰言おっしゃつて頂けませんか」

「それでは、シユルツ（フリッツ・シユルツ——。前世紀独逸（ドイツ）の心理学者）の精神萌芽ブシアーデ説（この説は、狂信的な精神科学者特有のもので、一

種の輪廻説である。すなわち、死後肉体から離れた精神は、無意識の状態となって永存する。それは非常に低いもので意識を現わすことは不可能だが、一種の衝動作用を生む力はあると云う。そして、生死の境を流転して、時折潜在意識の中にも出現すると称えるけれども、この種の学説中での最も合理的な一つである。）を御存じでいらつしやいませうか。私だつても、確実な論拠なしには主張しはいたしません」とはたして大風な微

笑を泛<sup>うか</sup>べて、鎮子は再び、この事件に凄風を招き寄せた。

「な、なに、精神萌芽<sup>ブシアーデ</sup>説を!？」と法水は、突然凄じい形相になり、吃<sup>ども</sup>りながら叫んだ。「では、その論拠はどこにあるのです……。貴女は何故、この事件に生命不滅論を主張されるのですか。すると、算哲博士が未だに不可解な生存を続けているとしても、それとも、クロード・デイグスビイが……」

精神萌芽<sup>ブシアーデ</sup>——その薄気味悪い一語は、最初鎮子の口から述べられ、続いて法水によつて、それに不死説と

いう註釈が与えられた。勿論その二点を脈関しているものは、この事件の底で、暗の中に生長しては音もなく拡がってゆき、しだいに境界を押し広めていったものに相違なかつた。が、折が折だけに、検事と熊城には、今やその恐怖と空想が眼前において現実化されるような気がして、思わず心臓を掴み上げられたかの感じがするのだつた。しかし、一方の鎮子にも、法水の口からデイグスビイの名が吐かれると、あたかも謎でも投げつけられたように、懐疑的な表情が泛<sup>うか</sup>んできて、それが、彼女の心を確<sup>しつ</sup>かと捉えてしまったもののように

に見えた。だいたい、憑着性の強い人物というものは、一つの懷疑に捉えられてしまうと、ほとんど無意識に近い放心状態になつて、その間に異様な偶発的動作が現われるものだ。ちようどそれに当るものか、鎮子は左の中指に嵌めた指環を抜き出しては、それをクルクル指の周囲で廻しはじめ、また、抜いてみたり嵌めてみたりして、頻りと神経的な動作を繰り返しているのだつた。すると、法水の眼に怪しい光が現われて、その一瞬声の杜絶えた隙に立ち上つた。そして、両手を後に組んだまま、コツコツ室内を歩きはじめたが、

やがて鎮子の背後に来ると、突然爆笑を上げた。

「ハハハハ、莫迦<sup>ぼか</sup>らしいにもほどがある。あのスピー  
ドの王様<sup>キング</sup>が、まだ生きているなんて」

「いいえ、算哲様なら、ハートの王様<sup>キング</sup>なのでございま  
す」と鎮子はほとんど反射的に叫んだが、と同時にま  
た、ハツとしたらしく恐怖めいた衝動が現われて、い  
きなりその指環を、小指に嵌め込んでしまった。そし  
て、大きく吐息を吐いて云った。「しかし、私が  
精神萌芽<sup>プシアーデ</sup>と申しましたのは、要するに寓喩<sup>アレゴリー</sup>なのでござ  
います。どうぞ、それを絵画的<sup>ピトレスク</sup>にはお考えあそばされ

ないで。かえつてその意味は、エツクハルト（ヨハン。一

二六〇——一三二九年。エルフルトのドミニカン僧より始め、中世最大の神秘家と云

ガイスチヒカイト

われた汎神論神学者）の云う靈性の方に近いのかもしれない

せんわ。父から子に——人間の種子が必ず一度は流転

せねばならぬ生死の境、つまり、暗黒に風雨が吹き荒

ヴェステ

ぶ、あの荒野のことですわ。もう少し具体的に申し上

げましようか。吾等が悪魔を見出し得ざるは、その姿

が、全然吾等が肖像の中に求め得ざればなり——と、

ユーベルウエゼントリッヒ

勿論、この事件最奥の神秘は、そういう超本質的な

——形容にも内容にも言語を絶している、あの

フィロゾフエン・ウエーヒ

哲学 径の中にあるのです。法水さん、それは地獄の円柱を震い動かすほどの、酷烈な刑罰なのでございますわ」

「ようく判りました。何故なら、その哲学 径の突き当りには、すでに僕が気づいている、一つの疑問があるからです」と法水は眉を上げ昂然と云い返した。

「ねえ久我さん、聖<sup>サン</sup>ステファノ条約でさえも、猶太人の待遇には、その末節の一部を緩和したにすぎなかつたのです。それなのに何故、<sup>どうして</sup>迫害の最もはなはだしいカウカサスで、半村区以上の土地領有が許されていたの

でしよう。つまり、問題と云うのは、その得体の知れない負数にあるのですよ。しかし、その区地主くじぬしの娘であると言ふこの事件の猶太人ジユウは、ついに犯人ではありませんでした」

その時、鎮子の全身が崩れはじめたように戦おのきだした。そしてしばらく切れぎれに音高い呼吸を立てていたが、「ああ怖ろしい方……」とからくも幽かな叫び声をたてた。が、続いてこの不思議な老婦人は、たまりかねたように犯人の範囲を明示したのであった。「もう、この事件は終わったも同様です。つまり、その負数



の円のことですわ。動機をしつくりと包んでいるその

ペンタグラムマ

五芒星円には、いかなるメフィストといえども潜り込

すき

む空隙はございませぬ。ですから、いま申し上げた

あれの

荒野の意味がお判りになれば、これ以上何も申し上げ

ることはないのでございませぬ」と不意立ち上いきなりがろうと

するのを、法水は慌てて押し止めて、

「ところが久我さん、その荒野と云うのは、なるほど

テオロギヤ・ゲルマニカ

独逸神学の光だったでしょう。ですが、その運命論

フエータリズム

は、かつてタウラーやゾイゼが陥ち込んだ偽にせの光なの

です。僕は、貴女が云われた精神萌芽説ブシアーデの中に、一つ

の驚くべき臨床的な描写があるのを、まるで、聴いて  
さえ狂い出しそうな、異様なものを発見したのでした。  
貴女は何故、算哲博士の心臓のことを考えていられる  
のですか、あの<sup>デモーン・ガイスト</sup>大魔霊を……ハートの<sup>キング</sup>王様とは。ハ  
ハハ久我さん、僕はラファテールじやありませんが  
ね。人間の内観を、外貌によつて知る術<sup>すべ</sup>を心得ている  
のですよ」

算哲の心臓——それには、鎮子ばかりでなく検事も  
熊城も、瞬間化石したように硬くなつてしまった。そ  
れは明らかに、心の支柱を根柢から揺り動かすはじめ

た、恐らくこの事件最大の戦慄せんりつであつたらう。しかし鎮子は、作り付けたような嘲りの色うかを泛べて云つた。

「そうすると、貴方はあの瑞西スイスの牧師と同様に、人間と動物の顔を比較しようとなさるのですか」

法水は徐ろおもむに荏たほこに点火してから、彼の微妙な神経を明らかにした。すると、それまでは百花千弁の形で分散していた不合理の数々が、みるみる間にその一点へ吸い着けられてしまったのである。

「あるいはそれが、過敏神経の所産にすぎないかもしませんが、しかしともあれ貴女は、算哲博士のこと

をハートの王様キングと云われましたね。無論それから、異様に触れてくる空気を感じたのです。何故かと云うと、ちようどそれと寸分たが違わぬ言葉を、僕は伸子さんの口からも聴いたからでした。恐らく、その暗合には、この事件最後の切札とする価値があるでしょう。これまで僕等が辿たどつていった、推理測定の正統を、根柢くつがえから覆くつがえしてしまふほどの怪物かもしれないのですよ。ことに、貴女の場合は、それに黙劇パントマイムじみた心理作用が伴ったので、それに力を得て、なおいつそう深く、貴女の心像えいを抉えぐり抜くことが出来たのでした。ところで、

ウインナ  
 維納新心理派に云わせると、それを徴候発作ジムプトム・ハンドルンゲンと云

うのですが、目的のない無意識運動を続けている間は、

最も意識下のものが現われ易い——言ことばを換えて云えば、

人に知らせたくない、自分の心の奥底しまに蔵しまっておきた

いものが、何かの形で外面の表出の中に現われるか、

それとも、そこに何か暗示的な衝動を与えられると、

それに伴った聯想的な反応が、往々言語の中にも現わ

れることがあると云うのです。その暗示的衝動と云う

のはほかでもない、算哲のことを、僕がスペードの

王様キングと云ったことなんですよ。しかし、それ以前に、

デイグスビイも——と云つた僕の一言が、端なくデイグスビイの本体を知らない貴女あなたの心を捉えてしまつたのです。そして、無意識の裡うちに、指環を抜いてみたり嵌はめてみたり、またクルクル廻したりするような、徴候発作が貴女に現われていきました。そこで僕は、妙に心を唆そそるような間パウゼを置いたのです。その間パウゼです——それはただに演劇ばかりでなく、ことに訊問において必要なのですよ。ねえ久我さん、犯人は台本作家ではある代りに、けつして一行のト書だつて指定しやしません。その意味で、捜査官というものは、何よりよき

演出者であらねばならないのです。いや、冗弁は御勘弁下さい。何より御詫びしておきたいのは、僕は貴女の御許しを俟たまずに、心像奥深くを探つて闖入ちんにゆうしていったのですから……」

そこで、法水は、新しい莩たほこを取り出して、その誇るべき演出の描写を繰り広げていった。

「しかし、その間パウゼは混沌たるものです。けれども、その中には様々な心理現象が十字に群がっていて、まるで入道雲のように、ムクムク意識面を浮動しているのです。その状態は、そこに何か衝動さえ与えられれば、

恐らくひとたまりもないほど脆弱もろろいものだったに違ちがいありません。そこで僕は、スペードの王様キングという言ことばを出したのです。何故なら、精神全体を一つの有機体だとすれば、当然そこから、物理的に生起して来るものがなければならぬからです。その非常に暗示的な一言によつて、僕は何かしらの反応を期待しました。すると、はたして貴女あなたは、僕の言葉をハートの王様キングと云い直しました。まさにそのハートの王様キングです。僕はその時、狂乱に等しい異常な啓示を受けたのでしたよ。しかし、続いて貴女には、二度目の衝動が現われて、突



然度を失い、思わず指環を小指に嵌め込んでしまったのです。どうして僕が、その時の、恐怖の色を見遁しましようか」と鋭く途中で言葉を裁ち切りながら、法水の顔が慄然たるものに包まれていった。

「いや、僕の方こそ、もつともつと重苦しい恐怖を覚えたのですよ。何故なら、骨牌札を見ると、その人物像はどれもこれも、上下の胴体が左削ぎの斜めに合わさっていて、それぞれに肝腎な心臓の部分が、相手の美々しい袖無外套の蔭に隠れているからです。そして、その——画像から失われた心臓が、右側の上端に、絵

印となつて置かれていたではありませんか。そうなる  
と、あるいは僕の思い過ぎかもしれませんが、その中  
で輝いている凄惨な光をどうして看過みがす訳にゆきま  
しょうか、ああ、心臓は右に。ですから、もし、ハート  
の王様キングという一言を、貴女の心臓が語るとおりに解釈  
して、算哲博士を右側に心臓を持った特異体質者だと  
すればです。あるいはそれが、支離散滅をきわめてい  
る不合理性の全部を、この機会に一掃してしまふ曙光しやうこう  
ともなり得ましょう」

この驚くべき推定は、かつての押鐘津多子を発掘し

たことに続いて、実に事件中二回目の大芝居だった。その超人的論理に魅了されて、検事も熊城も、痺しびれたような顔になり、容易に言葉さえ出ないのだった。勿論そこには、一つの懸念けねんがあつた。けれども、続いて法水は例証を挙げて、それに薄気味悪い生気を吹き込むのだった。

「ところで、それがもし事実だとしたら、僕等はどうして平静ではいられなくなってくるのです。何故なら、あの当時算哲博士は、左胸の左心室——それもほとんど端れに当る部分を刺し貫いていたのですが、あまり

に自殺の状況が顕著だったために、その屍体に剖見を要求するまでには至らなかったのです。そうなる第一の疑問は、左肺の下葉部を貫いたところで、それがはたして、即死に価するものかどうか——という事です。その証拠には、外科手術の比較的幼稚だった南亞戦争当時でさえも、後送距離の短い場合は、そのほとんど全部が快癒しているのですからね。そうそう、その南亞戦争でしたが……と法水は苺の端をグイと噛み締めて、声音を沈めむしろ怖れに近い色を泛べた。

「ところで、メイキンスが編纂した、『南亞戦争軍陣医

『学集録』という報告集があるのですが、その中に、ほとんどの算哲の場合を髻鬚ほうふつとする奇蹟が挙げられているのですよ。それは、格闘中右胸上部に洋剣サーベルを刺されたままになっていた竜騎兵伍長が、それから六十時間後に、棺中に蘇生したと云うのです。しかし、編者である名外科医のメイキンスは、それに次のような見解を与えました。——死因は、たぶん上大静脈を洋剣サーベルの背で圧迫したために、脈管が一時狭窄きょうさくされて、それが心臓への注血を激減させたに相違ない。しかし、その鬱血腫脹している脈管は、屍体の位置が異なったりする

たびに、血胸血液が流動するので、それがため、一種物理的な影響をうけたのであろう。つまり、その作用と云うのは、往々に屍体の心臓を蘇生させることのある、ある種の摩擦マツサージに類したものだと思われる。何故なら、元来心臓と云うものは理学的臓器であり、また、ブラウンセカール教授の言のごとく、恐らく絶命している間でも、聴診や触診ではとうてい聴き取ることの出来ぬ、かすか細微な鼓動が続いていたに相違ないのだから（巴里大学教授ブラウンセカールと講師シオは、人体の心臓を聞いてそれがなお鼓動を続けていたという数十例を報告している。すなわち、心臓がなお充分な力を

持っていることを証明するのであって、換言すれば、それは心動の完全な停止を証明しないのである。勿論その鼓動は、外部では聴えない——とメーキンスはこういう推断を下しているのです。そうなると久我さん、僕はこの疑心暗鬼を、いつたいどうすればいいのでしようか」

と法水は、算哲の心臓の位置が異なっていることから、死者の再生などと云うよりも、もつともつと科学的論拠の確かな、一つの懸念を濃厚にするのだった。が、その時、心中で凄愴せいそうな黙闘もくとうを続けていた鎮子に、突如必死の気配きらいが閃ひらめいた。あくまで真実に対して良心

的な彼女は、恐怖も不安も何もかも押し切ってしまったのだった。

「ああ、何もかも申し上げましょう。いかにも算哲様は、右に心臓を持った特異体質者でございました。ですけれど、何より私には、算哲様が自殺なされるのに、右肺を突いたという意志が疑わしく思われるのです。

それで、試しに私は、屍体の皮下にアムモニア注射をいたしたのでございました。ところが、それには明瞭はつきりと、生体特有の赤色が泛うかんでくるではありませんか。

それに、なんとという怖ろしい事でしたらう。あの糸が、



埋葬した翌朝には切れていたのをごさいましたわ。ですけど、私にはとうてい、算哲様の墓ぼこう容を訪れる勇氣はございませんでした」

「その糸と云うのは」検事が鋭く問い返した。

「それは、こうなのでございます」鎮子は言下に云い続けた。「実を申しますと、算哲様はひどく早期の埋葬を

おおそ懼れになった方で、この館の建設当初にも、大規模

の地下墓クリプト容をお作りなつたほどでございます。そして、

それには秘かに、コルニツエ・カルニツキー（露皇帝アレ

キサンダー三世侍従）式に似た、早期埋葬防止装置を設けて

置いたのでした。ですから、埋葬式の夜、私はまんじりともせず、あの電鈴でんれいの鳴るのをひたすら待ち侘わびておりました。ところが、その夜は何事もないので、翌朝大雨の夜が明けけるのを待つて、念のために、裏庭の墓窖ぐらりを見にまいりました。何故かと申しますなら、あの周囲ぐるりにある七葉樹ちの茂みの中には、電鈴を鳴らす開閉器スイッチが隠されているからでございませす。するとどうでございませしたろう。その開閉器スイッチの間には、山雀やまがらの雛ひなが挟はまれていて、把手とってを引く糸が切れておりました。ああ、あの糸はたしか、地下の棺中から引かれたに相

違なごかざいませぬ。それに棺カタのも、地上カクの棺ツ龕アルの蓋コも、

内部なから容易かに開くことが出来るのですから」

「なるほど、そうしてみると」と法水は唾つばを嚥のんで、ちよつと気色きしばんだような訊きき方かたをした。「その事実を知っているのは、いったい誰と誰ですか。つまり、算哲さんてつの心臓しんざうの位置ちゐと、その早期埋葬さきうまいざう防止装置ぼんしちやうの所在しやうを知っているのは？」

「それなら確実に、私と押鐘先生おしねだけだと申し上げることが出来ますわ。ですから、伸子のぶこさんが仰おつ言しゃった

——ハートの王様キング云々グランドのことは、きつと偶然ぐぜんの暗合あんがに

すぎまいと思われるのです」

そう云い終ると、にわかには鎮子は、まるで算哲の報復を懼れるおそような恐怖の色を泛うかべた。そして、来た時とはまた、うって変った態度で、熊城に身辺の警護を要求してから、室へやを出て行った。大雨の夜——それは、墓窖さまよから彷徨い出たあらゆる痕跡を消してしまふであろう。そして、もし算哲が生存しているならば、事件を迷濛めいもうとさせている、不可思議転倒の全部を、そのまま現実実証の世界に移すことが出来るのだ。熊城は昂奮したように、粗暴な叫び声を立てた。

「何でも、やれることは全部やつて見るんだ。サア法水君、令状があるうとなかろうと、今度は算哲の墓窖を発掘するんだ」

「いや、まだまだ、捜査の正統性を疑うには、早いと思  
オーソドキシイ  
うね」と法水はどうしたものか、浮かぬ顔をして云い淀よどんだ。

「だって、考えて見給え。いま鎮子は、それを知っているのが、自分と押鐘博士だけだと云ったつけね。そうすると、知らないはずのレヴェズが、どうして算哲以外の人物に虹を向けて、しかも、あんな素晴らしい効

果を挙げたのだろう」

「虹!？」 検事はいまいま忌々しそうにつぶや呟いた。「ねえ法水君、算

哲の心臓異変を発見した君を、僕はアダムスともル  
ヴェリエとも思っているくらいだよ。ねえ、そうじゃ  
ないか。この事件では、算哲が海王星なんだぜ。第一  
あの星は、天空に種々不合理なものを撒まきちらして、  
そうした後に発見されたのだからね」

「冗談じゃない。どうしてあの虹が、そんな蓋然性に  
乏うしいものなもんか。偶然か……それとも、レヴェズ  
の美うわしい夢イマージユ想だ。言ことばを換えて云えば、あの男の気高

い古典語学精神なんだよ」と相変わらず法水は、奇矯に

絶ことばした言ことばを弄するのだった。「ところで支倉君、

ウオーター・サープライズ

驚駭噴泉の踏み石の上には、レヴェズの足跡が残つていたつけね。それをまず、韻文として解釈する必要があるのであるのだよ。最初は四つの踏み石の中で、本館に沿うた一つを踏んでいる。それから、次にその向う側の一つを、そして、最後が左右となつて終つている。けれども、その循環にある最奥の意義と云うのは、僕等が看過していた五回目の一踏みにあつたのだ。それが、最初踏んだ本館に沿うている第一の石で、つまりレ

ヴェズは、一巡してから旧の基点もとに戻ったので、最初踏んだ石を二度踏んだことになるのだよ」

「しかし、結局それが、どういう現象を起したのだね？」

「つまり、僕等には伸子の不在証明アリバイを認めさせた、また、現象的に云うと、それが、上空へ上った飛沫しぶきに対流を起させたのだよ。何故なら、1から4までの順序を考えると、一番最後に上った飛沫の右側が最も高く、続いてそれ以下の順序どおりに、ほぼ疑問符の形をなして低くなってゆくだろう。そこへ、五回目の飛沫が



上つたのだから、その気動に煽あおられて、それまで落ちかかっていた四つの飛沫が、再びその形のまままで上昇してゆくだろう。すると、当然最後の飛沫との間に対流の関係が起らねばならない。それが、あの微動もしない空気の中で、五回目の飛沫をふわふわ動かしていったのだ。つまり、その1から4までのものと云うのは、最後に上つた濛もうぎ気がある一点に送り込む——詳しく云えば、それに一つの方向を決定するために必要だったのだよ」

「なるほど、それが虹を発生させた濛気か」検事は爪を

嘯みながら頷うなずいた。「いかにもその一事で、伸子の不在証明アリバイが裏書されるだろう。あの女は、異様な気体が窓の中へ入り込んでゆくのを見た——と云ったからね」

「ところが支倉君、その場所というのは、窓が開いてい  
る部分ではないのだよ。あの当時棧さんを水平にしたまま  
で、鎧扉よろいどが半開きになっていたのを知ってるだろう。

つまり、噴泉の濛気は、その棧の隙間から入り込んで  
いったのだ」と法水は几帳面きちようめんに云い直したが、続いて  
彼は、その虹に禍いされた唯一の人物を指摘した。「そ

れでない、ああいう強彩な色彩の虹が、けっして現われっこないのだからね。何故なら、空気中の濛気を中心に生じたのではなく、棧の上に溜った露滴が因で発したからなんだ。つまり、問題は、七色の背景をなすものにあつた訳だが、……しかし、より以上の条件というのが、その虹を見る角度にあつたのだ。言葉を換えて云えば、火術弩かじゆつどが落ちていた——つまり、当時犯人がいた位置のことなんだよ。しかも、あの隻眼せきがんの大女優が……」

「なに、押鐘津多子!」熊城は度を失って叫んだ。

「うん、虹の両脚の所には、黄金こがねの壺があると云うがね。恐らく、あの虹だけは捉えることが出来るだろう。何故なら熊城君、だいたい虹には、視半径約四十二度の所で、まず赤色が現われる。勿論その位置というのが、ちようど火術弩の落ちていた場所に相当するのだ。また、その赤色をクリヴオフ夫人の赤毛に对称するとなると、いかにも標準ねらいを狂わせるような、強烈な眩耀ハレーションが想像されてくる。けれども、近距離で見る虹は二つに割れていて、しかも、その色は白ちやけて弱々しい」と法水はいったん口を閉じたが、みるみる得意気な

薄笑<sup>うすわらい</sup>が泛<sup>うか</sup>んでできて云った。「ところが熊城君、押鐘津多子だけには、けつしてそうではないのだよ。何故かと云うのに、片眼で見る虹は一つしかないからだ。それに、明暗の度が強いために色彩が鮮烈で側にある同色のものとの判別が、全然つかなくなつてしまふのだよ。ああ、あの渡<sup>ワンダー</sup>り鳥<sup>フォーゲル</sup>——それは、まずレヴェズの恋文となつて、窓から飛び込んできた。そして、それが偶然クリヴォフ夫人の赤毛の頸<sup>くび</sup>を包んで、さしてそれによつて標的を射損ずるような欠陥のあるものと云えば、津多子をさしておいて、他にはないのだよ」

「なるほど。しかし、君はいま、虹のことをレヴェエズの恋文と云ったね？」検事が聴き咎めて、自分の耳を疑うような面持で訊ねたが、それに法水は慨嘆するような態度で、彼特有の心理分析を述べた。

「ああ、支倉君、君はこの事件の暗い一面しか知らないのだ。何故なら君は、あの赤毛のクリヴオフが宙吊りになる直前に、伸子が窓際に現われたのを忘れてしまったからだよ。だから、レヴェエズはそれを見て伸子が武具室にいたかと思ひ、それから噴泉の側で、あの男の理想の薔薇を詠ったのだよ。ところで君は、『ソロモ

ンの雅歌』の最終の章句を知っているかね。吾が愛するものよ、請う急ぎ走れ。香ばしき山々の上にかかりて、鹿のごとく、小鹿のごとくあれ——と。あの神に對する憧憬しょうけいを切々たる恋情中に含めている——まさに世界最大の恋愛文章だが、それには、愛する者の心を、虹になぞらえて詠っているのだ。あの七色——それはボードレールによれば、熱帯的な狂熱的な美しさとなり、またチャイルドが詠うと、それから、旧教主義カトリシズムの莊重な魂の熱望が生れてくるのだ。また、その拋物線を近世の心理分析学者どもは、滑斜トボガン檣で斜面を滑走し

てゆく時の心理に擬している。そして、虹を恋愛心理の表象にしているのだよ。ねえ支倉君、あの七色は、精妙な色彩画家のパレットじゃないか。また、ピアノの鍵キイの一つ一つにも相当するのだ。そして、虹の拋物線は、その色彩法コロリイでもあり、旋律法、対位法でもあるのだ。何故なら、動いてゆく虹は、視半径二度ずつの差で、その視野に入ってくる色を変えてゆくからだよ。つまり、レヴェズは、韻文の恋文を、虹に擬なぞらえて伸子に送ったのだ」

それによると、最初のうち法水は、レヴェズが虹を



作つたことを、他の何者かを庇かばおうとする騎士的行為と見み做なしていたらしかつたが、さらに深く剔て抉けつしていつて、ついにそれが恋愛心理に帰納されてしまふと、必然犯人がクリヴオフ夫人を射損じたことを、偶然の出来事に帰してしまふより他にないのだつた。しかし、検事と熊城には、そのいずれもが実証的なものでないだけに、半信半疑と云うよりも、何故法水が虹などという夢想的なものにこだわつていて、肝腎かんじんの算哲もどかの墓ぼ穴こう発掘を行わないのだらう——と、それが何より焦もどかしく思われるのだつた。ことに、レヴェズの恋愛心理

が、後段に至つてこの事件最後の悲劇を惹起じやつきしようなどとは、てんで思いも及ばなかつたことだらうし、また、法水が押鐘津多子を犯人に擬したことに、それ以外にある重大な暗示的觀念が潜んでいようなどは、勿論気づく由もなかつたのである。こうして、いったん絶望視された事件は、短時間の訊問中に再び新たな起伏を繰り返していったが、続いて、現象的に希望の全部がかけられている、ピハイインド・ステイアス大階段の裏——を調査するこ  
とになつた——それが五時三十分。



二、大階段の裏に……

法水が十二宮から引き出した解答——大階段の裏に  
ゾーディアック ピハインド・ステイアス  
 は、その場所と符合するものに、二つの小室こしつがあつた。  
 一つは、テレーズ人形の置いてある室へやで、もう一つは、  
 それに隣り合つていて、内部なかは調度一つない空部屋に  
 なつていた。法水はまず後者を扨ノックんで把手ノックに手を掛け  
 たが、それには鍵も下りていず、スウツと音もなく開  
 かれた。構造上窓が一つもないので、内部なかは漆黒しっこくの闇

である。そして、煤すすけた冷やかな空気が触れてくる。ところが、先に立った熊城が、懐中電燈をかざしながら壁際を歩いているうちに、ふと何を聴いたものか、背後の検事が突然立ち止った。彼は、なにかしら慄然りっぜんとしたように息を詰め、聴耳ききみみを立てはじめたのであるが、やがて法水に、幽かな顫えふるを帯びた声で囁ささやいた。「法水君、君はあれが聴えないかね。隣りの室へやから、鈴を振るような音が聴えてくるんだ。凝然じじつと耳をすましてい給え。そら、どうだ。ああたしか、あれはテレーズの人形が歩いているんだ……」

なるほど、検事の云うとおり、熊城が踏む重い靴音に交って、リリンリリンと幽かに顫えるような音が伝わってくる。無生物である人形の歩み——まさに、魂の底までも凍いてつけるような驚愕おどろきだった。しかし、当然そうになると、人形の側かたわらにある何者かを想像しなくてはならない。そこで三人は、かつて覚えたことのない昂奮の絶頂にせり上げられてしまった。もはや躊躇ちゆうちよする時機ではない——熊城が狂暴な風を起して、把手ノツブを引きちぎらんばかりに引いた時、その時なんと思つてか、法水が突如けたたましい爆笑を上げた。

「ハハハハ支倉君、実は君の云う海王星が、この壁の中にあるのだよ。だって、あの星は最初から既知数ではなかったのだからね。憶い出し給え、古代時計室にあつた人形時計の扉ドアに、いつたい何という細刻が記されていたか。四百年の昔に、千々石清左衛門ちぢわがフイリップ二世から拝領したという梯状琴クラヴィイ・チェンバロは、その後所在を誰一人知る者がなかつたのだよ。たぶんあの音は、た截たれた絃いとが、ふる震動で顫え鳴つたのだらう——。最初は、重い人形が隣室の壁際を歩んだ。そして、次は今ビハインド・ステイアスの熊城君だ。つまり、大階段の裏——の解答と云うの

は、この隣室との境にある壁のことなんだよ」

しかし、その壁面にはどこを探っても、隠し扉が設けてあるような手掛りはなかった。そこでやむなく、その一部を破壊することになった。熊城は最初音響を確かめてから、それらしい部分に手斧ておのを振って、羽目パネルに叩きつけると、はたしてそこからは、無数の絃が鳴り騒ぐような音が起った。そして、木片が砕け飛び、その一枚を手斧とともに引くと、羽目パネルの蔭からは冷えびえとした空気が流れ出てくる——そこは、二つの壁面に挟まれた空洞だった。その瞬間、悪鬼の秘密な通



クラヴィーチェンバロ

路が闇の中から掴み取られそうな気がして、三人の唾つばを嚙のむ音が合したように聴えた。打ち下す音とともに、梯状琴の絃の音が、狂った鳥のような凄惨な響を交える。それは、周囲の羽目パネルを、熊城が破壊しはじめたからだった。ところが、やがてその一劃から埃まみれになって抜け出してくると、彼は激しい呼吸の途中で大きな溜息を吐き、法水に一冊の書物を手渡した。そして、グツタリとした弱々しい声で云った。

「何もない——隠し扉ドアも秘密階段あげふたも揚蓋もないんだ。たったこの一冊だけが収穫だったのだよ。ああ、こん

なものが、十二宮秘密記法の解答だなんて」

法水も、この衝撃からすぐに恢復することは困難だった。明らかにそれは、二重に重錘おもしの加わった、失望を意味するのだから。では、何故かと云うに、デイングスビイが設計者だったということから、ほとんど疑う余地のなかった秘密通路の発見に、まずまんまと失敗してしまった——それは、無論云うまでもないことである。けれども、それと同時に、事件の当初ダンネベルグ夫人が自筆で示したところの、人形の犯行という仮定を、わずかそれ一筋で繋ぎ止めていたせんおん顛音の所

在が明白になつた。それなので、いよいよ明瞭はつきりとここで、あのプロヴィンシヤ人の物々しい鬼影を認めなければならなくなつてしまつたのだ。しかし、以前の室へやに戻つてその一冊を開くと、法水は慄然りっぜんとしたように身を竦すくめた。けれども、その眼には、まざまざと驚嘆の色が現われた。

「ああ、驚くべきじゃないか。これは、ホルバインのトーチン・タンツ『死の舞踏』なんだよ。しかも、もう稀覯きこうに等しい一五三八年里昂リオンの初版なんだ」

それには、四十年後の今日に至つて、黒死館に起つ

た陰惨な死の舞踊を予言するかのようになり、明瞭とデイ  
はつきり  
 グスビイの最終の意志が示されていた。その茶の犢こうし  
 皮で装幀された表紙を開くと、裏側には、ジヤンヌ・  
 ド・ツーゼール夫人に捧げたホルバインデサインの捧呈文デディケーションが記  
 され、その次葉に、ホルバインの下図を木版に移した  
 リユツツエンブルガーの、一五三〇年バーゼルにおけ  
 る制作を証明する一文が載せられていた。しかし、頁ページ  
 を繰くって行って、死神と屍骸で埋められている多くの  
 版画を追うているうちに、法水の眼は、ふとある一点  
 に釘付けされてしまった。その左側の頁には、大身槍おおみのやり

を振った髑髏どくろじん人が、一人の騎士の胴体を芋刺しいもざにして  
 いる凶が描かれ、また、その右側のは、大勢の骸骨が  
 長管喇叭トROMPAや角笛ホルンを吹き筒太鼓ケツトル・ドラムを鳴らしたりして、勝利  
 の乱舞に酔いしれている光景だった。ところが、その  
 上欄に、次のような英文が認めしたたられてあつた。それは  
 インキの色の具合と云い、初めて見るデイグスビイの  
 自筆に相違なかつたのである。

クイーン ロックト イン ケインズ ジュー ヨウ ニング イン ノット  
 “Quean locked in Kains. Jew yawning in knot.  
 ネル カラギヨス ジャイニスツ アンダーライ ビロウ インフェルノ  
 Knell karagoz! Jainists underlie below inferno.”

——(訳文)。尻軽娘はカインの輩ともがらの中に鎖じ込められ、猶太人は難問の中にて嘲笑う。凶鐘にて人形(カラギヨス——土耳其(トルコ)の操人形)を喚び覚ませ、奢那教ジャイナ徒ども(仏教と共通点の多い姉妹的宗教)は地獄の底に横たわらん。(以上は、判読的意識である)

そして、次の一文が続いていた。それは文意と云い、創世記に皮肉嘲説を浴びせているようなものだった。

——(訳文)。エホバ神は半陰陽がみふたなりなりき。初めに自

らいとなみて、双生児ふたごを生み給えり。最初に胎ほらより出でしは、女にしてエヴと名付け、次なるは男にしてアダムと名付けたり。しかるに、アダムは陽に向う時、臍ほぞより上は陽に従いて背後に影をなせども、臍ほぞより下は陽に逆さかいて、前方に影を落せり。神、この不思議を見ていたく驚き、アダムを畏おそれて自らが子となし給いしも、エヴは常の人と異ならざれば婢しもめとなし、さてエヴといとなみしに、エヴ妊みこりて女児おなごを生みて死せり。神、その女児おなごを下界くだに降して人の母となさしめ給いき。

法水は、それにちよつと眼を通したただけだったが、  
検事と熊城はいつまでも捻ひねくつていて、しばらく数分  
のあいだ瞋みづめていた。しかし、ついにつまらなそうな  
手付で卓上に投げ出したけれども、さすが文中に籠こもつ  
ているデイグスビイの呪詛じゆその意志には、磅礴ほうはくと迫つて  
くるものがあつたのは事実だった。

「なるほど、明白にデイグスビイの告白だが、これほど  
怖ろしい毒念があるだろうか」検事は思いなし声を慄ふる  
わせて、法水を見た。「たしかに文中にある尻軽娘と云



うのは、テレーズのことを指して云うのだろう。すると、テレーズ・算哲・デイグスビイ——とこの三角恋愛関係の帰結は、当然、カインの輩の中に鎖じ込められ——の一句で瞭然たるものになってしまう。そして、デイグスビイはまず、この館に難問を提出し、そうしてから、その錯綜ジグザグの結び目の中で、嘲笑せせらわらっているのだ」と検事は神経的に指を絡み合わせて、天井をふり仰いだ。「ああ、その次は、凶鐘にて人形を喚び覚せ——じゃないか。ねえ法水君、デイグスビイという不可解な男は、この館の東洋人どもが、ゴロゴロ地獄へ

転がり込んで行く光景さえ予知していたのだよ。つまり、この事件の生因は、遠く四十年前にあつたのだ。すでにあの男は、その時事件の役割を端役までも定めていたんだぜ」

デイグスビイの意志が怖ろしい呪詛であることは、彼がそれを記すに、ホルバインの「死の舞踏」トーテン・タンツを用いた

だけでも明らかであるが、それにましまして怖ろしく思われたのは、彼が執拗にも、数段の秘密記法クリプトメニツエを用意して

いることだった。それを臆測すれば、恐らくどこかに一つの驚くべき計画が残されていて、それが醸かもし出し

てくる凶運を、難解きわまる秘密記法クリプトメニツエにて覆い、人々がそれにあぐみ悩む有様を、秘かに横手で啗わらおうという魂胆らしく思われるのだった。すなわち、その秘密記法クリプトメニツエの深さは、この事件の発展に正比例するのではないか——。しかし、法水はその文中から、デイグスビイにもあるまじい、幼稚な文法をさえ無視している点や、また、冠詞のないことも指摘したのだったが、次の創世記めいた奇文に至ると、その二つの文章が、さながら聯関している所は勿論、すべてが、宛然霧に包まれたような観を呈しているのだった。それから、押鐘博士

に遺言書の開封を依頼すべく、法水等は階下の広間に

おもむ  
赴いた。

サロン 広間の中には、押鐘博士と旗太郎とが対座していた

が、一行を見ると立ち上つて迎えた。医学博士押鐘童

吉は五十代に入った紳士で、薄い半白の髪を綺麗きれいなに梳くしげず

り、それに調和しているような卵円形の輪廓で、また、

顔の諸器官も相応して、それぞれに端正な整いを見せ

ていた。総じて、人道主義者特有の夢想に乏しい、そ

して、豊かな抱擁力を思わせるものがあつた。博士は、

法水を見ると慇懃いんぎんに会釈して、彼の妻を死の幽鎖から

救つてくれたことに、何度も繰り返して感謝の辞を述べた。しかし、一同が座に着くと、まず博士が興なげな調子で切り出した。

「いつたいどうしたと云うんです。法水さん。いまに誰もかも、元素に還されてしまうのじゃないでしょうか。いつたい、犯人は誰ですか。家内は、その影像フアントムを見なかつたと云つてますよ」

「さよう、まったく神秘的な事件です」と法水は伸ばした肢あしを縮めて、片腕を卓上に置いた。「ですから、指紋が取れようが糸が切れていようが、とうてい駄目なの

です。要するに、あの底深い大観をせんめい闡明せずには、事件の解決が不可能なのですよ。つまり、ヴァイジター臨検家がヴァイジヨナリー幻想家となる時機にですな」

「いや、元来わし儂は、そういう哲学問答が不得意でしてな」と警戒気味に、博士は眼を瞬しばたいて法水を見た。そして、「しかし、あなた貴方はいま、糸と云われましたね。ハハハ、それが何か令状と関係がおありですか。法水さん、わし儂はこのままで凝じつと、法律の威力を傍観していたいですよ」と早くも遺言書の開封に、不同意らしい意向を洩らすのだった。

「そりや云うまでもありません。家宅搜索令状などは、どこにも持つちやいませんよ。だが、一人の辞職だけで済むものなら、たぶん僕等は法律も破りかねないでしょう」と熊城は憎々しげに博士を見据え異常な決意を示した。そのにわかにな殺気立った空気の中で、法水は静かに云った。

「さよう、まさに一本の糸なんです。つまり、その問題は、算哲博士を埋葬した当夜にあつたのですよ。たしか貴方は、あの晩この館へお泊りになられたでしょう。けれども、その時もしあの糸が切れなかつたら——そ

うだとすれば、今日の事件は当然起らなかつたはずで  
す。ああ、あの遺言書が……。そうなれば、算哲一代  
の精神的遺物となることが出来たでしょうに」

押鐘博士の顔が蒼ざめてみるみる白けていったが、  
糸——の真相を知らない旗太郎は、不自然な笑を作つ  
て、つふや呟くように云つた。

「ああ、僕は弩の絃いとのことをお話しかと思ひましたよ」  
しかし、博士は法水の顔をまじまじとみつ瞷めて、突つ  
かかるように訊ねた。

「おっしやどうも、仰言る言葉が判然とはっきり嘘のみ込めませんが、しか



し、結局あの遺言書の内容が、なんだと云われるんです?」

「僕は、現在では白紙だと信じているのです」と突然眼を険しくして、法水は実に意外な言を吐いた。

「もう少し詳細に云いますと、その内容が、ある時期に至って、白紙に変えられたのだ——と」

「莫迦<sup>ぼか</sup>な、何を云われるのです」と博士の驚愕<sup>きょうがく</sup>の色が、たちまち憎悪<sup>ぞうお</sup>に変わった。そして、恥もなく、見え透いた術策を弄しているかの相手を、しげしげ瞋<sup>みつ</sup>めていたが、ふと心中に何やら閃<sup>ひらめ</sup>いたらしく、静かに蓑<sup>たばこ</sup>を置い

「それでは、遺言書を作成した当時の状況をお聴かせして、貴方から、そういう妄信を去らせてもらいましょう。……その日はたしか、昨年三月十二日だったと思いますが、突然先主が儂わしを呼びつけたので何かと思うと、今日偶然思い立ったので、ここで遺言書を作成すると申されたのでした。そして、儂わしと二人で書齋に入つて、儂は隔つた椅子の向うから、先主がしきりに草案を認したためているのを眺めておりました。それは、オクターヴオ判型の書簡紙に二枚ほどのものでしたが、

認め終ると、その上に金粉を撒まいて、さらに廻シリンドリカル転封輪・シールで捺おしました。たぶん貴方は、あの方がいつさいをアンシャンレジームアンシャンレジーム旧制度的に扱あうのを——つまり、その復古趣味を御存じでしような。ところで、それが済むと、その二葉を金庫の抽斗ひきだしの中に蔵おさめて、当夜は室の内外に嚴重な張番を立て、その発表を翌日行いうことになりました。ところが、翌朝になると、ズラリと家族を並べた前で、先主はなんと思つたか、いきなりその中の一葉を破つてしまったのです。そして、そのズタズタに寸断したものにさらに火をつけて、またその灰を粉々にして、

それをとうとう、窓から雨の中に投げ捨ててしまいましたが。その周到をきわめた、いかにも再現されるのをおそ懼れるような行為を見ても、その内容が疑いもなく、異常に熾烈しれつな秘密だったに相違ありません。そして、残った一葉を厳封して、それを金庫の中に蔵め、死後一年目に開くようわし儂に申し渡されました。ですから、あの金庫は、まだ開く時機が到来していません。ですよ。法水さん、わし儂にはどうしても、故人の意志を欺くことが出来んです。しかしつまるるところ法律と云うものは、痴呆の羽風にすぎんのでしょう。どんなに秘密つ

ぽい輪奐りんかんの美があるうとも、あの無作法な風は、けつして容赦せんでしようからな。よろしい、儂わしは貴方がたが為されるままに、いつまでも傍観しとりましよう」と博士は勝ち誇ったように云い放ったが、先刻さっきから絶えず泛うかんでは消えていた不安の色が、いきなり顔面一杯に拡がってきて、

「だが、貴方あなたの云われた一言は、聴き捨てになりませぬぞ。いいですか、作成した当夜は嚴重な監視で護られていた——そして、先主は焼き捨てた残りの一葉を金庫に蔵めて——その文字合せの符号も鍵も」と云い

掛けて、衣袋ポケットから符帳と鍵を突き出した。そして、そ

れを粗暴な手附でガチャリと卓上に置いた。「いかが

です法水さん、機智ウイットや飄逸ユーモアでは、あの扉ドアは開けられん

でしようからな。それとも、熔鉄剤テルミットでしようか。いや

とにかく、貴方がああいう奇言をお吐きになるには、

無論相当な論拠ロジックが上うでしよう」

法水は烟けむりの輪りんを天井に吐ついて、嘯うそぶくように云った。

「いや、実に奇妙な事です。実際今日の僕は、糸とか線

とかいうものにひどく運命づけられていましたな。つ

まり、あの時もまた切れなかつたということが、遺言

書の内容を失わせた原因だと信じているのですよ」

法水の意中に潜んでいるものは、漠として判らなかつたけれども、それを聴いた博士は、総身を感電したように戦<sup>おの</sup>かせて、何か或る一事のため、法水にまったく圧倒されてしまったように思われた。そして、血の気の失せた顔を硬張<sup>こわば</sup>らせて、しばらく黙念<sup>ふけ</sup>に耽<sup>ふ</sup>っていたが、やがて立ち上ると、悲壮な決意を泛<sup>うか</sup>べて云つた。

「よろしい。貴方の誤信を解くためにはやむを得んことです。儂<sup>わし</sup>は先主との約束を破つて、今日ここに遺言

それから、二人が戻ってくるまでの間は、誰一人声を発する者がなかった。それぞれの頭の中では、各種の思念が渦のように巻き揺いでいた。検事と熊城には、事件の開展が期待され、また、旗太郎はその開封に、何か自分の不利を一挙に覆すくつがえようなものを、待設けているかのごとくであつた。間もなく、二人の姿が再び現われて、法水の手に一葉の大型封筒が握られていた。ところが、環視の中で封を切り、内容を一瞥いちべつすると同時に、法水の顔には痛々しい失望の色が現わ



れた。ああ、ここにもまた、希望の一つが虧<sup>か</sup>け落ちてしまったのだ。それには、いつこうに他奇もない、次の数項が認め<sup>したた</sup>められてあるのみだった。

一、遺産は、旗太郎並びにグレーテ・ダンネベルグ以下  
の四人に対し、均等に配分するものとす。

二、なお、すでに当館永守的な戒語である——館の  
地域以外への外出・恋愛・結婚、並びに、この一  
書の内容を口外したるものは、ただちにその権  
利を剥奪さるるものとす。ただし、その失いた

る部分は、それを按分に分割して、他に均霑きんてんさ  
るるものなり。

以上は、口頭にてそれぞれも各々に伝え置きたり。

旗太郎にも、同様落胆がっかりしたらしい素振が現われたけれども、さすがに年少の彼は、すぐに両手を大きく拡げて喜悅の色を燃やせた。

「これですよ法水さん、やつとこれで、僕は自由になることが出来ました。実を云いますと僕は、どこかの隅に穴を掘って、その中へ怒鳴ろうかと思いましたよ。」

でも、考えてみると、もしそんなことをした日には、あの怖ろしいメフィストが、どうして容赦するものですか」

こうして、ついに法水との賭かけに、押鐘博士が勝った。しかし、内容を白紙と主張した法水の真意は、けつしてそうではなかったらしい。勿論その一言は、博士を抑えた得体の知れない、計謀には役立つたに相違ないが、恐らく内心では、黙示図の知れない半葉あえを喘ぎ求めていたのであろう。そして、空しくこの刮目かつもくされた一幕を、終らねばならなかったに違いない。ところが、

不思議なことには、勝ち誇ったはずの博士からは、依然神経的なものが去らずに、妙に怯々おどおどした不自然な声で云うのだった。

「これでやつと儂わしの責任が終わりましたよ。しかし、蓋を明けても明けなくても、結論はすでに明白です。要するに問題は、均分率の増加にあるのですからな」

そこで、法水等は広間サロンを去ることにした。彼は博士に対して、色々迷惑を掛けたことをしきりに詫びてから室を出たが、それから階上を通りすがりに、なんと思つてか、彼一人伸子の室に入つていった。

伸子の室は、幾分ポンパドウル風に偏した趣味で、  
桃色ピンクの羽目パネルを金の葡萄ぶどう蔦づた模様で縁取ぶくりっていて、それは  
明るい感じのする書斎造づくりだった。そして、左側が細長  
く造られた書室に入る通路、右側の桔梗ききょう色ようした帷幕とぼりの  
蔭が、寢室になつていた。伸子は法水を見ると、あた  
かも予期していたかのように、落着いて椅子を薦めた。  
「もうそろそろ、お出でになる頃合だと思つてました  
わ。きつと今度は、ダンネベルグ様のことをお訊きに  
なりたいのでしよう」

「いやけつして、問題と云うのは、あの屍光にも創紋に

もないのですよ。勿論、青酸<sup>シヤン</sup>には適確な中和剤がないのですから、貴女がダンネベルグ夫人と同じレモナーデを飲んだにしても、あながちそれには、例題とする価値はないでしょう」と法水は、彼女を安堵<sup>あんど</sup>させるためにまず前提をおいてから、「ところで、貴女はあの夜、神意審問会の直前にダンネベルグ夫人と口論なされたそうですが」

「ええ、しましたとも。ですけど、それについての疑念なら、かえって私の方にあるくらいですわ。私には、あの方が何故お怒りになったのか、てんで見当がつか

ないんですの。実は、こうなのでございます」と伸子は躊躇ためらわず言下に答えて、いつこうに相手を窺視きするよ  
うな態度もなかった。「ちようど晩食後一時間頃のこ  
とで、図書室に戻さねばならないカイゼルスベルヒの  
『セント聖ウルスラ記』を、書棚の中から取り出そうとした  
際でございました。突然蹠踉よろめいて、持っていたその本  
を、隅にある乾隆けんりゅう硝子の花瓶に打ち当てて、倒して  
しまったのでございます。ところが、それからが妙な  
んですわ。そりゃひどい物音がしましたけれども、別  
にお叱りをうけるといふほどの問題でもございませぬ。

それなのに、ダンネベルグ様がすぐとお出でになつて……でございますもの。私には未だもつて、すべてが判然と嘸<sup>の</sup>み込めないような気がいたしております」

「いや、夫人はたぶん貴女<sup>あなた</sup>を叱つたのではないでしょうよ。怒り笑い嘆く——けれども、その対象が相手の人間ではなく、自分がうけた感覚に内問している。そういうように、意識が異様に分裂したような状態——それは時偶<sup>ときたま</sup>、ある種の変質者には現われるものですからね」と法水は、伸子の肯定を期待するように、凝然<sup>じいつ</sup>と彼女の顔を見守るのだった。



「ところが、事實はけっして……」と伸子は真剣な態度で、キツパリ否定してから、「まるであの時のダンネベルグ様は、偏見と狂乱の怪物ぼけものでしかございませんでした。それに、あの尼僧のような性格を持った方が、声をふる慄わせ身悶みもだえまでして、私の身を残酷にお洗いたてになるのです。馬具屋の娘……賤民チゴイネルですつて。それから、竜見川学園の保姆ほほ……それはまだしもで、私はやどりぎ寄生木とまで罵ののしられたのですわ。いいえ、私だつても、どんなに心苦しいことか……。たとえ算哲様生前の慈悲おほしめ深い思召しがあつたにしても、いつまで御用のない

この館に、御厄介になつておりますことが、どんなにか……」と娘らしい悲哀がかなしみ憤怒に代つていったが、ようやく涙に濡れた頬のあたりが落着いてきて、「ですから、私が未だに解しかねているという意味が、これで、すっかりお判りでございましょう。あの方は私が粗相で立てた物音には、いつこうに触れようとはなさらなかつたのですから」

「まったく僕も、貴女の立場には同情しているんです」と法水は慰めるような声で云つたが、心中彼は何事かを期待しているらしく思われた。「ところで貴女は、ダ

ンネベルグ夫人がこの扉ドアを開いた際を御覧になりましたか。いつたいその時、貴女はどこにいましたね？」

「マア、貴方あなたらしくもない。まるで、心理前派の旧式探

偵みたいですよ」と伸子は、法水の質問に魂消たまげたよ

うな表情を見せたが、「ところが、生憎あいにくとそのとき室を

空けておりました。電鈴ベルが壊れていたもので、召使パトラーの室

へ花瓶の後始末を頼みに行っていたものですから。と

ころが、戻ってまいりますと、ダンネベルグ様が寢室

の中にいらつしやるではございませんか」

「そうすると、以前から帷幕とぼりの蔭にいたのを、知らな

かったのでは」

「いいえ、たぶん私を探しに、寝室の中へお入りになつたのだらうと思いますわ。その証拠には、あの方の姿が、帷幕とぼりの隙間からチラと見えた時には、そこから少し右肩をお出しになつていて、そのままの形でしばらく立ったていらつしやつたのですから。そのうち側の椅子を引き寄せになつて、やはりその、二つの帷幕とぼりの中間あいだの所へお掛けになりました。ねえいかがが法水さん、私の陳述の中には、どの一つだつて、算哲様をはじめ黒死館の精霊主義アニミズムが現われてはおりませんでしょう

——だつて、正直は最上の術策なりと申しますもの」

「ありがとうございます。もうこれ以上、貴女にお訊ねすることはありません。しかし、一言御注意しておきますが、たとえ仮令この事件の動機が、館の遺産にあるにしてもですよ、御自分の防衛ということには、充分御注意なさつた方がいいと思います。ことに、家族の人達とは、あまり繁々しげしげと接近なさらないように——。いずれ判るだろうと思いますが、それが、この際何よりの良策なんですからね」と意味あり気な警告を残して、法水は伸子の室を去つた。しかし、その出際に、彼は異様に熱

の罩こもつた眼で、扉ドア並びの右手の羽目パネルに視線を落した。そこには、彼が入りしなすでに発見したことであったが、扉から三尺ほど離れている所に、木理もくめの剥離片ささくれが突き出っていて、それに、黝くろずんだ衣服の繊維らしいものが引つ掛つていたからだ。ところで読者諸君は、ダ  
ンネベルグの着衣の右肩に、一個所鉤裂かぎざきがあつたのを記憶されるだろうが、それにはまた、容易に解き得ない疑義が潜んでいたのであった。何故なら、常態の様々に想像される姿勢で入つたものなら、当然三尺の距離を横に動いて、その剥離片ささくれに右肩を触れる道理が

ないからである。

それから法水は、暗い静かな廊下を一人で歩いて行つた。その途中で、彼は立ち止つて窓を明け、外気の中へ大きく呼吸いきを吐いた。それは、非常に深みのある静観だつた。空のどこかに月があると見えて、薄つすらした光が、展望塔や城壁や、それを繁り覆うているかのように見える、闊葉樹の樹々に降り注ぎ、まるで眼前一帯が海の底のように蒼あおく淀んでいる。また、その大観を夜風が掃いて、それを波のように、南の方へ拡げてゆくのだつた。そのうち、法水の脳裡にふと

閃いたものがあつて、その観念がしだいに大きく成長していった。そして、彼は依然その場を離れないで、しかも、触れる吐息さえ怖れるもののように、じいつと耳を凝らしはじめたのだつた。すると、それから十数分経つて、どこからかコトリコトリと歩む躑音が響いてきて、それがしだいに、耳元から遠ざかつていくように離れていくと、法水の身体がようやく動きはじめ、彼は二度伸子の室に入つていった。そして、そこに二、三分いたかと思うと、再び廊下に現われて、今度は、その背面に当るレヴェズレヴェズの室の前に立つた。し



かし、法水が扉ドアの把手ノブを引いた時に、はたして彼の推測が適中していたのを知った。何故なら、その瞬間、あの憂鬱な厭世家めいたレヴェズの視線——それには異様な情熱が罩こもり、まるで野獣のように、荒々しい吐息を吐いて迫ってくるのに打衝ぶつかったからである。



第七篇

法水は遂に逸せり!?



一、シヤビエル上人の手が……

故意に、法水のりみずが音を押えて、扉ドアを開いた時だった。その時レヴェズは、煖炉の袖にある睡椅子ねむりいすに腰を下していて、顔を両膝の間に落し、その顛顛こめかみを両の拳こぶしで犇ひしと押えていた。そのグローマン風に分けた長い銀色をした頭髪かみのけの下には、狂暴な光に燃えて紅い煨おきを凝然じいつと瞶みつめている二つの眼があつた。いつもなら、あの憂鬱な厭世家めいたレヴェズ——いまその全身を、かつて

見るを得なかつた激情的なものが覆い包んでいる。彼は絶えず、小びんの毛を搔き筆むしつては荒い吐息をつき、また、それにつれて刻み畳まれた皺しわが、ひくひくと顔一面に引つ瘉つれくねつてゆくのだつた。その妖怪めいた醜さ——とうていそのような頭蓋骨の下には、平静とか調和とか云うものが、存し得よう道理はないのである。たしか、レヴェズ的心中には、何か一つの狂的ひようちやくな憑着があるに相違ない。そして、それがこの中老紳士を、さながら獣のように喘あえぎ狂わせているらしく思われるのだつた。

しかし、法水を見ると、その眼から懊惱おうれうの影が消え

て、レヴェズは朦朧もうろうと山のようになり立ち上った。その

うづりかわり

変化には、まるで、別個のレヴェズが現われたのではないか——と思われたほどに鮮かなものがあつた。また、態度にも意外とか嫌悪とか云うものがなくて、相変わらず白っぽい霞かすみのかかったような、それでいて、その顔の見えない方の側には、悪狡わるがしこい片眼でも動いていそうなの……という、いつも見る茫漠ぼうぼくとした薄気味悪さで、またそれには、法水の無作法を責めるような、峻厳な素振もないのであつた。まったく、レヴェズの異

風な性格には、文字どおりの怪物という以外に評し得ようもないであろう。

その室は、へや雷文様の浮彫にモスク風を加味した

ラスチツク●スタイル面取作りで、三つ並びの角張った稜が、りょう壁から天井ま

で並行な襞をなし、その多くの襞が格子を組んでいる

天井の中央からは、十三燭形の古風な裝飾灯が下つて

いた。そして、妙に妖怪めいた黄色っぽい光が、そこ

から床の調度類に降り注がれているのだった。法水は

ノック叩しなかつたことを鄭重に詫びてから、レヴェズと向

き合わせの長椅子に腰を下した。すると、まずレヴェ



ズの方で、老獪ろうかいそんな空咳からせきを一つしてから切り出した。

「時に、先刻遺言書を開封へやなさったそうですな。すると、この室へやにお出でになったのも、儂わしにその内容を講釈なさろうというおつもりで。ハハハハ、だが法水さん、たしかあれは莫迦ぼかげた遊戯ゲームのはずで、いや今ですからお話しますがね。実を云いますと、開封すなわち遺言の実行なのです。つまり、あれには期限の到来を示す意味しかなくて、しかも、その内容は即刻実行されねばならんですよ」

「なるほど……。いかにもあのままでは、偏見はおろ

か、錯覚さえも起す余地はありますまい。だが、しかしレヴエズさん、とうとうあの遺言書以外に、僕は動機の深淵を探り当てましたよ」と法水は、微笑の中に妙に棘々とげとげしいものを隠して、相手に向けた。「ところで、それについて、ぜひにも貴方の御助力が必要になりますな。実を云うと、その底深い淵の中から、奇異ふしぎな童謡が響いてくるのを聴いたのでしたよ。ああ、あの童謡——それは事実僕の幻聴ではなかったのです。勿論、それ自らはすこぶる非論理的なもので、けっして単独では測定を許されません。しかし、その射影を追

ザアリユ一

うて観察してゆくうちに、偶然その中から、一つの定数が発見されたのでした。つまりレヴェエズさん、その値を、貴方に決定して頂きたいと思うのですが……」

「なに、奇異な童謡を!?」といったんは吃驚して、煖炉おきの煖おきから法水の顔に視線を跳ね上げたが、「ああ、判りましたとも法水さん、とにかく、見え透いた芝居だけは、やめにしてもらいますかな。なんで、貴方のような兇猛無比——まるでケツクスホルム擲弾兵てきだんみたいな方が。唱うたうに事欠いて惨めな牧歌マドリガールとは……。ハハハハ、無双の人よ！ 冀こいねがわくは、威風堂々とあれ！」と相手の

策謀を見透かして、レヴエズは痛烈な皮肉を放った。

そして、早くも警戒の墻壁しょうへきを築いてしまったのである。

しかし、法水は微動もせぬ白々しさで、いよいよ冷静の度を深めていった。

「なるほど、僕の弾き出しが、幾分表情的エスプレッシンザオに過ぎたか

もしれません。しかし、こう云うと、あるいは僕の浅

学をお嗤わらいになるでしょうが、事実僕は、未だもつて

デイスコルシ『Discorsi』（十六世紀の前半フィレンツェの外交家マキアヴェリ著「陰謀史」）

さえも読んでいないのですよ、ですから、御覧のとおり  
りの開けっ放しで、勿論陷穽わなも計謀たくらみもありっこないの

です。いや、いつそこの際、事件の帰趨をお話して、御存じのない部分までお耳に入れましょう。そして、その上で、さらに御同意を得るとしますかな」と肱ひじを膝の上でずらし、相手を見据えたまま法水は上体を傾かしげた。

「で、それと云うのは、この事件の動機に、三つの潮流があるということなのです」

「なんですと、動機に三つの潮流が……。いや、たしかそれは一つのはずです。法水さん、貴方あんたは津多子を——遺産の配分に洩れた一人をお忘れかな」

「いや、それはともかくとして、まずお聴き願ひましよう」と法水は相手を制して、最初デイグスビイを挙げた。そして十二宮秘密記法の解読にはじめてホルバインの『トーテン・タンツ死の舞踏』を語り、それに記されている呪詛じゆその意志を述べてから、「つまり、その問題は四十余年の昔、かつて算哲さんてつが外遊した当時の秘事だったので。それによると、算哲・デイグスビイ・テレーズと——この三人の間に、狂わしい三角恋愛関係のあつた事が明らかになります。そして、恐らくその結果、デイグスビイは猶太人ユダヤであるがために敗北したのでしよう。しかし、

その後になつて、デイグスビイに思いがけない機会が訪れたと云うのは、つまり黒死館の建設なのですよ。

ねえレヴェズさん、いったいデイグスビイは、敗北に酬ゆるに何をもつてしたことでしようか。その毒念いちぢ一途の、酷烈をきわめた意志が形となつたものは……。ですから、そうなつて、さしずめ思い起されてくるのが、過去三変死事件の内容でしよう。そのいずれもに動機の不明だった点が、実に異様な示唆しきを起してくるのです。また、建設後五年目には、算哲が内部を改修しています。恐らくそれと云うのも、デイグスビイの

報復を、おそ惧れた上での処置ではなかつたのでしようか。

しかし、おどろ何より駭かされるのは、デイグスビイが四十

余年後の今日を予言して、あの奇文の中に、人形の出現が記されていることなのです。ああ、あのデイグスビイの毒念が、未だ黒死館のどこかに残されてい  
るような気がしてならないじゃありませんか。しかも、  
確かそれは、人智を超絶した不思議な化体けたいに相違ない  
のです。いや、僕はもつと極言しましラングリンよう。蘭貢で投  
身したというデイグスビイの終焉しゆうえんにも、その真否を吟  
味せねばならぬ必要がある——と」



「ふむ、デイグスビイ……。あの方が事実もし生きておられるなら、ちょうど今年で八十になったはずですが、しかし法水さん、貴方が童謡と云われたのは、つまりそれだけの事ですか」とレヴェズは依然嘲侮的な態度を変えないのだった。しかし、法水はかま関わらずに、冷然と次の項目に移った。

「云うまでもなく、デイグスビイの無稽むけいな妄想と僕の杞憂きゆうとが、偶然一致したのかもしれませんが。しかし、次の算哲くたの件になると、まず誰しも思い過しとは思われないものが、実に異様な生気を帯びてくるのですよ。

勿論、算哲が遺産の配分について採った処置は、明白な動機の一つです。また、それには、旗太郎以下津多子に至る五人の一族が、各自各様の理由でもって包含されているのです。しかし、それ以外もう一つの不審と云うのは、ほかでもない遺言書にある制裁の条項でして、それが、実行上ほとんど不可能だと思われるからです。ねえレヴェズさん、仮令たとえば恋愛というような心的なものは、それをどうして立証するのでしょうかね。ですから、そこに算哲の不可解な意志が窺うかがえるように思われて、つまり僕にとれば、開封がもたらした新し

い疑惑と云つても差支えないのですよ。しかも、それは単独に切り離されているものではなくて、どうやらいちろ一縷の脈絡が……。別に僕が、内在的動因と呼んでいるのがあつて、その二点の間をかよ通つているものがあると思われれるのです。そこでレヴエズさん、僕は思ひきつて露骨あけすけに云いますがね。何故、貴方がた四人の生地と身分とが、公録のものとなつているのでしょうか。で、その一例を挙げればクリヴオフ夫人ですが、表面あの方は、カウカサス区地主の五女であると云われてゐる。しかし、その実猶太人ユダヤではないでしょう

か」

「ウーム、いつたいそれを、どうして知られたのです」とレヴェズは、思わず眼を睜みはつたが、その驚きはすぐに回復された。

「いや、それはたぶん、オリガさんだけの異例でしょうが」

「しかし、いったん不幸な暗合が現われたからには、それをあくまで追及せねばなりません。のみならず、一方その事実と対照するものに、一族の特異体質を暗示している屍様図があるのです。また、それを、四人の

方が幼少の折、日本に連れて来られたという事実に関  
聯させるとなると、それからは明らさまに、算哲の異  
常な意図が透かし見えてくるのですよ」と法水は、そ  
こでちよつと言葉を截ち切つたが、一つ大きな呼吸を  
すると云つた。「ところがレヴェズさん、ここに僕自身  
ですら、事によつたら自分の頭の調子が狂っている  
のではないかと、思われるような事実があるのです。  
と云うのは、これまで妄覚にすぎなかつた算哲生存説  
に、ほぼ確実な推定がついたことなんですよ」  
「アッ、なんと云われる！」と瞬間レヴェズの全身から、

いつせいに感覚が失せてしまった。その衝撃の強さは、  
瞼筋までも強直させたほどで、レヴェズは、なにやら  
訳の判らぬことを、唾おしのように喚わめきはじめた。そうし  
た後に、彼は何度となく問い直して、ようやく法水の  
説明で納得がゆくと、全身が熱病患者のように慄ふるえは  
じめた。そして、かつて何人にも見られなかったほど  
の、恐怖と苦悩の色に包まれてしまったのである。そ  
のうちやがて、

「あ、あ、やはりそうだったのか。  
オグニ・モート・アテンデ・アル・スオ・マンテニメント  
動き始めれば決して止めようとはしまい」と低い唸うなる

ような声で呟いたが、ふと何に思い当たったものか、レ  
ヴェズの眼が爛々らんらんと輝き出して「不思議だ——なんと  
いう驚いた暗合だろう。ああ算哲の生存——。たしか、  
この事件の初夜には、地下の墓窖ぼこうから立ち上つて来た  
に相違ない——。それが法水さん、まだ現われていな  
い地精コボルトよ、いそしめ——に、つまり、あの五芒星呪文  
の四番目に当るのではないでしようかな。なるほど、  
儂等わじの眼には見えなかつたでしよう。けれども、あの  
札は既に水精とう以前ウンディネ——つまり、この恐怖悲劇では、知  
らぬ間に序幕へ現われてしまったのですよ」と顔一面

に絶望したような、笑いともつかぬものが転げ廻るのだった。その興味あるレヴェズの解釈には、法水も率直に頷うなずいたけれども、彼はしだいに言葉の調子を高めていった。

「ところがレヴェズさん、僕は遺言書と不可分の関係にある、もう一つの動機を発見したのでした。それは、算哲が残した禁制の一つ——恋愛の心理なのです」

「なに、恋愛……」レヴェズは微かに戦おのいたけれども、

「いや、いつもの貴方なら、それを恋フェルリープト・ザイン・ゾオーレン愛的欲求とでも云うところでしょうな」と相手を憎々しげに見据



えて云い返すのだった。それに、法水は冷笑を泛<sup>うか</sup>べて、  
 「なるほど……」。でも、貴方のように恋愛的欲求  
 などと云うと、ますますその一語に、刑法的意義が加  
 わってくる訳ですな。しかし、僕はその前提として、  
 一言、算哲の生存と地精<sup>コポルト</sup>との関係——に触れなければ  
 ならないのです。いかにも、その魔法的効果に至つて  
 は、絶大なものに違いありません。ですがレヴェエズ  
 さん、結局、僕はそれが比例<sup>プロポーション</sup>の問題ではないかと思う  
 のですよ。貴方は、たぶんその符合を無限記号のよう  
 に解釈して、永劫<sup>えいごう</sup>悪霊の棲む涙の谷——とくらいに、

この事件を信じておられるでしょう。けれども、僕はそれとは反対に、すでに善良な護神——ゲニウスグレートヘンの手が、ファウスト博士に差し伸べられているのを知っているのです。では、何故かと云いますと、だいたいあの悪鬼の犠牲とならなかつた人物が、もうあと何人残っていると思いますね。ですから、あれほどの知性と洞察力を具えている犯人なら、当然ここで、犯行の継続に危険を感じなければならぬ道理でしょう。いや、そればかりではないのですよ。もう犯人にとつては、この上屍体の数を重ねてゆかねばならぬ理由は

ないのです。つまり、クリヴオフ夫人の狙撃を最後にして、あの屍体蒐集癖が、綺麗きれいさっぱり消滅してしまつたからなんですよ。さて、ここでレヴェズさん、僕の採集した心理標本を、一つお目にかけることにしましょう。つまり、法心理学者のハンス・リーヒェルなどは、動機の考察は射影的に——と云いますけれども、しかし僕は、動機についてもあくまで測定的メトリカルです。そして、事件関係者全部の心像を、すでに隈なく探り尽したのでした。で、それによると、犯人の根本とする目的は、ただ一途、ダンネベルグ夫人にあつたと云

うことが出来ます。ですから、クリヴオフ夫人や易介

えきすけ

の事件は、動機を見当違いの遺産に向けさせようとし

たり、あるいはまた、それを作虐的ザデイスティツシユに思わせんがため

なのでした。勿論、伸子のごときは、最も陰険兇悪を

きわめた、つまり、あの悪鬼特有の擾乱策じょうらんと云うのほ

かにないのですよ」と法水は始めて莨たぼこを取り出したが、

声音みなぎに漲みなぎっている悪魔的な響だけは、どうしても隠す

ことは出来なかつた。続いて、彼は驚くべき結論を述

べた。「ですから、それが、今日伸子に虹を送った心理

であり、またそれ以前には、貴方とダンネベルグ夫人

との秘密な恋愛関係なのでした」

ああ、レヴェズとダンネベルグ夫人との関係——それは、よし神なりとも知る由はなかつたであろう。まつたくその瞬間、レヴェズは死人のように蒼ざめてしまった。咽喉のどが衝動的に痙攣けいれんしたと見えて、声も容易に出ぬらしい。そして、頸筋くびすじの靱帯じんたいを鞭繩むちづなのようにくねらせながら、まるで彫像のよう、あらぬ方を瞞みつめているのだった。それが、実に長い沈黙だつた。窓越しにハツラツと噴泉の迸ほとばしる音が聞え、その飛沫しぶきが、星を跨またいで薄白く光っているのだ。事実、最初は法水の

よくやる手——と思い、十分警戒していたにもかかわらず、ついに意表に絶した彼の透視が、その墻かきを乗り越えてしまった。そうして、勝敗の機微を、この一挙に決定してしまつたのだつた。やがて、レヴェズは力なく顔を上げたが、それには、静かな諦めあきらの色が泛うかんでいた。

「法水さん、儂わしは元来非幻想的な動物です。しかし、だいたい貴方という方には、どうも遊戯的な衝動が多い。いかにも、虹を送つたことだけは肯定しましょう。しかし、儂は絶対に犯人ではない。ダンネベルグ夫人と

の関係などは、実に驚くべき誹謗ひぼうです」

「いや、御安心下さい。これが二時間前ならばともかく、現在では、あの禁制があつてもすでに無効です。

もう何人なんびとといえども、貴方の持ち分相続を妨げること  
は不可能なのですから。それより問題と云うのは、あ  
の虹と窓にあるのですが……」

するとレヴェズは困憊こんばいの中にも悲愁な表情を見せて  
云つた。

「いかにも、あの当時伸子が窓際に見えたので、やはり  
武器室に居ると思ひ、儂わしは虹を送りました。しかし、

天空の虹は拋物線、露滴の水は双曲線ハイパーボリックです。ですから、

イリプテイック

虹が楕円形でない限り、伸子は儂わしの懐ふところに飛び込んで

来ないのですよ」

「ですが、ここに奇妙な符合がありました。と云う

おにや

のは、あの鬼箭おにやですが、それがクリヴオフ夫人を吊し

上げて突進し、さてそれから突き刺つた場所と云えば、

やはり、あの同じ門でした。つまり、貴方の虹もそこ

よろいど

から入り込んでいった——鎧よろいど屏の棧たかだったので。ね

えレヴェズさん、因果応報の理というものは、あなたが

ネメシス

ち、復讐ネメシス神が定めた人間の運命にばかりではないので



すからね」となんととはなしに不気味な口吻こうふんを洩らして、ジリジリ迫つてゆくと、いったんレヴェズは、総身をすく竦めて弱々しい嘆息を吐いた。が、すぐ反噬ほんぜい的な態度に出た。

「ハハハハ、下らぬ放言はやめにして下さい。法水さん、儂わしならあの三叉ポール箭が、裏庭の蔬菜園から放たれたのだと云いますがな。何故なら、今は蕪菁かぶらの真盛りですよ。矢筈やはずは蕪菁、矢柄やがらは葎よし——という鄙歌ひなうたを、たぶん貴方は御存じでしょうが」

「さよう、この事件でもそうです。蕪菁は犯罪現象、葎

は動機なのです。レヴェズさん、その二つを兼ね具えたものと云えば、まず貴方以外にはないのですよ」とにわかにかつ烈な調子となつて、法水の全身が、メラメラ立ち上る焰のようなものに包まれてしまった。「勿論ダンネベルグ夫人は他界の人ですし、伸子もそれを口に出す道理はありません。しかし、事件の最初の夜、伸子が花瓶を壊した際に、たしか貴方はあの室へやにお出でになりましたね」

レヴェズは思わず愕然がくつとして、肱掛を握つた片手が怪ふるしくも慄え出した。

「それでは、儂わしが伸子に愛を求めたのを発見されたために、持分を失うまいとして、グレーテさんを殺したのだ——と。莫迦ぼかな、それは貴方あんたの自分勝手な好尚このみだ。貴方は、歪んだ空想のために、常軌を逸しとるのです」

「ところがレヴェズさん、その解式と云うのは、貴方が再三打衝ぶつかって御存じのはずですがね。そこドッホ・ローゼン・ジントスにあるは薔薇ウオバイ・カイシ・リード・メール・フレテットなりその辺りに鳥の声は絶えて響かず——つまり、レナウの『秋ヘルプストゲフェユールの心』の一節なんですから」と法水は、静かな洗煉された調子で、彼の実証法を述べるのだつた。

「ところで、今となれば御氣づきでしょうが、僕は事件の関係者を映す心像鏡として、実は詩を用いました。そして、おおく数多の象徴を打ちぶ撒まけておいたのです。つまり、それに合した符号なり照応なりを、徴候的に解釈して、それで心の奥底を知ろうとしました。さて、あのレナウの詩ですが、それを用いて、僕が一種の読心術に成功したのです。と云うのは、心理学上の術語で聯想分析と云つて、それを、ライヘルト等の新派法心理者達は、予審判事の訊問中にも用いよ——と勧告しているのです。何故なら、ここに次のような、ミュン

スターベルヒの心理実験があるからで……。最初  
テューマルト

喧騒 (Tumult) と書いた紙を被験者に示して、その

直後、レイルロード 鉄道 (Railroad) と耳元でささや囁くと、その紙片の文

字のことを、被験者はタンネル隧道と答えたと言うのですよ。

つまり、吾々のわれわれ聯想中に、他から有機的な力が働くと、

そこに一種の錯覚が起らねばならないからです。けれ

ども僕は、それに独自の解釈を加えて、その公式――

つまり、テューマルト Tumult + プラス Railroad = レイルロード Tunnel を逆に応

用して、まず 1 を相手の心像とし、その未知数を 2 と

3 とで描破しようとして企てたのでした。そこでまず、

ドツホ●ローゼン●ジンテス

そこにあるは薔薇なり——と云った後で、貴方の述べ

る一句一句を検討してみました。すると、貴方は僕の

顔色を窺うかがうような態度になつて、では薔薇乳香ローゼン●ヴァイラウフを焚た

いたのでは——と云われましたね。僕はそこで、ズキ

ンと神経に衝つき上げてくるものを感じたのです。何故

なら、公教カトリックでも猶太教ユダヤでも、乳香にはボスウエリア種

とテユリフェラの二種しかないからで、勿論混種の香

料は宗儀上許されていらないからです。つまり、

ローゼン●ヴァイラウフ  
薔薇乳香という一言は、貴方の心中、奥深くに潜んで

いるものがあつて、その有機的な影響に、違いないと

結論するに至りました。明らかにその一語は、何か一つの真実を物語ろうとしています。しかし、それが何であるかは、つい今しがた伸子の留守中を狙って、あの室を再び調査するまでは知る術すべもありませんでした」と法水はおもむろに葭たばこに火を点け、一息吸うと続けた。

「ところでレヴェズさん、あの室の書室の中には、両側に書棚が並んでいましたね。そして、伸子が蹠踉よろめいて花瓶に打衝ぶっつけたと云う『聖ウルスラ記』は、入口のすぐ脇にある、書棚の上段にあったのです。しかし、その

書物は、それがため重心を失うと云うほどの重量では  
ありません。問題はかえって、それと隣り合っている、

ハンス・シェーンスペルガーの『予言の薫烟』ヴァイスザーゲント・ラウフにあつ

たのですよ。それを発見して僕は、その偶然の的に、

思わず薄気味悪さを覚えたほどでした。何故なら、そ

の『予言の薫烟』ヴァイスザーゲント・ラウフ (Weissagend rauch) には、ちよ

うどミュンスターベルヒの実験と、同一の解式が含ま

れているからです。Tumult テューマルト + Railroad レイルロード =

Tunnel タンネル の公式が、かつきり、Weissagend rauch ヴァイスザーゲント・ラウフ +

Rosen ローゼン = Rosen Wehrauch ローゼンヴァイラウフ に適応されるからです。



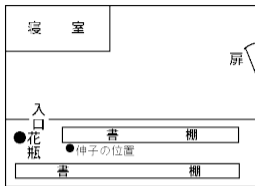
つまり、予言の薰烟ヴァイスザーゲント・ラウフと云つて、当時貴方の脳裡のうりに浮動

していた一つの観念が、薔薇ローゼンに誘導され、そこで、

ローゼン・ヴァイラウフ

薔薇乳香と云う一語となつて意表面に現われたのでした。こうして、僕の聯想分析は完成され、それと同じ時に、貴方がその一冊の名を、絶えず脳裡から離せない理由を知ることが出来たのです。何故なら、さらにあの室へやの状況を仔細に観察してゆくと、伸子が花瓶を倒すまでの真相が明らかになつて、そこに、貴方の顔が現われ出たからですよ」と、まず彼が設しつらえた、狂言の世界を語り終つてから、問題を伸子の動作に移した。

そして、法水独特の微妙な生理的解析を述べるのだつた。



「ですから、その『予言の薫烟』の存在が明瞭になると、自然伸子の嘘うそが成立しなくなるのです。あの女は、蹠よろめいた拍子に『聖ウルスラ記』を花瓶に当てて倒したと云いました。しかし、その花瓶というのが入口の向う端にあるのですから、当時伸子の体

位と花瓶の位置を考えると、とうていその局状シチュエーションは成立する道理がないのです。まず伸子が左利ひだりききでない限りは、『聖ウルスラ記』を右手から投げて頭上を越え、それを花瓶に打衝ぶつけるということは、全然不可能だろうと思われるのです。そこで僕は、エルブ点反射を憶い出しました。それは、上膊じょうはくを高く挙げると肩の鎖骨と脊柱との間に一団の筋肉が盛り上つてきて、その頂点に上膊神経の一点が現われるのです。ですからもし、その一点に強い打撃を加えると、その側の上膊部以下に激烈な反射運動が起つて、その瞬後には痲痺(ママ)してし

まうのですよ。いや、事実現場にも、エルブ反射を起すに恰好な条件がそろつていたのでして、ちようどその二冊のあつた場所と云うのが、両手を挙げなければ届かぬほどの高さだつたからです。ところがレヴェエズさん、そうして伸子の嘘うそを訂正してゆくうちに、ふと僕は、当時あの室へやに起つた実相を描き出すことが出来ました。と云うのは、伸子が『聖ウルスラ記』を取り出そうとして、右手を書棚の上段に差し伸べた際でした。その時、前方の室のどこかで物音がしました。それで、伸子は本を掴んだまま後方を振り向いて、背後にある

書棚の硝子扉ガラスドアを見たのです。その時彼女の眼に、寝室

から出て来たある人物の姿が映ったのでした。ですか

ら、その吃驚びっくりした機はずみに、隣り合った『予言の薫烟ヴァイスサーゲント・ラウフ』

を動かしたのですから、あの千頁にあまる重い木表紙

本が、伸子の右肩に落ちたのです。そして、その咄嗟とっさ

に起った激しい反射運動が因で、右手に持った『聖ウ

ルスラ記』を、頭上越しに左手の花瓶に投げつけたと

いう訳なのですよ。ねえレヴェズさん、そうになると、

その『予言の薫烟ヴァイスサーゲント・ラウフ』によって、一つの心的検証を行

うことが出来るのです。すなわち、その時寝室に潜ん

でいた人物に、一つの虚数をつけることが出来るので

イマジネリー・ヴァリユー

す。虚数——しかし、リーマンはそれによつて、

ドライファハ・アウスゲデーnten・グレーセン

空間の特質を、単なる三重に拡がった大きさから救つ

ているじゃありませんか。いや、僕は率直に云いま

しよう。その時寢室から出た貴方は、物音を聴いて伸

子の側に行き、落ちていた『予言の薫烟』を旧の位

ヴァイスザージェント・ラウフ

もと

置に押し込んでやりました。そして、室から去つてゆ

くところをダンネベルグ夫人に認められたので、それ

が、算哲の死後秘密の関係にあつた夫人を激怒させた

のでした。しかし、一方持分相続に関する禁制がある

ので、さすがに夫人も、それを明らさまにはいい得なかつたのですよ」

その間レヴェズは、拳こぶしに組んだ両手を膝の上に置いたままで、凝然じじつと聴き入っていた。が、相手の言葉が終つてからも、その静観的な表情は変らなかつた。彼は冷たく云い放つた。

「なるほど、動機はそれで十分。しかし、この際なにより貴方に必要なのは、僅たつた一つでも、完全な刑法的意義です。つまり、今度は犯罪現象に、貴方のせんめい闡明を要求したいのですよ。法水さん、あの鎖の輪のどこに

儂<sup>わし</sup>の顔を証明出来ませうかな。いかにも儂には、あの

『予言の薰烟』<sup>ザアイスサーゲント・ラウフ</sup>が永世の記憶となるでしょう。また、

虹を送つて、儂の心を伸子に知つてもらおうとしました。だが、とうていそれだけでは、儂とメフィストとの契約<sup>パクト</sup>が……。いや、恐らくいまに儂は、貴方の銜学<sup>ペダントリー</sup>さに嘔吐<sup>ヘド</sup>を吐きかけるに至るでしょう」

「勿論ですレヴエズさん、しかし貴方の詩作が、混沌の中から僕に光を与えてくれました。実は、この事件の<sup>ファイナル</sup>終局と云うのが、あの虹に現われている、ファウスト

博士の総懺悔<sup>ゲネラル・バイヒテ</sup>にあつたのです。いや、率直に云いま



しよう。勿論あの七色は、詩でも観想でもなく、実は、兇悪無残な焼刃の輝きだったのです。ねえレヴェズさん、貴方は、クリヴオフ夫人を、あの虹の濛気によって狙撃したのでしたね」と法水は突如凄じい形相になつて、狂つたような言葉を吐いた。その瞬間、レヴェズは化石したように硬くなつてしまった。突然頭上に閃きひらめ落ちてきたものは、恐らくレヴェズにとつて、それまで想像もつかぬほど意外なものであつたに相違ない。眩惑げんわく、驚愕きょうがく——勿論その一刹那せつなに、レヴェズが知性のすべてを失つてしまったことは云うまでもない

のである。ところが、そうして相手が自失した有様に、むしろ法水は、残忍な反応を感じたらしかった。彼は、手中の生餌いきえを弄ぶもてあそぶような態度で、ゆつたり口を開いた。「事実あの虹は、皮肉な嘲笑的な怪物でしたよ。ところで貴方は、東オストロゴートの王テオドリツヒを……。あのラヴェンナ城塞の悲劇を御存じでしょうか」

「フム、最初射損じて、テオドリツヒには二の矢に等しい短剣があつたのです。だがしかしだ、儂わしは、苦行者でも殉教者でもない。むしろそういう浄罪輪廻りんねの思想は、儂わしにはなくファウスト博士に云ってもらいた

いものだ」とレヴェズが声を慄ふるわせ、満面に憎悪の色を漲みなぎらしたと云うのは、そのラヴェンナ城の悲劇に、クリヴオフ事件を髣髴ほうふつとさせる場面シーンがあつたからだ。

(註) 紀元後四九三年三月、西羅馬ローマの摂政オドワカルは、東ゴートの王テオドリツヒとの戦いに敗れて、ラヴェンナの城に籠城し、ついに和を乞うた。その和約の席上で、テオドリツヒは家臣に命じ、ハイデクルツグの弓でオドワカルを狙わせたのであつたが、弦が緩

んでいて、目的を果せず、やむなく剣をもつて刺殺したのだった。

「しかし、あの虹の告げ口だけは、どうすることも出来ません」と法水はさらに急追を休めず、せいぎ凄気を双眼にうか泛べて云い放った。「しかし、貴方がオドワカル殺しの故智を学ばれたのは、さすがだっただと思えます、御承知でしようが、テオドリツヒの用いた弓の弦と云うのは、ピクスクラエ橐荑木の繊維で編んだ、ハイデクルツグ王（北独逸ゲルマン族の一族長）からの、りよかく虜獲品だったのですからね。と

ころが、その橐蕒木ピクスクラエという植物繊維には、温度によつて組織が伸縮するという特性があります。したがつて、寒冷の北独逸ドイツから温暖の中部伊太利イタリーに來たために、さしも北方蛮族の殺人具も、たちまちその怖るべき性能を失つてしまつたのでした。ですから、あの火術弩かじゆつどの弦つるを見た時に、僕は、異様な予感に唆そそられました。そして、その橐蕒木ピクスクラエの伸縮を、あるいは人工的にも作り得るのではないかと思ひました。ねえレヴェズさん、あの当時、火術弩は壁に掲つていて、箭やを番つがえたまま、幾分弓形の方が上向きになつていました。そして、そ

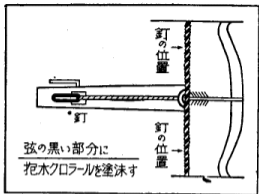
の高さも、ちようど僕等の乳辺りだったのです。ところが、ここで注意を要するのは、それを支えている釘の位置なのです。それは、平頭のもものが三本、そのうちの二つは弦つるの撚り目よへ、残りの一つは発射把手ハンドルの真下で胴木を支えていたのです。勿論、その位置で自働発射をさせるためには、約二十度ほど壁と開きを作らねばなりません。つまり、その陰険な技巧と云うのは、今も云った角度を作ることと、それから、人手を藉からずに弓を絞しぼり、さらにまた、この緊張を緩めることでした。で、それに必要だったのが、かつては津多子を

斃たおした抱水クロラルだったのですよ」と法水は足を組み換え、新しい苜たばこを取り出してから云い続けた。「ところで貴方は、エーテルや抱水クロラル水溶液に、低温性があるのを——詳しく云うと、その触れている面の温度を奪ってしまふのを御存じでしょうか。つまりこの場合は、弦つるを撚よつてある橐荑木ピクスクラエの纖維紐三本のうちで、そのうちの一本に、抱水クロラルを塗沫しておくのです。ですから、そこへ噴泉から濛気が送られたので、あの溶解し易い麻酔剤（マママ）が寒冷な露滴となり、それが、塗られた一本をしだいに収縮させていったの

でした。勿論、その力が射手のようになって、弓を絞りはじめたことは云うまでもありません。すると、それにつれて、他の収縮しない二本との撚り目がほぐれてゆくので、それが拡がるだけ、弩どの位置が下つてゆく訳でしょう。ですから、そうして落下してゆくことに、余計反動の強い上方の撚り目が釘から外はずれるでしようから、そこで、弩の上方が開き、またそれについて、胴木の発射把手ハンドルの部分も横倒しになるので、把手ハンドルが釘で押され、箭やはそのまま開いたとおりの角度で発射されたのでしたよ。そして、発射の反動で、弩



は床の上に落ちたのですが、収縮した弦は、蒸発しきると同時に旧どおりもとになったことは云うまでもありません。しかしレヴェズさん、元来その詭計トリツクの目的と云うのは、必ずしも、クリヴオフ夫人の生命を奪うのにはなかつたのです。ただ単に、貴方あなたの不在証明アリバイをいつそう強固にすればいいのでしたからね」



その間レヴェズは、タラタラ  
あぶらあせ

と膏汗を流し、野獣のような血  
走った眼をして、法水の長広舌  
ちようこうぜつ  
に乗ずる隙もあらばと狙つてい  
たが、ついにその整然たる理論  
に圧せられてしまった。しかし、  
そうした絶望が彼を駆り立てて、  
レヴェズは立ち上ると胸を拳で  
こぶし

叩き、凄惨な形相をして、  
たけ  
哮りはじめた。

「法水さん。この事件の悪  
ペーゼルガイスト  
霊と云うのは、とりもな

おさず貴方あんだのことだ。しかし、一言断っておくが、貴方は舌を動かす前に、まず『マリエンバートの哀歌』でも読まれることだな。いいかな、ここに、久遠くおんの女性を求めようとする一人があつたとしよう。しかし、その精神の諦観ていかん的な美しさには、野心も反抗も憤怒も血気も、いつさいが、堰せきを切つたように押し流されてしまふのだ。ところが貴方は、それに慚愧ざんきと処罰じょばつとしか描こうとしない。いや、そればかりではないのです。貴方の率いている狩猟の一隊が、今日いまここで、野卑な酷薄な本性を現わしたのだ。しかし射手は確か、

獲物は動けず……」

「なるほど、狩猟ですか……。だがレヴェズさん、貴方はこういうミニオンを御存じでしょうか。——かの山と雲の棧道、騾馬は霧の中に道を求め、窟には年経し竜の族棲む……」と法水が意地悪げな片笑を泛べたとき、入口の扉に、夜風かとも思われる微かな衣摺れがさざめいた。そして、しだいに廊下の彼方へ、薄れ消えてゆく唱声があつた。

狩猟の一隊が野営を始めるとき

雲は下り、霧は谷を埋めて

夜と夕闇と一ときに至る

それは、擬<sup>まご</sup>うかたないセレナ夫人の声であつた。しかし、耳に入ると、レヴェズは喪心したように、長椅子へ倒れかかったが、彼はかろうじて踏み止まつた。そして頭をグイと反らして、激しい呼吸をしながら、「貴方<sup>あんた</sup>は、何かの機会<sup>チャンス</sup>に、一人の犠牲を条件に、彼女を了解させたのですか。もう儂<sup>わし</sup>には、この上釈明する気力もないのです。いつそ、護衛をやめてもらおう。儂<sup>マイ</sup>。

ブラッド・ジャック・ファブイ・ド・マイ・タンクの血でこの裁きをしたら、いつか、その舌の根から聴くことがあるでしょうから」と異常な決意を泛べて、あろうことか、護衛を断るのだった。そして、いつさいの武装を解いた裸身を、ファウスト博士の前に曝させることを要求した。それに、法水はまた皮肉にも、応諾の旨を回答して、室を出た。いつも、彼等がそこで策を練り、また訊問室に当てているダンネベルグの室では、検事と熊城がすでに夜食を終っていた。その卓上には、裏庭の靴跡を造型した二つの石膏型と、一足の套靴が、置かれてあった。そして、それがレヴェ

ズの所有品で、ようやく裏階段下の、押入れから発見されたことが述べられた。がその頃には、押鐘博士は帰邸していて、食事が済むと、今度は代り合つて、法水が口を開いた。そして、レヴェズとの対決顛末を、赤いバルベラ酒の盃を重ねながら、語り終えると、「なるほど、しかし……」といったんは頷いたが、熊城は強い非難の色を泛べていった。「君の粹物主義にも呆れたものさ。いつたいレヴェズの処置に躊躇らつてい

るのは、どうしたということなんだい。考えても見給え。従来動機と犯罪現象とが、何人にも喰い違つてい

て、その二つを兼ねて証明された人物と云えば、かつて一人もなかつたのだ。とにかく。序曲が済んだのなら、さつそく幕を上げることにしてもらおう。なるほど、君が好んで使う唱合戦も、ある意味では陶醉かもしれないがね。しかし、その前提に結論が必要なことだけは、忘れないでくれ給え」

「冗談じゃない。どうしてレヴェズが犯人なもんか」と法水は道化た身振をして、爆笑を上げた。ああ、世紀児法水——彼はあの告白悲劇に、滑稽な動機変転こっけいを用意していたのであろうか。検事も熊城も、とたんに



嘲弄されたことは覚つたが、あれほど整然たる条理を  
思うと、彼の言をそのまことばま信ずることは出来なかつた。  
続いて法水は、その詭弁主義の本性を曝露すると同時に、  
今後レヴェズに課した、不思議な役割を明らかに  
した。

「いかにも、レヴェズとダンネベルグ夫人との関係は、

真実に違いないのだ。しかし、あの火術弩かじゆつどの弦つるが

橐荑木ピクスクラエなら、僕は前史植物学で、今世紀最大の発見を

したことになるのだよ。ねえ熊城君、一七五三年に

ベーリング島の附近で、海牛の最後の種類とさつが屠殺され

たんだ。だがあの寒帯植物は、すでにそれ以前に死滅  
しているんだぜ。やはり、あの弩の弦は、いつこう変  
哲もない大麻で作られたものなんだ。ハハハハ、あの  
象のような鈍重な柱体シリンドラーを、僕は錐体コーンにしてやったんだ  
よ。つまり、レヴェズを新しい坐標にして、この難事  
件に最後の展開を試みようとするんだ」

「ああ、気が狂ったのか。君はレヴェズを生餌いきえにして、  
ファウスト博士を引き出そうとするのか」とさしも沈  
着な検事も仰天して、飛び掛らんばかりの気配を見せ  
ると、法水はちよつと残忍そうな微笑をして答えた。

「なるほど、道徳世界の守護神——支倉君！　だが実を云うと、僕がレヴェズについて最も懼おそれているのは、けっしてファウスト博士の爪ではないのだ。実は、あの男の自殺の心理なんだよ。レヴェズは最後に、こういう文句を云つたのだよ。儂マイの血でこの裁きをしたら、いつかその舌の根から聴くタンことがあるでしょうから——とね。それが、いかにもレヴェズが演ずる、悲壮コスチューム・プレイな時代史劇のようで、またあの性格俳優の見せ場らしい、大芝居みたいにも思われるだろう。しかし、それは悲愁トラウリッヒではあるけれども、けっして悲壮トラギツシュではないのだ。

つまりその一句と云うのが、『レイプ・オヴ・ルクリース』という

沙翁の劇詩の中にあつて、羅馬の佳人ルクレチアが

タルキニウスのために辱しめをうけ、自殺を決意する

場面に現われているからなんだ」と法水はこころもち

臆したような顔色になつたが、その口の下から、眉を

上げ毅然きぜんと云い放つたものがあつた。

「けれども支倉君、あの対決の中には、犯人にとつてと

うてい避け難い危機が含まれているんだ。事実僕が

引つ組んだのは、レヴェズじゃないのだ。やはりファ

ウスト博士だったのだよ。実を云うと、僕はまだ事件

に現われて来ない、五芒星呪文の最後の一つ——地精コボルトの札の所在ありかを知っているのだがね」

「なに、地精コボルトの紙片!？」検事も熊城も、仰天せんばかりに驚いてしまった。しかし、法水の眉宇間には、賭博とぼくとするには、あまりに断定的なものが現われていた。彼の凄愴せいそうな神経作用ナーヴアシズムが、いかなる詭計によつて、あの幽鬼の牙城に酷迫したのであるうか。そのにわかすすに緊張した空気の中で、法水は冷たくなつた紅茶を啜り終すすると語りはじめたが、それは、驚くべき心理分析だつたのだ。

「ところで、僕はゴールトンの仮説セオリーを剽竊ひようせつして、それで、

レヴェズの心像を分析してみたのだ。と云うのは、あの心理学者の名著——『インクワイアリー・イントゥ・ヒューマン・ファカルティ人間能力の考察』

の中に現われていることだが、想像力の優れた人物になると、語ことばや数字に共感現象が起つて、それに関連した図式を、具体的な明瞭な形で頭の中へ泛うかべる場合があるのだ。例えば数字を云う場合に、時計の盤面が現われることなど一例だが……いまレヴェズの談話の中に、それにもました、強烈な表現が現われたのだ。支倉君、あの男は伸子に愛を求めた結果について、こう

いうことを悲しげにいつたのだよ。——天空の虹は  
パラポリツク 抛物線、ハイパーポリツク 露滴の虹は双曲線、イリプティツク しかしそれが楕円形でな  
 い限り、伸子は自分の懐ふところに飛び込んで来ない——と。  
 ところが、その間レヴェズの眼に、微かな運動が起つ  
 て、彼が幾何学的な用語を口にするたびごと、なんと  
 なく宙に図式を描いているような、動きが認められる  
 のだった。そこで僕は、その黙劇めいた心理表出に、  
 一つの息詰まるような徴候を発見したのだよ。何故な  
パラポリツク ら抛物線 ) と ハイパーポリツク 双曲線 < を楕円形 イリプティツク ① に続けると、そ  
 の合したものが、KOになるだろうからね。つまり、

地精 (Kobold) の頭二字——KとOとなんだよ。だから、

僕はすかさず、それに暗示的な衝動を与えようと

して、KoboldのKOを除いた残りの四字——boldに

似た発音を引き出そうとしたのだ。するとレヴェズは、

三叉箭さんしややのことをBohrポールと云った。またそれに続いて、

レヴェズが僕を揶揄やゆするのに、あの箭やが裏の蔬菜園か

ら放たれたのだと云って、その中に蕪菁リユーベ (Rübe) と一

語ことを、しきりと躍動させるのだったよ。そこで支倉君、

偶然にも僕は、レヴェズの意識面を浮動している、異

様な怪物を発見したのだ。ああ、僕はステーリング



じやないがね。心像は一つの群グループであり、またそれには  
 フリモビリティフリーモビリティ自由可動性あり——と云ったのは至言だと思ふよ。何  
 故なら、そのレヴェズの一語には、あの男の心深くに  
 秘められていた一つの観念が、実に鮮かな分裂をして  
 現われたからなんだ。いいかね支倉君、最初ス〇と  
 ナムバア・フオムスナムバア・フオムス数型式うかを泛べてから、レヴェズは三叉箭の事を  
 ボールボール Bohr と云い、心中地精コポルトを意識しているのを明らかに  
 した。また、それか、蕪菁リュエベという語ことばを使ったのだが、  
 それには重大な意義が潜んでいた。と云うのは、地精コポルト  
 に誘導されて、必ず聯想しなければならぬ、一つの

秘密がレヴエズの脳裡にあつたからだ。で、試しに一つ、三叉箭ポールと蕪菁リユーベとを合わせて見給え。すると、格子底机ポールドールベ——。ああ、僕の頭は狂っているのだろうか。実は、その机と云うのが、伸子の室へやにあるのだがね」

地精コポルトの札ふだ——今や事件の終局が、その一点にかけられてゐる。もし、法水の推断が真実であるならば、あの澆漑はつらつたる娘は、ファウスト博士に擬せられなければならない。それから、伸子の室に行くまでの廊下が、三人にとると、どんなに長いことだったろうか。しかし、法水は古代時計室の前まで来ると、何を思ったか、

不意に立ち止った。そして、伸子の室の調査を私服に任せて、押鐘夫人津多子を呼ぶように命じた。

「冗談じゃない。津多子を鎖じ込めた文字盤に、暗号でもあるのなら別だがね。しかし、あの女の訊問なら後でもいいだろう」と熊城は、不同意らしい辛々いらいらした口調で云うのだった。

「いや、あの廻転琴時計オルゴールを見るのさ。実は、妙な憑着ひようちやくが一つあつてね。それが、僕を狂気きちがいみたいにしているのだよ」とキツパリ云い切つて、他の二人を面喰めんくらわせてしまった。法水の電波楽器マルティノのような微妙な神経は、触

れるものさえあれば、たちどころに、類推の花弁となつて開いてしまふのだ。それゆえ、一見無軌道のよ  
うに見えても、さて蓋ふたが明けられると、それが有力な  
連字符ともなり、あるいは、事件の前途に、全然未知  
の輝かしい光が投射される場合が多いのであつた。

そこへ、壁に手を支えながら、津多子夫人が現われ  
た。彼女は大正の中期——ことにメーテルリンクの象  
徴悲劇などで名を謳うたわれただけあつて、四十を一、二  
越えていても、その情操の豊かさは、青磁色の眼隈に、  
はだえ肌を包んでいる陶器のような光に、かつて舞台におけ

るメリザンドの面影が髣髴ほうふつとなるのであつた。しかも、夫押鐘博士との精神生活が、彼女に諦観ていかん的な深さを加えたことも勿論であろう。しかし、法水はこの典雅な婦人に対して、劈頭へきとうから些いささかかも仮借せず、峻烈な態度に出た。

「ところで、最初からこんなことを申し上げるのは、勿論無駄ぶしつけしごく至極な話でしょう。しかし、この館の人達の言ことばを借りると、貴女あなたのことを人形使いと呼ばなければならぬのですよ。ところが、その人形と糸ですが、事件の劈頭には、それがテレーズの人形にありました。

そして、またその悪の源は、永生輪廻りんねの形で繰り返されていったのです。ですから夫人おくさん、僕には、貴女に当時の状況をお訊ねして、相変らず鬼談デモニーツシユ的な運命論うかがを伺う必要はないのですよ」

冒頭に津多子は、全然予期してもいなかっただ言葉を聴いたので、そのすんなりした青白い身体が、急に硬こわばったように思われ、ゴクンと音あらく唾つばを嚥のみ込んだ。法水は続けて、その薄気味悪い追求を休めなかつた。

「勿論、貴女があゆうべの夕六時頃に、御夫君の博士に電話

を掛けられたという事も、また、その直後奇怪至極にも、貴女の姿がお室へやから消えてしまったという事も、僕には既とうから判つているのですからね」

「それでは、何をお訊ねになりたいのです。この古代時計室には、私が昏睡させられて鎖じ込められていたのですわ。しかも、あの夜八時二十分頃には、田郷さんが、この扉ドアの文字盤をお廻しになつたと云うそうじゃございませんか」と顔面を微かに怒張させて、津多子はやや反抗気味に問い返した。すると、法水は鉄柵ドア扉から背を放して、凝然じつと相手の顔を見入りながら、

まさに狂つたのではないかと思われるようなことを云い放つた。

「いや、僕の懸念けねんというのは、けつしてこの扉ドアの外ではなく、かえつて内部なかにあつたのですよ。貴女あなたは、中央にある廻転琴オルゴール付きの人形時計を――。また、その童子人形の右手が、シャビエルしやうにん上人シリケキようの遺物筐しりけきようになつていて、報時ちやべルの際に、鐘ちやべルを打つことも御存じでいらつしやいましょう。ところが、あの夜九時になつて、シャビエル上人の右手が振り下されると、同時にこの鉄扉が、人手もないのに開かれたのでしたね」



二、光と色と音——それが闇に没し去ったとき

ああ、シヤビエル上人の手！　それがこの、二重の鍵に鎖された扉ドアを開いたとは……。事実、法水の透視神経が微妙な放出を続けて、築き上げた高塔がこれだったのか。しかし、検事も熊城も、痺しびれたような顔になつて容易に言葉も出なかつた。と云うのは、これがはたして法水の神技であるにしても、とうていそのままを鵜呑うのみに出来なかつたほど——むしろ狂気に近

い仮説だったからである。津多子はそれを聴くと、眩暈めまいを感じたように倒れかかって、辛からくも鉄柵扉で支えられた。が、その顔は死人のように蒼白く、彼女は、絶え入らんばかりに呼吸いきせきつつ、眼を伏せてしまった。法水もさもしてやつたりという風に、会心の笑を泛うかべて、

「ですから夫人おくさん、あの夜の貴女あなたは、妙に糸とか線とか云うものに運命づけられていたのですよ。しかし、その方法となると、相変らず一年一日のごとくで……。いやとにかく、僕の考えていることを実験してみますか

な」

それから、符表と文字盤を覆うている、鉄製の函はこを開く鍵を、真斎から借りて、まず鉄函を開き、それから文字盤を、右に左にまた右に合わせると、扉ドアが開かれた。すると、扉の裏側には、背面が露出している。マリナーズ・コムパスの羅針儀式の機械装置が現われたが、それに法水は、表面では文字盤の周囲に当る、飾り突起に糸を捲き付け、その一端を固定させた。

「ところで、この羅針儀式的特性が、貴女あなたの詭計トリックに最も重大な要素をなしているのです。と云うのは、この合

わせ文字を、閉じる時の方向と逆に辿たどってゆくと、三回の操作で門かんぬきが開く。また、それを反対に行うと、掛金が門孔の中に入ってしまったのですからね。つまり、開く時の基点は閉ざす時の終点であり、また、閉じる時の基点は開く時の終点に相当する訳なのです。ですから、実行はしごく単純で、要するに、その左右廻転を恰好に記録するものがあつて、またそれに、文字盤の方へ逆に及ぼす力さえあれば……。そうすれば、理論上鎖された門が開くということになりました。勿論内部からでは、あの鉄函の鍵は問題ではないのです

よ。で、その記録筒と云うのが、何あろう、あの  
オルゴール  
廻転琴なのでした」

と法水は、糸を人形時計の方へ引いて行って、観音  
開きを開き、その音色を弾く廻転筒を、報時装置に続  
いている引つ掛けから外はずした。そして、その円筒に無  
数と植えつけられている棘とげの一つに、糸の一端を結び  
付けて、それをピインと張らせ、さてそうしてから検  
事に云った。

「支倉君、君は外から文字盤を廻して、この符表どおり  
に扉ドアを閉めてくれ給え」

すると、検事の手によつて文字盤が廻転してゆくにつれて、廻転オルゴール琴の筒が廻りはじめた。そして、右転から左転に移る所には、その切り返しが他の棘に引つ掛つて、三回の操作が、そうして見事に記録されたのである。それが終ると、法水はその筒に、旧もとどおり報時装置の引つ掛けを連続させた。それが、ちようど八時に二十秒ほど前であつた。機械部に連なつた廻転筒は、ジイツと弾条ぜんまいの響を立てて、今行おこなつたとは反対の方向に廻りはじめる。その時固唾かたずを嚙のんで見守つていた一同の眼に、明らかな駭おどろきの色が現われた。何故な

ら、その廻転につれて、文字盤が、左転右転を鮮かに繰り返してゆくではないか。そうしているうちに、ジジイツと、機械部の弾条ぜんまいが物もの懶ろうげな音を立てると同時に、塔上の童子人形が右手を振り上げた。そして、カアンと鐘チャベルに撞木しゅもくが当る、とその時まさしく扉ドアの方角で、秒刻の音に入り混まざって明瞭はつきりと聴き取れたものがあつた。ああ、再び扉が開かれたのだつた。一同はフウと溜ためめていた息を吐き出したが、熊城は舌なめずりをして、法水の側に歩み寄つた。

「なんて、君という人物は、不思議な男だろう」

しかし法水は、それには見向きもせず、すでに観念の色を泛うかべている津多子の方を向いて、「ねえ夫人、おくさんつまり、この詭計トリツクの発因と云うのが、博士にかけられた貴女の電話にあつたのですよ。しかし、それを僕に濃く匂わせたのは、現に抱水クローラを嚙のまされているにもかかわらず、貴女が、実に不可解な防温手段を施シされていたという事です。あの、まるで木乃伊ミイラのように、毛布をクルクル捲き付けられていなければ、恐らく貴女は、数時間のうちに凍死していたでしょう。痲醉マママ剤を嚙のませた、しかし、殺害の意志が



ない——。そういう解しきれない矛盾が、僕の懸念を濃厚にしたのでした。ところで夫人、あの夜貴女がこの扉を開かれて、さてそれからどこへ行かれたものか、当ててみましようか。いつたい、薬物室の酸化鉛の瓶の中には、何があつたのでしよう。あの褪せやすい薬物の色を、依然鮮かに保たせていたのは……」

「ですけど」津多子はすっかり落着いていて、静かな重味のある声音でいった。「あの薬物室の扉が、私がまいりましたときには、すでに開かれておりました。それに、抱水クロラルにも、その以前に手を付けたらし

い形跡が残っていたのですわ。もう申し上げる必要は  
ございませんでしょうが、あの酸化鉛の鑷びんの中には、  
容器に蔵おさめた二グラムのラジウムが隠されてあつたの  
です。それを私は、かねて伯父から聴いておりました  
ので、押鐘の病院経営を救うために、ある重大な決意  
をいたさねばなりませんでした。そして、一月ほど前  
から、この館を離れずに――。ああ、その間、私には  
あらゆる意味での、視線が注がれました。しかし、そ  
れさえもじつと耐こらえて、私は絶えず、実行の機会を  
狙っていたのでございます。ですから、私がこの室へやで

試みましました。いっさいのものは、無論愚かな防衛策なのでございます。もしも、ラジウムの紛失が気づかれた際に、その場合仮空の犯人を、一人作るつもりだったのでした。どうか法水さん、あの、あのラジウムを取り戻しなすつて——先刻押鐘が持ち帰りましたのですから。けれども、この点だけは断言いたしますわ。いかにも、私は盗んだに相違ないのですが、しかし、私の犯行と同時に起つた殺人事件には、絶対関係がございませんのですから」

津多子夫人の告白を聴いて、法水はしばらく黙考し

ていたが、ただもうしばらく、この館に止まるよう命じたのみで、そのまま彼女を戻してしまった。それに、熊城が不服らしい素振を見せると、法水は静かに云つた。

「なるほど、あの津多子という女は、時間的にすこぶる不幸な暗合を持っている。けれども、ダンネベルグ事件以外には、あの女の顔がどこにも現われてはいないのでよ。しかし熊城君、実を云うと、あの電話一つに、もつともつと深い疑義があるのではないかと思うよ。とにかく、久我鎮子の身分と押鐘博士を、至急洗い上

げるように命じてくれ給え」

そこへ、法水の予測が的中したという報知しらせが、私服からもたらされて、はたせるかな地精コポルトの札ふだが、伸子の室へやにある格子底机ポールド・ルーベの抽斗ひきだしから発見されたのだった。そこで法水等は、伸子を引き立ててきたという、旧もとの室に戻ることにした。扉ドアを開くと、嗚咽おえつの聲が聞える。伸子は、両手で覆うた顔を卓上に伏せて、しきりと肩を顫ふるわせていた。熊城は、毒々しい口調を、彼女の背後から吐きかけるのだった。

「君の名が点鬼簿てんきぼから消されていたのも、わずか四時

間だけの間さ。だが、今度は虹も出ないし、君も踊るわけにはゆかんだらう」

「いいえ」と伸子は、キツと顔を振り向けたが、満面に

は滴らんばかりの膏汗あぶらあせだった。「あの札はいつの間に

か、抽斗ひきだしの中に突っ込まれてあつたのですわ。私は、

それをレヴェズ様にだけお話しいたしました。ですか  
らきつとあの方が、それを貴方がたに密告したに相違  
ございませんわ」

「いや、あのレヴェズという人物には、今どき珍しい騎士的精神があるのでですよ」と静かに云いながら、法水

は怪訝けげんそうに相手の顔を瞶みつめていたが、「しかし、本当の事を云うんですよ。伸子さん、あの札はいつたい誰が書いたのですか」

「私、存——存じません」と伸子は、救いを求めるような視線を法水の顔に向けたが、その時、彼女の発汗がますますはなはだしくなつて、舌が異様にもつれ、正確に発音することさえ出来なくなつてしまつた。その——犯人伸子の窮境には、思わず熊城を微笑ほほえましめたものがあつた。ところが、法水はさながら冷静そのもののような態度で、ややしばし、伸子の額に視線を降

り注ぎ、顛顛こめかみに脈打っている、繩のような血管を瞶みつめていた。が、ふと額の汗を指で掬すくい取ると、彼の眉がピンと跳ね上つて、

「こりやいかん。解毒剤げどくざいをすぐ！」と、この状況に予想もし得ない意外な言葉を吐いた。そして、咄嗟とつさの逆転に何が何やら判らず、ひたすら狼狽しきっている熊城等を追い立てて、伸子の身体を愴惶そうこうと運び出させてしまった。

「あの発汗を見ると、たぶんピロカルピンの中毒だろうよ」と暫時しばらくこまねいていた腕を解いて、法水は検事



を見た。が、その顔には、まざまざと恐怖の色が泛<sup>うか</sup>んでいた。「とにかく、あの女が、地精<sup>コボルト</sup>の札<sup>ふだ</sup>を僕等が発見したのを、知る気遣いはないのだから、勿論自殺の目的で嚙<sup>の</sup>んだのではない。いや、たしかに嚙<sup>の</sup>まされたんだよ。それも、けっして殺すつもりではなく、あの迷濛状態を僕等の心理に向けて、伸子に三度目の不運をもたらそうとしたに違いないのだ。ねえ支倉君、それが三段論法の前提となるのも知らずに、あるものを非論理的だと断ずることは出来まい。すると、伸子とピロカルピン——つまりその前提としてだ。まず、壁を

抜き床を透かしてまで、僕等の帷幕いぼくの内容を知り得る方法がなけりやならん訳だ。ああ、実に恐ろしいことじゃないか。先刻さつきこの室へやで交した会話が、ファウスト博士には既とうに筒抜けなんだぜ」

事実まったく、この事件の犯人には、仮象を實在に強制する、不可思議な力があるのかもしれない。熊城は、もはや我慢がならないように息を呑のんだが、

「しかし、今日の伸子には、感謝してもいいだろうと思うよ。実は、先刻さつき僕の部下が、伸子の室へやを捜っている間に、あの女は、クリヴオフの室でお茶を飲んでいた

のだ。ところが、その席上に居合わせた人物というのが、動機の五芒星<sup>ペンタグラム</sup>円から、しつくりと離れられない連中ばかりなんだ。どうだ、法水君、曰く最初<sup>いわ</sup>が旗太郎さ。それから、レヴェズ、セレナ……。あの頭中繃帯しているクリヴオフだつても、その時は寝台の上に起き上っていたと云うんだからね」と熊城が吐いた内容には、この場合、誰しも打たれずにはいなかったであろう。何故なら、それによつて、犯人の範囲が明確に限定されて、従来<sup>これまで</sup>の紛糾混乱が、いつせいに統一された観がしたからだった。そこへ、検事がすこぶる思い

つきな提議をした。

「ところで僕は、これが唯一の機会だチャンスと思うのだよ。

つまり、犯人がピロカルピンを手に入れた——その経

路を明瞭はっきりさせることなんだ。もし、それが津多子なら

ば、十分押鐘博士を通じて——ということも云えるだ

ろう。けれども、それ以外の人物だとすると、まずそ

の出所が、この館の薬物室以外には想像されないと思

うのだがね。だから法水君、僕はホップスじゃないが、

もう一度薬物室を調べてみたら、あるいは犯人の

ステート・オブ・ウオア  
戦闘状態が判りやしないかと思うんだ」

この検事の提議によつて、再び薬物室の調査が開始された。しかし、そこにはピロカルピンの薬罎くすりびんはあつても、それにはどこぞと云つて、手を付けたらしい形跡はなかつた。したがつて、減量は云うまでもないことだが、なにより最初から、一度も使つたことがないと見えて、全体が厚い埃を冠つていた。そして、薬品棚の奥深くに埋もれているのだつた。法水はいつたん失望の色を泛うかべたけれども、突然彼に、莩たぼこを捨てさせてまで叫さばせたものがあつた。「そうだ支倉君はせくら、あまり君の署名サインが鮮かだつたものだから、それに眼くらが眩んで、

僕は些細な事までもうっかりしていたよ。あながちピロカルピンの所在は、この薬物室のみに限らんだ。

元来あの成分と云うのが、ヤポランジイの葉の中に含まれているんだからね。サア、これから温室へ行こう。もしかしたら、最近そこへ出入りした人物の名が、判るかもしれないから……」

法水が目指したところの温室と云うのは、裏庭の蔬菜園の後方にあつて、その側には、動物小屋と鳥禽舎とが列んでいた。扉を開くと、噓とするような暖気が襲つてきて、それは熱に熟れた、様々な花粉の香りが

——妙に官能を唆るそそるような、一種名状しようのない媚臭で、鼻孔を塞いでくるのだった。入口には、いかにも前史的なヤニ羊歯しだが二基あつて、その大きな垂葉を潜たつて凝固土たきの上に下りると、前面には、熱帯植物特有の——たつぷり樹液でも含んでいそうな青黒い葉が、重たそうに繁り冠さり合ひ、その葉陰の所々に、臙脂えんじや藤紫の斑が点綴てんてつされていた。しかし、間もなく灯の中へ、ちよつと馬蓼いぬたでに似た、見なれない形の葉が現われて、それを法水はやポランジイだと云つた。ところが、調査の結果は、はたして彼の云うがごとく、その

茎には六個所ほど、最近に葉をもぎ取つたらしい疵跡きずあとが残されていた。すると、法水は眉間を狭めて、みるみるその顔に危惧きぐの色が波打つてきた。

「ねえ、支倉君、六引く一は五だろう。その五には毒殺的効果があるのだよ。しかし、いまの伸子の場合には、六枚の葉全部が必要ではなかつたのだ。つまり、十分〇・〇一くらいを含んで一枚だけで、あの程度の発汗と発音の不正確を起すことが出来るのだからね。すると、犯人がまだ握っているはずの五枚——。その残りに、僕は犯人の戦闘状態ステート・オブ・ウオアを見たような気がする



のだよ」

「ああ、なんとという怖ろしい奴やつだろう」と神経的な瞬またたきをして、熊城もこころもち顫ふるえを帯びた声で云った。

「僕は毒物というものの使途に、これまで陰険なものがあろうとは思わなかったよ。どうして、あの冷血無比なファウスト博士でなけりや、残忍にも、これほど酷烈な転課手段を編み出せるもんか」

検事は側かたわらを振り向いて、一行を案内した園芸師に訊ねた。

「最近に誰か、この温室に出入りした者があつたかね」

「い、いいえ、この一月ばかりは誰方も……」とその老人は、眼を睜みはつて吃どもつたが、検事を満足させるような回答を与えなかつた。それに法水は、押しつけるような無気味な声音で追求した。

「オイ、本当の事を云うんだ。広間サロンにある

デンドロビウム・テイルシフロム

藤花蘭の色合わせは、ありや、たしか君の芸  
じやあるまいね」

この専門的な質問は、ただちに驚くべき効果をもたらした。まるで老園芸師は、あたかもそれ自身が弓の弦つるでもあるかのように、法水の一打で思わず口にし

てしまったものがあつた。

「しかし、傭人という私の立場も、十分お察し願いたいと思ひまして」と訴えるような眼で、憐憫あわれみを乞うような前提を置いてから、怯おず怯おず二人の名を挙げた。「最初は、あの怖ろしい出来事が起りました当日の午後でございましたが、その時旗太郎様が珍しくお見えになりました。それから、昨日きのうはセレナ様が……、あの方は、この乱咲蘭カテリア・モシユをたいそう好みでございました。ですが、このヤポランジイの葉だけは、仰おっしや言られるまでいつこうに気がつきませんでした」

矮樹わいじゆヤポランジイの枝に、二つの花が咲いた。すな

わち、最も嫌疑の稀薄だった、旗太郎とセレナ夫人にも、一応はファウスト博士の、黒い道士服を想像しなければならず、したがってあの血みどろの行列は、新しい二人を加えることになってしまった。こうして、事件の二日目は、まさに奇矯変態の極致とも云うべき謎の続出で、恐らくその日が、事件中紛糾混乱の絶頂と思われた。のみならず、関係人物の全部が、嫌疑者と目されるに至ったので、その集束がいつの日やら涯はてしもなく、ただただ犯人の、迷路的頭脳に翻弄ほんろうされる

のみだつた。

その二日後——ちようどその日は黒死館で、年一回の公開演奏会が開催される当日であつたが、検事と熊城は、法水の二日にわたる検討の結果を期待して、再び会議を開いた。それが、古めかしい地方裁判所の旧館で、時刻はすでに三時を廻つていた。しかし、その日の法水には、見るからに凄愴せいそうな気力が漲みなぎつていた。すでに一つの、結論に達したのではないかと思われたほど、顔は微かに熱ばんで、その紅潮には動的ダイナミックなものがふる顫ふるえている。法水は軽く口をしめしてから、切り出

した。

「ところで僕は、一々事象を挙げて、それを分類的に説明してゆくことにする。それで、最初はこの靴跡なんだが……」と卓上に載せてある二つの石膏型を取り上げた。「勿論これに、くどくどしい説明は要るまいけれど、まず最初が、小さい方の純護謨製の園芸靴——だ。これは、元来易介の常用品で、園芸倉庫から発して、乾板の破片との間を往復している。ところが、その歩行線を見ると、形状かたちの大きさに比べると、非常に歩幅が狭く、しかも全体が、電光形ジグザグに運ばれているのだ。

また、その上足型自身にも、僕等の想像を超絶しているような、疑問が含まれている。だって考えて見給え、易介みたいな侏儒こびとの足に合うような靴で、その横幅が、一々異なっているじゃないか。その上、爪先の印象を中央の部分に比較すると、均衡上幾分小さいように思われるのだ。おまけに、後踵部こうしように重点があつたと言えて、その部分には、特に力を加えたららしい跡が残されている……。それから、もう一つの套靴オヴァ・シューズの方は、本館の右端にある出入扉ドアから始まっていて、中央の張出間アプスを弓形に添い、やはりそれも、乾板の破片との

間を往復しているのだ。しかしその方は、やや靴の形状に比較して小刻みだと云うのみで、歩線も至って整然としている。そして、疑問と云うのは、かえって靴型の方にあつたのだ。つまり、爪先と踵と両端がグツと窪んでいて、しかも、内側に偏曲した内翻の形を示している。またさらに、それが中央へ行くに従い、浅くなっているのだ。勿論、乾板の破片を挟んでいるのだから、その二条の靴跡が何を目的としたか——それはすでに、明らかだと云って差支えないだろう。しかも、それが時間的にも、あの夜雨が降り止んだ、十一



時半以後であることが証明されているし、また、一個  
所オヴァ・シユーズ套靴の方が園芸靴を踏んでいて、二人がその場  
所に辿たどりついた前後も、明らかにされているのだ。と  
ころが、仮令たとえこれだけの疑題クエスチヨネアを提供されても、その  
結論に至って、僕等は些ちひかもまごつくところはないの  
だよ。實際家の熊城君なんぞは既とうに気がついてい  
るうが、その二つの足型を採証的に解釈してみると、  
大男のレヴェズが履く套オヴァ・シユーズ靴の方には、さらにより以  
上かいいい魁偉な巨人が想像され、また、侏儒こびとの園芸靴を履  
いた主は、むしろ易介以下の、リリパット人か豆左衛門

でなければならぬからだ。云うまでもなく、そういう人体形成の理法を無視しているようなものが、まさかこの人間世界に、あり得ようとは思われないだろう。勿論、自分の足型を覆い隠そうとしての奸策で、それには、容易ならぬ詭計が潜んでいるに違いないのだ。そこで、まず順序として、あの夜その時刻頃、裏庭へ行つたという易介が、そもそも二つのいずれであるか——それを第一に、決定する必要があると思うのだよ」

と異常に熱してきた空気の中で、法水の解析神経が

ズキズキ脈打ち出した。そして、靴型の疑問に縦横の刀メスを加えるのだった。

「ところが、その真相と云うのが、判つて見ると、すこぶる悪魔的な冗談なんだよ、驚くじゃないか。巨漢レヴェズのオヴァ・シユーズ靴を履いたのが、かえつて、その半分もあるまいと思われる、わいしよ矮小な人物なんだ。それから、次にあのスウィフト（『ガリヴァー旅行記』の作者）的な園芸靴だが、その方は、まず、レヴェズほどではないだろうが、とにかく、常人とさして変らぬ、たいく体軀の者に相違ないのだ。そこで、僕の推定を云うと、まずオヴァ・シユーズ套靴の方に、

易介を当ててみたのだが、どうだろうね。ねえ熊城君、たしかあの男は、そでろうか拱廊にあつた具足の鞠沓まりぐつを履いて、その上に、レヴェズのオヴァ・シューズ套靴を無理やり嵌め込んだに違いないのだ」

「明察だ。いかにも、易介はダンネベルグ事件の共犯者なんだ。あの行為の目的は、云わずと知れた毒入りオレンジ洋橙の授受であつたに相違ない。それを、あれほど明白な結合動作を——コンビネーション。今の今まで、君のうよ紆余曲折的な神経が妨げていたんだぜ」と熊城はごうぜん傲然と云い放つて、自説と法水の推定が、ついに一致したのをほくそ笑む

のだった。しかし、法水は弾き返すように嗤った。

「冗談じゃない。どうして、あのファウスト博士に、そ

ポルターガイスト

んな小悪魔が必要なもんか。やはり、悪鬼の陰険な戦

術なんだよ。で、仮令たとえば家族の中に、一人冷酷無残な

人物があつたとしよう。そして、その一人が黒死館中

の忌怖きふの的であつたばかりでなく、事実においても、

易介を殺したのだと仮定しよう。ところが易介は、あ

の夜ダンネベルグ夫人に、付き添っていたのだからね。

その一事が、とうてい避けられない、先入主になつて

しまうのだよ。だから、仮令たとえその人物のために、巧み

に導かれて、あの乾板の破片があつた場所に行き、しかもその翌日殺されたにしてもだ。当然、易介は共犯者と目されるに違いないのだ。そして、主犯の見当がその一人にではなく、むしろ易介と親しかつた圏内に落ちるのが、当然だと云わなければならんだろう。それから、園芸靴の方には、いったんは消えたはずだつた、クリヴオフ夫人の顔が、また現われているのだがね。ああ、そのクリヴオフなんだよ。問題はあのカウカサス猶<sup>ジュウ</sup>太<sup>ウ</sup>人の足にあつたのだ。ところで熊城君、君は、ババンスキイ痛点という言葉を知っているかね。

それは、クリヴオフ夫人のような、初期の脊髄癆患者せきずいろうろうによく見る徴候で、後踵部こうしゅうぶに現われる痛点を指して云うのだよ。しかも、それを重圧すると、恐らく歩行には耐えられまいと思われるほどの疼痛とうつうを覚えるんだが……」

しかし、その一言に武具室の惨劇を思い合わせれば、まず狂気の沙汰としか信じられないのだった。熊城は吃驚びっくりして眼を円まるくしたが、それを検事が抑えて、「勿論偶発的なものには違いないだろうが、しかし、僕等の肝臓に変調をきたしていない限りだ。たしか、あ

の園芸靴には、重点が後踵部にあつたはずだがね。とにかく法水君、問題を童話から、他の話に転じてもらおう」

「そうは云うがね、あのファウスト博士は、アベルスのフエルプレツヘリツシエ・モルフオロギイ

『犯罪形態学』にもない新手法を発見したの

だよ。もしあの園芸靴を、逆さに履いたのだとしたら、どうなんだろう」と法水は、皮肉な微笑を返して云つた。「もつとも、あれが純護謨製ピュアラバアの長靴だからこそ可能

な話なんだが、しかし、その方法はと云つても、爪先を靴の踵かかとに入れるばかりではない。つまり、踵の足型



の中へ全部入れずに、幾分持ち上げ気味にして、爪先で靴の踵の部分を強く押しながら歩くのだよ、そうすると、踵の下になった靴の皮が自然二つ折れて、ちようど支<sup>か</sup>い物を当てがったような恰好になる。したがって、靴の踵に加えた力が直接爪先の上には落ちずに、幾分そこから下った辺りに加わるだろうからね。いかにも、足の矮小<sup>わいしょう</sup>なものが、大きな靴を履いたような形が現われるのだ。のみならず、それが弛<sup>ゆる</sup>んだ弾条<sup>スプリング</sup>のように不規則な弾縮をするから、そのつどに、加わってくる力が異なるといふ訳だろう。したがって、どの靴

跡にも、一々わずかながらも差異が現われてくるのだ。すると、右足に左靴、左足に右靴を履くことになるから、歩線の往路が復路となり、復路が往路となつて、すべてが逆転してしまふのだよ。その証拠と云うのは、乾板のある場所で廻転した際と、かれしほ 枯芝をまた跨ぎ越した時と——その二つの場合に、ききあし 利足がどつちの足か吟味してみるんだ。そうしてみたら、この差数が明確に算出されてくるじゃないか。で、そうなるとはせくら 支倉君、どうしてもクリヴオフ夫人が、このトリツク 詭計を使わねばならなかつた——という意味がはつきり 明瞭するだろう。それは単に、

あの偽装足跡を残すばかりではなかつたのだ。なににより、最も弱点であるところの踵かかとを保護して、自分の顔を足跡から消してしまふにあつたのだよ。そして、その行動の秘密と云うのが、あの乾板の破片にあつた——と僕は結論したいのだ」

熊城は莩たほこを口から放して、驚いたように法水の顔を瞶みつめていた。が、やがて軽い吐息をついて、「なるほど……。しかし、ファウスト博士の本体は、武器室のクリヴォフ以外にはないはずだぜ。もし、それを証明出来ないのだつたら、いつそのこと、君の嬉劇シユポルト的な散策

は、やめにしてくれ給え」

それを聴くと、法水は押収してきた火術弩かじゅつどを取り上げて、その本弭もとはじ（弓の末端）の部分部分を強く卓上に叩き付けた。すると意外にも、その弦つるの中から、白い粉末がこぼれ出たのであった。法水は、唾然となつた二人を尻眼に語りはじめた。

「やはり、犯人は僕等を欺かなかつたのだ。この燃えたラムミイの粉末が、とりもなおさず、あの、ザラマンダー・ソル・グルーエン火精よ燃えたけれ——なんだよ。ラムミイ——それをトリウムとセリウムの溶液に浸せば、燈火瓦斯ガスのマント

ル材料になるし、その繊維は強靱きょうじんな代りに、些さ細さいな熱にも変化しやすいのだ。実は、その繊維の撚よったものを、二本甘瓢かんびょう形かたに組んで、犯人は弦の中に隠しておいたのだよ。ところで、よく無意識に子供などがやる力学的な問題だが、元来弓というものは、弦を縮めてそれを瞬間弛ゆるめたにしても、通例引き絞ひきしぼって、発射したと同様の効果があるのだ。つまり犯人は、あらかじめ弦の長さよりも短いラミイ——それも長さの異なる二本を使って、その最も短い一本で、その長さまでに弦を縮めたのだ。無論外見上も、撚り目を最極まで

固くすれば、不審な点は万々にも、残らないと思うのだがね。そして、そこへ犯人が、あの窓から招き寄せたものがあつたのだ」

「しかし、ザラマンダー火精ではあの虹が……」と検事は、眩惑されたように叫んだ。

「うん、その火精だが……かつて、みずびん水罎に日光を通すと

いう技巧を、ルブランが用いた。けれども、その手法は、すでに、リッテルハウスの、

ユーベル・デイ・ナツユルリッヘン・フェルプレッヘン

『偶発的犯罪に就いて』の中に、述べられてある。しかし、この場合は、その水罎に当るものが、窓

硝子の焼泡にあつたのだよ。つまり、それがあの上下窓の中で、内側のものの上方にあつて、いったんそこへ集つた太陽の光線が、外側の窓枠にある刳り飾り——知つてゐるだろうが、錫張りの盃形をしたものにすずば さかすきがた集中したのだ。したがつて、そこから弦の間近に焦点が作られるので、当然壁の石面に熱が起らねばならない。そして、弦には異常はなくても、まず変化しやう。いらミイの方は、組織が破壊されるのだ。ところが、そこに、犯人の絶讚的な技巧があつたのだよ。と云うのは、二本のラミイの長さを異にさせた事と、また、

それを弦つるの中で甘瓢形かんびょうに組み、その交叉まじりしている点を弦の最下端——つまり、弓の本弭もとほじの近くに置いたという事なんだ。すると、最初に焦点が、その交叉点よりやや下方に落ちて、まず弦よりやや短い一本が切断される。そうすると、幾分弦が弛むだろうから、その反動で撚り目よが釘からはずれ、したがって弩どが壁から開いて、当然そこに角度が作られなければならない。それから、太陽の動きにつれて焦点が上方に移ると、今度は弦を、その長さまでに縮めた最後の一本が切断される。そこで、箭やが発射されて、その反動で弩が床の



上に落ちたのだよ。勿論床に衝突した際に、把手ハンドルが発射された位置に変わったのだらうけれど、元来把手ハンドルによる発射ではなく、また、ラミイの変質した粉末も、ついに弦の中から洩れることがなかったのだ。ああクリヴォフ——あのカウカサス猶太人ジユウは、たしかグリーン家のアダの故智を学んだのだ。しかし、最初は恐らく、背長椅子バルダキンに当てるくらいのところだったろう。ところが、その結果偶然にも、あの空中曲芸サーカスを生んでしまったものだ」

まさに法水の独擅場どくせんじょうだった。しかし、それには一点

の疑義が残されていて、それをすかさず検事が衝いた。「なるほど、君の理論には陶醉する。また、それが現実にも実証されている。しかし、とうていそれだけでは、クリヴオフに対する刑法的意義が十分ではないのだ。要するに、問題と云うのは、その二重の反射に必要な窓の位置にあるのだよ。つまり、クリヴオフか伸子か——そのどつちかの道徳的感情にある訳じゃないか」

「それでは、伸子の演奏中に、幽霊的な倍音を起させたのは……。事実支倉君、あの間に、鐘楼から尖塔へ行く、鉄梯子を上った者があつたのだ。そして、中途に

ある、十二宮の円華窓えんげまどに細工して、あの楽玻璃グラス・ハーモニカめいた、裂罅ひびを塞ふさいでしまったのだよ」と法水は峻烈な表情をして、再び二人の意表に出た。ああ、黒死館事件最大の神秘と目されていた——あの倍音の謎は解けたのだらうか。法水は続けた。「しかし、その方法となると、一つの射影的な観察があるにすぎない。つまり、鐘楼の頭上には円孔が一つ空いていて、その上が巨きな円筒となり、その左右の両端が十二宮の円華窓えんげまどになつてゐる。その円筒の理論を、オルガン管パイプにさえ移せばいいのだよ。何故なら、両端が開いている管パイプの一端が閉

じられると、そこに一音階<sup>ワン・オクターヴ</sup>上の音が、発せられるか  
 らなんだ。しかし、それ以前に犯人は、鐘楼の廻廊に  
 も現われていた。そして、風精<sup>ジルフス</sup>の紙片を貼り付けた  
 ——三つあるうちの中央の扉<sup>ドア</sup>を、秘<sup>こつ</sup>そりと閉めたの  
 だったよ。何故なら支倉君、君はレイリー卿が、この  
 世には生物の棲<sup>す</sup>めない音響の世界がある——と云った  
 言葉を知っているかね」

「なに、生物の棲めない音響の世界!？」と検事は眼を円  
 くして叫んだ。

「そうなんだ。それが、実に凄愴<sup>せいそう</sup>をきわめた光景なん

だよ。つまり僕は、鐘鳴器カリラロン特有の唸りうなの世界を指して云うのだ」と法水は、押し迫るような不気味な声音で云った。「そうすると、自然問題が、中央まんなかの扉ドアを何故閉めなければならなかったかという点に起つてくる。しかし、その扉ドアのある一帯が楕円形の壁面をなして、それには、音響学上凹面鏡に似た性能を含んでゐるからなんだ。つまり、いわゆる死点デッドポイントとは反対に、鐘鳴器カリラロン特有の唸りを一点に集注する——。言葉を換えて云うと、その壁面と云うのが、鍵盤の前にいる伸子の耳を焦点とする位置にあつたからなんだよ。しかも、伸子

を倒し、また、廻転椅子にも疑問を止めた原因と云うのは、その激烈な唸りに加えて、もう一つ、伸子の内耳にもあつたのだ。事実先刻さっきの陳述は、それを語り尽してあますところがなかつたのだよ」

「冗談じゃない。あの女は、右の方に倒れたのを記憶している」と云っているぜ。しかし、当時の伸子の姿勢は、左の方へ廻転した跡を残しているのだ」と熊城が聴き咎とがめると、法水はおもむろに葭たばこに火を点じてから、相手に微笑を投げた。

「ところが熊城君、ヘガール（独逸の犯罪精神病学者、バーデンの国

立病院医員）の類例集の中には、四つ角で衝突したヒステリー患者が、その側を反対に陳述したという報告が載っている。事実そのとおりで、発作中にうけた感覚は、その反対の側に現われるものなんだよ。しかし、この場合問題と云うのは、けっしてその一つばかりではない。もう一つ、やはり発作中には、聴覚が一方の耳に偏してしまう——という徴候にもあつたのだ。そして、伸子にはそれが右の耳にあつたので、扉を鎖された瞬間起つたあの猛烈な唸り——。ほとんど音が意識出来ないほど、むしろ器官の限度を超絶したものが

襲い掛つてきて、それが内耳に、燃え上るような燄衝きんしやうを起したのだよ。つまり、人工的に迷路震蕩症しんとくを企んだという訳で、勿論その結果、全身の均衡が失われたことは云うまでもないのだ。そこで、熱と右の耳は左へ——というヘルムホルツの定則どおりに、たちまち全身が捻ねじれていったのだよ。そして、廻転が極限まで詰まっている椅子の上で、そのまま左に傾きながら倒れていったのだ。しかし、それが判つたところで、けつして犯人が指摘されるものではなく、むしろ伸子の無辜むこを明らかにしたにすぎない。いや、ただ単に、



伸子を倒した最後の止めを詳しくしたのみで、依然として犯人の顔は、鐘鳴器室カリリヨンの疑問の中に隠されている。そして、問題が室の内部を離れて、今度は、廊下と鉄梯子に移ってしまったのだよ。しかし、こうして伸子が犯人でないとすると、武具室のあらゆる状況が、クリヴオフに傾注されてゆく——それも、けだしやむを得んだろうがね」

こうして、分析したものが一点に綜合されるや、それが検事と熊城を、瞬間眩惑の渦中に投げ入れてしまった。しかし、その間熊城は、さも落ち着かんとす

るもののように、黙然と<sup>たばこ</sup> 莩を喫<sup>くゆ</sup>らしていたが、ややあつてから悲しげに云つた。

「しかし法水君、どの場面でもクリヴオフの不在<sup>アリバイ</sup>証明は、とうてい打ち破<sup>こわ</sup>し難いものなのだよ。どうしてもメースンの『矢の家』みたいに、坑道でも発見されないかぎり、この事件の解決は結局不可能のような気がするんだ」

「それでは熊城君」と法水は満足そうに<sup>うなず</sup> 頷いて、<sup>ポケット</sup> 衣袋の中から、例のデイグスビイの、奇文を記した紙片を取り出した。すると、そこに何事か異常なものが予期さ

れてきて、二人の顔に、なかば怯々おすおすとした生色が這い上つていった。法水は静かに云つた。

「実を云うと、クリプトメニツエデイグスビイの秘密記法も、既とうにあの

ビハイインド・ステイアス大階段の裏——だけで尽きていて、この奇文の中にあ

る、告白と呪詛じゆその意志を、示すに止まっていると考

られていた。ところが、故意に文法を無視したり冠詞

のない点を考えると、そこから秘密記法の、おぞまし

い香気が触れてくるように思われた。ねえ熊城君、一

つの暗号からまた新しいものが現われる——それを子

持ち暗号と云つて、ちようどこの二つの文章が、それ

に当るのだよ。ところで、くどくどしい苦心談は、抜きにして、さつそく解読法を述べることにしよう。元来、暗号とは一見似てもつかぬ、二つの奇文のように見えるが、そのうち、最初の短文の頭文字だけを、列ねたものが暗号語なんだ。また、その鍵キは、もう一つの創世記めいた、文章の中に隠されてあつたのだよ。しかし、僕も最初は、誤った観察をしていた。あれは *qikjyikkjubi* と、全部で十四文字になる。すると、二文字を一字とすれば、七文字の単語が出来上つて、*ク*と続いた部分が二個所もあるのだから、それが *e* と

かsとかの利字きぎじを暗示するように思われる。けれども、単語一つでは、恐らく意味をなさぬだろうと思つて、間もなくその考えを捨ててしまった。

そこで、次に僕は、その全句を二つないし三つの小節に分けようと試みたのだ。そして、それには訳もなく成功することが出来たのだよ。何故なら、中央にkが三つ並んでいる部分があるだろう。その二番目と三番目との間を截たち割れば、当然二つの小節に、不自然でなく分けることが出来るからなんだ。ねえ熊城君、同じ文字が三つ続くなんて、そんな道理がけっしてあ

ろう気遣いはないし、また、重複<sup>ダブ</sup>った文字から始まる単語というのは、ホンの数えるほどしかないからだよ。で、そうしてから……」

とデイグスビイが書き残した不思議な文章の一句一句に、法水は次のような番号を付けていった。

① エホバ神は半陰陽なりき。 ② 初めに自らいと  
なみて、双生児を生み給えり。 ③ 最初に胎より  
出では、女にしてエヴと名付け、次なるは男  
にしてアダムと名付けたり。 ④ 然るに、アダム  
は陽に向う時、臍より上は陽に従いて背後に影  
をなせども、臍より下は陽に逆いて前方に影を  
落せり。 ⑤ 神此の不思議を見ていたく驚き、ア  
ダムを畏れて自らが子となし給いしも、エヴは  
常人と異ならざれば婢となし、 ⑥ さてエヴとい  
となみしに、エヴみごも 娠りて女兒を生みて死せり。  
 ⑦ 神その女兒を下界に降して人の母となさしめ  
給いき。

「まずこんな風にして、僕はこの文章を七節に分けてみたのだ。そして、それぞれの小節から、そこに潜んでいる解語の暗示を、探り出そうとしたのだった。ところで、文中の第一節だが、僕はこの句を人間創造という意味に解釈した。云わばすべての物の創め——例えて云うと伊呂波のい、ABCのAなのだ。それから第二節——これが一番重要な点なんだよ。ねえ熊城君、それが双生児を生み給えり、——なんだろう。それで双生児と云えば、さしずめ㊦とか㊧とか㊨とか云う



ような、文字的な解釈を誰しも想像したくなるものだ。ところが、この場合はすこぶる表象的な意味があつて、それが、母胎内における双生児ふたごの形を指しているのだつたよ。ところが熊城君、だいたい双生児というものが、母の子宮内でどんな恰好をしているか、恐らく知らぬはずはないと思うがね。必ず一人が逆さになつていて、一人の頭ともう一人の足といった具合で、つまり、ちようどトランプの人物模様みたいに、頭尾相同じという恰好なんだよ。そこで、pとdとを抱き合わせて見給え。アルファベットのpとdの中で、てつきり

双生児ふたごの形が出来るじやないか、そして、それに第一

節の解釈を加えれば、当然pかdかそのいずれかが、アルファベットのaの位置を占めているに違いないのだ。しかし、まだそれだけでは、要するに別個の暗号を作るにすぎないし、またqとbでも同じようだけれど、それでは解答が、楔形文字キユネイフォルムか波斯文字ネスキみたいになつてしまふのだよ」

それから一息いれた体ていで、冷たくなつた残りの紅茶を不味まずそうに流し入れてから、法水は一気に語り続けた。

「ところで、それがすんで第三節以降になると、初めてそこで、dとpとが区分されるのだ。つまり、最初に生まれたのが女で次が男——なんだから、頭を下に向けているdがエヴで、pがアダムに当る訳だろう。それから、第五節にある子と云う語と、七節の母ことばという語を、それぞれに子音または母音と解釈するのだ。つまり、ここまでのところでは、dが母音pが子音の、それぞれ冠頭を占める文字に当て嵌はまることになるけれども、しかし、第四節と第六節でもって、それをさらに訂正しているのだ。

(作者より——。次の行から現われる暗号の説  
 明が、幾分煩瑣ほんさに過ぎるかと思われますので、  
 相互の識別を容易ならしむるために、暗号の部  
 類に属する欧文活字を、ゴシック体で現わして  
 おきました。どうかそのおつもりで)

ところで、第四節には臍ほぞという一字があるけれども、  
 それを全体の中心という意味に解釈するのだ。つまり、  
**p**を子音の首語である**b**に当てて、**b c d f ……**の下

へ **p q r s** と符合させてゆくと、**n** に当る **b** が、**p** から最終の **n** までの、どつちから数えてもちようど中央に当る理屈になる——それが臍ほぞという一字に表象をなしているのだ。そうすると、第四節の前半には、臍ほぞから上の影は自然の形で背後に落ちる——とあるのだから、**b** から **n** ——すなわち **p** から **b** までは、依然そのまま差支えないのだ。けれども、続く後半になると、変化が起つてくる。

臍ほぞより下の影が、差してくる陽に逆らつて前方に投影するといふ文章の解釈は、影——すなわち **A B C** の アルファベット

順序を、今度は逆にしろという暗示に相違ないのだ。そこで、前半の排列をそのままに進めてゆけば、当然 **n** の次の **p** に符合するのが、**b** の次の **c** になる順序だ。けれども、それを転倒させて、最終の **z** に当るはずの **n** を、**p** に当ててるのだ。したがって、**p q r s** に対して **c d f g** ——とするとところを、**n m i k** ……と、尻から逆立ちにした形で符合させてゆく。だから結局、子音の暗号が、次のような排列になっってしまうのだよ。

**b c d f g h j k l m n p q r s t v w x y z**

pqrstvwxyzbnmlkjhgfd

それから、続いて第六節では、エヴ<sup>みごも</sup>妊りて女兒を生む——という文章に意味がある。と云うのは、エヴすなわちdの次の時代——つまりa b c dと数えて、dの次のeを暗示しているのだ。そして、それに第七節の解釈を加えると、eが母音の首語aに当ることになるのだから、a e i o uを**e i o u a**と置き換えたものが、結局母音の暗号になってしまったのだ。そうすると、あの秘密<sup>クリプトメニツエ</sup>記法の全部が、<sup>クレストレッツス</sup>crestless stone——とな

る。それで、まず解読を終ったという訳さ」

「なに、クレストレックス・ストーン!?」と検事は思わず、頓狂な叫び声を立てた。

「そうなんだ、曰く紋章のない石——さ。君は、ダンネベルグ夫人が殺された室へやを見て、そこの壁炉が、紋章を刻み込んだ石で、築かれていたのに気がつかかなかつたかね」と法水はそう云つて、出しかけたたばこを再び函ケースの中に戻してしまった。その瞬間、あらゆるものが静止したように思われた。

ついに、黒死館事件の循環論の一隅が破られ、その



鎖の輪の中で、法水の手がファウスト博士の心臓を握りしめてしまった——ああ閉幕。カーテン・フォール。

それがちょうど六時のことで、戸外にはいつしか煙のような雨が降りはじめていた。その夜黒死館には、年一回の公開演奏会が催されていて、毎年の例によれば、約二十人ほど音楽関係者が招待されることになっていった。会場はいつもの礼拝堂で、特にその夜に限り、臨時に設備された大装飾灯シャンデリアが天井に輝いているので、いつか見た、微かにゆらぐ灯の中から、読経オルガンや風琴の音でも響いてきそうな——あの幽玄な雰囲気は、その

夜どこへかけし飛んでしまつたかのように思われた。

けれども、その扇形をした穹窿きゆうりゆうの下には、依然中世的  
的好尚が失われていなかった。楽人はことごとく假髮かつら  
を付け、それに眼が覚さめるような、朱色の衣裳を着てい  
るのである。法水一行が着いた時は、曲目の第二が始  
まつていて、クリヴオフ夫人の作曲に係かかわる、変口調  
の豎琴ハープと絃樂三重奏が、ちょうど第二樂章に入つたば  
かりのところだつた。豎琴ハープは伸子が弾いていて、その  
技量が、幾分他の三人——すなわち、クリヴオフ、セ  
レナ、旗太郎に劣るところは、云わば瑕瑾かきんと云えば瑕

瑾だつたらうけれども、しかし、それを吟味する余裕ゆとりもないのだつた。と云うのは、色と音が妖しい幻のよう  
 うに、入りみだれている眼前の光景には、たつた一目  
 で、十分感覚を奪つてしまふものがあつたからだ。  
 下髪さげおの短いタレイラン式の仮髪かつらに、シュヴェツインゲ  
 ン風を模した宮廷楽師カペルマイスターの衣裳。その色濃く響の高い絵  
 には、その昔テムズ河上におけるジョージ一世の音楽  
 饗宴が——すなわちヘンデルの、「ウオーター・ミュージック水 楽」初演  
 の夜が髣髴ほうふつとなつてくるように、それはまさしく、燃  
 え上らんばかりの幻であり、また眩惑の中にも、静か

な追想を求めてやまない力があつた。

法水一行は、最後の列に腰を下して、陶醉と安泰のうちにも、演奏会の終了を待ち構えていた。しかも、彼等のみならず、誰しもそうであつたろうが、このように煌々こうこうと輝く大裝飾灯シヤンデリヤの下では、まずいかなるファウスト博士といえども、乗ずる隙は、万が一にもあるまいと信じられていた。ところが、そのうち豎琴ハープのグリッサンドが、夢の中の泡のように消えて行つて、旗太郎の第一提琴ヴァイオリンが主題の旋律を弾ひき出すと、……その時、実に予想もされ得なかつた出来事が起つたので

ある。突然聴衆の間から湧き起つた、物凄じい激動とともに、舞台が薄気味悪い暗転を始めたのであつた。

不意に装飾灯シャンデリヤの灯が消えて、色と光と音が、一時に暗黒の中へ没し去つた。と、ちようどそれと同時に、何者が発したもののか、演奏台の上で異様な呻うめき声起つたのである。続いて、ドカツと床に倒れるような響がしたかと思うと、投げ出されたらしい絃楽器が、弦と胴をけたたましく鳴らせながら、階段を転げ落ちていった。そして、その音がしばらく闇の中で顫ふるえはためいていたが、杜絶とだえてしまうと、もはや誰一人声

を発する者もなく、堂内は云いしれぬ鬼氣と沈黙とに包まれてしまった。

呻吟しんぎん

と墜落の響――。

たしか四人の演奏者の中で、

そのうち一人が斃たおされたに相違ない。そう思いながら、法水が凝然じつと動悸どうきを押えて耳を澄ましているところ、どこかこの室へやの真近から、ちようど瀬にせせらぐ水流のような、微かな音が聴えてくるのだった。と、その矢先、壇上の一角に闇が破られて、一本の燐寸マツチの火が、階段を客席の方に降りてきた。それから、ほんの一瞬ときであつたが、血が凍り息窒いきづまるようなものが流れはじめ

た。しかし、その光が、妖怪めいたはためきをしながら、しきりと床上を摸索まさぐつている間でも、法水の眼だけはその上方に睜みひらかれていて、鋭く壇上の空間に注がれていた。そして、闇の中に一つの人容ひとがたを描いて、じいつと捉まえて放さない幻があつた。

仮令よしんば犠牲者は誰であつても、その下手人は、オリガ・クリヴオフ以外にはない。しかも、あの皮肉な冷笑的な怪物は、法水を眼下に眺めているにもかかわらず、悠々ゆうゆうと一場の酸鼻劇さんびを演じ去つたのである。恐らく今度も、矛盾撞着が針袋のように覆うていて、あの畏懼いぐ

と嘆賞の気持を、必ずや四度よたび繰り返すことであろう。しかし、擲弾てきだんの距離はしだいに近づいて、すでに法水は、相手の心動を聴き、樹皮のように中性的な体臭を嗅かぐまでに迫っていたのだ。ところが、その矢先——焰うずみびの尽きた煨うずみびが弓のように垂しなだれて、燐寸マツチが指頭から放たれた。と、キアツという悲鳴が闇をつんざいて、それが伸子の声であるのも意識する余裕ゆとりがなく、法水の眼は、たちまち床の一点に釘づけされてしまった。見よ——そこには硫黄のように、薄っすら輝き出した一幅の帯がある。そして、その下辺のあたりから、



幾つとない火の玉が、チリチリと捲き縮んでいつて、現われてはまた消えてゆくのだった。しかし、それに眼を止めた瞬間、法水のあらゆる表情が静止してしまつた。彼の眼前に現われた一つの驚くべきもの以外の世界は——座席の背長椅子バルダキンも、頭上に交錯くみかわしている扇形の穹窿きゆうりゆうも、まるで嵐の森のように揺れはじめて、それ等がともども、彼の足元に開かれた無明の深淵の中へ墜ち込んでゆくのだつた。実に、その消え行く瞬間の光は、斜めに傾かしいで仮髪かつらの隙から現われた、白い布の上に落ちたのである。それは擬まぎれもなく、武具室

の惨劇を未だに止めている額の繃帯ではないか。ああ、オリガ・クリヴオフ。再度法水の退軍だった。斃たおされたのは誰であろう、彼の推定犯人クリヴオフ夫人だったのだ。





第八篇 降矢木家の壊崩



一、ファウスト博士の拇指痕ぼしこん

こうして、再びこの狂気きちがいがいすころく双六は、法水の札を旧もとの振り出しに戻してしまった。しかし、その悲痛な瞬間が去ると同時に、法水のりみずには再び落着きが戻ってきた。けれども、その耳元に、代り合つて這はい寄つてきたものがあったのだ。と云うのは、先刻さつきからあるいは幻聴ではないかと思われていた、あの水流のような響だったのである。恐らく角柱のような空間を通つたり、ある

いはまた、それに窓硝子の震動なども加わったりするせいもあるだろうが、今度は前にも倍増して、さながら地軸を震動させんばかりの轟きであつた。そして、そのおどろと鳴り轟く響が、陰惨な死の室の空気を揺すりはじめたのである。それこそ、中世独逸の伝説——「ヴァルブルギス魔女集会」の再現ではないだろうか。幾つかの積石と窓を隔てて、たしか、この館のどこかに瀑布が落ちて、いるのだ。それが、目前の犯行に、直接関係があるかどうかはともかくとして、あるいは、ファウスト博士特有の裝飾癖が壯觀嗜みであるにもせよ、とうて



いそのような荒唐無稽な事実が、現実こうとうむけいに混同していよ

うとは信じられぬのである。ああ、その瀑布の轟き

——ほなやか グロテスク華美な邪魅な夢は、まさにいかなる理法をもつて

しても律し得ようのない、変畸狂態のきわみではない

か。しかし法水は、その狂わしい感覚を振りきって叫

んだ——「開閉器スイッチを、灯を！」

すると、その声に初めて我に返ったかのごとく、聴

衆はドツと一度に入口へ殺到した。その流れを、暗黒

と同時に扉ドアを固めた熊城くましろが制止したので、しばらくそ

の雑沓混乱のために、開閉器スイッチの点火が不可能にされて

しまった。あらかじめ観客の注意を散在せしめないうちに、階下の一带を消燈しておいたので、廊下の壁燈が仄ほんのりと一ツ点ついているだけ、広間サロンも周囲の室も真暗まっくらである。その喧囂けんぎょうたるどよめきの中で、法水は、暗中の彩塵を追いながら黙考に沈みはじめた。そこへ、検事が歩み寄つて来て、クリヴオフ夫人が背後から心臟を刺し貫かれ、すでに絶命しているという旨を告げた。

しかし、その間に法水の推考が成長していつて、ついに洋琴線ピアノのように張りきってしまった。そして、目

前の惨事に、最初から現われてきた事象を整理して、その曲線に、一本の切線カッティング・ラインを引こうと試みた。——

第一、演奏者中にレヴェズがいないという事だ。(しかし、聴衆の中にも彼の姿は見出されなかつたのである)。それから、暗黒と同時にこの室へやが密閉されたという事——つまり、事件の発生前後の状況が、ともに同一であるという事だ。ところが、最後の開閉器スイッチを捻ひねったのは誰か——云い換えれば、最も重要な帰結点であるところの消燈の件くだりになると、それに端なくも、法水は一道の光明を認め得たのであつた。と云う

のは、シャンデリヤ装飾灯が消える直前に、津多子が入口の扉ドアに現われて、扉際ドアにある開閉器スイッチの脇を通つてから、その側の端に近い、最前列の椅子を占めたからである。

事実それに、法水が発見した最初の座標があつたのだ。それは、アベルスの「フエルプレツヘリツシエ・モルフオロギイ犯罪形態学」の中に挙げられている詭計の一つで、蓋付き開閉器スイッチに電障

を起させるために、氷の稜片を利用するという方法である。つまり、把手つまみに続いてつまみいる絶縁物に稜片の先を挟んで置くので、把手つまみを捻ひねると、接触板が微かに触れる程度で点燈される。が、その直後、把手つまみに腕を衝突

させるのが狡策であつて、そうすると氷の先が折れて、稜片の胴が、熱のある接触板の一つに触れる。したがつて、そうして溶解した氷の蒸気が陶器台の上に水滴を作れば、当然そこに電障が起らねばならない。しかも、溶解した氷は、そのまま消失してしまうのである。すなわち、この場合開閉器スイッチの側を過ぎる際に、もしその狡策を津多子が行つたとしたら、当然消燈は、彼女が座席についた頃に実現されるであらう。そして、その時間の隔りによつて、ゆうに暗影の一隅を覆うことが出来るのである。

おしがねつたこ  
押鐘津多子

——あの大正中期の大女優は、それ以外のどんな鎖の輪にも、姿を現わさないにもせよ、すでに事件最初の夜、古代時計室の鉄扉を内部なかから押し開いていて、ダンネベルグ事件に拭うべからざる影を印しているのである。しかも、事件中人物の中で最も濃厚な動機を持ち、現に彼女は、最前列の座席を占めていたではないか。こうして、幾つかの因子ファクターを排列しているうちに、法水は噴ふつと血腥ちなまぐさいような矢叫やさけびを、自分の呼吸の中に感じたのであった。しかし、召使パトラーに燭台スイッチを用意させて、開閉器かたわらの側に近づいてみると、そこ

に思いがけない発見があつた。と云うのは、開閉器スイッチの直下に当る床の上に、和装の津多子以外にはない、羽織紐かんの環かんが一つ落ちていたからだつた。

「夫人おくさん、この羽織紐かんの環かんは、ひとまずお返ししておきましよう。しかし、たぶん貴女あなたなら、この開閉器スイッチを捻ひねつたのが誰だか——御存じのはずですがね」とまず津多子を喚よんで、法水はこう速急に切りだした。けれども、相手はいつこうに動じた気色もなく、むしろ冷笑を含んで、津多子は云い返した。

「お返し下さるなら、頂いておきますわ。ですけれど

法水さん、やつとこれで、善行ムタビヌチオ悪報の神の存在が私に判りましたわ。何故かと申しますなら、暗闇の中から呻吟うめきの聲が洩れた瞬間に、私の頭へこのスイッチの事が閃ひらめいたのでした。もし、人手を借らず把手つまみが捻れるものでしたら、必ずこの蓋の内部に、何か陰険な仕掛が秘められていなければなりません。また、それがもし事実だとすれば、恐らく闇を幸いに、犯人がその仕掛を取り戻しに来るだろうと思いました。そう考えると、それまでは思いもよらなかつた決意が浮んでまいりました、そこで私、逸早く座席を外して、この場所



にまいったのでございます。そして、自分の背でこの

開閉器スイッチを覆うていて、いま貴方がお見えになるまで、

ずうつとこの場所に立っていたのでございました。で

すから法水さん、私がもしデイシヤス（沙翁の「ジュリアス・

シーザー」の中でブルタスの一味）でしたら、さしずめこの場合は、

羽織かんの環かんにこう申すところでしょうよ。

一角獣エレファンツ・ウイズ・ホールズは樹ツト・ユニコーンス・メイ・ビイ・ピトレイド・ウイズ・トリス・アンド・ベアス・ウイズ・グラセツによつて欺かれ、熊は鏡により、

象は穴によつて——と」

そこで、とりあえず開閉器スイッチの内部なかを調べることに

なつた。ところがその結果は予期に反して、それには

電障の形跡がないばかりでなく、把手つまみを捻ひねつて電流を通じてても、大裝飾灯シャンデリヤは依然闇の中で黙したままである。実に、それが紛糾混乱の始まりとなつて、ついに問題は礼拝堂を離れてしまった。法水も、本開閉器メインスイッチの所在を津多子に訊ただす前に、なにより彼の早断を詫びなければならなかつた。津多子は氣勢を収めて、率直に答えた。

「その室へやは、礼拝堂から廊下一重の向うにございまして、以前はモータユアリー・ルーム殯こ室しつ（中世貴族の城館で、塗油式を行う前に屍体を置く

室）だったのでございます。しかし、現在では改装さ

れておりました、雑具を置く室になつておりますが」

ところが、サロン広間を横切つて廊下を歩んで行くにつれ

て、水流の轟きはいよいよ近くに迫つてくる。そして、

目指すモーチュアリー・ルーム殯室の手前まで来ると、その――

耶蘇大苦難に、聖パトリック十字架のついた扉ドアの彼方

から、おどろと落ち込んでゐる水音が湧き上つてきた。

と同時に、彼等の靴を微かに押しやりながら、冷やり

と紐穴から這い込んできたものがあつた。

「あつ、水だ！」と熊城は、思わず頓狂な叫び声を立て

たが、跳び退はずいた機はすみに蹠よろめいて、片手を左側にある

せんしゆだい  
洗手台で支えねばならなかつた。しかし、それで万事  
りようぜん  
が瞭然となつた。すなわち、扉ドア向うの壁に、三つ並ん  
でいる洗手台の栓せんを開け放しにして、そこから溢れて  
くる水に、自然の傾斜を辿たどらせたのだつた。そして、  
扉ドアの闕しきいに明いている、漆喰しつくいの欠目から導いて、その水  
流モーチュアリー・ルームを殞もー室の中へ落ち込ませたに相違ない。そこ  
で、扉ドアを開くことになつたが、それには鍵が下りてい  
て、押せど突けども、微動みじろぎさえしないのである。熊城  
は恐ろしい勢いで、扉ドアに身体を叩きつけたが、わずか  
に木の軋きしる音が響いたのみで、その全身が鞣まりのように

弾はじき返された。すると、熊城は、身体を立て直して、さながら狂ったような語気で叫んだ。

「斧おのだ！ この扉ドアがロツビアだろうが左甚五郎の手彫りだろうが、僕は是ぜが非でも叩き破るんだ」

そうして斧が取り寄せられて、まず最初の一撃が、把手ノツフの上のあたり——羽目パネルを目がけて加えられた。木片が碎け飛んで、旧式の楨杵錠装置タンブラーが、木捻もくねじごとダラリと下った。すると意外にも、その楔形くさびがたをした破れ目の隙から、濛々たる温泉のような蒸気が迸ほとぼしり出たのだった。

その瞬間、一同は阿呆のような顔になつて、立ち竦すくんでしまった。その湯滝の蔭に、たといいかなる秘計が隠されていようと、それはこの場合問題ではない。また、幻想を現実**に強し**いようとするのが、ファウスト博士の残虐な快感であるかもしれないが、ともあれ眼前の奇観には、魂の底までも陶酔せずには措おかない、妖術的な魅力があつた。扉ドアが開かれると、内部なかは一面の白い壁で、さながら眼球を爛ただらさんばかりの熱気である。しかし、その時熊城が、扉の側にある点滅器を捻ひねり、またその下の電気煖炉ストーブに眼を止めて、差込プラグみを

引き抜いたので、やがて濛気と高温が退散するにつれ、室の全貌がようやく明らかになった。

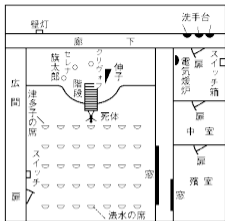
つまりこの一劃は、モーチュアリー・ルーム 殯室で云うところのいわ

ゆる前室に当るもので、突き当りの扉ドアの奥が、カトリック公教の戯言ぎげんで霊舞室おどりばと呼ばれる中室になっていた。そして、

隅に明いている排水孔から、落ち込んだ水が流れ出ているのである。また、中室との境界さかいには、装飾のない厳いかめしい石扉いしどが一つあつて、側かたわらの壁に、古式の旗飾りのついた大きな鍵がぶら下っていた。その扉ドアには鍵が下りてなく、石扉特有の地鳴りのような響を立てて開

かれた。ところが、不思議なことには、前室が爛れんばかりの高温にもかかわらず、今や前方に開かれてゆく闇の奥からは、まるで穴窟あなぐらのような空気が、冷やりと触れてくるのだ。そして、扉ドアが一杯に開ききられたとき、その薄明りの中から、法水は自分の眼に、眩くらみ転まろばんばかりの激動をうけたのだつた。パツと眼を打つてきた白毫色びやくごうの耀きがあつて、思わず彼は、前方の床を躓みつめたまま棒立ちになつてしまった。それはけつして、この僧院造り特有の、暗い沈鬱な雰ム困ド気が、彼に及ぼした力ではなかつたのだ。





て、清潔な——しかし見ようによつては、妙に薄気味悪く粘液的にも思われる白光を放っているのだつた。

——それは、<sup>みつ</sup>蹟めていると、視野に当る部分だけが、

そこの床上一面には、数十万の白蚯蚓<sup>みみず</sup>を放つたかと思われるような、細い短い曲線が無数にのたうち交錯していて、それが積り重なつた埃<sup>ほこり</sup>の上で、地の灰色を圧してい

莊嚴な紋章模様プレジンスリのような形になって、宙に浮び上り、パツと眼に飛びついてくるのだ。その光は、さながらゴットシヤルク（第一十字軍以前の先発隊を率いた独逸の修道僧）の見た、聖セントヒエロニムスの幻のように思われる。しかも、その無数の線条は、ほとんど室全体へやの床にわたつていて、濛気で堆塵の上に作られた細溝には相違ないけれども、不思議なことに、天井や周囲の壁面には、それと思しい痕跡おぼが残されていない。そればかりでなく、さらに床を横合から透かしてみると、まるで月世界の山脈か沙漠の砂丘としか思われぬような起伏が、そこ

にもまた無数と続いているのだった。それ等は、いかなる名工といえどもとうてい及び難い、自然力の微妙な細刻に相違ないのである。

その室は石<sup>へや</sup>灰石の積石で囲まれていて、艱苦<sup>かんく</sup>と修道を思わせるような沈厳な空気が漲<sup>みなぎ</sup>っていた。突き当

りの石扉の奥が屍室で、その扉面<sup>ドア</sup>には、有名な聖<sup>セント</sup>パト

リックの讚詩<sup>ヒム</sup>——「異教徒の凶律<sup>アゲインスト・ブラックロウス・オヴ・ゼ・ヒイズン・アンド・</sup>に対し、また女人・鍛

工及びドルイド呪僧の呪文<sup>アゲインスト・ゼ・スペルス・オヴ・ウイミン・スミス・アンド・ドルイズ</sup>に対して」——の全文が刻

まれていた。しかし、床上には足跡がなく、恐らく算

哲の葬儀の際にも、古式の殯室儀<sup>ひんしつぎ</sup>は行われなかつたも

のらしい。そうして、前室より先には誰一人入らなかつたことが判ると、疑題のすべてはそこに尽きてしまった。つまり、水を洗手台から導いて、階段を落下させたという目的は、きわめて推察に容易ではあるが、次の煖炉ストーブの点火という点になると、その意図には皆目見当がつかないのだった。勿論、壁の開閉器スイッチは蓋ふたが明け放されていて、接触刃ナイフの柄がグタリと下を向いていた。検事は、その柄を握って電流を通じたが、足元に開いている排水孔を見やりながら、知見を述べた。「つまり、洗手台の水を使って、階段から落下させたと

いうのは、床の埃の上に附いた足跡を消すにあつたのだよ。すると、どうしても根本の疑義と云うのは、この室の本開閉器を切つたのと、それから、扉ドアに鍵を下して室外に出てから、クリヴオフを刺した——その一人二役にあるという訳になるがね。しかし、どうあつても僕には、レヴェズがそんな、小悪魔ポルターガイストの役を勤めたとは信じられんよ。必ずその解答は、君が発見したクレストレックス・ストーン紋章のない石——にあるに相違ないのだ」

「なるほど、明察には違いないが」といつたんは率直にうなず頷いたが法水は、続いて憂わしげにまたた瞬いて、「しかし、

この際の懸念と云うのは、かえつて、レヴェズの心理劇の方にあるのだよ。と云つてまた、この室の鍵の行衛が、案外見えなかつたレヴェズに関係があるのかもわからんし……」とパツパツと烈しく<sup>たばこ</sup>莩を<sup>くゆ</sup>燻らしていたが、熊城の方を向いて、「とにかく、犯人がいつまでも身につけている気遣いはないのだから、まず鍵の行衛を捜すことだ。それから、レヴェズを見つけて連れて来ることなんだ」

ようやく悪夢から解放されたような気持になつて、旧の<sup>もと</sup>礼拝堂に戻ると、そこには再び、<sup>シャンデリヤ</sup>装飾灯の<sup>ひかり</sup>燦光が

散っていた。その下で、聴衆はここかしこに地図的な集団を作つて固まつていたが、壇上の三人は、それぞれに旧もといた位置から動かされなかつたので、それでなくとも不安と憂愁のために、追いつめられた獣のように顫ふるえ戦おのいでいた。クリヴオフ夫人の死体は、階段の前方にほとんど丁字形をなして横たわっていた。それが俯うつむ向きに倒れ、両腕を前方に投げ出して、背の左側には、槍ランス尖ヘッドらしい桿かん状の柄が、ニヨキリと不気味に突つ立っていた。死体の顔には、ほとんど恐怖の跡はなかつた。しかも、奇妙に脂ぎっていて、死戦時の

浮腫ふしゅのせいでもあろうか、いつも見るように棘々とげとげしいけいかく圭角けいかく的な相貌が、死顔ではよほど緩和されているように思われた。ほとんど、表情を失っている。けれども、その——一見、安らかな死の影とも思われるものは、同時にまた、不意の驚愕きょうがくが起した、虚心状態とも推察されるのだった。そして、死体の背窪を一杯に覆うて凝結した血が、指差している手の形で、大きな溜りを作っていて、なお薄気味悪いことには、その指頭が壇上の右方に向けられていた。が、それ等の光景の中で、最も強く胸を打ってくるのは、その殺人事件に適ふさわし



からぬ対照であつた。ランス・ヘッド 槍尖の根元には、滲み出ている脂肪が金色こんじきに輝いていて、それと宮廷楽師カベルマイスターの朱色の上衣とが、この惨状全体をきわめて華やかに見せていたのである。

法水は仔細に兇器の柄を調査したが、それには指紋の跡はなかつた。そして、柄の根元にはモントフェラット家の紋章が鑄刻されていて、引き抜くとはたしてそれが、二又ふたまたに先が分れている火焰形ランス・ヘッドの槍尖いたずらだつた。しかし、兇行の際に現われた自然の悪戯いたずらは、最も肝腎かんじんな部分を覆うてしまった。と云うのは壇上からそ

の位置までの間に、いつこう血滴が発見されないこと  
だった。云うまでもなく、その原因と云うのは、刃が  
すぐ引き抜かれなかつたという点にあつて、勿論それ  
がために、瞬間の迸血ほうけつが乏しかつたからである。しか  
し、それによつて、なにより犯行を再現するに欠いて  
はならない、連鎖が絶たれてしまつた。つまり、クリ  
ヴオフ夫人が壇上のどの点で刺され、そうしてまた、  
どういう経路を経て墜落した——かという二つの絡りつなが  
を、もはや知り得べくもないのだった。法水は検屍を  
終えると、聴衆を室外に出してしまつてから、階段を

上つて行つた。すると、伸子がまず、夢に魘うなされたよ  
うな声で叫び立てた。

「あのファウスト博士は、まだまだ私を苦しめ足りない  
のですわ。最初地精コボルトの札を、私の机の中に入れて置  
いたばかりではございません。今日も、あの悪魔はま  
た私を択んで、人身御供ひとみごくうの三人の中に加えるんですも  
の」と背後に廻した両手で、豎琴ハープの杵を固く握りしめ、  
それを激しく揺ゆすぶつた。「ねえ、法水さん、貴方は、ク  
リヴォフ様が演奏壇のどこで刺されたか、また、どつ  
ちの側から転げ落ちたか——お知りになりたいので

しよう。けれども、ほんとうに私、何も知らないのです。ただ豎琴ハープの杵を搦んで、凝然じつと息を詰めていたのでございますから、ねえ旗太郎様、セレナ様、貴方がたは、たぶんそれを御存じでいらつしやいませう」

「いいえ、私がおしグイデイオン（ドルイド呪教に現われた、暗視隠形に通じていたと云われる、大神秘僧）でしたら、あるいは知っていたかもしれませんわ」とセレナ夫人は、戦おのきの中に微かな皮肉を泛うかべた。すると、それに言葉を添えて、旗太郎が法水に云った。

「事実そうなんです。生憎あいにく僕等には、昆虫や盲者めくらが持

ち合わせているほど、空間に対する感覚が正確でないのですよ。それに、なにしろ衣裳が同じなものですからね。伸子さんが燐寸を擦つて顔を照らすまでは、いったい誰が斃たおされたのか、それさえも明瞭はつきりしていません。いや、いつそ、何も聴えず、気動にも触れなかつたと申しましようか」と事件の局シチュエーション状が、法水等に不利なのを察したと見え、早くも彼の瞳の中を、圧するような尊大なものが動いていった。「ところで法水さん、いったい本開閉器を切つたのは、誰なんでしょうか。その鮮かな早代りで、一人二

役を演<sup>や</sup>つてのけた悪魔というのは？」

「なに、悪魔ですって!? いや、黒死館という祭壇を屋根にしている——人生そのものが、すでに悪魔的なんじゃないありませんか」と眼前の早熟児を、薄気味悪いほど瞶<sup>みつ</sup>めながら、法水は最後の言葉を捉えた。「実は旗太郎さん、僕は旧派の捜査法を——つまり、人間の心細い感覚や記憶などに信憑<sup>しんぴょう</sup>を置くのを、聖骨と呼んで軽蔑しているのですよ。ところが、今日の事件では、  
モーチユアリー・ルーム  
殞<sup>ま</sup>室の聖パトリックを守護神にして、僕はドルイド呪僧と闘わねばならなくなつたのです。貴方は、

あの愛蘭土アイerlandの傑僧がデシル法——(註)に似た行列を行  
うと、それがドルイド呪僧を駆逐くちくして、アルマーの地  
が聖化されたという史実を御存じでしょうか」

(註) ウエールスの悪魔教ドルイドの宗儀で、  
祭壇の周囲を太陽の運行と同様に、すなわち、  
左から右に廻る習俗。

「デシル法!? それを、どうしてまた貴方が……」と臆  
したように面おもてを曇らせたが、セレナ夫人は、そうした

口の下から問い返した。「ですけど、聡明な聖パトリックは、布教の方便として、あの左から右へ廻る行列法を借りたのではございませんこと」

「さよう、それが今日の事件では、テル・テール・シムボルもの云う表象――

だったのです。しかし、呪術の表象を他に移すという

ことは、呪僧それ自らを滅ぼすことなんですよ」と法

水は、意地悪げな片笑を泛うかべて、陰性な威嚇いかくを罩こめた

ような言葉を云い切った。ああ、テル・テール・シムボルもの云う表象。――

とは何であろうか。その解ほぐれきれない霧のようなものは、

妙に筋肉が硬ばり、血が凍りつくような空気を



作つてしまつた。ところが、そのうちセレナ夫人の眼が異様に瞬またたかれたかと思つたと、最初法水を見、それから、伸子に憎々しげな一瞥いちべつをくれたが、すぐにその視線は、壇下の一点に落ちて動かなくなつてしまつた。そこには、云いようのない不吉な署名があつた。法水が、右から左へというものテル・テール・シムボルの云う表象——ちようどそれに当るものが、クリヴオフ夫人の背に現われていたのだ。その指差している手の形をした血の溜りが、あるうことか指頭の方角を、右方の壇上——すなわち伸子の位置に向けていたからである。のみならず、あるい

は気のせいかは知らないけれども、なんとなくその形が、豎琴ハープにも似ているように思われるのだった。一同は云いしれぬ恐ろしい力を感じて、しばらくその符号に釘づけされてしまった。やがて、伸子は豎琴ハープに顔を隠して、肩を顫ふるわせ激しい息使いを始めたが、法水は、それなり訊問を打ち切ってしまった。三人が出て行ってしまふと、熊城は熱のあるような眼を法水に向けて、「やれやれ、此奴こいつもまた結構な仏様だ。どうだい、この膳立ての念入りさ加減は」とファウスト博士の魔法のような彫刀ののみの跡に、思わず惑乱気味な嘆息を洩らすの

だった。検事はたまらなくなつたような息付きをして、法水に云つた。

「すると、結局君は、この暗合を、この人を見よ——と解釈するのかね」

「いいやどうして、それは自然のままにして、しかも流動体なり——さ」と法水はあつけなく云い放つて、その突然の変説が検事を驚かせてしまった。「無論そうなると、あの三人は、完全に僕の指人形ギニョールになつてしまふのだよ。いまに見給え、あの三匹の深海魚は、きつと自分の胃腑いぶくろを、僕の

前へ吐き出しにくるに相違ないのだから」とそれから  
法水は、彼が演出しようとする心理劇が、いかに素晴  
らしいかを知らせるのだった。「そこで、僕がデシル法  
を譬喩にした本当の意味を云うと、それが、旗太郎と  
ヴァイオリン  
提琴との関係にあつたのだよ。君は気がつかなかつた  
かね。あの男は左利にもかかわらず、現在弓を右に、  
提琴を左に持つていたじやないか。つまり、それがデ  
シル法の、左から右へ——の本体なんだよ。しかし  
はせくら  
支倉君、まさかにその恒数が、偶然の事故じやあるま  
いね」

コンスタント

その時、クリヴオフ夫人の屍体が運び出され、それと入れ代つて、一人の私服が入つて来た。勿論全館にわたる捜査が終つたのであつたが、そのもたらせられた報告には、思わず驚きの眼を睜みはるものがあつた。と云うのは、モーチュアリー・ルーム殯室の鍵は勿論のこと、それにあることかレヴェズの姿が、曲目の第一を終つて休憩に入ると、同時に消えてしまったというのだつた。なおそれに伴つて、ちようど惨事が発生した時刻には、真斎は病臥中、鎮子は図書室の中で、著作の稿を続けていたということも判つた。しかし、それを聴くと、法

水の顔にはただならぬ暗影が漂いはじめた。彼はもはや凝然じつとしていられなくなつたように、焦もどかしげな足取りで室内を歩きはじめたが、突然立ち止つて、数秒間突つ立つたまままで考えはじめた。そのうち、彼の眼に異常な光芒こうぼうが現われたかと思うと、ポンと床を蹴つて、その高い反響こだまの中から、挙げた歓声があつた。

「うんそうだ。レヴェズユーマアの失踪が、僕に栄光を与えてくれたよ。現在僕等の受難たるや、あの男の物凄いくユーマア諧諜を解せなかつたにある。ねえ熊城君、あの鍵はモーチユアリー・ルーム殞室の中にあるのだよ。廊下の扉ドアは、内側から

鎖されたんだ。そして、レヴェズは奥の屍室の中に姿を消したのだよ」

「な、何を云うんだ。君は気でも狂ったのか!？」と熊城は吃驚して、法水を噴め出した。なるほど、モーチュアリー・ルーム殯室

の中室の床には、足跡らしい掠れ一つなかったのだ。

また、横廊下の屍室の窓には、内部から固く鍵金が下されていた。しかし、ついに法水は、レヴェズにライニング・カーペット飛行絨毯を与えてしまったのである。

「すると、前室の湯滴を作ったのは、何のためだい。そして、中室の床に美しい幻の世界を作って、その上の

足跡を消してしまつたのは？」と狂熱的な口調でやり返して、最後に、演奏台の端をガンと叩いた。そして、彼の闡明せんめいは、あの幻怪きわまる紋章模様プレゾンリーをして、ついにレヴェズの檻おりたらしめたのだつた。

「ところで熊城君、君はよく、莩たほこの烟をパツパと輪に吐くけれども、それを気体のリズム運動と云うのだよ。

ところが、それと同じ現象が、両端の温度と圧力にへだたり差異がある場合、中央に膨みのある洋燈ラムプのホヤや、鍵孔などにも現われるのだ。それから、あの場合もう一つ注意を要するのは、中室の周壁をなしている石質な



んだ。それが、バシリカ風の僧院建築などによく使われる石灰石なんだが、当然永い年月の間に風化されているだろうからね。したがって、堆塵たいじんの中には、水に溶解する石灰分が混っていると見て差支えないのだ。そこで、レヴェズはまず、前室に湯滝を作つて濛気を発生させたのだ。すると、時間が経つにつれて、しだいに前後二つの室の、温度と圧力に隔りが出来てくるのだから、そこに、ちょうど恰好な状態が作られる。そして、鍵孔から吐き出される輪形の濛気が、中室の天井を目がけて上昇して行つたのだよ」

「なるほど、輪形の蒸気と石灰分とでか」検事は判つたように頷うなずいたが、その間も微かに身を顫ふるわせていた。「そうなんだ支倉君。そうして、その蒸気が天井の堆塵に触れると、何よりまず、その中の石灰分に滲透してゆく。したがって、内部なかに当然空洞が出来るだろうから、終いには支えきれず墜落してしまうのだ。つまり、その物質が、床の足跡を覆うたことは云うまでもあるまい。しかも、その魔法の輪が、多量の石灰分を吸収した後に砕けたので、それが、あの絢爛けんらんたる神秘を生むに至つたのだよ。ところが支倉君、ちようどこ

れによく似た現象を、史実の中にも発見出来るのだがね。例えば、エルボーゲンの魚文字イクチス(註)の奇蹟が……」

(註) 一三二一七年まだカルルスバート温泉が発見されぬ頃、同地から十マイルを隔てたエルボーゲンの町外れに、一つの奇蹟が現われた。それは、廃堂の床に、基督教の表象とさ  
 れている魚という文字が、ものもあるように希臘語ギリシヤで現われたのだった。しかし、それはたぶん、鉱泉脈の間歇噴気かんけつによるものならん

と云われている。

「いや、それはいずれまた聴くとして」と慌あわてて検事は、  
似え非せ史家法水の長広舌ちやうこうぜつを遮つたが、依然半信半疑ていの態  
で相手を瞞みつめている。「なるほど、現象的には、それで  
説明がつくだらう。また、奥の屍室の中に、あるいは  
クレストレッツス・ストーン紋章のない石の一端が、現あわれているかもしれん。し  
かし、仮令たとえばそれで、一人二役が解決するにしてもだ。  
どうしても僕には、隠さずにいい姿を隠した、レヴェ  
ズの心情が判らんのだよ。たぶんあの男は、自分の

洒落しやれに陶酔しすぎて、真性を失ってしまったのだらう」

「オヤオヤ支倉君、君は津多子の故智を忘れたのかね。では試しに、屍室の扉ドアを開かずにおこうか。そうしたらきつとあの男は、僕等の帰った頃を見計って、横廊下に当る聖趾窓ペイド・ウインドウから抜け出すだろう。そして、大洋琴グランドピアノの中にでも潜り込んで、それから催眠剤を嚙のむに違ちがいがないのだよ。サア行こう。今度こそ、あのこぼとけこへい小仏小平の戸板を叩き破やぶつてやるんだ」

こうして、法水はついに凱歌を挙げ、やがて、中室

の奥——聖パトリックの讚詩ヒムを刻んである屍室ドアの扉の前おに立つた。彼等三人には、すでにレヴェズを檻の中おに発見したような心持がして、その残忍な反応を思う存分むさほ貪り喰くいたいのだった。ところが、恐らく内部から鎖くわされていて、武具室にある、破城槌バツテリング・ラムの力でも借りなければ——と信じられていたその扉ドアが、意外にも、熊城クマシロの掌てのひらを載せたまま、すうつと後退あとずさりしたのだった。内部なかは、湿っぽい密閉された室へや特有の闇で、そこから、濁りきっていて妙に埃ちりっぽい、咽喉のどをくすぐくするような空氣が流れ出てくるのだ。そして、懐中電燈の円い光

の中には、はたせるかな、数条の新しい靴跡が現われ出たのだった。その瞬間、闇の彼方にレヴェズの爛々けいけいたる眼光が現われ、彼が喘ぎ凝らすあえこ、野獣のような息吹が聴えてきた——と思われたのは、彼等の彩塵が描き出した幻だったのだ。その足跡は、奥の垂幕の蔭に消え、最奥の棺室ひつぎしつに続いているのである。ところが、その折彼等が、思わず固唾かたずを嚙のんだと云うのは、垂幕の裾から床の隅々にまで、送った光の中には、わずか棺台ひつぎだいの脚が四本現われたのみで、そこには人影がないのだった。紋章クレスト・レックス・ストーンのない石——すでにレヴェズは、この

室<sup>へや</sup>から姿を消してしまつたのであろう。と、熊城が勢いよく垂幕を剥いだ時に、突然彼は、何者かに額を蹴られて床に倒れた。それと同時に、垂幕の鉄棒が軋<sup>きし</sup>む響が頭上に起つて、検事の胸を目掛けて飛んだ固い物体があつた。彼は思わずそれを握りしめた——靴。しかしその瞬間、法水の眼は頭上の一点に凍りついてしまった。見よ、そこには一本の裸足と、靴の脱げかかつたもう一本——それが、鈍い大振子のように揺れているのだつた。

さながら、<sup>のうしよう</sup>脳漿の臭いを嗅<sup>か</sup>ぐ思いのする法水の推定



が、ついに覆くつがえされてしまった。レヴェズは発見されはしたものの、垂幕の鉄棒に革紐を吊つて、縊いし死を遂げているのだった。閉幕——恐らく黒死館殺人事件は、このあつけない一幕を最後に終つたのであろう。しかし、この結論が、けつして法水を満足させるものでないにもせよ、それは不思議なくらいに、彼を狼狽ろうばいさせた。熊城は、私服に下させた屍体の顔に、灯を向けて云つた。

「やれやれ、これでファウスト様の事件は終つたらしいね。けつして喝采かつさいをうけるほどの終局じゃないけれ

ども、まさかこの洪牙利ハンガリーの騎士が、犯人とは思ひも寄らなかつたよ」それ以前すでに、棺台の上が調査されていた。そして、そこに残されている靴跡から判断すると、その端に立つたレヴェズが両手を革紐にかけ、足を離しながら、首を紐の上に落したことは疑うべくもなかつた。その——てつきり海獣を思わせるような屍体は、同じく宮廷楽師カベルマイスターの衣裳を付けていて、胸のあたりがわずかに吐瀉物で汚されている。なお、推定時刻は一時間前後で、ほぼクリヴオフの殺害と符合していたが、革紐は襟布カラーの上からそのなりに印されていて、

それが頸筋くびすじに、無残なほど深く喰い入っていた。勿論あらゆる点にわたって、縊死いしの形跡は歴然たるものだった。のみならず、それを一面にも立証しているのが、レヴェズの顔面表情だった。その黝くろずんだ紫色に変った顔には、眉の内端がへの字なりに吊り上り、下眼瞼したまぶたは重そうに垂れていて、口も両端が引き下つている。勿論それ等の特徴は、いわゆる落ちると呼ぶものであつて、それにはとうてい打ち消しようもない、絶望と苦悩の色が漂っているのであつた。しかしその間、検事は、頸筋の襟布カラーを指で摘み上げて、しきりと

後頭部の生え際のあたりを瞼みまめていた。が、そうして  
いるうちに、その眼が不気味に据えられてきた。

「僕は、レヴェズに対するゴシップが、あまり酷評に過  
ぎやせんかと思うのだ。どうだろう法水君、この  
胡桃形くるみがたをした無残な烙印やきいんには、たしか索溝かたちの形状と、  
背馳はいちするものがあるように思われるんだが」とてつき  
り、胡桃くるみの殻くわとしか思われぬ結節あつの痕あとが、一つ生え  
際に止められているのを指し示して、

「なるほど、索状が上向きにつけられている。そうし  
たら、こんな結節の一つ二つなんぞは、恐らく瑣事に

もすぎんだらう。しかし、古臭いフォン・ホフマンの『法医学教科書』の中にも、こういう例が一つあるじゃないか。それは——床に落ちた書類を拾おうとして、被害者が身体を<sup>かが</sup>踞めたところを、その<sup>モノケル</sup>一眼鏡の絹紐で、犯人が後様に絞め上げたうしろさまと云うのだ。勿論そうすれば、索溝が斜め上方につけられるので、後で犯人は、その上に紐を当がって屍体を吊したのだよ。ところが、頸筋にたった一つ結節が残さされていて、とうとう終いには、それが、口をきいてしまった——と云うのだがね」

そう云ってから、レヴェズの自殺を心理的に観察して、

検事はこの局面で、最も痛い点に触れた。

たとえ

メイン・スイツチ

「それに法水君、仮令ばレヴェズが本開閉器を消し、それから僕等のしらない、秘密の通路を潜つて、クリヴォフ夫人を刺したにしてもだ、だいたい、クニツトリンゲンの魔法博士ファウストともあるうものが、何故最後の大見得を切らなかつたのだらうか。あれほど芝居げたつぷりだつた犯罪者の最後にしては、すべてがあまりにあっけないほど、サツパリしすぎているじゃないか」ととうてい解しきれないレヴェズの自殺心理が、検事をまったく昏迷の底に陥れてしまった。

彼は狂わしげに法水を見て、「法水君、この自殺の奇異ふしぎな点だけは、君が、十八番のストイックパニジリツク頌讚歌からシヨーペンハウエルまで持ち出してきても、恐らく説明はつかんと思うね。何故なら、目下犯人の戦闘状態たるや、完全に僕等を圧しているんだ。そこへもつてきて、あまりに唐突な終局なんだ。ああ、憐れむべき萎縮じやないか。どうして、この男の想像力が、あのサルヴィニ（表情演技の誇大な伊太利俳優の典型）張りの大芝居だけで、尽きてしまったとは信じられんよ。時の選択を誤らないためにか、それとも、誇らしげに死ぬためか

……。いやいや、けっしてそのどつちでもないはずだ」

「あるいは、そうかもしれんがね」と法水はたばこケースを叩きながら、妙に含むところのあるような、それについて、検事の説を真底から肯定するようにも思われる——異様なうなず頷き方をしたが、「そうすると、さしずめ君には、ピデリツトの『ミミック・ウント・フィジオグノミーク擬容と相貌学』でも読んでもらうことだね。この悲痛な表情はフオール落ちると云つて、とうてい自殺者以外には求められないものなんだよ」  
 そう云つてから垂幕を強く引くと、頭上に鉄棒の唸りうな



が起つた。「ねえ支倉君、ああして聴えてくる響が、この結節を曲者くせものに見せたのだつたよ。何故なら、レヴェズの重量が突然加わつたので、鉄棒に弾みがついてしないはじめたのだ。すると、その反動で、懸吊つるされて

いる身体からだが、独楽こまみたくに廻りはじめるだろう。勿論それによつて、革紐がクルクル撚よじれてゆく。そして、それが極限に達すると、今度は逆戻りしながら解ほどけてゆくのだ。つまり、その廻転が十数回となく繰り返されるので、自然撚り目の最極の所に結節が出来、それがレヴェズの頸筋くびすじを、強く圧迫したからなんだよ」

そうして、事象としては完全な説明がついたものの、なんとなく法水には、それが独り占いのように思えてならなかった。彼は依然暗い顔のまま、無暗むやみと莩たぼこを烟けむにしながらかえに耽ふけっていた。——博士ドクターファウスト別名オットカール・レヴェズが、人生を煙のように去った。しかし、それは何故であるか。

それから、一応ここで検屍を行うことになったが、まず前室の扉ドアの鍵が、衣袋ポケットの中から発見された。ところが、その直後——ひしやげ潰つぶれたレヴェズの襟布カラーをはずした時に、思いがけなく、その下から三人の眼を

激しく射返したものがあつた。ついに、レヴェズの死が論理的に明らかとなつた。ちようど軟骨の下——气管の両側の辺りに、二つの拇指の痕あとが、まざまざと印されていたのである。しかも、その部分に当る頸椎けいついに脱臼が起つていて、疑いもなくレヴェズの死因は、その扼殺やくさつによるもので……、恐らくそうしてから、絶命に刻々と迫つてゆく身体を、犯人は吊し上げたのである。——と断ぜねばならなくなつてしまつた。すでに明白である——局面は再び鮮かな蜻蛉返りとんぼを打つた。しかし、それには右指の方にきわだつた特徴があつて、

その方にのみ、爪の痕がいちじるしく印されている。そして、指頭の筋肉に当る部分が、薄つすらと落ち窪んでいて、それが何か腫物ほれものでも、切開した痕らしく思われるのだった。しかし、勿論それで、レヴェズの自殺心理に関する疑念だけは、一掃されたけれども、一方鍵の発見によつて、疑問はさらに深められるに至つた。

すでにこの局面には、否定も肯定もいつせいに整理されていて、そこには幾つかの、とうてい越え難い障壁が証明されているのだった。恐らく犯人は、レヴェ

ズを前室に引き込んで扼殺し、その屍体を奥の屍室の中に担ぎ入れたのであろう。しかし、前室の鍵が、被害者の衣袋の中に蔵しまわれているにもかかわらず、その扉を、いかにして犯人は閉じたのであろうか。また、屍室に残されている足跡にも、レヴェズ以外のものがないばかりでなく、顔面表情も自殺者特有のもので、それに恐怖驚愕と云うような、情緒が欠けているのは何故であらうか。もつとも、横廊下レイド・ウインドウに開いている聖趾窓には、その上段だけが透明な硝子になっているけれども、一面に厚い埃の層で覆われていて、それ

には脱出の方法を、想起し得る術もないのだった。したがって、紋章クレスト・レックス・ストーンのない石——に、解答のすべてがかけられてしまったのも、是非ないことである。検事は屍体の髪を掴んで、その顔を法水に向けた。そして、彼がかつてレヴェズに対して採つたところの、酷烈きわまりない手段を非難するのだった。

「法水君、この局面の責任は、当然君の、道徳的感情の上に掛つてくるんだ。なるほど、あの際の心理分析から、君は地精コポルトの札ありかの所在を知ることが出来た。また、危く闇から闇に葬られるところだった——この男と、

ダンネベルグ夫人との恋愛関係も、君の透視眼が剔抉てっけつしたのだ。けれども、レヴェズは君の詭弁に追い詰められて、自分の無辜むこを証明しようとした結果、護衛を断つたんだぜ」

それには、法水も真向から反駁はんぱくすることは出来なかつた。敗北、落胆、失意——希望のすべてが彼から離れてしまったばかりでなく、さながら永世の重荷となるような暗影が、一つ心の一隅に止まってしまった。たぶんその幽霊は、法水に絶えずこう囁ささくことだろう、——お前がファウスト博士をして、レヴェズを殺させ

たのだ——と。しかし、レヴェズの気管を強圧した二つのぼしこん指痕は、この場合、熊城に雀躍こおどりさせたほどの獲物だった。それでさっそく、家族全部の指痕を蒐集することになったが、その時、一人の召使パトライを伴った私服が入って来た。その召使パトライというのは、以前易介事件の際にも、証言をしたことのある古賀庄十郎という男で、今度も休憩中に、レヴェズの不可解な挙動を目撃したと云うのだった。

「君が最後にレヴェズを見たと言うのは、何時頃だね」とさっそくに法水が切り出すと、



「はい、たしか八時十分頃だったろうと思います。」と最初は屍体を見まいとするものののように顔を背けていたが、云いはじめると、その陳述はテキパキ要領を得ていた。「曲目の第一が終って休憩に入りましたので、レヴェズ様は礼拝堂からお出でになりました。その時私は広間<sup>サロン</sup>を抜けて、廊下をこの室の方に歩いてまいりました。その私の後を跟<sup>つ</sup>けて、レヴェズ様も同様歩んでお出でになるのです。しかし、それなり私は、この室<sup>へや</sup>の前を過ぎて換衣室の方に曲ってしまいましたけれども、その曲り角でふと後を振り向きますと、レ

ヴェズ様はこの室の前に突つ立つたままで、私の方を凝然じっと見ているのでございます。それはまるで、私の姿が消えるのを待っているかのようにございました」

それによると、レヴェズが自分からこの室に入ったと云つても、それには寸分も、疑う余地がないのであつた。法水は次の質問に入つた。

「それから、その時他の三人はどうしていたね？」

「それは御各自めいめいに、一応はお室へやに引き上げられたようでございます。そして、曲目の次が始まるちようど五分前頃に、三人の方はお連れ立ちになり、また伸子

さんは、それから幾分遅れ気味にいらつしやつたよう、記憶しておりますが」

それに、熊城が言葉を挟んで、「そうすると君は、その後、この廊下を通らなかつたのかい」

「はい、間もなく二番目が始まりましたので。御承知のとおり、この廊下には絨毯じゅうたんが敷いてございませんので、音が立ちますものですから、演奏中は表廊下を通ることになっておりますので」とレヴェエズの不可解な行動を一つ残して、庄十郎の陳述はそれで終つた。ところが、終りに彼は、ふと思ひ出したような云い方を

して、「ああそうそう、本庁の外事課員と仰おっしゃ言る方が、  
広間サロンでお待ちかねのようでごさいますか」

それから、モーチユアリー・ルーム殯こ室しつを出て広間に行くのと、そこには、

外事課員の一人が、熊城の部下と連れ立って待っていた。勿論その一つは、黒死館の建築技師——デイグス  
ビイの生死いかに関する報告だった。しかし、警視  
庁の依頼によつて、ラングーン蘭貢の警察当局が、たぶん古い文  
書までも漁あさつてくれたのである。その返電には、  
デイグスビイが投身した当時の顛末てんまつが、かなり詳細に  
わたって記されてあった。それを概述すると、——一

八八八年六月十七日払暁五時、エムプレス・オヴ・パーシヤ波斯女帝号の甲板から投身した一人の船客があつた。そして、たぶん首は、推進機に切断されたのであろうが、胴体のみはその三時間後に、同市を去る二マイルの海浜に漂着した。勿論、その屍体がデイグスビイであるということは、着衣名刺その他の所持品によつて、疑うべくもないのだった。

次に熊城の部下は、くがしずこ久我鎮子の身分に関する報告をもたらした。それによると、彼女は医学博士八木沢節ひかりこけ斎の長女で、有名な光蘚ひかりこけの研究者久我錠二郎じょうじろうに嫁ぎ、

夫とは大正二年六月に死別している。勿論鎮子をその調査にまで導いていったものは、いつぞや法水が彼女の心像を発あはいて、算哲の心臓異変を知ることの出来た心理分析にあつたのだ。また鎮子がそればかりでなく、早期埋葬防止装置の所在までも算哲から明かされているとすれば、当然両者の関係に、主従の墻かきを越えた異様なものがあるように思われたからである。しかし、八木沢という旧姓に眼が触れると、突然法水は異様な呼吸を始め、惑乱したような表情になった。そして、その報告書を掴むや、物も云わずに広間を出て、その

足でつかつか図書室の中に入つて行つた。

図書室の中には、アカンサス形をした台のある燭台が、ポツリと一つ点ともされているのみで、その暗鬱な雰囲気は、著作をする時の鎮子の習慣であるらしかった。しかし彼女は、いつこう何の感覚もなさそうに、凝つと入つて来た法水をみつ瞞めている。その凝視は、法水に切り出す機会を失わせたばかりでなく、検事と熊城には、一種の恐怖さえももたらせてきた。やがて、彼女の方から、切れぎれな、しかも威圧するような調子で云い出した。

「ああ、判りましたわ。貴方がこの室へやにお出でになつたという理由が……。ねえ、たぶんあれなんでしょう。いつかの晩、私はダンネベルグ様のお側におりましたわね。またその後惨事が起るその都度にも、私は一度だって、この図書室から離れていたことはございませんでした。ねえ法水さん、いつかは貴方が、その逆説的効果に、お気づきなさらずにはいまいと考えておりましたわ」

その間、法水の眼が一秒ごとに光を増して、相手の意識を刺し通すような気がした。彼は身体を捻ねじ向け



て、ちよつと微笑みかけたが、それは途中で消えてしまった。

「いやけつして、そんな甘い挿話エピソードではないのです。僕

は貴女あなたの所へ、これを最後と思つて来たのですよ。と

ころで、八木沢さん……」と——八木沢という姓を法

水が口にするのと、それと同時に、鎮子の全身に名状す

べからざる動揺が起つた。法水は追及した。「たしか

貴女のお父上八木沢医学博士は、明治二十一年に、頭

蓋鱗様部及び顛顛窩せつじゆか畸形者の犯罪素質遺伝説を唱えま

したね。すると、それに、故人の算哲博士が駁論を挙

げたでしよう。ところが、不審なことには、その論争が一年も続いて、まさしく高潮に達したと思われた矢先に、まるでそれが、默契でも成り立ったかのように消え失せてしまいましたね。そこで、試しに僕は、過去黒死館に起つた出来事を、年代順に排列して見ました。そうすると、次の明治二十三年には、あの四人のえいじ嬰兒が、はるばる海を渡つて来たではありませんか。

ねえ八木沢さん、たぶんその間の推移に、貴女がこの館にお出でになつた理由があると思うのですが」

「もう、何もかも申し上げましょう」と鎮子は沈鬱な眼

を上げた。心の動揺がすっかり収まったと見えて、  
いったんは見分けもつかぬ深みへ、落ち込んでしまつた顔の凹凸が、再び恐ろしい鋭さでもって影を擡もたげてきた。「私の父と算哲様があの論争を中止いたしましたのは、つまりその結論が、人間を栽培する実験遺伝学という極論に行き詰つてしまったからでございませう。そう申し上げればあの四人が、たかが実験用の小動物にすぎないということはお判りでしょう。そこで、四人の真実の身分を申しますと、それぞれに紐育ニューヨークエルマイラ監獄で刑死を遂げた、猶太人ジユウ、伊太利人ディエイゴなどの

移住民を父にしているのでございます。つまり、刑死体を解剖して、その頭蓋形体を具えた者がおりました際には、その都度その刑死人の子を、典獄ブロックウエーを通じて手に入れたのでした。そして、ついにその数が、国籍を異にするあの四人になつて……ですから、『ハートフォード福音伝道者』エヴァンジェリスト誌の記事も、また、大使館公録のものも、みんな算哲様が、金に飽あかした上での御処置だったのでございます」

「そうすると、この館にあの四人を入籍させて、動産の配分に紛糾を起させたというのも、つまりが、結論を

見出さんがための筋書だったのですね」

「さようでございます。あの方の御父上も同様の頭蓋形体だったそうですが、それもございましたのでしよう、算哲様は御自分の説に、ほとんど狂的な偏執へんしつを保持もっていたらつしやいました。しかし、あの方のような異常な性格な方には、我々の云う正規の思考などというものは問題ではございません。没頭——それが生命の全部であり、遺産や情愛や肉身などという瑣事さじは、あの方の広大無辺な、知的意識の世界にとれば、わずかな塵ちりにしかすぎないのでございます。そこで、私の

父と算哲様は後年を約して、その成否を私が見届けることになりました。ところが、その際算哲様は、すこぶる陰険な策動をなさったのでございます。と申しますのは、クリヴオフ様についてでございますが、あの方が日本に到着すると間もなく、剖見の発表が取り違えられていたという通知がまいりました。そこで、算哲様は一計を案じて、四人の名を『グスタフス・アドルフス伝』の中から採ったのでございます。つまり、その頭蓋による遺伝素質のないクリヴオフ様には、暗殺者の名を。他の三人には、暗殺者ブラーエの手に狙撃

された、ワレンシユタイン軍の戦没者の名を附けたの  
 でした。そして、この書庫の中から、グスタフス王の  
 正伝をことごとく省いてしまつて、それに『リシユ  
 リユウ機密閣史』を当てたのでしたけれども、恐  
 らくその人名は、家族の者にも、また貴方がた捜査官  
 にも、なんらかの使喚しそを起さずにいまいと考えられて  
 おりました。ですから法水さん、これで、いつぞや貴  
 方に申し上げた、ガイストヒカイト靈性レイセイという言葉の意味が——つま  
 り、父から子に、人間の種子たねが必ず一度は彷徨さまよわねば  
 ならぬ、あの荒野ヴェステの意味がお判りでございました。

そうして、今日クリヴオフ様が斃たおされたのですから、  
そうなる、当然算哲様の影が、あの疑心暗鬼の中か  
ら消えてしまふではございませぬか。ああ、この事件  
はあらゆる犯罪の中で、道德の最も頹たい廢はいした型式な  
でございます。そして、その黝くろずんだ溝どぶ臭い溜水の中  
で、あの五人の方々が喘あえぎ競せめいていたのでございます  
わ」

こうして、四人の神秘楽人の正体が曝露されると同  
時に、過去における黒死館の暗流には、ただ一つ、二  
つの変死事件のみが残されてしまった。それから、い



つも訊問室に当てている、ダンネベルグ夫人の室へやに戻ると、そこには旗太郎とセレナ夫人とが、四、五人の楽壇関係者らしいのを従えて待つていた。ところが、法水の顔を見ると、温雅な彼女にも似げない、命令的な語調で、セレナ夫人が云い出した。

「私どもは明瞭はつきりした証言をしにまいりました。実は、伸子を詰問して頂きたいのですが」

「なに紙谷伸子かみたにのぶこを!」と法水は、ちよつと驚いたような素振を見せたけれども、その顔には、隠そうとしても隠し得ようのない、会心の笑えみが浮んできた。

「そうすると、あの方が、貴女あなたがたを殺すとても云いましてかな。いや、事実誰かれにも、とうてい打ち壊すことの出来ない障壁があるのですよ」

それに、旗太郎が割つて入つた。そして、相変らずこの異常な早熟児は、妙に老成した大人のような、柔か味のある調子で云つた。

「法水さん、その障壁と云うのが、今まで僕等には、心理的に築かれておりましたね。現に津多子さんが、最前列の端にいられたのを御存じでしょう。ところが、その障壁を、いまここにいられる方々が打ち壊してく

れたのでした」

「私は、シャンデリヤ装飾灯が消えるとすぐに、ハーブ豎琴の方から人の近

づいて来る気配を感じました」とそう云いながら、た

ぶん評論家の鹿常充しかつねみつると思われる——その額の抜け上つ

た四十男は、左右を振り向いて周囲の同意を求めた。

そして続けた。「サア、それは気動とでも云うのでしよ

うかな。それより、絹が摺れ合うなうと唸うなりが起りますか

ら、たぶんそれではないかとも思うのです。しかし

ずれにしても、その音はしだいに拡がりを増してまい

りました。そして、それがパツタリ杜絶えたかと思う

と、同時に壇上で、あの悲痛な呻うめき声が発せられたのです」

「なるほど貴方の筆鋒ペンには、充分毒殺効果はあるでしょう」と法水は、むしろ皮肉な微笑を洩うなずらして頷うなずいた。「ですが、こういうハックスレイを御存じですか。

——証拠以上に出た断定は、誤謬ごびやうと云うだけでは済ま

されない、むしろ犯罪クライムである——と。ハハハハハ、ど

うせ音楽ミュージックの神の絃いとの音までも聴けるのでしたら、そんな風に、鶏とりの声でイビュコスの死を告げると云うのはどうですか。かえって僕は、アリオンを救った方が、

音楽好きの海豚いるかの義務ではないかと思うのですよ」

「なに、音楽好きの海豚いるかですって!？」居並んでいる一人が憤激して叫んだ。その男は左端に近い旗太郎の直下にいた、大田原末雄というホルン奏者であつた。「よろしい、アリオンは既とうに救われているんですぞ。しかし、僕の位置が位置だつたので、鹿常君の云うその気配と云うのは聴えませんでした。けれども、かえつてこのお二人に近かつただけに、完全な動静を握つていと云つても過言ではないのですよ。法水さん、僕もやはり異様な唸うなりを聴きました。それは、呻うめき声が始ると

同時に杜絶えましたが……、しかしその音は、旗太郎さんが左利ききで、セレナ夫人が右利ききである限り、弓キユーの絃いとが、斜めに擦れ合って起つたものに相違ないので「よ」

その時セレナ夫人は、皮肉な諦めあきらの色を現わして法水を見た。

「とにかく、この対照の意味が非常に単純なだけに、かえって皮肉な貴方には、評価が困難なのでございませう。けれども、御自分の慣性以外の神経チゴイネルで、もし判断して頂けるのでしたら、きつとあの賤民チゴイネルに、クラ

カウ（伝説におけるファウスト博士が、魔術修行の土地）の思い出が輝くに相違ございませんわ」

そうして、一同が出て行つてしまふと、熊城は難色を現わして、法水に毒づいた。

「いやどうも呆れたことだ、むしろ与えられたものを素直に取る方が、君に適わしい高尚な精神だと思ふんだがね。それより法水君、今の証言で、君が先刻さっき云つた武具室の方程式を憶い出してもらいたいんだ。あの時君は、2-1-1-1クリヴオフだと云つたね。しかし、その解答のクリヴオフが殺されたとしたら……」

「冗談じゃない。あんな賤民チゴイネル・ユングフラウの娘が、どうして、この宮廷陰謀の立役者なもんか」と法水は力を罩こめて云い返した。

「なるほど、伸子という女はすこぶる奇妙な存在で、ダ  
ンネベルグ事件と鐘鳴器室カリリヨンを除いた以外は、完全に情  
況証拠の網の中にあるのだ。しかし、あの標本的な  
人身御供ひとみごくうがあるがために、ファウスト博士は陽気な御  
機嫌を続けていられるんだぜ。第一伸子には、動機も  
衝動もない。例えばどんな作虐性犯罪者サデイストでさえも、そ  
ういった病的心理を、引き出すに至る動因が、必ずあ



るものなんだよ。現に、いまもあの好楽ファイルハーモニック・ドルフィンズの海豚どもが  
……」

と法水が何事かに触れようとした時、先刻調査を命  
じておいた拇指痕ほしこんの報告がもたらされた。しかし、結  
果は徒労に終つて、それに該当するものは、ついに現  
われ出て来なかつた。法水は疲れたような眼をして、  
しばらく考えていたが、ふと何と思つたか、広間サロンの  
マントルピースマントルピースに並んでいる、忘れな壺ポッツ・オブ・メモリーを持参するように命  
じた。それは総計二十あまりもあつて、すでに故人と  
なり、離れ去つた人達のもあるけれど、この館に重要

な関係を持った人達には、あまねく作らせて、回想を永遠に止めんがためのものであつた。表面には、スペイン西班牙風の美麗な釉葉ゆうやくが施されていて、素人の手作りのせいか、どこか形に古拙こせつなところがあつた。法水はそれをずらりと卓上に並べて云つた。

「あるいは、僕の神経が過敏すぎるのかもしれないがね。しかし、この館のような、精神病的人物の多い所では、おうなつ押捺した指痕などというものに信頼を置くと、それがそもそも間違ひになるのだよ。何故なら、ときたま外見に現われない発作があるからね。その時強

直なり羸瘦るいそうなりが起つた場合に、僕等とはとんでもない  
錯誤を招かんけりやならんのだ。しかし、この壺の内  
側には、必ず平静な状態の時、捺おされた拇指痕ぼしこんがある  
に相違ない。熊城君、君は、ここにある壺を巧く割つ  
てくれ給え」

そうして糸底いとぞこの姓名と対照して割つてゆくうちに、  
とうとう二つが残されてしまった。「クロード・デイグ  
スビイ」……割られたが、しかし、あのウェールズ  
猶太ジユウのものとは異なっていた。次に、降矢木算哲……  
熊城の持った木槌が軽く打ち下されて、胴体にジグザ

グの罅ひびが入った。そうして、それが二つに開かれた次の瞬間、三人は全く悪夢のようなものを掴まされてしまった。ちようど縁へりから幾分下方に当る所に、疑うべくもない拇指痕が、レヴェズの咽喉のどに印されたのと同じの形で現われた。さすがに検事も熊城も、この衝撃には言葉を発する気力さえ失せてしまったらしい。そうしているうちに、熊城は眠りから醒めたような形で、慌あわてて苮たぼこの灰を落したが、

「法水君、問題は、これで綺麗きれいさっぱり割り切れてしまったのだ。もう猶ゆうよ予するところはない。算哲の墓ぼこ窖

を発掘するんだ」

オーソドキシイ

「いや、僕はあくまで正統性を護ろう」と法水は異様な情熱を罩こめて叫んだ。「あの疑心暗鬼に惑わされて、算哲の生存を信ずると云うのなら、君は勝手に降霊会でも開き給え。僕は紋章クレストレックス・ストーンのない石——を見つけて、人間の殺人鬼と闘うんだ」

へきろ

それから壁炉へきろの積石に刻まれている紋章の一つ一つを辿たどってゆくと、はたして右側の積石の中に、それらしいものを発見した。そして、法水が試みにそれを押すと、奇妙なことには、その部分が指の行くがままに

落ち窪んでゆく。すると、それと同時に、その一段の積石が音もなく後退りあしずさを始めて、やがて、その跡の床に、パツクリと四角の闇が開いた。坑道——デイグスビイの酷烈な呪詛じゆその意志を罩こめたこの一道の闇は、壁間を縫ぬい階層の間隙を歩いて、何処いずこへ辿りつくのだらうか。鐘鳴器室カリルロンか礼拝堂かあるいは殯モーチュアリー室ルームの中にか、それとも四通八達の岐路に分れて……。

## 二、伸子よ、運命の星の汝の胸に

足許には小さな階段が一つあつて、そこから漆うるしのよ  
うな闇のぞが覗のぞいている。永年外気に触れたことのない陰  
湿な空気が、さながら屍温のようなぬくもりと、一種  
名状の出来ぬ黴臭かびさを伴つて、ドロリと流れ出てく  
る——文字どおりの鬼気だった。法水等三人は、さつ  
そく懐中電燈を点して、肩を狭めながら階段を下りて  
行つた。すると、そこは半畳敷ほどの板敷になつてい

て、そこまで来ると、今までは光線の加減で見えなかつたスリッパの跡が、床に幾つとなく発見された。しかし、その中にはきわめて新しい一つがあつて、それが一直線に階段の上まで続いているけれども、その小判形の痕あとには、たぶん静かに歩いたせいでもあろうか、前後の特徴さえも残っていないのである。したがつて、はたしてそれが階段から下りて来たものか、それとも、奥の坑道から辿り来つたものか、勿論その識別は不可能なのであつた。その時、周囲を照らしていた熊城がアツと叫んだ。見ると、右手の上方に、



せいそう  
凄愴な生え際を見せた魔王バリ（印度ヴィシユメ化身伝説に現われ  
る悪魔の名）の木彫面きぼりが掛つていて、その左眼の瞳が、五  
分ばかり棒のような形で突き出ている。それを押すと、  
反対に右の方が持ち上つてきて、上から差し込む光線  
が狭められていった——積石もとが旧の位置に戻ったから  
である。それから法水は、そのスリツパの跡と歩幅の  
間隔とを計つてから、前方に切り開かれている短冊形  
の闇の中へ入つて行つた。実にそれからが、往昔羅馬ローマ  
皇帝トラヤヌスの時代に、執政官コンスルプリニウスが二人の  
女執事デアコノを使つて、カリストウス地下聖廊を探らせた際

の、光景を髣髴ほうふつとするものであつた。

坑道の天井からは、永年の埃の堆積が鍾乳石のような形で垂れ下つていて、呼吸をするごとに細塵が飛散してきて、咽喉のどが擦くすくすられるように咽むせつぽかつた。それ  
でなくても、空気が新鮮でないために、妙に息苦しく、  
もしこの際松火たいまつを使つたとしたら、それは、輝かずに  
燻くすぶり消えるだろうと思われた。それに、館中の響が  
この空間には異様に轟とどろいてきて、時折岐路えだみちではないか  
と思つたり、また、人声のようにも聴えたりして、胸  
を躍らすのもしばしばであつた。しかし、スリッパの

跡はどこまでも消えずに彼等を導いていった。その足許には、雪を踏みしだくような感じで埃の堆積が崩れ、それを透かして、かし櫛の冷たい感触が、頭の頂辺てっぺんまでしみ透るのだった。こうして、この隧道旅行タシネルは、かれこれ二十分あまりも続いた。坑道は右に左に、また、ある部分は坂をなし、ほとんど記憶できぬほど曲折の限りを尽して、最後に左に曲ると、そこは袋戸棚のような行き詰りになっていた。そして、そこにも魔王バリの面が発見された。ああ、その石壁一重の彼方は、館の何処いずこであろうか。法水は固唾かたずを呑んで面の片眼を押

した。すると、その右の扉ドアは、熊城の肩を微かに掠かすつて開かれたが、前方にも依然として闇は続いている。しかし、どこからとなく、寛ゆるやかな風が訪れてきて、そこが広い空間であるのを思わせるのだった。

法水は前方の空間を目がけて、斜めに高く光を投げた。けれども、その光は、闇の中を空しく走ったのみで、何も映らなかった。それで、今度は一步踏み込んで、頭上に向けると、そこには、醜くじゆうい苦渋ゆうな相貌をした三人の男の顔が現われた。法水はそれによつて、いつさいを知ることが出来たのである。聖パウロ、殉

教者イグナチウス、コルドバの老証道人ホシウス……

と壁面の彫像柱を、三つまでは数えたが、その声に俄

然顫えふるが加わつてきて、

「墓窖クリプトだよ、とうとう僕等は算哲の墓窖クリプトにやつて来て

しまったんだ」と狂わしげに叫んだ。

その声と同時に、熊城は二、三步進んでいって、円

い灯で前方を一の字に掃いた。すると、その中に幾つ

か石棺の姿が明滅して、明らかにこの一劃が、算哲の

墓窖クリプトに相違ないことが分つた。三人は切れ切れに音高

い呼吸を始めた。いつぞやレヴェズが法水に云つた、

地精よ、いそしめ——の解釈が、今や幻から現実に移されようとしている。しかも、スリツパの跡は、中央にあつてひととき巨大な、算哲の棺台を目がけて、一文字に続いているのだ。その蓋には、軽鉄で作られた守護神聖セントゲオルヒが横たわつていて、それは軽く擡もたげられた。恐らく、その時三人の心中には……算哲の棺台のみに脚がなくて、それが大理石の石積で作られていることから、たしか棺中にはファウスト博士の姿はなくて、そこからまた、地下に続く新しい坑道が設けられているように思われていた。

ところが、蓋が擡もたげられて、円い光がサツと差し入れられた時——思わず三人は、慄然りっぜんとしたものを感じて、跳び退のいた。見よその中には、異形いぎような骸骨が横たわっているではないか。静臥しているはずの膝が高く折り曲げられていて、両手は宙に浮き、指は何物かを搔かかんとするもののように、無残な曲げ方をしている。しかも、三人が跳び退いた機はずみに、それがカサコソと鳴って、おまけになお薄気味悪いことには、肋骨ろっこつの端が一、二本ポロリと欠け落ちて、それも灰のようにひしや潰つぶれてしまうのだった。しかし、左肋骨には創傷

の跡が残っていて、明らかにそれは、算哲の遺骸に相違ないのだった。

「算哲はやはり死んでいたのだ。すると、いつたいあの指痕は、誰のものなんだろうか」と熊城を顧みて、かえり検事は唸るような声で呟いた。うながその時、法水の眼に妖しい光が閃いたかと思つたと、顔を算哲の肋骨に押し付けて、動かなくなつてしまった。実に意外千万にも、その胸骨には縦に刻まれている、異様な文字があつたのである。

PパAテTルEルR!

HホOモMモO

SスUムM!



「父よ、吾も人の子なり——」と法水は、その一行の

ラテン

くちずさ

羅甸文字を邦訳して口誦んだが、異様な発見はなおも  
 続けられた。と云うのは、その彫字の縁に、所々金色  
 をした微粒が輝いているのと、もう一つは、欠け落ち  
 た歯の隙に、たぶん小鳥らしいと思われる、骸骨が  
 突っ込まれていることだった。法水はその微粒を手に  
 取って、しばらく眺めすかしていたが、

パンチリオ

「ああ、恐らくこれが、ファウスト博士の儀礼なんだろ  
 うがね。しかし熊城君、この文字は乾板で彫つてある  
 のだよ。父よ吾も人の子なり——。それに、歯の間に

パテル・ホモ・スム

突っ込まれている、小鳥の骸骨らしいのは、たぶん早期埋葬防止装置を妨げたという、山雀やまがらの死体に違いのないのだ。ねえ怖ろしいことじゃないか。つまり、いったん算哲は棺中で蘇生したのだが、その時犯人は山雀の雛ひなを挟んで電鈴ベルの鳴るのを妨げたのだよ」

法水の声のみが陰々と反響こだましても、それがてんで耳に入らなかつたほど、検事と熊城は、目前の戦慄せんりつすべき情景に惹ひきつけられてしまった。その姿体は、明白に棺中の苦悶であり、その結論は生体の埋葬に相違なかつた。しかし、そうは云うものの、またファウスト

博士にとれば、算哲が棺中で蘇生してから狂ったように合図の紐を引き、しかも救いは来ず、力もようやくやく尽きようとして、頭上の蓋を搔き窺むしっている有様と云うのが、恐らくまた、残虐な快感をもたせられたものだったかも知れないのである。そうして、犯人の冷酷な意志は、山雀やまがらの屍骸と父パテルよ、吾も人の子ホモ・スムなり——の一文にとどめられるのであるから、当然、久我鎮子が、道德の最も頹廢たいはいした形式と、叫んだのも無理ではないかもしれない。いわゆる黒死館殺人事件と呼ばれて、酷烈酸鼻さんびをきわめた流血の歴史よりかも、すでにそれ

以前行われていて、しかも眼のあたり、遺骸の形状にもそれと頷かれる恐怖悲劇の方が、胸を塞いでくる強い何物かを持つていたのは事実だった。それから、スリッパの跡の調査を始めたが、それは聖窟の階段を上りきった頭上の扉口——すなわち墓地の棺龕まで続いている。しかし、ここまで来ると、ようやくその前後が明らかになって、犯人がダンネベルグ夫人の室から坑道に入り、それから棺龕の蓋を開けて、裏庭の地上に出たのを知ることが出来た。またそれ以外にも、埃に埋もれかかった足跡らしいものが散在していて、既

からあの明けずの間に、異様な潜入者のあつたことは疑うべくもなかつた。調査が終ると、三人は愴惶そうこうに石棺の蓋を閉じて、この圧し狂わさんばかりの、鬼気から遁のがれていった。そして、道々法水は、幾つかの発見を綜合整理して、それを、鎖の輪のように繋つなげていった。

一、父パテルよ、吾ホモも人ホモの子スムなりの考察——。

すでにそれは、如何いかにとも否定し難い物テルテール・シムボル云う表徴である。しかし、算哲が自説の勝利に対する狂

的な執着からして、四人の異国人を帰化入籍させたのみならず、常軌を逸した遺言書を作ったり、また屍様図を描き魔法典焚書ふんしよを行ったりして、犯罪方法を暗示したり捜査の攪乱かくらんをあらかじめ企てたという事が、はたして、三人のうちどの一人に衝動を与えたか——その決定は勿論疑問なのだった。と云うものの、その父パテル——の一語は、明白に旗太郎もしくは、セレナ夫人を指していて、あるいは旗太郎が、遺産に関する暴挙に復仇したもののか、それともセレナ夫人

が、なんらかの動機から、算哲の真意を知るこ  
とが出来て——それには、法水の狂的な幻影と  
しか思われない、屍様図の半葉が暗示されてく  
るのであるが——もしそうだとすれば、夫人の  
矜持きょうぢの中に動いている絶対の世界が、あるいは、  
世にもグロテスクな、この爆発を起させたかも  
しれないのである。そうして、その意志表示が、  
吾ホモも人の子スムなり——の一句に相違ないのだけれ  
ども、仮りにもしそれが偽作だとすれば、今度  
は押鐘津多子を、この狂文の作者に推定しなけ

ればならない。

二、犯罪現象としての押鐘津多子に――。

すでに明白なのは、神意審問会の際張出縁に動いていた人影と、最初乾板を拾いに来た園芸倉庫からの靴跡、それに薬物室のちんにゆうしや闖入者――と以上の三人が、算哲を斃たおし、あの夜ダンネベルグ夫人の室に侵入した人物と同一人だという事だった。そうすると、当然問題が、ダンネベルグ事件に一括されて、それには、否定すべからざる暗影を持つ押鐘津多子が、しかも、動機中



の動機とも云うべきものを引つさげて、登場して来るのだった。勿論、確実な結論として律し得ない限りは、それ等の推測も、無の中の一突起にすぎないではあろうが。

再び旧もとの室へやに戻つて、椅子の上に落ち着くと、法水はぶぜん無然とあご顎をな撫でながら驚くべき言葉を吐いた。

「実は、算哲の屍骸の中に、二つの狂暴な意志表示が含まれているのだよ。一度はデイングスピイの呪詛のため、に殺され、そうして蘇生したところを、今度はファウ

スト博士が止めを刺したのだ。つまり、あれは二重の殺人なんだよ」

「なに、二重の殺人!?」と熊城が驚きのあまりに問い返すと、法水は<sup>ピハイインド</sup>大階段の裏——を、実に三度転倒させて、いよいよ最終の帰結点を明らかにした。

「そうじゃないか熊城君、有名なランジイ(仏蘭西(フランス)の暗号解説家)の言葉に、<sup>クリプトメニツエ</sup>秘密記法の最終は<sup>シラフル</sup>同字整理に

あり——というのがあるからね。そこで、その

<sup>シラフル</sup>●<sup>アジャストメント</sup> クレストレッズ●<sup>ストリン</sup>

同字整理を紋章のない石に試みて、sとs、reとle、stとstを除いてみた。すると、それが

コーン (松毬) まつかさ という一字に、変つてしまつたのだよ。

ところが、その松毬 コーン というのが、寝台の天蓋にある

頂飾 たてぼな にあつて、それがまた、薄気味悪い道化師 クラウン なんだ

がね」とそれから帷幕 とぼり の中に入つて、蒲団 マット の上に、

卓子 テーブル や椅子を一つ一つ積み重ねていった。そうして、

最後に立箆 キャビネット 筒が載せられたとき、検事と熊城はハツと

して息を嚙 の んだ。と云うのは、松毬 コーン の形をしたその

頂飾 たてぼな が口を開いて、そこからサラサラと、白い粉末が

溢 こぼ れ出たからであつた。すると、法水の舌が、黒死館

の過去を暗澹 あんたん とさせたところの、三つの変死事件に触

れていった。

「これが、暗黒の神秘——黒死館の悪霊さ。それを  
修辞学的レトリカルに云えば、さしずめ中世異端の弄技物とでも  
云うところだろうがね。しかし、その装置の内容たる  
や、過去の三変死事件が、それぞれ同衾中どうきんに起つたの  
を考えれば判るだろう。つまり、二人以上の重量が  
法度はつとで、それが加わると、松毬マツグシの頂飾が開いて、この  
粉末が溢れ出すのだよ。それも、以前マリア・アンナ  
朝時代では、媚薬などを入れたものだが、この寝台で  
は桃花木マホガニーの貞操帯になっているのだ。と云うのは、こ

の粉末が確かストラモニヒナス(註)——ほとんど稀集に等しい植物毒だろうと思うからだよ。それが鼻粘膜に触れると、狂暴な幻覚を起すのだから、最初明治二十九年に伝次郎事件、それから二十五年に筆子事件——と二つの他殺事件を起して、ついに最後の算哲を、人形を抱いたあの日に斃たおしてしまつたのだ。つまり、このデイグスビイの呪詛じゆそと云うのは、『死の舞踏』トーテン・タンツに記されている、奢那教徒ジャイニスツ・アンダーライ・ピロウ・インフェルノは地獄の底に横たわらん——の本体なんだよ」

(註) 後日法水は、ストラモニヒナスがついに伝説以上のものだったのに、驚いたと云っている。それは、ゲオルヒ・バルテイシュ(十六世紀ケーニヒスブルクの薬学者)の著述の中に記されているのみで、近世になつてからは、一八九五年にフィツシュと云つて、印度大麻の栽培を奨励した、独領東亞弗利加<sup>アフリカ</sup>会社の伝道医師のみ。そして、稀に印度大麻にストリヒナス属(矢毒クラレの原植物)が寄生すると、その果実を土人が珍重して呪術に用ゆ

るけれども、恐らくそれではないか——という報告を一つもたらせたのみである。たぶん黒死館の薬物室にあつた空瓶というのも、デイグスビイから、与えられるのを算哲が待っていたからであろう。

このせんめい闡明を最後にして、黒死館を覆うていた、過去の暗影の全部が消えた。しかし検事は、昂奮の中に軽い失望を混えたような調子で、

「なるほど、君はしやべ喋つた——しかし、現在の事件につ

いては、何も判らなかつたのだ。それより、この矛盾を、君はどう解釈するかね。扉ドアから室の中途までは、

カーペット

敷物の下に、人形の足型が水で印されていた。ところがいったん坑道の中に入ってしまったら、今度はそれが人間のものに化けてしまったんだ」

「ところが支倉君、それがプラスマイナス＋－なんだよ。最初から人

形の存在を信じていない僕には、それを口にする必要がなかつたのだ。しかし、この一事だけは、とうてい偶然の暗合として、否定し去ることは出来まいと思うよ。何故なら、坑道にあるスリッパの跡を人形の足跡



に比較すると、その歩幅と足型の全長とが等しく、またスリッパの跡が、人形の歩幅と符合するのだ。それが熊城君、実に面白い例題なんだよ」とそれから煖炉ストーブの前で、法水は紅い煨おきに手をかざしながら続けた。

「ところで、あの人形の足型というのは、元来僕が、敷物カーペットの下にある水滴の拡がりを測って出来たものなんだ。そして、上下両端の一番鮮かだった——つまり云い換えれば、水滴の量の最も多い部分を、基準として話だったのだったからね。……そこで、僕がプラスマイナストリックと呼ぶ詭計を再現できるんだよ。で、それはほかでも

なく、スリッパの下にもう二つのスリッパを仰向けに附けて、またその二つのスリッパを、互い違いに組み合わせるのだ。そして、それに扉ドアを開いた水をタップリ含ませてから、最初に後の方の覆カヴァを、強く踵かかとで踏む。すると、覆カヴァの中央に、やや小さい円形の力が落ちるところになるから、当然その押し出された水が、上向き括弧かっこ（○）の形になるじゃないか。また、次に前のあの覆カヴァを前踵部つまさきで踏むと、今度はそこの形が馬蹄形をしてるので、中央より両端に近い方の水が強く飛び出して、それが下向き括弧（○）の形になってしまうのだ。

そして、その上下二様の括弧形をした水の跡を、左右かわるがわる

交互に案配していったのだよ。つまり犯人は、あらかじめ常人の三倍もある、人形の足型を計っておいた。そうしてから、歩幅をそれに符合させていったので、当然その二つの括弧に挟まれた中間が、人形の足型を髣髴とする形に変わってしまったのだ。したがって、そのスリッパの全長が、ヨチヨチ歩く人形の歩幅に等しくなつて、そこで、陽画と陰画のすべてが逆転してしまつたという訳なんだよ」

こうして、奇矯を絶した技巧が明らかにされて、人

形の姿が消えてしまうと、当然屍光と創紋——といずれか二つのうちに、犯人がこの室へやに闖入ちんにゆうした目的があるのではないかと思われてきた。すでに、十一時三十分——。しかし、夜中になんとかして、解決まで押し切ろうとする法水には、いっこうに引き上げるような気配もなかった。そのうち検事が、嘆息ともつかぬような声を出して云った。

「ねえ法水君、この事件の、すべては、ファウストの呪文を基準にした、同意語シノニムの連続じゃないか。火と火、水と水、風と風……。だがしかしだ、あの乾板だけは、

その取り合わせの意味がどうしても嘸<sup>の</sup>み込めんのだが  
ね」

「なるほど、同意語<sup>シノニム</sup>!? そうすると君は、この悲劇を

おもわく

思惑<sup>おもわく</sup>に結び付けようとするのかね」と法水はやや皮肉

を交えて呟<sup>つぶや</sup>いたが、いきなり、いきなり鋭くその言葉

を途中で截<sup>た</sup>ち切つて、「あッ、そうだ支倉君、同意語<sup>シノニム</sup>

——乾板。ああなんだか僕に、あの創紋の生因が判つ

てくるような気がしてきたよ」と不意に飛び上つて叫

んだが、そのまま風のように室を出て行ってしまった。

しかし、間もなく幾分上気したような顔で、戻つて来

た彼を見ると、その手に、前日開封された遺言書が握られていた。そして、上段の左右に二つ並んでいる、紋章の一つを、創紋の写真に合わせて電燈で透かし見ると、そのとたん、思わず二人の口から呻うめきの声が洩れた。実に、その二つが、寸分の狂いもなく符合したからである。法水は、召使バトラーが持参した紅茶を、グイとあおつてから云い出した。

「實際無比ユニークだ。犯人の智的創造たるや、実に驚くべきものなんだ。この書簡箋は、既とうに一年もまえ、現在のものに変えられたというのだからね。勿論それ以前に

——あの乾板は、事件の蔭に隠れている、狂人染みきちがいたものを映して取っていたのだよ。何故なら、それには、押鐘博士の陳述を憶い出してもらいたいのだ。それだけでなく、現在これでも見るとおりに、算哲は遺言書したたを認め終ると、その上に、古風な軍令状用の銅粉を撒まいたのだった。ねえ熊城君、銅には、暗所で乾板に印像するという、自光性があるじゃないか。ああ、あの序幕インライツング——この恐怖悲劇の序文インライツング。さてこれから、その朗読をやることにするかな。あの夜算哲は、破り捨てた方の一枚を下にして、二枚の遺言書を金庫の抽斗ひきだし

に蔵めた——ところが、それ以前に犯人は、あらかじめその暗黒な底まっくらに乾板を敷いておいたのだ。そうすると、翌朝になつて算哲が金庫を開き、家族を列席させた面前で、その印像を取られた方の一枚を焼き捨ててから、さらに残りの一枚を、再び金庫に蔵めるまでの間に、何人かなんびと、全文を映し取つた乾板を、取り出した者がなけりやならん訳だろう。実に、そのわずかな間隙が、ファウスト博士に、悪魔との契約パクトを結ばせたのだつた。それを、直観と予兆とだけで判断しても、当然焼き捨てられた一葉が、僕の夢想している屍様図の



半葉に当るのだし、またそれが坐標となつて、あの  
フアンタスティック  
幻想的な空間に、怖ろしい渦が捲き起されたのだつた  
よ」

「なるほど、その乾板は無量の神秘だろう。しかし、当然結論は、その席上から誰が先に出たか——という事になるがね」と云つたが、熊城は両手をダラリと下げ、濃い失望の色を泛<sup>うか</sup>べた。「無論今となつては、その記憶も恐らくさだかではあるまい。では、あの創紋と乾板との関係は？」

「それが、ロージャー・ベーコン（二二二四——二二九二、英蘭土

の僧。魔法鍊金士の名が高いけれども、元来非凡な科学者で、火薬その他をすでに十三世紀において発明したと伝えられる)の故智さ」と法水は静かに云つた。「ところで、アヴリノの『聖僧奇跡集』を見る

と、ベーコンがギルフオードの会堂で、屍体の背に精密な十字架を表わしたという逸話が載っている。けれどもまた一方、発火鉛(酒石酸を熱して密閉したもの。空気に触れると、舌のような赤い閃光を発して燃える)を、硫黄と鉄粉とで包んだと云われる、ベーコンの投擲弾とうてきだんを考えると、そこに

アート・マジックアート・マジックの技巧呪術の本体が曝露されなければならぬ。と同時に、この事件にも、それが創紋の生因を明らかにして

くれたのだよ。熊城君、君は、心臓停止の直前になると、皮膚や爪に生体反応が現われなくなるのを知っているだろう。また、衝動的な死シヨツクに方をした場合には、全身の汗腺が急激に収縮する。そして、その部分の皮膚に閃光的な焔を当てると、そこには、解剖刀メスで切つたような創痕きずあとが残されるのだ。勿論犯人は、それをダ  
ンネベルグ夫人の断末魔に、乾板へ応用したのだったよ。で、その方法を云うと、まず二つの紋章を乾板から切り取って、その輪廓なりに、橄欖冠かんらんかんを酸で刻んでゆく。それから、その二つを筋なりに合わせて、その

空洞の中で発火鉛を作ったのだ。だから、手早くそれを顛顛こめかみに当てさえすれば、発火鉛が閃光的に燃えて、溝なりにあの創紋が残るという道理じゃないか。どうだね熊城君、うんざりしたろう。勿論技巧呪術アート・マジックそのものは、幼稚な前期化学にすぎないさ。けれども、その神秘的精神たるや、しばらくのあいだ、化学記号を化して操人形マリオネットたらしめていたほどだからね」

そうして、人形の存在が、夢の中の泡のごとくに消えてしまうと、当然その名を記したダンネベルグ夫人自署の紙片を、犯人が、メモや鉛筆とともに投げこん

だ——と見なければならなくなった。しかし、あの特異な署名を、どうして犯人が奪ったものだろうか。また、乾板をあくまで追求してゆくと、是が非にも神意審問会まで遡さかのぼって行き、出所をそこに求めねばならなかつたのである。法水はしばらく黙考していたが、何と思つたか、夜中やちゆうにもかかわらず伸子を喚よんだ。

「お喚びになつたのは、たぶんこれだと思ひますわ」と伸子の方から、椅子につくと切り出した。その態度には、相変らず、明るい親愛の情が溢あふれていた。「昨日レヴェズ様が、私に公然結婚をお申し出になりました。

そして、その諾否だくひを、この二つで回答してくれとおつしや  
仰言おつしやつて……」と彼女は語尾を萎すぼめて、あまりにも慌あわ  
ただしい、人生の変転を悲しむごとくであつた。が、  
やがて、懐中から取り出したものがあつて、その時な  
らぬ豪華な光輝が、思わず三人の眼を動かなくしてし  
まつた。それは二本の王冠クラウンピンだつた。そして、その  
上に、一つには紅玉ルビー一つにはアレキサンドライトが、  
それぞれ白金プラチナの台の上で、百二、三十カラットもある  
うと思われる、マーキーズ形の凸刻面を輝かしていた。  
伸子は弱々しい嘆息をしてから、舌を重たげに動かさ

ていった。

「つまり、親愛な黄色——アレキサンドライトの方が吉で、紅玉ルビーの血は勿論凶なのでございます。そして、この二つを諾否しるしの表示にして、どつちかを、演奏中私の髪飾りにしていてくれ——と、あの方は仰言おっしゃいました」

「では、云い当てて見ましようか」と狡猾ずるそうに眼を細めて云つたが、しかし、何故か法水は、胸を高く波打たせていて、

「いつぞや、貴女あなたはレヴェズを避けて、樹皮亭ボルケンハウスに遁のがれて

「いましたつけね」

「いいえ、レヴェズ様の死に、私は道徳上責任を負う引  
け目はございません」と伸子は、息を荒ららげて叫ん  
だ。「実は私、アレキサンドライトを付けました。それ  
で、あの方と二人で、このハルツの山（妖魔どもが、いわゆる  
ヴァルブルギス饗宴を行うという山）を降りるつもりだったのです  
わ」

それから、法水の顔をしげしげ覗き込んで、哀願す  
るように、「ねえ、ほんとう 真実の事をおっしゃ仰言つて下さいまし。も  
しや、あの方自殺なされたのでは、いいえけっして、



私がアレキサンドライトを付けた以上……」

その時法水の顔に、サツと暗いものが掃いて、みるみる悩ましげな表情が泛<sup>うか</sup>び上つていった。その暗影と云うのは——、たしかに彼の心中に一つの逆説<sup>パラドックス</sup>があつて、それを今の伸子の言葉が、微塵と打ち砕いたに相違なかつた。

「いや、正確に他殺です」と法水は沈痛な声で云つたが、「しかし、ここへ貴女<sup>あなた</sup>をお呼びしたのは、ほかでもないのですが、昨年算哲が遺言書を発表した席上から、いったい誰が先に出たのでしようね」

すでに一年近くも経過しているので、勿論伸子は、一も二もなく頸くびを振るものと思われていた。ところが、そのいかにも意味ありげな一言が、伸子に何事かを覺らせたと見えた。いきなり、彼女の全身に異様な動揺が起つた。

「それは……あの……あの方なのでございますが」と伸子は苦しげに顔を歪めて、云うまい云わせようの葛藤と凄烈に闘っている様子であつたが、やがて、決意を定めたかのように毅然きつと法水を見て、  
「いま私の口からは、とうてい申し上げることは出来

ません。けれども、のちほど——紙片でお伝えいたしますわ」

法水は満足そうに頷うなずいて、伸子の訊問を打ち切った。熊城は、今日の事件において、最も不利な証言に包まれている伸子に対して、いささかも法水が、その点に触れようとしなかったのが不満らしかったが……しかし、乾板に隠れている深奥の秘密を探る最後の手段として、いよいよ神意審問会の光景を再現することになった。勿論それ以前に法水は、鎮子に私服を向けて、当時七人が占めていた位置について知ることが出来た。

ところでその配置を云うと、ダンネベルグ夫人一人の  
 みを向う側にして、その間にハンド・オブ・グロリー栄光の手（絞死体の手を酢漬け  
にして、それをさらに乾燥したもの）を挟み、その前方には、左か  
 ら数えて、伸子・鎮子・セレナ夫人・クリヴオフ夫人・  
 旗太郎——と以上残りの五人が、相当離れて半円形を  
 作っていたが、独りレヴェズのみは、半円形の頂点に  
 当るセレナ夫人の前面で、ややかが踏み加減に座を占めて  
 いたのである。そして、六人の位置は、入口の扉ドアを背  
 面にしていたのだった。

以前行われた時と同じ室に入つて、てっばこ鉄筐の中から、

熊城が<sup>ハンド・オブ・グローリー</sup>栄光の手を取り出したとき、その指の顫えに、

無量の恐怖を感じさせるものがあつた。それは、かつ

て人体の一部であつたのを、嘲笑<sup>あざわら</sup>うかのように、それ

らしい線や塊<sup>マッス</sup>はどこにも見られなかつた。ただただ、

雑色と雑形の一種異様な混淆<sup>こんこう</sup>であつて、あるいは、盆

景的に矯絶な形をした木の根細工のようでもあり、そ

の——一面に細かい亀裂の入つた羊皮紙色の皮膚を見

ると、和本の剥がれた表紙を、見るような気もするの

だつた。すでに、肉体的な類似を求めるのが、困難な

しろものだつたのである。また、その指頭に立てる屍

体蠟燭ろうそくには、一々向きと印しがついていて、それはや  
や光沢の鈍いような感じはするけれども、外見はいつ  
こうに、通常の白蠟燭と変りはなかつた。そして、端か  
ら火を移してゆくと、ジイジイつと、まるで耳馴れた  
囁ささきを聴くような音色を立てて点ともりはじめ、赭あかぼんだ  
——ちようど血を薄めたような光線が、室へやの隅々に拡  
がっていった。そうしているうちに、ダンネベルグ夫  
人の位置にいた法水の視野を、異様に朦朧もうろうとしたもの  
が覆いはじめてきた。それは、一種特別な臭気を持つ  
た、霧のようなもので、しだいに根元からかけて五本

の蠟身を包みはじめ、やがて、焰が揺れはじめて瞬きまたた出すと、室内は、スウツと一段下降したように薄暗くなつた。そのとたん、法水の手が差し伸べられて、尸体蠟燭を一つ一つに調べはじめた。すると、五本ともその根元に——すなわち、中央の三本は両側に一つ一つ、両端の二本は、内側に一つ——不可解な微孔があるのが、発見されたのだった。それを見て、熊城が点滅器を捻ひねると、その異様な霧が、今度は法水の、病的な探究の雲に変わっていった。やがて、彼はニタリとほくそ笑んで、二人を顧かえりみた。

「この微孔の存在理由は、レーゾン・デートルある意味では隠れ衣であり、クリスタル・ゲージングまた、一種の水晶凝視を起すにもあつたのだ。それぞれ芯孔に通じているので、そこから導かれてきた蠟の蒸気が、蠟身を伝わって立ち上つてゆく。のぼしかし、そうなつて、ダンネベルグ夫人の顔前に蒸気の壁が出来、さらに、中央の三本に焰を瞬かせて、光を暗くするとだ。当然、円陣の中央まんなかにいる一人の顔は、異常のない両端の光から最も遠くなる。したがつて、その顔が、ダンネベルグ夫人からは全然見えなくなつてしまふのだ。また、同時に両端の二本も、両側から上つて



くる蒸気に煽あおられて、焰が横倒しになる。そして、光の位置がさらに偏かたよるので、当然両端にいる二人の顔も、この位置から見ると、光に遮られて消えてしまうのだよ。つまり、旗太郎・伸子・セレナ夫人——と、こう数えた三人というのは、仮令中途でこの室から出たにしても、その姿を、ダンネベルグ夫人は当然見ることが出来なかつただろう。また、それ以外の人達も、この異常な雰囲気のために、恐らく周囲の識別を失つていただろうからね。気づかない方がむしろ当然だと云いたいくらいなのだよ。そうすると、ダンネベルグ夫人

が倒れるとすぐ、伸子が隣室から水を持って来た——  
という事が、あるいは伸子に疑惑をもたらしかもしれない。  
ない。つまり、それ以前既に、彼女は室へやを出ていて、  
あらかじめこの事を予期していたために、水を用意し  
ていた——とも云えるだろう。けれども、勿論この推  
測は、ある行為の可能性を指摘したまでの話で、当然  
証拠以上のものでないのだよ」

「たしか、この微孔は犯人の細工には違いあるまいが  
ね」と検事は深く顎あごを引いたが、問い返した。「けれど  
も、あの時ダンネベルグ夫人は、算哲と叫んで卒倒し

たのだつたぜ。たぶんそれが、あの女の幻覚ばかりのせいじゃあるまいと思うよ」

「明察だ。けつして、単純な幻覚ではない。ダンネベ  
ルグ夫人は、たしかリボーのいわゆる第二視力者——  
つまり、錯覚からして幻覚を作り得る能力者だつたに  
違いない。それは、セント聖テレザにも乳香入神などと云わ  
れているんだが、くんえん薰烟や蒸気の幕を透して見ると、凹  
凸がいつそう鮮かになり、またその残像が、時折奇怪  
な像を作ることがあるのだ。つまり、この場合は、両  
端の蠟燭ろうそくから見て内側にいる二人——つまり、鎮子と

クリヴオフ夫人との顔が、凝視のため複視的に重なり合つたのだらう。そして、恐らくその錯覚が因で、ダンネベルグ夫人は幻視を起したに相違ないのだよ。それを、リボーは人間精神最大の神秘力と云つて、ことに中世紀では、最も高い人間性の特徴と見なされてきたのだ。ああ、きつとダンネベルグ夫人には、かつてのジャンヌ・ダルクや聖テレザと同じに、一種のヒステリー比斯呈利性幻視力が具わっていたに違いないのだよ」

こうして、法水の推理が反転躍動していつて、あの夜張出縁に蠢うごめいていて乾板を取り落した人物にも、既

往の津多子以外に、旗太郎以下の三人を加えることが出来た。まさにその時、法水の戦闘状態は、好条件の絶頂にあつた。あるいは、事件が今夜中に終結するのではないかと思われたほどに、彼の凄愴な神経運動が——その脈打ちさえも聴き取れるような気がした。それから、暗い廊下を歩いて、旧の室もとへやに戻ると、そこには、先刻さつき伸子が約束した回答が待っていた。神意審問会の索輪つなわの中で、濃厚な疑惑に包まれ、しかもそれが、ピッタリと現存の四人、その一群に、最後の切札が投ぜられたのだ。法水は唇が潤かわき、封筒を持つ右手が怪

しくも顫<sup>ふる</sup>え出した。そして、心の中で叫んだ。伸子よ、  
運命の星は汝の胸に横たわる！

三、父パテルよ、吾ホモも人スムの子なり

昨年問題の遺言書が発表された——その席上からいち早く出て、算哲がそこへ達しない以前に、金庫の中から、焼き捨てられた全文を映し取った乾板を、取り出した人物がなければならなかった。そうであるからして、その人物の名を印した伸子の封書を握りしめて、法水が、心の中でそう叫んだのも当然であると云えよう。しかし、封を切つて、内容なかみを一瞥いちべつした瞬間に、ど

うしたことか彼の瞳から輝きが失せ、全身の怒張がいつせいに弛ゆるんでしまつて、その紙片を力なげに卓上へ抛り出した。検事が吃驚びっくりして覗き込んでみると、それには人の名はなく、次の一句が記されているのみだつた。

——昔ツーレ(一)に聴ラウシユレーレン耳筒(二)ありき。

注(一) ツーレ——。ゲータの「ファウスト」の中で、グレートヘンが唄う民謡の最初の出。その時ファウストから指環を与えられたのが



開緒となつて、彼女の悲運が始まるのである。

(二) 聴耳筒——。西班牙スペイン宗教審問所に設けられたのが最初。ウファ映画「会議が踊る」の中で、メテルニツヒがウエリントンの会話などを盗み聴くあれがそうである。

「なるほど、聴耳筒ラウシユレーレンか——。その恐ろしさを知つてい  
るのは、独り伸子のみならずさ」と法水は、苦笑を交  
えながら独り頷うなずきをして、「事実も事実、ファウスト博  
士おんぎようラウシユレーレンの隠形聴耳筒たるや、時と場所とに論なく、僕等の

会話を細大洩らさず聴き取ってしまうのだからね。だから、当然迂闊うかつなことでもしようものなら、伸子がグレートヘンの運命に陥るのは判りきった話なんだよ。必ず何かの形で、あの悪鬼の耳が陰険な制裁方法を採用あつかしておくもんか」

「まず、それはいいとしてだ……。ところで、くどいよ  
うだけど、君がいま再現した神意審問会の光景だが  
ね」とその声に法水が見上げると、検事の顔に疑い深  
そうな皺しわが動うごいていた。「君は、ダンネベルグ夫人を  
第二視力者セカンド・サイターだと云つて、しかも驚くべきことには、犯

人がその幻覚を予期していたと結論している。けれども、そういうような、精神の超形而上的な型式が——だ。仮りにもし、軽々と予測され得るものだと言うのなら、君の論旨はとうてい曖昧以外にはないな。けっして深奥だとは云えない」

法水はちよつと身振をして皮肉な嘆息をしたが、検事をまじまじと見詰めはじめて、「どうして、僕はヒルシユじやあるまいし……。ダンネベルグ夫人をそれほど神秘的な英雄めいた——例えばスウエーデンボルグやオルレアンの少女おとめみたいなの、パラノイア・ハルツイナトリア・クローニカ慢性幻覚性偏執症だ

と云うわけじゃないのだよ。ただ、夫人のある機能が過度に発達しているのときたまで、時偶そういう特性が、有機的な刺戟に遇うと、感覚の上に技巧的な抽象が作られてしまう。つまり、漠然と分離散在しているものを、一つの現実として把握してしまうのだ。それに支倉君、フロイドは幻覚というものに、抑圧されたる願望の象徴的描写——という仮説を立てている。勿論夫人の場合では、それが算哲の禁断に対する恐怖——つまり云うと、レヴェズとの冒してはならぬ恋愛関係に起源を發していたのだ。それだから、犯人が夫人の幻覚を予

期し得る条件としては、当然その間の経緯いきさつを熟知して

いなければならぬ。また、ひいてはそれが一案を編

み出させて、屍体蠟燭に水晶体凝視クリスタル・ゲージングを起すような、微

妙な詭計を施した。それで、夫人を軽い自己催眠に

誘つたのだつたよ。ところが支倉君、その潜勢状態と

いう観念が、僕に栄光を与えてくれた……」

そう鋭く言葉を截ち切つて、それから黙々と考えは

じめたが、そのうち幾つかの莠たほこを換える間に、法水は

一つの観念を捉え得たらしかった。彼は、旗太郎・セ

レナ夫人・伸子の三人を至急喚よぶように命じてから、

再び礼拝堂に降りて行つた。人氣のないガラシとした礼拝堂の内部には、いかにも佻<sup>わび</sup>しげな陰鬱な灰色をしたものが、いつぱいに立ち罩<sup>こ</sup>めていて、上方に見透しもつかぬほど拡がっている闇が、天井を異様に低く見せた。その中に光と云えば、聖壇に揺れている微かな灯のみで、それが、全体の空間をなおいつそう小さく思わせた。そこから暗く生暖<sup>なまぬる</sup>い、まるで何かの胎内でもあるかのような――それでいて、妙に赭<sup>あか</sup>みを帯びた闇が始まつていた。おまけに、その絶えずはためいている金色の輪には、見詰めていると眼を痛めるよう

な熾烈しれつな感覚があつて、あたかもそれが、法水の酷烈をきわめた熱意と力——成敗をこの一挙に決し、ファウスト博士の頭上に、地獄の礎石円柱を震い動かささんばかりの刑罰——を下そうとする、それのごとくに思われるのだった。やがて、六人は円卓テーブルを囲んで座に着いた。その夜の旗太郎は、平常ふだんなら身ごなしに浮き身をやつす彼には珍しく、天鷲びろうど絨の短衣チョツキのみを着ていて、絶えず伏眼になつたまま、その薄気味悪いほどの光のある、白い手を弄もてあそんでいた。その側かたわらに、伸子の小さい甲斐か甲斐いしい手が——その乾杏ほしあんずのように、健康そうな

艶やかさが、いとも可愛らしげに照り映えているのである。しかし、セレナ夫人を見ると、相変らず恋の楯にでも見るような、いかにも紋章的な貴婦人だった。けれども、その籬骨張りの腰衣たがぼねに美斑スカートとでも云いたい古典的な美しさの蔭には、やはり、脈搏の遅い饒舌じょうぜつを忌み嫌うような、静寂主義者キエテイストらしい静けさがあつた。が、一座の空気は、明らかに一抹いちまつの危機をはらんでいった。それはあながち、津多子を除外した法水の真意が、奈辺なへんにあるや疑うばかりでなく、それぞれに危懼きぐと劃策かくさくを胸に包んでいると見えて、ちよつとの間だった



けれども、妙に腹の探り合いでもしているかのような沈黙が続いた。そのうち、セレナ夫人がチラと伸子に流眄ながしめをくれると、恐らく反射的に口を突いて出たものがあつた。

「法水さん、証言に考慮を払うということが、だいたい捜査官の権威に関しますの。確かに先刻さっきの方々は、伸子さんが動いた衣摺きぬずれの音を聴いたのでしたわ」

「いいえ、豎琴ハープの前枠まえわくに手をかけていて、私は、そのまま凝じつと息を凝こらしておりました」と伸子は躊ためらわずに、自制のある調子で云い返した。「ですから、長絃ながだ

けが鳴つたと云うのなら、また聞えた話ですけど……。とにかく、貴女様の寓喩アレゴリーは、全然実際とは反対なのでございます」

その時旗太郎が、妙に老成したような態度で、冷たい作り笑いを片頬かたほほに泛うかべた。「さて、その妖治ようやな性質を、法水さんに吟味して頂きたいですがね。——そもそも、あの時豎琴ハープの方から近づいてきた、気動クリンククランクというものが何を意味するか。ところが、その楽音クランククランク嚙ク啞クたるやです。美しい近衛胸甲騎兵ガルド・キュイラシエールの行進ではなくて、あの無分別者ぞろいの、短上衣ヤッケをはだけて胸毛を露き出して、ふん

ふん鹿が落した血の跡を嗅ぎ廻るといった、シユワルツ・イエガー黒色猟兵  
 だったのです。いやきつと、あいつは人肉が嗜すきな  
 でしょうよ」

そうして、追及される伸子の体位は、明らかに不利  
 だった。その残忍な宣告が、永遠に彼女を縛りつけて  
 しまったかと思われたが、法水はちよつと熱のあるよ  
 うな眼を向けて、

「いや、たしかそれに、フライツシユ人肉ではなくフィツシユ魚だったはずで  
 すがね。しかし、その不思議な魚が近づいて来たため  
 に、かえってクリヴオフ夫人は、貴女がたの想像とは

反対の方向に退軍を開始したのでしたよ」と相変らず芝居げたつぷりな態度だったけれども、一挙にそれが、伸子と二人の地位を転倒してしまった。

「ところで、シャンデリヤ装飾灯が消えるほんの直前でしたが、その時たしか伸子さんは、全絃にわたってグリツサンドを弾いておられましたね。すると、その直後灯が消された瞬間に、思わずはず機みを喰って、全部のペダルを踏みしめてしまったのです。実は、その際に起った唸りうなが、ちようど踏んでいったペダルの順序どおりに起ったものですから、それが、迫って来る気動のように聞えた

のですよ。つまり、韻のまだ残っているうちにペダルを踏むと、ハイプ豎琴には唸りが起る。——貴方がたは、あの悪ゴシツプのおかげで、そんな自明の理を、僕から講釈されなければならんですよ」とひょういつ瓢逸な態度が消えてしまつて、法水は俄然嚴肅な調子に變つた。

「ところが、そうになると、クリヴオフ事件の局面が全然逆転してしまふのです。もし、夫人がその音を聴いたとすれば、当然貴方がた二人の方にあしすさ後退りしてゆくでしょうからね。そこで旗太郎さん、その時、キュー弓に代つて貴方の手に握られたものがあつたはずですよ。いや、

むしろ直截ちよくせつに云いませう。だいたい裝飾灯シャンデリヤが再び点いた時に、左利ききであるべき貴方が何故、弓を右に提琴ヴァイオリンを左に持っていたのですか」

と法水の凄愴な氣力から、迸り落ちてきたものに圧せられて、旗太郎はまったく化石したように硬くなつてしまった。それは、恐らく彼にとつて、それまでは想像もつかぬほど、意外なものであつたに相違ない。法水は、相手もてあそを弄ぶような態度で、ゆつたり口を開いた。

「ところで、旗太郎さん、波蘭ポーランドの諺ことわざに、提琴ヴァイオリニスト奏者は引い

ヴァイオリニスト

て殺す——と云うのがあるのを御存じですか。事実、ロムブローゾが称讚したというライブマイルの『能力及び天才の発達』を見ると、その中に、指が麻痺(ママ)してきたシューマンやショパン、それから改訂版では、提琴家のイザイエの苦惱などが挙げられていて、なおかつ音楽家の全生命たる、骨間筋(指の筋肉)にも言及しているのです。それによるとライブマイルは、急激な力働がその筋に痙攣(けいれん)を起させる——と説いています。しかし、勿論それは、この場合結論として確実なものではありません。けれども、貴方が演奏家である限り

は、とうていその慣性を無視することは出来まいと思  
われるのです。たぶんあの後には、左手の二つの指で、  
キユー  
弓を持つのが不可能だったのではありませんか」

「す、すると、もうそれだけですか——貴方の降霊術  
テイシユリユツケン

と云うのは？ 机の脚をがたつかせて、厭いやに耳ざわり

な……」とあの不気味な早熟児は、満面に引つ瘉つれた

ような憎悪を燃やせて、やっとなか呷すれ出たような声を

出した。しかし、法水はさらに急追を休めず、「いやど

うして、それこそ正確な中庸な体系——なんですよ。  
ジャスト・ミリユウ・システム

それから、貴方は人形の名を、いつぞやダンネベルグ



夫人に書かせましたつけね」と驚くべき言葉を放って、その大見得が、一座を昂奮の絶頂にせり上げてしまった。

「実は、先刻さっき神意審問会の情景を再現してみたのです

が、その場ではしなく、ダンネベルグ夫人が、驚くべ

き第二視力者セカンド・サイターであり、彼女に比斯ヒステリー呈利性幻視力が具

わっていたのを知ることが出来ました。そうになると、

当然発作が起つた場合、あの方の痲痺(ママ)した方の手には、

自働手記(心理学者ジャーネーの実験に端を発したもので、知らぬ間に筆を持たせ

た者の痺れた手を、気付かぬように握って、兩三回文字を書かせると、その握った手を

離した後でも、その通りの文字を自分の筆跡でしたためる——と云う、一種の変態心理現象。)が可能になるではありませんか。いや、伸子さんの室の扉（ヘヤ ドア）際にあつた、鉤裂（カギズ）きの跡を見ても、夫人の右手が、あの当時痲痺（ママ）していたことが判るんですよ。しかし、あの場合は、それがもう一段蜻蛉（とんぼ）返りを打つて、さらに異様な矛盾を起してしまつたのでした。と云うのは、利手（ききて）の異なる方の手で、刺戟を与えた場合には、時折要求した文字ではなく、それに類似したものを書くということなんです。勿論あの夜は、伸子さんが花瓶を倒し、それと入れ代りにダンネベルグ夫人

が入って来て、しかも激奮に燃えた夫人は、寢室の帷幕カーテンの間から、右肩のみを現わしていました。ですから、時やよしと、貴方は自働手記を試みたのでしたね。しかし、結果において夫人が認めしたたたものは、貴方が要求したそれとは異なっていたのです」と卓上の紙片に、法水は次の二字を認めしたたた、とくにその中央の三字を円で囲んだ。

Thérèse Serena

とたんに一同の口から、合したような呻うめきの声が洩

れた。ことにセレナ夫人は、憤ると云うよりも、むしろあまりに意外な事実なので、ぼんやり旗太郎を瞶め（みつ）たまま自失してしまった。旗太郎はタラタラと膏汗を（あぶらあせ）流し、全身を鞭索のようにくねらせて、激怒が声を波打たせていった。

「法水さん、ヴォルゲポーレン 貴方——いや ホウホヴォルゲポーレン 閣下！ この事件

の恐竜ドラゴンと云うのは、とりもなおさず貴方のことだ。し

かし、オットカールさんの咽喉のどに印されていたという

父の指痕しこんは——あの恐竜ドラゴンの爪痕は、いったい貴方の分

身なのですか」

「恐竜!?」と法水は、囁むように言葉を刻んで、「なるほ

ど、恐竜と云えるものが、あのモーチュアリー・ルーム殯室にいたことは

事実確かなんです。しかし、その一人二役の片割れは

蘭らんの一種——ペダンティツク銜学的に云うと、リネゾルム・オルキデエ竜舌蘭らんなんです

がね」と云つて、懐中から取り出したレヴェズの襟布カラーを

引き裂くと、その合わせ布の間から、縮みきつて褐色

をした、網様の帯が現われた。さらに、その前面には、

それがまた、幾重にも重ね編まれていて、ちようど

おやゆびおやゆびの形に見える楕円形をしたものが、二つ附いてい

た。その上にトンと指頭を落して、法水は云い続けた。

「こうなれば、一見してすでに明白です。勿論水分さえ吸えば、リネゾルム・オルキデエ竜舌蘭の繊維は、全長の八倍も縮むと云われるのですからね。当然 モーチユアリー・ルーム 室の前室に、湯滝を必要とした理由は云うまでもないでしょう。ところで、犯人は最初、その繊維を本開閉器の柄にメイン・スイッチからげ、収縮を利用して電流を切ったのです。そして、柄が下向きになると、そこからスッポリと抜けて、水流の中に落ちたのですから、当然排水孔から流れ出してしまいう訳でしょう。それから、次は云うまでもなく、ぼしこん 拇指痕の形を、リネゾルム・オルキデエ 竜舌蘭の繊維で作った襟布カラーに利用

して、レヴェズの咽喉のどを絞めていったのでした。つまり、レヴェズの死は他殺ではなく、自殺なんですよ。それで、だいたいの経路を想像してみますと、最初レヴェズが奥の屍室に入ったところを見届けて、犯人は湯澆を作ったのでした。ですから、徐々に湿度が高まって、リネゾルム・オルキデエ竜舌蘭が収縮を始めたので、レヴェズはしだいに息苦しくなつてゆきました。そこへ何か、あの男に自殺を必要とするような、異常な原因が起つたのです。したがつて、当然レヴェズの死には、二つの意志が働いているという訳で、算哲に似せた拇指痕の上

に、あの男の悲痛な心理が重なつていったのでしたよ」とそこで言葉を截ち切つて、法水は鋭く旗太郎を見据えた。「しかし、この襟布カライには、勿論誰の顔も現われてはいません。けれども、いずれこの事件の恐竜ドラゴンは、鎖の輪から爪を引き抜くことが、できなくなつてしまふでしよう」

汗まみれになつた旗太郎には、このわずかな間に、胆汁が全身に溢あふれ出たのではないかと思われた。すでに、怒号する気力も尽き果てて、ぼんやりあらぬ方を瞶みめている。が、やがて、フラフラ揺れている身体が



棒のように硬くなつたかと思うと、喪心した旗太郎は、顔を水平に打衝うちつけて卓上に倒れた。それを法水が室外に連れ去らせると、セレナ夫人も軽く目礼して、その後が続いた。そうして、伸子一人が残された室内には、しばらく弛ゆるみきつた、気懶けだるい沈黙が漂っていた——ああ、あの異常な早熟児が犯人だったとは。そのうち、歩き廻っていた法水が座に着くと、組んだままの腕をズシンと卓上に置き、意味ありげな言葉を伸子に投げた。

「ところで、あの黄から紅に——ですか、僕はあくまで

その真実を知りたいのですよ」

すると、そのとたん彼女の顔が神経的に痙攣けいれんして、恐らく侮蔑と屈辱を覚えたとしか思われぬような、潔癖さが口をついて出た。

「それでは、私に聯想語をお求めになりますの。黄くれなひから紅くれなひに——そうすると、それが黄橙色オレンジになるではござ

いませんか。黄橙色オレンジ——ああ、あのブラッド洋橙オレンジのこ

とを仰おっしゃ言るのでしよう。それで、きつと貴方は、私が

嚙のんだ檸檬水レモナーデの麦藁ストローから、石鹼玉シャボンが飛び出したとでも

……。いいえ私は、麦藁ストローを束にして吸うのが習慣なの

でございますわ。でもそうなたら、その束が一度に弦へは、番らないではございませんか」と伸子の皮肉が、猛烈な勢いで倍加されていった。「それから、あのダン——ダーネアブローグ丁抹国旗が悲しい半旗となつたということが、あのダンネベルグが私に何の関係がございますの。そして、青酸加里がいつたいどんな……」

「いや、けっしてそんな……。むしろその事は、僕が津多子夫人に対して云うべきでしょう」と法水は微かに紅を泛べたが、静かに云つた。

「実は、その黄から紅に——と云うのが、アレキサンド

ライトと紅玉ルビーとの関係なんですよ。ねえ伸子さん、たしかあの時貴女は、拒絶の表象シムボル——紅玉ルビーをつけたのではありませんか」

「いいえ、けっして……」と伸子は法水を凝じつと見詰め、声に力を罩こめた。「その証拠には、演奏が始まる直前でしたけども、旗太郎様が私の髪飾りを御覧になって、いったいレヴェズ様のアレキサンドライトをどうして——とお訊ねになったのを憶えておりますわ」

その伸子の一言は、依然レヴェズの自殺の謎を解き得なかつたばかりではなく、さらに法水へ呵責かしゃくと慚愧ざんき

を加え、彼の心の一隅に巢喰つている、永世とこよの重荷を  
ますます重からしめた。しかし法水は、ついにこの惨  
劇の神秘の帳とぼりを開き、あれほど不可能視されていた、  
カイゼル・シユニツト  
帝王切開術に成功した。すでに、その時は夜の刻みが  
尽きていて、胸の釦ボタンに角燈を吊した小男が、門衛小屋  
から出掛けてきた。一つ二つつぐみ鶯が鳴きはじめ、やがて  
堡楼の彼方から、美しい歌心の湧き出すにはいられな  
い、曙あけぼのがせり上つてくるのであった。法水は伸子と窓  
際に立って、パノラマのような眺望を、恍惚うっとりと味わつ  
ているうちに、彼女の肩に手を置き、無量の意味と愛

着とを罩めて云った。

「伸子さん、既に嵐と急迫の時代は去りましたよ。この館も再び旧のとおりに、絢爛たるラテン詩と恋歌の  
世界に帰ることでしょう。ところで、ああして響尾蛇  
の牙は、すっかり抜いてしまったのですから、貴女は  
懼れず僕に、例の約束を実行して下さるでしょうね。  
もう、何も終つて、新しい世界が始まるのですよ。こ  
の神秘的な事件の閉幕を、僕はこういうケルネルの詩  
で飾りたいのですがね。色は黄なる秋、夜の灯を過ぎ  
れば紅き春の花とならん——」

ところが、その翌日の午後になると、伸子の打札うちふだがヒュツと風を切つて飛び来ると思いのほか、意外にも検事と熊城が訪れてきて、当の本人伸子が、拳銃で狙撃され即死を遂げたという旨を告げた。それを聴くと、事件を全然放擲ほうてきしかねまじい失意を、法水が現わしたばかりでなく、せつかく見出した確証を掴もうとした矢先、その希望が全然截ち切られてしまつて、もはやこの事件の刑法的解決は、永遠に望むべくもないのだった。それから三十分後に、法水は暗澹あんたんとした顔色を黒死館に現わした。そして、今や眼まのあたり伸子の

遺骸を見ると、事件の当初から、ファウスト博士の

波濤はとうのような魔手に弄もてあそばれ続けて、とどのつまり生命

の断崖から、突き落されたこの今様グレートヘンが

……、なんとなく死因に対する、法水の道徳的責任を

求めているように思われ、はてはそれが、とめどない

慚愧ざんきと悔恨かいこんの情に変わってしまった。ところが、

現場伸子の室へやに一步踏み入れると、そこには、鮮かに

も残された犯人の最後の意志——Kobold コボルト sich ジツヒ

ミューエン muhen コボルト (地精よいそしめ) が印されていた。

しかもそれは、いつものような紙片ではなく、今



度は、伸子の身体に印されていた。と云うのは、その――投げ出した、左手から左足までが一文字に垂直の線をなして、右手と右足とが、くの字形にはだけ、なんとなく全体の形が、コポルト KOPOLD の K を髻ほうふつとするもののように思われたからである。それが、扉口ドアから三尺ほど前方の所を足にして、斜右はすみぎに仰向けとなつて横たわり、しかもレヴェズやクリヴオフ夫人と同じよう、悲痛な表情をしていて、それにはいささかも恐怖の影はなかつた。屍体には、右の顛顛こめかみにひどい弾丸たまの跡が口を開いていて、敷物カーペットの上に、流れ出た血がベツトリ

こびり付いているが、外出着を着て手袋までもつけたところを見ると、あるいは法水の許を訪れようとして、突然狙撃されたのではないかと思われた。なお、兇行に使用された拳銃は、扉ドアの外側——把手ノックの下に捨てられていて、その扉には、外から起倒かんぬき門が掛かつていた。けれども、この局面には一つの薄気味悪い証言が伴つていて、それから陰々と蠢うごめくような、ファウスト博士の衣摺きぬずれを聴く思いがするのだった。

——ちようど二時頃銃声とこらうが轟とどろいたので、館中がすくむような恐怖に鎖くわされてしまつて、誰一人現場に馳はせ

つけようとするものはなかつた。すると、それから十分ほど経つと、隣室で慄ふるえていたセレナ夫人の耳に、扉ドアを閉めて掛金を落した音が聞えたと言うのである。そうなつて、ファウスト博士の暗躍が明らかにされると同時に、そのいっこう単純な局面にもかかわらず、さしも法水でさえ、傍観する以外に術すべはなかつた。勿論拳銃に指紋の残つていよう道理はなく、家族の動静も、当時の状況が状況だけにいっさい不明なのだつた。そして、恐らく法水との約束を果そうとしたことが、事件中一貫して、不運を続け来つたこの薄倖ほっこうの処女に、

最後の悲劇をもたせられたのではないかと推測されたのである。

こうして、最後の切札伸子までも斃たおれてしまい、悪魔の不敵な跳躍につれて、おどろとはね狂う潮の高まりには、ついに解決の希望が没し去ったとしか思われなくなつた。ところが、その夜から翌日の正午頃ひるまでにかけて、法水は彼特有の——のうしよう脳漿かが涸れ尽すと思われればかりの思索を続けたが、はしなくもその結果、伸子の死に一つの逆説的効果を見出した。その日、昼食が終つて間もなく、法水を訪ねた検事と熊城が書室

の扉ドアを開いた時、突然その出会いがしらに、法水の凄じい眼光に打衝ぶつかった。彼は、両手を荒々しく振って、室内を歩き廻りながら、物狂わしげに叫び続けている。「ああ、このお伽噺メエルヘン的建築はどうだ——。犯人の異常な才智たるや、実に驚くべきものじゃないか」と立ち止って不気味に据えた眼で、あるいは半円を描き、またそれを大きくうねくらせながら、縦の波形に変えたかと思うと、「この終局ファイナーレの素晴らしさ——幕切れおおむこうに大向うなを唸うならせるファウスト博士の大見得——この意表を絶ゲネラル・バイヒテした総懺悔コポルトの形容を見給え。ねえ支倉君、地精・

水精・火精——とその頭文字をとって、それに、この事件の解決の表象シムボルを加えると、それがキユッスキユッス（接吻）になつてしまふんだ。ああ、たしか広間サロンの暖炉棚の上に、ロダンの『接吻キッス』の模像が置いてあつたじゃないか。サア、これから黒死館に行こう。僕は自分の手で、最後の幕の緞帳どんちようを下すんだ」

三人が黒死館に着いた時は、ちようど伸子の葬儀が始まつていた。その日は風が荒く、雪でも含んでいそ  
うな薄墨色の雲が、低く樹林の梢間際にまで垂れ下つ  
ていて、それがいつまでも動かなかつた。そういつた

荒涼たる風物の中で、構内は人影も疎まばらなほどの裏淋しき、象徴樹トピアリーの籬まがきが揺れ、枯枝が走りざわめいて、その中から、湧然ようぜんと捲き起つてくるのが、礼拝堂で行われている、御憐憫ミセリコルディアの合唱だった。法水は館に入ると、独りで広間サロンの中に入つて行つたが、そこで彼の結論が裏書きされたことは、再びダンネベルグ夫人の室へやで、二人の前に現われた時の顔色で判つた。そして、いまや礼拝堂に、家族の一同に押鐘博士までも加えた——関係者の全部が集っているのを知ると、法水はなんと思つたか、葬儀の発足をしばらく延期するように命じ

た。それから、

「勿論、犯人が礼拝堂の中にいるのは確かなんだよ。しかも、もう絶対に動くことの出来ぬ状態にある。けれども、僕は伸子に——ことにその遺骸が、地上にある間に、犯人の名を告げなければならぬ義務があると思うのだ」と云ってしばらく口を噤つぶんでいたが、やがて、錯雑した感情を顔に浮べて云い出した。

「ところで支倉君、さしもの巨人の陣営が掻かき消えてしまった、この館は再び白日の下に曝さらされることになった。そこで、まず順序どおりに、最初のダンネベ



ルグ事件から説明してゆくことにしよう。しかし、あの時夫人が何故ブラッド洋橙オレンジのみを取ったかという点に、僕は今まであの最短線——サントニンジオデスイク・ライン（駆虫剤）の黄視症を疎かおろそかにしていたのだ。あの視野一面を黄色に化してしまいう中毒症状が、軽い近視のせいも手伝って、果物皿の上から、梨もそれ以外の洋橙オレンジも、皿の地と同じ一色に塗り潰つぶしてしまつたのだよ。したがって、特異な赤味を帯びているブラッド洋橙オレンジのみしか、ダンネベルグ夫人の眼には映らなかつたのだ。それにまた、サントニン中毒特有の幻味幻覚などが伴つたので、あ

れほど致死量をはるかに越えた異臭のある毒物でも、ダンネベルグ夫人は疑わず嘔下<sup>えんか</sup>してしまつたのだよ。けれども、その思い付きというのは、けつして偶然の所産ではない。根本の端緒を云えば、やはり、犯人に課した僕の心理分析にあつたのだ。しかし、もう一つ、側面から刺戟してきたものがあつて、奇妙なことに、その一つのサントニンが犯人にも影響を与え、その両面を合わせてみると、まるで陰面と陽面のように符合してしまふのだよ。と云うのは、ほかでもない、あの園芸靴の靴跡なんだ。あれは既に、僕の解析から偽造

足跡であることが、判明したけれども、その復路の中途で何の意味もなく、当然踏めばよいとしか思われな  
い、枯芝を大きく跨またぎ越えている。ところが、その危  
く見逃すところだった微細な点——云わば毛ラナ・カブリナほどのもの  
のとも云うものに、実を云うと、犯人の死命を制した  
一つの盲点があったのだよ。そこに僕は、  
因果ネ応報メの神シの魔力スを、しつかと捉えることが出来た。  
この運命悲劇では、犯人がボルジアの助毒として用い  
た、サントニンによつて、終局には自らが斃たおされなけ  
ればならなかったのだ。何故なら支倉君、犯人はダン

ネベルグ夫人と同じに、自分もサントニンを嘔まなければならなかったのだから、当然そう判ると、あの枯芝を何故跨またがねばならなかったか——という意味が、判然とするだろう。つまり、それは一種脳髓上の盲点で、自分にはさほどの黄視症状も起っていないにかかわらず、当然黄視症が発していると信じてしまったのだ。そして、あの——夜目に黄色く光って見える枯芝を、水溜りが、黄視症のために黄色く見えた——と錯誤を起したからなんだよ。しかし、サントニンが腎臓に及ぼした影響が、一方あの屍光の生因を、体内から

皮膚の表面へ担ぎ上げてしまったのだ」

それから、法水は帷幕とぼりの中に入って、寝台の塗料ニスの下にグイと洋刀ナイフの刃を入れた。すると、下にはまた瀝青チヤンよう様の層があつて、それに鉛筆の尻環しりかんを近づけると、微かながらさだかに見える螢光が発せられた。

「今までは、寝台の附近に、屍体のような精密な注視を要求するものがなかつたので、それで、自然気がつかれなかつたに違いないがね。勿論この瀝青チヤン様のものが、ウラニウムを含むピッチブレンドであることは云うまでもあるまい。そして、僕がいつぞや指摘した四つの

聖僧屍光、それがことごとくボヘミア領を取り囲んで  
いるのだ。勿論それは、新旧両教徒の葛藤が生んだ、  
示威的な奸策にすぎないだろう。けれども、それが地  
理的に接近しているのは、ちようどその中心に、主産  
地であるエルツ山塊があるためにほかならないのだ。

しかし、要するに、あの千古の神秘は、一場の理化学  
的瑣戯さぎにすぎないのだよ。ところで支倉君、君は  
砒アーセニック食人ニック・イーターという言葉の意味を知っているだろうね。

ことに、中世の修道僧が多く制慾剤として砒石を用い  
ていたことは、ローレル媚薬（ローレル油に極微の青酸を加えたもの。

痙攣を發して一種異様な幻覺を起す自洗劑）などとともにも著名な話なんだ。ところが、ロダンの『接吻』キッスの中から、僕がいま發見した内容にも記されているとおりで、ダンネベルグ夫人もやはり砒食人——常日頃神經病の治療劑として、夫人は微量の砒石を常用していたのだ。そうすると、永い間には、組織の中にまでも、砒石の無機成分が浸透してしまふ。したがつて、サントニンによつて浮腫や発汗が皮膚面に起ると、当然、そこに凝集している砒石の成分層が、ピッチブレンドのウラムウム放射能をうけなければならぬだらう」

「勿論現象的には、それで十分説明がつかだらうがね。また、どんなに表現の朦朧もうろうたるものでも、たしか新しい魅力には違いない。だがしかした。君の説明は、故意に具体的な叙述を避けているように思われる。いつたい犯人は誰なんだ？」と検事は、指を神経的に絡からませて、グビツと唾つばを嚥のみ込んだ。

「たしか、あの時伸子は、ダンネベルグ夫人と同じ檸檬水レモナーデを嚥のんだはずだったがね。しかし、あの女は既とうに、ファウスト博士の手で、旧もとの元素に還かえされてしまつてるんだ」



その間法水は、生氣のない鈍重な、生命の脱殻ぬけがらのようになつて突つ立つていて、むしろその様子は、烈しい苦痛の極点において、勝利を得た人のごとくであつた。既に整頓とらの楔点けいが近づいたせいか、その急激に訪れた疲労は、恐らく何物にもまして、魅惑的なものだったに違ちがひないであろう。しかし、そのうち烈しい意志の力が迸ほとばしり出てきて、

「うん、その紙谷伸子かみたにのぶこだが」とガクリと顎骨あごほねが鳴り、瞬間新しい気力が生氣を吹き込んできた。「それがとりもなおさず、クニツトリンゲンの魔法使さ」

実に黒死館の幽鬼ファウスト博士こそ、紙谷伸子だつたのだ。しかし、それを聴いた刹那せつな検事と熊城には、いったんは理法と真性のすべてが、蜻蛉とんぼ返りを打つてケシ飛んでしまったように、思われたけれども、少し落ち着いてくると、それにはむしろ、真面目まじめな反論を出すのが莫迦ぼからしくなつたくらい、不思議なほど冷静な、反響一つ戻つてゆかないという静けさだつた。第一、それを否定する厳然たる事実の一つと云うのは、伸子は既に五人目の人身御供ひとみごかうに上つていて、その歴然たる他殺の証跡が、法水の署名を伴つて検死報告書に

記されているのだ。それから家族以外の彼女には、動機と目すべきものが何一つなく、しかも法水の同情と庇護ひごを一身に集めていた伸子が、どうして犯人だったと信ぜられようか。それゆえ熊城には、それがえてして頭を痛めているものの罹かかりやすい、或る病的な傾向と見て取ったのも無理ではなかった。

「まるで、気が遠くなりそうな話じゃないか。それとも、真実君が正気でいるのなら、たった一つでも、僕はそれに刑法的価値を要求するよ。まずなにより、伸子の死を自殺に移すことだ」

「ところが熊城君、今度は、毛ほどのもの——と云うが扉ドアの羽目パネルにあつて、それを君に、實際証拠として提供しよう」と法水は、相手の無反響を嘲り返すように、力を罩こめて云つた。

「ところで、例ためしに、こういう場合を考えて見給え。あらかじめ、針リネソルムに竜舌蘭オルキデエの繊維を結び付けて、一方の扉ドアに軽く突き立てておき、その一端を鍵穴の中に差し入れて、そこへ水を注ぎ込む。すると、当然あの繊維が収縮を始めて、扉の開きがしだいに狭められてゆくだろう。その時、顛顛こめかみを射つた拳銃が、手許から投げ

出されて、そうした機はずみに、二つの扉ドアの間へ落ちたのだ。そうして、何分か後に扉ドアが鎖されると、前もって立てておいた掛金が、パツタリと落ちる。いや、それよりも扉ドアの動きが、拳銃を廊下へ押し出してしまふじゃないか。勿論リネゾルム・オルキデエ 竜舌蘭の繊維は、針を引き抜いて、それごと鍵穴の中に没していったのだ」と言葉を切つて、長く深く、慄ふるえがちな息を吸い込んだ。そして、真黒な秘密の重荷とともに、再び吐き出された。「ところが熊城君、そうして他殺から自殺に移されるということになると、そこに、どんな光によつても見

ることの出来ない、伸子の告白文が現われてくるのだ。それはきまぐ気紛れな妖精めいた、ほうれい豊麗な逸樂的な、しかも、ある驚くべき靈智を持った人間以外は、とうていその不思議な感性に触れることが出来ないのだ。伸子は、あの陳腐ちんぷきわまる手法に、一つの新しい生命を吹き込んだ……」

「なに、告白文!?」と検事は、脳天まで痺しびれきつたような顔をして、たばこ莩を口から放し、ぼんやりと法水の顔を見詰めている。

「うん、焰の弁舌だよ。しかも、その焰はけっして見る

ことは出来ないのだ。しかも、ファウスト博士の最後の儀礼で、それは一種の秘密表示なんだ。ね

パンチリオ  
え支倉君、例えば、髪・耳・唇・耳・鼻——と順々に押えてゆくと、それが Hair. Ear. Lips. Ear. Nose で、結局 Helen となる——そういう、秘密表示の一種を、伸子は、他殺から自殺に移ってゆく転機の中に、秘めておいたのだ。ところで、その最初は、屍体で描いた K の文字だが、それは伸子が自企的に起した、ヒステリー比斯呈利性痲痺の産物だったのだよ。その幾多の実例が、グーリュとブローの『人格の変換』の中にも記され

ているとおりで、ある種の比斯呈利病者ヒステリーになると、鋼鉄を身体に当てて、その反対側に痲痺(ママ)を起すことが出来るのだ。つまり、左手を高く挙げて、一方の扉ドアの角に寄り掛つていた所へ、右頬へ拳銃を当てたのだから、当然左半身に強直が起るだろう。そして、そのまま発射とともに、床の上に倒れたので、垂直をなしている左半身が、例の薄気味悪いKの字を描かせてしまったのだ。しかし、勿論それは、地精コボルト・ジツヒ・ミューヘンよいそしめ——の表象シムボルではない。その二つの扉ドアを結んで、竜舌蘭リネゾルム・オルキデエの繊維が作った——その半円というのは、どう見てもU



字形じゃないか。それから、扉ドアに押された拳銃が動い

ていった線が、あろうことかSの字を描いているんだ。

ああ、地精コポルト、水精ウンディネ、風精ジルフェ……。そして、最後に、あの

シチュエーション

局状の真相 シユイサイド Suicide (自殺) を加えると、その全体が

キユツス

Kiuss となつてしまふ。そこに、奇矯を絶したファウ

スト博士の懺悔文ざんげが現われてくるのだ。勿論伸子は、

それ以前に或る物体を、『接吻キツス』の像の胴体いんとくに隠匿して

おいた……」

それには、二つの異常な靈智が、生死を賭としてまで

打ち合う壯観が描かれていた。検事は、腐れ溜った息

で窒息しそうになつたのを、危く吐き出して、

「すると、当然そのリネゾルム・オルキデエ トリツク竜舌蘭の詭計が、カリリヨン鐘鳴器室の扉ドア

ゾーディアック えんげまど

や十二宮の円華窓にも行われたのだらうがね。しかし、

あの時は旗太郎が犯人に指摘され、自分自身は、勝利と平安の絶頂に上りつめた——そのところで、伸子は不思議にも自殺を遂げているのだ。法水君、そのとうてい解しきれない疑問と云うのは……」

「それが支倉君、あの夜最後に僕が伸子に云つた——

色は黄なる秋、夜の灯を過ぎともしびれば紅き春の花とならん

——というケルネルの詩にあるんだよ。まさにその瞬

間、伸子は悲惨な転落を意識しなければならなかったのだ。何故なら、元来アレキサンドライトという宝石は、電燈の光で透かすと、それが真紅に見えるからだ。そこで僕は、伸子がレヴェズにあの室を指定して、自分分はアレキサンドライトを髪飾りにつけ、それに電燈の光を透過<sup>すか</sup>させて、レヴェズを失意せしめた——と解釈するに至った。ねえ支倉君、この警句はどうだろうね。レヴェズ——あの洪牙利<sup>ハンガリー</sup>の恋愛詩人<sup>ツルバズール</sup>は、秋を春と見てこの世を去った——と」と一息深く莨<sup>たぼこ</sup>を吸いこんでから二人が惑乱気味に嘆息するのも関<sup>かま</sup>わず、法水は

云い続けた。

「ところが、あの黄から紅くれない——には、なおそれ以外にも別の意義があつて、勿論僕が、サントニンの黄視症を透視したというのも、偶然の所産ではなかつたのだよ。何故なら、それから、犯人の潜勢状態を剔抉てつげつしたからだ。それを他の言葉で云うと、兇行によつてうけた犯人の精神的外傷——つまり、その際に与えられた表象や観念の、感覺的情緒的經驗の再現にあつたのだ。勿論僕は、神意審問会の情景を再現した際に、なんとなく伸子の匂いが強く鼻を打つてきたのだ。で、試みに、

譏詞きしと諷刺のあらん限りを尽し、お座ねっぞうなりの捏造ねつぞうを旗太郎に向けてみた。云うまでもなく、それは伸子の緊張と警戒を取り去るためだったのだが、勿論ダンネベルグ夫人の自働手記は、伸子がテレーズの名を書かせたのだったし、レヴェズの死と拇指痕の真相以外は、何一つ真実でなかったのだよ。それで、ふと黄から紅に——という一言を、アレキサンドライトと紅玉ルビーの關係アレゴリーに、寓喩として使ってみた。ところが、意外にも、それが全然異なった形となつて、伸子の心像の中に現われてしまったのだ。と云うのは、ラインハルトの

『抒情詩の快不快の表出』という著述の中に、ハルピンの詩『愛蘭土星学』アイリツシユ・アストロノミーのことが記されてある。その中の一句——セント・パトリック・セエツド・エ・ライオン・ライス・ゼア・ツウ・ベアス・エ・ブル・エンド・キャンサー聖パトリック云いけらく獅子座彼処にあり、二つの大熊、牡牛、そうして巨蟹が——とその巨蟹キャンサー(Cancer) という個所ところに來ると、朗読者は突然、それを運河キャナラー(Canalar)と発音してしまつたと云うのだ。つまり、その朗読者が、それまで星座の形を頭の中に描いていたからで、いわゆるフロイドの云う——言い損いの表明にこびりついている感覺的痕跡——に相違ないのだ。また、一面には聯想というものが、その一字

一字には現われず、全体の形体的印象——つまり、空間的な感覚となつて現われたとも云えるだろう。しかし、伸子の場合になると、それが、ダンネベルグ事件から礼拝堂の惨劇に至る——都合四つの事件を表出化してしまつたのだ。何故なら伸子は、洋橙オレンジと云つた後で、麦藁ストローを束にして檸檬水レモナーデを嘔のむ——という言葉をついた。当然それには、鐘鳴器カイルロンに並んでいる鍵盤の列が、その印象に背景をなしていると思われた。それから、続いてダンネベルグ夫人の名を、丁抹ダーネブローグ国旗あか(Danebrog)と云い損つたのだが、それには明らさま

に、武具室の全貌が現われているのだ。と云うのは、あの時伸子は、前庭の樹皮亭ボルケンハウスの中にいて、レヴェエズボルケンハウスの作つた虹の濛気が、窓から入り込んでゆくのを、眺めていた。ところが、あの樹皮亭の内枠には、様々な詩文が刻み込まれていて、その中にフィッツナーのダン・ネーベル・ロー・グクテンその時霧は輝きて入りぬ (Damn, Nebel-Ioh-guckten) —の一文があつたのだ。つまり、その際の混淆こんこうされた印象が丁抹国旗ダーネアローグという、相似した失語になつて現われたのだよ。そうすると支倉君、あの四句に分れていた伸子の言葉の中で、鐘鳴室カレルロンと武具室と——こう二つ



の印象だけが、奇妙にも、真中に挟まれている。となると……」と言葉を切つて、その驚くべき心理分析に、法水は、最後の結論を与えた。

「すると当然、その首尾にある黄と紅——。その二つからうけた感覚が、最初のダンネベルグ事件と、終りの礼拝堂の場面でなければならぬだろう。そうして、最後の紅が、けんらん絢爛たるカペルマイスター宮廷楽師の朱色の衣裳だとすれば、何故最初のダンネベルグ事件から、伸子は、黄とこの感覚をうけたのだろうか」そのあいだ検事と熊城は、さながら酔えるがごとき感動に包まれていた。が、

ややあつてから、熊城はおもむろに不明な点を訊ねた。「しかし、礼拝堂で暗中に聞えたという二つの唸りうなには、伸子か旗太郎か——そのいずれかを、決定するものがあるように思われるんだが」

「それは、デッドポイントフォーカス死点と焦点の如何いかん——つまり、音響学の単純な問題にすぎないのさ。たぶんクリヴオフ夫人の位置が、伸子がペダルで出した唸りデッドポイントに対して、キユー旗太郎の弓キユーが擦れ合すつて起つた響キユーには、あの微かな囁ささやきさえも、聴き取れるという焦点フォーカスだったに相違ないのだ。そして、夫人が伸子の方に寄つたところを、背後から

刺し貫いたのだ。ねえ支倉君、これ以上論ずる問題はないと思うが、ただただ憐憫れんびんを覚えるのは、伸子に操られて鞠沓まりぐつを履はかせられ、具足まで着せられた暗愚な易介なんだよ」そう云つてから法水は、最初から順序を追ひ、伸子の行動を語りはじめた。勿論それによつて、ピロカルピンの服用も、一場の悪狡わるがしこい絵狂言であることが判明した。それから、語り終えると法水は言葉ことばを改めて、いよいよ、黒死館殺人事件の核心をなす疑義中の疑義——どんなに考えてもとうてい窺知きちし得べくもなかつた、伸子の殺人動機に触れた。それは無

言の現実だった。ロダンの「接吻」<sup>キッス</sup>の胴体から取り出したものを、法水が衣袋ポケットから抜き出した時、思わず二人の眼がその一点に釘付けされてしまった——乾板。そして、幾つかの破片をつなぎ合わせて見ると、それには次の全文が現われたのである。

一、ダ□□□ベ□□□□□砒石の□□□□。

一、川那部□□□□、胸腺死の危□□□□。

(特異体質の箇条は、その二つにのみ尽きていて、それ以前のものは不明だった)

一、余は、吾児□犠牲とするに忍□□□□を以て、  
 生れた女兒を男児に換えて、生長後余が秘書として  
 手許□□□□紙谷伸子なり。それ故、旗太郎は□  
 □□□血系には全然触れざるものなり。

こうして、紛糾混乱を重ねた黒死館殺人事件は、ついに最終の幕切れにおいて、紙谷伸子を算哲の遺子として露わすに至つた。そうなると、勿論算哲の悶死もんしは、伸子の親殺ファテールテーツングしであり、父パテルよ吾も人の子ホモ・スムなり——の一  
 文は、当然その深刻をきわめた、復仇の意志にほかな

らないのだった。しかし、その乾板と云うのが、法水の夢想の華——屍様図の半葉であつたとは云え、要するに、現存のものはその一部のみであつて、他は落した際に微塵となつたか、それとも、伸子が破棄してしまつたものか、いずれにしても二人以外の特異体質の闡明は、久遠の謎として葬られなければならなかつた。やがて検事は、夢から醒めたような顔になつて訊ねた。「なるほど、当然自分が当主でありながら、今さらどうにもならない——それが因で、伸子を残忍な欲求の母たらしめた。あの嗜血癖の起因は、僕にもよく判る

んだ。しかし、犯行のつどに、恐らく人間の世界を超絶しているとしか思われぬ、怪異美と大観とを作り出したのは――。法水君、それを心理学的に説明してくれ給え」

「それは、一口に云えば遊戯的感情――一種の生理的洗滌カタルシスさ。人間には、抑圧された感情や乾ききつた情緒を充すものとして、何か一つの生理的洗滌カタルシスが要求される。ねえ支倉君、ザベリクス（若きファウストと呼ばれ、十六世紀の前半、独乙国内を流浪した妖術師）やディーツのファウスチヌス僧正などが精霊主義オクルチスムスに墮ち込んだと云うのも

……。すべて、人間が力尽き反噬ほんぜいする方法を失つてしまつた際には、その激情を緩解するものが、精霊主義オクルチズムスだと云うじやないか。それにあの畸狂変態の世界を作り出した種々な手法いろいろには、さしずめ、書庫にあるグイド・ボナツトー（十三世紀伊太利のファウストと云われた魔術師）の『アルテ・デラ・ピロマンティ点火術要論』やヴアザリの『フエステイヴオリー・エト・カルナヴァレ・アパラティ祭礼師と謝肉祭装置』などの影響が窺うかがわれるね。もともと伸子は、あの乾板盗みを、ふとした悪戯わるさげ気から演やつたのだらう。けれども、その内容を知つた時に、恐らく伸子は、魔法のような物凄い月光



を感じたに相違ない。その突如として起つた、絶命——喪心——宿命感、そう云つた感情が十字に群がつてきて、それまでの心の平衡を保たせていた、対立の一方が叩き潰つぶされたのだ。そして、それがあの破壊的な、神聖な狂気を駆り立てて世にもグロテスクな爆発を惹ひき起させたのだよ。しかし、僕はけつして、伸子を悖モラル・徳イン・症サニとは呼ばないだろう。あれは、ブラウニングの云う運命チャイルドの子オブ、この事件は、一つの生きた人間の詩——に違いないのだ」そう云つて法水は、澄みきつた聰明そうな眼色で検事を顧かえりみた。「ねえ支倉

君、せめて、最後の送りだけでも、この神聖家族の最後の一人にふさ適わしいよう、伸子を飾ってやろうじやないか」

こうして、メメテイチ家の血系、妖妃ようひビアンカ・カペルの末裔まつえい、神聖家族降矢木ふりやぎの最後の一人紙谷伸子のひつぎ柩は、ファイレンツエの市旗に覆われ、四人の麻布をまと纏つた僧侶の肩に担がれた。そして、湧き起る合唱と香煙の渦の中を、裏庭の墓窖ぼこうをさして運ばれて行つたのである——カーテン・フォー閉幕ール





## 【PDF 変換に関する注①】

元の青空文庫で公開してあるテキストを PDF 化する際、以下のような変更を施しました。

- ①梵字と音楽記号以外の本文中に挿入された画像文字はできる限り外字に作り替え、挿入し直しました。
- ②編集作業中、ギリシア文字が縦書き表記になっていなかったため、ギリシア文字も外字に追加しています。  
(①、②ともに一部を除いて文字コードには準拠していません。特にギリシア文字は本文中の文字をコピーしてもほかのアプリケーションでは正常に表示されません。可読性を重視したつもりです。)
- ③本文タグでは、[#ここから横組み]となっている場所でも、一部を除き横組みにはしていません。これは編集に用いたアプリケーションの限界です。
- ④割り注はサイズを5ポイントにすることで表現しています。
- ⑤アクセント分解と区別するため【】になっていた箇所は〔〕に改めました。
- ⑥~~「破線で囲む」とある箇所は実線で囲んであります。~~

その他、できる限り読みやすくなるように留意したつもりですが、限界はあるかと思えます。ご了承下さい。

## 【PDF 変換に関する注②】

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2(本文、奥付)+ Omni Graffle Professional 5.2.1(フォントグリフ)

+ FontForge 20080810(外字フォント作成)

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ

+ オリジナル外字フォント(参考 : GlyphWiki(宍),

AppleSymbol(星座シンボル), Lucida Grande(ヘブライ文字))



黒死館殺人事件  
小栗虫太郎 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「黒死館殺人事件」現代教養文庫、社会思想社  
1977（昭和52）年4月25日初版第1刷発行  
1984（昭和59）年6月15日初版第6刷発行

底本の親本：「黒死館殺人事件」新潮社  
1935（昭和10）年5月

初出：「新青年」博文館  
1934（昭和9）年4月号～12月号

※ 底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、「法定期限は二ヶ月しかない」以外は大振りにつくっています。

※ 底本で使用されている「□」はアクセント分解を表す括弧と重複しますので「【】」に改めました。  
※ ヘブライ文字の認定にあたっては、「国際符号化文字集合（UCS）——第1部：大系及び基本多言語面 JIS X 0221-1:2001（ISO/IEC 10646-1:2000）」日本規格協会を参照し、同規格の文字の名前を鍵括弧内に記載しました。

※ 以下の混在は、底本通りです。「カルテット」と「クワルテット」、「オブ」と「オヴ」、「甲冑」と「甲冑」、「柯楯」と「編楯」、「ボードの法則」と「ボードの法則」、「ザラマンダー」と「サラマンダー」、「鐘鳴器」と「鐘鳴器」、「花」と「花」、「四重奏団」と「四重奏団」と「四重奏曲」、「純漢語製」と「純漢語製」と「純漢語製」、「ウエイルズ」と「ウエルルス」、「天馬星」と「天馬座」、「昆沙門天」と「昆沙門天」、「フィート」と「フィート」、「白羊宮」と「白羊宮」、「巨蟹宮」と「巨蟹宮」、「クミエルニツキー」と「クメルニツキー」、「ボルケン・ハウス」と「ボルケンハウス」、「何人」と「何人」

入力：ロクス・ソルス

校正：小林繁雄

2006年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

※PDF 変換については注を参照